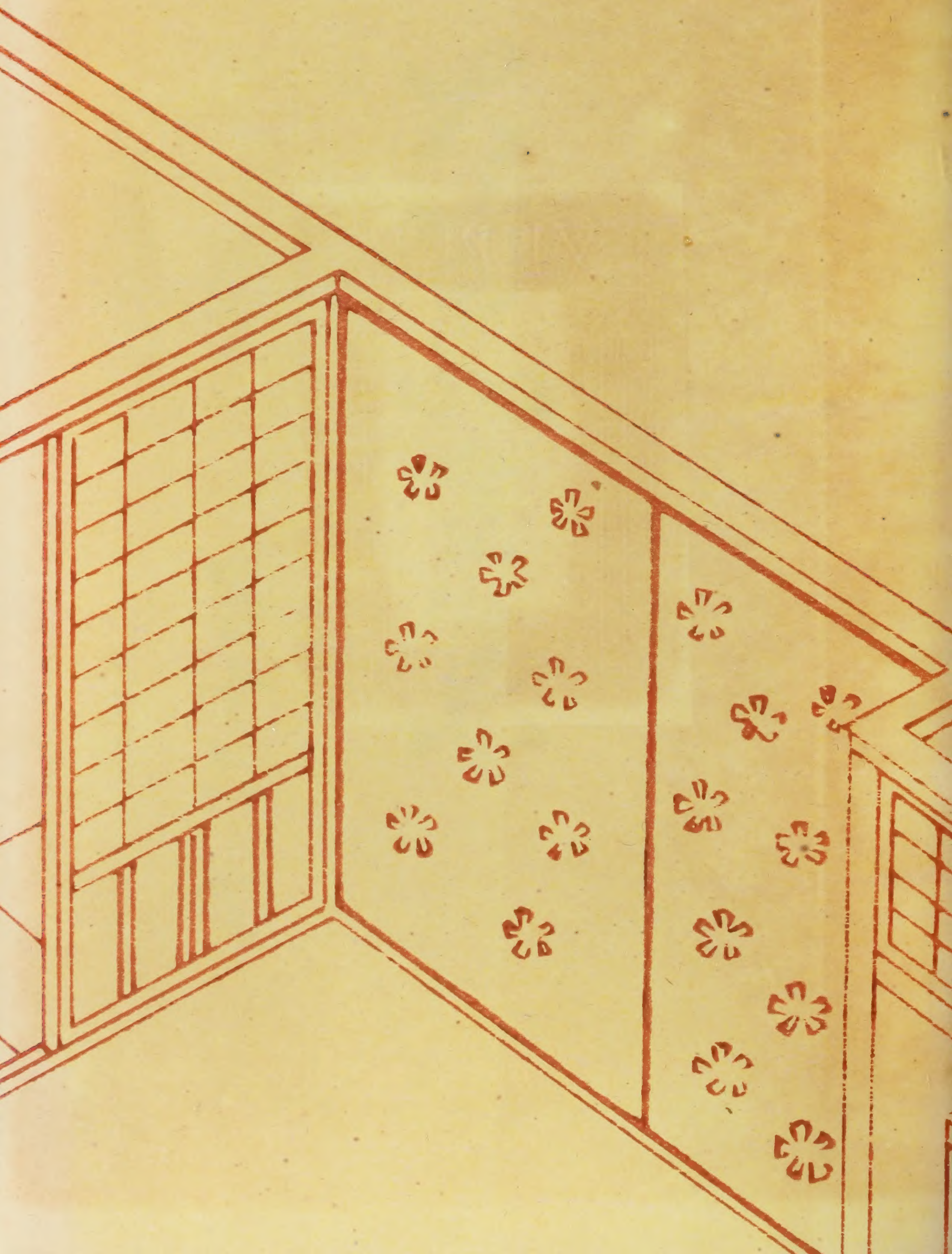




大南北全集

第十六巻

文學博士 坪内逍遙
渥美清太郎 共編

大南北全集 第十六卷

東京 春陽堂刊行


尾上菊五郎
国安画
関三十郎
国安画

大南北全集 第十六卷目次

挿繪目次

口絵解說

●卷頭に入れた錦繪は、「伊勢平氏梅英幣」のうち、清水坂だんまりの場である。筆者は國貞。この外にこの狂言の錦繪が見當らなかつたので、初演の繪本全部を、例の通り各場每に挿入して置いた。

●「法懸松成田利劍」の中へ入れた錦繪は、市川團十郎の不動明王である。由來、市川家と不動尊とは因緣淺からず、不動明王の尊容には代々の團十郎が家の藝として必らず扮する。この錦繪は、この時の不動尊では無いやうであるが、扮裝は必らず同じであるから、參考のため挿入して置いた。筆者は初代豐國。

●「法懸松成田利劍」の二番目は、近年復活の流行劇なので、最近上演された代表的の舞臺面の寫眞を入れて置いた。土橋の場は、梅幸羽左衞門と、菊五郎勘彌の舞臺を對照にして見た。扮裝の違ふ所に氣をつけて戴きたい。菊五郎勘彌の方が、原作には近い拵らへである。陰地獄外二場の舞臺面は、菊五郎勘彌だけが復活したので、後の爲にもと思つて入れて置いた。この時の舞臺裝置は、長坂栞の考案であつたが、化政度の舞臺の氣分を巧みに表はして、成功したものであつた。

●「法懸松成田利劍」初演の時の繪本があつたので。同じく凸版で入れて置いた。

●「染替蝶桔梗」は、何も見當らなかつたので、初演の櫓下番附をコロタイプで挿入した。

解說及年表

法懸松成田利劍

文政六年六月、木挽町の森田座で、七世團十郎と三世菊五郎が大當りを取つた、日蓮記と累の怪談狂言である。この年、團十郎菊五郎は市村座の出勤であつたが、何かの事情で、夏芝居だけ森田座へ出た。その爲、市村座の專屬であつた南北も、森田座へスケに行つて、この狂言を執筆したのである。

怪談狂言の鼻祖であるだけに、南北は、累の怪談を生涯に五つも書いてゐる。その中で、最も行はれてゐるのが、この「法懸松成田利劍」である。殊に近頃に至つて復活、幾度となく上演されてゐる。

一番目の日蓮記と、二番目の祐天記を、對照させたのが南北の働らきである。一番目は、頗る呑氣な、荒唐な狂言だが、この時代の宗教劇として、その呑氣さに又一種の味ひがある。二番目は又、南北の怪談狂言として、凄味と滑稽の交錯に、彼れの特徴を遺憾なく發揮してゐる。各場とも非常に受けた結果は、「地獄の場」は再び「獨道中五十三驛」の一部へ流用し、「累解脫の場」は趣向を「東海道四谷怪談」の蛇山へ轉化してゐる。南北の作物には、斯うした趣向の流用轉化が折々見受けられる。

累與右衛門が今日まで殘つたのは、全く淨瑠璃「色彩間苅豆」の爲である。淸元の名曲として、今日に僅存し、曲その物が流行を絕たない所から、梅幸によつて復活されたのである。化政度時代の代表的な淸元曲として推奬すべき作品だ。それは初代延壽太夫の妻女の作曲であつたのだ。

本卷に收錄した脚本には、二番目二幕目「鍋井戸巴屋の場」が缺けてゐる。どう探しても發見されなかつたので、止むを得ない次第である。爰に梗槪を記して置く。

細川甚三郞は、船頭神田川の與吉と身をやつし、同じく巴屋の仲居となつてゐる女房のおさえと共に、紛失の撫子の茶入れを詮議してゐる。茶入れは、惡侍ひの蜂山藤六が持つてゐたが、惚れてゐるおさえから望まれて茶入れを渡す。それは判人安右衛門と計つて拵らへた似せ物で、誠の茶入れは巴屋の庭の片隅へ埋め、鑑定書まで贋物を作つて渡した。誠の鑑定書は巡り廻つて、平井の船頭萬助が所持の、小用藥と吹替へられてゐた。與右衛門は藝者の廻し男と化けてゐたが、與吉おさえが、累の敵と自分を覘ふのを知つて、平井の川端へ二人を誘き出し、騙し討ちに殺してしまふ。

初演の役割は左の通りであつた。

藥王丸實ハ日蓮上人。法華長五郎實ハ三國婀子吉祥丸。見ヶ淵の蝦蟇仙人。奥女中、累。船頭、神田川の與吉實ハ細

川甚三郎（五ヤク三世尾上菊五郎）漁師、捨吉實ハ北條天一丸長時（尾上三朝）本間六郎左衛門俊勝。惟康君（二ヤク尾上蟹十郎）東條左衛門景信。蜂山藤六（二ヤク大谷門藏）漁師、一心太兵衛後ニ千ヶ寺參り阿佛坊。羽生村の助。波木井庄司（三ヤク大谷馬十）石井三郎長勝。日蔭法師。下部、八助（三ヤク中山錦車）久留里鬼藤太。醫者、道庵。下部、伴助（三ヤク坂東善次）平の左衛門秀連。判人、安右衛門（二ヤク市川小團次）中納言兼豐。若黨、惣次（二ヤク松本錦吾）若黨、鐵平。船頭、萬助（二ヤク尾上仙藏）與右衛門母、おかや（叶小さん）八助妹、おりえ（袖崎政之助）文珠菩薩。波木井庄司娘、七里姫。猿廻し、石和のおかん。巴屋の仲居、おさえ（四ヤク岩井粂三郎）不動明王。祐天上人。三國の太夫賴長。學林坊後ニ法印肥前坊。江の島の稚兒、白菊丸實ハ蒙古の帝烏楓丸。久保田金五郎後ニ木下川與右衛門（六ヤク七世市川團十郎）

一番目は、初演ぎりで廢れてしまつたが、二番目の累與右衛門は、嘉永二年六月の河原崎座に再演された。この時は俳優無人の結果、與右衛門と與吉を同一役人が扮する事になつたので、茨木屋門兵衛といふ役を殖し、大切へ鯉掴みを附け、多少改訂が施された。

累。おさえ（二ヤク二世尾上菊次郎）藤六（松本虎五郎）おかや（岩井政次郎）おりえ（市川團之助）八助（淺尾爲十郎）祐天（中村芝雀）助（大谷友右衛門）與右衛門、與吉（二ヤク坂東彦三郎）

その後、殆んど打絶えてゐたが、大正九年十二月の歌舞伎座で、梅幸の累、市村羽左衛門の與右衛門

で復活された。但し、土手場の淨瑠璃一幕であつたが、非常に好評を得たので、その後東京ばかりでも同じ顔觸れで二回、京阪各地でも度々上演された。大正十五年、梅幸羽左衞門延壽太夫三名の發企で、目黑の祐天寺へ累塚が建立された位であつた。

尤も、單に劇的要素を多く含んだ舞踊としては、舞踊師匠の間には傳はつてゐたらしい。明治三十九年、藤間勘右衞門が歌舞伎座で大浚ひをやつた時、藤間政彌の累、市川桃吉の與右衞門で、土手場の淨瑠璃一幕をやつた事がある。

大正十四年七月の市村座では、原作通り「法懸松成田利劍」の名題で、珍らしく二番目全部を演じた。それは、大正十二年八月の演藝畫報へ、わたしがこの二番目の脚本を掲載した事があつたので、それに準據したのであつた。

累、與吉（二ヤク六世尾上菊五郎）與右衞門、祐天（二ヤク守田勘彌）八助（大谷友右衞門）惣次（坂東彦三郎）藤六（尾上伊三郎）作助（市川照藏）おかや（尾上菊三郎）おいえ（尾上榮三郎）おさえ（坂東秀調）

染替蝶桔梗

文化十二年八月、河原崎座に書きおろした通し狂言で、太閤記へ双蝶々の書替へを結びつけた、南北

流の時代世話物である。双蝶々の書替へ狂言を、南北は五種も作つてゐるが、その中でも時代劇に附會したといふ點で、この狂言は可成りな特色を持つてゐる。單に山崎といふ地名から兩者を結びつけた所に、南北らしい働らきが見える。

光秀といふ人物は、南北もこの以前、既に「時桔梗出世請狀」で取扱つてゐるが、この狂言では特に際立つて、春永を陰謀を持つ暴君に、光秀を全くの忠臣に化してしまつた所が面白い。おしなべて昔の劇作家は、信長を憎み、光秀に同情を持つてゐた。その傾向がこの脚本に至つて、極度に發揮されたものと云つていゝ。一體に、南北としては異色のある篇で、上記の光秀や春永の性格に於てもさうであるが、事件の一部を解決せず、結末を悲劇で終らせた如き、珍らしい大詰である。恐らく南北は、この後日狂言を作るつもりであつたのであらう。誰れもが想像し得られる通り、篇中の友市といふ子役は、後に石川五右衛門になる筋である。既に前以て闕の戸に葛籠を脊負はして、女五右衛門を暗示してゐる。

後日狂言を作る南北の腹案が實行されなかつたのは、この興行が非常な不入だからであつた。不入も尤もだと思はれる。この狂言は文化度にしては、あまりに澁い、地味な狂言であるから……双蝶々の書替へが不成功に終つたので、今度は本物の「双蝶々曲輪日記」を出した。中村大吉の長五郎、岩井半四郎の長吉、女形同士を相撲に扮させて、今度は大當りを取つた。南北は顏色が無かつた譯だ。この點、

同じ双蝶々の書替へを上演した「蝶々孖梅菊（てふ〳〵ふたごのきやうだい）」の場合と、よく似てゐる。

この狂言は再演されなかつた。初演の役割は左の通りであつた。

藤屋の吾妻實ハ橋本娘お照（五世瀬川菊之丞）春永の妾、几帳。橋本下女、お虎（二ヤク岩井粂三郎）森蘭丸。惡者佐渡七（二ヤク大谷鬼治）山口玄蕃後ニ安田宅兵衛。駕籠舁き、唐人甚兵衛（二ヤク大谷門藏）醫者、山崎淨閑。小揚げ、葉屋村の彦助（二ヤク桐島儀右衛門）勝鹿妹、小藤。米屋與五郎（二ヤク岩井かほよ）武智十郎光義（岩井松之助）三好左京之進數馬。與兵衛母、お早（二ヤク市川門三郎）平岡郷左衛門實ハ岡島丹平（澤村四郎五郎）小田上總之助春永。勝鹿與五郎正行（二ヤク二世關三十郎）與五郎女房、關の戸後ニ放れ駒のお關。橋本後家、幻（二ヤク中村大吉）光秀娘、皐月後ニ濡れ髮のお關（五世岩井半四郎）武智十兵衛光秀。山崎渡し守、與次兵衛。南方屋與兵衛實ハ南方十次兵衛（二ヤク助高屋高助）

伊勢平氏梅英幣（いせへいしうめのみてぐら）

文政三年、河原崎座の顔見世狂言である。平家物語を世界にして、義朝を暴君に、長田を忠臣に取扱つた所など、前の光秀と似てゐる所もある。

この狂言には、二つの大きな特徴がある。一つは、外の顔見世狂言のやうに全體の組立てが江戸化され

て居らず、頗る義太夫狂言臭い事である。五建目に於て、お松が熊坂長範に扮してわざと討たれ、その血汐で夫の難病を平癒させるが如き、六建目に於て、景清が烏眼で上使に立ち、身替りの似せ首を使ふが如き、それである。第二は、二番目を獨立の世話物にして、時代物へ戻さなかつた點である。由來、顔見世狂言の二番目といへば、どんな事があつても、最終には登場人物が皆々本名を現はして、時代物の世界へ返るのが通例であるのに、この狂言のみは、三勝半七が遂に正體を現はさず、世話狂言は世話狂言のまで終つてゐるのが、顔見世狂言としては稀有な例である。しかもこの二番目には、並木正三の「宿無(やどなし)團七時雨傘(だんしちしぐれのからかさ)」が應用してある。一番目はひどく義太夫狂言じみてゐる。どうして斯くも全體が上方情調なのかと云へば、この時の座頭三世尾上菊五郎は、前年から旅興行に日を暮らし、この年は大阪で半年芝居に出て、顔見世に間に合ふやう歸つて來たものなので、上方土産といふ意味と、また菊五郎が上方で見た狂言に暗示を與へられ、特に南北に筋の注文をした所爲と、兩樣の原因から來たのであらう。しかも一番目の大詰は、院本の「玉藻前」や「いろは歌」から胚胎し、默阿彌の「烏眼の上使」の、本店らしくなつてゐる所に興味がある。

役割は左の通りであつた。

女盜賊、麻生のおまつ實ハ越中前司盛俊娘松ヶ枝。忠盛後室、池の禪尼。鳴尾屋巴丈（三ヤク中村大吉） 長田庄司

次郎忠宗。三勝兄、宵寢の仁介（二ヤク嵐冠十郎）郎黨、源內。萬金丹賣り吉六實ハ太夫之進朝長（二ヤク尾上多見藏）內田丁稚、與吉實ハ澁谷金王丸正俊（尾上松助）侍女、初瀨。景清女房、小よし（二ヤク市川瀧三郎）築島八道海月。風呂屋三助。船頭、金八（三ヤク坂東善次）別府太郎國連。庄屋、わからず無理右衞門。高島屋音助（三ヤク松本虎藏）勘解由次官助則。壬生の九助。美濃屋仁右衞門（三ヤク尾上春五郎）瀧口次郎光康、野上の夜叉熊（三ヤク松本錦吾）平賀四郎義信。大丸屋勇助（二ヤク坂東國藏）右兵衞佐賴朝（市川鰕三郎）醫師、藪井養仙。作者、龜屋馬朝（二ヤク市川の助）風呂屋鐵八。難波六郎經遠。道具屋長九郎（三ヤク大谷門藏）娘、小忌衣。侍女、七野。八島屋おなみ（三ヤク岩井梅藏）白拍子、胡蝶實ハ新侍頭信親。侍女、小倉。白峰の內侍。下女、おひで（四ヤク市川瀧之助）權の太夫信賴。奴、久賀內。岩井喜代太郎（三ヤク岩井喜代太郎）妹、袺木。侍女、芳野。藝者、小勝（三ヤク坂東三津藏）關原藤太家次。今市善右衞門（二ヤク淺尾友藏）進の藤人實兼。船橋平左衞門（二ヤク市川門三郎）下部、鳥平實ハ安達藤九郎盛長（中村十藏）盛久妻、阿古屋。賤の女、小雪實ハ惡源太義平妻雲井の前。藝者、柞屋三勝（三ヤク市川門之助）主馬判官盛久。蒸風呂屋、摺針太郎作實ハ長田三郎景宗。左衞門佐平重盛。茶筌賣り、禪了實ハ崇德院愛樹松の精。船橋下部、市助（五ヤク二世關三十郎）上總七郎景清。左馬頭源義朝。小原女、お糸實ハ崇德院愛樹梅の精。賤の男、千本の枝六。鳴尾屋中働き、半七（五ヤク三世尾上菊五郎）

この狂言は再演されなかつた。

渥美清太郎識

袈裟懸松成田利剣（けさかけまつなりたのりけん）

法懸松成田利劍

第一番目　三建目　房州清澄寺の場

役名――三國の嫡子、藥王丸。所化、祐念。波木井息女、七里姫。法華長五郎。學林坊。平の左衛門秀連。久留里鬼藤太。奴、鐵平。石井三郎長勝。文珠菩薩。成田山不動明王。

本舞臺、三間の間、一面の海鼠壁、見越しの松ヶ枝。この前、箱ざしの天水桶、すべて房州長狹郡、市川村小湊、三國の太夫屋敷塀外の體よろしく、爰に秀連、野袴、ぶッ裂き羽織、忍び頭巾。鬼藤太、着流し、尻からげ、大小、頰かむりにて立ちかゝりゐる。鐵平、木綿奴、凛々しき形。頰かむりにて、夜廻り提灯、六尺棒を持ちし足輕と立廻りゐる。本神樂、時の鐘、バタ〳〵の音にて幕明く。

ト直ぐに立廻りあつて、鐵平、足輕を踏み倒し、乘りかゝつて刺し通す。秀連、鬼藤太、夜廻りの提灯を差出し

兩人　どうだ、息は止めたか。

鐵平　只今止め。

トよろしくあつて、死骸を片側へ片附け

して、お二人樣の、今晩これへお出でなされたは。

秀連　かねて東條左衞門どのへ一味して、北條家を失ひ、四海の政治を執り行はんと思へども、兎角に仁者の重時どのゆゑ、折を窺ひ居るところ、重時どのには、中年にして跡繼ぎ誕生。

鬼藤　事を計るに、家督の一子あつては邪魔と、四十二の二つ子は、親に克すと云ひ立つて、たうとうその產れ子は捨てさせて、未だに跡目の無いのが此方の壺。

鐵平　併し、その餓鬼を捨てる時、北條家の重寶、三鱗とやらを、守に入れて捨てたではございませぬか。

秀連　いかにも。その三鱗は添へたれども、もう十五六年にもなれど、右やうの事訴へ出でねば、その餓鬼も、大方くたばつたと見える。

鐵平　大望を思ひ立つて、二十年近くになりませうに、どういふ譯で今まで、事を計りはなされませぬ。

鬼藤　東條どのを始めとして、そこに如才があるものか。先年、異國へ内通して、蒙古の軍艦攻め來り

し時、この國の神寶、日月の御旗、雲龍の寶劍、まつた法華經の功力にて、惡風おこつて、その船を覆へし、這々蒙古へ逃げ歸つたれば、かねての企みもそれなりけり。

秀連　さるによつて、その神寶を奪ひ取つて、此方の手へ秘め置いた上、又ぞろ異國へ内通し、その時こそは誠の旗揚げ。

鐵平　して、その神寶は、いづれにござります。

鬼藤　日の御旗は、鎌倉將軍家にて守護なし、月の御旗は禁庭より、この家の主、三國の太夫へ御預けそればかりでなく、三國が家の寶たる、雲龍の寶劍まで、奪ひ取らんと、この出立ち。

鐵平　それで、やう／＼解りました。併し、迂濶に入つて、仕損じては一大事。

秀連　その儀はちつとも氣遣ひない。かねて腹心たる學林坊を、この館へ入込ませ、今宵と合圖を定めたれば、事成就は一時か、二時經たず。

鬼藤　さすれば當將軍を討ち滅ぼし、跡は卽ち惟康どの。さうなる時は、東條左衞門どのは執權職。

秀連　この平の左衞門は國取り大名。

鬼藤　久留里鬼藤太も萬石取り。その時おぬしも、領主郡主にしてやるワ。

秀連　一味の者の立身は、三國の太夫を寂滅させるが、合圖同然。

鐵平　然らば、これから內へ忍んで

鬼藤　手番ひよく。

秀連　人や來る。

鬼藤　頑張れ〳〵。

鐵平　心得ました。

ト鐵平は向うを見込む。秀連は天水桶より松の枝へ手をかける。鬼藤太は下座の方を窺つてゐる。この見得、時の鐘にて道具廻る。

本舞臺。一面の山幕にて、道具とまる。

ト大ドロ〳〵になり、雨落より日覆ひへ心といふ字を三つ引上げると、直ぐに外記節になる。

およそ因位のその昔、法藏比丘の桑字の願、たゞ信行によるとかや、八ツ九ツの流れの源、壽福圓滿の影像に、こなたは降伏四魔の御誓ひ、いづれにおろか有り難き。

トこの淨瑠璃切れると、山幕を切つて落す。

本舞臺、向う一面の黑幕、誂らへの岩臺。この上に文珠菩薩、唐獅子に乘つたる拵らへ、手に如意と寶珠を持ちゐる。一段下がりし岩臺に、不動明王、大小二振りの劍を携へたる見得。岩臺の下、上手に藥王丸、桃色の着附け、藤色の刺貫を穿き、下手に祐念、鼠の着附け、麻衣にて、兩人とも尊像に向ひ、平伏してゐる。

〽不思議や虚空に花降りて、大威德の御姿に、行者は低頭一心不亂、諫諍の身にしみ〴〵と。

トこの淨瑠璃へ鳴り物入り、始終ドロ〳〵にて、此まゝ舞臺へ押し出す。淨瑠璃切れると、藥王丸、祐念、頭を上げ、こなしあつて

藥王　アヽラ有り難や、我が念願成就のしるしか。

祐念　哀愍納受なさしめ給ひ、日頃信じ奉る

藥王　福智圓滿文珠菩薩。

祐念　南無や大聖不動明王。

藥主　尊像あり〳〵拜すること

祐念　アヽラ嬉しや

兩人　有り難やなア。

〽暫し合掌し給へば、微妙の梵音鮮やかに。

文珠　善哉々々、藥王丸。

不動　やをれ祐念。

文珠　汝、世尊久遠の昔より、末法の今に至り、法華經大乘妙典を弘通せよと、天命受けし身なるぞや少しも忘る事なかれ。

不動　丹精無二の汝が祈願、成就なさせん大威神力……汝、前世に罪深く、今世に生れ出でたれども鈍根愚昧の報ひを得て、無智文盲を嘆くによしなく。

文珠　後五百歳の導師となり、大法を擴めんに、黄宣流布せん事、佛さらに妄語なし。

不動　されども大慈の悲願により、誠に智慧を祈らんには、携へ持ちし利劍の二振り、一振り呑んで臓腑をあばき、惡血を吐いて新血を生じ、無邊の智慧を與へんが、長きを呑むや、短かきを望むや汝が赤心、いかに〳〵。

祐念　大悲の靈驗にて、體を破るに二つなし。同じくならば、長きを呑まん。

文珠　我れに向うて明暮れに、智慧を祈りし誠心を、今こそ感應なしつるゆゑ、福智圓滿の寶珠を與へん。汝、よく保つや。

薬王　ハヽア、有り難き御しめし。今ぞ迷ひの雲霽れたり。これより諸經を弘通して、末法有緣の妙法力。

祐念　利益に疑ふ事あらんや。

ト藥王丸は文殊菩薩の側、祐念は不動明王の側へ、ツカ〱と行き

兩人　ハヽッ。

ト平伏する。

文殊　法華妙者、一字金輪佛頂頌。

不動　のうまくさんまんだ、ぼたなんぼうん。

ト音樂になり、頻りに花降る。文殊菩薩は藥王丸に寶珠を與へる。藥王は受けて合掌する。文殊菩薩、如意を構へて、佛像の通りの見得。不動明王は其まゝ祐念の襟髪を取つて提げ、長き劍を口の中へ突き入れる。祐念、ウンと血を吐いて悶絶する。

〽投與の寶珠に利劍の寶珠、凡心轉じて聖智を増す、文殊不動の神通力、仰ぐもおろか末の世に、異域吐蕃の果までも、名譽の智德ぞ隱れなき。

ト始終大ドロ〱にて、この淨瑠璃のうち、其まゝ元の所へ引込み、この見得にて、よろしく道具廻

る。

本舞臺、元の塀外の道具に戻る。

ト時の鐘、凄き合ひ方になり、向うより長五郎、縞の大どてら、丸括け、一本差し、苧くそ頭巾にて顔を隱し、盜人の拵らへにて出て來る。後より盜人四人、いづれも頭巾をかむり、附添ひ出て來る。花道にて、皆々に囁き、云ひつける思ひ入れ。

盜一　そんなら三國の太夫が屋敷へ

盜二　今宵仕掛けて、寶劍とやらを

盜三　盜み取るには、お頭一人」

盜四　わしらは、あたりを頑張るのか」

ト長五郎、うなづき、手を出す。これにて盜賊の一人は、持つて來りし鋸を出す。長五郎、取つて「行け〳〵」と思ひ入れする。

四人　心得ました。

ト兩人は下座へ、兩人は向うへ入る。長五郎、本舞臺にて、あたりを窺ひ、今の鋸を以て塀を切り

にかゝり、又、向うを見込み、思ひ入れあつて、用水桶の蔭へ隠れる。時の鐘、合ひ方にて、向うより長勝、上下衣裳、大小にて、中間、箱提灯を持ち、附いて出て來り、花道にて

中間　モシ、お旦那、清澄寺をお立ちなされたは、四ツでございましたに、もう九ツ。春の夜には、あまり早い事でございります。

長勝　イカサマ、早いやうではあれど、併し、若殿藥王さまへ、御下山の儀をお勸め申し、やう〳〵御得心なさるゝうち、餘程の間ひまどり、さぞ待遠であつたらう。

中間　イヤモウ、平常お目かけられて下さるあなたのお供、なんと致して、待遠しいなぞと存じませう。

長勝　用事も萬端片附きたれば、これより宿所へ歸り、寢酒一献汲むと致さう。其方も一緒に、一つ飲みやれ。

中間　へイ〳〵、それは有り難うございります。

長勝　サヽ、參れ〳〵。

ト本舞臺、よき所へ來ると、バツタリと音する。中間は驚ろき、提灯を持つたまゝ逃げて下座に入る。長勝、こなしあつて、股立ちを取り、窺ひゐる。これより本神樂になり、塀の上へ學林坊、頬か

むりなして、錦の袋入りの寶劍を持ち、松の枝を傳ひ、下りて下る。また塀を切り破り、鬼藤太、御旗の入りし箱を抱へ、出て來る。後より秀連、鐵平、窺ひ〳〵出て、四人、舞臺よき所へ探り寄つて、

秀鬼　學林坊か。

ト頷づく思ひ入れ。

首尾は。

ト云ふのを押へて、兩人に囁く。

鬼藤　ムウ、そんなら寶劍を奪ひ取つたか。此方もまんまと、この通り。

ト箱を探らせ見て

この品盜んで立退く折、やらじと止める三國の太夫、それを無理に振り切つて

秀連　かねて、この學林坊とも云ひ合せ、蒙古にて用ふるところの毒藥を、小柄に塗つて打ちつけしに手ごたへせしは、正しく賴國。刃金の毒が惣身へ廻り、人手もかゝらず、手も濡らさず

鐵平　あの樣子では遠からぬうち、三國の太夫は寂滅爲樂。

秀連　コレ、密かに。

鐵平　して、御坊や、我れ〳〵は。

鬼藤　身共と一緒に、東條どのへ。

秀連　その品持つて、ちつとも早く。

三人　合點だ。

ト四人一緒に、旗の箱と寶劍を持つて、行きにかゝる。長勝、ツカ〳〵と前へ出て立ちふさがり

長勝　正しく盜賊、謀叛の奴等。

四人　ヤア。

ト吻りする。

長勝　その品渡して、覺悟なせ。

鬼藤　何を小癪な……殺らしてしまへ。

トこれより鳴り物になり、四人、長勝へ打つてかゝるを、立廻りのうち、秀連は鬼藤太が落したる二品を拾ひ、向うへ逃げて入る。學林坊、續いて逃げるを、長勝、引戻して、立廻りにちよつと當てる。鬼藤太鐵平、また打つてかゝる。この時、最前より天水桶の蔭に隱れて窺ひゐたる長五郎、この中へ入る。長勝は長五郎を鬼藤太と心得、手を長五郎の懷へ入れて錦の守り袋を引出す。鬼藤太鐵

平も中へ交り、守り袋を奪ひ合ひ、誤まつて守り袋を見越の松へ打ちあげる。これにて守は枝へかゝり、下がつてゐる。鬼藤太と鐵平は、構はず逃げて向うへ入る。長五郎、長勝、立廻りのうち、長勝、足に觸る鋸を取つて、長五郎に打ちつける。長五郎・拂ひのけるはずみ、鋸は學林坊に當る。これにて學林坊、心附き、直ぐにその鋸を取上げ、打つて行くとて、松ヶ枝にかゝりし守り袋を打ち落し、トヾ鋸と守り袋は、學林坊の手へ入り、うまいといふこなし。拔き足して逃げて向うへ入る。此うち長五郎と長勝、立廻りよろしく、見得になり、時の鐘の送りにて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、向う一面、本縁附き、簾を掛けたる書院の前側ばかりを見せ、左右、塗りこんだる練塀。眞中に誂らへ振りよき梅の立ち樹。上手、蓮の手水鉢・植込みよろしく、すべて房州長狹郡、清澄寺庭先の景色、よろしく、ドロ〱にて道具とまる。

ト大ドロ〱にて、以前の心といふ字を三つ、日覆より雨落へ引いて取る。誂らへの鳴り物になり、舞臺眞中へ、緣附きの茣蓙を敷き、爰に藥王丸、稚兒の拵らへ、藤色の指貫を穿き、右の手に鞠を持つて、机にもたれ、居眠りてゐる。眞中に七里姫、島田髷、振り袖の娘にて、机にもたれ、同じく眠りゐる。下手に祐念、青坊主、腰衣にて、机の脇に反り返り、居眠りゐる。三人ともこの見得にて、

鷹揚にセリ上がるト、どろ〳〵打切る。藥王丸、フツと目を覺まし、思はず持つてゐる手鞠に目を附け、こなしある。七里も一時に目を覺まし

七里　オヽ怖。

ト藥王丸の膝にもたれ、顏を隱し、こなし。祐念も目を覺まし、恟り飛びのき

祐念　のうまくさんまんだばさらだ、せんだまかろしやそわたや、うんたらたかんまんぎやアてえ〳〵はらぎやアてえほうじそわか般若心經。

ト慄へゐる思ひ入れ。藥王丸は七里に目も觸れず、ヂツと思ひ入れあつて

藥王　法華妙者の功力にて、日頃信心し奉る、文珠菩薩の示現にて、福智圓滿の寶珠なりと、賜はりしと見れば、それには變るこの手鞠。

祐念　此方は恟り、祐念が、氣も魂ひもどこへやら。アヽ、南無阿彌陀佛々々々々々々。

七里　所はいづくか知らねども。心にもない正夢に、見しは慥かに藥王さま、今お一人は祐念さん。

藥王　三人一緒に書初めの

祐念　机にもたれ、うたゝ寝に

七里　見しは、ありく〳〵

藥王　有難いやら
祐念　嬉しいやら、冥加ないやら
藥王　ほんに不思議な
三人　正夢ぢやなア。

ト三人こなし。これより樂の入りし和らかなる合ひ方になり、七里は藥王丸の持つてゐる手鞠を持つて

七里　モシ、その鞠は、私しのでござります。
藥王　ヤヽ、そんなら、この手鞠は、お前のか。
七里　アイ、どうぞ戻して下さりませ。
藥王　そりやハヤ、波木井の息女、七里どのゝ手鞠なら、返して進ぜまいものではないが、假初めならぬ藥王が、夢に授かる寶珠の玉。これはどうも返されぬ。
祐念　これサ〳〵、藥王どの、その鞠は返したがいゝ。女の手から物を貰へば、五百生がその間、手の無い者に生れると、おらが師匠の圓通さまが、口癖に云はしやつた。外の事は忘れてのけたが、こればつかりは覺えてゐる。それは早く返したがいゝ。

ト これを聞き、藥王丸も、心附いたる思ひ入れにて

藥王 ほんに、さうぢや。ソリヤ、返します。

トそつと拋る。七里、取つて丸めてゐる。

祐念 なんと、きつからうが。これ程、物を知つてゐる祐念を、おらが師匠の圓通さまが、アヽ、愚鈍な役に立たず、とても出家にはえゝなるまいと勘當され、飯沼の寺を追ひ拂はれ、道心坊主になるところを、爰のお住持道善さまは、圓通さまとはお馴染にて、この清澄寺へ引取られ、お經を讀んでも一つも覺えず、我れながら呆れ果て、下總の成田山へ願がけしたが、今見た夢が本當なら、これからちつとは、物覺えがよくなるかしらん。

七里 そんなら、祐念さまは、爰のお寺のお弟子ではござんせぬか。

祐念 さうとも〳〵、愚僧は居候ふ坊主の、マア、味噌摺りサ。

藥王 誠は淨土宗の檀林、飯沼弘經寺、圓通上人のお弟子ぢやわいの。

七里 さうでござんすかいな。わたしや矢ツ張り藥王さまと、同じお弟子ぢやと思うたわいな。

祐念 なんの〳〵、面倒くさい眞言秘密、第一、覺えられる事ぢやない。それよりは手短かなお念佛、外の手本を習つても出來ぬゆゑ、書初めにもコレ、この通り

ト奉書へ書いた六字を出し

藥王　イヤ〳〵、其やうな事、有り難うない。わしが書いた書初めは、この二句の偈。

南無阿彌陀佛のこの名號。なんと、有り難いぢやないか。ナア、藥王どの。

ト同じく奉書に書いた八字を示して

一天四海皆歸妙法。これに上越す事があらうか。

祐念　イヽヤ、衆生濟度の六字の名號。

藥王　イヽヤ、末法有緣の七字の題目。

祐念　イヽヤ、念佛ぢや。

藥王　イヽヤ、題目ぢや。

ト爭ふを、七里、中へ入り

七里　アヽモシ、お二人さん、いはゞめでたい初春の、その書初めからのいさかひは、女子のわたしに何ぢややら、譯は一向解らねど、わたしが書初め。これ見て下さんせ。

ト自分の机に載つてゐる、書初めの五字を前へ出す。兩人、見て

兩人　天筆和合樂………これが、どうした。



七里 サア、その通り、お二人とも、和合樂がよいわいなア。もしもいさかひなさんしたら、又かいなアと何れも樣が、おつもりなさんすも何とやら。サ、斯う云ふわたしも皆さんが、親の眞似してませくさりと、思し召しもござんせうが、ついした事から御一緒に、寺朋輩のわたしが扱ひ。久しぶりでの顏合せぢや。爰の所を聞分けて、どうぞ仲ようして下さんせ。

藥王 成る程、女子のお前に敎へられ、淺瀨にあらで淺からぬ

祐念 寺子友達、なんの喧嘩をしませうぞ。

藥王 いはゞ時の張りあひで

祐念 こんな爭ひは、ほんのお茶漬サ。

七里 そんなら、わたしが云ふ事聞分けて

藥王 その書初めの

祐念 天筆

兩人 和合樂サ。

ト兩人、思ひ入れ。

七里 ヤレ〳〵、嬉しや。それでわたしも落ちついたわいなア。モシ、いはゞ仲直りとやらの代り、書

初めもしまうたによつて、この鞠ついて、遊ばうぢやござんせぬか。

藥王　鞠は春の持遊びものなれば、男たる身は、鞠つく事は大不器用。

祐念　成る程、こりやアさうだ。どうして手鞠がつけるものだ。この祐念が、一生の思ひつきがある。なんと、この手鞠を、蹴鞠にして、四人で蹴て遊ばう。

藥王　イカサマ、これは時の一興ぢや。サア、七里どのも、連れ衆となつて

七里　どうしてマア、女子のわたしが

祐念　ナニ出來ぬ事があるものだ。斯う裾を端折つて

ト七里の裾をまくる。

七里　アヽコレ、滅相な。

祐念　ナニ滅相な事があるものか。ツイ、斯う端折るのだ。

ト自分の裾をからげる。

七里　それぢやというて。

祐念　愚圖々々せずと、蹴なせえな。

藥王　我れらが初足を致さうか。

トよろしくあつて藥王丸、一つ蹴立て、祐念の方へやる。祐念、器用に受けて、嬉しがり、一人して蹴てゐる。この時、ドロ〳〵になり、梅の梢に七頭の蛇現はれ出る。七里姬、ウツトリとなる。藥王丸、これをキツと見て

藥王　ハテ、怪しき七頭の蛇體。

祐念　エヽ。

ト驚ろく。蛇、後へ引込む。七里は矢張りウツトリとしてゐる。兩人、この樣子を見て

藥王　七里どの、どうぞしてか。

祐念　氣合ひでも惡いのか。

兩人　モシ。

ト介抱する。これにて七里姬、心附き

七里　どうした事やら、ウツトリと……ハイ、どなたも有り難うござります。

ト又ドロ〳〵になり、梅の木へ今の蛇、現はれる。皆々これを知らず。これより七里、藥王丸を見て、ヂツとこなしあつて、恥かしさうに藥王丸の袖を押へて

モシ、藥王さま。

ト藥王丸、何心なく

藥王　なんの用でござる。

七里　サア、その用は

藥王　その用は。

七里　惚れたわいなア。

ト顏を隱す。

藥王　エヽヽ。

ト驚ろく。

祐念　これは大變だ。オヽ、否やの〳〵。女人は堅く禁制々々。我れらは爰でお念佛。

ト文庫の中より伏せ鉦、撞木と木魚を出し、目を閉ぢ、木魚を叩き、口にてお念佛申してゐる。藥王丸、こなしあつて

藥王　コレ、七里どの、何ぢややら、あぢやらにも其やうな事、云ふものではござらぬぞ。

七里　イヽエ、あぢやらぢやない、大眞實。いつぞや初めて寺入りの、折よりフツと見染めた殿御。どうぞ叶へて下さんせ。



藥王 そりやお前、無理といふもの。師の坊の教へを受ければ、明日にも出家する藥王。決して左樣な邪淫な事は、云うても下さるな。

七里 イエ〱、御出家にはさせませぬ。

藥王 コレ〱、そりや聞分けが無いといふもの。出家一人墮落さすれば、未來永劫浮む瀬なし。それでもお前は

七里 惚れました……モシ

ト祐念の前にある鉦と撞木を取つて來り

佛具といへどこの鉦も、撞木と一對揃はねば、役に立たぬぢやござんせぬか。まして生ある人ぢやもの、女夫事せねば、先祖とやらへ不孝でござんす。

藥王 サア、その不孝も合點。三國の家の血筋の藥王、家を繼ぐべき筈なれど、別腹ながら兄のある身兄吉祥丸どのゝ母御は、本妻への義理を立てゝ、吉祥丸どのを連れて行くへ知れず。何卒その兄を尋ね求め、三國の家相續さすれば、この藥王は無用の身。ぢやによつて、出家して

七里 イエ〱、どのやうに云はしやんしても、是非ともこの鉦撞木のやうに、一對の女夫になりたい。願ひを叶へて

ト出す。この時、祐念、心附き、駈けよつて

祐念　コリヤ〱、この佛具は、其やうな心の穢れた女の、いぢる物ではないぞ。

ト沒義道に取り、下手へ來り、扣へゐる。始終、薄ドロ〱。

藥王　女人は五障三從の

七里　罪の深いも合點で

藥王　佛の御罰も思はずか。

七里　なんの知らう、知りませぬ。

祐念　そんならどうでも、藥王どのに。

七里　アイ。

ト藥王丸に寄りそひ、ヂツとこなし。この時、大ドロ〱にて、蛇、段々と七里姫の方へ乘りかゝり來るな、祐念、フツと見附け

祐念　アレ、また蛇が

ト下手に窺ひゐる。七里姫、ウツトリとなる。藥王丸、蛇を見、また七里姫を見て

藥王　外面女菩薩、內心如夜叉。

トきつと云ふ。

七里 エヽ。

ト心附く。藥王丸、有りあふ手鞠を手早く打ちつける。ドロ〱にて、蛇は消え、鞠は枝に殘り、下がつてゐる。ドロ〱打ちあげる。この所、星下りの心。藥王丸見て、

藥王 今の蛇體は。

トこれにて七里姫、振り袖にて顏を隱す。これと一所に祐念、呆れし思ひ入れにて、伏せ鉦をカンと打つ。これを幕の頭にて

祐念 とんだ話しだ。

ト藥王丸は七里姫を見て、思ひ入れあり、目を閉ぢて、發心のこなし。七里は其まゝ、恥かしき思ひ入れにて打俯す。

南無阿彌陀佛々々々々〱々々。

トかん〱と責め念佛のやうに鉦を打つ。これにて双方よろしく、柝無しに、ひやうし引附けると、直ぐに題目太鼓のツナギ。引返し。

幕

三國太夫屋敷の場
江の島稚兒ヶ淵の場

第一番目 四建目

役名――三國の太夫賴國。稚兒、白菊丸 實ハ蒙古の帝烏樞丸。石井三郎長勝。江の島の漁師、一心太兵衞。百姓、官六。同一子、捨吉。平の左衞門秀連。久留里鬼藤太。奴、鐵平。奴、戸田平。賴國一子、樂王丸 後ニ日蓮上人。江の島の蝦蟇仙人。

本舞臺、三間の間、二重舞臺。うしろ金襖。左右、網代塀。いつもの所に枝折り門、この外に柴垣。上手、橘の樹。この前、誂らへの井筒。よき所、植込み。すべて三國太夫屋敷、庭先の模樣。屋體の上に長勝、銀張りの莨盆を扣へ、長煙管にて莨のみゐる。枝折り戸の外には、太兵衞、柿の筒袖、木綿やつし、胡麻鹽親仁の拵らへ。官六、百姓の形。捨吉、前髮、漁師の形にて、中腰にて願ひゐる。戸田平、菖蒲革の足輕にて、六尺棒を持ち、制してゐる見得。幕の内より、ワヤ〳〵云うてゐる。琴唄に時の太鼓をかむせて幕明く。

太官 ハイ〳〵、お願ひでござります〳〵。

戸田　下がれ〳〵。
太宮　どうぞ、お願ひでござります。
戸田　ヤイ〳〵、願ひがあらば、なぜお役所へ出ぬ。土百姓の分として、お庭先までツカ〳〵と。あれには御家老様もおいでなさるに、叶はぬ事だ。下がれ〳〵。
太兵　ハイ〳〵、そこをどうぞお願ひ。
戸田　イヽヤ、ならぬ。下がれ〳〵。
捨吉　イヽヤ、下がりませぬ。是非とも上がります〳〵。

ト皆々爭ふを

長勝　コリヤ〳〵、戸田平、何事の願ひか知らねども、訴へを聞かぬは政道の怠り。石井三郎長勝が、聞き屆けて遣はす。これへ召連れい。
太兵　ハイ〳〵、それは有り難うござります。
捨吉　なんと足輕さん、きついものだらう。
戸田　うぬらはおれを、一番へこませたな。
捨吉　なにサ、へこませる氣は無えが、お前が解らねえからだ。

官六　アヽコレ、滅多にツカ〳〵と、口をきかぬものぢや。

長勝　サヽ、これへ入れ〳〵。

太兵　ヘイ〳〵、御免なされませ。

　　ト一件殘らず内へ入る。戸田平、下手に扣へる。長勝、こなしあつて

長勝　ムウ、見れば、後に扣へし小者は、どうか見たやうな。

捨吉　左樣でござりませうとも。私しがまだ幼少の頃、若殿藥王さまが、江の島へ御參詣遊ばした時、どこがお目にとまりましたやら、時々相手に出いと、有り難いお詞。それゆゑ、十歲ばかりの折まで、度々お屋敷へ上がりました者でござりまする。

長勝　イカサマ、左樣な事もあつたわえ。さすれば其方達は、御領分の者ぢやな。

太兵　ヘイ、左樣にござります。私しどもは、相州片瀨の漁師、一心太兵衛と申す者でござりますが、子の無いが悲しさに、江の島の辨天樣へ、願がけして間もなく、七里ヶ濱に玉のやうな男子の捨て子。添へてあつたは、守の中に三ツ鱗。こりやァなんでも、龍神樣からお授けなされたのだと、拾うて戻り、育つるうちに、心安い人の申しまするには、子を育つるに女房が無いと、不自由なと申しますゆゑ、アヽ、年寄りのいらぬ事とは存じましたが、父親ばかりでは、何かにつけて行

屆かぬと存じ、さる人の世話で、女房を持ちました。
戸田　ヤイ〳〵、おのれが女房を持つたを、ナニ御家老樣がお構ひなされう。
太兵　サア、そこがお話しでござりまする。その女房に連れ子がござりまするて。これも男の餓鬼。女房が常々申しまするには、この連れ子は、氏素性あるお方の胤ぢや、その證據は添へてある品と、出して見せましたは、白絹が一つ、橘の折り枝を彫つた目貫が一對。刀脇差は、百姓漁師にいらぬ物と、片しの目貫は、この親仁が、コレ

ト提げ莨入れを出して

この金物に致しました。又一つの片しは、連れ子の忰が守り袋に入れて置きましたが、十一の年その守り袋の庇で家出をしをり、殘りし物は白絹と、片しの金物。それから女房は、氣病みに煩らうて、たうとうコロリ往生しました。
官六　わしも同じく子が無いゆゑ、この人の拾つた話しを聞き、おれもひよつと拾ひもせうかと、ナニガ片瀨から七里ヶ濱の方を尋ねたところが、ある時にはいくらもあるもの。ぶち〳〵肥つた可愛らしい捨て子。直ぐに拾つて、育てあげたはこの忰。これには何も附けては無けれど、左の腕にこの通り

ト捨吉が左の腕を捲る。三ツ鱗の黑子ある。

鱗の黑子がござりまする。これも稀有ぢや、大方龍神樣の申し子であらうと、近所隣へ相談して名も捨吉と附けました。

戸田　ヤイ／＼、どいつも此奴も同じやうな、役にも立たぬ長物語り。御用の邪魔だ。立ち居らぬか。下がれ／＼。

長勝　アイヤ、何か仔細のあるべき樣子。荒立てずとも、マヽ、措け／＼……サヽ、その後は、どうぢや／＼。

太兵　只今申した通り、連れ子は駈落ち、嚊は死ぬる。跡には捨て子たつた一人。可愛うて／＼、ほんに好い子ぢやと育てあげ、今では鎌倉の圓覺寺へ、稚兒奉公に遣はし、名も白菊丸と申しまする。

戸田　ムウ、あの白菊といふは、貴樣の拾ひ子か。

太兵　左樣でござります。何かその白菊が發明で、學問をする程に／＼、日本の經は讀み盡し、南蠻とやらのお經まで讀んだとの事。

官六　さうだけな／＼。その學問に達したが害になり、世間に自分より外に物知りは無いと、子供に高慢が兆し、ところに爰のお屋敷の若殿、藥王丸さまは、大の學者ぢやと聞く。國は隔てゝありな

がら、白菊どのゝ方から藥王さまへ、度々手紙で法問をしたとの事。

戸田　その法問のお使ひには、この戸田平が、折々鎌倉まで參り、白菊どのにも逢ひましたが、何として何として、いつかな白菊丸も、藥王さまには負けました。

太兵　サア、その負けたのが口惜しいとて、この頃は米一粒食ひ居らず、今にも死なうも知れませぬゆゑのお願ひ。

捨吉　そこで前方、御縁のござりまする私しゆゑ、藥王さまに直々お目見得いたし、今度の法問の文通には、どうぞ負けて下さるやう、お願ひ申してくれいと、太兵衛どのが申されまするゆゑ

官六　それゆゑ私しども、とも〲お願ひにあがりました。

太兵　たとへ、わざと負けて下されても、誠に勝つたと思ひましたら、悴が病氣も直りませうかと、可愛さ餘つての無理なお願ひ。

官六　斯樣な甘へた事を申しまするも、お地頭樣ゆゑの儀でござりますれば、何卒、太兵衛が心をお察し下され

捨吉　藥王さまの、直々お目見得なされて下さるやう、御家老樣。

三人　偏へにお願ひ申しまする。

長勝　イカサマ、子を思ふ親の愚痴心からは、左様に思ふのも理りぢや。併し、藥王さまことは、お屋敷にござらぬワ。

太兵　ヘエヽ。して、どれにお出でなされまする。

戸川　入學遊ばされて、清澄寺にいらせられる。

捨吉　左樣なら、私しどもゝそれへ參つて、直々お願ひ申すでござりませうか。

長勝　イヤ〳〵、それには及ぶまい。今日、父上のお召しに依り、御下山なされて、おッつけ此お館へお出での筈。

官六　すりや、今日、お屋敷へ。

長勝　いかにも。

太兵　ヤレ〳〵、それは、丁度よい口に上がつたつけ。

長勝　イヤナニ、太兵衛とやら。今申した、目貫とやらは、それか。

太兵　ヘイ、この金物でござりまする。

長勝　その品、これへ。

太兵　ヘイ〳〵。

ト莨入れを出す。長勝、とつくりと見て

長勝　アノ、これが、連れ子に添へてある品か。

太兵　左様でござります。家出いたした悴に添へ、持つて參つた橘の目貫は、即ち悴めが守り袋へ入れて、走りをりました。

長勝　ハテ、珍らしきこの品……隨分ともに大事に致せ。

ト渡す。太兵衛、取つて

太兵　ヘイ〳〵、畏まりました。

トこの時、向うにて

呼び　御上使。

ト長勝、こなしあつて

長勝　ハテ、心得がたき不時の御上使。樣子は何とも、合點參らぬ。

戸田　サア〳〵、御上使では爰には居られぬ。

長勝　戸田平、次へ連れ參り、いたはり遣はせ。

戸田　畏まりました。

太宮　左樣なら、御家老樣。

捨吉　後程お目にかゝりませう。

ト唄になり、戸田平、案内して、三人附いて下座へ入る、ト又向うにて

呼び　御上使。

ト太鼓謠になり、長勝、こなしあつて、座を改め、出迎へる。向うより秀連、鬼藤太、龍神巻。鐵平、紺看板、厚綿の帶にて、附きそひ、靜々出て來り、花道にてとまる。

秀連　鎌倉の執權、北條重時公より上使として、平の左衛門秀連。

鬼藤　差添へとして、久留里鬼藤太參着。

長勝　これは〳〵、御兩所樣、遠路の所、御苦勞千萬。館の主、三國の太夫、お出迎ひ仕るべき筈のところ、折惡しく菩提所へ廟參の留守。取あへず頼國の臣、石井三郎長勝、お出迎ひ仕つてござります。イザ、まづこれへ。

兩人　許しめされい。

ト右の鳴り物の切れにて、本舞臺へ來り、兩人は上座に、鐵平は下手に扣へる。

長勝　御沙汰もこれ無きゆゑ、設けの席もしつらはず、何卒御容赦下されて、御上意の趣きを、拙者め

に仰せ聞けられ下さりませう。

秀連　今日、我れ〳〵上使に參つたは、余の儀でない。先年、禁庭より、當家へお預けありしところの月の御旗。

鬼藤　まつた三國家の重寶、雲龍の寶劍、二品ともに受取り歸れと、重時公の仰せを受け、罷り越したる我れ〳〵兩人。

秀連　石井三郎、その品々を渡し召されい。

長勝　エヽ……すりや、その二品を受取りの爲

鬼藤　今日の上使の役目だワ。

長勝　右の二品、お渡し申すは易けれども、主人太夫、留守にござれば。

秀連　イヤ、さうは云はせねえ。何の爲の家老役だ。この取扱ひが出來ねえで、家老呼はり、氣が強い。

鬼藤　その職にあつて、その職を勤める事の、出來ねえ譯があらうか。サア、渡せ。今爰で、受取らうワ。

長勝　サア、その儀は。

鐵平　アヽ、そんなにおこつのは、なんだな、表は立派な大名でも、內證は、ひつてんの苦しがりで、

七ッ屋へでも遣つたのか。
長勝　なか〳〵以て。
秀連　左樣でなくば、相渡すか。
長勝　サ、それは。
鬼藤　但し、紛失でも致したか。
長勝　サア
兩人　サア
三人　サア〳〵〳〵。
兩人　返答ぶて。ドヾ、どうだ。
ト奧にて
賴國　上使への御返事は、三國の太夫、直々それにて致すでござらう。
ト中の舞ひになり、賴國、少し老けたる拵らへ、剃立て、病ひ鉢卷、素袍の下ばかり穿き、小さ刀。茶道一人、刀を持ち、附添ひ、出て來り
秀連どの、鬼藤太どの、何か仔細は聞き屆けねど、家臣の者の不埒ゆゑ、各々方の御立腹と、あ

れより見聞仕つたが。

秀連　これは〳〵、頼國どの、御佛參と承つた。

頼國　病中ながら、佛參の某、在宿なさで思はぬ失禮、ナニ、三郎長勝、御兩所の御苦勞休めに、一獻お進め申せ。

秀連　イヤ、たべますまい。上使に立つた我れ〳〵が、その趣意も申さぬうち、御馳走に與つては、俗に申す賄賂とやら、袖の下とやら、鎌倉表への聞えも如何。よしませう、たべますまい。

鬼藤　御自分なぞは國へ引込み、悠々閑々で事は濟まうが、鎌倉昵近の武士は、左樣な悠長な隙がござらぬ。

長勝　イヤ、憚りながら御上使樣、主人太夫頼國、國に引込み居るも國の固め、異國の押へ。弓馬槍刀に暇なく、武道を磨く三國の家、泰平の鎌倉に居て、呑氣な顏の御自分方の心に比べ、ちと舌頭が過ぎませう。

鐵平　ヤア、我れらが主人に向ひ、慮外な一言、この鐵平が聞捨てならぬ。御家老とて容赦はないぞ。

トきつぱ廻す。

長勝　ヤア、牛は牛連れと、いらざる下郎の慮外呼はり。すツこんで居らう。

賴國　長勝、扣へい。あれなる御兩所を何人と思ふ。執權職のお氣に入り、殊には今日上使の役。それへ對して無禮千萬……イヤナニ、各々、お氣に障らば幾重にも、某に免じられ、御宥免下されい。
秀連　これは御挨拶、何事を申さうとも、高が陪臣づれの申す事。
鬼藤　爪先から上、取上げはござらぬワ。
賴國　それは千萬忝い……何は差措き、今日御入來の趣きは。
秀連　重時公よりの上意。
賴國　ハア、。

ト平伏する。管絃のやうな樂になる。

秀連　上使の趣き、余の儀にあらず、先年、禁庭より、當家へお預けあるところの、月の御旗。
鬼藤　今一品は三國家の重寶、雲龍の劍、急ぎ受取り立歸れとの仰せに依り
秀連　罷り越したる平の左衞門。
鬼藤　差添へとして久留里鬼藤太。
兩人　急ぎ二品、お渡し召されい。
賴國　いかにも、その二品、御兩所へ相渡さう、と申したいが、罷りならぬ。

兩人　そりや又、なぜ。
賴國　右の二品、紛失いたした。
兩人　ヤア。
賴國　寶紛失いたしたれば、外に渡すべき品はござらぬ。
秀連　無いと申して濟まうと思ふか。たとへ我れ〳〵は心安くとも、重き役目の重時公の上使。
鬼藤　それになんぞや無法の賴國。さちやアこなたは謀叛だな。
賴國　ヤア、謀叛とは舌長なり、月の御旗は禁庭よりの預かり、執權職のお構ひない筈。まつた、雲龍の寶劍は、三國家代々相傳の寶。よし御旗が紛失しようが、寶劍が無くならうが、誰れに憚る事あらんや。鎌倉のいらぬお指圖。誠、月の御旗の受取りなら、都より勅使の立つは先例なるに、おてまへ如きに云ひつけるは、重時公の御料簡違ひ。たとへこの場に二品があればとて、なんの渡さう。罷りならぬワ。
秀連　上使に立ちし我れ〳〵に向ひ、出るまゝの雜言過言。
鬼藤　こりやア身共を、耳も鼻も無い、木偶の坊と思つて、白痴にするか。
賴國　オヽ、白痴にしても大事ない。

兩人　なんと。
賴國　僞はり騙りの秀連鬼藤太、片腹痛い。
秀連　ヤア、鎌倉よりの上使を、騙りとは
兩人　ドヾ、どうして。
賴國　その仔細、云つて聞かさう。元この安房の國は、代々、東條左衞門の領地たりしが、先年、鎌倉稻村ヶ崎へ、蒙古の賊寄せ來りし砌り、某一番に走せ向ひ、月の御旗と雲龍の寶劍、まつた法華經の功力にて。忍辱の鎧を着て、諸經最第一の旗をあげ、妙法の劍を佩き、みけん眞實の弓に正眞槍、方便の箭を以て、蒙古の賊船を追ひ斥けし軍功に依つて、この國土を某に賜はり、それより領する安房の國。それを遺恨と東條左衞門、鎌倉の御前へ、有ること無いこと讒言して、元の如くにこの國を、橫領せんとの企みとは、大きな眼で見拔いて置いた。それに同意の左衞門鬼藤太。
兩人　ヤア。
賴國　その手ぢやゆかぬ、出直せ〳〵。それとも達て二品が望みなら、東條左衞門と心を合せ、執權職へ讒言なし、重時公の御出馬願ひ、その時受取つて見よと、立歸つて東條左衞門に云つて聞かせ

ろ。馬鹿な事を。

秀連　ヤア、重々過言な三國の太夫。

鬼藤　觀念ひろげ。

ト兩人、賴國へ切つてかゝるを、扇にてあしらひ、兩人の刀を叩き落し、その刀にて散々に背打ちに打ち据ゑ

賴國　鎌倉昵近の侍ひを、鼻にかけたなまくら武士、その手並では、どうして〳〵。コリヤ、賴國には、手が二本あるワ。キリ〳〵立つて、失せをらう。

ト突き放す。兩人、下手へヨロ〳〵と轉ける。鐵平、恟りして立ちより

鐵平　モシ〳〵、お旦那、どうしたものでござります。これだから矢大臣で、ぱい一をおやりなさる時に、およしなさいと申したは爰の事。ほんに、みじめなお方だなア。

鬼藤　さう云はれては、今さら一言もない。

秀連　鐵平々々、どうぞ起してくれ〳〵。

鐵平　御尤もでござります。お道理でござります。

ト抱き起す。

兩人　アイタヽヽヽヽヽ。

賴國　コリヤ〳〵、三郎、見苦しい。この品、取捨てい。

長勝　畏まりました。

ト兩人の刀を拾ひ取り

いはゞ武家の表道具、お腰が明いて何とも氣の毒、二品の代り、二本の刀、家老職の拙者が扱ひ進上申す。サヽ、お受取りなされい。

ト出す。兩人、手を出さうとして、面目なき思ひ入れ。鐵平、見かねて

鐵平　名代として拙者が落手。

ト取つて兩人へ渡す。

賴國　ヤア、愚圖々々とナニ隙取り。キリ〳〵と追ひ返せ。

秀連　アヽ、行きます〳〵。行かないでどうするものか。

ト三人、ソロ〳〵と花道へ行き

おのれ、賴國、覺えて居れよ。

賴國　恥と思はゞ、何時なりと。

秀連　イヤサ、此方が骨身に、覺えたといふ事サ。

鐵平　モシ〳〵、いつもある事だが、只も引ッ込まれまい。なんぞ一首ござりませぬか。

秀連　この期に及び、何が出やう。鬼藤太どの、おやりなされい。

鬼藤　然らば拙者が仕らう…斯うもあらうか。

秀鐵　なんと〳〵。

頼國　恥知らずの、大べら坊めが。

鬼藤　その通り。

ト合ひ方になり、三人、這々の體にて向うへ入る。長勝、思ひ入れあつて

長勝　この程、奥方梅菊さまを、御親里たる秩父家へ、御遣はし遊ばされ、度々迎ひにあぐるべしと、申しあぐれど御沙汰もなく、殊に最前より、我が君の相好、窺ひ奉るに、常に變りし御顏色。一圓會得仕らぬ。何卒愚臣へ思し召しの程、包まず仰せ下さらば、有り難う存じまする。

頼國　なんの〳〵、さまでの事は無けれども、少しく存ずる旨あつて、藥王丸に下山を云ひつけ置きしが、その通り計らうたか。

長勝　仰せの通り、即ち拙者罷り越し、御下山をお勸め申せど、衆生濟度の佛の道、里へ歸つて一日の

懈怠も、一期一生の懈怠なりと、聞入れ給はぬゆゑ、勿體なくも、殿の御病氣と申しあけしかば早速御承知遊ばされ、おしつけこれへ、お出にござります。

頼國　藥王これへ參りなば、身が胸中も明かし聞かさん。ハテ、待遠しき藥王丸。

長勝　然らば、今一度

頼國　迎ひを出せ。

長勝　畏まつてござります。

ト合ひ方になり、茶道を連れて奥へ入る。

頼國　今の上使が歸りなば、よもや東條、其まゝにはえゝ置くまい。察するところ、夜前の盜賊も、彼奴等が仕業と見拔いたなれど、これといふ證據もなく、殊には、二品奪ひ立退く折、打ちつけられし手裏劍は、正しく毒藥を塗りしにや、次第に惣身苦痛なす。

ト思ひ入れあつて、腹帶を締め直すこなし。この時、八ツの時計を打つ。

ありやもう八ツか。思へばこの頼國が一命も、居所の歩みの未の刻。さるにても藥王丸、ハテ、待久しき事ぢやなア。

ト音樂の入つた合ひ方になり、こなしあつて、あたりにある結構なる蒔繪の硯箱を持ち、正面の屋體

へ上がると、向うより藥王丸、振り袖、刺貫、稚兒の拵らへにて、竹花活に海棠の差したるを持ち、出て來る。舞臺、上の方、橘のあたりにて、鶯飛びめぐり、囀る。藥王丸、花道にて、これに目をつけ

藥王 清澄寺へ入門せし、藥王丸を何やらん、俄に館へ召されしゆゑ、罷り越したるこの庭先、いま橘の盛りの花、その葉隱れに黃鳥の、法法華經と聞ゆるは、心願叶ふしるしなるか。ハテ面白き、經讀み鳥の囀りぢやなア。

トきつと目を附ける思ひ入れ。賴國、見て

賴國 それへ見えしは、藥王ならずや。

藥王 ハツ。

トつかつかと舞臺へ來り、下の方へ住ひ

憚りながら親人樣、清澄寺へ入門の某を、今日館へ迎へ給ひしは、何とも以て審かしゝ。御胸中の程、お明かしなされて下さりませう。

賴國 いかにも、其方を迎へしは、某、心あつての事。

藥王 して、母上には、いづれへお越しなされしぞ。

賴國　奥梅菊は親里たる、鎌倉畠山家へ、先達てより保養がてらに。

藥王　すりや、母上樣には。

　　　ト思ひ入れあつて

ハテ、好き幸ひ。

賴國　ヤ。

　　ト思ひ入れ。この時、風の音して、橘の枝、二本折れて、一本は井桁の外へ、一本は井筒の中へ落ちると、忽ち井の水、井筒へ溢れて、その枝、浮かみあがる。兩人、これをキツと見る。合ひ方變る。

予が庭前の井筒こそ、誕生水と名けし靈水。落ちたる枝は橘の、其まゝ水にせかるゝは

藥王　いま一枝は地上へ落つる。これを見、彼れを聽く時は

賴國　花は元より、落花なしてもその實を生ず。人界に比べ見れば、これ卽ち一子なり。花、地中に落ちて萎むとも、その種、土に殘りあれば、時を得て、その樹生ず。

藥王　水に落ちたる橘は、その花萎まず、蕾も開けど、水に種は殘さず、土に落ちたる橘は、枯れても後の花咲く時節、花の咲かざる井筒の花、藥王丸の、それぞ大願。

賴國　然らば汝は親を捨て、氏は絶えても、その身の願ひ、出家なすべき望みよな。

藥王　推察ありし父上樣、この身の大願、右の通り。

賴國　家を繼がざる其方ならば、有つて益なき悴が一命、予が手を下ろして

ト刀を拔き、振りあげる。藥王丸、惡びれぬ思ひ入れにて

藥王　父の魂ひ穢しまするは、殘念ながら、命は我が祖釋尊へ奉れば、イザ。

トつか〱と賴國の側へ行き、双方よろしく思ひ入れ。これより變つた合ひ方。

鶴林双樹の夕の嵐は、牟尼世尊の花を散らし、聖衆悲嘆の袂を濕ほす。イザ、藥王が頭を刎ね、迷ひの念を、お晴らしあれや、父上樣。

賴國　土に落ちたる橘は、朽ちても花咲くその道理。すりや、其方の命は、釋尊へ奉るよな。

藥王　仰せの通り、母の嫉妬を憚りて、落胤ありし婦人の胎內、みごもりあるを館を遠ざけ、誕生ありしは吉祥丸、我が身の爲には實の兄君。一度土に生ひ立つとも、再び花咲く兄上に、家を繼がせて。この身は出家、大願ござれば、この望み、お叶へなされて下さりませ。

トこれにて賴國、橫手を打つて

賴國　出かした、藥王、世の常ならぬ其方が生立ち、さもあらんずと、思ふに違はぬ。

藥王　ハ、、ハツ。

ト側へ行く。

頼國　いま某が申す事、よつく聞かれよ。

ト誂らへの鳴り物になり、頼國、あたりより、法華經八巻を持つて出て、よき所へ直し

いま天ケ下靜謐なりといへども、先年滅びし蒙古の余類、事を計らんとなすこの時節。況んや諸國に、國を望むの輩あつて、天下の亂れ近きにあり。何卒これを納めんと、天帝へ祈誓を掛けしに、不思議や日輪、我が妻の胎内に、入るを夢みてみごもりしは、卽ち御身。我が胤ながら、凡人ならざるその有樣。さてこそ望む法の道。

藥王　某とてもその如く、いま日本を鎭めんには、宗門ならでよもあらじ。さはさりながら、天竺には釋尊、涅槃の雲に入り、その後あらゆる宗門はびこりあるが、中にも未見眞實、妙法華經、この宗門を擴めなば、南無妙法の七字の御利益、これを唱ふるその者は、藥王が弟子と進めて世界のうち

頼國　歸伏させなば其うちには、たとへば朝敵、異國の軍船、近きにこの土へ寄せくるとも、藥王、先に進み立て。軍術力術は覺えずとも、其方が法力經文にて、この日本を守護いたさば、何條事のあるべきや。さはさりながら異國の賊、追ひ斥けるは月の御旗、予が預かりの品なるに、寶劍

もろとも奪ひし曲者。今にも某、落命なさば、倭人起つて國の亂れ、その時、其方が歸依の宗門、法華經行者のしるしを見せよ。

藥王　仰せにや及ぶべき。父上に代つて、異國の兵船、この海上に寄せ來るとも、日月の御旗に、妙法七字の御題目、これを押立て、その折は、行くへ知れざる吉祥どのゝ、在所を求めて天下の爲、行者の祈りに勝利を見せん。

賴國　家を出づるの其方へ、門出に敎ゆる某が、別腹ながらも吉祥丸、彼れを宿せしその女、橘彫りたる目貫に添へ、氏を記せし白き絹まで、渡し置きたる上からは、兄弟めぐり逢ふなれば、血汐を注がば文字は鮮か。これぞ名乘りの好き手がゝり。

藥王　先刻見たる正夢の、七字の題目修行の爲、家を出づるの藥王が、直ぐに出家の法の門出。

賴國　日輪、母の胎内に、入ると覺えて生れし其方、日に連なるの文字を其まゝ、日蓮法師と法名して法華經守護の大行者。

藥王　水に入りたる橘の、開くは妙法宗門の、開くるしるしは末代まで、井筒の中に橘を

賴國　日蓮行者がしるしとなせ。

藥王　さはさりながら、父上の御かんばせ、次第に死相を現はす樣子。

賴國　これぞ夜前、二品を目がけし盜賊、打ちつけられし手裏劍に、南蠻秘法の鴆毒あり、これも正しく異國の賊、彼奴等が仕業に疑ひなし。

藥王　さても父上、情なや、今宵に限る死相あり、これぞ親子の、この世の別れ。

賴國　やがて擴む宗門の、門出を祝ふ八の卷。

藥王　我れはこれにて剃髮の、産湯の水を香剃りの

賴國　その剃髮は某が、我が子ながらも妙法を、擴む行者が七字の文。

藥王　エヽ、有り難い。

賴國　知死期近づく某へ、與へよ藥王。

藥王　仰せに任せて、この座にて、初めて七字の御經を、筆を淸めて

ト中文字の筆を取つて、あたりの香爐を出し、筆へ香氣を移す思ひ入れ。賴國は、あたりより、剃刀を取出し、立ちかゝり

賴國　卽身成佛、七字の御德。

藥王　香氣を筆へ。

ト筆を携へ、香包みより香氣の畚を出し、くゆらす。香氣、パッと立つ。これにて遠寄せの頭を打つ。

　　　　兩人、キツとなつて
賴國　香氣につれて聞ゆる貝鉦。
藥王　黃泉流布の、しるしの音樂。
賴國　イヽヤ、正しく鎌倉武士、最前恥辱のその遺趣に
藥王　もしや館を
　　　　ト思ひ入れあつて
賴國　圍みの合圖を氣遣はずとも、急いで用意。
藥王　師の坊ならぬ
賴國　親の剃刀。
藥王　エヽ、有り難い。
　　　　ト兩人、顏見合せ、愁ひのこなし。この時、後より手槍を突き出す。賴國、その槍を捕へ、鐵平を引出す。鐵平、直ぐに賴國へかゝるを、立廻つてキツと引敷き
賴國　さてこそ窺ふ。
鐵平　藥王、われも。

トかゝるを頼國、取つて押へろ。爰にてドンチヤン烈しく、兩人、思ひ入れあつて

頼國　ハテ、小ざかしい。

トきつとなる。この見得、ドン／＼にて道具廻る。

本舞臺、正面一面の網代塀、爰に長勝、大童にてゐるを、捕手四人、四天の形にて槍を持ち、秀連、鬼藤太、素袍の下をからげ、取卷いてゐる。ドン／＼にて道具とまる。

長勝　合點のゆかぬあの貝鉦。寄せ來りしは上使の兩人。當家に對し、なに恨みあつて

秀連　吐かすな、長勝。三國の太夫は、悴藥王丸と、邪法の宗門擴める心は、疑ひもなき謀叛の根ざし

鬼藤　それと見たゆゑ我れ／＼が、當家の奴ばら鏖殺し、根葉を絶して鎌倉へ、この旨言上せんが爲。

長勝　斯く狼藉に及ぶの佞人、石井三郎、爰にあるうちは、追ひ斥ける、はや歸れ。

鬼藤　いはれぬ雜言。者ども、ソレ。

四人　石井三郎、動くな。

長勝　ヤア、小ざかしい蠅蟲めら。うぬら寄つたら、撫切りだぞ。

鬼藤　我れはこれより三國の太夫を、矢襖にて取圍み

秀連　討つて取るは瞬くうち。汝等は石井長勝を、合點か。

四人　心得ました。

長勝　何を小癪な。

兩人　ソレ。

　　トどん〳〵になり、兩人は下座に入る。四天の捕り手、長勝に突いてかゝる。立廻り。これより鳴り物變り、面白きタテよろしくあつて、四人は敵はず、下座へ逃げて入る。長勝、あと追うて行く。太兵衛、捨吉、走り出て來り

捨吉　コレ〳〵、太兵衛さん、こりやア戰とやらが、始まるのか〳〵。

太兵　ナニ、戰ではないが、鎌倉武士が寄せて來た樣子。此お屋敷は、お地頭樣の事なれば、此まゝ見捨てゝ歸れぬが、どうしたらよからう。

　　トわや〳〵云うてゐる。向うバタ〳〵にて、官六、開きし手紙を持ち、走り出て來り

官六　コレ〳〵、太兵衛どん、大事だ〳〵。

捨吉　これサ、お父さん、何をそんなに騷ぎなさる。

太兵　今時、戰のその中へ、交ぜ返しに、何をごたつく。

官六　ごたつくどころか、コレ、この狀は、圓覺寺の役僧から、こなたの所へ來た使ひ。開いて見たら貴樣の息子白菊丸が、天狗に攫はれたといふこの手紙。コレ〳〵、讀んで見さつしやい。

ト出す。太兵衞、取って

太兵　ヤア、拾うて育てた白菊が、行くへなしになつたとは、それは大變々々。斯うしては居られぬ。直ぐに尋ねに行かにやならぬ。

捨吉　そんならお前は、ちつとも早くござりませ。

太兵　こりやァ大變だ〳〵。

官六　早くござれ〳〵。

トどん〳〵にて、せき立て〳〵、兩人、向うへ走り入る。捨吉、殘り

捨吉　ハテ、思ひがけない白菊どのゝ行くへ。それにつけても、此お館、不時の騷動は何事か。何にしても、藥王さまの、お身の上が氣遣ひだ……藥王さま〳〵。

トあたりを尋ねあるく。所へ秀連、出て來り

秀連　ヤイ〳〵、藥王丸々々々と吐かすからは、おのれは在所を知つて居らう。有やうに吐かせ。

捨吉　ナニ吐かせだ。お前に吐かす位なら、わしが尋ねてお供をしますワ。とんだ間抜けな侍ひだ。

秀連　ヤイ、此奴、慮外を吐かすと、ぶッ放すぞ。

捨吉　こなたがぶッ放すうち、わしが何をしてゐませう。わしにも手足があります。

秀連　その舌の根を

ト刀へ手をかける。捨吉、ちよつと留めて見得。これより鳴り物になり、兩人よろしく、をかしみの立廻りあつて、よき所へ下座より長勝、走り出て來り、秀連を支へ、思ひ入れあつて

長勝　爰構はずと其方は、藥王丸の御在所、お尋ね申して、お供いたせ。

捨吉　左樣ござらば私しは

長勝　お行くへ尋ねて

秀連　長勝、覺悟。

ト切りつける。立廻りよろしく、此うち捨吉、花道へ行き

捨吉　然らば直さま

長勝　あと構はずと

捨吉　藥王さま〳〵。

ト呼びながら向うへ走り入る。

秀連　うぬ、長勝。

ト切りつける。立廻り。兩人、見得になり、この道具ぶん廻す。

本舞臺、元の屋體に戻る。爰に賴國、立烏帽子、大紋、白の肌脱ぎ、惣身に矢衾七本立ち、大童の體。捕り手大勢、弓矢を持ち、射かけてゐる見得。ドン〱、早笛にて道具とまる。ト捕り手殘らず、矢種盡きたる體にて、賴國へかゝる。賴國、白刃を振り、皆々を相手に立廻りあつて、捕り手は逃げて走り入る。賴國殘り、思ひ入れあつて

賴國　不意に寄せたる鎌倉武士、これ皆擴む法華經を、妨げんとなす無道の佛敵。かゝる深手の上からは、存命なるうち七字の題目、せめて自ら、あの世へ土產に

トどん〱、誂らへの合ひ方になり、あたりより件の硯箱を引寄せ、中文字の筆を取つて、白の片袖を引切り、この袖へ書かんとする。この時、後より鬼藤太、窺ひ寄つて

鬼藤　邪法に歸依なす

ト賴國に組みつく、立廻りよろしく、鬼藤太を捻ぢつける。この時、下の藪垣を押しわけ、藥王丸、淺黃の帽子、墨衣を手巾にて高くからげ、木蘭の法華の袈裟、その上に市見笠をかざし、草鞋にて出

て、花道の方へ行き、後より捕り手大勢、窺ひ出る。

藥王　三界無庵の身となつて、宗門擴むる大行者、父の最期を其まゝに

賴國　見捨てる智識は卽ち佛勅。それを子に持ち、某は、九族天に

鬼藤　やらぬワ。

ト賴國にかゝる。立廻りあつて

藥王　未來成佛。

鬼藤　おのれ、藥王。

ト賴國が持ちし筆を取つて、藥王丸へ目潰しに打ちつける。藥王丸、中にてこの筆を掴む。賴國、見て

賴國　あの世へ赴く、この親へ。

ト件の片袖を出し、鬼藤太を引敷く。藥王丸、筆を向けて

藥王　法の奇特は眼前に

ト賴國が方を見て、筆にて中へ思ひ入れ。薄ドロ〳〵にて、賴國の持つたる袖へ、七字の題目現はれる。賴國、見て

賴國　ヤヽ、斯く有り難き御經の、左右へ引出す文字の筆勢、

藥王　父の左右へ立つたる矢尖、數も七本七字の題目。最期の御姿、末世に殘す

賴國　年を重ねて髭題目の、嬉しやこれで

捕手　やらぬワ。

トかゝるを、賴國、鬼藤太を當て、藥王丸は珠數にて捕り手を拂ふ。薄ドロ〱にて、皆々、目くるめき、タヂ〱となつて、本舞臺へ來り、立ち身にて苦しむ。

賴國　妙法蓮華の

藥王　花咲く門出。

ト珠數を振る。鬼藤太と捕り手、見事にかへる。木の頭。賴國、ガツクリとなる。藥王丸、この見得、双方よろしく、ひやうし

幕

ト引附けると、ドンチヤンになり、藥王丸、脇目もふらず、悠々と向うへ入る。始終ドン〱にて、幕の引附けより、鐵平戸田平、以前の形にて、幕外へ立廻りながら出て來り、キッと見得になり

鐵平　ヤア、洒落くさい毛二才め。うぬが主人の三國の太夫は、秀連さまの謀計にて、くたばつた上からは、扶持放されの土家來、藥王ぐるめぶッちめるのだ。邪魔せずと、そこ退け。

戸田 ヤア、極惡人の左衛門が、その手下のうんざい餓鬼。この戸田平が腕かぎり、亡君の仇敵、その片割れの、うぬから先へ。

鐵平 何を小癪な。

トこれより鳴り物になり、花々しきタテあつて、トヾ鐵平、敵はず、元の引附けへ逃げて行くを、戸田平、追ひかけ入る。知らせにつき、ドンチャン打上げ、浪の音になり、この幕を引返す。

本舞臺、向う一面の浪幕。日覆より松の吊り枝。爰に太兵衛、縫ひぐるみを持ち、所化二人、引附けられてゐる見得。浪の音、バタ〳〵にて幕明く。

所化 アヽ、コレ〳〵、親仁どん。こりやア、どうするのだ〳〵。

太兵 ヤイ〳〵、づく入めら、大事の〳〵おらが息子、白菊を、どこへやつた。それを吐かせ〳〵。

所一 これサ、親仁どん、無理ばかり云つたものだ。なに愚僧がその先を知るものか。放しなせえ〳〵

太兵 イヽヤ、放さねえ〳〵。知らぬと云へばいゝかと思つて、おれが三國のお屋敷へ、願ひに行つて來るうち、弟子の朋輩のこなた二人に、看病を頼んで置いたに、それを知らぬとは云はせねえ。

所二 サア、親仁どんの頼みだから、いろ〳〵看病してゐるうち、何を思ひ出したか、白菊どのがムツ

ク と起きて

所一　どうするかと思つたら、本堂の屋根へ上がるから、コレ危ない、よさつせえ〳〵と、いくら留めても振り切つて

所二　大屋根の頂上で、手を合して江の島の方を、拜んでゐたつけが、それなりどこへか失くなつたのだ。

所一　日頃學問に達したと、愚僧らを苛めて、高慢してゐたから

所二　大方、鼻高さまに、つまゝれたも知れねえ。

太兵　ヤア〳〵……これサ、その時、こんたは、なぜ抱きとめてはくれねえよ。

所一　サア、抱きとめたくても屋根と下、何をする事も出來ねえわな。

太兵　エヽ、これなア、その時、おれが居たら、今の思ひはあるめえに、いはゞ白菊の敵は、うぬらだ。

所化　ハテ、譯の解らぬ親仁どんだ。どうしてくれう。

太兵　譯は知れた、見す〳〵見ながら淩はせたから、うぬらが敵だ。

ト縫ひぐるみにて打つて行くを

所化　イヽヤ、知らぬ〳〵。

太兵　イヽヤ、敵だ〳〵。

ト追ひ廻す。これにて所化は下座へ逃げて入る。太兵衛、後を追ひかけて入る。浪の音、打ちきる。

直ぐに大薩摩淨瑠璃。

〽山又山を重ねては、雲又これを埋むとかや、それは漢土鐵拐山、これは名におふ金龜山、浪又浪を重ねつる、さう〳〵峨々たる巖上に、夕日まばゆき白虹の、始まり見たり荒磯海。

トこの淨瑠璃にて、チヨンと浪幕を切つて落す。

本舞臺、向う奥深に山幕、左右、岩組の見切り。よき所に誂らへの窟。舞臺前、雨落へ浪板をせりあげ、松柏の吊り枝を八重に下ろし、すべて相州江の島、兒ケ淵の景色よろしく、爰に仙人、三疋の蛙を肩に載せ、岩に腰かけ、異形の杖を突きゐる。下の方、岩角に白菊丸、稚兒の拵らへ、好みの通り髪を亂し、氣を失ひゐる模様よろしく

〽爰にもいつか跡とめて、異る人の岩の上、端居に誰れか遠近の、岩根を床の兒硯、筆に殘すや夢ならん。

トこの浄瑠璃へ鳴り物を入れ、兩人、見得のまゝ、よき所まで押出す。浄瑠璃切れると、直ぐに谺、浪の音にて、仙人、立つて、あたりを眺め、思ひ入れあつて杖を突き、誂らへの岩の上に登つて

仙人　人跡稀れなるこの谷底、我が石床の傍らへ、仙術を以て招きしますら男、とく〳〵心を、附けよ、帝烏樞。

ト薄ドロ〳〵になり、白菊丸、心附き、フツと目を開き、思ひ入れあつて、仙人を見て

白菊　我れ、この程の法問に。藥王丸に後れを取り、その無念、骨髓に徹し、うたゝ病床にありつるにいづくともなく仙人が、我れを招くと思ひしが、夢か現か幻しの、覺むると思へば忽ちに、これ山谷の海峨ない。我れを帝烏樞々々と、耳とゞろかせし御身こそ、いかなる人にてわたらせ給ふぞ。

仙人　ホヽウ、不審な理り。山にあつては岩とも化し、水にあつては自由を働らき、また時の間に虹となり、飛行自在は蝦蟇の仙術。さはさりながら、法にも力にも積み難きは、御身が成長、これまでに、待ちに待つたる甲斐あつて、今の面會、この身の滿足。

白菊　合點のゆかざる異人の詞。見ればその樣、唐土の畫像の形を學び、蝦蟇を脊負ひし御身の姿、さてこそ違はぬ、この山の

仙人　異人ともいへ、我が行法、形は化しても化しやらぬ、我れに同血同性なる、白菊丸に見えん爲。

白菊　心ありげな詞の端々。何ゆゑ御身が、某を

仙人　招ぎ寄せしは、かねてより、御身が望む南蠻の、その宗門こそ我が祖師なり。それゆゑ汝に授けん爲。

白菊　その宗門こそ日頃より、望む心はありながら、これまで便りを得ざりしに、いま計らずも某に

仙人　示すは我れが覺えし仙術、これにて行ひ見せん……幸ひ〳〵。

ト木琴に鞨鼓の入りし合ひ方になり、あたり見廻し、我が座したる岩の角を掴み、掌にて打ち碎き、その缺けを取つて、口に咒文を唱へ、印を結び、思ひ入れ。ドロ〳〵になり、右の石、蛙と化し、鳴り物に合せ、跳るゆゑ、白菊丸、キツと目を附け

白菊　ハテ、非情を以て有情と化し、蝦蟇の異人が詞に應じ、不思議に跳躍なしつるは……ムウ。

ト刀へ手を掛け、右の蛙を切らんとする。ドロ〳〵にて、白菊丸、手許の竦む思ひ入れ。蛙は仙人の手許へ飛び去り、消える。

仙人　ム丶、ハ丶丶、丶……おろかや、これぞいはれぬ一時の戲れ。我が蝦蟇の仙術といへば、三千萬里を胸にさとし、心に欲する事一として、ならざるといふ事なき、稀代の妖術。それゆゑにこそお

ことに授け、本懷を遂げさせんずと、この所へ誘引せしぞ。

白菊　こは忝き異人の厚志。今ぞ思へば一度も、見えぬ我れを初めより、白菊丸と呼ばるゝのみか、これへ導き給ふの不思議。その上、稀代の妖術まで、授け下されんとある尊慮。我れへは如何なる因みあつてか。

仙人　その疑惑、尤も。おことゝ我れとは、同血の奇遇によつて。

白菊　なんと。

ト思ひ入れ。

仙人　我れはこれ、汝が爲には、誠の親ぢやワ。

白菊　エヽ。

ト驚ろく。

仙人　不審な理り。その仔細、これにて具に云ひ聞かさん。

ト誂らへの合ひ方。

我れ、この地を去ること三千里、はるか西に當つて蒙古國の一族、趙良弼といひし者。先年この土へ渡りし砌り、賤の女と契りをこめ、その時儲けしは卽ち汝。母は產後に歿りて、おことを養

育なすうちも、より〳〵謀叛の企ては、彼れを語らひ、これを計るに、半途にして事露顯なす。これといふも、元の起りは、三國の太夫が家に傳はる、雲龍の寶劍、禁庭より預かるところの、月の御旗の威德にて、大望成らず。もし捕はれとなるならば、おことも異族の胤なりと、討たれん事の嘆かはしく、不便ながらも捨て子となし、我れは七里の荒磯へ、捨身なせども魂魄は、この江の島に止まつて、汝が影身に附き添ひて、過去現在の對面なすも、奇遇は盡きぬ、今日只今。

白菊　ムウ。さては、この白菊こそは、御身の胤にてありしよな。尤も、今の養父の物語りに、捨て子なりとは聞きつれども、實父は誰れとも知らざりしが、すりや、誠の父上にてましませしか。

仙人　悴の帝烏樞。

白菊　おなつかしうござりました。

ト兩人よろしくこなしあつて

さるにても、合點のゆかぬは、コレ

ト懷より守り袋を出し

この三ツ鱗は何ゆゑに、添へて捨て給ひしや。

仙人　その仔細、外ならず、汝を捨てしその砌り、同じ捨て子は、北條重時が實子、四十二の二つ子と

あつて、その三ツ鱗を添へ置きしを、我が通力にて奪ひ取り、おことに添へて置きたるなり。

白菊　それにて趣意は解れども、何ゆゑあつて、入れ替へ置かれしぞ。

仙人　ホヽウ、その疑念、實に尤も。我れ、この日本へ渡りしは、異國の宗門の不思議を見せ、人民を惑はし、魔道へ引入れ、折を窺ひ、この日本の重寶、日月二行の錦の御旗、まつた三國家の雲龍の劍、これを奪はんその爲に、一族のうち、寶克といふ者を、東國に入りこませ置きたれば、やがて寶の品々を、奪ひ隱すものならば、雨を封じて旱魃させ、不徳の執權と云ひ觸らさせ

白菊　その虚に乘つて、行法の不思議を見せ、愚昧の輩を宗門に引入れ、この日本を覆へさん、父の御所存でござらうが。

仙人　いかにも。

白菊　さばかり思ひ立ち給はゞ、我れはこれより、父の存念受けついで

仙人　我が蒙古國の物となせよ。

白菊　云ふにや及ぶ。さりながら、何卒父が行ふところの、蝦蟇の妖術、とく／＼身共へ。

仙人　何がさて、時こそ至つて今日の面會、イデ／＼、奇術を授與しくれん。心を責めて、性帝鳥樞。

白菊　心得た。

トこれよりノツトになり、白菊丸、塵手水を使ひ、合掌する。仙人、座したる岩角を打ち碎き、切り火を打ち、印を結ぶ。白菊丸、その通りあるべし。

仙人　南無さつたるまふんだりぎやァ。

白菊　南無さつたるまふんだりぎやァ。

仙人　しゆごせうでん。

白菊　しやごせうでん。

仙人　はらひそ。

白菊　はらひそ。

ト仙人、こなしあつて、印を解くと、手中より煙出て、立ちのぼると、大ドロ〳〵、蛙の聲夥しく、日覆より五色の虹、舞ひ下りて來り、白菊丸の懐へ入る。これにて白菊丸に、妖術が乘り移りし思ひ入れあつて、キツと心附く事。ドロ〳〵打ちあげる。仙人この樣子をトツクリ見て

仙人　コリヤ、悴、今ぞ妖術、心のまゝ、喜べ〳〵。

白菊　すりや、我れに妖術移りしとや。エヽ、忝い。

ト此うち下手の松の樹へ、戸田平、頰かむりして窺ひゐる。この影、流れへ寄るを見て

仙人　ハテ、峰に猿の、木傳ふは。

白菊　ドレ。

　　　ト同じく浪間を見て、「ムウ」と手裏剣を打たんとするな

仙人　ヤレ待て、悴、玆ぞ授かる奇術の試み。

白菊　ムウ。

　　　ト思ひ入れあつて、印を結び

　南無さつたるま、ふんだりぎやア。しゆごせうでん、はらひそ〳〵。

　　ト大ドロ〳〵になり、戸田平、目くるめいて梢より目くるめいて落ち、白菊丸へ切つてかかり、おのれとタヂ〳〵となり、苦しみながら、我が腹へ我が手に刀を突き立てる。白菊丸、指にて拂ふと、戸田平、見事にかへり、首は板がへしにて前に飛び出る。白菊丸、見て

　ハヽ、有り難や、かゝる奇術を受けつぐ上は、この日本に恐るゝ者なし。これよりしては三國の藥王丸を屈服させ、この三ツ鱗を證據となし、北條重時が胤なりと、鎌倉へ近寄つて、一時に日本を覆へし、蒙古の氏族の喜悦の眉、開くる時節到りしか。ムヽ、ハヽヽヽヽヽヽ。

仙人　アラ頼もしゝ〳〵。さりながら、この術を行ふ者の、たゞ恐るべきは、雲龍の劍に日月の旗、ま

つた凝着の相ある婦人の生血、これをその身に、いさゝかも觸るゝ時には、忽ち妖術消ゆると、心に記し、あなかしこ、近寄る事なかれ。

白菊　すりや、雲龍の寶劍、日月の旗。凝着の相ある女の血汐を、この身に近附くその時は、妖術忽ち挫くるとな。

仙人　いかにも。

白菊　恐るべし〳〵。しめしの一條、心に忘れず、父が年來思し立ちの存念、この白菊が法力にて

仙人　本懷させよ、忰帝烏樞。

白菊　氣遣ひあられな、父上樣。

仙人　アラ、喜ばしや、嬉しやなア。この上は、道しるべせん。

ト目を閉ぢ、印を結ぶ。薄ドロ〳〵にて、岩間より大蛙、ノタリ〳〵と白菊丸の前へ搖ぎ出る。白菊丸、見て

白菊　道のしるべとありしゆゑ、飛行の形と思ひしに、一足足らぬ遲足の蛙。ナニこれしきを、頼みにせんや。

仙人　ハヽ、おろかなり帝烏樞、父が姿はこの淵に、朽ちて末世に蝦蟇石と呼ばるゝとも、魂ひはおこ

とに附きそふ、そのしるし、目前見するは戯滿鳥。

白菊　父の仰せに候へども、信じ難き疑念の一つ。戯滿鳥とは、いづれにありや。

仙人　それぞ卽ち、この妖術。

ト印を結ぶ。蛙、化して戯滿鳥となり、空へ飛びあがり、舞うてゐる。白菊丸、驚ろく。この時、仙人の體、蝦蟇石となる。白菊丸、何心なく仙人を見る。石となりしゆゑ、恟りせし思ひ入れ。チヨンと木の頭。思ひ入れあつて、戯滿鳥を見上げる。よろしく、ひやうし　幕

第一番目　五建目

豆州伊東土牢の場
行合谷畚渡しの場

役名――山伏、肥前坊。阿佛坊 實ハ 一心太兵衞。本間六郎左衞門俊勝。平の左衞門秀連。所化妙銀。同、東林。同、梅林。同、經林。長五郎女房、お勘。法華長五郎 實ハ 三國の嫡子吉祥丸。

本舞臺、三間の間、左右とも土突りの岩組み、この中に牢格子の入り口、錠を卸し、下の方に突棒、刺股、もぢりなぞを飾り、すべて豆州伊東、土の牢糺明の體。爰に太兵衞、頭を剃り、白髮の伸びたる

坊主、鼠の單衣、脚絆手甲、旅修行、千ヶ寺の拵らへにて繩にかゝり、これを非人音松、割り竹を持ち、責めてゐる。上の方に秀連、絆天。股引にて扣へ、よき所に千ヶ寺の葛籠を置き、拷問の體。時の太鼓、捨て鐘にて幕明く。

音松　白狀いたせ。キリ〳〵吐かせ。

ト打ち据ゑる。太兵衞、苦しき思ひ入れにて

太兵　ア、モシ〳〵、どう致しまして私しは、左樣な者ぢやござりませぬ。阿佛坊と申しまする、新米道心。片瀨の在所に、悴が二人ござりましたが、兄めは十歲ばかりの時、行くへ知れず。弟は天狗樣に淩はれまする。母親は疾に病死。それゆゑに、渡世の道にと、坊主になりました私し。どうぞ御免なされて下さりませ。

秀連　吐かすな、此奴。おのれ先年、三國の館に於て、禁庭より預かりの、月の御旗、雲龍の寶劍、その二品を盜み取つたに違ひねえ。有やうに吐かせ。よし、盜まぬに致しても、この程、日蓮といふ捨て坊主、法華經とやらを擴めんと、異國で行ふ邪法を以て、人を惑はすその科にて、鎌倉の土の牢へぶち込み、この國にても、その宗門に心を寄せる坊主どもは、一々にこの土牢へぶち込み置くワ。

音松　左樣でござります。この道心もその如く、法華の法に騙されて、長房持つて自我偈とやら、お上を恐れぬ乞食坊主め、大方見えぬその寶も、日蓮に賴まれて、盜んだであらう。サア、キリ〳〵白狀してしまへ。

太兵　ハイ〳〵、成る程、お上人樣へ歸依いたしましたが、三國のお屋敷で、なんで盜みを

秀蓮　まだ爭ふか。なんぼ陳じても、コレ、此やうな葛籠を脊負うて、まごつき歩くも、日蓮に賴まれて、勸めに廻る相摺り坊主め。何にしろ、この中を改めて。

ト蓋を明ける。中より袈裟衣、頭巾出る。秀蓮、見て

正しく袈裟も、法華で用ゆる品と見える。さすれば日蓮が荷擔人に違ひはない。殊さら三國の屋敷へ、盜人に入つた時に、塀外に取落したこの鋸。家尻を切つた證據の道具。

ト前幕の鋸を出して見せる。

太兵　イエ〳〵、頭を丸めるその心で、どうして家尻を切りませうや。そりや人違ひでござりまする。

音松　ヤイ〳〵、坊主め、いゝ加減に吐かしてしまへ。白狀せぬと、又ぞろ斯うして、カウ〳〵〳〵

ト手荒く打つ。太兵衞、苦しみ、氣を失ふ。

エヽ、脆い奴だ。ごねはしねえか。ドリヤ、氣附けを飲まして

ト立ちかゝり、太兵衞に氣附けを含ませ、水を飲ませて介抱する。時の太鼓になり、向うより俊勝、野袴、ぶッ裂き羽織、大小。肥前坊、さんすゐなる法印の拵らへ。お仕着と見える單物にて、繩にかかり、捕り手二人、これを引立て出て、直ぐに本舞臺へ來る。

秀連　これは〱、本間どのには、お役目御苦勞。

俊勝　左やう仰せらるゝは、平の左衞門どの。拙者も囚人、引かせ參つた。家來ども、引据ゑい。

捕手　ハアヽ……下に居らう。

ト よき所へ肥前坊を引据ゑる。秀連、何心なく見て

秀連　ヤ、われはいつぞや

肥前　ほんに、お前は、爰にござつたか。こいつは有り難い。知つた顏だな〱。

秀連　アヽ、コレ〱、ナニおのれらを存じて居らう。知らぬぞ〱。滅多な事を申しあげるな……イヤナニ、本間どの、して、召連れられしその者はな。

俊勝　この者は、肥前坊と申す法印。只いま某、この所へ參る道にて、往來の者と喧嘩の樣子。惡態交り、口走りまするは、先立つて甲斐の國にて、口論の上、人を殺し、それより直ぐに國を立退きし者と、おのれが惡事を自身の白狀。酒が云はする事ならんと、存じたなれど、よく〱考へ見

ますると ころ、八ヶ年以前、甲州石和の驛に於て、喧嘩の上にて人を殺め、逃げ失せし者ござれば、必定彼奴に極まりまする。それゆゑ召捕り、引かせてござる。

肥前　アヽ、モシ〳〵、只今申しましたは、ありやア全く、酒が云はせる野暮事。頭を丸めた私し、どうして左樣な。モシ〳〵、ありやア誠に、間違ひでござります。

俊勝　イヤ〳〵、今さら其方、陳じるとも、いはゞ自分で申したぢやないか。殊に割符の合つたる事ども。詮議の上にて、見遁がしても遣はさうが、それまでは獄屋へ入れ置く。

肥前　これは迷惑。併し、思へば、昔の事まで、いらざる事を……誠に口は禍ひの門、鼻は禍ひの屋根だわえ。

俊勝　して、其許の召捕られし老人は、未だ白状は

秀連　致しませぬ。しぶとい死盛りめ。この上は、火水の拷問。ほざかしてお目にかけませう。

俊勝　併し、見まするところ、老人と申し、よもや彼れめが三國の家へ。

秀連　イヤ〳〵、その疑ひ、尤もでござれども、この坊主めを盗人といふ、キツとした證據は、即ち證據の莨入れでござる。

ト腰提げの莨入れを出す。

俊勝　して、その品が、證據とは。

秀連　御覽なされい。この金物は、橘の目貫、それを直して腰提げの、金具に打つたが不審の一つ。

俊勝　アノ、それゆゑに。

秀連　いつぞや三國の館にて、寶紛失の砌り、門先の見越しの松に、コレ

ト前幕の守り袋を出し

この中に入れてあつたも、同じ形の目貫の橘、その片割れを腰提げの、金具に直したこの坊主。

それゆゑ身共が召捕り參つた。

ト此せりふのうち、太兵衛、心附きし體にて、聞き耳立てる思ひ入れあつて

太兵　エヽ、何と云はつしやりまする。わしが腰提げの金物と、同じ片しの目貫の橘、守に入れて見越しの松、かゝりや繫がる、もしや連れ子の

ト愓りする。俊勝、思ひ入れあつて

俊勝　コリヤ、阿彿とやら。あの目貫、覺えがあるか。

太兵　ハイ………イヤ、似寄りの品ゆゑ

ト思ひ入れ。俊勝、こなしあつて

俊勝　左衛門どの、その守の目貫は、何者の手より、其許様には。
秀連　これへ引かれた法印が、身共の方へ。
　　　トうか〳〵と云ふ。俊勝、思ひ入れ。
肥前　成る程、それよ。見越しの松にかゝつたを、あの鋸で思はずも、叩き落して、それから廻つて
俊勝　さすれば、おのれが、その夜の盗人。
肥前　エ、どうしてわしが
俊勝　でも、よく様子を覚えた其方。
肥前　イヽエ、そんなら覚え違ひか。
俊勝　なにか一圓、分明ならぬ詞の端々。さはさりながら、その守が出る上は、この老人、盗人ならぬ、
　　　その身の潔白。
秀連　そりや又なんで。
俊勝　御覧なされい。守の中にはこの臍の緒。引合せ見る時は、この修行者とは、生れし年月、抜群の
　　　相違。さすれば、この者が、いよ〳〵盗まぬ慥かな證據。譯なき詮議しやうより、守の持ち主、
　　　外を御詮議なさるゝが、ようございませうと存ずる。

秀連　でも、盗人の割符の目貫。
俊勝　左様ではござれども、生れし年月、引合さば、この老人は、やう〳〵に、年も廿か二十二の、色氣のござる眞盛り。よもやさうではござるまい。
トこれにて敵役、顔見合せ、思ひ入れあつて
秀連　イカサマ、それには老けて見えます。
トこの時、太兵衞、思ひ入れあつて
太兵　イヤ、お役人様、その二品は私しが、盗みましたに違ひございません。
皆々　ヤ、なんと。
太兵　今まで隱しは隱しましたが、望みも無い長生きの私し。それゆゑ只今、自身の白狀。
肥前　それ〳〵、云ふ事があるなら、早く云ふが得だ。成る程、貴樣が盜んだであらう……モシ、あなた方、この坊主が、こりやァ盗みましたに違ひございますまい。
俊勝　默り居らう。四人の身を以て、いらざる口出し、扣へてゐろ……コリヤ、老人。よもや其方が
太兵　盗みました。ハイ、盗みは盗みましたが、その二品は
秀連　賣り拂うたか〳〵。さうか〳〵。さうであらうな。

太兵　いかにも、それは賣りました。それゆゑ先の當途もなく、只今にては

俊勝　ハテ、是非に及ばぬ。盗賊なれば天下の掟、殊には大罪。重時公の御病氣にて、近々殺生禁斷のお觸れの出るその前に、獄屋に入らば

秀連　はや〱首を刎ねるのが、大罪人のよき見せしめ。鎌倉にては日蓮坊、今宵の七ツに敷皮の、その刎ね首は龍の口。

太兵　そんなら、あなたも、今宵の御死罪。佛の再來、大行者、それさへ遁がれぬその御難儀。我れ我れしきはあるべき筈。祖師のお供をするが仕合せ。

俊勝　詮議の濟まぬこの法印、拷問いたせ。

秀連　イヤ、この者は左衛門が、預かりまして、きつと拷問。

俊勝　然らば貴殿へ。

秀連　受取りました。

俊勝　この老人は某が

秀連　すりや、囚人を交易して

兩人　互ひに後刻。

捕手 立ちませい。

ト時の太鼓になり、捕り手、太兵衛の縄を扣へ、俊勝附いて下座へ入る。跡、山颪し、捨て鐘。

秀連 これよりは、本間が手より受取る囚人。

音松 きつと拷問なされたら、定めし素敵に舊惡が

肥前 ナニ舊惡だ。こいつは大笑ひだ。よく聞かつしやい。この肥前坊は、學林といつた時分、こなた衆に頼まれて、盗み取つた月の旗。その時に、三國の太夫が支へるゆゑ、打ちかけた小柄の手裏劍。毒を塗りつけ置いたから、僅かな疵でも毒氣が廻り、くたばつた。それ程な働らきをさせて置いて、その科はおれ一人。月の旗まで取上げ婆ア。褒美もくれぬ左衞門さま。わしを拷問すりやア、こなさんの舊惡を白狀するよ。サア、その氣で責めやれ。拷問しやれ。なんの事だ、かざツぴいた

ト これにて兩人、アブ／＼して

音松 アヽ、コレ／＼、兄イ、てまへ、そりやアあんまり強情だぞよ。

肥前 何が強情だ／＼。

音松 ハテ、てまへの爲だから、強情は、よしにしやれ／＼。

肥前　なんで、おれが爲だから强情を
音松　ハテ、その爲强情左樣よ。
肥前　エヽ、おきやアがれ。おれを責めると、何奴も此奴も抱いて入るぞ。
秀連　コレ〳〵、それを云はれて堪るものか。よし又、白狀するとも、その事ばかりは、靜かに白狀してくれろ。賴む〳〵。
肥前　否だ〳〵。大きな聲で白狀するぞ。拷問しろ〳〵。
秀連　これサ〳〵、靜かに云やれサ。コレ、斯うしよう。爰に、おれが賴んで盜ませた、月の旗があるワ。これを、褒美の濟むまで渡して置くから、何分、密かに賴む〳〵。
ト懷中より件の旗を出す。肥前坊、見て
肥前　そんなら、わしが盜んで渡した旗を、又わしに預けるから、褒美の濟むまで、靜かにしろと云ふ事か。
秀連　その通り〳〵。
肥前　そんならいゝワ。不請だが、さうもしようが、その代り、ちよつと繩を解いて下さい。
秀連　その儀は、どうも

ト もだ〳〵する。

肥前 解けずばいゝワ。大きな聲で白狀するワ。白狀するぞ〳〵

秀連 これサ〳〵、拷問の役人が、囚人に白狀されて堪るものか。

音松 サア〳〵、非人のおれが仲人に入るから、おれに免じて、する白狀を、しねえでも、いゝぢやねえか。白狀は、おれが預かつたよ〳〵。

肥前 そんならてめえ、白狀を預かつたか、

音松 預かつたよ〳〵。

肥前 さういふ事なら得心しようが、ちよつと解いてくれろ〳〵。

音松 よし〳〵、呑みこんだよ。

ト 肥前坊の繩を解く。爰にて兩手を伸し、思ひ入れあつて

肥前 ヤレ、手が痺れた………サ、約束の

ト 手を出す。

秀連 ソレ、渡すワ。

ト 旗を渡す。

肥前　また元々へ返るやつサ……モシ、左衛門さま、わしやア逃げてもいゝぢやアねえか。

秀連　サア、身共はそれでもよいが、逃がしては、預けて行つた本間へ立たぬから、もう少し囚人になつて居てくりやれ。

肥前　エヽ、囚人も凄まじい。誰れが囚人にしたのだ。

秀連　さうきめられては、一言も無いが、きつと褒美は遣はすほどに、それまでの卽托は、その月の旗

晋松　これから、てまへを助ける算段。それも大概……コレ、この鋸を、內證でわれに貸してやるほどに、これにて牢を

ト件の鋸を渡す。

肥前　アヽ、そんならこれで、ゴリ〳〵やれとか。

晋松　靜かに〳〵。

肥前　して、こなさんが盜んだ寶劍、ありやアどうした。

秀連　人目を憚かり、密かにさる所へ、隱して置いたワ。

肥前　ムウ、そんなら褒美をくれるまで、牢に入つて待つてゐる。あんまり伸びると、白狀するによ。

晋松　アヽコレ、白狀は仲人任せに。

秀連　必らず物事、密かに〳〵。

肥前　ドリヤ、新入りと出かけようか。

ト三人よろしく見得。時の太鼓になり、この道具ぶん廻す。

本舞臺、牢の内を見せたる道具。中程より時の太鼓へ甚句をかぶせし鳴り物。爰に長五郎、紺の廣袖布子、下に剝身絞りの浴衣、八反の帶を締め、眞中の小高き所に上がり、經林坊、鼠の單物、經宗の所化にて、長五郎の肩を揉んでゐる。梅林、同じく所化にて甚句を踊りゐる。その外、妙銀、東林、いづれも經宗の僧にて、月代の伸びし鬘、鼠單物の形にて、鉢や丼を叩き、大騒ぎの體。題目を音頭のやうに唄ひ、踊つてゐる。この見得にて、道具とまる。

梅林　サツサ押せ〳〵出雲崎までも。

ト甚句の三味線にて踊り、一くさりあつて納まる。

妙銀　コレ〳〵、いつそお題目音頭はどうだ。

經林　そいつはよからう。宗門の擴まるやう、題目踊りがいゝぜ。

東林　經林坊は音頭を取るがいゝ。

經林　それは迷惑。

梅林　サア〱、題目々々。

經林　南無妙法蓮華。

皆々　法蓮華經と唱へましよ。

經林　サツサ法蓮華經。

皆々　オヽサテ合點ぢや。

ト踊り三味線になり、皆々〱、無性に踊る。

長五　コレ〱、この坊さん達は、イケ騒々しい。どうしたものだ。

トこれにて皆々〱、下にゐる。

貴樣達は、在家ではなし、日蓮宗に歸依した出家、その坊樣の身で、牢へ入るさへあるに、踊り狂つて堪るものか。

梅林　左やう〱、思うて見れば、お頭の云はつしやる通り、愚僧なぞも、法華經に歸依せし科にて、この土の牢へ打込まれて、糺明いたすが、師の坊日蓮上人さまも鎌倉にて、土の牢においでとの事。

妙銀　それから見れば愚僧どもは、塵芥も同然、命は高祖へ奉り

經林　殊に鎌倉にては、重時さまは御病氣。意地惡の東條左衛門どのは、法華の僧を一々捕へて

東林　この伊豆の目代、伊東さまへお預けで、土の牢とは情ない。

皆々　イヤモウ、迂濶に出家にもなられぬわいの。

長五　さうサ、第一、法華といふ事が、東條どのは嫌ひかして、日蓮さまを土の牢。その弟子のこなた衆も、この伊東の土の牢。わしも日蓮宗の信者だから、異名に取つた法華長五郎。併し、商賣は盗人。この頃爰へ捕へられ、この牢内の囚人坊主の仕置をさせるとの事。俗といつてはわし一人。今日は實の阿母の命日ゆゑ、六ツから五ツまでは騷ぎ次第と、お許しを願つたが、今の踊りは、あんまり騷がしかつた。

梅林　それ／＼、法華贔屓のお頭ゆゑ、出家ども、

皆々　仕合せでござるて。

長五　さうサ、なんでもその時々に、流行り物を信心せぬは、大べら坊だ。

妙銀　左やう／＼、此くだけは、どうならうな。

皆々　なぜでござるな。

長五　ハテ、法華明者福不可量といふ地口サ。

皆々　これは好い見德ぢや。ハヽヽヽ。

　　ト此の時、下の方より以前の音松、切り溜を持つて出て來り

音松　コレ〳〵、頭。約束の物が出來たから持つて來たよ。

長五　そりやアお世話……こりやァ阿母の命日の　志し。この牡丹餅は、牢內の坊さん達へ……モ

　　シモシ、よろしう回向して下さりまし。

　　ト切り溜を渡す。梅林、取つて蓋を明け

梅林　イヤア、これは胡麻の牡丹餅……いづれも、胡麻の餅でござるワ。

皆々　それはお志し。南無妙法蓮華經々々々々々々々。

　　ト奪ひ合つて食ふ。下の方より股立ちの侍ひ、肥前坊を連れて來る。音松、見て

音松　先刻云ひ渡しのあつた、新入りが來た。ドリヤ、爰を明けて

　　ト入り口の錠を明けて、肥前坊を中へ入れる。

肥前　なんだ、こいつは、べら坊に暗い。

　　ト立つてゐる。

侍ひ　コレ、先刻入つた修行者坊主はどうした。
長五　あの囚人は老人だけ、疲れたかして、他愛なく寐てゐるね。
音松　先刻の千ケ寺參りか。その筈の事だ。コレ、頭、新入りは肥前坊といふ者だ。賴みます。
長五　心得ました。

ト時の鐘になり、音松と侍ひは下の方へ入る。長五郎、窺ひ見て

コレ、新入りの肥前坊とやら、初めてか。
肥前　知れた事よ。なんの用で、そんなに來るものだ。
長五　コレ、浮世の格とは違つて、この獄屋には、それ〴〵の取極めがあるよ。して、坊主は何宗だ。

ト此うち皆々囁き合ひ、てんでに短かき棒なぞを持ち、扣へる。

肥前　おれか。おらア法印だ。御法度の法華宗ぢやアねえよ。
皆々　ナニ法華でない。此奴が

トばら〳〵とかゝり、肥前坊を矢庭に打ちのめし、皆々、肥前坊の上へ上がり

梅林　コレ、よく聞けよ。この獄屋はナ、法華宗ばかり入る土の牢、他宗の身でなぜ來た。あの世では法華宗を譏つたでもあらうが、爰ではさうはならぬぞ。

皆々　法華にならぬと、ぶち殺すぞ。

肥前　ア、、モシ〳〵、法華でござります。

皆々　そんなら免してやらうが、六字はならぬぞ。

肥前　アイ〳〵。

ト皆々これにて肥前坊をゆるめろ。長五郎、差寄つて

長五　コレ、新入りの、こなたは、どこの者だ。

肥前　わしは肥前の者サ。

長五　そいつは唐人の胤だも知れねえ。

肥前　エ。

ト驚ろく思ひ入れ。

梅林　サア〳〵、新入り、頭の慰みに

皆々　なんぞ藝をしろ〳〵。

肥前　ナニ藝だ。わしは藝は無え。

皆々　無くては濟まぬワ。藝をしねえと、只は置かねえぞ。

ト立ちかゝろ。肥前坊、思ひ入れあつて

肥前　アヽ、するよ〳〵。

皆々　なんぞしろ〳〵。

肥前　そんなら聲色を使はう。

皆々　それはよからう。始めろ〳〵。

トこれにて肥前坊、聲色を使ふ事。

イヨ、成田屋ア。

ト褒める。これにて五ツの鐘鳴る。

長五　サア〳〵、五ツだ〳〵。みんな座に附け〳〵。

トこれにて皆々、捨ぜりふにて、上の方の潜りの内へ入る。肥前坊も一緒に入る。長五郎、内より右の潜りの錠をおろす事あつて

先づ、これで役も濟んだ。

ト思ひ入れ。凄き合ひ方になり、長五郎、寝支度をする。この時、後に寝てゐたる太兵衛、目を覺まし、そろ〳〵と出て來る。長五郎、透かし見て

アヽ、騒がしくつて寐られぬのか。

太兵　ハイ、左様でもございませぬが、今宵の八ツには、首の落ちまする私し。せめて生きてゐるうちお題目を唱へませうと存じまして。

長五　老人の、さうでもあらうが、併し、こなたも年甲斐もない、盗みをするとは、大方、主の爲とか子の爲とか、何か譯が無くては、しもしまいが、そんな筋合ひを牢の中で、取始末をするがわしの役だ。以前は盗みもしたわしが、日蓮さまの有り難い、御說法が身に染みて、今ぢやア眞面目な身ながらも、舊惡ゆゑにこの牢舍。こなたも云ひ置く事があらば、何かと遠慮なしに

ト太兵衛、この詞を聞き、思ひ入れあつて

太兵　有り難うございます。これが誠に地獄で佛。そのお心を聞きまして、申し置きまするは、お頭樣これでござりまする。

ト合ひ方になり、懷中を搜り、白紺を出し

暗うて黑白は分らねど、これは白紺でござります。まこと私しは、盗人ではござりませぬ。阿佛坊とは、髮を切つてからの法名。以前は相州片瀨にて、一心太兵衛と申す者。私しは年寄つて、若い後添ひを持ちましたが、その女が連れ子の悴を、長五郎と申して、氏は故ある武士の胤。ど

ういふ事か十歳の年、家出いたして行くへなう。その倅が持つて駈落ちしたは、橘の片しの目貫それは實の親の形見ぞと、嚊めが話し。又この白絹には、氏素性も書いてあれど、只では見えぬ文字の様子。どうか讀める仕様もござりませうが、わしどもには、その智慧はござりませねど、嚊めは我が子の家出を苦に病み、たうとう往生。又、わしが拾つた捨て子は、弟にして、鎌倉の圓覺寺へ、稚兒に遣はし置きましたが、これも生死が知れませぬ。生さぬながらも二人の子供に捨てられた親仁ゆゑ、頭を丸めて千ケ寺參り。この伊豆へ參りましたを、わしが腰に提げてゐる貰入れにも、橘の片しの目貫を、金物に打つてあつたのが、目にとまつて、平の左衛門といふ侍ひが召捕つて、三國の屋敷で紛失の、寶の盗人はわしなりと、俄の拷問。それと申すが、その場所に、一對揃ふ目貫の橘、落ちてあつたがこの身の災難。さすれば家出の倅めが、三國の屋敷へ入つた盗人。それをあらはに云ふ時は、我が身の明りは立つにもせよ、倅が尋ねられうかと、そこへ心が附いたゆゑ、この身に引受け、盗みもせいで死罪を願ふは、子が可愛さでござります。お頭様、どうで一度はその倅も、獄屋へ來るでござりませう。逢はつしやつたら、この様子、お話しなされて、この白絹、倅に渡して下さりませ。

ト此うち長五郎、さては義理ある親と思へども、暗がりの思ひ入れよろしくあつて

長五　そんなら、こなたが……サ、その連れ子の悪者を、憎いと思はず、それ程のいつくしみ。長五郎とやらいふお前の………イヤ、こなたの悴が聞いたなら、喜びませう、嬉しからう。喜ばいでは天道の、罰の當るは目のあたり。赤の他人のわしさへも、涙がこぼれまして

トいろ〳〵親の顏を見て思ひ入れ。

太兵　忝うござります。今のお前のお詞で、尋ぬる悴に逢うたる心。どうぞ悴にお逢ひなされたら、怪我過ちの無いやうに、この白絹へ七字の題目、日蓮さまの御正筆を、お願ひ申せと、仰しやつて下さりませ。

長五　心得ました。今にも逢うたら、こなたの存念、キッと話して、この白絹を屆けませう。アヽ、思へば〳〵、子ゆゑの闇の獄舍のうち。

太兵　弟が事は忘れても、忘られぬは兄めが事。

長五　その長五郎も眼前に。

太兵　エ。

長五　眼前盜みしその科を

太兵　この身に引受け、潔う

長五　その天罰の報ひ來て。

太兵　なんの報はう。可愛い悴。

長五　そんなら不便と

太兵　思ひまするわいの。

ト泣き落す。長五郎、白絹を持ち、太兵衞が方へ向ひ、手を合せて思ひ入れ。この見得、山颪し、八ツの鐘にて、道具廻る。

本舞臺、元の土牢の前面になる。爰に秀連、俊勝、捕り手の侍ひ、音松、扣へゐる體。時の太鼓にて道具納まる。

ト俊勝、獄屋に向ひ

俊勝　三年以前、安房の國三國家にて、二品の寶を奪ひし盜賊、漁師一心太兵衞こと、當時阿佛坊、入牢申しつけしところ

秀連　科極まれば、引出だせ。

ト矢張り時の太鼓にて、牢の中より長五郎、太兵衞が手を引き、出て來り、よき所に住ふ。

太兵　お召しなされし阿佛坊、三國の家の寶の盜賊

ト云はうとする。

長五　アイヤ、その盜賊は、即ち法華長五郎、私しでござりまする。

太兵　ヤヽヽ、長五郎とは……コレ、なんでこなたが

長五　ハテサテ、盜人は私し……ハイ、私しでござります。

秀連　そんなら阿佛と存じの外、その盜人は

俊勝　其方とは。

太兵　モシ〳〵、お頭樣、その科人は即ち私し。それを差措き、こなさんが、殊に悴と同じ名の

長五　こなたの悴と同じ名も、あるは世界にまゝある事。また落したるその證據、それも盜みしその品を、落したゆゑに、こなたの難儀。子でもなければ親でもなし、それゆゑわしが名乘つて出る。こゝ事云はずと、阿佛とやら、口をつぐんで、扣へてござれ。

ト思ひ入れ。太兵衞、さてはト思ひ入れ。

俊勝　して又、その品、其方には

長五　賣りました。古鐵買ひに道端で、賣つたる上は、その行くへ

秀連　自身の白狀。この上は

ト此うち、よき時分より、上の方の牢の内より、肥前坊、件の鋸にて、密かに格子を引いて居たりしが、よき程に引切り、ソツと出て、件の千ヶ寺葛籠を脊負ひ、後をソロ〳〵と、暗きを幸ひ、下の方へ來る。太兵衞、思ひ入れあつて

太兵　合點のゆかぬその詞。暗うて顏は見えねども

秀連　名乘つて出たる上からは、長五郎に繩を打て。

捕手　捕つた。

ト長五郎に繩をかける。

長五　どうでしまひは、この姿だ。コレ、貴樣はおれが懷の、白絹を出して、繩へ卷いて下さい。

音松　ナニ、これをか。

ト懷より白絹を引出し、長五郎が繩目へ卷きつける。此うち肥前坊は花道へ行く。太兵衞、思ひ入れあつて

太兵　暗うて見えねども、白絹とは

俊勝　何か樣子も有明の

秀連　しがを隠せし暗がりの

長五　照らすは法の

俊勝　用意の高張り。

ト内にて

大勢　ハア丶。

ト舞臺上下へ、子持筋の高張りを二挺、手都合よく差出す。これにて太兵衛、長五郎の顔を見て

太兵　ヤ丶、わりや幼な顔覺えある、家出なしたる

長五　アモシ

ト思ひ入れ。太兵衛、長五郎の側へ駈けよるを

音松　寄るな。

ト突き飛ばす。太兵衛、倒れる。長五郎「チエ丶」とこなし。肥前坊。花道にて頰かむりをする。これをチヨンと木の頭、長五郎、顔を外ける。これをキザミに、双方よろしく、ひやうし　幕

ト幕の外、時の鐘にて、肥前坊、向うへ抜き足して入る。時の鐘のツナギにて、直ぐに引返す。

本舞臺、一面の黒幕。竹矢來、三ツ鱗の紋附きし白幕を張り、高張り提灯を照らし、前通り、浪板。上の方、松の大樹。日覆より吊り枝。すべて伊豆の國、伊東のあたり。眞中に丸き藁細工の敷物。その上に長五郎、淺黄の形にて引据ゑられ、上の方に秀連、床几にかゝりゐる。音松、捕り繩を扣へ、捕り手四人、黒四天にて、十手を持ち、前後に扣へゐる。浪の音にて幕明く。

秀連　科極まりし寶の盜賊、長五郎が自身の白狀。云ひ置く事もあるなれば

長五　なにサ、この期に及んで、そんな未練のあるのではない。モシ、旦那、スッパリと遊ばされまし。

秀連　いゝ覺悟。この平の左衞門が、刀の錆に

トすらりと拔き、後へ廻り

覺悟はよいか。

長五　よろしうございます。

秀連　念佛申せ。

長五　エヽ、宗旨が違ひました。

ト思ひ入れ。秀連、振りあげる。向うバタ〳〵になり、太兵衞、こけつ轉びつ走り出て、長五郎に近寄るを、四人、支へて

捕手　狼藉者、近寄るな〳〵。

ト引きつける。太兵衛、思ひ入れあつて

太兵　モシ〳〵、その者は私しの倅でござります。盗人ではござりませぬ。

長五　アヽコレ、親でもなくて倅呼ばり。こなたは何の無駄事を

太兵　コレ、聞えぬぞよ、長五郎。この親は、われゆゑに、さまよひ歩き、その上に、命も子ゆゑに惜しまぬは、コレ、われが可愛いばつかりぢや。それに引かへ、年寄つた親を残して、若い身空で死なうとは、そりや聞えぬ。モシ、お役人様、わしを殺して、この者を、お助けなされて下さりませ。

ト寄らうとするを

捕手　動くな。

ト引きつける。

秀連　ヤイ〳〵、科極まつた長五郎を、又ぞろおのれが助けようとは、大だはけめが。

太兵　イエ〳〵、どうぞ是非ともこの親を

長五　モシ〳〵、さうお前が云はるゝなら、同じ名の長五郎、お前の子になさるもよいが、命ばかりの

太兵　望みでない。これまで爲せる罪科にて、首の細つたわしだもの、今死なゝいでも、どうで刃に

長五　サヽ、そこをどうぞ助けて

太兵　助けるならば法華經の、功力であの世を

長五　ヤ。

太兵　助けて下さりませ。

秀連　そんならどうでも……ハアヽ。

ト泣き落す。秀連、嘲笑ひ

太兵　暫時の妨げ。一刀に

ト刀を構へる。この前より雷、少しづゝ鳴る。

秀連　イヽヤ、忰は

捕手　首は眼前。

ト振りあげる。雷鳴る。太兵衛、駈けよつて、秀連の刀を奪ひ取り、長五郎の繩を切る。この時、件の白絹、落ちる。皆々、見て

狼藉者。

トかゝる。この時、大雷にて、「ワツ」と云うて耳を押へて倒れる。音松、太兵衛を引きつける。太兵衛、叶はじと、その刀に白絹を巻き、腹へ突き立てる。この血汐、前の浪間へ入りし體にて、浪板、仕掛けにて血流れる。これにて雷、嚴しく、後は稲妻、雨の音。浪間より光明輝やく。ドロドロにて、海中より血汐の穢れにて、七字の題目現はれる。早めの合ひ方。件の白絹、血汐かゝりて、系圖、鮮やかに見える仕掛け。秀連、太兵衛へかゝるを、長五郎、引きつけ、光に目を附け、キツと見得。

長五 アヽラ、怪しや。親人覺悟の生害に、あばきし血汐の海中へ、入ると等しく浪間の光。七字の題目あり〱と、浮ませ給ふは、アラ〱〱〱、有り難き御經の御利益。

太兵 白地の絹に血汐の滴り。それにてアリ〱〱文字の筆法。コレ

ト長五郎に差出して見せる。

長五 生れし素性は房州小湊、三國の太夫の外戚腹、誕生なしたる、腹は變れど三國の總領、即ち藥王丸が兄にして、その幼名は吉祥丸とや。ヤヽヽヽヽ、これまで氏も知らざりしが、三國の胤にてあつたよなア。

太兵 すりや、日蓮さまは弟にて、少しの内でも忰ぞと、思ひしこなたは三國の落胤。上人様には今日

長五　只今、所は相州龍の口、敷皮の座と聞きたるが、かゝる御難を天道も、憐れみ給ひて、この大雨
雷の響きも、天の御罰か。エヽ、爭はれぬ法華の法力。
浪間の光は紛失の、もしや寶劍、水中に、埋もれあるとの知らせなるか。

太兵　血筋を助ける雷なるか。

長五　實にも尊き浪間の題目。アラ〱、有り難やなア。

秀連　それ知られたら……觀念ひろげ。

ト拔討ちに切りつける。長五郎、白刃をもぎ取り、秀連を一太刀切る。これにて倒れる。その隙に長五郎、浪際へ駈けゆき、水中より寶劍を取りあげる。ドロ〱打ちあげる。題目消え、雷ばかり殘る。

長五　さてこそ浪間にこの劍。手に入るからは命全う、三國のお家を再興なさん。

太兵　我れは浪間の題目と、共に消えゆくこの身の水葬。あなたは、めでたう

長五　臨終稱念。

太兵　妙法蓮華の

ト前の浪間へ飛びこむ。皆々、心附き

秀連　おのれ寶劍……者ども、ソリヤ。

ト四人の捕り手、起きあがり、長五郎にかゝり、立廻り。トヾ敵はず、下座へ逃げて入る。秀連、また切つてくる。立廻りのうち、矢張り雷にて、向うより俊勝、赦免狀を竹に挾み、走り出て來り、この體を窺ひ見て

俊勝　三國の家を安堵の御敎書。

ト出す。長五郎、提灯の灯にて見て

長五　すりや、再興の

秀連　寶劍わたせ。

トかゝるを、立廻つて長五郎、秀連をとめる。俊勝、御書を差しつける。この見得にて、チョンと黑幕を振り落し、この人數を隱す。

直ぐに時の鐘、雷の音にて、向うより馬右衞門、東の口より飛助、兩人とも胸あて、大小の飛脚にて、刀の先へ狀箱を結びつけて、兩方より出て來り

兩人　エイサツサ〱。

ト本舞臺へ來り、黑幕の前にて行きあひ

四建目



同



飛助　コレ〳〵、其許は、鎌倉よりのお飛脚、馬右衛門どのではござらぬか。

馬右　左やう〳〵、貴殿は豆州伊東の御家來、伊曾木飛助どの、何用あつてお越しなさるゝ。

飛助　さればでござる。主人伊東三郎右衛門、預かりの囚人、法華長五郎と申す者、實名は吉祥丸、土牢に糺明のところ、人を殺めてその場を逐電。その儀を鎌倉へ早打ちのお使ひでござるて。

馬右　拙者は鎌倉、波木井どのより、伊豆の御領主へ知らせの飛脚。今宵、龍の口にて日蓮坊を、敷皮の座に引据ゑ、既に首刎ねくれんと致せしところ、江の島の方より光り物夥しく、震動雷電はたゝ神、太刀取りの劍は折れ、撿使は殘らず氣を失ふ。その儀を知らせの飛脚でござる。

飛助　それは御苦勞。然らばこれにてお互ひに、狀を取替へて持參いたさう。

馬右　左樣いたさう。然らば、この狀。

ト兩方、互ひに狀箱を取替へ持つて

然らば、これにてお別れ申さう。まこと邪法と沙汰ござれど、日蓮さまは今の世の活佛。そこで我れらも一代法華に

飛助　身共も然らば、今より受戒仕らう。貴公も

馬右　我れらも法華の信者。

兩人　南無妙法蓮華經々々々々々々。エイサツサ〳〵。

ト題目を唱へ、兩人、引返して元へ歸る。これにて黒幕切つて落す。

本舞臺、左右とも岩組み。向う山幕。前通り、谷間の景色。山の峰を見せ。松杉の梢見える。兩方、高足の山臺。東の方より西の方へかけ、斧二つ掛けあり、尤も二つとも上の方に引附けある。綱は手づから手繰つて渡る仕掛け。これに引綱附けて置き、爰に、上の方の山の上に、狩人、鐵砲を忘れし體にて、下の方を呼びかけてゐる。下の方に百姓、鍬を擔ぎ、振返りゐる。すべて豆州天城山、行合谷斧渡しの體。山颪しにて道具納まる。

狩人　コレ〳〵、そこへ行く人、そこに鐵砲があるから、爰へ寄越して下さい。

百姓　ナニ鐵砲がある。どこにある。

トあたりを尋ね、見附けたる思ひ入れにて

アヽ、爰に鐵砲はござるが、これがどうしました。

狩人　ハテ、わしが忘れたから、爰へ寄越して下さい。

百姓　ナニ寄越せ。滅法な人だ。爰からそこへ、どうして遣られるものだ。

狩人　ハテ、脊越しにして持つてござれ。

百姓　イヤ、とつけもない事を云ふ男だ。誰れが其やうな怖い所を越して行くものだ。貴様、取りにござれ。馬鹿々々しい。

トロ小言いひながら、下の方へ入る。

狩人　コレサ、頼みます。

ト氣を揉んでゐる。山颪し烈しく、バタ〳〵になり、肥前坊、件の千ヶ寺葛籠を脊負ひ、上の方より駈けて出る。後より捕り手二人、追ひかけ來り、肥前坊を取巻き

捕一　獄屋を切つて逃げたる奴。腕廻せ。

肥前　アヽ、モシ〳〵、わしは千ヶ寺參り。そんな覺えはござらぬぞ。

捕二　イヤ、おのれに相違ない。繩かゝれ。

ト十手にて打つてかゝる。立廻りのうち、肥前坊、脊負ひし葛籠を引返し、中より樣々の品落ちる。肥前坊、この品を取つて、目潰しに捕り手へ打ちつける。此うちに件の袈裟衣、頭巾をも、思はず谷間へ落す。この品、上手の松の梢、よき所にかゝる。立廻りのうち、肥前坊、懐中の月の旗を落す。捕り手、取つて

捕手　さてこそ怪しい。こりやコレ御旗。

肥前　それを。

ト抜いて切りつける。兩人、驚ろく。狩人、ウロ〳〵して逃げまどひ、捕り手と共に逃げて入る。肥前坊、あと見送り

ヤレ〳〵危ない、捕まるところだ。爰は慥かに天城山の行合谷、斧渡しと聞いたが、東海道へは爰を越して……さうだ〳〵。

ト徐、山颪し、竹笛の入つた鳴り物になり、吊せし斧に乘り、怖々思ひ入れあつて

こいつは、なんだ、地獄の業の秤にかゝつたやうだ。併し、手繰りに越すと聞いたが、ドリヤ、やつて見よう。

ト自身に手繰り、下の方へ行き、向うへ越して、山臺へ寄つて大息吐き、捨ぜりふにて、足許の鐵砲を見附け

ヤ、こりや鐵砲だな。狩人めが忘れたのか。こりやア妙な物を拾つた。

ト取上げ、腰へ差してゐる。バタ〳〵にて、上の方へ長五郎、拔刀にて走り出て來る。下座にて、アリヤ〳〵の聲。長五郎、件の白絹を口に咬へ、寶劍を携へ出で

長五　折角手に入るこの寶劍、奪ひ返されぬ其うちに、斧を越して、向うの方へ。

ト あたりを見て、こちらの斧は見附けず、心急くゆゑ、肥前坊が上がりし旗の入れてある斧を見附け向うの旅人は上がつた樣子。

ト 肥前坊が越したる斧の綱を後へ引き返す。この斧の中には、旗殘りあり。此うち長五郎、身拵らへして、旗の入りし斧と知らず、その中へ乘らんと、寶劍を持つて、この斧へ踏みかける。肥前坊、心附き、アレ／＼とあせりゐる。この時、捕り手二人、追ひかけ來り

捕手　見附けた／＼。人を殺めし長五郎。殊に取り得しその劍

ト かゝる。立廻つて

長五　そんなら爰まで追ひかけたか。毒喰はゞ皿。

ト 切つて行く。兩人かゝるを、切りちらす。この體を向うの肥前坊、見附け、アブ／＼しながら斧を引戻さんとする。この立廻りのうち長五郎、引附けし斧と心得、以前よりありし空斧の中へ寶劍を打込み、乘らんとする。兩人、又かゝるゆゑ、切りちらす。この立廻りに、件の白絹を捕り手の一、持つて谷へ落ちる。捕り手の二、かゝるを引敷き、下を見下ろし

南無三、素性を書いたる白絹を、あの谷底へ。

トきつと思ひ入れ。向うの肥前坊、暗がりながら、旗を取返さんと、寶劍のありし畚の綱を引くゆゑ、畚は下の肥前坊の方へ行く。長五郎、これを知らず、立廻つて、見事に捕手の一人を切つて捨て、急ぎ畚へ乘らんとして、その中を搜り見て、入れたる寶劍は無く、月の御旗あるを探り取り、急いたる思ひ入れにて

ヤヽヽヽ、入れ置く寶の劍はあらで、何か怪しきこの旗は……さては向うに曲者あつてか。片時も早く。さうだ。

ト肥前坊が乘りし畚へ乘り、手繰りにて向うへ行く。肥前坊は下へ引きつけし畚を、自分の乘つたる畚と心得、乘り移り、中を尋ね、旗は無くして寶劍ゆゑ、思ひ入れあつて

肥前　そんなら向うの旅人が、入れ置いたるこの劍。併し、大事の彼の旗を、取返すのは

ト思ひ入れあり、又手繰りに上の方へ手繰り行く。これより鳴り物變り、兩方の畚、舞臺眞中にて行きあふ。よき程にチヨンと空へ月出る。兩人、月あかりに顏見合せて

長五　正しくそれなる畚の内

肥前　此方も殘す一品が

トこの聲を聞き、長五郎、思ひ入れあつて

長五　その物ごしは、慥かに今宵
肥前　獄屋の内に居合せし
長五　ヤ。
ト此うち谷底にて鈴の音する。兩人、思はず月あかりに、谷底を見て
肥前　松にかゝりし袈裟衣、あれも先刻に
長五　葛籠の内に。
肥前　その三衣より、落せし旗を
長五　此方も思はず打込む寶劍。
肥前　一旦手に入るこの品を
長五　返すとあらば元々へ
肥前　イヽヤ返さぬ、その上に、此方の旗も渡されぬ。
長五　さう云や此方も、この旗は
肥前　渡さにや、いつそ
ト騙し討に切りつける。兩方拔き合せ、切り結ぶ事。肥前坊、又ぞろ切りこむ刀にて、長五郎の乘つ

たる畚の綱を切る。これにて長五郎乘つたるまゝ、畚とも舞臺の眞中の岩組みの谷底へ落ちる。肥前坊、下を見て

南無三、旗を谷底へ……併し、彼奴も直さま往生。行合谷の……ム、、ハ、、、、。

ト笑ふ。これをキツカケに、この前へ黑幕を切つて落し、肥前坊を隱す。誂らへの鳴り物になり、件の山を段々セリ上げ、今まで梢の見えし松ヶ枝、同じくセリあげ、この松ヶ枝に件の袈裟衣かゝりある。

本舞臺、すべて行合谷、山間の體よろしく、舞臺眞中へ長五郎、畚より出て氣絶の體。これを、やつし旅形、千ヶ寺參りのお勘、介抱してゐる。側には上より落ちたる畚、葛籠、なぞ取散らしあり、この脇に捕り手一人、白絹を持つたまゝ悶絶してゐる體よろしく、右の鳴り物にて、正面の道具と一緒に上げ納まる。

ト誂らへの合ひ方、谺、山颪しにて、お勘、いろ〳〵介抱して

かん　夫を尋ぬる長旅の、今宵は爰に草の床、肱を枕の谷間へ、峰より落つる畚のうち、氣絶なされたその樣子。介抱するも一樹の蔭、一河の流れは谷川の、水を含みて

ト腰提げの水呑にて、流れの水を汲み來て、長五郎に含ませ

モシ、旅のお方、心をお附けなさんせ、旅のお方イなう。

トいろ〳〵介抱する。これにて長五郎、心附きたる思ひ入れにて

長五 アヽ、暫時のうちも氣絶して

かん モシ、氣が附きましたか。旅のお方。

長五 アヽ、そんなら女中の、お世話になりしか。

かん わたしや女子の一人旅、介抱してあげましたわいなア。

長五 それはマア、忝うござる。お庇で命を拾ひました。

かん なんのマア、袖摺り合ふも、互ひの縁づく。

長五 旅は道連れ、夜ととも今宵は

かん 爰でゆるりと

兩人 話しませうか。

ト思ひ入れ。この時、チョンと月出る。兩人、顏見合せ

かん ヤア、お前は、こちの人、長五郎さんぢやないかえ。

長五　さういふ聲は、石和で馴染んだ
かん　アイ、勘ぢやわいなア。モシ、わたしやお前の、行くへを慕うて
長五　別れた後は七年あまり。
かん　その時わたしや懷妊して
長五　産んだであらうが、女子か男子か。
かん　しかも男の子、その名も經市。
長五　達者に育つか。
かん　お前と思うて、大事にせいでは。
長五　心に思へど、便りにならぬは
かん　そのこなさんの、身狀の噂も
長五　詳しく聞いたか。
かん　聞いたによつて千ケ寺参り。
長五　おれが爲にか。
かん　お前でなうて、ナニ外に。

長五　その功力にて今爰で

かん　逢うたお前を殿御とも

長五　知らぬ他人と介抱に

かん　よく〳〵見れば長五郎さん。

長五　女房お勘か。

かん　モシ、逢ひたかつたわいな〳〵。

ト縋りよつて思ひ入れ。

長五　オヽ、尤もぢや〳〵。この長五郎も日蔭の身。やう〳〵その場を逃げのびて、………併し、この上てまへには、話さにやならぬこの身の素性。記せし絹は

ト尋ねる思ひ入れ。此うち捕り手、心附きし體にて、白絹を持つたまゝ

捕手　おのれ見附けた、長五郎。

ト十手にて打つて行くを、長五郎押へて

長五　ムウ、さては最前の捕り手よな。

ト立廻つて件の白絹を奪ひ取り、引敷きて

こりや系圖の白絹。これに素性が
ト出す。お勘、よく〳〵月影に見て
かん　何やら絹に文字は見ゆれど
長五　血汐で顯はすこの身の生立ち。下素と思つた長五郎、誠は三國の總領にて。
かん　エヽ。すりや、御主人のお家の血筋。
長五　そんなら、おぬしも、三國家へ奉公したか。
捕手　吉祥、捕つた。
ト立廻りよろしく、懷中の月の旗を落す。捕手取つて
こりやコレ慥かに月の旗。鎌倉御所へ
ト駈け出す。長五郎、引ツ捕へ、二品を奪ひ取り、足下に踏まへて
かん　爰から直ぐに、ちつとも早う。
長五　この姿では、人目にそれと。
かん　目立たぬやうに
ト上手の松ヶ枝を見て

モシ、あの松ヶ枝に。

長五　丁度幸ひ。

トこの時、捕り手、おこつくを、長五郎、下に這はせる。お勘、捕り手を捕へ、ちよつと立廻り。此うち長五郎、松ヶ枝の袈裟を取つて來り

かん　直ぐに石和のわたしが隱れ家。姿をやつして

ト立ちあがる。

捕手　わいらをやつては

ト又かゝるを、長五郎、衣を持つたまゝ、捕り手を掻きのけ、上手へやり、ちよつと當てる。この途端にドンと筒音する。この玉、長五郎の肩へ當る。これにて長五郎「アッ」と苦しむ。お勘、恟りして

かん　あの筒音で、もしやお前は

ト寄らうとする。長五郎、ドンと尻居する。これと一緒に捕り手、見事にかへる。この途端、チョンと木の頭。

長五　チエ、。
　　ト口惜しき思ひ入れ。
かん　痛むかいなア。
　ト駈けよつて介抱する。双方よろしく、ひやうし

幕

第一番目　六建目

お勘隠れ家の場
石和川鵜飼石の場

役名――猿廻し、石和のお勘。醫者、勝沼道庵。米屋、ひね右衛門。酒屋、呑助。薪屋、權六。平の左衛門秀連。山伏、肥前坊 後ニ 日親法師。奴、鐵平。お勘一子、經市。百姓、羽生村の助。浪人、久保田金五郎。庄屋、杢右衛門。法華長五郎 實ハ 三國吉祥丸。

本舞臺、三間の間、常足の世話場。上の方、反古貼りの障子屋體。その前に柵つきの流れ。正面、佛壇。暖簾口。よき所に圍爐裏、自在大鍋を掛け、下の方、猿の入る塒屋。軒口に鵜の塒屋を吊し、いつもの所に門口。下の柱際より中窓の附いたる壁。この下、藪疊。すべて甲州石和、女主お勘隠

れ家の體。爰に道庵、在郷醫者にて、襟に長房の珠數を掛け、經市、やつしにて題目太鼓を打つてゐる。酒屋の呑助、米屋のひれ右衞門、薪屋の權六、掛取りにて、催促してゐる。てんつゝ、題目太鼓にて幕明く。

道庵　南無妙法蓮華經々々々々々々々々。

ト題目を申し、經市を遊ばせてゐる。

呑助　サア〳〵、酒屋の拂ひは、どうするのだ〳〵。

ひね　わしは命を繋いだ米代だぞ。

權六　ちつと古いが薪屋の權六。拂ひはどうする。

三人　勘定してもらはう〳〵。

ト喚く。

道庵　コレ〳〵、其やうに催促せずと、茶でも飮んで、ゆるりとさつしやれ〳〵。

呑助　ナニ、ゆるりとしろとか。モシ、お醫者樣、そんな斷わりは、余人へ見せさつしやりませ。

ひね　左やう〳〵、女主だけ、仕送つた米の代金、殊に鵜使ひのお勘が、この頃では猿使ひ。蛇使ひが聞いて呆れる。

三人　サア〳〵、勘定をしやれ〳〵。

ト三人喚くを、道庵、留めて

道庵　これはしたり、爰の主のお勘どのは、親の代から鵜を使うて渡世としたが、重時さまの御病氣で、この石和川は殺生禁斷。そこで今では猿使ひ。店請けの道庵が頼みぢや。靜かに云うて下され、靜かに云うて下され。

呑助　モシ〳〵、店請けの醫者樣、催促するを、なぜ騷がしいと云はつしやる。

道庵　ハテ、女の身で、この子の養育。殊にこの間は、御出家の病人があるゆゑ、そこで靜かにと云ふのぢや。

ひね　コレ〳〵、かけも構はぬ坊樣を、居候ふとは氣が強い。喰ひ潰しを置く位なら

三人　拂つてもらはう〳〵。

道庵　サ、そこをどうぞ、待つて下され。

三人　イヤ〳〵、今拂つてもらはう〳〵。

ト わや〳〵云ふ。猿廻しの鳴り物になり、向うよりお勘、木綿やつし、猿廻しの女房にて、肩へ猿を載せ、篠竹を持ち、綱を扣へて出て來り、直ぐに内へ入り、三人を見て悔りせしが、何喰はぬ思ひ入

れにて

かん　これはお三人様、お揃ひなされて、ようお出でなされました。

權六　アヽ、お勘どのは鵜使ひをやめて、猿使ひをしやるの。

かん　左樣でござりまする。近年は女の猿使ひが、流行り物でござりますが、わたしがやうな者が、なんの猿が使はれませう。猿よりは私しが、三本足らぬ生れでござりまする。ホヽヽヽヽ。

ト此せりふ云ひながら、塒屋の中へ猿を入れる。

道庵　コレ〳〵、お勘さん、この衆が先刻から來て、何か催促さつしやるゆゑ、愚老が今まで、斷わりを云つてゐました。

かん　それはお世話樣でござりました。して、御病人はどうでござりまする。

道庵　イヤモウ、あの金瘡は、至つてむづかしうござるて。

かん　ハテ、それは困つたものでござります。

經市　母樣、眠たいわいの。

かん　オヽ、さうでごさんせう。サア〳〵、爰へ寐させませう。

ト二重舞臺へ經市を寢かし、誂らへの浴衣を裾の上へ掛け、母衣蚊帳をかけて寐さす。掛取り三人、

思ひ入れあつて

呑助　コレ〳〵、お勘どの、むづかしい病人とは、そりや貴様の亭主か、隱し男か。其やうな身持ちをするなら、モウ〳〵、待つ事は、ならぬぞ〳〵。

ひね　勘定濟まねば屋財家財、疊をあげても持つて行きます。どうか奥の疊の方が、少しは値打がありさうだ。あれから剝りませう。

ト障子屋體へかゝるを、お勘、うろたへ、障子を圍うて

かん　モシ、お待ちなされて下さりませ。

ト合ひ方になる。

三人　こりやア、なんで留めるのだ。

かん　サア、この障子の内には、お客がござりますゆゑ。

ひね　コレ〳〵、しがない中でお客とは

三人　その居候ふは何者ぢや。

かん　サア、そのお客と申しまするは

三人　その客といふは。

ト お勘、思ひ入れあつて

かん 尊い御出家でござります。

三人 ナニ、尊い出家が、かゝり人か。

かん 左樣でござりまする。今度、宗旨をお擴めなさるゝ、日蓮さまの一のお弟子、日僧さまといふ尊い御出家樣が、お加持をなされて、有り難い法華の行者樣。どのやうな病人でも、直にお加持で癒ります。それでモウ、あそこからも爰からも、行者さま〳〵と、それは〳〵、大抵お流行りなさるゝ事ぢやござりませぬ。ナウ、道庵さま。

ト 道庵へ目顏で呑みこませ、障子屋體へ聞かせる思ひ入れ。道庵、呑みこみ

道庵 成る程、左やう〳〵、あの御出家は、殊の外お流行りなさるて。

ひね その病人の加持をしながら、自分の病氣は

三人 癒らぬのか。

道庵 サア、そこが陰陽師身の上知らぬところ。併し、この甲斐の國始まつて、こんな尊い名僧は、今度が初めて。イヤ、よいお方のお宿をさつしやつた。

呑助 それぢやァ御參物が、しつかり上がりませう。そして、この內で、其お加持を

三人　始めさつしやるのか。

かん　始めませいでわいな。いま不勝手なわたしが身代、お宿申すがよからうと、やう／＼願つてお連れ申し、明日は早々この内で、お加持祈禱を始めますれば、誠に錢金の儲かる時節。その時は、お前方へお禮申して、御勘定いたします。必らずお氣遣ひなされますな。

ひね　それは奇妙ぢや。さういふ見掛けた山があれば、ナウ、皆の衆。

二人　待つて進ぜう／＼。

呑助　時に、お勘どの、さういふ法華の行者様へ、お目見得を致したい。

三人　どうぞ願うて下され／＼。

かん　それは隨分お易い事。あなたへ願うてあげませう。

三人　エヽ、忝うござる。

トこれにて、お勘、障子屋體へ差寄り

かん　ハイ、お聞きなされて下さりませう。信者の衆が行者様へ、お目見得を

ト障子屋體の内にて

長五　御參詣のいづれもへ、日僧、お目にかゝるでござらう。

ト唄になり、障子を引拔く。内に長五郎、木綿頭巾、前幕の袈裟衣の形にて、目籠の内に小石を入れ、題目を一字づゝ書いてゐる。傍らに手飼ひの猿、墨を磨りゐる。皆々見て、平伏する。

かん　これはしたり、お前樣は、金瘡の御病氣で、お心惡いと仰しやつて、お氣をお詰めなされたら

道庵　病に障りませう。殊に小石に經文を……そりや何にさつしやります。

長五　これは卽ち七字の題目、小石へ認め、石和川へ沈めますれば、川施餓鬼も同じ事。殊に北條重時どの、病氣とあつて諸所にて祈り、天下の爲と存ずるゆゑ、それゆゑ石へ

呑助　殊に手飼ひのその猿が、あなたを慕うて、お側を離れず

長五　これも山王權現の、法華經守護のしるしでござらう。

道庵　左やう〳〵、鎌倉ならばお猿畑。こりやその筈の事でござらう。

ひね　畜生さへも歸依する宗門、それを邪法とさみする上に、この石和川を殺生禁斷とあつて、もし魚を捕る者は、物云はずに川へ投げこむとは、お情ないお觸れではござらぬか。

權六　イヤ、それはさうと、どういふ事で御出家樣には、その大難に逢はつしやりましたな。

長五　成る程、拙僧、伊豆を難行のうち、行合谷にて、外れたる玉の肩先に當り、今以て惱みまするて。

道庵　併し、お前の金瘡に用ひまするは、天龍沙と申す一薬、まつた石和川に棲む香魚の脂、これが至つて妙薬でござる。その天龍沙は、愚老、かね〴〵より持ち傳へて、しかも爰に

ト懐中より出し

この間、我れらが御扶持頂戴いたす、鎌倉のお屋敷より、入用の儀を申し越してござるが、何な申すも金との相談。

かん　モシ〳〵、道庵さま、その天龍沙の、價は何程でござります。

道庵　三十金も取らいでは、どうも容易に人手へは。

かん　それはマア、余計な金でござりまするな。

ト思ひ入れ。

道庵　イヤ〳〵、お勘どの、三十兩でも金は湧き物。あつても取れぬは石和の香魚。川にあつても殺生禁斷、捕ると其まゝ川へどんぶり。イヤ、恐ろしや〳〵。

かん　すりや、その香魚は、石和川に……どうぞ取り得て、日僧さまへ

長五　イヤ〳〵、左樣なお觸れござつた上は、噂にも、云はぬこと〳〵。

權六　時に、わしどもは、もうお暇いたしませう。

兩人　さうしませう〳〵。

かん　左様ならば近々に、あなたのお加持が始まり次第、お前方の勘定も、その時殘らず

三人　必らず頼みます……あなた様・痛み所を隨分大事に。

長五　もう歸らつしやりまするか。

道庵　愚老もお前の、藥の加減を……コリヤ、猿よ。われも一緒に。

三人　ドリヤ、歸りませうか。

かん　ようお出でなされました。

ト題目太鼓になり、三人は題目を申しながら向うへ入る。道庵は猿を連れて暖簾口へ入る。あと合ひ方になり、兩人、殘つて

長五　アヽ、窮屈や〳〵。着附けぬ衣で暑くるしい。皆歸つたら、さらば脫がうか。

かん　アヽモシ、まだ奥に道庵さんも殘つて居りまする。御窮屈ではござりませうが、いま暫らくが間三衣は其まゝ。

長五　サヽ、袈裟と衣で、これが三衣か。こいつは、とんだ話しだ。コレ、お勘、思つて見りやア、久しぶりで逢つたおぬし。イヤモウ、いつ何時、どこで逢はうといふ事も

かん　左樣でござります。思ひがけない谷間にて、お目にかゝつてお供をと、思ふ其うち危ふい手疵、さぞお痛みにござりませう。御全快をと尋ぬる一藥、その天龍沙もありながら、心に任せぬ貧しい暮らし。さぞ御不自由に入らせられませう。さはさりながら、あの一藥、何卒取り得て、少しも早う。

ト叮嚀に云ふ。長五郎、思ひ入れあつて

長五　コレ〱、お勘、てまへは何だかべら坊に、御叮嚀に仰しやるが。なぜそんなに眞面目になつて

ト手を取る。お勘、思ひ入れあつて

かん　アヽモシ、恐れ多いあなた樣、勿體ない、御免遊ばされませ。

長五　コレ〱、それが解らぬ。なぜ又俄に、其やうに。

かん　ハイ、御主人樣でござりまするゆゑ。

長五　どうしたと。

かん　以前は互ひに知らぬ同士、賤しい身分の轉びあひ。いつぞや伊豆の谷間にて、血で血を洗ふ白絹に、三國のお家の御總領、吉祥さまの氏系圖、詳しう知れし上からは、わたしが爲には、三代相恩の御主人樣。身に宿したる經市さま、腹は借り物、あなたのお胤。今々思へば、勿體ないやら

冥加ないやら。ハイ〳〵、恐れ多うござります。

長五　なんだ、べら坊に敬ふな。食ふや食はずの長五郎が、嗅アにしようと、轉びあつた石和のお勘、惡叮嚀に云はれちやア、汗が出るわえ。これサ、無駄を云はずと、爰へ來やな。

ト手を取らうとする。

かん　アヽモシ、恐れ多うござりまする。

長五　エヽ、まだ無駄を云ふか。

ト手を取らうとして

アイタヽヽヽヽ。

かん　どう遊ばしましたぞいなア。

長五　また肩先の疵が、べら坊に痛むワ。

かん　左様なら、アノお附け藥を

ト行かうとするる、又捕へて

長五　エヽ、久しぶりだワ。

ト引寄せる。お勘、又ぞろ敬ふ思ひ入れ。この時、經市、蚊帳を刎れのけ出て

經市　ほうやらほう、おいらは知らぬ。

ト手を打つ。この時、手の音を聞き、件の猿、走り出て、同じやうに手を叩く。長五郎、見て

長五　おきやアがれ。うぬが親を囃しやアがる。この畜生も同じやうに。

經市　ほうやらほう。

ト手を打ち、猿も同じく手を打ち囃す。この時、障子内にて

道庵　御出家さま〳〵。お藥が上がりました。日僧さま〳〵。

ト呼び立てる。長五郎、うろたへ

長五　只今それへ參る〳〵。

道庵　御出家さま〳〵。

ト呼び立てるゆゑ、長五郎、迷惑さうに、經市と猿を連れ、障子の内へ入る。お勘、殘つて、思ひ入れあり

かん　民家にお育ちなされたる、吉祥さまのあの御樣子、これが誠に三國の長男。お湯殿腹とはいふものゝ、あのはしたない………ほんに、暮れに間もあるまい。行水の湯を沸かさうか。

ト唄、時の鐘になり、お勘、自在に掛けし大鍋に水を入れ、その下を焚きつけ、あたりの行燈を出

し、灯をともす。この唄をかり、向うより肥前坊、絲立てに刀を包み、これを脊負ひ出る。後より秀連、深編笠、大小、浪人の形。鐵平、件の奴にて附き、ウソ〳〵出て來り、花道にて

秀連　肥前坊、われが申すは、もう爰らか。

肥前　左やうサ、爰らだと思ひましたが、所の勝手も違ひましたで、慥かに向うの内が

鐵平　旦那様、肩先の金瘡が、この暑さでは、定めし痛みませう。

秀連　誠に痛んでならぬわい。これといふも伊東にて、四人の長五郎、正しく實名吉祥丸、彼奴が切りつけ、この悩み。その上に、逃がせし科にて直ぐに浪人。身が手醫師、勝沼道庵といふ者、かねて所持する天龍沙、それぞ金瘡を癒やすの良藥、その藥を求めん爲、わざ〳〵尋ね來りしが

鐵平　今一種の香魚と申すは、石和の川にゐるとの事。

肥前　いま仰しやつた吉祥丸、行合谷の松ヶ枝に、かゝつた三衣を身にまとひ、日僧といふ出家に化けたに違ひない。併し、此奴も、わしが打つたる鐵砲疵、金瘡になつて悩むとの事、殊に春越しのその場にて、わしが持つてゐた月の旗、それと變つた彼の寶劒、わしが持つてゐるのも氣遣ひに石和の深みへ人知れず。

秀連　われが失つた月の旗を、持つてゐるのが吉祥丸。

肥前　下素に育ちし長五郎。わしが爰らにゐた時分、石和の鵜使ひ勘作が、一人娘、お勘といふ奴、獨り身ゆゑに口說いたが、承知しない、その砌り、喧嘩で思はぬ人殺し、それから逐電、其うちに男が出來たといふ噂、其奴が慥かに長五郎。さすれば彼奴も此あたりに、かゞんでゐるに違ひない。女主のお勘が住家へ、仕掛けて樣子を

秀連　必らず法印、油斷なく

肥前　旅宿で、あなたは

秀連　待つてゐるぞよ。

ト合ひ方。時の鐘になり、秀連、鐵平、引返して向うへ入る。肥前坊は門口へ來り、內を窺ひ

肥前　モシ、賴みますぞ〳〵。

かん　アイ〳〵、どなたぢや。どこから來なさんした。お入りなさんせ。

肥前　アイ、御免なせえ。

ト門口を明け、內へ入る。顏見合せて

かん　ヤ、お前は、どうやら

肥前　ヤ、お勘だな。ヤレ〳〵、久し振りだ〳〵。

かん　ほんに、さう云はしやんすは、石和の喧嘩のその後は、行くへの知れぬ法印さん。

肥前　さうよ。ヤレ〳〵、てめえも息災で、めでたい〳〵。併し、おらアてめえに、言傳があつて來たよ。

ト上手へ通り、ウソ〳〵と思ひ入れ。お勘、氣味惡さうに

かん　言傳があるとは、そりや、どこからえ。

肥前　外でもない、おぬしが色の、長五郎が所から。

かん　エ。

ト思ひ入れ。合ひ方になる。

肥前　可哀や、あの男は、死んだわい〳〵。

ト空泣きをする。お勘、心得ぬ思ひ入れ。

いつぞやおれが舊惡で、伊東の牢へ入つた時、合牢したのは長五郎、仕合せとおれは助かり、あの男は死罪になつたが、その時おれに頼みには、おれが死んだその後は、女房や小僧めが、路頭に立つであらう。てめえは仕合せと助かる身分、この後國へ歸つたら、おれが女房子を、てめえに頼むと、それが遺言。それでわざ〳〵爰へ尋ねて來た。お勘、今からおれが世話をする。氣遣

ひしやんなく〳〵。

ト此せりふのうち、お勘、さてはト思ひ入れにて

かん　そんなら何と云はしやんす。頼みに思ふ長五郎どのが、お仕置にならしやんしたによつて、主の遺言で、わざ〳〵お前が……あの人は、死なしやんしたかいなア。

肥前　オヽ、死んだよ〳〵。

かん　主が死なしやんしたら、わたしやどうせう。すりや、眞實長五郎どのは、死なしやんしたかいなア……と云うたらお前の氣に入らうが、わたしやさうは云はぬぞえ。ようマア嘘を……大概にしなさんせいなア。

肥前　コレ〳〵、そんならおれが云ふ事は、嘘だと思ふか。

かん　アイ、主は隨分、息災でござんすわいなア。

肥前　して、息災な長五郎は、どこに居る。

かん　エ。

肥前　奥聞かうより口聞けと、だん〳〵口をむしつたら、長五郎が隠れ家も、大方てめえの内にゐるなら、ちよつと逢つて

ト奥へ行くを、お勘、支へ

かん　イヽエ、主は爰にぢやござんせぬ。そりや門違ひ。どうして爰に。

肥前　ハテ、逢つて行かうワ。

ト せり合ふうち、道庵、出て來り、この中へ入り

道庵　これはしたり、貴様は誰れだ。なんで女と、みだら千萬な。歸つてもらはう〳〵……ヤ、貴様は以前、石和の宿で、人を殺めて駈落ちした、法印どのだの。

肥前　お前は醫者の道庵さん、ヤレ、いゝ所で逢ひました。お前の所を左衛門さまが、藥の事で尋ねてござつた。サ、わしと一緒に、あなたの旅宿へ。

道庵　ナニ、藥の事とは、アヽ、この間お手紙で、仰せ遣はされた、金瘡の療治に用ゆる天龍沙、その事でござらうの。

肥前　その天龍沙々々々。此方へ買はうと、わざ〳〵尋ねてござつたが、いよ〳〵貴様は、その一藥を

道庵　ござるとも〳〵。大事の一藥ゆゑ、即ち爰に。

ト 懷より件の包みを出し、よき所へ置く。肥前坊、見て

肥前　アヽ、それが聞き及ぶ天龍沙か。大さう金高な……マア、どんな物か、見せさつしやい。

ト薬の包みを取つて、よく〳〵見る。此うち、お勘、思ひ入れあつて、道庵を上の方へ連れて来り

かん　モシ〳〵、道庵さま、お前に頼んだ薬の事、あの金瘡の病には、無くて叶はぬ天龍沙、それを今さら外々へ、その相談が極まつては、どうもわたしは………サ、頼みぢやほどに、その薬、外手へどうぞ渡さぬやうに。

道庵　サ、さうでもあらうが、此方も金づく。三十両に買ひ手があれば

 トこの話しのうち肥前坊、薬を見る振りにて、そつと懐の莨入れより歯磨を出し、天龍沙と吹替へ、元のやうにして置く。

かん　サ、さう云はしやんしては、わたしが迷惑。どうぞ薬は、わたしへ賣つて下さんせ。

道庵　それだといつて、右から左に金が無ければ、外へ相談。滅多に此やうな口はござらぬ。その上、薬が手に入つても、今一薬の香魚がござらぬ。たとへあつても、石和は殺生禁斷、容易に魚は

かん　それも、どうなと仕様もやうも。なんであらうと、その薬は、外手へ渡らぬやうに。

道庵　それだといつて、金との相談。

ト氣の毒なる思ひ入れ。

肥前　成る程、稀代な薬の様子。世にも稀れなる天龍沙。道庵さま、大事に持つて、左衛門さまの

道庵　お手紙通りに賣れば、愚老も金儲け。マア、何にしろ、旅宿へ參つて
肥前　あなたに逢うたその上で
道庵　然らば愚老は、左樣いたさう。
　ト慾に目がくれ、門口へ出る。お勘、留めて
かん　アヽモシ、その一藥は、どうぞわたしへ。
肥前　ハテマア、おれも頼まれた念が屆けば、どの道ぬしを
かん　それぢやというて、二となない藥。
肥前　二とない物ゆゑ、早くお前は。
道庵　ドリヤ、相談して來ませうか。
　ト唄、時の鐘になり、似せ物と知らず、とつかはと向うへ入る。
かん　あれほど頼みし一藥を、外へ心の變つたも、金づくなれば是非もない、とは云ひながら今さらに
　藥が無うては
肥前　そりやア氣遣ひしねえがいゝ。おぬしが欲しがる天龍沙、二とない藥は、コレ爰に。
　ト摺りかへし藥を見せる。

かん　エ。そんならそれが天龍沙。どうしてお前が

肥前　摺りかへた。

かん　エヽ。

ト合ひ方。

肥前　手癖の悪い一徳は、ちよつと見るよりあの醫者の、持つた藥を捲きあげて、持たせてやつたは懐に、あつたを幸ひ紅梅散、それとも知らぬあのウツソリ。藥がいるならおれから買へ。相談次第で賣つてやらうワ。

かん　すりやアノお醫者の天龍沙を、お前の方へ。

肥前　疑はしくば、ソレ、包みに覺えがあらうが。

ト差出す。お勘、よく〳〵見て

かん　成る程。こりや道庵さまが、見せさんした藥の包み。

肥前　なに違ひがあるものか。併し、金瘡より外に用ゐぬこの藥、これを欲しがる上からは、手疵をうけし長五郎、この家にゐるに違ひない。隠さず云やれ、さうであらうが。

かん　さう云はしやんすりや有やうは、日蔭の身の上、わたしが隠まひ、あの金瘡を命に替へても、癒

さにやならぬも主筋ゆゑ。

肥前　その主筋とはお尋ねの、そんなら、いよ〳〵吉祥丸か。

かん　アヽモシ、その名を滅多に

肥前　云はぬは互ひに惡仲間、云へと云つてもおれが身も、綾拔けのせぬ肥前坊。藥がいるなら遣りもせう。その代りには長五郎、あれが手を切り法印の、女房になるなら相談もの。不承知ならば、おれが方から、左衞門さまへ賣つてしまふワ。

かん　それではどうでも、主の病氣が

肥前　癒してやりたく思ふなら、おれが藥と、てめえとを、替へ〳〵にして渡さうが、それにしてから、まだ外に、香魚の油をたぎる湯で、煮拔いた上で藥の調合。香魚はあつても殺生禁斷、それを取り得る工風があるか。

かん　そりやモウ、手馴れし鵜飼ひにて、取り得る事は暫時の間。よし禁斷の場所にもせよ

肥前　男の爲なら、法度を破つて

かん　鵜を使ふのも、お主の大事。

肥前　吉祥丸なら三國の總領。

かん　アヽモシ、その名を滅多に

肥前　云はぬは此方も水心、魚心ある香魚を取り得て、二品揃うたその上で、病が癒らば、おれが
　女房。

かん　その藥さへ下さんすりや、お主のお役に立つ大恩。そりやどうなりと、お前の心に。

肥前　詞を番ふ上からは、成る程、藥は遣りもせう。てめえは香魚を

かん　命に替へても

肥前　そんなら支度を

かん　主へ知らさず。

　　ト思ひ入れ。時の鐘、合ひ方にて、軒の塒屋より、二羽の鵜を出し、船の櫂にとまらせ、松明を取出
　し、身拵らへする。此うち肥前坊、障子の内へ思ひ入れ。

肥前　向ふは殺生禁斷の
　この宵闇の暗まぎれ

かん　場所もいとはぬ、お主のお爲。

肥前　その大丈夫な心なら

かん　魚を取り得る、わたしは此まゝ
肥前　船の用意は
かん　石和の河原に
肥前　首尾よく魚を
かん　アモシ……夜更けぬうちに。

ト時の鐘、凄き合ひ方にて、お勘、櫂をかたげ、消えたる松明を持ち、窺ひ〳〵向うへ入る。肥前坊後見送り、思ひ入れあつて

先づ女めを騙しこみ、巧く香魚は取りにやつたが

ト思ひ入れ。この時、門口の藪を押分け、鐵平、窺ひ〳〵出て、門口に立ち

鐵平　法印々々。

トこの聲に、肥前坊、思ひ入れあつて、門口へ出て

肥前　鐵平どの、なんぞ用か。
鐵平　この内に吉祥丸が、日僧と僞はり、金瘡に惱み、隱まひあるとの事なるが、それに相違は
肥前　何もかも見屆けて置きました。殊にあなたの金瘡へ、用ゆるところの天龍沙、わしが手に入りま

した。いま一藥の香魚も直に。

ト囁く。鐵平、呑みこみ

鐵平　そんなら女を、あの場所へ

肥前　取り得て歸れば此方の仕合せ。科は女か吉祥丸。よし又それでゆかぬ時は、この大石を寢所の上へ、吊して置いて、いゝ時分に、切つて落して鮨同然。

鐵平　こいつは出來た。

肥前　手傳つて下さい。

鐵平　合點だ。

ト門口の大石を内へ轉がしこみ、肥前坊、繩を尋ねて、下の方の揚げ板をめくり、中より薪を出し、その中より長き繩を取出し、石を吊さんといふ思ひ入れして

肥前　そんなら始末を、旦那へ一々。

鐵平　呑みこんだ。

ト捨て鐘になり、向うへ走り入る。

肥前　さて、これからが、石を吊すは

長五 誰れぢや〳〵。何者ぢや。

ト思ひ入れ。この時、障子の内にて

ト此の聲に肥前坊、うろたへ、件の薪箱の中へ入り、隱れると、捨て鐘、合ひ方になり、向うより助、物貰ひの形にて、脚絆草鞋、菅笠をかむり、尤も跛、片目にて、懷に龍田川の模樣の裂れにて肩入れをせし着物を着せたる赤子を抱へ、跛を引き〳〵門口へ來る。赤子、泣く。

助 まだ吠えるか。さて〳〵今日は、止度もなく吠え居るが、蟲氣かもしれぬ。

ト門口にて内を覗き見て

モシ〳〵、ちとお賴みがござります。

長五 アイ、なんでござるな……このマアお勘は、どこへ行つたやら。

ト障子屋體より長五郎、顏を出し

助 モシ〳〵、お賴み申しませう〳〵。

長五 夜に入つて、どこからござつた。

助 ハイ、わしは旅の者でござりますが、宿を取りはぐりました。御無心ながら、宿を貸して下さりませ。

長五　アヽ、宿を貸せとか。爰は宿屋ではござらぬ。外を頼まつしやれ。そりやァ難儀でござらう。

ト障子を閉つて入る。門口の助、思ひ入れあつて

助　エヽ、宿は出來ませぬかえ。モシ、どうぞ、さう云はずと、子を連れて難儀な旅人、物置へなりと、寢かして下さい。

ト思ひ入れあつて

アヽ、寢たさうな。こいつは今夜も、野宿の床かえ。

ト時の鐘、蟲の音の合ひ方にて、助、引返して入る。これにて道具廻る。

本舞臺、向う一面の淺黄幕。この前、柵附きの石利の川端。舞臺前、浪板。上の方に柳の大樹。これより續いて藁葺きの番小屋。軒に太鼓を吊し、舞臺のよき所に塚を築き、卒塔婆を立て、死人を埋めたる體。爰に金五郎、着流し、さんすいなる小袖の一つ着、廿歳位の拵らへ、脚絆手甲、旅形、焚火して蚊を追うてゐる。杢右衛門、腹掛け、襦袢の形。百姓三人、鋤鍬を持ち、草苅り籠を取散らし、皆々塚を手傳ひし體にて、金五郎、木綿風呂敷、龍田川の模樣の古き裂れが繼にあたりしを敷き、その上に居り、蚊遣りの世話してゐる。木魚の音、蟲の音にて、道具とまる。

皆々　サア〳〵、これでようござる〳〵。
金五　これはハヤ、どなたも有り難うござりまする。途中ゆゑ、お茶さへあげませぬ。
李右　なにサ〳〵、心遣ひさつしやるな。見たところが貴様も、賤しい人でもない風でゐて、女を連れての道中、連れに死なれては、難儀な事でござらうて。
金五　イヤモウ、誠に難儀しました。わしが生國は下總でござりまするが、女房を連れて、信濃路へ參る道、この石和の川端で、俄に取詰め、死にましたが、それをお前方が此やうに、爰へ葬むり、塔婆も立て、百萬遍まで申して下さる志し。ハイ〳〵、有り難うござります。
李右　ア、、貴樣は下總の人か。
金五　左樣でござります。卽ち結城の家中でござりましたが、浪人いたしまして。それゆゑ仕官の望みござつて。
百姓　ア、、お侍ひにしては、大小が見えませぬが。
金五　左樣でござりまする。女房が長の煩らひ、よんどころなく侍ひが、魂ひを預けまして、それを路用に、やう〳〵爰まで。
皆々　それは難儀な事でござるの。

李右　コレ〳〵、その内儀の佛どのも、爰へ埋めたからは、こなたもせめて七日までは、爰にござつて回向してやるがよい。併し、夜更けると狼が出ます。その時は、刃物が無くては……オヽ、幸ひ、この草苅り鎌を貸してゆきませう。これを塚の上へ置くがよい。それでは狼が附きませぬて。

金五　それは有り難うござります。

ト鎌を焚火へかざして見て

アヽ、何か彫つてござりまするな。アヽ、なんだ、幸崎氏。アヽ、御苗字でござりまするか。

李右　左やう〳〵、わしは幸崎李右衛門といひまする。

金五　これは有り難うござりまする。

李右　アノ、佛の名は、菊といひましたか。

金五　左樣でござりまする。

李右　俗名お菊、南無阿彌陀佛〳〵〳〵〳〵。

百姓　それはさうと、今度お觸れの嚴しいに、なんぞ騒ぎが無ければよいが。

金五　モシ〳〵、お觸れとは、何事のお觸れでござります。

李右　今度のお觸れといふは、この石和川が殺生禁斷の場所になりました。此あたりで鵜を使ふと、直ぐに川流し。今度が手見せでござれば、男女の差別はござらぬて。
金五　それは嚴しいお觸れでござりまするの。
李右　こなたも今夜、爰で夜を明かすなら、氣を附けて下さい。
百姓　サア〳〵、庄屋樣、歸りませう〳〵。
李右　さうしませう〳〵。コレ、鎌を殘してゆきますぞや。
金五　ハイ〳〵、きつとお借り申しました。どなたも御大儀でござりました。
ト靜かな禪のツトメになり、李右衞門先に百姓附いて、向うへ入る。金五郎、鎌を持つて
イカサマ、人はいつ何時も知れぬもの。羽生村の百姓、助が女房と密夫して、連れてのいたその道で、斯ういふ難儀にあはうなら、なに彼の女を釣出すものだ。併し、向うの亭主の助、おれが方でもお互ひに、顏も覺えず、知らぬ同士。まだしもそれが仕合せだ。
ト思ひ入れあり
アヽ、きつい蚊だ。火でも焚いてゐやう。
ト件の鎌をそこへ置き、風呂敷を直し、火を焚いてゐる。矢張り禪のツトメにて、向うより、助、以

前の形にて、子を抱き、出て來り

助　成る程、世に人鬼も無いが、又、情のある奴も無い。

トいぶりつけながら舞臺へ來り、焚火を見て

ア丶、そこにござるは、爰へ野宿をさつしやるのかえ。

金五　左やうサ。お前も旅人衆かえ。

助　アイ。左樣でござります。

金五　イヤ、一人旅は難儀なもの。わしも今夜は、爰へ野宿しますが、いゝ連れだ。お前も泊まらつしやりませ。

助　そりや忝うござりまする。宿を取りはぐつて、大きにまごつきました。お前も一人旅かえ。

金五　アイ、國を出る時は、女房を連れて出ましたが、道々病氣で、今朝この川端で死にましたを、所の衆へ頼んで、爰を埋めました。誠に難儀をしましたよ。

助　それは大きな難儀でござらう。ドレ〱、爪づく石も緣とやら、回向して進ぜませう。

ト合ひ方になり、塚に向ひ、念佛申すとて、卒塔婆を焚火にて讀む事あつて

ア丶、俗名菊とありますが、佛樣は、お菊といはれましたか。

金五　左やうサ。して、お前のお國はえ。
助　わしは下總邊でござります。お前は。
金五　アイ、わしもあのあたりサ。
ト怪しく云ふ事あつて
して、下總は、どの邊でござります。
助　わしは、羽生村といふ所サ。
金五　エ。
トぎつくり思ひ入れあつて
アヽ、一人旅は、身延參りといふ事かえ。
助　イヤモウ、連れはあつても、これで難儀サ。
トこの時、赤子泣くゆゑ、いぶりつけて
エヽ、又せわりやアがるか。
トこれにて金五郎、思ひ入れあつて
金五　アヽ、小さいのを連れてなら、定めしその子の母親も

助　なにサ、この餓鬼の母親めは、誠に鬼サ。聞いて下さい。わしは羽生村で、助といふ百姓でござるが、わしが女房も、お菊といひました。その嬶アめと、わしが仲に、女の子が三人出來て、姉はお高、妹はおさえ、三人めはこの小女郎。そのマア三人の子のある身で、女房めが間男をしました。しかも男は、屋敷者ださうサ。

トこの話しのうち金五郎、一々胸にあたる思ひ入れ。

それから、その間男を見附け、やう〳〵と一晩、歸らぬ振りをして、その男が泊つた晩に、内へ踏んごみ、捕まへたら、立騷ぐ拍子に、行燈は消えて、眞暗闇の同士討ち、逃がしはせぬといふうちに、憖かに嬶アが手先にて、火箸を持つて立ちかゝり、それがわしの左の眼に立つて、生れもつかぬ片眼かい。面は見えねど、間男も逃げさま、出刃庖丁を抛りつけ、それが左の足へあたり、跛になつたのも其奴等ゆゑ。その上、二つになるこの女の餓鬼を捨てゝ置いて、二人は駈落ち。わしもそれから家財を片附け、この餓鬼を連れて袖乞ひ同然。女房の面を目じるしに、間男の野郎を見附け出し、女敵を討つべいと、まごつき歩く難儀は、このマア思ひがかゝらいで、今にも二人に逢つたなら、喰ひついても飽足らぬ。お若いの、太い奴があるぢやアござらぬか。

ト話しのうち、だん〳〵と身にあたり、金五郎、苦しき思ひ入れ。助、話しのうち、菅笠の中へ赤子

を入れ、腰の澁團扇にて蚊をあふいでゐる。

金五　そりやハアお前、苦勞さしつたの。

助　イヤモウ、腹が立つて〳〵、今に忘れませぬ。

ト咬へ煙管の火皿、龍田川の風呂敷の繼の上へ落ちる。助、あわてゝ

これはしたり、風呂敷へ燒穴を出かさうとした。

ト吹殼を拂ふとて、件の龍田川の裂れを見附け

ハテ、この裂れの紅葉の模樣は、餓鬼が小袖の肩入れに。

ト赤子を取つて、件の裂れと引合せ見て

ヤヽヽヽ、おれが娘の着てゐる模樣と、爰に敷いた風呂敷の、模樣の繼も龍田川。こりやァ女房が着古した、その裂れ〳〵が今爰で、合つたる上に、卒塔婆の俗名、菊といふ名に割符の合ふは、さては死んだは女房にて、われは密夫の男だな。

トきつとなる。金五郎、うろたへ

金五　コレ〳〵、滅多な事を云はつしやるな。おらァそんな胡亂な者ぢやァねえよ。

助　なにを今更隱し立て。その間男に違ひない。天道樣の罰があたり、嬶めは行き倒れ。うぬも亭主

のこの助が、跛がんちにされたる恨み。只は置かうか。

ト卒塔婆を抜いて金五郎を喰はす。金五郎、キッとなつて

金五　この耄碌め、譯も聞かずに無法な事を。

ト卒塔婆を引ッたくり、捨てる。

助　何が無法だ。女敵だワ。

トむしやぶりつく。金五郎、殴り倒す。これにて赤子の上へ倒れかゝる。赤子、泣き出すゆゑ、菅笠ごと取つて

エヽ、吠えるな〳〵。

ト叩きつける。此うち金五郎、悠々と行かうとする。助、むしやぶりつく。立廻りのはずみに、赤子もろとも菅笠は川へ落す。笠に乘つたまゝ流れて入る。

アヽコレ、餓鬼めを川へ落したが、それもうぬゆゑ。

ト獅嚙みつく。放さぬゆゑ、件の鎌にて切る。これより禪のツトメ、時の鐘にて、兩人、立廻りよろしくあつて、トヾ、助の咽喉へ鎌を突き立て、殺す。助、苦しみ、鎌の立つたまゝ川へ落ちる。金五郎、ウロ〳〵して

金五　サア〳〵、爰にはゐられぬ〳〵。これから直ぐに、駈落ちだ〳〵。

ト捨て鐘、浪の音にて、身拵らへして、一散に向うへ入る。直ぐに「鵜飼」の謠になり、一くさり切れると、正面の黑幕を切つて落す。爰にお勘、松明を振りあげ、鵜綱を二筋引き、小舟に乘りたる見得にて、舞臺よき所まで押出す。浪の音、變つた合ひ方。お勘、思ひ入れあつて

かん　折よくこれなる番の者、寢入り端こそ好き幸ひ。鵜綱をたぐつて、オヽ、さうぢや。

ト松明を舟の中へ置き、二筋の鵜綱をたぐる。川の中より鵜一羽、香魚を咬へ、浮みあがる。お勘、引寄せ、件の魚を取つて、灯にかざし見て

嬉しやこれぞ尋ぬる香魚。エヽ、有り難い。

ト用意の魚籃の中へ打込む。

まだ沈みある一羽の鵜は。

ト綱を曳く。一羽の鵜、件の寶劍を咬へ、あがる。お勘、見て

ヤヽ、世にも稀れなるこの劍。すりや、これが吉祥さまのお噂ありし、三國の重寶、失せたる寶劍なるや。藥に用ゆる香魚といひ、思ひよらざる御寶まで、首尾よう取り得し上からは、あなたの御病氣御全快。エヽ、忝ない。

ト思ひ入れ。此うち小屋の内より秀連、窺ひ出て、礫を打つ。これにて諸所にて合圖の太鼓を打ち立てる。お勘、ハツと驚ろきたる體にて、あちこちと思ひ入れ。此うち東西より鐵平を先に、杢右衛門以前の百姓、出てくる。

秀連　法度を破りしその女、容赦はない。者ども、ソリヤ。

鐵平　心得ました。

皆々　女め、うぬを。

ト皆々、舟の中へ入り、お勘を引立て、陸へ飛び下り、大勢寄りかゝつて押へる。お勘、振り切り、逃げんとするはずみ、誤まつて寶劍と香魚を前の流れへ落す。お勘、驚ろき

かんやゝ、命に替へて取り得し品。それぞ大事の良薬に

ト振り切るを

秀連　掟の贄に、合點か。

皆々　心得ました。

ト皆々寄つて、お勘を差上げ、打込まんとする見得。よろしく、時の鐘にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、元の世話場へ戻る。二重舞臺に母衣蚊帳を置き、この上の欄間に以前の大石を吊しあり、爰に肥前坊、以前の法印にて、藥の包みを持ち、道庵、これに縋つてゐる見得。掠めたる禪のツトメにて道具とまる。

道庵　コレ〳〵、法印、先刻うつかり見せた藥を、何心なく持つて行き、先で見たれば天龍沙が、いつか齒磨になつてゐる。南無三、こいつ摺りかへられたと、宙を飛んでやつて來た。サア、誠の藥を、返せ〳〵。

肥前　べら坊醫者め、それをおれが知るものか。放しやァがれ〳〵。

ト振り放す。立廻りに肥前坊、件の天龍沙を落す。道庵、取つて

道庵　コレ〳〵、爰に天龍沙。

肥前　エヽ、それを

ト奪ひ合ひ〳〵、自在にかけし大鍋の、蓋あけある中に、誤まつて件の藥を包みのまゝ落す。

道庵　ヤア〳〵、天龍沙を、この鍋のたぎつた中へ。

肥前　エヽ、間拔けめ。

ト喰はす。

道庵　うぬは薬の、盗人だ〳〵。

ト大聲に云ふ。

肥前　エヽ、やかましいワ。

ト道庵が襟にかけたる長房の珠數にて首をしめる。道庵、これにて、よろ〳〵となつて、下手の中窓の下の壁を打破り、この中へ轉けこむ。此うち門口の藪疊より、秀連、鐵平、出て來り、小石を摑み、門口へ打ちつける。肥前坊、これにて門口へ出る。

旦那、相圖の礫は。

秀連　いま石和にて女めが、引きたる鵜綱に尋ぬる香魚、危ない事は其方が、沈め置きたる雲龍の寶劍

鐵平　鵜めが咬へて上がつたを、又ぞろ川へ取落し、無駄骨折つたその跡で、太鼓に寄りくる百姓が、女を捕へて掟の成敗。

肥前　そんなら女は死にましたか。惚れてゐるだけ不便なが、心に叶はずば、死んだもましか。この上は、奥にけつかるあの吉祥、騙して首尾よく。その時は、必らずともに

兩人　加勢いたすワ。

ト捨て鐘にて、兩人、藪を押分け入る。

さて、これからは月の旗。正しくこの家に。

ト探り入つて、窺ひ〳〵踏み出す。これにて母衣蚊帳へさはり、バラ〳〵と明く。中にお勘の亡靈、好みの拵らへにて、朧に見え、經市を寢かし、添へ乳してゐる。肥前坊、蚊帳の中を、よく〳〵見てギツクリ思ひ入れ。これより誂らへの合ひ方。あたりの一ツ鉦聞える。

コレ、そこに居るのは。

かん わたしぢやわいなア。

肥前 エヽ。

ト愕りして

今の話しに相違して、內へ歸つてゐるからは、コレ、尋ぬる香魚は。

かん サア、あの魚はナ

ト思ひ入れ。

肥前 アヽ、捕まらぬか。女の仕事はさうでもあらう。これからは、おれが行つて尋ねて見よう。あの魚が無くては、藥があつても役に立たぬ。ドレ、石和川を

ト足に觸りし砥石を、門口へ踏みとばし、外へ踏み出す。

かん　そんなら、お前が

肥前　ドリヤ、尋ねて見ようか。

ト門の戸をバッタリしめる。この途端に行燈の灯、バッタリ消える。舞臺後へ黒幕を切つて落す。これにて後の道具を隱し、闇の體。捨て鐘、蟲の音。この時、お勘の亡靈、怪しき姿になる。肥前坊、門口にて、お勘を怪しむ思ひ入れ。これより三味線入りの地藏和讃になり、肥前坊、門口にて、隱せし刀を出し、砥石にて寢刃を合せる。始終、薄ドロ〳〵にて、前の流れへ、お勘の死骸、簀卷のまゝ流れくる。お勘の亡靈、子役に向ひ、思ひ入れあつて

かん　誠に、親子の縁は一世にて、この世ばかりで又再び、物云ひ交す事さへも、ならぬ結縁、さりながら、母は拙き身ながらも、御身は全く三國の總領、吉祥さまの落胤にて、腹は借り物、この母が、産み落せども、あなたこそ、契りは深きお主の若君、賤しき腹に御出生。これ皆親の因果にて、胤と腹とは天と地の、變り果てたる私しが、掟を破りし身の罪科、非業の死を遂げ、もうこの世には亡き私し。恩愛の絆には、七十五度泣くといふ、譬へは物の數ならず。只さへ別れは憂きものを、一世の別れ、これがマア、思へば淺き縁ぢやなア……ア、、嘆くまい、悔むまい。心を盡したこの母が、屍は水に漂ふとも、一旦取り得し寶劍香魚、夢まぼろしに奉らん。父上

樣へ、お渡しあれよ、若君樣。

ト抱きあげて思ひ入れ。門口の肥前坊、寢刃を合し、思ひ入れあつて、水を汲むとて、前の流れへかかり、浮き死骸を見て

肥前　さてこそ女が浮き死骸、さすれば死んだに違ひない。内に見えしは狐狸の業。この川上へ川下から、逆さに流るゝこの不思議。正しく男にその念殘り、流れ寄つたか、さりながら、水に死んだるこの女、念の殘らぬその爲に、いつそ止めを

ト死骸の襟髪を半身引上げ、胸許を刺し通す。舞臺のお勘、苦痛の思ひ入れ。薄ドロ〳〵、寢鳥。

かん　父にて候ふ勘作どの、我れも女にあるまじき、鵜綱たぐりし殺生戒、その罪科のめぐり來て、呵責の苦患は今眼前。さはさりながら業通にて、取り得し香魚は

トきつとなる。薄ドロ〳〵にて、件の香魚、死骸より來つて鍋の中へ落ちる。

これを混じて、服する良藥。

肥前　蚊帳に添へ乳のあの女、試すは眼前、これなる死骸。

ト件の死骸を引附け、抉る。お勘の亡靈、苦しむ。ドロ〳〵。これにて經市、眼を覺まし

經市　母樣、なんで其やうに

かん　娑婆に亡き身は此やうに、劔の山の苦患は眼前。

ト苦しむ思ひ入れ。

肥前　これから仕掛ける吉祥丸。女の屍は鳶鳥。

ト死骸を足にて川へ蹴込む。ドロ〳〵、この途端、蚊帳、バヲ〳〵とかゝり、經市も共に隱れる。焼酎火、蚊帳のあたりより、ろう〳〵と立ちのぼり、消える。ドロ〳〵打ちきる。肥前坊、門口にて白刃を咬へ、尻をからげ、しやんと見得。時の鐘、凄き合ひ方になり、そろ〳〵と内へ入り、あたりを尋ね、そこらにありし薪なぞを程よく、足場の邪魔になるやうに、だん〳〵と並べ置く事あつて、門口の方へ来り、作り聲にて

モシ〳〵、道庵でござる。ちよつと爰へ來て下さりませ。

ト障子の内にて

長五　アヽ、醫者どのか。なんと思つて夜中に

ト障子を明け、頭巾衣にて、暗がりの中を探り出て

これは、いかう暗い事ぢや。

ト圍爐裏の方へ探り來る。肥前坊、思ひ入れあつて、刀を持つたまゝ、長五郎の聲をしるべに窺ひ寄





ろ。長五郎、曲者と察せし思ひ入れにて、灯をつけんと、圍爐裏の側へ寄る。

肥前 モシ、暗うございますね。

長五 今に、灯を

トこの聲をあてに肥前坊、長五郎へ探り寄り、帯際を捕へ、白刃を胸許へ突き出す途端に、鉋屑、圍爐裏へ落ち、ポツと燃えあがる。これにて後の黒幕落ちて、明るくなりし體。兩人、顔見合せ、キツとなり。

われはいつぞや伊東にて

肥前 土の牢から逐電なし

長五 程よく天城の行合谷。

肥前 畚の中にて取違へ

長五 綱先切れて數千丈。

肥前 谷の底にて飛び道具。

長五 その鐵砲にて、この金瘡。

肥前 正しくわれが

ト立廻りよろしく、長五郎、頭巾と衣脱げて、鉢かつら、浪人體の形。肥前坊、吊りたる大石の綱を切り落す。長五郎、危ふく身を遁がれて

長五　さてこそ吊せしこの大石、切つて落すは修行の法力。

肥前　これぞ出家と山伏問答、卽ち法論妙智力、法華の行では下ろされまい。

長五　その下ろされぬ大石を

肥前　降魔の利劍で

ト此うち後より秀連、鐵平、出かゝりゐて

兩人　利劍の助太刀。

ト後より長五郎へ切りつける。

長五　さては、うぬらも。

兩人　吉祥、覺悟。

ト打つてかゝる。立廻り。長五郎、金瘡にて苦痛の思ひ入れ。肥前坊、見て

肥前　金瘡に惱む吉祥め、息あるうちに月の御旗、在所を吐かして往生しろ。それまで滅多に殺されぬ。

長五　なにこれしきに屈せんや。宗敵の肥前坊から

ト肥前坊にかゝるを、秀連鐵平、中へ入り、支へる。立廻りに肥前坊、「ムウ」と寄らうとする。ドロドロになり、件の流れよりたる死骸より心火立ちのぼり、母衣蚊帳の上へ消える。これにて肥前坊、手先の痺れる思ひ入れ。蚊帳の内より經市、ツカツカと出て、有りあふ柄杓にて、大鍋の藥を汲み、長五郎の側へ持つてくる。長五郎、見て

そちや經市。

經市　母様が、これをお前に。

ト柄杓を出す。

長五　よくこそ氣が附いた。金瘡に惱む咽喉を濕ほし

ト柄杓を取つて

怪我でもあつては惡いゆゑ、其方は奥へ

經市　アイ。

ト二重へ上がると、自づと蚊帳にて覆ひ隱す。長五郎、右の柄杓のまゝ、ガブガブと飲む。肥前坊、心附き

肥前　ヤヽ、鍋の中には天龍沙、それ飲まれては、却つて金瘡

秀連　全快するなら、おれもあの湯を

ト刎れかへし、鍋へかゝらうとするを、長五郎、圍うて

長五　すりや、この中なるは藥湯とや。

三人　その息の根を

トかゝるを

長五　何を小癪な。

ト立ちかゝり、急に苦痛の思ひ入れにて

ヤヽヽヽ、藥湯とはいへども、次第に五體惱亂するは。

三人　觀念ひろげ。

ト長五郎を引立てる。長五郎、これを拂はんとして、手足きかぬゆゑ

長五　エヽコレ、うぬらが爲にこの吉祥。爰で死ぬるか。エヽ、口惜しい。

トだん〳〵體の叶はぬこなし。肥前坊、この體を見て

肥前　ハヽヽヽヽ、いくら踠いても、その樣子では、とても命はむづかしい。その懷に、慥か旗がある筈。此方へ捲きあげろ。

兩人　合點だ。

ト長五郎の懐中を探しても無きゆゑ

秀連　ヤヽ、旗を所持すると思ひの外、いつの間にやら、こかしたと見える。

肥前　ムウ、そんならござりませぬか……せう事がねえ。いつその腹癒せに

鐵平　こんな奴は、婆娑ふさげだ。

ト三人寄つて、こづき廻し

肥前　ドレ、そんなら止めを

ト上へ乘りかゝり、胸先へ突きつける。薄ドロ〳〵になり、長五郎、心附いたる思ひ入れにて、肥前坊を刎ねのける。兩人、恂りして、かゝるを、ちよつと立廻りあつて、キツと押へ

長五　金瘡治する上からは、どいつもこいつも、觀念なせ。

肥前　ヤア〳〵、吉祥、われが病氣は癒つたか。

兩人　こりやどうだ。

長五　息切れたりし某が、藥湯とは知らずして、飲めば忽ち五體惱亂、それより直ぐに金瘡全快、様子は尋ねし天龍沙、その徳なるか。アラ〳〵、喜ばしやなア。

肥前　樂が通らば生けては置かれぬ。うぬから先へ。

ト切つて行く。長五郎、立廻つて、有りあふ大鍋を肥前坊へぶッかぶせる。これにて肥前坊、苦しみ七顚八倒して、下手の壁の中へ轉げこむ。兩人、かゝるを立廻り、キッとなる。始終、ドロ〳〵にて蚊帳の上へ燒酎火燃え、蚊帳の中より經市、寶劍を持ち、長五郎の前へ、ツカ〳〵と出て

經市　モシ、こちの人。

長五　ヤ、其方は經市。して、その劍は。

經市　その御不審は御尤も。最前香魚を取り得んと、殺生禁斷の場所に於て、鵜網に引かれ、この寶劍不思議に手に入るその折から、掟を破りし身の科にて、簀卷の刑罪。我れは世に亡き身ながらも、お前に盡す一心にて、香魚のしるしは眼前に、金瘡癒やすのみならず、この經市が影身に添ひ、三國のお家再興を、願はん爲の、この寶劍、お前に渡して忠義が立てさせたく、それゆゑ爰まで

ト出す。長五郎、取つて押戴く。經市、二重へ上がる。

長五　さては我が難病を治せんが爲、命を捨てゝのその貞節。殊にこの寶劍は、三國の重寶、これまで取り得し志し、あたら命を石和の流れへ。ハテ、不便な者の身の果ぢやなア。

秀連　寶劍取らるゝ上からは、この家の前後に附け置きし、者共、ソレ。

ト下知する。藪蔭より捕り手六人、バラ〳〵と出て長五郎を取巻き

捕手　動くな。

長五　うぬら、寄つたら撫切りだぞ。

秀連　物を云はせず、討つて取れ。

捕手　やらぬヮ。

トかゝるを長五郎、大勢を切り拂ふ。この時、壁の破れより肥前坊、鍋をかむつて、最前倒れし道庵の襟首を掴み、引ッ立てゝ出る。皆々、見て

秀連　待て〳〵。此奴は慥かに法印め。醫者の道庵を引下げて、熱湯を浴びての大怪我は

鐵平　コリャ〳〵、法印、氣が附いたか。ドレ、先づ、この鍋を、ふんだくれ。

捕手　ドレ。

ト手をかけようとする。

肥前　待てエヽ。

皆々　なんと。

肥前　待ちやがれエヽ。

ト流しになり、大鍋二つに割れ、肥前坊、眞赤になり、頭を火傷の心にて、介抱の大勢を、一々に取つて投げ、キッと見得。

長五 おのれは法印。熱湯浴びて最期ぞと、思ふに相違の、この體は。

肥前 惡事つのつて法印が、吉祥さまに大鍋の、この藥湯をかぶせられ、たうとう來たといふ隙なく、既に彼の地へ薩摩ぶし、南蠻國より日の本へ、渡り來りし異國人、コロリとごねた夢心、法華を守りの守護神より、爰へ蘇生の修驗者も、今といふ今さつぱりと、善に導く時を得て、再び開く御法の梅、その日蓮の御弟子となる。うぬら、寄つたら毆り倒すぞ。

皆々 イヤア。

道庵 おれも次手に蘇生した、法華信者の道庵が、死んぢやア築地へ歸られねえ。

長五 惡念發起の上からは、法華に歸依なす法名も、日の一字を賜はつて

肥前 末の世までも鍋かむり、日親法師と名に呼ばん。時代は餘ッほど遲るゝとも、そこが利益の狂言綺語、割れ鍋とぢ鍋はりま鍋、芝居はめでたくいりとり鍋。誰れだと思ふ、アヽ、つがもねえ。

秀連 面倒な。ソレ。

捕手 やらぬワ。

道庵　うぬらは醫者が

　　ト どんくにて道庵、天秤棒を持つて捕り手を追ひ散らし、向うへ入る。

長五　寶劍御旗揃ひし上は
肥前　急いで三國のお家再興。
長五　さはさりながら淺ましき、女が最期の追善供養。
肥前　修驗のいらたか、今より切つて

　　ト 珠數を切り、軒の鵜の塒屋へ打ちつける。塒屋より鵜二羽飛び出て、前の流れの浮き死骸に群がる。

長五　これも罪障滅する爲の
肥前　あの世の苦患、助かる七字。
長五　小石に書きし題目も、これぞ末世の鵜飼石。

　　ト 件の題目の書いてある小石を取つて、川中の死骸のあたりへ打込む。ドロくになり、鵜は飛び去る。心火燃えて、水中の死骸、スツクと立つ。經市、見て

經市　ヤヽ、母樣が

　　ト 死骸へ駈けよる。この時、後にて附け聲。

かん　今ぞ成佛。しるしを見せん。

秀連　うぬを。

トかゝるを長五郎、拔討ちに秀連を切る。肥前坊は以前の大石を取つて鐵平へ打ちつける。この時、死骸、バラ〳〵と碎けて、金鍍金の七字の題目現はれ、花降り下る。ドロ〳〵生け殺し。

長肥　黄泉流布の

ト鐵平、おこつくを踏みつける。長五郎は經市の手を持ち添へる。肥前坊も一緒に手を合す。チョンと木の頭。七字の題目、ドロ〳〵にて日覆へ上がる。舞臺の兩人、これを見上げる。キザミにて、ひやうし

幕

第一番目　大詰　波木井館の場

役名――座頭、菊市 實ハ日蓮上人。法華長五郎 實ハ三國吉祥丸。波木井息女、七里姫。腰元、小室、同、富士川。日蓮上人 實ハ弟子僧日增。惟康君。中納言兼豐。東條左衞門景信。東條次郎景成。波木井庄司俊次。唐使、龍宮律師。同、等鎭西。鹿島事觸れ、豐作 實ハ片瀨の漁師捨吉 本名北條天一丸長時。妙法丸の船頭、彌三郎 實ハ蒙古の帝烏樞丸。

本舞臺、三間の間、高足の二重。金襖。瓦燈口。純張。上の方、塗り骨の障子屋體。幕の内より庄司、上下衣裳、老けたる拵らへ。景信、景成、上下衣裳、大小。龍官、唐僧の衣、頭巾、拂子を持ち、等鎭西、唐人にて、唐物の献上物、いろ／＼並べ、足輕兩人、警固してゐる。すべて、鎌倉、波木井庄司屋敷の體。舞の鳴り物にて幕開く。

足輕　ヤア／＼、異國人、鎌倉の諸侯、波木井の庄司どのゝ御邸宅なるぞ。

同　謹しんで言上いたされよ。

龍等　ハヽア。

ト平伏する。唐樂に變り、皆々こなしあつて

等鎭　棧土見多山大入々々。

龍官　先づ待たれよ等鎭西、和朝の國主へ言上すべき事あつて、渡海いたせし我れ／＼。唐音にては如何、和言を以て申されよ。

等鎭　イカサマ、聖の申さるゝ如く、然らば日本の詞にて、申しあぐるでござりませう。

景信　ハテ、異國人は器用もの。今の唐音に引かへて、忽ち變る日本詞。

景成　五音相當相わかる上は、通辭が無くとも事は解らう。身は鎌倉の諸侯、東條左衛門景成と申すも

の。

庄司　唐僧龍宮律師とやら、はる〴〵の波濤を越し、この波木井の庄司について、願ひとあらば何事によらず、一通り申しあげい。

等鎮　こは有り難き上官のお詞。我れ賤しくも高麗の國主より、命を蒙むり、この日の本へ渡りし仔細、餘の儀にあらず。

龍官　この秋津洲は双柱の尊、開國ありし神國なれど、當時佛法盛んにして、宗旨宗門數多あれど、未だ日本へ弘通なさゞる、バテレンの一宗、何卒この日の本へ、擴めたき愚僧が願ひ。

等鎮　お聞濟み下さらば、國主は勿論、唐使の拙者も身の大慶。

兩人　この儀、偏へに願ひまする。

景信　成る程、兩人の願ひ、一通りは聞えたが、して、その宗門、諸人を歸伏の利益はいかに。

等鎮　バテレンの祕文を呪す時は、先づ第一に壽命長久、福德自在は心のまゝ。

景成　それは奇妙々々。第一、壽命長久福德自在とあらば、何よりの事。余人は格別、早速我れらは、御坊の弟子になりたいな。

庄司　ハヽヽヽヽ、凡そ人たるもの、神儒佛へ歸依するに、利慾を以て何の感應あるべきや。察する

景成　ところ、人を惑はす妖術邪法、取るに足らざる賣僧同然、疾く〳〵歸帆申しつけさつしやい。

景成　貴殿のお詞、御尤もではござれども、この御坊を賣僧と云はつしやるが、唐高麗ばかりではござらぬ。當鎌倉にも賣僧坊主が、人を惑はしまするが、おてまへの目にはかゝりませぬか。

庄司　人を惑はす賣僧とは、そりや何者。

景信　ハテ知れた事、しかも房州三國家の嫡子、世を見限つて靑同心、名も日蓮と改めて、法華經を擴めんとは片腹痛い。

景成　その日蓮めが邪法を行ひ、多くの人民を惑はし、尊き他宗を斥けんとするゆゑ、諸天善神の祟りにて、この鎌倉に雨一滴も降らざるは、天の憎み給ふところか、但し將軍の御威勢の薄いのか。ハテサテ、氣の毒千萬な。

景信　幸ひなる龍官律師、この雨乞ひ、貴僧に申しつくる。事成就いたさば、それを功にお上へ願ひ、バテレンの宗門、擴めさするワ。喜べ〳〵。

等鎭　ハヽア、有り難き其お詞、宗門弘通の手始めに、龍官律師の祕法を以て

龍官　今明兩日のうちに雨を呼び、奇瑞の程を御覽に入れん。少つともお氣遣ひなされまするな。

庄司　事をかしきその一言。この日の本は神の國、當時さま〴〵の名僧智識あつて、諸天善神を祈ると

いへど、そのしるしなき鎌倉の干魃。賣僧風情が及ばぬ事を。片時も早く歸國いたせ。

景成　左様ではござらうが、國主より唐使を添へて、來朝いたせば

景信　一通り御詮議あつて、成る成らざるは評議の上、この兩人を歸國させるが、武朝の公と申すものではござらぬか。

庄司　イカサマ、この趣き、執權職へもお聞きに達せん。

景成　然らば異國の兩人は

景信　別間を設け、暫時休息。

兩人　ハッ、有り難うござりまする。

ト唐樂になり、等鎮西、龍官、足輕に附いて奥へ入る。あと合ひ方變り、三人こなしある。向うより侍ひ一人、立ち出て來り

侍ひ　ハッ、申しあげまする。この度、伊豆の伊東の濱、難風にて、數多の大船覆へる、其うち一艘、別條なく、當鎌倉へ着船仕りましたるゆゑ、お訴へ申しあげます。

庄司　難船の者とあれば、打捨て置かれぬ。吟味の上、歸國申しつける。これへと申せ。

侍ひ　ハッ。

ト向うへ向ひ

伊豆の浦にて難船の者ども。波木井庄司どのゝお召し、急いでこれへ。

ト向う揚げ幕の内にて

彌三　サア〳〵、乘合ひの衆、お殿樣のお召しだ。斯うござりませ〳〵。

トてんつゝになり、向うより彌三郞、柿の筒袍、同じく脚絆、大船の舵子の拵らへ。菊市、坊主按摩にて、杖を突き、傘を脊負ひ、豐作、鹿島の事觸れ、粕烏帽子、烏萬度を持ち、後より侍ひ、六尺棒を持ち、皆々を制し、出て來る。

侍一　コリヤ〳〵、難船の者ども。あれにござるは、御當家の御主人樣。

侍二　扣へませう〳〵。

彌三　ハイ〳〵、左樣なら、あなたが、この國の、お殿樣でござりまするか。

菊市　私しは、菊市と申します、座頭の坊でござりまする。生國は越後の者。昔、わし等が親仁は、此やうなお屋敷へあがつては、木琴ばかり打つたもの。それに引かへ、わしは不器用者でござるから、何も知り申さぬけれども、早く國へ歸るやう、よろしくお願ひ申します。

豐作　鹿島の事觸れでおぢやり申す。今年は世がよい豐年で、諸國へ稼ぎに出たところ、思ひがけない

この難風。

菊市　お船頭の彌三郎どのとやら、こりや、どうしたらようござらう。

彌三　ハテ、たとへどのやうな大風が吹かうと、妙法丸の船頭、彌三郎が附いて居れば、こなた衆に怪我をさせる事ではない。其やうに悲しい、涙の汁こぼしても、この屋形船へ來れば、大船に乘つた氣で、ニタリ／＼と笑つてゐなさい。

菊市　いゝ、ちふきに船頭どの、どういふかこの因緣やら、水主た事が緣になり、こなたの船にもやひ綱、一夜も旅の枕箱、我が身抓つて人の板子も知るとやら、何かにつけて、ろかいゝお世話でござりました。

皆々　何を云はつしやる。

トてんつゝにて、花道の人數、舞臺へ來る。

景信　ヤイ／＼、爰をどこだと思ふ。鎌倉の老臣、波木井どのゝ御邸宅。慮外いたすと免さぬぞ。

景成　殊にこの程、蒙古の一族、やゝともすれば日本を覆へさんと、兵船を浮べ、海内に漂ふとの訴たへ。

庄司　油斷ならざる今この時。たとへ日の本の船にもせよ、難船とあらば、一通り吟味の上、領主へ相

渡すが天下の法。して、その船主は、いづくの誰れで、名は何と申す。

彌三　私しは伊豆の下田の船持ち、妙法丸の彌三郎と申す者でござりますが、この相模へ干鰯を積んで戻り船、同者衆を乘せたところ、伊東の端で難風にあひ、命から〴〵これまで參りました。御吟味とやらが相濟んだなら、ちつとも早く國元へ

三人　お歸し下さりませうなら、有り難う存じます。

景信　いかにも聞き屆けた。一通り吟味の上、めい〳〵歸國申しつけるであらう。

景成　併しながら、見ましたところ、三人の者ども、外を內と致す船頭、事觸れ、按摩取り、諸國を歩く其うちに、いろ〳〵な面白い話しがあらうな。

菊市　イヤモウ、見た事は無けれども、話しに聞いた化け物幽靈、湊々の色話し。

豐作　その事觸れは鹿島の名所、末無し川に神社の御手洗、深い淺いの色容は、潮來出島の眞菰ヶ淵。

彌三　船の噂はせぬものなれど、底拔け柄杓を借りにくる、平の知盛、船幽靈、その外、鰐鮫、赤によらう、大蛤から蜃氣樓、龍宮城の乙姫に、清玄もどきの海坊主、これらは大抵、怖い話しではござりませぬ。

景成　イカサマ、これは一興。庄司どのゝ御息女七里姬には、この程御病氣との事。彼れらを側へ召し

寄せ、諸國の話しも病床の保養。この儀、如何でござらう。

庄司　御親切、忝うござる。娘ことも、この程の病氣、俗に申すぶら〳〵病ひ、斯樣な話しも又一興。奥にてゆるりと麁酒一獻。

菊市　ヤア、そんなら私しどもに、御酒を下されますとや。エヽ、有り難う存じます。

トこの時、向うにて

呼び　勅使。

ト呼ぶ。皆々思ひ入れ。

庄司　ハテ、心得ぬ俄のお勅使。

景信　何も兎もあれ、勅使をお迎ひ。

景成　其方どもは、罷り立て。

彌三　左樣なら、お殿樣。

三人　お次で御馳走になりませう。

ト管絃になり、彌三郎菊市興作、下座へ入る。

呼び　勅使。

ト呼ぶ。下がり葉になり、向うより兼豊、冠り裝束、公卿の拵らへ。惟康、紫の法衣、七條の袈裟、刺貫にて、柄香爐を持ち、びらうど張り切り下げ髪、有髪の僧。仕丁大勢、參內傘、沓の臺を持ち、出て來る。舞臺の皆々、平伏して

庄司　思ひよらざる今日のお勅使。拙者ことは、當家の主、波木井庄司俊次と申す者。

景成　御來着、疾にも御沙汰あるなれば、設けの席へ御招待申すべきに、不時の事ゆゑその意に任せず無禮の段、幾重にも御容赦下さりませう。

三人　して、お勅使樣には。

兼豊　初めて下向の東路へ、勅使に立ちし某は、岩倉少納言兼豊。

惟康　紫衣の沙門は見損じあらん。物憂き月日を立つか弓、八重九重に住み馴れし、御所をも今は餘所になし、出家堅固のこの惟康。

三人　すりや、惟康さまにて渡らせ給ふか。

庄司　それと存ぜぬ臣等が無禮。そこは端近、先づ〱これへ。

兩人　然らばそれへ罷り通る。

ト鳴り物にて兩人、上手へ住ふ。仕丁は下の方に扣へる。

庄司　恐れながら、兩卿へ伺ひ奉る。はる〳〵都の御下向、御苦勞千萬に存じます。何は兎もあれ、勅諚の趣、一通り仰せ聞けられ下さりませう。

兼豐　この度の勅使、余の儀にあらず。御先例に任せ、天下の政治を司り給ふ宗尊親王、歿り給ふ上は、家に柱の無きが如く、萬民の嘆きいかばかり。さるによつて、御實子たる惟康君には、世を味氣なく思し召し、御遁世のお望みなれど、たつて御還俗を勸め奉り、天下の柱となさん爲、これまで御入りまし〳〵たり。いま天下の司は惟康君。方々、警固いたしてよからう。

庄司　有り難きその御諚、臣等が喜び、これに過ぎず。さりながら、重時公の、常々某へお物語り。我れに一人の男子ありと雖も、彼れは四十二の二ツ子なるゆゑ、北條の跡目繼がさんにも、心がかり。世俗の譬へに等しく、お家の重寶、三ツ鱗を添へ、人知れず七里ケ濱へ捨子のまねび。近習の者ども、遠目にこれを守護するところ、何者とも知れず、御幼君に添へたる三ツ鱗もろとも、拾ひ取つて行方知れず。この君未だ御存生ならば、天晴れ天下の好き執權。

景成　これサ〳〵、死んだ子の年とやらで、役にも立たぬ長評議。それより早い近道はござるまいか。

庄司　然らば御還俗こそ幸ひ、天下の柱は惟康君。

惟康　いやとよ　方々の心遣ひ、さる事ながら、佛へ歸依のこの惟康、四海の政治は思ひも依らず。只

景成　この上は執權職たる、北條重時と申し合せ、國家の納まり、よきに計らへ。

景成　成る程、これは好い御料簡。生ぬるい公卿の天下、執權の重時は病氣、惟康君は坊主になるとあれば、誰れ彼れと云はうより、天下の政治はこの東條。勅使も君も、早く都へ戻らつしやい。今よりしては、この景成が天下。座が高い、下がれエヽ。

ト思ひ入れ。この時、奥より彌三郎、以前の形にて窺ひ出て、景成を見て

彌三　モシ〳〵、天下さん〳〵、ちよつとお目にかゝりたい。

景成　オイ〳〵……イヤ、これは先刻の船衆。藝者なら、直してやれ〳〵。

彌三　見通しの藝者衆は、お直しだよ。

景成　アイヽヽヽ。

ト景信、思ひ入れあつて

景信　何を云はつしやる。

景成　ヤイ〳〵、此奴、なんで身共を煽てるのぢや。身共は今より、天下だぞ〳〵。

彌三　ナニ、お前は天下だ。そりやァ天下ぢやァあるめえ、泡を吹く癲癇であらう。

景成　ヤイ〳〵、又しても身共を安くするな。

彌三　安いとも〳〵、先づ第一、頭の様子がなめら蛇、左右の腕が宮重大根、くわべら足に、どんぐり眼。

景信　ヤア、最前からの雜言過言。

景成　生けては置かれぬ。觀念いたせ。

ト兩人、打つてかゝる。彌三郎、支へて

彌三　なまくら物の耳くぢり、ヂタバタせずと、納めさつしやい。

兩人　慮外な下郎め。

ト又切つてかゝるを、彌三郎、キツと留めて

彌三　ヤア、家來の身として、主人に刃向ふ大罪人、白刃を納めて三拜いたせ。

兩人　ナニ、我れ〳〵を家來とな。

庄司　して又、下郎の身の上は。

彌三　下郎とは否長なり、我れも名乘れば北條の嫡子、幼名は天一丸、平の長時。

皆々　ヤヽ、なんと。

彌三　上使を始め、がらくためら、座が高い、下がれエヽ。

ト惟康・兼豊を下へ落し、二重に上がり、思ひ入れ。管絃になり、よろしくこなし。

惟康　ヤア、上使へ對し、緩怠至極。

兼豊　北條の嫡子長時と申すには、なんぞ慥かな證據の無い事申さうや。

彌三　氏も系圖も連綿たる、故鄕へ戻る錦の守、内に籠めたるこの一品。

ト守を出す。

皆々　錦に包みしその品は。

彌三　これこそ先祖北條時政、未だ平家に仕へし砌り、宿願の旨あつて、江の島辨財天に通夜の折から夢中に授かる三ツ鱗。それより代々、北條一家の家紋と定む。さすれば我れは、紛ふ方なき平の嫡子。

庄司　さるにても、合點ゆかざる御身の成行き。

彌三　ホヽウ、不審な尤も。某、下賤に生ひ立ち、人となり、今まで素性を知らざりしが、肌身離さぬこの品といひ、庄司が今の物語り、紛ふ方なきこの場の割符。某が生ひ立ち、知れたる上からは今よりしては、天下の執權は北條長時、みな萬歳を唱へてよからう。

兼豊　北條の血脈たる長時、天下を統るものなれば、我れも一つの安堵なり。これにつけても、囚はれ

となりし法華經の行者日蓮ことは、御制禁たる宗旨を擴むるゆゑ、未だ獄屋に糺明申しつけてござります。

彌三　出かした〳〵。秋津洲は神の國、天下の政治に坊主は無益。これへ呼び出し、成敗いたせ。

景時　畏まつてござります。

庄司　君のお怒り、さる事ながら、囚はれの日蓮も、三界無庵と申せども、元は正しき三國の嫡子。

惟康　今は果敢なき囚人も、放しやるのは天下の公け。

兼豐　殊には一度龍の口、大難遁がれし沙門の身の上。

三人　何卒助命を。

彌三　役にも立たぬその繰り言。賣僧を成敗する間、我れも衣服を改めん。景成、用意。

庄司　すりや、どうあつても。

彌三　云ふにや及ぶ。

庄司　是非とも助命を

　　ト彌三郎へ寄らうとする。景信、支へる。

彌三　未練な繰り言、下がり居らう。

ト庄司を振り放し、三人、キツと思ひ入れ。管絃になり、簾バラリと下り、舞臺には惟康、兼豊、景成、殘る。三人、こなしあつて

惟康　すりや、日蓮が助命相叶はぬとか。ハヽア。

ト思ひ入れ。景成、見て

景成　いくら法華經の最屓めされても、元が賣僧の日蓮坊。いま首落すを、見物さつしやい……ヤアヤア、者ども、囚人の日蓮を、これへ引出せ。

四人　囚人、立ちませう。

ト時の太鼓になり、向うより日増、淺黄木綿、囚人の出家にて、繩附きの拵らへ。後より捕り手四人繩を取り。警固して出て來り

四人　下に居らう。

捕手　ハツ、仰せに隨ひ、日蓮坊を、引据ゑましてござります。

景成　ヤイ、日蓮、おのれ先日、龍の口にて、首の座に直り、危ふき難を遁がれしが、その後更に行くへ知れず。所に又もや、法華經を擴めんと、諸人を惑はす由、上聞に達し、草を分けて詮議すれども、在所知れず。然るに其方、日蓮なりと名乗つて出たが、身共は未だ日蓮とやらの面體は知

らぬが、其方、いよ〳〵日蓮か。

日増　こは検非違使の詞とも覺えず。宗祖日蓮は本朝の沙門、法華經弘通の身でござれば、何しに僞り申すべき。

景成　すりや、いよ〳〵其方は日蓮。

日増　思ひがけなき龍の口、虎口を遁がれ落ち行きしが、又ぞろこの身をお尋ねに、遁がれ難なき天の網。かゝる憂目はかねての覺悟。

景成　流石は出家、よい覺悟。今に首を打ち落す。觀念いたせ。

惟康　左衛門景成、暫らく待て……イヤナニ、日蓮とやら、一宗を建立せんと、強情なる貴僧の心底

兼豐　佛法弘通とあるからは、この宗門にも限るまじ。改宗なさば、慈悲は上より。

惟康　我れ〳〵が身にかへ、貴僧の助命を申しうけるが

景成　イヤ、成りませぬ。たとへ改宗いたせばとて、一旦邪法を擴めし日蓮、この場に於て首打ち落す者ども、賣僧めを引据ゑい。

四人　ハ、ア。

ト立ちかゝる。

日増　すりや、いよ〳〵拙僧を
景成　成敗いたす。覺悟ひろげ。

ト刀を引提げ、立かゝらうとする。この時、下手に扣へし仕丁の中より長五郎、白張、仕丁の粕烏帽子の形にて、ツカ〳〵と走り出て來り、景成を支へて

長五　モシ〳〵、お侍ひ様、待たつしやりませ〳〵。
景成　ヤイ〳〵、見ればおのれは上使の供、下素下郎の分際として、なんで身共を支へるのだ。
長五　全くあなたを、支へますではござりませぬが、見たところが、まだ年若な御出家様、盜賊夜盜でもあるまいに、なんで首を切らつしやります。
景成　ハテ、知れた事、この日蓮といふ奴、邪法を行ひ、人を惑はし、法華經とやらを擴めるゆゑ
長五　それで首を切らつしやりますのか。
景成　いかにも。
長五　法華經を擴むるのが惡いとあつて、首を切ると云はつしやるなら、この日蓮どのより高くとまつてござる、惟康さまから、先へ首を打たつしやりませ。
惟康　コリヤ〳〵、下郎、何ゆゑ麿が首を打てとは。

長五　ハテ、知れた事、人も知つたる三衣の法華經、いま初めて聞いたか何ぞのやうに、邪法と譏り止めるは、こなた衆の智慧が足りぬゆゑの事。かゝる有り難い法華經を、信心する人が惡いなら、天臺大師の跡を追ふ、出家姿の惟康さまを、あなたは首を打たつしやりますか。
景成　サ、それは。
長五　但し、政道に依估がござるか。
景成　サ、それは。
長五　惟康さまも同罪か。
景成　サ、それは。
兩人　サア〳〵〳〵。
長五　なんと一言も、ござるまいがの。
ト思ひ入れ。この時、簾の内にて
彌三　ヤア〳〵、左衞門、何ゆゑ賣僧が首打たぬ。長時、これにて實檢いたさう。
ト音樂になり、簾を卷きあげる。内に彌三郎、誂らへの鉢かつら、壺折衣裳に着替へ、褥の上に座し、脇息にもたれゐる見得。景成、これを見て

景成　我が君の出御。下郎め、下がれ。

長五　ハイ〳〵、御免下さりませ〳〵。

ト下の方へ蹲まる。

彌三　今これにて仔細を聞くに、口賢き彼れらが一言。諸宗の元祖は釋迦とあれば、元の一木より枝葉を生ず。それに何ぞや、念佛無間、禪天魔と、他宗を譏り、我が宗門を擴めんとは、大膽不敵の賣僧づく入、その肩を持つあの下郎、今日歸國の長時が、白刃を試すに好き幸ひ。おのれも共に

ト つか〳〵と走り寄つて、長五郎に切つてかゝる。

長五　御免なされませ〳〵。

彌三　何を未練な。

トまくしかけ、切つてかゝる。長五郎、支へる。ちよつと立廻つて、兩人、キツと顔見合せ

ヤア、こなたは。

長五　イヤア、鎌倉の執權、北條長時どのとは、こなたの事か。

彌三　さう云はつしやるは、兄貴の法華長五郎どの。

長五　弟の船乗り彌三郎。ヤレ〳〵、久しぶりで、とんだ所で逢つたなア。

景成　ヤア、そんならお大將樣と、あの下郎は
三人　兄弟にてありしよな。
彌三　イヤサ、彼れとは、誠の兄弟ではなけれども
　ト皆々へ心遣ひの思ひ入れあつて
　ハテ、思ひがけない長五郎どの。
長五　マア〳〵、おぬしも無事で、めでたい〳〵。久しぶりだ、いろ〳〵の話しもあり、ゆるりと話さうぢやないか。
彌三　それがいゝ〳〵。マア、平にゐさつしやい。
長五　どなたも御免なさい。
　ト合ひ方になり、兩人、打解けたる思ひ入れにて
彌三　こなたには久しぶり、なんぞ馳走をしたいが、誰ぞ、銚子を持て〳〵。
長五　アヽ、コレ〳〵、銚子なぞと、其やうな堅い事ぢやァ氣が詰まる。おぬしは、近所の酒屋に顏が利くなら、劍菱を五合、青蕃椒の奴豆腐で、一杯けづらう。其うち、夕河岸も來るであらう。ちよつと五合、あてゝ來さツし。

彌三　おれもこの頃は、顏が惡くなつて、さつぱり當身が利かねえが、西の宮の御用を口說いて見ようか。

長五　それも面倒なら、上の着物をぶち殺して、下馬にならつしやいな。

彌三　この着物も、昨日、大家さんの吊ひに行かにやァならねえゆゑ、よんどころなく七ツ屋の番頭を口說いて借りて來たが、こいつを喰はさうか。

ト此せりふのうち、三人、呆れし思ひ入れ。

長五　それがいゝ〳〵。

ト彌三郎の形を見て

イヤア、おぬしは大分工面がいゝな。富でも取りやァしねえか。

彌三　なにサ、おらァちつと譯があつて、今日から北條長時といふ、出來合ひのお大將樣よ。

長五　ハヽア、そんならおぬしの今の名は、長時といふか。

彌三　鎌倉の執權、北條相摸の冠者、平の長時といふのサ。

長五　ハテ、むづかしい名だなァ。時に、長公や。

彌三　アヽコレ、身共は當時執權職の、北條長時ぢやぞ。

ト皆々、心遣ひの思ひ入れ。長五郎、呑みこみ

長五　成る程〳〵、あなたは鎌倉の執權職、北條長時さま。ハツ〳〵〳〵、恐れあり〳〵。

ト兩手を突いて辭儀する。

彌三　これサ〳〵、いゝ加減に人をちよつくり返さつしやいな。それぢやアおらア、穴へでも入りたい。

長五　穴といへば、おらア阿母の腹から出て、慥かおれが四ツ五ツの頃、おらが阿母が七里ケ濱から、捨子のおぬしを拾ひあげ、育てたところが、おれは兄、其方は弟。其うちおぬしは家出して、行くへ知れず。巡り逢つた捨子の弟彌三郎が、北條長時さまとは、とんだ釜茶が藥罐と云はうか。道理やら、請地の松が逆に見えるわえ。

彌三　世の盛衰は計り難し。人は氏より育ちといへど、只捨て難きはこの一品。

ト以前の三ツ鱗の入りし守り袋を見せる。

長五　その守り袋は、おぬしを拾ひし時、側にあつたる三ツ鱗。

彌三　これこそ北條血脈の系圖。

長五　どうやら怪しい長時どの。

彌三　ヤア。

長五　イヤサ、長時公には天下の執權、賤しき下郞が同席いたすも

彌三　イヽヤ、苦しうない。一度兄と敬ふ上は、弟の出世は互ひの果報。身不肖なれども某は、當時武官の棟梁なれば

惟康　四海を握る北條長時、その連枝たる汝こそ

景成　天下の寶は心のまゝ、望むによつては國取り大名。

兼豐　其方、何なりと、思ふ事あらば願うて見よ。

彌三　長時、聞屆けてくれう。サヽ、申して見よ。

長五　有り難い其お詞。御覽の通り、下素下郞の身でござれば、浮世を樂に暮らしたいゆゑ、扶持も知行も望みにござりませぬが、只一つの、お願ひがござります。

彌三　して、その願ひは。

長五　大將樣と、わしが仲の、緣が切つてもらひたい。

皆々　そりや又、なぜに。

長五　ハテ、弟といひしは北條の血脈にて、當時天下の執權職、わしがやうな兄弟を持つては、政治の妨げ、それゆゑに、緣が切つてもらひたい。

彌三　ハヽア、潔白なるその一言。然らば望みに任せ、兄弟の縁もこれまで。赤の他人、縁切るしるし

ヤア／＼、申しつけたる品、これへ持て。

侍ひ　ハヽア。

ト奥より侍ひ、衣服大小を廣蓋に載せ、持つて出て來り、長五郎の前へ置いて入る。長五郎見て

長五　コレ、弟……イヤサ、長時公、縁切る證據に、この品は。

彌三　赤の他人となつたれども、見所ある其方ゆゑ、今より改め、汝は我れへ奉公いたせ。

長五　ヤヽ、なんと。

彌三　四條金吾賴基と改名いたし、長く我れへ忠勤いたせ。

長五　有り難きその御諚。然らば御意に任すでござりませう。

ト件の大小を取つて差す。

景成　なんと、金吾賴基どの、奉公始めの手柄が見たい。

長五　新參の某、奉公始めは幸ひなる、日蓮御坊は宗旨の根元、善惡邪正を糺せし上。

彌三　罪の輕重、よきに計らへ。

日増　すりや、金吾賴基には、愚僧が邪正を糺すとや。

長五　御身は正に貴けれど、時の權威に勝つ事あたはず。やがて望みは、身か胸中に……イヤサ、日蓮どのは、拙者が慥かに預かりました。

彌三　この上は、惟康君には、何卒天下の政道を。

惟康　イヽヤ、いかほど麿を勸むるとも、その器にあらねば、思ひもよらず。

日增　果報いみじきその御辭退。惟康君の御政治なら、佛法盛んであるべきに、思へば〳〵

ト思ひ入れ。

彌三　何を小癪なづく入め。惟康どのゝ辭退とあれば、天下の主はこの長時。位を辷つた上からは、惟康ならぬ只の道心、この場に叶はぬ、下がり居らう。

ト惟康を突きのけ、足下にかけようとする。大ドロ〳〵になり、彌三郎の五體すくむ。皆々見て

皆々　これは。

ト思ひ入れ。彌三郎、心附き

彌三　心得がたき今の動搖、さてこそ尋ぬる御旗の威德か。

惟康　イヽヤ、三衣を穢す、その身の佛罰。

日增　今に報ひは北條一族。

彌三　とはいへ、慥かに。

ト惟康へかゝらうとするを、長五郎、彌三郎を押し隔て

長五　然らば、我が君樣。

景成　萬事は後刻。

彌三　日蓮を、引立てい。

長五　科人、立たう。

ト管絃になり、惟康、兼豐、景成。長五郎は日增の繩を取り、件の衣服を抱へ、奥へ入る。彌三郎、殘り

彌三　無官と侮り惟康を、足下にかければ忽ちに、身動きならぬ今の動搖。察するところ惟康には、日の御旗を所持なすと覺えたり。何卒取り得て我が大望。ハテ、心いぶせき事ぢやなア。

ト思ひ入れ。この時、薄ドロ〳〵になり、上手の障子屋體へ、七頭の蛇、這ひまとふ。彌三郎、これへ目を附け、こなしあつて

心得がたきこの場の振舞ひ、頭七ツの小蛇の有樣、恐れ氣もなくあの一間を、目がけて頻りに立ちのぼるは、傳へ聞く、藤原の某、命によつて東夷征伐。凱陣の後、賞の薄きを憤り、自滅の

一念小蛇となる。跡にて妻が悲しさに、夫の墳墓へ、一首の歌は。

ト この時、上手の障子の内にて

七里 「果敢なくも、昨日の別れ惜しきかな、いつかは夫を長らへて見ん。」

彌三 ヤ、、あの聲は。

七里 誰そある。この障子、開いてたも。

ト この途端、件の小蛇消える。唄になり、屋體の障子を引抜く。内に七里姫、振り袖衣裳、扱帶、病鉢卷、結構なる夜着蒲團にもたれ、病中の思ひ入れ。彌三郎、この體を見て

彌三 ヤ、、其方は當家の息女、七里なるか。

七里 あなたは執權長時さま。病の床にこの姿。お目へかけるも君への恐れ。

ト 舞臺へ下りて、奥へ行かうとする。彌三郎、七里姫の裾を捕へ

彌三 コリヤ、七里には、いづれへ行く。

七里 サア、わたしは……オヽ、それ〳〵、あなたは御主人、自ら事は、見る影も無き庄司が娘、お目通り致すさへ、憚り多いに、殊には病中と申し、化粧は女の嗜み。それゆゑ、わたしは。

彌三 イヤ、肌あらはに夏の富士、矢ツ張り素顔が美しい。

七里　それぢやというて、

トまた行きにかゝるを、引寄せて

彌三　笄を外すは戀知らず。

七里　エヽ。

彌三　ハテ、あでやかな容貌ぢやなア。

ト七里姫に見惚れ、ヂツと思ひ入れ。誂らへの合ひ方になり、兩人、こなしあつて

七里　モシ、我が君樣、何ゆゑわたしを此やうに。

彌三　サア、そもじを留めた、身が心は。

七里　して、あなたのお心は。

彌三　サア、その心は……面目ないが、其方に惚れた。

七里　エヽ。

彌三　この長時は今日よりして、天下に活計歡樂なれば、命の外の萬寶に、富みし身ながら情なや、足らはぬものは閨の伽。心いぶせく思ふ折、思はず其方の容貌に、迷へば迷ふ二道の、戀は諸道の妨げなく、あたりに人目無きうちに、色よい返事を、七里姫。

七里　そんならどうでも。
彌三　後ともいはず、この場に於て
七里　君の心に、隨ふお請けを
彌三　そんなら、いよ〳〵。
七里　その御返事は、ハテ、何をがな。
ト思ひ入れ。合ひ方、活け殺しあつて、あたり見廻し、舞臺にありし傘を取り
憚りながら君への御返事。これ御覽下さりませ。
彌三　これは雨具の傘なるに、我れへの返事と、申す心は。
七里　傘の骨は六十六ケ國、紙一枚の心にて、下を憐れむ我が君様、御運めでたく開くとも、また傾むくも君のお心。それも轆轤の手加減一つ。
彌三　ハテ、頼もしい其方が心底。然らば予が胸中は、そぼ降る雨。外の吹雪に濡れざる時は
七里　いかにもあなたへ隨ひませう。
彌三　忝ない。寸善尺魔とあるからは、今宵ひそかに新枕と、申したいが七里姫には、外に戀路の男があらうが。

七里 どうしてわたしが、

彌三 イヽヤ、隱しても隱されぬ。最前よりの詞の端々、我れへ返事と思ひの外、よその男に濡れかゝる、破れても末は傘の、骨になるまで二世の緣、轆轤の手加減變らじと、夫へ誓ひし心の掛け金、なんと違ひはあるまいが。

七里 サア、それは。

彌三 我れを僞はる憎くい女め。イデ首打つて、最期の見せしめ。

七里 アヽモシ、これには段々

彌三 然らば我れに隨ふか。

七里 サア、それは。

彌三 辭むは男へ義理を立つるか。

七里 サア、それは。

兩人 サア〳〵〳〵

彌三 可愛さあまつて、おのれを一太刀。

ト刀を振りあげる。この時、奧より庄司、ツカ〳〵と走り寄つて、七里姫を圍ひ、彌三郎を留めて

庄司　我が君樣、先づ〳〵お待ち下されませう。

彌三　我れを僞はるあの女、身が手にかけて

ト思ひ入れ。

七里　其お怒りはさる事ながら、君は正しく御主人樣、卽時にお請けは諸士の思惑、殊には親の許さぬいたづらゆゑ、つれなく申すは女子の常。

庄司　この上は親がひに、拙者めが口說き落し、お心に隨はせませう。

七里　アモシ、父上樣、なんのわたしが

庄司　ハテ、萬事は身共が胸にある。

彌三　然らば姬が納得するまで、父たる庄司は暫時の人質。

七里　そんなら、お前は

庄司　お供いたすでござりませう。

彌三　親へ孝道立つるなら、今宵は夜とともに閨の伽。

七里　それぞこの身を業苦の責め。物憂き娑婆より仇し野の

庄司　花を散らすか散らさぬか、姬が心の一葉舟。

彌三　その楫枕、蜘蛛の、絲に寄るべの縁定め。
七里　結び返すか。
庄司　解きほどくか。
彌三　閨にかたしく
七里　衣の袖に
彌三　留め木かをらせ、待つてゐるぞよ。
　　ト唄になり、彌三郎、思ひ入れ、庄司附いて奥へ入る。七里姫殘り、こなしあつて
七里　長時さまの今の仰せ、拔差しならぬわたしの身の上。父樣は人質とあれば、我が君の御意を背く時は、御身の凶事は知れた事。親へ孝行盡す時は、思ふお方へ義理立たず。心は二つ、身は一つ
　　こりやマア、どうしたものであらうなア。
　　ト合ひ方になり、奥より腰元の小室、富士川、以前の豐作、菊市を目隱しの鬼にして、皆々出て來り
三人　鬼や〳〵、手の鳴る方へ〳〵。
菊市　捕まへて、茶を飲ましよ。
　　ト皆々逃げあるくを、菊市、捕へようとするはずみ、思はず七里姫を捕へ

七里　サア〳〵捕へた。こなたが鬼ぢや〳〵。

エヽ、人の氣も知らず、何しやるぞいなア。

トつんと思ひ入れ。菊市、悄りして

菊市　イヤア、こりや人違ひさうな。どなたか、眞平御免なさりませ〳〵。

小室　ヤア、いつの間にやら姫君樣。

豐作　そんならあなたは、この家のお娘御でござりまするか。ハテ、美しいたぼでおぢやり申す。

菊市　ナニ、美しいお姫樣がござる。ハテナ、せめてこの目が片々あらば、一目見たいよ君が顏。

ト唄のやうに云ふ。

小室　ほんに、氣の輕い座頭さん、最前よりの約束なれば

富士　この程よりお姫樣が御病氣、御氣欝を霽らすため、早うお側へ行て

兩人　早う面白いお話しを申しあげや。

菊市　たまげた事ばかり云はつしやる。田舍座頭でござれば、ほんの藝無し山猿同然。その代りに、御病氣ならば、腰でも肩でも、おッ捻つて進ぜますべい。

豐作　その田舍の話しが、却つてお慰み。

兩人 早うお側へ。

ト皆々捨ぜりふにて、菊市を連れて、七里姫の側へ行く。菊市、七里姫を探り見て

菊市 イカサマ、お姫であらう。着物の手觸り、こりや慥かに、錦裂れでござりませう。

七里 其方は盲人の身で、難船に遇ひしとは、定めて怖い事であつたであらうな。

菊市 イヤモウ、話しをしてさへ身が縮む。危ふき命を助かり申した。これも偏へに法華經の御利益。南無妙法蓮華經々々々々々々々。

ト手を合せて思ひ入れ。この時、七里姫、菊市を見て

七里 ヤア、その時のお方は、あなたぢや〳〵。

ト俄かに喜ぶ思ひ入れ。皆々見て

皆々 モシ〳〵、お姫様、そりや何を仰しやります。

七里 その時のお姿とは、變り果てた盲目の、よもやと思へど疑ひない。見染めたお方は、あなたぢやあなたぢや。

菊市 ハテ、異な事を云はつしやる。その時見染めたお方とは、そりや誰が事でござります。

七里 あなたの事でござんすわいなア。

菊市　イヤア、今年は南瓜が當つたか。そりや盲目ではござるまい、人違ひでござりませう。

七里　なんの見違へてよいものか。姿變れど、殿御はお前。

菊市　して、あなたが見染めし所は。

七里　しかも房州清澄寺。

菊市　ヤア、そんならいつぞや師の坊の

七里　お側離れぬ稚兒姿。

菊市　見染めし女性は、こなたであつたか。

七里　盡きぬ縁か。

菊市　變つた所で、逢ひましたなア。

　　ト思はず目を開く。皆々見て

皆々　あなたはお目が見えますか。

　　ト菊市、心附き

菊市　イヤ、內障の明き盲目、贋ひもない盲人でござります。

七里　たとへお目が盲ひたりとて、今さら變る心は無い。この世は愚か未來まで、必らず見捨てゝ下さ

んすなえ。

菊市　すりや、どうあつても

七里　變らぬ女夫でござんすぞえ。

菊市　佛へ誓ひの邪淫戒、なか〳〵以て拙僧は……イヤサ、私しは其やうな不義がましい事、御免なされて下さりませ。

七里　あなたを慕うてわたしが病、めぐり〳〵て盡きせぬ縁。

三人　早うお側へ、法師樣。

菊市　それぢやというて

ト思ひ入れ。

三人　モシ。

ト豐作、燭臺を吹き消し、女形に囁き、皆々、手早く褥を設け、女兩人、無理に菊市を連れて來る。豐作は七里姫に囁き、菊市の側へ突きやり

腰元　モシ、それでゆるりと。

豐作　コレ。

ト思ひ入れ。唄、時の鐘になり、三人、囁きあひ、奥へ入る。菊市、迷惑さうに思ひ入れ。七里姫、
嬉しきこなしあつて

七里　いつぞや淸澄にて、あなたを見染めしその時は、色を含みし稚兒櫻、今はお姿變れども、一旦思ひし殿御なら、今さらなんのいとひはない。サア、わたしが思ひを、晴らさせて下さんせ。

菊市　その志しは嬉しけれど、どうぞこの事ばかりは。

七里　叶はぬと仰しやりますか。

菊市　親の許さぬ不義いたづら。

七里　それゆゑ、あなたは

菊市　外面女菩薩、內心如夜叉。

七里　すりや、どうあつても

菊市　南無妙法蓮華經。

ト手を合せ思ひ入れ。此うち奥より景成、暗き心にて、窺ひ〱出て來り、この體を見て、ツカ〱と探り寄り、兩人を引ッ捕へ

景成　さてこそ爰に不義の兩人。

ト二人を捕へようとする。逃げようとする。立廻りのうち、奥より日増、これも暗き思ひ入れにて出て來り、件の樣子を聞き、探り寄つて菊市を奥の方へ突きかけるゆゑ、菊市は日增と知らず、虎口を遁がれし思ひ入れにて、探り〳〵奥へ入る。景成は菊市の心にて、日增と七里姫を捕へ

不義者を捕へた。燈を持たつしやい〳〵。

トこの聲に奥より景信、手燭を持ち、出て來り

景信　景成どの、不義の相手は何者でござる。

景成　一人は當家の七里姫。忍び男のしやツ面を

ト日增を見て

兩人　ヤア、不義の相手は先刻の日蓮。

トこれにて日增を見て

七里　ヤヽ、いつの間にやら、この御出家。

兩人　そんなら、うぬは

日增　これなる姬と、不義密通は愚僧でござる。

七里　なんのマア、お前のやうなお方に
日増　アヽコレ、不義の相手はこの日蓮。ナ、合點が行たか。
七里　イエ〳〵、たとへどのやうに云やしやんしても、わたしが殿御は、お前ぢやないわいな。
日増　アヽ、コレ〳〵、姿變れば見違ひは尤も。愚僧が未だ清澄山にて、藥王丸といひし時、見染めしはこの日蓮、ナ……さすれば不義は拙僧でござる……ハテ、左樣いたさねば、こなたの思ふお方の爲にならぬ。それぢやによつて不義の相手は、この日蓮でござります。
景信　日蓮は法華經の行者と思ひの外、不義を働らく色坊主。
景成　殊には囚人たる身を以て、いつの間に繩を引ツ切り、なぜ此あたりをへちまふのだ。
日増　サア、それは。
景信　その上、我が君の御心かけさせ給ふ七里姫、橫鬢切れば罪は同罪、兩人ともに縛り首。
景成　オット待つたり。坊主が憎けりや袈裟までとは申せども、姫は長時公の御執心、口說き落して我れらが手柄。
七里　たとへどのやうに云はうとも、長時さまの心に隨ふ事は、否ぢやわいなァ。
景成　其やうに我が君を嫌ふのも、此づく入があるゆゑの事。

景信　日蓮めは、この場に於て嬲り切り。
日増　命はこの世を捨て坊主、はや首打てや、東條左衛門。
景信　覺悟の上なら、片時も早く。
ト刀を振りあげる。
七里　アヽコレ。勿體ない、御出家様を
兩人　そんなら君の心に隨ふか。
七里　なんのマア、穢らはしい。
兩人　然らばこなたも同罪に。
七里　サア、それは。
景信　面倒な坊主め、うぬを。
ト切つてかゝる。日増、立廻つて、景信が白刃を取り、手早く咽喉へ突き立てる。皆々見て
皆々　ヤヽ、この體は。
日増　いま鎌倉の執權職、無成敗とは申しながら、重罪に伏すこの日蓮、今の自殺は佛の導き。邪慳の
この世を早去つて、佛果を得るも行者の德、これぞ妙法七字の功力。

兩人　急いであの世へ。
日增　介錯頼む。
景信　臨終稱念。
　　ト刀を取つて日增の首を打ち落し
七里　サア、七里どの、御意を背かばこの通り。どうでもこなたは我が君の
　仰せ背くは、かねての覺悟。
景成　ハテ、强情なその一言。
景信　この上は、上意を以て口說き落すワ。
七里　何を小癪な。
兩人　女め、うせう。
　　ト兩人、七里姫を引立て、奧へ入る。この時、正面の簾の内にて
惟康　いかに長時、麿はいよ〳〵天下の政治を。
彌三　惟康君の出御なるぞ。方々警固いたしてよからう。
　　ト早下がり葉になり、簾を捲きあげる。内に彌三郎、誂らへの形、小筒の鐵砲を持ち、惟康、金冠

白衣にて、立ち身。兩人、見得よく並び、こなしあつて

惟康　心得がたき長時の心底、最前麿につれなく當り、今また我れを敬ふは。

彌三　御不審な御尤も。御父君殁り給へば、君は正しく血脈ゆゑ、天下を治め給ふとも、誰れあつて辭まねども、當時武家の威勢強きゆゑ、後の憂ひとお察しあり、わざと出家の御望み。斯く申す北條長時、君を守護なす上からは、御安堵あれや、惟康君。

惟康　天晴れ忠臣、冠者長時、麿が天下を納むるに、諸人を歸伏は、何を以て。

彌三　それこそ御所持ありし日の御旗。月の御旗は行くへ知れねど、草を分つて詮議なし、日月の旗ひるがへし、民を威伏の御いさほし。

惟康　然らば所持なす日の御旗は、其方に預くる間、月の御旗を尋ね出し、二品揃へて天下の寶。

ト懐より日の旗を出し、彌三郎へ渡す。

彌三　然らば拙者、御旗を守護いたすでござりませう。

惟康　して、和朝へ貢ぎの者どもは。

彌三　仰せまでもなく、卽ちあれに扣へ置く……ヤア〳〵、異國の者ども、惟康君を拜し奉れ。

ト奥にて

龍等　ハヽア。

ト唐樂になり、龍官、等鎭西を先に、兼豐、景信、景成、出て來り

龍官　再び君の御治政とあれば

等鎭　礎かたき鎌倉御所。

景信　御入りある上からは

景成　今より法衣を脱がせ給ひ

兼豐　その御供は某が、路次の警護を致すでござらう。

彌三　御代を壽く扇ケ谷へ

惟康　然らば此まゝ。

彌三　君のお立ち。

皆々　ハヽア。

ト下がり羽になり、惟康に兼豐、等鎭西、龍官、景成、附いて向うへ入る。彌三郎、景信殘り、こなしあつて

景信　我が君樣。

彌三　まんまと首尾よく

景信　日の御旗を

彌三　コレ。

ト思ひ入れ。管絃になり

惟康どのに心をゆるさせ、我が手に入れし日の御旗。三國家に預かるところの、月の御旗の行くへは知れねど、今に味方へ取戻し、日月揃ふ上からは、大望成就は瞬くうち。併し、この御旗へ辰の年度の女の生血を注ぐ時は、我が行法も心に任せず。過ちあつては後での後悔。祕め置く所は、かねての手筈。其方は惟康どのゝ跡を慕ひ、この種ヶ島にて、たつた一打ち。

景信　すりや、拙者めは

彌三　必らず拔かるな。

景信　心得ました。

ト彌三郎より鐵砲を受取り、行かうとする。この時、奥より富士川、窺ひ出て

富士　聞捨てならぬ君の身の上。其方をやつては

景信　小癪な女め。

ト立廻りのうち、富士川、景信の鐵砲を取つて、筒先を向けて

富士　お騒ぎあらば御兩所樣、種ケ島にて、たつた一打ち。

景信　コレ、早まるな。

彌三　支へる女め。

ト富士川を引きつけるうち、景信は花道へ行きかけ、この體を見て

景信　跡追ひかけて惟康どのを。

彌三　早く行け。

景信　心得ました。

ト向うへ走り入る。富士川、彌三郎を振り切り、向うへ行きし景信を目當に、ドンと火蓋を切る。向うにて叫ぶ聲する。彌三郎、見て

彌三　ヤヽ、向ふ目當は、あの景信。

富士　慥かに手ごたへ。

彌三　邪魔な女め。

ト富士川を見事に切り下げる。この時　後より長五郎出て、彌三郎の持つたる件の旗を取つて、井筒

の中へ飛びこむ

南無三、御旗を

ト井筒の元へ行き、中を見ようとする。この時、井戸より煙硝火、パツと立つ。これをキツカケに遠寄せの頭を打ちこむ。彌三郎、こなしあつて、ツカ〳〵と來り、二重へ足を踏みかけ、向うをキツと見て

ハテ、心得ぬあの貝鉦。

ト思ひ入れ。この時、下家より左右へ槍を突き出す。彌三郎、ヂロリと見て

我れを取卷く知らせなるか。ハテ、小ざかしい。

トこなし。ドン〳〵にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、正面黑幕、諸所に松の立ち樹、同じく吊り枝。爰に長五郎、以前の形にて、振り亂したる七里姬を支へてゐる見得。山颪し、時の鐘にて道具とまる。

ト兩人、ちよつとほぐれて

七里　こりや、何ゆゑ自らを支へるのぢや。


清元延寿太夫



長五　この松葉ヶ谷のほとりにて、民を救ひの雨祈り、尊き僧の御座所ゆゑ、女を通す事能りならぬ。
七里　その尊き御方は、三國の公達、藥王丸さま。今は行者の日蓮上人、その御方こそ我が戀人。
長五　して又、あなたは、いづれの御息女。
七里　自らことは、波木井の庄司が娘、七里姫。
長五　すりや、辰の年月揃ひし、七里どのか。
七里　藥王丸さまのその頃に、一旦見初めし上からは、二世も變らぬ我が夫。
長五　イヽヤ、以前は以前、今は本朝の大沙門、法華經弘通の日蓮上人。
七里　還俗勸めて出家を落し、雨の祈りの行法を、破つてなりと自らが、思ひを晴らさで置くべきや。
長五　ハテ、是非もなきその心底。殊には年度揃ひし上は、不便ながらも、この場に於て。
七里　邪魔すりや其方も……觀念しや。

ト懷劍にて突いてかゝる。兩人、ちよつと立廻つて、キツと思ひ入れ。誂らへの鳴り物になり、よろしくある。立廻りのうち、長五郎の懷より日月の旗を落す。

長五　南無三、それを。

こりやコレ日月の旗。戀の叶はぬ上からは、引裂き捨てゝ

ト取りにかゝる。立廻りのうち長五郎、七里姫を一太刀切る。この血汐、旗にかゝりし體にて、大ドロ〳〵になり、件の旗は日覆へ引いて取る。この時、七ツの心火燃える。舞臺の左右へ蛙、大分群がる。

七里　ハテ、心得ぬ數多の蛙。

長五　さては血汐の穢れにて、天一丸が行ひし、蝦蟇の妖術消え失せしか。

七里　たとへこの身は果敢なくとも、思ひこんだる我が一念、思ひを晴らさで置くべきや。

長五　女が念は七ツの心火。さてこそ深澤の惡龍、法華經を妨げんと、假にこの世へ來りしか。今より汝を、七面大明神と勸請なさん。成佛得脫。

七里　イヽヤ、行法妨げいで置かうか。

長五　しぶとい女め。

ト切つてかゝる。大ドロ〳〵にて、長五郎、思はず後へタヂ〳〵となる。

止め刺さんと思ひしに、五體竦んで動かぬは、ハテ恐ろしき、執念ぢやなア。

ト七里姫、スックと立つて、撞となる。長五郎、この體を見て、キッと思ひ入れ。大ドロ〳〵、カケりにて、この道具廻る。

本舞臺、正面山幕、眞中に九尺の藁葺き屋體、三方へ伊豫簾。松葉ケ谷雨行の體、山颪し、時の鐘にて道具とまる。

ト大ドロ〳〵になり、日覆より以前の旗を屋體の内へ引いて取る。これをキツカケに、ドン〳〵、カケリになり、向うより捕り手四人、四天にて、めい〳〵槍を持ち、走り出て來る。後より彌三郎、肌脱ぎ衣裳にて、白刃を振つて、四人を追うて出て來り、花道にて、ちよつと立廻つて、舞臺へ來り

四人 動くなア。

彌三 ヤア、我れに刃向ふうんざいめら。我が行法にて皆殺し……南無さつたるま、ぐんだりぎやア、はらひそ〳〵。

ト祕文を行へど、そのしるし無きゆゑ

さては行法も消え失せしか。この上は死人の山。觀念いたせ。

四人 面倒な。ソレ

ト立廻りの鳴り物になり、彌三郎、四人を相手に存分タテあつて、皆々を向うへ追ひこみ、花道へかからうとする。この時、屋體の内にて

日蓮 曲者、待て。

トこれにて彌三郎、思ひ入れあつて、又行きにかゝる。

彌三　イヤサ、執權長時とは假の名、誠は蒙古の一族、帝烏樞丸、マア〳〵待て。

日蓮　何がなんと。

沙門ながらも日蓮上人、天一丸へ、見參々々。

トつッかけになり、屋體の簾を卷きあげる。內に日蓮上人、菊市の形とは變り、緋の襟立て衣、水晶の珠數を持ち、玉襷の形にて出て來る。彌三郎、これを見て、ツカ〳〵と舞臺へ戻り

彌三　合點ゆかざる日蓮が詞。我れは正しき北條の嫡子、當主に備はる平の長時。何ゆゑあつて蒙古の一族、帝烏樞丸とは見極めしぞ。

日蓮　汝いかほど陳ずるも、和國の者にあらざる事、早くも察せしこの日蓮。おのれ蝦蟇の妖術を以て雨を止め、萬民を苦しめるといへど、法華經の功力にて、今宵に滿つる雨の祈り。

彌三　たとへ甘露が降るとても、日月の旗失せたる上、我が計略にて、惟康を討つたる上は、治むる者無き闇同然。

日蓮　ヤヽ、すりや、惟康君には落命とや。

トこの時、向うにて

豐作　ヤアく、上人、氣遣ひあるな。北條天一丸長時、これにあり。

トまた下座にて

惟康　惟康も安泰にて

兼豐　我れく警衛いたしてござる。

トどんく、ツツカケになり、向うより豐作（二幕目の捨吉）長時にて、凛々しき形、後より軍兵大勢。下座より惟康・壺折衣裳。兼豐・景成、凛々しき出立ちにて、日月の旗を押し立て、腰元大勢。紅絹の鉢卷、長刀を持ち、双方より出て來る。彌三郎・この體を見て

彌三　ヤヽ、惟康はじめ旗もろとも、いつの間にやら守護なしたか。

豐作　愚なるその一言。汝いかほど計るとも、蒙古の軍船寄せたりとも

惟康　御旗の威德にて、皆海底の水屑となる。

景成　味方殘らず裏切りなせば

兼豐　一本立ちの蒙古の車騎將。

豐作　最早叶はぬ上からは、實名名乘つて

皆々　降參々々。

彌三　チエヽ、殘念や口惜しや、我れ日の本を切りなびけ、天下を握らんと思ひしに、神力應護に勝つ事能はず、計略の裏を搔かれしか。斯くなる上は名乘つて聞かさん、よつく聞け。誠我れこそ、蒙古の車騎將、李桃轉かいいかいたつが一子、日本にて人となつたる、帝烏楓丸とは、おれが事だワ。

ト誂らへ引拔き、唐衣裳の形になる。皆々、見て

皆々　さてこそなア。

彌三　この上は、日蓮はじめ、どいつも此奴も觀念なせ。

皆々　何を小癪な。

日蓮　ヤレ待たれよ、方々。雨を祈りのこの壇上、血汐の穢れは恐れあり。

惟康　見逃がし歸すも天下の公。

豐作　仁義に恥ぢて、この場を早く。

彌三　また重ねての再會は、首を洗つて、お待ちやれ惟康。

日蓮　先づそれまでは

皆々　帝烏楓丸。

彌三　方々





皆々　さらば。

彌三　これより二番目始まり、左樣に御覽下さりませう。

ト眞中に彌三郎、岩臺へ上がる。鱗の皆々、棹に居並び、その脇に日蓮は立ち身。その外よろしく、引張りの見得。すべて身延山、高臺石の模樣。誂らへの通り、一番目打込みにて　幕

第二番目　序幕　木下川堤の場

浄瑠璃　色彩間苅豆　清元連中

役名──木下川與右衞門實ハ久保田金五郎。腰元、累。

本舞臺、三間の間、うしろ淺黄幕、誂らへの草土手、柳の立ち木、同じく吊り枝澤山とりつけ、上の方に消元連中居並び、舞臺先き蛇籠を伏せたるしがらみ附きの浪板、木下川堤といふ旁示杙、本雨の樋、すべて誂らへの通り、時の鐘、浪の音にて幕明く。

ト吉例の通り頭取出て、浄瑠璃の役ぶれ口上あつて、直ぐに前彈きにかゝる。

〽思ひをも心も人に染まばこそ、戀と夕顏夏草の、消ゆる間近き末のつゆ、元の雫や世の中の、おくれ先立つ二道を

ト誂らへの鳴り物になり、向うより與右衞門、浴衣の形、素足にて出る。後より累、他所行の形、日

傘と書置とを持ち、兩人とも俄雨にあひし體にて出で來り、花道よき所にて

〽同じ思ひに跡先の、わかちしどけも夏紅葉、梢の雨やさめやらぬ、夢の浮世とゆき悩む、男に丁度靑日傘、骨になるとも何のその、跡をあふ瀨の女氣に、こはい道さへやう〳〵と、互ひに知らぬ野邊の草、葉末の露か螢火も、もし追手かと身づくろひ、心闘屋を跡になし、木下川堤に着きにけり。

ト此ふりにて本舞臺へ來る。矢張り時の鐘、浪の音いけころし、蟲の音聞える。

與右　コレ累、思ひがけないこの所へ、其方はどうしておぢやつたぞ。

かさ　どうしてとは胴慾な。一緒に死なうと今までに、云ひ交したを反古にして、わたしを置いてお前一人、覺悟の書置、そりやお前聞えませぬ。生きるとも死ぬるとも、お前の側を離れはせぬ。一緒に殺して下さんせ。

與右　成る程切なる志、さりながら、其方の養父は預かりの、撫子の茶入れ紛失、それゆゑにこそ屋敷は閉門、それさへあるに又ぞろや、一緒に死ねば心中と、浮名が立つては親への不孝、爰の道理を聞き分けて、其方は爰から歸つてたも。

〽云ふ顏つく〴〵打まもり、ひよんな緣でこのやうに、つい斯うなつた仲ぢやゆゑ、迷惑さ



んすが氣の毒で、云ふ事さへも十分一、勿體ない事ながら、去年の初秋うら盆に、祐念さまのお十念、その時ふつと見染めたが、ほんに結ぶの神ならで、佛の森の新枕、初手から蓮の臺ぞと、心で祝ふ菩提心、後生大事の殿御ぢやと、思ふ心にいつとなく、奥のつとめの長局、役者びいきの噂にも、どこやら風が成田屋に、似たともやうも福牡丹、楊枝差しにも袱紗にも、お前によそへて樂しむ心、お年忘れに奥御殿、琴や鼓のそのあとは、打交りたる騒ぎ唄〽入れぼくろ〳〵、起請誓紙は反古にもなるが、五月六月は萬更反古にもなりやせまい〽うたふ辻占いまの身に、當りてわたしが岩田帶、是非に死なねばならぬ身と、口說き嘆けば與右衞門も

與右　ハテ、是非に及ばぬ。それ程までに思ひつめた其方の心、可哀や腹の悴まで、此まゝ殺すも世の成行き。不便の者の心根ぢやなァ。

〽深き心を白玉の、露の命を我れゆゑに、思へば便なき心やと、手を取り交し嘆きしが、せめて義理ある親たちや、生みの親へもよそながら、今宵限りの暇乞ひ、不孝の罪は幾重にも、お免しあれと諸共に、川邊にしばし泣きゐたる〽折柄聞ゆる舟のうち、身にしる雨の聲遠く〽夜や寒き誠に文は閨の友、筆の鞘にて蚊やりさへ、まかせそつと思へばほんに、埒もなか

戸のしらむ東雲。

ト薄ドロ／＼になり、燒酎火出て、この時、前の流れへ誂らへの髑髏に草刈り鎌の錆つきたるを差し金にて漂ひ流れくる。兩人、これへ目を附けて思ひ入れ。

〽不思議や流れにたゞよふ髑髏、助が魂魄錆びつく鎌、それと見るより與右衞門が、心に覺えあり／＼と、しるしの鎌を引きぬけば、はつと累が美はしき、顔も忽ち惡女の相好、これも報いか淺ましやと、立退く裳にとりついて

ト此文句のうち與右衞門は髑髏をとり上げ、鎌を拔くと、ドロ／＼にて累の顔、仕掛けにていつもの通りの累の顔に變る。累はこれを知らぬこなし。與右衞門見て、恟り思ひ入れ。これより嫉妬のクドキになる。

〽捨てゝ行くとはさりとては、外に樂しみあればこそ、わしを騙して胴慾な、さうとは知らず今までに、もしやにかゝる戀の慾、兎角浮世がまゝならば、帶の矢の字の前垂れに、針打ちやめておとしばら、駒下駄はいて歩いたら、誠に／＼嬉しかろ、ならぬ先まで思ふのも、今更心が恥かしい、むごいわいなと取りついて、變る姿を露知らず、色を含みしとりなりは哀れにも又いぢらしや、男も今は詮方なく、聲をひそめて

與右　道理々々。死ぬると云ふは皆僞はり、國へ歸參のこの與右衛門、足手纏ひと思へども、その心底を聞く上は、これより直ぐに國元へ、其方を連れて

かさ　そんなら一緒に、連れて行て下さんすか。

與右　サア、少つとも早く、先へ立ちや。

かさ　エヽ、嬉しうござんす。

〽いそ〳〵先へたちまちに、邪慳の刃も血汐のもみぢ、龍田の川の瀨と變る、男の裾にしがみつき

ト此うち與右衛門、身拵らへして、累を先へやりすごし、以前の鎌にて一かせ切る。累、驚ろき、與右衛門にしがみつき、捨ぜりふにて口說き立てる。與右衛門は累の懷中鏡を出して差しつける事あつて

かさ　こりや、わたしを騙して

與右　オヽ、殺す仔細は

〽これを見よと、累がたしなむ延べ鏡、見すればハッと飛びのいて、もしや外に人もやと、見れどうつせどわが顏の、變り果てにし有樣に、如何はせんともだえ泣き、與右衛門累を引据ゑて

與右　コリヤ累、因果の道理を今爰で、語つて聞かせん。よつく聞け。

〽足蹴にてうと蹴返して

この與右衞門が金五郎と云ひし時、其方が爲には實の親、菊が夫の助を殺せしその報い、めぐりめぐりてその顏の、變り果てたは前世の約束、其方が爲にはこの與右衞門、即ち親の敵なれば、騙して此の場で返り討、これも因果と諦めて

〽成佛せよと無二無三、打つてかゝれば身をかはし〽なう情なや恨めしや、身は煩惱のきづなにて、戀路に迷ひ親々の、仇なる人と知らずして、因果はめぐる面影の、變り果てにし恥かしさ、悋氣嫉妬のくどき事、我れと我が身に惚れすぎし、心の中の面なや、さはさりながらむごらしい、生みの兩親今の親、我が身にまでも此やうに、つらき心は前の世の、いかなる恨みかいまはしと、くどきつ泣いつ身をかきむしり、人の報いのあるものか無きものか、思ひ知れやとすつくと立ち、振り亂したる黑髮は、この世からなる鬼女の有樣、摑みかゝればと與右衞門も、鎌取り直し土橋の上、襟髮つかんで一ゑぐり、情容赦も夏の霜、消ゆる姿の八重撫子、これや累の名なるべしと、後に傳へし物語り、語り傳へて。

トよろしくあつて、累は仕掛けにて土橋の上に宙乘りになる。與右衞門は襟髮を引かれながらキツと





見得。この時、黒の捕り手四人、バラ〳〵と出て

捕手　人殺しの與右衛門、動くな。

ト取巻く。

與右　何を小癪な。

ト身構へろ。大ドロ〳〵、カケリにてよろしく

幕

第二番目　大切

平井渡し場の場
與右衛門内の場
墮地獄の場

役名━━神田川の與吉實ハ絹川甚三郎。巴屋仲居、おさえ。久保田の下部、八助。與右衛門母、お萱。庄屋、杢兵衛。仲人、甚五兵衛。泣き女、おむく。八助妹、おりえ。蜂山藤六。下部、伴助。判人、安右衛門。若黨、惣次。平井の船頭、萬助。百姓、三婦六。累の亡靈。木下川與右衛門實ハ久保田金五郎。祐念上人。

本舞臺、うしろ淺黃幕、正面、藁ぶき渡し守の小屋、左右に唐もろこし、藤豆の搦みし體、よき所に

ヽヽヽヽヽ平井聖天道といふ石の杭立ち、前通り浪板。すべて平井渡し場の景色。爰に船頭萬助、役場袢纏を引ツかけ、襦袢腹がけ、百姓三婦六は鍬を荷ひ、その外百姓二三人、ワヤ〳〵云つてゐる。よき所に船頭神田川の與吉と、娘おさへの二人の死骸に、菰をかけたのが並べてあり、念佛太鼓にて幕明く。

皆々　三婦六さま、こいつは大變でござる〳〵。

三婦　サア、とんだ事だ。女と男の死骸、見れば着る物が、ズタ〳〵に切れてゐます。

萬助　サア、わしもさう見ましたが、切られたにしては、一向疵が見えませぬ。

三婦　大方心中でもござらうか。さういへば、昨夜遲く吾妻の森の前通りを、美しい女を連れて、男が一人通つたが、これは大方喧嘩をして、ぶち殺されたと思はるゝが、コレ、何だか男が持つてゐます。

ト一同寄つて取つて見て

皆々　アヽ、こりやァ貰入れだ〳〵。

萬助　中に何だか書いた物もあるが、濡れてゐるでござらう。何しろ着る物が切られて、體に疵がござらぬ。マア〳〵、この始末を、庄屋どのに知らせて來ます。こなた衆、跡を賴みます。

皆々　合點でござる。早く行つてござい。

ト念佛太鼓になり、萬助、向うへかゝると、此とき向うより若黨惣次、スタ〳〵と出て來り

惣次　モシ〳〵、お前方は、御近所のお方でござりますか〳〵。

ト急いで云ふ。

萬助　成る程、この村の百姓でござる。

惣次　左樣なら聞きますが、若い男の死骸が、この渡し場にあると聞きましたが、左樣かな〳〵。

萬助　ござる〳〵。男ばかりではござらぬ、女もゐます。二人ながら着る物が切れて、惣身には疵は見えませぬ。

惣次　どうぞ、その死骸を見せて下さい。

皆々　サア〳〵、これだから、見さつしやい〳〵。

トこれにて惣次、駈け行き見て

惣次　ヤヽヽヽヽ、こりや若旦那の死骸、今一人は養子先のおさえさま、こりやどうでも心中に、違ひないわい〳〵。

萬助　モシ〳〵、由縁のあるお人かえ。何か持つてゐますよ〳〵。

惣次　左樣かな。改めて見ませう。

皆々　さうさつしやれ〳〵。

ト惣次、駈け寄り、死骸を、よく〳〵見て

惣次　ヤア〳〵、昨日お渡し申した、祐念さまの名號が、コレ〳〵、この通りに切れてゐるといひ、お二人ともに、惣身に疵が見えませぬ。

ト名號を見せる。

皆々　イヤア、それは奇妙だ〳〵。

萬助　モシ〳〵、この莨入れに何かござります。これもよく見さつしやるがよい。

惣次　併し、刃物で死なぬ事ならば、叶はずとても呼び生けて見ようか。

萬助　それがよからう。その上爰に大磯の、小用封じの藥がござる。水を吐かせるにはよいと聞きました。この小用藥を握らしたら、水を吐くでござらうワ。

皆々　その上、この濡れた手紙を火で干したら解りませう。

惣次　そんなら、頼みます〳〵。

皆々　合點だ〳〵。

ト小屋の焚き火へ持ちゆき、件の手紙を三婦六、火であぶる事。萬助は小用藥を二人の死骸の手に握

らせる。惣次は死骸を抱いて

惣次　與吉さまア、おさえさま〳〵。

皆々　與吉やアい。おさえやアい。

ト取まぜて呼び立てる。てんつゝ、念佛太鼓にて、道具廻る。

本舞臺、三間の間、世話屋體、上の方に障子、ならんで精靈棚、正面のれん口、鼠壁、軒に盆提灯を吊し、門口に竹の簀戸、竹藪、すべて木下川村與右衛門母親の隠れ家、よき時分より百萬遍の鳴り物になり、爰に百姓大勢、大珠數に取りつき、庄屋杢兵衛、眞中に伏せ鉦を打ち、下男八助は門口で鯰を拵らへてゐる見得にて、道具とまる。

皆々　南無阿彌陀シ佛〳〵。

杢兵　願意宿得平等一切生發菩提心。南無阿彌陀佛々々々々々々。

皆々　南無阿彌陀ン佛〳〵……庄屋様、御苦勞にござります。

杢兵　イヤ、皆の衆も、暑いに御苦勞〳〵。

ト此うち八助は鯰を拵らへ、手を洗ひ、茶を持つて出て來り

八助　お庄屋樣をはじめ、村のお方、御親切に、ようお念佛をあげて下さりました。私しは八助と申しまして、この內の母御には家來筋ゆゑ、此やうに世話を致しまする。

杢兵　その上聞けば、貴樣の妹のおりえどのを、この家の與右衛門どのに娶合せるとは、何よりめでたい事でござるて。

皆々　イヤモウ、おめでたい事でござる。

八助　これは御挨拶、痛み入りまする。ところで晚の祝言に、わざと鱠を拵らへましたゆゑ、移り香が致しませうと、御遠慮いたしました。

杢兵　成る程、百萬遍に鱠の濱燒も、隨分よくござらうて。

皆々　ハヽヽヽヽ。

トこの時、障子の內にて

かや　コレ〳〵八助、又さしこみが來ましたわいの。

ト合ひ方になる。八助、さしよつて障子を明ける。おかや、母の拵らへ、木綿蒲團を敷き、病人の體にて寄りかゝりゐる。

八助　モシ〳〵、今日はお鹽梅は、どうでござりまするな。

かや　イヤモウ、變る事もござらぬが、して與右衞門は、まだ留守かいの。

八助　左樣でござります。境町のお醫者樣へ、藥を取りにお出でなされました。

かや　それは孝行な。嬉しうござる……コレ、八助や、今夜悴に女房持たすも、お邸の旦那樣へ、あれの心が直りましたと、それを知らさう爲ばかりに。

八助　外というても面倒ゆゑ、私しが妹を、急にあなたへ憚りながら、嫁御樣には勿體ない。併し後で私しが、小舅顏を致すのではござりませぬて。

かや　これといふのも私しは、與右衞門が親御、久保田家に勤めたる水仕の女、悴は旦那のお胤ながら、子供の內に仕落ちがあつて、わしが在所の木下川村へ。

八助　親旦那からお預けなされ、以前は久保田の若黨八內、小松川に住ひますれば、日には何度も折見廻り、少つとも早く與右衞門さま、御歸參なさるゝ種にもと、そこで俄に、祝言のまなびでござります。

かや　何やらかやら其方の世話、この母も喜びますわいの。

ト喜ぶうちに胸先を押へ

アイタヽヽヽ。

八助　また差込みが始まりましたか。
杢兵　ドレ〱、杢兵衛が押へてやりませう。
　　　ト介抱する。
皆々　わしらは與右衛門どのを迎へながら、尋ねて來ませう。
八助　お頼み申します。
皆々　サア〱、冷えぬやうにさつしやれ。
　　　トてんつゝになり、杢兵衛介抱し、障子を閉す。百姓皆々向うへ入る。八助は七輪で湯を沸かしにかゝる。向うよりおむく、在郷嬶アのこしらへ、甚五兵衛、羽織田舍者にて、片手に帳を下げ、兩人出て來り、直ぐに内へ入り
二人　八助どの、さぞお取込みでござらう。
八助　これは仲人の甚五兵衛どの、雇ひのかみ様もござりましたか。
甚五　コレ、八助どの、わしはマア皆の頼みで、妹御の嫁入りの中へ、なんぼ田舍でも、與右衛門どのはもと侍ひ、家來の妹ぢやというて、それ〲の格式もあり、わざと嫁御は、駕籠にしましたて。

むく　サア、その駕籠も在郷だけに不自由ゆゑ、お寺へ頼みまして、死人を入れる迎へ駕籠、やう〳〵と工面をしました。

八助　それは世話でござつた。

トこの時、障子の内より杢兵衛、出て來り

杢兵　これは仲人どの、ござりましたか。時に八助どの、あの病人は、どうでもむづかしうござるてや。

八助　イヤモウ、私しもさう思ひます。

杢兵　あの樣子では、どうで今夜中には方が附きませうが、暑い時分ゆゑ、直に葬式を出さずばなりますまい。そこで庄屋杢兵衛が、コレ〳〵、帳を拵らへて持つて來ました。葬禮の入用を書き立てませう。

甚五　モシ〳〵庄屋樣、葬式もお急ぎであらうが、盆前でもござれば、祝言も急いでもらひませうて。

八助　イカサマ、祝言も、延び〳〵にはなりますまいて。

むく　コレ〳〵、八助どの、同じ葬禮婚禮でも、どちらを先へと極められまい。わしは待女郎だから、婚禮から先がよからう。

李兵　イヤ〳〵、葬禮を先へ廻すがよい。
甚五　イヤ〳〵、婚禮を先へせねば、物のきまりがない。婚禮だ〳〵。
李兵　イ丶ヤ、葬禮だ〳〵。
ト兩人爭ふ事ありて、持つたる帳面を互ひに打ちつけ取替へる事。八助おむく、その中へ入り
二人　マア〳〵、靜かになされまし〳〵。
八助　お二人ながら、其やうに深切に云つて下さる事なり、どうで何方が遲いか早いか、こりやいつそ入用物を、帳へ附けて置くがようござります。
二人　さうしませう〳〵。
八助　先づ、わしが指圖しませう。
ト中へ入り
ソレ、そこへ錫に長熨斗。
李兵　オツと合點。
ト取替へし葬禮帳へ記す。
八助　さて此方が位牌に香爐。

甚五　オッと附けました。

ト婚禮帳へ附ける。

八助　それから蓬萊の鶴龜。

李兵　よし〳〵、書きました。

八助　とむらひの繩。

甚五　よし〳〵。

八助　娘の綿帽子。

李兵　承知々々。

八助　施主の編笠。

甚五　オッと附けました。

八助　蛤の吸ひ物。

李兵　附けました。

八助　白强飯に奴豆腐。

甚五　書きました〳〵。

八助　先つ、あら方そんなものかな。

　　　ト此うち、おかやの呻く聲する。

皆々　イヤア、阿母が取詰めはせぬか。

むく　モシ／＼、阿母さんが大分せきなさるが、あれでは婚禮か葬禮か、どちらが先へ廻らうね。

八助　ハテ、貴樣は婚禮なれば待女郎、葬禮なれば泣き女、どちらへ廻つても二役だよ。

むく　そりや御祝儀とお布施を、取込んで勝負しやせう。

甚五　併し、婚禮に泣くまいぞ。

杢兵　葬禮に笑つては濟まぬよ。

八助　何でも帳面通りにするがよい。

杢兵　さうサ／＼、わしらは百姓だから、こんな事はたべつけ申さぬ。

甚五　それで帳を拵らへて來ましたから、帳の通りにしますのサ。

むく　そんならわたしや娘御さんを、お連れ申しやせう。

八助　さうして下さい。

甚五　サア／＼、早く支度して來ませう。

八助　わしも病人に藥を進ぜませう。
杢兵　ナニサ、藥も無駄な話だ。
八助　サア、ござりませう。

ト念佛太鼓になり、おむく甚五兵衞は向うへ入る。八助杢兵衞は奧へ入る。この時、杢兵衞甚五兵衞又ぞろ帳を違へて持つて行く事。この鳴り物にて向うより與右衞門、手に藥疊と苧殼を持ち出て來る。後より段八、木綿袴の股立とり、大小足輕にて附いて出て來り、花道にて

段八　然らば若旦那樣、絹川どのゝ預かりの、お家の茶入れ紛失の、その品あなたの働きにて、お手に入りましたとな。
與右　不思議に手に入るこの茶入れ、記し添へたる鑑定書、慥かに似せ物さりながら、茶入れは即ちおれが手に。
段八　それにつけても木下川にて、累を殺せし人殺しは、與右衞門と、内々取沙汰あるゆゑに、親旦那樣人知れず、木下川藥師へ參詣と號し、あなたと面談なさるため、夜に入らばお駕籠にて、親旦那とお前樣、お逢ひなさるゝその事も、いろ／＼取計らひました。
與右　歸參いたさばその跡にて、隱し置いたる寶を出し、立身出世は瞬くうち。

段八　今宵旦那の下屋敷。

與右　小村井村の別れ道、地藏の前にて、初夜を合圖に。

段八　然らばその節

與右　行け〱。

段八　ハツ。

ト時の鐘、段八、引返して入る。與右衞門・舞臺へ來り、内へ入る。八助、奥より出て

八助　若旦那、お歸りなされましたか。

與右　八助、まだ阿母は死なないか、ハテ、丈夫な年寄りだ。

八助　モシ〱、假初にも母御樣の事、左樣に仰しやるお心から

トあたりを見廻し、門口を締めると、合ひ方になり、思ひ入れあつて

モシ、與右衞門さま、いかに遺恨がござればとて、絹川氏の御子息樣、殊に連れ添ふ女まで、累どのも手にかけた、又その跡にてあなたの仕業。

與右　ナニ〱、どうしたと〱。

八助　ハテ、お隱しなされまするな。情ない事には、諸方で薄々噂を致しまする。絹川氏の養女の累、

さすれば同胞二人とも、お前の仕業で家も絶え、もしその祟りが御身分に、かゝりもせうかと案じられ、コレ此やうに戒名も附けて、影ながら法事のまなびも、あなたのお身に間違ひの出來ぬやう。モシ、それが苦勞になりまする。

ト杢兵衞が渡せし戒名を出して見せる。與右衞門、空うそぶいて

與右　イヤ、そんな事は知らぬ。何をおれが。

八助　イエ／＼、あの時に私しは、通りかゝつて見附けました。お隱しなされまするな、お隱しなされまするな。

與右　さう云はれちやア是非がない、併し、この身の幸ひは、われが今でも苦勞する、歸參の種の茶入れが思はず

ト懷よりちよつと見せる。

八助　エ、すりやアノ、茶入れが

與右　われが百年尋ねても、出まじき寶を蛇の道は、蛇ぢやアねえが與吉めは、絹川甚三の餓鬼の頃、口論募つて遺恨の始まり。女はおれが密夫した、助が女房の生んだ娘。生けておいては親仁の敵と、いらざる事も吐かさうかと、それで二人は……併し、今更案じるは、阿母の所から、與右衞

門どのと名當てある、おれが持參のあの文を、入れて置いたる莨入れ、ツイ落したが、あいつが耳にならねばよいが。

八助　エヽ、左樣ならアノお手紙が……ハテ、そりやア心がゝりな。

ト思ひ入れ。

與右　コレ、その戒名を見せろ。

八助　ヘイ。

ト渡す。與右衞門見て、思ひ入れあり。

與右　この戒名は妙林信女、アノこれが、累に附いた戒名か。

八助　左樣でござります。

ト思ひ入れあつて

與右　累が面の變つた時、木下川堤へあがつた髑髏、何者が書いたやら、妙林信士と記してあつたが、いらざる坊主の左平次に、書いた事でもあらうかと、思つてゐたが髑髏は助、それも纏附く古鎌に、彫つた印しは幸崎氏、ありやア石和で借りた鎌、十何年のその間、髑髏も離れぬ鎌といひ、この戒名の妙林信女、ハテ、物事は爭はれぬ。

八助　すりや戒名に見覺えが

與右　なに知るものか。コレ、佛いぢりも、いゝ加減にしろよ。

ト戒名を投げる。八助拾ひ、戴き、懷中する。この時向うより百姓一人、走り出て來る。爰にて與右衞門は茶入れの箱を盆棚へ置く。

百姓　コレ〳〵、八助どの〳〵、今夜は盆の十三日、急がしい晩ぢやによつて、早くするがよい。アレ〳〵、嫁御どのを駕籠へ入れて、擔ぎ込みます〳〵。

ト云つて引返して入る。

與兵　さうか〳〵、それは大變。おれはわざつと袴でも穿かうか。

八助　私しは嫁の門火と、精靈のお迎へ火と、一緒に焚きませう。

ト盆棚より水向け道具、婚禮の道具と取りちがへ、八助、うろたへ騷ぐ思ひ入れにて、門口へ出て迎へ火を焚きにかゝる。杢兵衞出て

杢兵　サア〳〵、急になつたの。嫁と精靈と一緒に來るか。サア〳〵、とんだ事だ〳〵。手傳ひませう手傳ひませう。

ト盆棚へ火を灯し、行燈へも火を灯す。合ひ方、鐃鉢入りになり、向うより百姓一人、白張りの高張

りをともし、後よりさんすいなる乘り物を擔ぎ、これへ百姓一人、挑燈籠をさしかけ出る。乘り物の先へ百姓一人、袴にて、粗末なる戒名を持ち、後より百姓一人、位牌を持ち、甚五兵衞は羽織袴にて編笠をかむり、おむくは白布の帽子をかむり、百姓皆々、湯灌盥、手桶、鏡臺、針箱の類を青竹に通し、壹荷にかつぎ出て來り、花道中程へ下ろし

甚五　コレ〳〵、先の衆、向うの樣子は、よいかな〳〵。

皆々　大方よいでござらうて。迎ひ火を焚いてゐます。

むく　コレ〳〵、おりえさん〳〵、聟樣のお内へ來ましたよ。

トこれにて乘り物の戸を明ける。内におりえ、嫁の拵らへ、綿帽子、古き白無垢の振袖にて顏を出し

りえ　そんなら爰が、與右衞門樣のお內かえ。

甚五　左やう〳〵。

むく　わしや恥かしいと、又なまめかさうと思うて。

甚五　イヤ、とんだ小浪だ。

りえ　わたしが來たこと兄さんへ、お知らせなされて下さりませ。

むく　オット合點、ソリヤ、駕籠をやりませう。

ト また舁きあげ、皆々、門口へ据ゑる。

李兵 どなたも御苦勞、サア、聟様、嫁御へ水向けをさつしやれ。

與右 心得ました。

ト 駕籠に向ひ、水向けをして

これはどなたも、遠方御苦勞でござります。

甚五 これは聟様、いかいお力落し、わざと嫁御の手を引かつしやりませ。

與右 アヽ、さうかえ。ハテ、面倒なものだ。

ト 駕籠の側へ寄る。薄ドロ〳〵、上より心火燃えて乗り物の上へ立ちのぼり、パツと消える。與右衞門は駕籠に向ひ

サア、おりえどの、手を取りませう。

ト 凄き合ひ方。駕籠を明け、内よりおりえの手を取り連れて出る。この時變つて累の亡靈、おどろな髪を島田わげに結ひ、與右衞門に手を引かれ出て、與右衞門の顔を見る。與右衞門、悔りして思ひ入れ。皆々の目には見えぬ思ひ入れにて

むく モシ、與右衞門さま、よい御器量で

皆々　ござらうがな。

　　　ト云はれ、與右衞門、こなしあつて

與右　以前の家來八助が、妹のおりえ、さのみな女であるまいと、思ふに相違のこの面は、まだ執念の

八助　若旦那、不束者でござります。

與右　ハテ、うるさい器量だ。

かさ　家來の妹、たらはぬわたし、今からよろしう、お目かけられて

　　　トこなしあつて

　　　オヽ、おはもじ。

皆々　アヽ、めでたい〳〵。

　　　ト件の合ひ方にて、與右衞門は取つたる手を振り切らうとするを、累の亡靈はキッと捕へ、離さぬ思ひ入れ。これにて是非なく手を引いて内へ入り、よき所へ座に附く。これにて亡靈は與右衞門の顏を見ながら手を離す。八助、あたりの樣子を見て

八助　コレ〳〵、こりやアどうだ〳〵。婚禮だといふにお前方は、葬禮の樣子だの。

甚五　ナニ〳〵、これも帳面通りサ。ソレ、見さつしやれ……婚禮覺え帳とござるワ。先づ編笠、これ

　　は仲人、緥燈籠に香爐位牌。

むく　待女郎には白布の、帽子を着せて一升泣き、二升泣きでもお望み次第、めでたく手見せに、ワア

　　アヽヽヽ。

　　　　ト泣き出す。

八助　コレ〳〵、何をめでたい祝言に……そいつは大方帳面が。

杢兵　わしも先刻からさう思うた。爰にあるのは葬禮の覺え帳、内へ附けたは、アヽ、なんだ。

　　　　ト見る。

八助　ドレ、見せさつしやれ。

　　　　トよく〳〵見て

　　そりやこそ〳〵、葬禮帳へ附けたは、殘らず婚禮道具、そんなら先刻のいさかひに

甚五　兩方、帳が變つたさうな。

八助　イヤ、粗相な衆だ。

むく　そんなら祝うて、ホヽヽヽヽヽ。

甚五　どうした〳〵、なぜ笑ふ。

むく　ハテ、これでめでたく帳面消すのサ。

二人　何をたはけた。

トこの時障子屋體よりおかや、取りつき〱出てくる。

與右　コレサ阿母、病氣の形で、なぜマア爰へ。

かや　ハテ、わしもめでたい祝言の、祝ひと聞いて、病もどうやら

八助　それは何より、おめでたうござります。

かや　コレ〱、悴、今更云ふではなけれども、仔細あつてもらうた嫁は、八助が妹のおりえ、家來ぢやと思うて、我まゝを云ふまいぞ。

與右　ナニ年寄りの、愚痴を云はねえものだ。

かや　イヤ〱、愚痴ではござらぬて。えて斯ういふ事で

杢兵　ハテマア、ようござるわいの。

むく　マア、何よりは杯事を、ちつとも早う。

八助　成る程、めでたく固めの杯、妹が飲んで聟様の、この若旦那へ。

ト銚子杯を持ち來り、よき所へ置き

サア〳〵、杯、おぬしが始めて

ト杯臺をさしおく。累、杯を取つて思ひ入れあり

かさ　わたしが始めて

八助　サア、聟様へ。

ト銚子を持つ。累は杯を取る。

千秋萬歳の千箱の玉を奉る……アヽ、めでたい〳〵。

ト酌をする。累の亡靈のんで

かさ　憚りながら

ト差出す。與右衛門取上げる。八助、酌して

八助　めでたうあなた

ト與右衛門、飲まんとする。その手を取つて

かさ　いよ〳〵お前は、この杯を

ト恨めしげに見る。

與右　二世の固めと

かさ　その片眼こそその昔、助が左の片目から、その業因が娘の累、これもこの世をかためめの杯。

ト與右衞門の手をとめる。與右衞門、思ひ入れあつて、その手を拂つて酒を飲まんとする。薄ドロドロ凄き合ひ方、持つたる杯の酒、心火となつて立のぼる。與右衞門、キッとなつて

與右　ハテ、恐ろしい。

ト酒を落す。皆々これに心附かず

皆々　三國一ぢや、嫁とりすまいた、しやんしやんしやん〳〵。

ト皆々、手を打ち

八助　これはどなたも、いろ〳〵お世話を

アヽ、おめでたうござります。

甚五　さて仲人は宵の程、開きませうか。

八助　そこをわざつと御酒一つ、奧であがつて下さりませ。

皆々　左樣ござらばお辭儀なし

かや　わしは夜風の障らぬうちに

八助　なじみの寢間へ

かや　ドリヤ、また横になりませうか。
皆々　ドリヤ、御馳走になりませう。
　ト唄、時の鐘にて皆々奥へ入る。おかやは障子の中へ入る。與右衛門と累の亡靈だけ殘る。八助、思ひ入れあつて
八助　さて、これからが木綿蒲團も有合ひの、一對そろふ相生の、何よりかより、屛風さら〳〵。
　ト床を敷き、六枚屛風を立てる。與右衛門は屛風の外にゐる。八助は累の亡靈の手を引き
　サア〳〵、妹、恥かしからうが、あの上へ。
　ト屛風の後を廻つて床の上へ連れてくる。此うち始終、薄ドロ〳〵、爰にて又おりえと變り
りえ　兄さん、わたしや勿體ない、若旦那様を男に持つては。
八助　ハテ、阿母様がわしへのお頼み、お許しの出た家來の妹。
りえ　現在お主を
八助　ハテ、おじけりなされませ。
　ト唄、時の鐘にて、八助、心遣ひして奥へ入る。おりえ、思ひ入れあつて
りえ　モシ、若旦那様、あなたも爰へ

與右　おれがどうして、そこへは少つと

りえ　そんならわたしが、お否かえ。

與右　サ、さうではないが

りえ　左様ならば

ト屏風の中から及び腰に手を伸し、與右衛門の手を取る。振りもぎるを又手を伸ばし、無理に引ツ張る。これにて與右衛門、よろ／＼として思はず屏風の中へ入ると、爰でおりえは、また累の亡靈と入れ變る。

與右　それ程までに

かさ　お否かえ。

ト顔を出す。矢張り、薄ドロ／＼。變りし累の面體ゆゑ、與右衛門は思ひ入れ。累の亡靈も思ひ入れあつて

與右　又も累が

かさ　妻をかさねし與右衛門どの、邪慳の刃に木下川の、みちくる汐の、恨みのほむら。

ト此あたりより奥よりおむく、酒機嫌にて出で來り、屏風の中へこなし。

與右　すりや、一念は浮かみもやらず

かさ　消えても消えぬ胸の火の

與右　恨みを云ふか。

かさ　骨肉、土に戻るといへど

與右　その魂ひは

かさ　五百生まで、忘れぬ恨み。

與右　エ。

ト思ひ入れ。屏風の外にゐたるおむくは、ワナ〳〵震へしが、この時「ワツ」というて倒れる。與右衛門はおむくの聲に驚ろき

また來たか。

ト屏風の外へ駈け出る。亡靈は床の上へ俯伏しになると、爰にて又おりえの姿と變る。與右衛門は胸を撫で、ホツとしたる思ひ入れ。おむくもこなしあつて

むく　イヤ、恐ろしい。

りえ　アノマア聲で

ト顔をあげる。おりえの顔ゆゑ、與右衛門見て

與右　今ではおりえ。そんなら死靈も

トこの時、障子の内にて、おかやの聲にて「ワッ」と云ふ。三人思ひ入れ。

むく　又かいなア。

與右　今度は障子の

むく　ほんに此うち。

ト明ける。内におかやは一重帶にて首くゝり、下がりゐる。三人見て

りえ　アレ、阿母様が、なんで非業の

與右　死をとげたるも死靈の業か。

むく　今度は葬ひ、サア忙がしいワ。

ト大泣きに泣きながら奥へ走り入る。此うち外の藪より判人安右衛門、窺ひゐる。與右衛門、思ひ入れあつて

與右　かゝる障化のある上は、期を延してもしもの事。手に入つたりし茶入れを持つて

ト盆棚に上げ置きし件の箱を取つて

少つとも早く持參して

ト行かうとする。おりえ縋つて

りえ　そんならわたしと緣組みあつたが

與右　委細は跡で知れるは治定。おれは茶入れを

ト振り切つて門口へ出る。外にゐたる安右衛門、走り寄つて件の箱を引ッ浚ひ

安右　嬉しやこれこそ結城の重寶。

ト引ッ浚つて向うへ走り入る。

與右　南無三、うぬを

トごん〳〵になり、與右衛門は向うへ跡追うて一散に入る。おりえ、うろたへ

りえ　コレイナア、阿母樣があのやうに、コレ、兄さんいなア。

ト呼び立てる。奧より八助、おむく、甚五兵衛、杢兵衛、百姓皆々出て

八助　コレ〳〵、妹、何事だ〳〵。

りえ　アレ、あのやうに阿母樣が

むく　首かゝりしてあのやうに

八助　ヤア〳〵、長の煩らひお年の上、とりのぼせてか、こりや斯うしては
甚五　直ぐに下ろして何氣なう、死骸は棺へ
八助　お頼み申します。
甚五　心得ました。皆ござれ。
　　　ト皆々障子の中へ入り、跡を閉す。
杢兵　サア〳〵、これからはおれが受取りの葬禮だ。八助どの、帳面通りに、コレ〳〵
　　　ト帳を出し
　先づ第一が鯣に長熨斗。
八助　ナニ〳〵、どうした。
杢兵　さてその次が綿帽子、蛤の吸ひ物、こいつは今頃蛤は、船堀へ買ひにやらうか。
八助　コレ〳〵、庄屋樣、又お前の帳面も、違つた〳〵。
杢兵　婚禮帳と葬禮帳、斯う物事がはまぐりに
八助　なぜ蛤だの。
杢兵　ハテ、ぐりはまの地口よ。

八助　ハテ、埒もないお方ぢや。

トこの時薄ドロ〳〵、香爐にパツと煙硝火立つ、おりえ、のぼせて苦しむ體にて

りえ　コレ、兄さん、わたしや俄にこの胸先、その上熱うてならぬわいなア。

八助　どうした〳〵。折も折とて霍亂か。庄屋樣、湯を沸かして

杢兵　合點ぢや〳〵。

ト走り入る。

八助　藥があつたが

ト紙入れより藥を出し、おりえに含ませ

サア〳〵、こりやア飯沼の弘經寺から出る御夢想の妙藥。いま湯が沸くワ。

ト抱きかゝへる。

りえ　こりやマア何で此やうに、身内が熱して。

八助　惣身俄に火焰の如く、それには變つて水の如く、汲み流すほど玉の汗。

りえ　苦しいわいなア。

トのたるを押へて思ひ入れあり

八助　阿母樣の非業の上、また妹までこの體は、正しく主人に恨みの死靈、報いは眼前、南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト介抱する。誂らへの祐念の出の合ひ方になり、向うより所化二人、黒衣、白の脚絆、網代笠にて

二人　飯沼祐念寺地藏堂建立。

ト箱を擔ぎ、一人は鉢を持ち出て來る。後より祐念上人、朽葉の麻衣、白股引手甲、塗り網代の笠、錫杖を突き、鉢を持ち、修行の體、後より供男、兩掛けの箱を擔ぎ、出て來る。

所化　御免なさい。祐念寺地藏堂建立、お志しをお願ひ申しまする。

祐念　南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト門口に立つ。八助、聞きつけ

八助　幸ひの所へ祐念さま、何か俄の病氣もあり

ト思ひ入れあつて、おりえを寢させ、盆に米を載せて持ち出で

ハイ〱、上げませう。

所化　御回向。

ト鉢で受けて

祐念　四趣十罪五逆消滅彌陀平等即心成佛、南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト囘向のうちにフト思ひ附き

ハテ、心憎きこの家の様子、正にこの家は、非業にこの世を去る靈殘つて、病難ありと覺えたり。

ハテ、恐ろしき死靈の祟り。

ト家の棟を見詰めて思ひ入れ。八助、こなしあつて

八助　すりや、何と仰しやります。この内には死靈の祟りがあると仰しやりまするか。アヽ、誠に爭はれぬもの。志しまする佛は、女子でござりまするが、六日以前相果てまして、それも非業で今日が丁度

祐念　初七日の逮夜でござるか。

八助　左様でござりまする。よい折柄にあなたのお出で、サア〳〵、穢うはござりまするが、これへお通りなされませ。

ト花莫蓙を出して敬ふ。

祐念　然らば囘向いたして進ぜう。免さつしやれ。

ト内へ通り

コリヤ、弟子共は殘り、供の男は飯沼の旅宿へ、先へ戻れ〳〵。

供男　ヘイ〳〵、お先へ參ります。

ト向うへ入る。

祐念　して、只今お話しの、横死めされた婦人は、身寄りの衆かな。

八助　イエ、左樣でもござりませぬが、譯ござりまして私し方にて、戒名を附けまして、弔うて遣はしまする。

祐念　それはお奇特。して、戒名はナ。

八助　ヘイ〳〵、卽ちこれでござりまする。

ト件の紙の戒名を位牌へ貼り、盆棚より持つて來り差出す。祐念、取つて

祐念　妙林信女……ハテ、心得ぬ。

ト思ひ入れ。合ひ方變つて

この法名は、男女と分れども、恨みは同じその者に、今にその念かゝりあり。その昔、祐念若かりしとき、所は甲州石和川にて、非業に死したる魂魄の、とゞまる髑髏に草刈る鎌の、錆び附きありし其まゝにて、河原にありしを取上げて、妙林信士と髑髏に記し、解脫を祈れどきゝ入

れず、髑髏は忽ち水中に落ちて、一つの心火えん〳〵たり。これぞ祐念行法の、到らぬ所と身を悔み、年を重ねてこの程、婦人の戒名頼む者あり、授け得させし法名は、妙林信女、これも即ち愚僧が手跡。

ト思ひ入れあつて

もしやその者、五體は不具にあらざるや。

八助　へイ〳〵、玉を欺むく容貌も、死ぬる今際は片眼かい、足さへ縮む俄の跛。

祐念　それにて思ひ當りたり。それぞ正しく下總の國、羽生村にありし農人、助といふ者の恨みならん。して、この家の主は

八助　へイ、與右衛門と申しまする。

祐念　その與右衛門こそ、素性は正に金五郎とやらんか。助が恨みのその念殘つて、障化をなすも今この時。

八助　その怨念を祐念さま

祐念　救ふは佛の誓願にて

ト この時臥したるおりえ、思ひ入れあつて

りえ　兄さん、何やらわたしが目先へ。

ト苦しむ。

八助　ヤヽ、何か其方の

ト駈けよつて介抱する。

祐念　して、その女は

八助　即ち妹、只今俄に熱氣の苦しみ。

祐念　すりや、その婦人も

トおりえの側へ寄り、よく〳〵見て

ハテ、恐ろしきかな。これも即ち女の死靈。

八助　然らば何卒その女

祐念　附添ふ死靈に解脱をすゝめ、法德未熟にあらんずなれど、念佛行者の祈りを以て、退けくれん……外にこの家に死人もあれど、それも死靈の爲せる業、女が體の衰へぬうち、近きに退け

八助　何卒苦痛をお助けあつて

祐念　成佛得脫いたさせくれん。……コリヤ死靈、成佛願はゞ五體を退けよ。さなきに於ては祐念、諸佛

乙幕め大切





の功力によつて追ひ退けん。行者の法力しるしを見せん。信者の各々、一同に、百萬遍こそ肝要ならん。

八助　然らばこれにて念佛修行、世に有り難き名僧の、われをお助けなさるゝぞ。

りえ　そんならわたしを祐念さまの……エヽ、有り難い。

祐念　サア、支度々々。

ト唄になり、祐念は佛前へ向ふ。八助は苦痛のおりえを抱へる。この見得にて舞臺眞中へ黒幕を振り落す。

大ドロ〳〵になり、日覆より紫雲下る。舞臺前へ蓮の盛りをセリ上げる。舞臺にも一面に黒幕を敷き、上の方に怪しき燈籠、これに六道亡者中と書いたるを出す。尤も極樂の道筋、七月十三日の體。道具納まると、ドロ〳〵打上げ、踊り地になり、向うより亡者大勢、いづれも白きなり、經帷子、胡麻鹽髮をさばき、手を打つて踊り出て、舞臺を踊りあるく。尤もこの中に、惡侍ひ蜂山藤六と中間伴助の亡者も交つてゐる事。

皆々　ソレ〳〵、ヤツトヤ。

ト勞れたる體にて皆々、寢はらばうて

亡一 ヤレ〳〵、今宵は盆の十三日、まだ十六日までは間があるの。

亡二 それ〳〵、十六日は天下晴れて、おいらが物日だから、思ひ入れ踊らうワ。

亡一 そりやアさうと、六道に迷つてゐるおいらだから、極樂手合ひは安くするの。

亡三 そりやア當り前よ。併し、十三日の踊りは、おいらが去年から始めたのよ。

藤六 さうか。身共は武士の亡者だが、なぜ十三日を踊り日に極めたな。

亡四 ハテ、お前も解らねえものだ。娑婆に内のある者は、迎へ火も焚きかけて洒落て行くが、おいらはごろつきだによつて、第一、娑婆へ行つても落ちつく所がねえ。

亡五 それ〳〵、おいらは去年精靈棚へ居候ふに行つて見たが、イヤモウ、狹くつて、夜ッぴてひどい蚊に責められた。

作助 地獄で責められた上に、娑婆まで行つて蚊に責められては、外聞が惡い。

亡六 さうサ。おいらもごろつきだが、ごろつき地獄はイサヽがよいて。

亡七 コレ〳〵、この頃來た背の高い男は、謠の師匠だといふが、それでもごろつきか。

亡八 イヤ、あの男は三番叟がいゝさうだから、舞はして見ようか。

亡九　イヤ〳〵、婆婆と違つて、三番叟は、をかしなものだね。
皆々　そこもあるな。
亡二　コレ〳〵、みんな聞かッし。盆の十三日に來る仲間は、頭をくらはすが習ひだ。今日來た奴は、素敵にくらはすがよい。
亡十　その上に、音頭をあげさせませうか。
皆々　さうサ〳〵。
亡三　モシ、お屋敷の亡者さん、お前もあの折さんも踊んなさいな。
藤六　身共など、お國に居つた時分は、鹿兒島踊りが名人ぢやてな。
伴助　折助々々と云はねえがいゝ。折助が地獄へ來ちやァ草鞋も出來ねえ。
亡四　亡者が草鞋を買つて何にするものだ。時に皆の衆や、亡者が寄つて、腕押しか臑押しか、角力をとらうぢやあるまいか。
皆々　そいつはよからう、やるべい〳〵。
亡一　おれが行司へ廻らう。
皆々　貴様、一番とらッし。

亡一　角力は不得手だ。
皆々　とりねえ〳〵。
伴助　わしが一番、ひねつて見ようか。
皆々　折助が相手か、こいつは見物だ。
　　ト亡者一は蓮の枝を持つて行司をする。亡者の二と伴助と角力よろしくあつて
亡一　西、針の山〳〵、東、血の池〳〵、こなた針の山、かなた血の池〳〵。
　　ト思ひ入れあつて兩方別れになる。
皆々　矢ッ張り、踊りがいゝ〳〵。
亡三　コレ〳〵、先刻來た屋敷者の二人、てめえ達は新參だから、施餓鬼の飯を取つて來さつし。
藤六　その飯が出ますかえ。
皆々　無緣法界の蓮の飯か、團子があるから拾つて來い。
藤六　侍ひが團子を拾ひに行くのか。
伴助　主從二人で參りませう。
皆々　早く行け〳〵。

二人　ハテ、人使ひの惡い亡者だ。
ト踊り地になり、兩人入ろ。あと亡者一同踊つてゐると、この鳴り物をかりて、向うより神田川の與吉、白の浴衣、白の下帶、白帶、白の腹がけ、白の手拭ひを向う鉢卷にて、摺鉢を提げ、おさえ、同じく白の形にて、手を引いて出て來り
與吉　さつき平井の土手で、てめえもおれも、尋ねる茶入れが手に入つて、ヤレ嬉しやと思つたら、何だかヒイヤリしたやうだ。
さえ　わたしを送つて來たものが、抱いて寢ようと無理口說き、お前に逢うて嬉しやと、思つた後は夢うつゝ。
與吉　その時相手の折助め、まだ〳〵外に拾つたところ、摑むと直ぐにぼんやりと、朝霞晴れぬ心持ち、それにしても、あの折助めに逢ひたいものだ。
さえ　わたしもお前にお守を、貰うたまでは覺えてぢやが、跡は一向譯もなう、爰はマア、どこぢやぞいな。
與吉　來る道々も此やうに、摺鉢が捨てゝあるから、持つて來たが、爰はマアどこだか
ト向うを見て思ひ入れあり

知れた〳〵。向うの燈籠に六道といふ字が書いてあるワ。アヽ、そんなら爰は青山の六道だ。こいつは目黑へ來た道で、狐に化されたと見えた。氣を附けろ〳〵。

ト眉毛を濡らして二人とも、ウロ〳〵と舞臺へ來る。皆々見附けて

皆々　ソリヤ、新入りが來たぞ〳〵。踊らせろ〳〵。

ト取卷く。與吉は持つたる摺鉢にて無性になぐり

與吉　どうしやアがる〳〵。うぬらは何だ。住吉踊りの化け物か、寄りやアがるな。

亡一　コレ〳〵、爰へ初めて來た者には、踊りの音頭をあげるが習ひ。音頭を取らんせ〳〵。

與吉　ナニ音頭をとれ。べら坊め、木遣りはやつたが音頭は知らぬワ。

亡一　そんなら、コレ〳〵女中、お前、音頭を取らんせ。

さえ　そりやア伊勢音頭かえ。そりやア兩國へ出たよ。

皆々　イヽヤ、こりやア極樂音頭だ。

さえ　そんなものは知らぬわいな。

亡一　そんならわしが敎へてやらう。先づ、白蓮華を斯う持つて

ト音頭になり

〽七月の十六日は佛の慈悲よ、奈落の底の罪人も、呵責の炎まぬかれて、踊り狂へど情なや十七日の曙は、元の奈落に苦しむと、盂蘭盆經に説かれたり、亡者のいづれも合點か。

皆々　オヽさて、合點ぢや。

ト一同手を振つて踊り出し、二人を無理に中へ入れようとする。與吉は無性に摺鉢を振り廻してくらはす。此うち下座より藤六と伴助、飯とお迎ひ團子を蓮の葉へ入れて持つて出て來り、浮れて踊り込む。與吉おさえは思はず兩人を見附け

與吉　ヤア、うぬは折助だな。

伴助　わりやア與吉か。

さえ　ヤヽヽヽ、藤六さんかえ。

藤六　おさえだな。

與吉　茶入れの在所を知つたうぬら

藤六　おいらは知らぬワ。

ト逃げるを、與吉おさえ、取押へ

與吉　逃がしはしねえぞ〳〵。

さえ　蜂山さん、茶入れの在所を、どうぞお前

與吉　吐かさねえと、締めるぞ〱。

ト二人を捕へて締めあげる。

皆々　イヤア、喧嘩だ〱。

ト立ち騒ぐ。

與吉　コレ〱、こんた衆の知つた事ぢやアねえ。こいつらは盗人だよ。腰押しをすると同類だよ。

皆々　イヤア。

與吉　サア、茶入れは、どこへやつた〱。

作助　アイタヽヽヽ、おらア茶入れは、知らねえ〱。

與吉　イヽヤ、知つた筈だ〱。

藤六　コレ〱、與吉、そりやアてめえが無理といふもの、下郎は知らぬ、存じた者は身共ぢやワ。

與吉　アヽ、お身さんが知つてか。知つてゐるならどこにある。質においたか、但しは賣つたか、サア、それを云へ〱。

さえ　早う云はんせぬと、抓るぞえ〱。

ト太股を抓る。

藤六 コレサ、痛いワ〳〵。ナニ隱すものか、ナァ作助。

作助 左やう〳〵、旦那、云つて聞かして、早うお歸しなされませ。

藤六 今こそ云ふが、あの茶入れは、質屋から正銘を引上げ、姿婆にゐる與右衞門が手へ入つたは、ありやァ似せ物、まこと正眞正銘は

さえ 云はしやんせぬと、抓るぞえ〳〵。

藤六 云ふわえ〳〵。誠の茶入れは龜井戸の、巴屋の庭の中へ隱して置いたワ。

與吉 そんなら、いよ〳〵あの茶入れは

さえ その植込みの女郎花、根元に隱してござんすか。

藤六 隱してあるから二人は早く。

作助 まだその上に鑑定書、小用藥と吹きかへたを、平井の渡しの船頭が、通じ藥と心得て。

與吉 すりや書き物は渡し守、うぬらが白狀、相違はないか。

藤六 ナニ、間違ひがあるものか。少つとも早く手に入れて

與吉 それを持參し、歸參の願ひ。

さえ違ひがなくば、與吉さん

與吉　爰から直ぐに、來い。

ト二人とも身繕ろひして駈け出すを、皆々取卷き

皆々　ならぬぞ〳〵。

與吉　寶を取りに駈け出すを、邪魔ひろがずと通さねえか。

巳之　コレ〳〵、新入り、通してやつたら、どこへ行く。

與吉　歸參の種の茶入れと添へ狀、爰から直ぐに

藤六　どこを當途に行く氣だよ。

與吉　ヤア。

ト思ひ入れ。

作助　爰は娑婆とは大違ひ、おれもてめえも一つ日に、死んだばかりに新盆に、死んでは築地へ歸られねえ。

藤六　わいら二人も、死んだわエヽ。

與吉　ヤヽヽヽ、そんならおれも、おさえも一緒に

さえ　して、何者がわたしらを

藤六　送りに行つたはわれが親、助をこの前殺したる、金五郎こそ今では與右衛門、その惡者がこの間、返り討にとわいらを殺した、爰は卽ち

皆々　西方彌陀の國だわエ、。

兩人　エ、、、。

ト驚ろく。

藤六　二十四時の經つたる二人、後へといつてはこれ程も、歸られぬから云ひ聞かした。それが行かれる位るなら、何しに行かずにゐるものか。疾においらが取りに行く。

伴助　取りに行かれぬ所だから、すつぱり在所を云つたのだ。わいらは死んで爰へ來て、自由に往來がなるものか。それでも娑婆へ取りに行くか。

與吉　サア、そりやア。

藤六　茶入れは今頃あの內で、庭の普請に取出して、瓦と一緒に捨てたであらう。

與吉　エ、、さうなつちやア

藤伴　歸參が出來ぬか。

與吉　どうしてそれぢやア
藤作　取りに行かぬか。
與吉　サア、そりやア。
皆々　サア〳〵、はゝゝゝゝ。

ト皆々笑ふ。與吉おさえ、ヂッとなつて

與吉　そんならおいらが遺恨ある、あの與右衛門が仕業にて、おれもてめえもその砌り
さえ　刃にかゝつて世を去りし、二人は娑婆にと思ひしに
與吉　十萬億土へいつの間に
さえ　來るも誠に幻しの
與吉　敵は知れても、其奴も娑婆に
さえ　恨み云ふのも冥土から
與吉　なんの届かう、コレおさえ
さえ　與吉さん
與吉　エゝ、いま〳〵しい。


六道
亡者中

ト兩人向うを見て泣き落す。皆々笑ふ。この時、日覆より

○　與吉ヤアイ、おさえヤアイ〳〵。

ト微かに呼び聲。二人は聞きつけ

與吉　ヤヽヽヽ、どこでかおれが名を呼ぶが

さえ　さう云はしやんすりや、わたしが名も

與吉　微かにそれと

○　與吉ヤアイ、おさえヤアイ。

與吉　さてこそ呼ぶは向うの方、おれと一緒に。

ト行かうとするを、皆々引留め

皆々　この世へ來ては、歸さぬ〳〵。

與吉　エヽ、退きやアがれ。

ト皆々を毆りのけ〳〵、おさえを引立て向うへかゝる。皆々留めるを取つて投げのけ、向うへ走り入る。矢張り日覆にて

與吉ヤアイ。おさえヤアイ。

ト呼び聲する。藤六、伴助、思ひ入れ。

藤六　二人が行つたその道を、伴助つけろ。

伴助　心得ました。

ト跡追うて行くを皆々捕へて

亡一　彌陀の御國を駈落ちとは、憎い亡者め。

皆々　本田善光その餘は覺えぬ。

藤六　それは昔の本田善光

伴助　わしは善公、どうぞ歸して

皆々　ならぬ／＼。

二人　娑婆へ駈落ち。

皆々　地獄紛失、逃がすな／＼。

ト追ひかけ／＼追ひ廻し、兩人下座へ逃げて入る。皆々追ひかけて入る。此うち風の音、湯のたぎり、大釜の沸きかへる音して、後の道具よき程に黑幕切つて落す。

本舞臺、元の平井の渡し場の道具に戻る。
ト爰に與吉おさえの死骸、元の通りにあり、惣次、萬助、三婦六、百姓大勢立ちかゝり

皆々　與吉ヤアイ、おさえヤアイ。
ト呼び生けてゐる。よき程に兩人、心附いたる思ひ入れにて、ツカ〳〵と立ち上がる。

惣次　ヤヽヽ、お二人ながら氣が附きましたか。
皆々　氣が附きましたか。
與吉　そんなら今のは
さえ　お前もわたしも
與吉　ちつとの內に、あの世の交り。
さえ　心の附いたも
惣次　お前が御所持の六字の名號。
さえ　ほんに、わたしも懷中に
ト名號を出し開き見る。
與吉　ヤヽヽヽ、祐念さまのこの名號、切れたる疵も七所、わしが着るもの、おさえが形も

さえ　二人合せて七所、切れたも慥かに
惣次　刀疵、それにお二人惣身に
與吉　疵一ヶ所も見えざるは、これが誠に劍難七太刀。
さえ　わたしら二人が身替り名號。
與吉　念佛行者の功力のしるし。
二人　エヽ、有り難い。
萬助　水を吐かせる小用藥。これもお役に立ちませう。
與吉　そんならこれが
惣次　殊にあなたが握りつめ、離さぬこれなる莨入れ、中には與右衛門母親より、こまぐ〳〵書いたるこの文言。
　　ト件の文を出す。
與吉　ドレ。
　　ト取つて、あらまし見て
宛て名は與右衛門、これを持つたる奴こそは、おいら二人を返り討と、討つたる敵。

さえ　お前は早う誠の茶入れを

與吉　秋草しげる女郎花、根元を穿つて

ト有りあふ鍬を持つて思ひ入れ。

惣次　この子はわしが預かりました。お前は早う

與吉　そんなら頼んだ。どなたもお世話。

皆々　めでたうござつた。

さえ　首尾よう取り得て

與吉　合點だ。

ト屋體囃子になり、與吉は鍬をかいこみ、一散に向うへ入る。舞臺の人數は、めでたい／＼と皆々手を打つてゐる體にて、道具廻る。

本舞臺、元の與右衛門の世話場に戻る。爰に祐念、眞中に撞木を持ち、左右に所化、側におりえ、平伏してゐる。八助甚五兵衛おむく、その外大勢、珠數に取附き、百萬遍の見得。責め念佛にて道具納まる。ト念佛打ちあげる。

祐念　祐念つら〳〵かんがみるに、りえが難病、死靈の祟りに相違なし。正に累が業なるべし。いかなる八獄の罪人たりとも、佛陀の力を仰ぎ、只一心に頼まんに、浮まずといふ事あるべからず。祐念が法力に德あらずとも、唱ふる念佛に德あらざらんや。附き添ふ靈魂、天魔外道に等しき障化、因果の道理を辨へて、菩提の道に赴けよ。只有り難き念佛の行者、百萬遍こそ肝要ならめ。各々隙なく念佛修行。

皆々　ハア、有り難うござります。

祐念　即ちりえを珠數の中に取込めおき、各々丹精をこらし、念佛修行いたされなば、魑魅魍魎の所爲にもせよ、大願剛力の本懷、諸佛五念の怪力、一代經卷の金言空しからじ。いかなる三障四魔をも直ちに退け得さすべし。急いで各々、念佛々々。

トおりえを眞中に据ゑ、その側に祐念、鉦を構へ、思ひ入れあつて

願はくば童女を苦しめ、成佛を願ふは、必定劍難水死の累、他力本願佛力法力傳授力、いかでしるしのなからんや。本願念佛の功德を以て、直ちに成佛なさしめ給へ。光明遍照十方世外、念佛衆生攝取不捨、南無阿彌陀佛々々々々々々、……南無阿彌陀ン佛。

ト鉦を打つ。

皆々　南無阿彌陀ン佛。

ト百萬遍の思ひ入れ。くぎれ〳〵に祐念、持つたる珠數にて數を取ること。よき時分より、薄ドロドロになり、後の盆棚へ累の亡靈現はれ、キッとなると、仕掛けにて、この體を其まゝ、おりえの後へ現はれ、後より抱へしめる。これにておりえ、苦しむ思ひ入れ。祐念、目を附け

祐念　コリヤ、りえよ、累が死靈は、其方が目によう見ゆるか。

りえ　アイ、わたしを抱へて胸元を、アヽ、苦しうござんす。

皆々　イヤア。

ト顫へ出す。

祐念　すりや其方を、アノ死靈が……

ト思ひ入れあつて、おりえの髻つかんで引据ゑる。この時、累の亡靈も引附けられし思ひ入れ。

ヤイ累。汝これまで佛の道に疎くして、一滴の水、一枝の花、佛へ供養の心なく、天罪直ちに非業の死をとげ、罪なき者を苦しむるは何事ぞ。念佛の功力を以て、成佛得脱なさしめん。五體を立去り、苦痛を助けよ。さなきに於ては、この上修羅の苦患をうけん。退けよ、離れよ、得脱いたせ。

ト珠數にて散々に打ち据ゑる。おりえも累も打ち倒され、打伏しゐる。

各々、念佛々々。

皆々　南無阿彌陀ン佛〳〵。

ト百萬遍になる。よき程に累の亡靈、顏をあげ、おりえの顏をヂツと見て、よろめき〳〵門口へ行き、振り返つてゐる。念佛とぎれる。

祐念　コリヤ〳〵、りえよ、累は〳〵。

りえ　あの門口へ出て、わたしが顏を恨めしげに見て居ります。

祐念　念佛々々〳〵。

皆々　南無阿彌陀ン佛〳〵。

ト顏へ聲にて責めかけ〳〵申す。累の亡靈、耳をふさぎ、そろ〳〵と又歸り來り、おりえの側へさしよる。

祐念　コリヤ、りえよ、累は〳〵、もう居ぬか、どうぢや。

りえ　アイ。

ト嬉しさうにあたりを見て、側に居るゆゑ、悧りして

居りまする。

祐念　いづれに居る。

りえ　また爰に居りまする。

　卜苦しき思ひ入れ。祐念、聲を荒らげ、立ちあがつて天を睨み

祐念　實業正覺の阿彌陀佛、天眼天耳の通を以て、我が云ふ事をよく聞かれよ。こかうしゆいの善行にて、てうせ列願の名を現はし、極重惡人無他方便、ゆいせうめうじ、必定我界の本願は、誰が爲に誓ひけるぞや。この上は祐念が行力、盡きしか盡きざるか、地藏菩薩の奇特にて、直ちに立去れ。南無阿彌陀佛々々々々々々。

　卜懷中より錦の袱紗に包みし地藏の畫像を取出し、さしかける。大ドロ〱になり、累の亡靈、苦しむ思ひ入れ。入助はおりえを圍ふ。

かさ　アラ淺ましや恨めしや、今の累が死靈のおこり、もと下總の國羽生の土民、助といふ者、與右衛門が仕業にて、生れもつかぬ五體の怪我、殊に二歳の娘を捨ておき、助を鎌にて殺害なし、その髑髏この地に流れ、助が娘は即ち累、親の敵と知らぬ身の、契りを結び與右衛門と、死なんとせしとき父の怒り。さるによつて、面體變つて、親に等しき惡女の相好。又ぞろ我れを殺害なし、

その恨みやむことなく、縁ある者をとり殺し、又は苦痛を見せたるに、祐念行者の法力に、近よる事の叶はぬか。アラ〳〵〳〵、淺ましやなア。

祐念　死靈の祟り、さもありなん、なれども無心のこの女、苦痛を助けよ、退けよ離れよ祐念が、あの世の苦患は助けくれん。成佛得脫、立去れ〳〵。

ト畫像をさしつけ〳〵詰め寄る。累の亡靈、これにて恐れて跡しさりに、タヂ〳〵となり、魂棚よき所まで追はれ行きしが、爰にて煙硝火夥しく立ちのぼる。累の亡靈消える。皆々「ワツ」というて倒れる。八助はおりえを抱へて思ひ入れ、祐念、煙立つ方を見て

ハテ恐ろしき、亡靈ぢやなア。

トきつとなる。大ドロ〳〵、見得にて

ト引附ける。直ぐに双盤のツナギ、引返し。

幕

本舞臺、三間の間、うしろ黒幕、正面、石の大地藏、白張り提灯、松の大樹、供養札開帳札立ち、所々に稻叢、尤も仕掛けもの。爰に與右衞門、上下大小に改め、件の安右衞門を引附けゐる。かたへに乘り物持ち槍、箱提灯、合羽籠、挾み箱、供廻り大勢、それ〳〵の形、段八附添ひ扣へゐる。行列三重、



時の太鼓、捨て鐘にて幕明く。

皆々　お迎ひ。

ト安右衛門、振り切つて行くを、與右衛門、引ツ捕へ

與右　おのれ無法にこの茶入れ、奪つて駈出す町人め、身動きすると手は見せぬぞ。

安右　さう云ふてめえは木下川與右衛門、上下姿のその形は、こりやアどうだ。

與右　ヤア、過言な奴め。以前は侍ひ、暫らく流浪の與右衛門が、今日屋敷へ歸參の迎ひ。殊に所持するこの茶入れを、奪ひ取つたる不敵な奴。

段八　主人へ近づく

皆々　慮外な奴め。

安右　それでも茶入れはかゝり合ひ、蜂山さまから頼まれて、似せ物まで拵らへたは、わしが仕事だ。それだによつて、茶入れとあるゆゑ

ト行くを捕へて引附ける。この時、双盤の鳴り物、向うより八助、走り出て來り

八助　ヤヽヽ、若旦那樣、さては歸參の願ひが調ひ

與右　家老中より迎ひの同勢。

八助　めでたき出世の其うちでも、累が死靈に阿母樣は

與右　病死なしたか。老ぼれ一人さもあらん。殊更手に入るこの茶入れ、その町人めが邪魔するゆゑ。

安右　茶入れの似せ物拵らへたは、藤六さまとわしが業。それだによつて

八助　似せ物ありと聞く上は、油斷大敵旦那樣、しかと改め、その上にて

ト茶入れへ手をかける。八助、捕へて

與右　いかにも茶入れの、實否を糺して

ト八助へ差出す。供廻り提灯さしつける。八助、茶入れを見て

八助　ヤヽヽ、こりや私しが盜ませし、あの茶入れには相違して、眞赤な似せ物。

與右　すりや、この品は似せ物とや。それといふのもおのれが手ぬかり、思へば〳〵大だはけ。

ト八助を足蹴にする。

八助　すりや、似せ物は蜂山どの、この者語らひ拵らへしか。誠の茶入れの在所を吐かせ。

安右　イヽヤ知らない。おれもあなたへ差上げて、蜂山さまは切られた上は、行くへは誰れも知らないワ。

八助　すりや、その品の在所は知れぬか。ホイ

與右　うつけた下郎め、家來、繩うて。

段八　ハツ。

　　トかゝるを、八助、立廻つて段八の刀を拔きとり、腹へ突き立てる。

皆々　これは。

八助　この八助が申し譯、役に立たずとどん腹かき切り、くたばる私し、何卒お心改められて

與右　また意見立て、聞く耳持たぬ。一旦歸參の迎ひといひ、期を延さず、これより直ぐに、この似せ物を誠と云ひ立て、持參の上にて茶入れの詮議。者ども、穩密。

皆々　ハツ。

八助　その横しまのお心ゆゑ、非業の果が死靈にて、妹は難病。

與右　なにそれしきに屈せんや。おのれも門出を穢せし下郎め。

八助　そんならどうでも……エヽ、末々御身の

　　ト引廻す。

安右　この事訴へ

　　ト駈け出すを與右衞門引附ける。その間に八助、刀を拔き、バツタリ落入る。安右衞門、逃げようと

するを切り倒し

與右　刀を清めい。

段八　ハツ。

ト手桶を持ち行き注ぐ。この時薄ドロ〳〵になる。正面の地藏へ心火燃える。與右衞門、キツと目を附け

與右　又も累が怨念來るか。障化なきうち、歸參の門出。者ども、供せい。

皆々　ハツ。

ト大ドロ〳〵、一同顏を上げると、供廻り殘らず累の顏、持ち道具提灯あたりの高札、すべて累の顏になる。正面の大地藏、同じく累の顏になり、目口動く。與右衞門、ギヨツとして段八を見ると、これも同じ顏ゆゑ

與右　又も死靈の

ト段八を見事に切る。皆々驚ろき騷ぐを、一々切り倒す。此うちドロ〳〵、殘りは逃げて入る。道具その他も元へ戻る。與右衞門、キツとなつて

この沙汰なきうち、急ぎ目見得の

ト思ひ入れして、股立ち取つて向うへかゝろ。双盤になり、揚げ幕より與吉、件の姿にて誠の茶入れの箱を持ち、鍬を提げ出て來り、兩人行合ひ

與吉　ヤア、與右衞門か。

與右　南無三、爰を

ト引返して東へかゝろ。向うよりおさえ、件の錆鎌を持ち出て來り、本舞臺へ押し戻し、三人立廻つてキッとなり

與吉　久し振りなる金五郎、今のその名は與右衞門が、上下ためつけ我が父の、難儀となつた茶入れを尋ね、歸參と聞いて駈けつけた。して、その品は正銘なるか。

與右　われが家にて失つた、寶を尋ねた某ゆゑ、直ぐに差上げ、歸參の門出。

さえ　この程途中で無體のあり條、その時送りのこなさんは、石和川にて殺害なせし、助が娘の同胞三人、妹の累も殺したる、親の敵に妹の仇。

與吉　暗がり紛れの返り討、一旦死んだも祐念の、その名號の德により、蘇生なしたる神田の與吉、實名絹川甚三郎、おれが切られた返報に、今又われに張を云ふ。サア、惡事を殘らず白狀しろ。

與右　さてはうぬらは石和にて、助を殺した發端より、殘らず知つた上からは、今こそ明すよつく聞け。

いかにも石和で羽生の助、まつたこの程累も殺し、うぬら二人も殺らせしが、祐念行者の利益にて、事現はれしか、口惜しい。

さえ　もうこの上は親の仇、累が敵、覺悟しや。

ト鎌を持つて向ふ。

與吉　與吉が助太刀、後れを取るな。

さえ　云ふにや及ぶ。敵の其方。

與右　その品渡せ。

二人　覺悟しや。

與右　ナニ小さし出た

ト立廻りよろしく、この時、大ドロ〳〵、魂ひ飛び來り、引き戻す。與右衛門、キッとなつて

與吉　これも累が

與右　又も障化を

さえ　覺悟。

ト三人立廻つて見得。



奥右　まづ今日はこれぎり。

めでたく打出し

染替蝶桔梗

（そめかへてふにききやう）



役人替名
木挽町

染替蝶桔梗

第一番目　三建目

瀬田長橋の場
光秀閑居の場

役名――小田上總之助春永。勝鹿與五郎。中尾彌太郎俊國。長口半藏景近。彦根六郎豐澄。高宮五作重次。與五郎女房、闕の戸。同、一子友市。三原屋有右衞門。馬具屋權九郎。光秀娘、皐月。武智十兵衞光秀。

第一番三建目、口上濟むと、知らせにつき、ドン〳〵、鬨の聲をどつと上げると、直ぐに早笛になり、景近、胴丸、小手、臑當、軍兵の形にて、拔き太刀振つて揚げ幕より走り出る。それを又、軍兵二人、拔き太刀にて花道へ追ひ來り、景近と立廻りあつて

軍兵　小田方の落武者、やらぬぞ。

景近　ヤア、落武者とは奇怪なり。小田春永公の身内に於て、長口半藏景近が、手並の程を心得ろ。

軍兵　小癪な高言。首渡せ。

ト切つてかゝる。矢張り早笛にて、立廻りあつて、中の間を通り、南の口へ軍兵を追ひ込む。此うちどんちやん交り、鳴り物。揚げ幕より、胴丸、小手臑當、手甲、凛々しき形にて、豐澄・重次、うしろ鉢卷、胴丸。軍形の俊國と立廻り。

俊國　ヤア、小ざかしき永政が味方の葉武者ども。小田家の忠臣、中尾彌太郎俊國が、望みならねど、兩人の、首引ッ提げて、高名帳の足にする。兩人とも首渡せ。

豐澄　さては汝は中尾俊國よな。小谷の城主たる、淺井永政の臣下、彦根六郎豐澄。

重次　高富五作重次。佐和山表の一戰に、分捕り高名數知らず。次手に汝も首にする。

俊國　ヤア、いらざるその高言。ならば手柄に、イザ、兩人。

豐澄　面倒な、覺悟。

俊國　どつこい。

ト矢張り早笛、どんちやんにて、三人にて立廻りあつて、花道より臆病口へ三人とも立廻りながら入る。これをキツカケに、ドン／＼。

本舞臺、三間の間、正面遠見仕立て。上の方に瀬田橋の上がり口を見せ、よき所に龍神の宮を置き、正八、古鐵買ひの形にて荷籠を下ろし、眼八、白き半纒の金毘羅參り、御神酒樽の口を取り、側に旅人三人。小揚げ、二人。百姓四人、鋤鍬を持ち居る。てんつゝにて幕明く。

眼八 サア〳〵。皆の衆、惡事災難の無いやうに、金毘羅樣へ上つた御神酒ぢや。各自に、戴かつしやれ〳〵。

旅一 それは有り難い事ぢや。サア〳〵、御神酒を戴きませう。

旅皆 さうしませう。

眼八 お參物には及びませぬがら、戴いてござりませう。

ト旅人、捨ぜりふにて、土器を取り、御神酒を戴く。

正八 イヤモウ、わしらは取分けて金毘羅樣は信心でござります。イヤ、また有り難い事でござります

眼八 時に百姓衆。お前方は、なんで、この道端の普請を始めさしつたのだ。

百二 サア、聞いて下されや。今度江州小谷の城主、淺井永政さまと、小田春永さまが、アノ佐和山で軍を始めさしつたワ。

百三 そこでアノ短氣者の春永さまが、云はつしやるには、軍といふものは、何處から何處へ押出すま

いものでもないから、この近邊も、足場のよいやうに致せとのお下知でござつて、此やうに朝から晩まで、道普請を致します。

小揚　イヤモウ、軍は、道中を賣買にして居るわしらは、大きに難儀よ。

小揚　それ〳〵、道中で小揚げをするよりましだ。モシ、旦那衆、酒手で行きませう。荷を持たせてはどうだ。

小揚　ほんにお前方、さうするがいゝ。その神酒を戴いて、道中堅固でごんせう。併し、荷物はわしらに持たせさつしやい。

旅二　イヤ〳〵、まだ肩は達者でござる。今から守山まで行かねばなりませぬ。

小揚　マア、さう云はずと、持たせてござりませ。

旅一　ようござる〳〵。皆の衆、神酒もよい加減にして、泊りまでぶッつけよう。

旅三　イカサマ、さうしませうか。コレ〳〵、わしらは賽錢を三文上げて、神酒を十二文ほど飲みましたせるか、眩暈がしますワ。

旅一　さう云はつしやれば、わしらも大きに醉うたやうでござる。

小揚　ハテ、この衆は、二三文づゝ出しても、お神酒は剛氣に飲んだと見えますの。

旅二 サア〳〵、行きませうよ。これは忝なうござつた。

眼八 靜かにござりませ。

小揚 モシ〳〵、荷を持つて行きませう。

旅人 イヤ〳〵、ようござります。

トてんつゝになり。旅人を人足追つて、揚げ幕へ入る。

眼八 成る程、あの手合は、二三文づゝ出して、樽を飲み干して行きました。

正八 イヤモウ、呆れた旅人だ。

眼八 時にマア、今度の軍は、古銕屋さんは何ぞ拾ひ物があらう。大きな錢儲けがござらうの。

正八 イヤモウ、別して大層な事もござらぬが、雜兵の陣笠か、兜の金物の落ちたの位なものでござる。どうぞマア慾には、郡家で紛失したる、日本丸の劍か、七品揃つた茶器道具か、よい掘出し物がありさうなものでござるてな。

眼八 サア、その日本丸といふ劍は、郡音成さまの重代の品。殊に紛失の茶器も、結構な品けにござるが、その品の預り手は、御家來の勝鹿與五郎さまとやらいふお方、それを盜んだ家來は、岡島丹平とやらといひましたて。

正八　日本丸の劍は、禁廷にて差上ぐるやうとの事。紛失ゆゑ音成さまは、上洛が延引いたしたを、曲事との勅命によつて、小田春永さまは、九州の郡を責めるとあつて、合戰が又始まるげな。イヤモウ、軍には困り果てまする。

百一　オヽ、それぢやによつて、百姓は猶の事でござるてな。

百二　軍の度に百姓はこき使はれまして、これぢや假宅へも行けませぬ。

正八　アヽコレ、どうやら雪空になつたわえ。

ト空を見る。

眼八　成る程、この空では雪にもなりませう。ドリヤ、降らぬうち、町を一遍、貰うて行きませう。

正八　わしも在郷を歩いて、掘出し物でも探しませう。どなたもこれにござりませ。

ト念佛太鼓になり、正八、荷籠を擔ぎ、捨ぜりふにて下座へ入る。合ひ方、小鼓の謠にて、向うより關の戸、深編笠、一本差し、女浪人にて、扇を持ち、袖乞ひして出る。仕出し二三人、捨ぜりふ云ひながら出て、關の戸と行き合ふ。

關の　長々の浪人親子の者へ、御助力お願ひ申しまする。

ト扇を出す。仕出し、錢をやつて捨ぜりふにて入る。引き違へて向うより三平、百姓の形にて草苅籠

を抱へ、手に鎌を持ち出る。此うち關の戸は、よき所に莚を敷き、坐りゐる。三平、三人を見て

三平　オヽ、皆の衆、道普請が片付きましたか。

百一　これは三平どの、馬草苅りにござつたか。

三平　イヤモウ、度々の軍で、お馬の飼ひ料差上げろと、それは〳〵馬草苅りで、遣ひ殺されますわいの。

百二　さうでござらうとも。

ト三平、草苅籠より、子供の裏付き草履を出して

三平　時に、わしは此やうな子供の履き物を拾ひましたが、履く事はならず、何の用にも立たぬ草履でござるて。

三人　成る程、子供の履き物は役に立たぬて。

ト此うち關の戸、よく〳〵見て

關の　モシ〳〵、あなた方、その履き物は、どれに捨てゝござりました。

三平　オヽ、女の浪人どの、聞かつしやい。この履き物は、わしらが畑の端に踏捨てゝござつた。

ト見せる。關の戸、思ひ入れあつて

關の　これはしたり、そりや私しの忰めが履き物でござります。どうぞ私しへ下さりませぬか。
二平　やらいでかいの。それ〳〵、こなたの息子の履き物か、よう見さつしやれ。
關の　イエ〳〵、モウ、違ひはござりませぬ。
二平　そんなら進ぜませう。
關の　これは有り難うござります。
ト雪駄を取る。
百一　善い御人に拾はれて、仕合せな浪人どの。
百二　それ〳〵、草履を一足拾うたやうなものぢや。
二平　雪にならぬうち、わしも連立つて行きませう。
關の　これは有り難うござります。
二平　なんの禮には及ばぬ。こなさんの物ぢや。ハヽヽヽ。……サア〳〵、行きませう。
ト念佛太鼓になり、皆々、下座へ入る。關の戸、殘つて
關の　こりやコレ、友市の履き物を、善い人に拾はれて仕合せ。ほんに、子供といふものは、跡先の辨まへなうて。

ト思ひ入れ。七ツの鐘鳴る。關の戸、こなしあつて

ア丶、冬の日は短いもの。ありや三井寺の七ツの鐘。殊に雪空。この空も厭はず、夫與五郎どのは、日本丸の劒を尋ねに行かしやんす。わしは悴の友市連れ、この瀨田の橋詰めに、毎日々々袖乞ひするも、お主のお家で紛失の茶器道具、その一品は細石の茶碗、尋ね出さん其ために

ト思ひ入れあつて

姿賤しき袖乞ひも、父の素性は誰れあらう、淸和の末にありながら、長々の流浪に是非なくも、不緣の母を養育と、武士の娘が傾城の、その名も都と呼ばれたに、これが太夫の果か、ア丶、思へば娘を、どこにどうして。

ト思ひ入れ。

ア丶、この友市は何をしてゐやるやら。雪に合はぬうちに、早う戻つて來やらいで。

ト合ひ方、時の鐘かすめて禪のツトメ。下座より正八、荷を擔ぎ、眼八付添ひ出ろ。向うより、小揚げ二人、以前の形にて出て、本舞臺へ來て

小揚　お頭。

眼八　神酒に仕込みの藥の利き目、心を盪かす祕法にて

正八　首尾よく飲んで、あの旅人。

小揚　半道あまり行かぬうち、手足凍えて進みかね

小揚　みな道端に休らふうち、荷物残らず。

ト兩人、柳行李を關の戸へ見せる。

關の　軍中に用ゆる所の彼の秘法、人の心を蕩かす妙藥。して、荷物の中には似寄りの品も

ト此うち小揚げ二人、行李を改めて

小揚　茶器の道具は見えませぬて。

正八　わしも道具を詮議の爲、町々在々古鐵屋、今日もこの遍尋ねしに、註文わたつた茶碗には、似ても似付かぬ品ばかり。

眼八　聞けば尋ぬるその茶碗、織田家に渡つて、いま春永の秘藏の茶器となる噂。それでは滅多に手には入りますまい。但し御工夫ござるかな。

關の　サア、その噂も、やうやうと、風の便りで、聞くものゝ、しかとそれとも定かならねど

正八　して、その外六品の道具、徽宗皇帝の掛け物、姥口の釜、

眼八　玉椿の茶入れ、秋野の茶杓、

小揚　青海波の茶碗。

關の　六品の茶器は揃へども、まだ手に入らぬは、細石の茶碗ばかり。

四人　揃ひませぬか。

關の　七種揃はぬ其うちは、この身に科を受けるとも、大膽な女と云はるゝとも、なんの厭はう。

ト懷中より金を出し、兩方へ渡してやる。

四人　すりや、この金で

關の　必らず寶の

四人　心得ました。

關の　行かんせ。

四人　其うち逢ひませう。

ト時の鐘になり、合ひ方。思ひ入れあつて四人、下座へ入る。關の戶、殘る。向うより友市、絹やつしの拵らへ、素足にて出て、關の戶を見て

友市　母さん、これにござりましたか。

關の　ォヽ、友市か。このまァ雪空に、どこに何してゐやつたぞいなう。

友市　アイ、わたしや今まで石山の、觀音參りに物乞うて。

關の　オヽ、袖乞ひしてゐやつたか。

友市　アイ。

關の　アヽ、この寒いのに、云はゞ其方も武士の倅。浪人せずば、なんの其よな

　　ト思ひ入れあつて

　コレ、其方はこの冷たいに、履き物を、なぜに畑の端へ捨て置きやつた。

　　ト友市に見せる。友市、思ひ入れあり

友市　エヽ、その草履を、どうしてお前の

關の　サア、いま百姓衆が持つて見えたによつて、貰うて置いたわいなう。

　　トこれにて友市、思ひ入れあつて

友市　すりやアノ、草履を百姓衆が

關の　オイナウ、大方、跣になつて小鳥追うて歩きやつたか。コレ、わが身の草履ぢや。氣を付けやいの。

　　トこの時、後へ以前の百姓二人と、外に百姓大勢立聞きして居て

百一　その子悴は盗人だ。簀巻にして湖水へはめる。
百二　此方へ渡した〳〵。
關の　合點のゆかぬ。こなさん達は、なんでこの子を盗人とは。
百一　オヽ、證據無い事は云はぬ。今日大庄屋で茶の湯客、人中立ちのその時、圍にあつた茶碗が三ツ搔暮れ見えぬは不思議。盗む物も多いのに、茶の湯の茶碗を盗むとは、ハテ合點の行かぬと尋ねるところ、待合ひ口に脱ぎ捨てあつた子供の草履、裏問ひかければ、こなたの悴が履き物と、母親の口から訴人。連れて行つて、盗んだ茶碗の詮議する。
ト友市を引付ける。
關の　アヽコレ、その子が其やうな事を
皆々　エヽ、詮議するのぢや。
ト兩人立ちかゝつて關の戸を支へる。此うち一人は友市を引付ける。袂より茶碗三ツ、バタ〳〵落ちる。皆々見て
皆々　そりやこそ茶碗が懐から
關の　ほんに茶碗が、この子の袂に

ト思ひ入れあり

そんなら常々、女夫で苦勞するのを聞き、それを尋ねてこの母が、苦を助けんと惡い心。

友市　アイ、モシ母樣、わしが取りましたわいなう。

關の　すりや、それゆゑに……。ようマア其方は

ト友市を抱へて思ひ入れ。

百一　子を庇ふ母親ぐるみ、簀卷にして

關の　アヽコレ、これには樣子が

皆々　エヽ、連れて行くのぢや。

ト捨ぜりふにて、大勢寄つて兩人を手籠めにして連れて行かうとする。矢張り掠めて褌のツトメにて、向うより光秀、浪人の形、紙子羽織、一本差し、釣竿に魚籃を附けて持ち、川狩の歸り。この體を見て、ツカ〱と寄り、百姓皆々を投げる。皆々見て

百一　コレ〱、釣人どの、なんぢや。理不盡に、なんでわし等を

皆々　投げたのぢや。

光秀　イヤ、身共、全くこなた衆を、大人氣なう投げ拋りも致さぬ。通りかゝつて見ますれば、女子供

を手取り足取り。狼藉と見たゆゑに

百二　イヽヤ、狼藉ぢやない。盜人の詮議をするを、肩を持つは、アヽ聞えた、皆の衆、この釣人も盜人するな。

光秀　ヤイ〳〵、慮外者めが。浪人しても身は侍ひ。腰には一腰帶しゐるを、目にはかゝらぬか。過言の奴等。

百一　過言も糸瓜もいるものか。盜人の肩を持つは、矢ッ張り同類。この侍ひも寄つてかゝつて

ト光秀へかゝるを、取つて投げる。皆々續いてかゝるを、見事に投げる。

皆々　この同類めが。

ト皆々、一度にかゝる。光秀、持てあまし、刀を拔く。皆々驚ろき

皆々　ソリヤ拔いたワ。

ト皆々下座へ逃げて入る。

闢の　これは〳〵、どなた樣かは存じませぬが、親子の者が只今の難儀を、お救ひなされ下されしお侍ひ樣。女子ながらも、私しどもは浪人の妻。

ト笠を脫ぐ。兩人、顏を見合せ

光秀　ヤア、そちや先達て離縁せし、母と諸とも別れたる、身が總領の關の戸ぢやないか。

關の　エ、さう仰しやるは父上樣か。お久しうござります。モシ、お懷かしうござりまするわいなア。

ト縋り寄つて思ひ入れ。

光秀　思ひがけないこの所にて、絶えて久しき姉娘。すりや、其方も浪々の樣子と見ゆるが、さては夫も、今に主取り致さぬか。

關の　ハイ〳〵、左樣でござります。今も今とて、あなたの事を思ひ出し、定めし風の便りに母さんの事、お聞きなされてでござりませう。また妹皐月、末の弟十次郎、如何なされたかと思はれ、涙に咽び居りました。

光秀　風の便りに聞きし母が大病、人參代に差詰まり、其方は難波津へ身を賣つて、勤め奉公致す由、聞けば藤屋にて都太夫、全盛の遊女になつたとの事。藥の價に、ようマアその身を……なぜ傾城と成り下がつた。母の病氣は人間の常業、死病に藥用ひずとも、跡の佛事を弔らへば、それでおのれが孝行は立つ。いらざるその身を廓へ落し、母の病氣が助かつたか。コリヤ、それで母へ孝道か。どうでも男親の身が恥辱は、どのやうであらうと思ふ。母には孝行、父には不孝と、そこへ心が附き居らぬか。その罰で、おのれは袖乞ひ致すか。エヽ、茲な罰あたりめが。

ト涙を隠す思ひ入れ。

闘の　サヽ、その立腹は御尤もではござりますが、いかにあなたの武士道を、立てさせんと存じたとて、今際の母の臥し悩み、どうマア捨て置かれませう。それゆゑにこそ我れと我が、この不束な身を沈め、心一ぱい御薬を、あげましたれど情なや、その甲斐もなう世を早う。私しも、あなたの面を、立てんずものと思ふゆゑ、云ひ交せし郡の御家中、侍ひと女夫の約束。勤めのうちに儲けしこの子。

ト友市を見せる。

光秀　すりや、侍ひと契約なし、男の子を儲けしとや。

闘の　ハイ。

光秀　まだしもの事。郡の家中と申すが、勝鹿小六が悴など、浪人と聞きしが、若しや左様な……

闘の　エヽ。

光秀　コリヤ、ヤイ、其方が妹の皐月めも、今に定まる男もなし、弟の重次郎、朋友を頼み預け置く。身も今に以て主取りをせず、諸國を遍歴いたせしが、やう〱、この程近江なる、坂本に隠れ棲みして。……其方が連れ添ふ者は、浪人とは、何ゆゑあつて。

闕の　郡音成公より預かりの、茶器の寶を失なひ、まだその上に大切な、日本丸の名劍まで

光秀　一身の放埒に失なひしか。

闕の　イエ〳〵、左樣なお方ならず、わたしが事を根に持つて、同じ家中に岡島丹平といふ者、殿のお暇出でたる侍ひ、正しく彼れが仕業ならん。それを詮議と女夫の者が今の艱難。

光秀　すりや、元が朋輩の嫉みにてか。それに伴りないならば、寸時の間も油斷なう、失ひたりし寶の詮議、女ながらも夫と共に、コレ、必らず外に持つな。二人夫とは不義同然。一生のうち外の男を持つまいぞ。コリヤ、幼少の砌り、添へて置いたる臍の緒。守り袋は身が以前、世に在りし時用ひたる、桔梗つなぎの古金襴、所持して居やるか。

闕の　あなたと思うて、肌身離さず

ト守り袋を見せる。

光秀　過分なるぞよ。其方も健固で

ト行かうとするを

闕の　アヽモシ、緣なきわたし、さりながら、せめてこの子に

ト友市を突きつけエ。光秀、キッと見て

光秀　ハテ、訝かしきかな。人相、面は和らに見ゆれども、惡心するどき相現はれ、生涯惡事を好む。して、この悴の生れし場所は。

闘の　河内の國石川村、庚申の夜の誕生にて

光秀　ハテ、爭はれぬ小兒の生れ。

　　　トきつと思ひ入れ。

闘の　せめて孫よと、たつた一ト言

　　　ト寄るを突きのけ

光秀　一旦緣の切れたる女房、それに附添ひ別れた娘、その胎內に生れた子悴、なんで身共が、孫呼はり。

闘の　ぢやと申しても、ちよつと一言。

光秀　エヽ、うるさい。

　　　ト持ちたる竿にて拂ひのけ、行かうとする。闘の戸また竿に取縋り止むるを振り切り、キツとなり

　　　大公望が器の譬へ。覆水盆に

闘の　エ。

ト思ひ入れ。竿を二つに折つて

光秀　返らぬ事を。

ト唄になり、悠々と下座へ入る。關の戸、跡を見送り　ヲツと歎く思ひ入れ。時の鐘、向うより與五郎、細やつし、裁附け、大小、草鞋がけ、足早に出て、この體を見て、

與五　ヤヽ、そちや女房關の戸。アヽ、こりや又例の持病か。

ト立寄つて介抱する。

關の　オヽ、こちの人、與五郎どの。エヽ、遲かつたわいな〳〵。

與五　コレ〳〵、女房、遲かつたとは、そりや何事だ。

關の　サア、常々お前に噂した、わたしが父さん、今爰へござんしたわいな。

與五　すりや、其方が親人、身が爲にも舅どの。して、仕官の有付あつての上か。

關の　イエ、矢張り浪人、知らぬ事とて、この國坂本邊に住居との事。お前がもそつと早うござんしたら、仕樣もやうもあらうもの。殘り多い事いたしました。

與五　ナニサマ、身共がお目にかゝつた事ならば、緣は切れても聟舅、願うてもない折を、ハテ、殘念な。……イヤ〳〵、坂本に住居とあれば、便りを求めて面談とげ、又、其方の妹に逢うて、同胞

親子の名乘り。アヽ、それにつけても、日本丸の一腰、細石の茶碗、どうぞ在所を。

ト思ひ入れある。

關の　サア、其わたしらが尋ねる茶碗は、春永どのゝ手に渡りしと、今の噂。

與五　ヤヽ、すりやその茶碗が、春永の手に渡れば、買ひ戻すべき綱切れ果てゝ、郡の重寶小田家へ渡り、末代敵に、與五郎正行、噂さるゝワ。コレ、關の戸、ハテ、どうがなして取得る工夫は。

ト思ひ入れ。

關の　そりや氣遣ひなされますな。女ながらも、その品の在所、小田家に極らば、この身を粉に碎いても、見事わたしが尋ね出して。

與五　必らず武士道、立てさせよ。

トきつと思ひ入れ。この時、どんちやん烈しく、向うにて大勢の聲する。兩人、キッとなり

あの物音は、小田と淺井が、挑み爭そふ今日の軍。間近くなるは、ハテ、心得ぬ。

ト思ひ入れ。早笛になり、向うより黑き馬、誂らへの短刀に貫かれし體にて、荒れ出て來る。陣笠陣羽織の軍兵四人出て、手綱を取つて引き戻すを、蹴飛ばす。皆々、この馬を留めんとして、蹴ちらされ、這々に下座へ入る。馬、猶々荒れろ。關の戸、友市を横に抱へしまふ、逃げんとする張合ひ、手綱

を踏み思ひ入れ。馬はシヤンと留まる。與五郎、關の戸が踏み留めし手綱の樣子見て、吻りなす。
關の戸は馬の股に立ちし短刀に目をつけ、キツとなる。この間合ひ方。

與五 ヤヽヽ、荒れに荒れたる駿足の、手綱を女房關の戸が、思はず右の足踏まゆれば、忽ち駒の留りしは、誠に世俗に云ひ傳ふ、女の撚れる黑髪には、大象も繋ぐと、聞いてはゐれど見るは始めて。ハテ、爭はれぬこの場の椿事。

關の かよわき女の踏み留めし、駒の太股貫ぬきし、あの短刀の緣頭、目釘も同じ瓜に霰。正しく大將の所持ありし、右手差に相違なし。誠や、淺井小田の兩將、乘り放ちたる駿足なるか。

與五 ドレ。

ト駈けよつて、馬の太股の短刀を拔き見て

誠に、こりやコレ手を盡し、物好きなる拵らへは、大將所持のこの右手差、瓜の紋付きしは、これ正に、小田春永どのの短刀ならん。駒に乘り捨て放せしは、さては春永、多勢に圍まれ、身は步立の大童。今日の軍に勝利なく、正に落武者、この邊に、隱れ忍ぶに疑ひなし。これより直ぐに與五郎は、この短刀を證據に春永の、在所を尋ね討つて御主人晉成公へ、この身の詫びの手がゝり。

ト短刀を拔き取り、手拭に卷き、腰へ差す。

關の　お前は春永を討取り古主へ忠勤、その身の有り付き。この關の戸は今日よりして、細石の茶碗、
草を分けて詮議の門出。

與五　荒れたる駒を踏み留めし、幸先もよし門出よし、放れし駒をあざ名にして

關の　異名も卽ち放れ駒お關。寶詮議の女業。夫婦はいづくに別るゝとも、心は變らぬ胸と胸。心の關
の戸、しつかりと、さし固めたる心の潔白。今日より改めて放れ駒のお關。これから變へ名し、
尋ねる品の

與五　コレ。

ト思ひ入れ。關の戸、友市の手を取つて舞臺上へ止り、兩人キツと思ひ入れ。雪、頻りに降り、どん
ちやん、この見得にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、藁葺き世話場。奥の出入り、暖簾を掛け、上の方、床の間、竹の花活けに、白玉
椿を活け、門口、誂らへの簀戸。上の方に登り木の松、雪頻りに降る。皐月、世話娘形にて、鉢の皐月
へ霜除けを拵らへて居る。有右衛門、やつし羽織にて、催促して居る見得にて道具納まる。

有右　コレサ、娘御、この雪に、わざ／＼催促に來るは、よく／＼な事ぢや。是非とも今日は、勘定し

て貰ひませう。

皐月　ハイ〳〵、仰せではござりますが、何を申すも、父さんのお留守。どうぞこの間に、お出でなされて下さりませ。

有右　イヤ〳〵。又この間と云はれても、この大雪では跡の雪解け。何でも今日は拂つて貰はにやならぬ。否でも應でも、たつた今、拂つてもらはう〳〵。

皐月　サア、お情でござります。武具馬具の修覆の上。槍の直しや何やかや、今にも勘定仕ります。相違もない事ながら、何を申すも父さんが他行、歸られまする程も知れず、どうぞ明日なりと。御苦勞ながら。

有右　コレ〳〵、娘御。そんなら親御は、いよ〳〵留守に違ひないか。

皐月　イエモウ、あなたに何の嘘申しませう。

有右　イヤ、留守ならば相談ものぢや。こなさんが、その可愛らしい丹花の唇を動かして、待てと云ふなら待ちもしやうが、その代りに、コレお娘、只はならぬ。御親父の留守、殊に雪見ながらの新枕。コレ、ちよつきり爰で。

ト皐月が手を取り、しなだれかゝる。

皐月　ア丶モシ、何をなされます。浪人しても、父さんは侍ひ。武士の娘を捕へて、猥らな事なされますな。

有右　イヤ、なされましても大事ない。金の代りにちよこまかすのぢやて。コレ、野暮を云はずと、おれが云ふ事きくものぢや。否なら爰で、おッころばして。

皐月　アレエ丶。悪い事なされますな。

有右　あんまり悪くもないものぢや。

ト捨ぜりふにて追ひ廻す。てんつゝになり、向うより以前の正八、荷籠を擔ぎ、スタ〳〵と出て來り、門口にて

正八　古鐵はございませぬか。いつもの古鐵買ひでござります。何ぞやらつしやい。何もございませぬか〳〵。

ト門口にて訊いて居る。有右衛門、無性に皐月を追ひかける。正八、何心なく内へ入る。

有右　なんでも抱いて寢にやならぬ。

ト正八に抱き付く。愡りして

正八　モシ〳〵、何をなされます。

有右　ヤヽ、お娘と思つたら、こなたは古鐵買ひか。
正八　アイ、いつも參る古鐵買ひ。お前も餘ッほど襤褸ッ買ひと見えます。
有右　イヤモウ、それにあんまり違ひもないて。
正八　さう見えまするよ。ハヽヽヽ……時に、お娘どの。今日はきつい雪でござります。
皐月　あい、お前はいつもござんす古鐵屋さんかえ。
正八　左樣でござります。今度來なさつたら、寄つてと云はしやつたゆゑ、わざ〳〵寄りました。何ぞお賣りなさる物でもござりますかえ。
皐月　サア、その賣りたいといふ品も。……どうぞ又、この間に來て下さんせ。
正八　ハイ、左樣なら又この間に參りますが、何か知らぬが。成らう事なら、僅かな代物でもござりますなら、どうぞ今日賣つて下さりませ。併し、どうかお客も有る樣子。遠慮でござります。一兩日の內に參りませうかえ。
皐月　どうぞさうして下さんせ。
ト正八、荷籠を擔ぎ、向うへ入る。
有右　古鐵買ひは歸つても、この具足屋の三原屋は、いしかつて居催促。ハテ、わしが云ふ事聞いてもく

れぬ情知らず。主の戻つてくるまで、寒くとも待つて居やうか。

皐月　そんなら、どうぞ、父さんの歸るまで

有右　納戸の炬燵を借り切つて、ドレ、待ちませうか。

ト唄になり、有右衛門、思ひ入れあつて、奥へ入る。

皐月　今奥へござんした、有右衛門どのゝ催促も、鎧の威し、手槍の直し、打撤や薪と事替り、仕官を望む侍ひの、表道具は持ちながら、いつ主取りをなさんすか。浪人暮らしの貧しい身過ぎ。それにしても、いつぞや越路に有りし時、ふつと見初めた殿御は

ト思ひ入れあつて

あれど、其お方は立派な侍ひ。わたしはやう〳〵十二の春、年端も行かぬこませ者。これにつけても母さんの、連れて離縁なさんした、あの姉さんの行くへも知れず、弟十次郎は學問ながら、お寺へ預け、親子二人がやう〳〵と、暮らし兼ねたるこの庵、父の素性も誰れあらう、コレ、この守の古金襴。

ト誂らへの守り袋を出して

桔梗つなぎは先祖より

トこの時向うにて人音する。皐月、キツと見て

ありや人音、但しは比叡の雪嵐しか。さぞ父さんは俄の雪に、難儀なされてござんせう。

ト向うを見て思ひ入れ。どんちやんにて、春永、鎧を着込みし上へ簑引かけ、拔き身にて走り出る、軍兵二人、胴丸形にて、手槍を突きかけ來り、花道にて三人立廻り、軍兵二人、手槍を打ち落され、ほふ／＼引かへす。揚げ幕へ追ひ込む。春永、ツカ／＼と門口へ來り、枝折り戸へ手をかける。此うち誂らへ、草笛入りの合ひ方。皐月、行燈の火をともしゐたりしが

皐月　オヽ、父さん、戻りなされましたかえ。

ト門口へ駈け行き、春永を見て恟りし

ヤ、お前さんは、どれからお出でなされました。

ト春永、思ひ入れあつて

春永　某はこの邊にて、小鳥狩を催ふし、俄の雪に難儀至極。女、暫らくの間、庵を借らうわえ。

トこれにて皐月、こなしある。此うち雪自然と積もる事。

皐月　左樣なら、小鳥狩にお出でのお方。思ひがけなきこの大雪に、この庵をお借りなされたいとの、御用でござりますか。

春永　いかにも。雪の小止みのないうちは、この家へ宿りを賴まん。女、主へよきに申してくれい。
皐月　ハイ、それはマア、何よりお易い事ではござりますが、わたしには父さんがござりますが、折惡う他行いたしまして、留守居は卽ち私し、主は居りませぬゆゑ、お貸し申しては、私しがどうもならぬと申すか。
春永　ならぬと申すか。
皐月　ハイ、どうも女子一人の庵へ。
春永　さやう申すも尤も至極。女童の獨り住み。無心を申すも……エヽ、まゝよ。外の民家へ便りて見ん。女、さらばぢや。
皐月　お氣の毒にはござりますれど、何卒外を
春永　アヽ、まだ雪の小止みもないわえ。
ト合ひ方、時の鐘、向うへかゝる。揚げ幕より光秀、傘、足駄にて、春永と摺れ違ひ、門口へ來り、春永を見て
光秀　雪も頻りに降りつもり、野山も同じ白妙の、中に怪しき我が庵、藁屋の棟に、雪解は何とも
ト春永へ目をつけ
所に見馴れぬ御方、この雪中を步行あるは。

春永　一夜の宿りなきまゝに、雪路を踏みて、かゝる薄暮に。

光秀　すりや、一宿の施しござらば。

春永　それに上越す喜びやあらん。

光秀　見苦しけれど、お宿いたさん。

ト裾をはたき、枝折り戸を開く。

春永　滿足。

ト立歸り來る。

皐月　ヤア、父さん、お歸りなされましたか。さぞマア雪に

ト春永を見て

あなたは只今この庵へ、お宿の無心にお出での御方。

光秀　この雪中を歩み惱むの、樣子と見受け、この雪一夜

春永　親子と見えて埴生の住居。正に以前は由ある樣子。

光秀　お詞に違ひなく、槍一筋も突かせし拙者。流浪の有樣、お恥かしう存じまする。

ト春永、上座へ通り

春永　さこそあらん、さりながら、かゝる恩義の今宵の宿り。過分に思ふ。

ト思ひ入れある。

皐月　モシ、父さん、折角お宿申しても、お茶さへも、どうマアこれが

春永　イヤ、大事ない。たとへ澁茶の馳走たりとも、何をか厭ひ申すべき。女性、溫み茶なりと。

皐月　差上げますでござります。

ト合ひ方になり、茶碗を古き紫の袱紗へ乘せ、罐子の茶を汲み、春永の前へ出す。春永、取つて、思ひ入れ。

光秀　憚り乍ら、其許樣には、この雪中をお一人して、何方へお心ざされて。

春永　某は佐和山の一戰に、思はずも敗北なし、馬もその場で乘り放ち、敵を防いでこれまで參つた。我れは百姓土民にあらず。武具槍なんぞ所持召さるは、賴もしき、よき隱れ家。暫しの間、この身を寄するは。

光秀　及ばずながら拙者も侍ひ。ちぎれ具足の一領も、貯へましたる武士の果。刃金も銹びし片鎌槍、一夜なりとも匿まふ客人、御身に對し、敵たふ輩あるならば、主持たぬ身は誰れ憚らぬ浪人の、拙者も共々加勢いたす。お心置きなう、荒ら家なれど。

春永　頼もしきその一言。主の家名聞く前に、某が姓名を明かせし上。

光秀　アイヤ、御姓名承りては、拙者が氏素性、それを明かすも面伏せ。矢張り其まゝ。

春永　然らば主の詞につき、某が姓名も、云はず語らず

　　ト　この時、雪颪し、時の鐘。皐月、思ひ入れあつて

皐月　次第に更け行く雪の夜に、せめて薪の用意もあらば

光秀　取入れし柴とても

皐月　折悪しう、雪に埋もれ。ア、何をかさしくべ、焚火となして

　　ト　皐月の鉢植を見て

幸ひ斯様に雪霜を、除けてと存じ秘藏せし、この鉢植の皐月こそ、小枝を切つて薪となさん。オ

オ、それ〳〵。

　　ト　鉢を取つて鉢植の皐月を切らうとする。

春永　いやとよ女中、先づ待たれよ。秘藏の鉢植といふからは、心ありげなその皐月、煙となすは無用

におしやれ。

光秀　御辭退あるとも何をか惜しまん。娘、其まゝに、枝下ろせ。

皐月　仰せなくとも今宵の焚火、皐月を切るもこの皐月、わたしが名のみさしくべて
春永　さては婦人の名も皐月。
皐月　日陰に惜しき皐月の一枝。
ト鉈にて左右の小枝を打切り
光秀　イザ、さしくべて、薪となさん。
とく寄りてあたり給へ。
ト思ひ入れ。皐月、小枝さしくべる。燃え立つ。この時向うにて、ドンと遠寄せの頭を打込むと、直ぐにドンチヤン。春永、キッとなり
春永　あの貝鉦は、この家に某、隠れある事悟り知り、不意に寄せ來る結構よな。イデ、馳せ參じて
ト立ち上がり、向うへ行かうとするを、光秀留めて
光秀　暫らく。もしや敵の寄せたりとも、共々防ぎ奉らん。さはさりながらこの荒ら家、一先づ御身はあたりにひそまり、事の樣子を御覽の上にて
皐月　及ばずながらも父さん諸とも、御加勢いたしますでござりませう。先づ〳〵あなたは身を忍びて。
春永　でも、逃げ隱るは卑怯の至り。

光秀　サア、その仰せ御尤も至極、さりながら、姓名は存ぜねど、大切の御身と見受け奉ります。一度後を見するとも、四海を握るが武門の譽。軒漏る雪の荒ら家も、御身の爲には鐵石も同じ事、親子が勸めをお用ひあつて

皐月　一度御身を、お忍びなされて下さりませ。—

春永　心遣ひ過分に存ずる。然らば親子が勸めに任せ。

光秀　暫時納戸へ。

皐月　アモシ、折惡う具足師の三原屋さん、あの奥に、お前の戻るを

光秀　すりや、有右衛門が來て奥に、ハテサテそれは

ト鎧櫃を見付け

幸ひなるかな具足櫃。暫らくこれへ。

ト蓋を明け、内の鎧を出して、思ひ入れ。春永、思ひ入れあつて、鎧櫃へ入る。光秀、蓋をする。皐月、鎧を下の戸棚へ入れる。矢張り向うにてドンチヤン。

光秀　寄せ來るとて何ほどの事あらん。さはさりながら油斷大敵。

皐月　父さん、お前も用心なされませ。女ながらも、わたしも共々。

光秀　一腰渡す。油断いたすな。

皐月　心得ました。

光秀　ドリヤ、用意して

ト此うち兩人、身拵らへしてゐる。光秀、皐月へ差添を渡す。兩人も襷懸け、光秀、槍をおッ取り、扱き見てゐる。此うち遠寄せに、てんつゝを交ぜ、遠寄せの鳴り物、だん／＼迷ひ子の鉦太鼓になり、向うより權九郎、六尺棒を突き、やつし、半合羽にて下駄がけ、跡より手代三人、やつしにて、菅笠かぶり、鉦太鼓を打つて、三原屋といふ提灯を付けて、呼びながら出て

權九　迷ひ子の／＼有右衛門やアい。

手一　旦那様やアい。

手二　有右衛門やアい。

手三　迷ひ子の旦那やアい。

權九　コレ／＼、三原屋の若い衆、この馬具の權九郎も、其方の亭主の有右衛門に、拵らへやつたその代が、今に濟まぬゆゑ、取りに行つたところが、駈落ちやら神隱しやら、朝出たまゝで歸らぬとの事。それならば尋ねてやらうと出かけたが、あの貸しのある浪人は、爰らではないか。

手一　左様でござります。即ち向うの内でござります。
權九　マア〳〵、その浪人の内へ行つて尋ねて見ようかい。
手二　さうしませう。
權九　迷ひ子の有右衛門やァい。
手三　迷ひ子の旦那どのやァい。
權九　許さつしやりませ。馬具屋の權九郎でござる。こなたの内に
　　ト門口を明けて、二人が身拵らへするを見て肝を潰し
これはどうだ。こなた衆は親子ながら、何を其やうに仰山な。その身拵らへは何をさつしやる。
コレサ、敵討にでも行くのかよ。それでは此方の勘定も濟まないに、コレ、早まるまいぞ〳〵。
　　トわな〳〵して云ふ。兩人見て
皐月　ヤ、お前は馬具屋の權九郎さん、見れば三原屋の若い衆も同道して、樣子ありげに鉦や太鼓でござんしたは。ア、そんなら今の寄せ太鼓と思うたは、鉦や太鼓か。あの音かいなァ。
光秀　成る程、あのやうに聞えたは、迷ひ子の鉦太鼓であつたか。さうとは知らず、敵の寄すると心得、親子が狼狽へこの支度、今更いかい白痴ではないか。

權九　イヤモウ、いかい白痴はおれどもぢや。有右衞門が頼むゆゑ、手間代三文とらずに今日が日まで勘定を斷わられた權九郎、あの三原屋へ催促に行つたところが、金も拂はず剩へ、わしが前へ面目ないかして、今朝から見えぬ。家内の者が尋ねるゆゑ、馴染だけに權九郎も、尋ねてやるのぢや。浪人どの、して、こなさんは、心當りはごんせぬか。

皐月　アイ〱、その有右衞門さんは、晝からござんして、いま此方の内にござんすわいな。

權九　アヽ、さうか。それで落ちついた。コレ〱、若イ衆、聞いたであらう。有右衞門どのは狐に化かされ、爰の内に來てあれば、落ちついてゐやれ〱。

手代　イエモウ、それで落ちつきました。

光秀　迎ひの衆なら、知らせてやりませう、コレ、有右衞門、來てぢやないか。お宿から迎ひぢや。有右衞門どの〱。

ト出て來て

有右　オイ〱、聞いて居ました。こりや御浪人、お歸りなされたか。して、わしを迎ひといふは。

權九　イヤ、別の者でもない、權九郎でごんす。コレ、貴樣が歸りが遲いというて、家内の者が鉦や太

鼓で尋ね歩くゆゑ、連れ立つて尋ねて來たわいの。

有右　それはマア、滅相な。雪の降るのに、御苦勞々々。コレ／＼、てまへ達、もう內へ、早く歸れ歸れ。

手一　ハイ／＼、左樣ならお先へ參ります。權九郎どのも一緒にお歸りなされませ。

權九　オヽ、大儀々々。

手二　ハイ／＼、お先へ參ります。

ト手代は向うへ引返して入る。

權九　コレ／＼、有右衞門、貴樣はまだ、勘定が片付かぬが、爰の內へ來て、どうやら寢惚けた樣子ぢや。アヽ、聞えた。こりや爰の娘を張らうと思うて、そこでベン／＼とべた付いてゐるのか。コレ、どうして勘定が今に解らぬか。貴樣の貸しは兎も角も、この權九郎が拵らへました。サア、いま片付けて貰はう。

有右　コレ／＼、貴樣がさう氣を廻すのも尤も。イヤ、どうしてマア、爰の娘が、大概な事で手も握れる事ぢやない。マア／＼、そんな事は後にして、コレ、浪人どの、先達てお賴みゆゑ、急に拵らへ上げた兜鎧の修覆、聞く通り、この權九郎へも云ひ譯がなし、マア、手間代を小判で十兩、

サア、今日は是非とも拂つてもらはう。

光秀 イヤモウ、何かと貴公をお頼み申し、その代金が延引いたすは、何とも云ひ譯なき事ながら、何を申すも浪人の身共。只今にも仕官の願ひ叶ふなら、一倍増しに御勘定仕るほどに、左樣心得て今少しの所を。

皐月 左樣でござります。御存じの通り、諸所に軍が多い最中、良い大將なりと討取つて、アノ父さんが高名手柄をなさるその時は、どのやうな立身出世を、なさんせうも知れぬわいな。

有右 コレ〳〵、お娘、こなた衆の立身出世するまで、なんでわしらが待つてゐられう。首尾よう大手柄をすればよし、もし又向うに強い奴があつて見さつしやれ。彼方へ首を取られまいものでもない。

樫九 さうとも〳〵。マア〳〵、十が九ツ、首は向うへ取られるものと、臍をかためてからが、ハテ、向うは知行取り、此方の主は食ふや食はずの素浪人、冷飯腹で軍に出ても、米の飯には、どうしてどうして。もし首を取られゝば、わしらが手間代の十兩の勘定は、どこから取りませう。イヤサ、とんだ浪人どのだ。跡式は誰れが引受けて立替へまするぞ。解らぬ斷わり云はうより、コレ、この娘を賣るなりともして、諸拂ひをなさんせぬかえ。

光秀　サア、それは、と云ひたけれど、侍ひの娘、賣り渡す品物ではないぞ。
有右　そんなら十兩の金、今爰で受取らう。
光秀　サア、それは。
兩人　金は無いか。
光秀　サア
三人　サア〳〵。
有右　十兩取らねば貧乏搖ぎも
權九　五兩でも動く事ではない。
　　ト兩人、キッとなる。
皐月　モシ、父さん、手詰めとなつては、わたしをどうなと。
光秀　子を捨てる藪と譬へはあれど、親子二人の身の上に、なんで娘を
　　ト思ひ入れあつて
　貧ほど辛きものがあらうか。
　ト愁ひのこなし。てんつゝになり、向うより與五郎、古鐵屋の荷を擔ぎ、スタ〳〵と出て、門口へ來

て、

與五　オヽ、爰ぢや〳〵。仲間の者が教へて寄越した藪際の一軒家。モシ〳〵、お頼み申します〳〵。先刻に何やらお賣りなされます品がござりますとの事。今度の時にと仰しやつたげにござりますが、モシ、今でもよくば、何なりと買うて參りませう。

　トこれにて皐月、こなしある。

光秀　コレ、娘、わが身、何ぞ商人に、用があると云やつたか。

皐月　ハイ、先刻にちつと用事があつて、又重ねてと申したけれど、マアようござんす。歸つておくれ。

與五　ハア、もうよろしうござりますか。左樣ならお暇と、申すにも申されぬこの雪。モシ、軒の下を少しの間、お借り申しましたぞえ。

　ト門口にて雪を防いで居る。有右衞門、聞いて

有右　アヽ、なにか、古鐵買ひに、この身代を賣る心か。こりやさうありさうな事。ハヽヽヽ。併し、斯う見た所が、鍋釜鑵子古疊、古行燈大和風呂、値になるは一つも無い。金になるものは、此お娘。コレ、どうぢや。氣は無いか〳〵。

　トしなだれるを、皐月、ツンとして脇を向く。

エヽ、わしの云ふ事を聞いたなら、今の苦勞はしまいもの。併し、古鐵買ひに相談するは、鎧兜に槍ぢや。これは此方にかゝりのある代物、滅多に油斷はならぬわえ。コレ、權九郎、こりや斯うしようわえ。もし種無しを喰うてはならぬ。この槍もひッからげて、おれが内へ金の濟むまで持つて歸らうわえ。

權九　オヽ、それ〳〵。この鎧櫃は、おいら二人で、かたげて歸らう。有右衞門、片棒舁きやれ。

有右　合點ぢや。

ト二人して鎧櫃を抱へる。光秀うろたへ

光秀　アヽコレ、その中には大切な

有右　ハテ知れた事、鎧であらう。

光秀　サア、その大切な鎧ゆゑ

兩人　金の濟むまで持つて行くのサ。

トかゝるを光秀、投げのけ

光秀　ハテ、聞分けのない素町人め。

權九　アイタヽヽヽ。コレ、浪人、借りのあるその代り、修覆の鎧を持つて歸るを、なんでおぬしは

有右　投げた〳〵。投げられては、是非とも鎧を持つて歸る。
皐月　サヽ、そこをどうぞ四五日のところ、御勘辨なされませ。
兩人　否だ〳〵。金が濟まずば、どうでも鎧を
　　ト　かゝる。皐月、思ひ入れあつて
皐月　すりや、どのやうに申しましても
兩人　堪忍袋の緒が切れた。
　　ト　皐月、思ひ入れあつて
皐月　左樣なら、その代金、只今これにて、お濟まし申しませう。
有右　ナニ、金で十兩濟ますのか。
權九　コレ、そんならその金、一刻も早う。
皐月　即ちこれでござります。
　　ト　合ひ方になり、櫛箱の剃刀を出し、髷をフツツと切つて思ひ入れ。
　お二人樣、女子の嗜なみまする即ち黑髮を、この如く切りましたれば尼同然、金子の調ひまするまで、恥を洒して髮形、取上げもせぬさらけ髮、これがわたしの一つのお願ひ。金子調達いたし

なば、その時こそ早速に、髪と金子と替へ〲に。それまであなたへお預け物。御不請ながらこの切り髪、お預かりなされて下さりませ。

ト差出し、光秀へこなし。門口に與五郎、立聞きしてゐる。兩人、嘲笑うて

有右　コレ、お娘、そんならその髪わしらに渡して、金の十兩出來るまで、髷を切つて質物に。

權九　イカサマ、御息女は珍らしい。どうで着類も櫛簪も、貯はへのある內でもなし、賣つたら五十か三十の、髢を十兩の質物とは

有右　成る程、女の好い辛抱。願ひの通り十兩の、代りに髮を

皐月　ハイ〱〱。

ト嬉しきこなし。兩人、顏を見合せて

有右　油臭い女の髮、喜ぶ者に遣らば遣れ。この有右衛門はいらぬわえ。

皐月　すりや、此やうに、恥を捨てゝのお願ひも

權九　否だ、ならない。この切り髪、捨てゝしまうて

ト門口へ抛り出す。與五郎、切り髪を取つて思ひ入れ。

皐月　エヽ、マア、お前は聞分けの

有右　惡いは其方に覺えがあらう。

權九　もう斯うなつては、是非とも鎧を

　　ト鎧櫃へ手を掛けるを、皐月、留める。光秀こなしあり、この時。與五郎、ツカ〳〵と入つて、有右衞門を取つて投げて、懷より金十兩投げ出す。

有右　アイタヽヽヽ。

　　ト金を取つて

ヤア、こりや小判で十兩。

光秀　見馴れぬこなたは、いづくの誰れ。

與五　アイヤ、私しは軒下を、御無心申した古鐵買ひ。何かモヤ〳〵と致す噂、聞くも氣の毒それゆゑに、あの娘御の黑髮を、十兩ならば門口の、古鐵買ひが買ひました。旦那樣、この商人に、どうぞ買はせて下さりませ。

皐月　すりやアノわたしが切り髮を、アノ商人どのが……エヽ、恥かしうござんす。

光秀　思ひかけない商人が、大枚の小判で十兩に、求むる切り髮。ハテ、心ありげな

　　ト思ひ入れ。有右衞門、小判を取つて

有右　どこから出やうが拾兩の、金さへ取らば三原屋は、申し分ない。サア、權九郎、歸らうか。

權九　さうとも〳〵。

光秀　兩人、待て。

兩人　エヽ。

光秀　身が借用の鎧の代金。受取つたれば、申し分ないか。

有右　なに云ひ分ごんせうぞ。

權九　仕事があらば、この上ともに頼みませう。

光秀　其方に云ひ分あるまいが、此方に云ひ分がある。二人が聞分け無きゆゑに、武士の娘の黒髪を、
　切らせた禮は、身共がきつと。

兩人　ナニ洒落くさい。禮とはどうする。

光秀　その返報は

　　　ト拔くより早く背にて打ちすゑる。與五郎、留める。

　事によつたら、ぶち殺すぞ。

與五　アヽ、モシ〳〵、お腹立は御尤も。併し、無法過言の町人、お手にかけられて何の益。赦しておや

りなされませ。コレ、二人の衆、足許の明るいうち、キリ〳〵宿へ歸らつしやりませ。

ト二人を門口へ突き出す。兩人、思ひ入れあつて

權九　これは、いかいお世話に與かりました。

有右　コレ、浪人、おのれ、よく喰はしたな。

權九　おれも此まゝでは歸るではないが

與五　まだ歸らぬか。

兩人　ヤイ、浪人め、この禮は、重ねてきつと。

與五　まだか。

兩人　ハイ、其うちに參りませう。

ト花道へ行きさうにして、囁く。權九郎、思ひ入れあつて、向うへ一散に入る。有右衛門、引返し、門口の樣子を窺ひて入る。

皐月　思ひがけない商人どの、大金出してわたしが黑髮、ようマア買つて

光秀　求め下さる志し、一生恩に着ましたぞよ。

與五　ナニこれしきに其お詞。親御は勿論、娘御の志しにほだされて、求めましたるこの切り髮、これ

受取れば心中同然。

皐月　すりや、そのわたしが切り髪を、心中なりと云はしやんす、お前の詞。

ト行燈をよき所へ持ち行き、與五郎をキツと見て

ヤヽ、お前はいつぞや越路にて、お目にかゝりし與五郎さん、侍ひ姿に引かへて、思ひがけない
町人の

與五　サア、古鐵買ひのこの商人、越路にありしその時は、世に捨てられぬ侍ひの、こなたはやう〳〵
十二の春、縁もあらばと詞の契約、指折り見れば、もう八年以前。

皐月　年も十九の今日までも、忘れぬお前のお行くへを、どこにどうしてござんすと、思ひ暮らせしに、
ようマア無事な、お顔を見せて下さんしたなア。

光秀　さては娘は、それなる男子を

與五　あなたが越路に御座ある頃、御息女皐月どの、申し請けんと存ずるうち、身共も浪人、殊に今で
は町人の古鐵買ひ。御浪人、よもや息女は下さるまい。賣買ひするは當時の商賣。その御息女を
求めませう。お賣りなされて下さりませ。

光秀　默れ町人。以前は何か知らねども、今の恩義に事變り、武士の娘を買はうとは、過言であらう、

舌長ぢやぞよ。

與五　でも町人へ心ようは、下さるまいと存じてから、息女の價も持參した。是非とも賣つてもらはにやならぬ。

皐月　心ありげなその詞。して、又わたしを求めようと云はしやんす、お前の價といふは。

與五　即ちこれにて求める心サ。

ト短刀を出す。

皐月　合點のゆかぬ鞘なき短刀。

光秀　それで娘を買はうとは。ドレ、受取つて

ト取つて見て

刃金鋭どきこの短刀、緣も頭も瓜に霰、物好きしたる象眼の、この右手差は、正しく小田の

與五　春永こそは、今日の軍に敗北なし、宿を求めて正しくこの家。息女を賣らずばこの持ち主、詮議し出して

ト鎧櫃へかゝる。皐月を隔てゝ光秀と立廻り。

光秀　望みとあらば娘は町人、其方にしつかと賣り渡したぞ。

與五　親御のあなたが

光秀　娘への價が氣に入つた。いかにもこれなる短刀にて、商人、其方にしつかと賣つたぞよ。

皐月　すりやアノわたしを、それなる短刀の、價にかへて、父さん、お前は。

光秀　娘を賣るは身が情。所望とあらば敵にもせよ、娘もどうか親の手を、切つても添ひたき樣子と見受くるゆゑ、これなる皐月は商人どの、こなたに賣り渡す。これにつけても離縁せし、女房に附けて渡したる、姉娘も緣を切り、妹も緣切れば親の無い奴、行末長う、親の護りの守り袋、それを身共が形見と思うて。

與五　ハテ、何とやら某が、耳にかゝりし其お詞、御家名聞きたきものなれど、拙者も包む實名から。

光秀　アイヤ、身共も浪人。商人どの、家名、實名あればとて、時節を待つて。

皐月　もし又お前はその以前、お目にかゝりしその時の、姿に變るこの體は、何か樣子が無けりや叶はぬ。包まずどうぞその譯を。

與五　身が尋ぬるは日本丸とて、稀代の劍、御主人より預かりの品、失ひたる越度にて、かゝる賤しき古手買ひ。其方を申し受けたる上は

皐月　連れ添ふ男の尋ぬる一腰、聞き覺えある日本丸。して、その劍の拵らへは。

與五　中身は肥前不動國行、鍔は象眼、目貫は金の龍、小柄は菜種に、小蝶の高彫り。これぞ尋ぬるよき目當。

皐月　氣遣ひあるな。この身を粉に碎いても、草を分つてわたしも共々。

與五　男の爲ぢや、詮議いたしやれ。

皐月　そんならわたしを、いよ〳〵主へ。

光秀　賣り渡したる上からは

與五　然らばこれなら切り髮の、尼同然の御息女は、天秤肩の、この商人に。

皐月　女房になればこの切り髮、矢張りわたしが添へに入れ、嶋田くづしの世話女房。幸ひ庭に降り積る雪は消えても、消えやらぬ、この切り髮は女夫のしるし。雪の雫に濡れ髮の、人目の關のあればこそ、町家に住はゞ今からは、下素女とも成り下がり、見事詮議をしぬくは一腰。

光秀　尋ね出すも男の爲。異名に呼びて濡れ髮の

皐月　人目の關の關の名も

與五　同じその日に放れ駒、又濡れ髮も關と呼ぶ、女二人の

皐月　エ。

ト聞告める思ひ入れ。

與五　アイヤ、女に稀れな生れぢやなア。

ト門の藪影より小揚げの一、出かゝりて

小揚　女盗賊身寄りの男、この由注進。

ト行かうとする。立廻りにて向うへ駈け行く。

與五　南無三、あの者、遠くは行くまい。

トごん／＼、山颪しにて、與五郎、跡を追うて向うへ入る。皐月、光秀、思ひ入れあり

光秀　今駈け行きし曲者が、女盗人身寄りとは、何とも以て合點の行かぬ。

皐月　殊に夫の詞の端。同じその日に放れ駒。又濡れ髪の闕といふ、女二人と云はんしたは、どうか様子の

光秀　この短刀。すりや、最前隠まひ申せし大将の

ト思ひ入れ。淺井方の軍兵二人、門口の藪疊より窺ひ出て

軍一　さてこそこの家に隠まふ春永。

軍二　イデ、討取つて高名せん。

兩人　それ。

トつか〳〵と入る。光秀隔て〻

光秀　埴生なれども城廓同然。無禮の葉武者め。

兩人　家探しなして。

ト踏ん込むを、光秀、皐月、支へて立廻り。兩人、白刃を持つて切りつける。立廻りあつて、軍兵の首を打ち落し、皐月も立廻りにて、軍兵を切り捨て、のしかゝつて止め。この時ドンチヤン烈しく

大勢　エイ〳〵オウ。

トこの時光秀、キツとなり

光秀　今あげし鬨の聲。淺井が手勢か。ハテ、訝かしい。

ト思ひ入れ。ドンチヤンにて向うより、俊國、景近、胴丸の形、陣羽織、陣笠にて、瓜の紋付いたる赤旗押立て、一散に來て、門口にて

俊國　ヤア〳〵、この家に御大將春永公、お忍び御座ある由、御迎ひに參上せり。

景近　心置きなく主の武士、とく〳〵これへ誘なはれよ。春永公

兩人　お迎ひ。

皐月　すりや、父さんがお隠れなされましたは

光秀　春永公とお云やるか。

俊國　いかにも。今日、佐和山表の合戰、一旦は利無く退きしが、俄に降りくる大雪に、敵の手つがひ徒らに、淺井永政敗北して、十分に味方の勝ち軍。

景近　御安堵あつて

兩人　御歸陣々々。

光秀　すりや、佐和山は敗北とや。

春永　聞き届けたり。者ども、大儀。

ト鎧櫃より蓋刎れのけ、春永出る。光秀、皐月思ひ入れ。

皐月　すりや、あの中にて、樣子詳しく

春永　卑怯未練と存ぜしが、主の勸めに、身を潜め居たる甲斐あつて、さしも手強き淺井永政、敗北とは、某が喜び。この上は、あれにて詳しく樣子聞くところ、優しき娘が志、丈なる黑髪を切つたるも、皆我れ故と察せしゆゑ、今ぞ姓名云ひ聞かさん。小田上總之助春永とは、某が事なるぞ

光秀　左樣存ぜしゆゑ、この右手差、春永公へ

ト短刀を差出す。春永、キッと見る。

皐月　春永公のお心に、叶ひしならば、我れ〱親子が。

春永　春永が恩を謝すべきしるし。墨付くれん。料紙をこれへ。

皐月　ハツ。

ト紙を添へ、硯箱差出す。春永、サラ〱と書いて

春永　主が心體、娘が孝道、禮は詞に述べ難し。即ち當所に住居を幸ひ、近江坂本丹波龜山、兩國を宛て行ふものなり。安堵の墨附。イザ、受取れ。

光秀　こは有り難き御惠み。娘が丈なる黒髪を、切つたるも我れゆゑと、御稱美あつて、下し置かるゝ御墨付。かねて某が身を寄するは、小田家ならではなきものと、心を盡せし甲斐あつて、御臣下となし下さる段、この身の本懐、この上なし。今は素性を申しあげん。拙者が先祖は、清和の流れにて、美濃の國主、土岐伯耆守光綱が一子、幼少にて父におくれ、齋藤義龍の爲に、罪なうして、我が本國を追放せられ、それより諸國を遍歴して、周防の山口、又は越路の淺倉に身を寄せ、この程、江州坂本に便り來て、仕官を願ふ拙者こそ、武智十兵衛光秀と申す者。最前御身、この家に來り給ひしが、藁家の棟の雪解けし不思議は、春永公日の旗を、所持の御樣子と見受け

しより、御大將と知つたる某。今思はずも近江丹波を下し置かれ、二ヶ國の主となるも、偏へに君の御惠み、いつの世にかは報じ申さん、アラ〱、有り難やなア。

ト思ひ入れ。

春永　いしくも申せし汝が才智。いかにも春永、仔細あつて遁世ありし慶覺法師、以前は足利義照公へお渡しありし日の御旗、春永守護し奉る。拜し申せ、武智光秀。

ト懷中より日の旗を出し、光秀に見せる。

光秀　さてこそ拙者が推量に、違はぬ御所持の日の御旗。

皐月　御所持ありしは春永公、その名將に今日只今、お仕へ申す父さんは、近江丹波を拜領なし、二ヶ國の主たる武智十兵衞が、娘の皐月は下素女、勘當うけて親と子の、緣を切られて劍の詮議。

光秀　君の御敵、郡の家人と、知つたは尋ぬる日本丸。音成祕藏の劍をば、見事汝が

皐月　仰せまでもなく、夫に付くが女の習ひ。今日より町家に身を寄せて、劍の詮議。

春永　天晴れ愛い奴、大丈夫。光秀が流儀の片鎌槍。これへ持て。

光秀　ハツ。

ト掛けたる槍を取つて差出す。春永、取つて

春永　女ながらも武智が娘。手練の試み。

ト片鎌槍にて突きかける。皐月、飛びのき、立廻り。この時、松の木の上に有右衛門、頬かむりをして、内を窺ひゐる。皐月、立廻りのうち、これを見附け

皐月　雪の梢に怪しき男子……エイ。

ト雪の礫を打つ。有右衛門、飛び下り

有右　やらぬワ。

ト春永へかゝる。立廻りよろしく、春永、突きつける。皐月、有右衛門と立廻りながら槍先を除ける。春永、見事に突込む。有右衛門、苦しむ。春永、キッと見て

春永　流石は手の内。

皐月　君を窺ふ不敵の町人。

光秀　直さまお手討。

皐月　この上ともに

光秀　御歸陣。

春永　馬引け。

景俊　ハア〳〵。
ト木の頭、よろしく、雪颪しにて
幕

第一番目　四建目

山崎渡し場の場
志賀郡鷹野の場

役名――小田右大臣春永。足利義照。奴、傳藏。奴、權平。與五郎妹、小藤。渡し守、與次兵衛。武智十次郎光義。山口玄蕃。三好左京之進數馬。森蘭丸。中尾彌太郎俊國。長口牛藏昌近。犬山軍六。萩原兵内。横曾根鄕助。稻葉彌五次。洲の股蓮八。金毘羅參りの眼八。與五郎一子。友市。茶道、金才。同、頓才。與五郎女房、關の戸。

四建目口上觸れ濟むと、てんつゝ、時の鐘。向うより百姓二人、鋤鍬を擔ぎ、出て來る。後より小藤、田舎拵女の拵らへ、袋入りの三味線を脊負ひ、杖を突き、出て來り

小藤　モシ〳〵、旦那さま方、山崎の渡し場は、爰でござりますか。
百一　オイ、渡し場は、この道筋を眞直ぐに行き、右へ曲れば直ぢや。

百二　見たところが、イヤ、ハテ、綺麗な娘。瞽女になるとは、惜しいものだなア。さうして、どつちの方へ行くつもりぢや。

小藤　この頃、内丹波の在を稼ぎましたが、思ふやうでもござりませぬゆゑ、ちと京の方へ出て見ようと思ひまして。

百一　そりや何といつても、また都だ。渡しを渡ると直に稼げる。

百二　成る程、見れば見るほど美しい。おれは瞽女でも、肝腎の物さへあれば、なんと嚊の相談は

ト抱きつくを振りきり

小藤　何をマア、じやら〳〵と。

百二　じやら〳〵ぢやない。大眞實ぢや。

小藤　イエ、私しは、ちつと詮議せねば。

百一　ナニ詮議とは。

小藤　イエ、サア、京都に尋ぬる知らべもござりますれば、お先へ參ります。

百二　ハテ、惜しいものだな。

百一　それ、その道を眞直ぐに。

小藤　ハイ、有り難うござります。

ト始終、右の鳴り物にて、舞臺先を通り、幕の内へ入る。

百二　ハテ、物は自由にならないもの。あのマア眉目形、瞽女とは惜しいものだ。

百一　あんまり惜しさに、わしは氣抜けしたやうになりました。

百二　それは腹の加減であらう。今打つたは晝中。サア〳〵、日影にありつきませう。ござれ〳〵。

ト二人は下座へ入る。

本舞臺、三間の間、正面小高く、堤。よき所に葭簀張りの出茶屋。上の蘆影に苫船一艘、つないであり、脇に山崎渡し場と記したる牓示杙。うしろ淺黄幕。その床几に傳藏、股引、尻からげ、大小、旅の侍ひ。權平、同じく旅侍ひの拵へ、腰を掛けて居る。茶屋男、茶を運び、小藤、これに立ちかゝり、無性に三味線を彈いて居る。時の鐘、波の音、瞽女唄にて幕明く。

茶亭　ハイ、お一つ上がりませ。

傳藏　ヤレ〳〵、惡い時に降り出しまして、ぐつすりと濡れました。

權平　併し、一樹の陰の雨宿り。よい所で御意得ました。

傳藏　左様でござります。

ト小藤、矢張り褂はず三味線を彈いて居る。

傳藏　これはどうだ〳〵。瞽女めが無性に彈いて居るので、話しも何も聞えぬわえ。

小藤　ハイ、一錢おやりなされませ。

傳藏　どこへ一錢。聞きたくもない。どう盲目め、いゝ加減に止めぬか。

ト小藤、三味線を彈き止む。

權平　イヤ〳〵、見たところが、田舍に似合はぬ、どこもかも云ひ分のない田舍瞽女。四文か八文はづんで、面白い國節でも、承はらうではござらぬか。

傳藏　イヤサ、それでは刀の一儀が遲なはりますワ。

小藤　旦那様方は、お侍ひ様でござりますな。

傳藏　なんであらうと、ちと密々の話しが聞えぬ。歸れ〳〵。

ト小藤、始終聞き耳して

小藤　ハテ、まだ日は長うござります。在所と違うて、都方の旦那様、面白い田舍節、何なりとお好みなされませ。

權平　それ〳〵、暫時の休息に、瞽女節も一興。身共はそれに又

　　　ト小刺を拔いて小藤にやる。

小藤　ハイ〳〵、たんと彈きます。

　　　トいろ〳〵唄ふ。

傳藏　これはまた情ない。身共は三味線は、きつい嫌ひでござる。

權平　それは氣の毒。マア〳〵、止めろ〳〵。

　　　ト彈きやむ。

小藤　ハテ、不粹なお客樣。そんなら、ちよつと休んで參りませう。

　　　ト探り寄つて床几へ腰をかける。

傳藏　こりや、ひつこいどう盲目め。爰に置く事ならぬ。コリヤ、亭主、此方、密々の話しがある。其方も共に、瞽女めを引立て、遠慮しておくりやれ。早く〳〵。

茶亭　ハイ〳〵、畏まりました。サア、姐えや、爰には置かれぬ。どつちへなりと、行つた〳〵。

小藤　ハイ、直に參ります。どうぞ、ちつとの間、置かしやつて下さりませ。

傳藏　エヽ、手ぬるい。早く賴む〳〵。

茶亭　サア、休息するなら、あの堤の影へ行くがよい。爰にはならぬ。

小藤　サア、そこをどうぞ

茶亭　エヽ、ならぬと云ふに。

ト浪の音、禪のツトメ。小藤を引連れ、下座へ入る。

傳藏　先づ邪魔は拂ひましたれば、遠慮はござらぬ。して、主人の在所、お尋ねの筋は。

權平　外でもござらぬ。拙者は越後長尾の家臣、甘粕一角が家來。先達て其許の御主人、名劍をお拂ひなされたきよし、仰せ越されしにつき、早速太守へ言上のところ、委細つぶさに承り參れとの仰せを受け、御主人御在所、この丹波路とござるゆゑ、尋ね上る途中にて、斯く其許にお目にかかる上は、劍の傳來、少しも包まず、お話しなされい。イヤモ、盜み物でも構はぬは、戰國の一德でござるてな。

傳藏　イヤモウ、御主人同士は御懇ろの上、今又改めてのお尋ねなれば、何を包み申しませう。拙者主人は、岡島丹平と申す、中國郡の家臣。同家中勝鹿與五郎と傾城の買ひ論。戀の意趣ある與五郎が、預かりのコレ郡の重寶、日本丸の一腰を奪ひ取り、彼奴は首尾よく科に落せしが、主人も今は浪人して、平岡鄉左衛門と改名なし、右の名劍を賣り代なさんと思へども、郡家より詮議嚴し

く、その上、名だたる名劍ゆゑ、禁廷より差上げよとの上意。元より紛失いたした稀代の名劍、郡音成、差上げぬ科によつて、禁廷より仰せ下つて、小田家の臣木下と合戰最中。それ程の品ゆゑ、近國にて賣り代なす事叶はず、程遠き北國の長尾家へ、差上げんとの主人の心底。即ち拙者持參いたすところ。よろしきやうに賴み存ずる。

トこの以前より小藤、後に出て、右の樣子を聞いてゐる。

權平　イカサマ、聞き及ぶ寶劍、承知いたした。然らば同道なされぬか。

傳藏　成る程、左樣いたしたいが、小田の家臣、山口玄蕃どの、この劍の事を聞かれ、春永公へ取持ちせんとあつて、仰せ越されしゆゑ、斯くの通り

ト一腰差したる油紙の包みの一腰を出し、黄色の袱紗より少し拔き見せる。

書狀を添へ、一應お目にかけた上、直さま持參いたすでござらう。

ト此うち權平、刀の拵らへを見て

權平　見事な拵らへ、割り笄は茶種に蝶の高彫り。

傳藏　後藤が細工でござるて。

ト小藤、さてはト思ひ入れ。

權平　しか〴〵と、詳しく相傳へ申さう。

傳藏　相違はござらぬ。お急ぎなされ。

ト禪のツトメになり、權平、向うへ入る。此うち傳藏、一腰を袋へ納め、紙包みを持ち立ち上がる。小藤、窺ひ寄つて一腰へ手をかける。傳藏、恟りして

ヤア、最前のどう盲目め、慮外いたすと免さぬぞ。

ト云ひながら、振りきると、この時、小藤、兩眼を明き、又かゝる。兩人、立廻り。小藤、傳藏をキツと見て思ひ入れ。

ヤヽ、女めは似せ盲目だな。

小藤　云ふにや及ぶ。その一腰の紛失ゆゑ、兄與五郎が越度。小田との確執は、主君お家の大事ゆゑ、卑しい瞽女と成り下がり、詮議なす甲斐あつて、後で樣子聞けば聞く程、岡島丹平が惡事の段々、天の加護にて日本丸の在所知れたれば、奪ひ返して小田家と和睦、郡の泰平、兄の汚名を雪がにやならぬ。斯く云ふは郡の家臣、勝鹿與五郎が妹小藤。一腰渡して、尋常に繩にかゝれ。

傳藏　ほざいたり腹の皮、女の際に一腰を、奪ひ返さうとは小ざかしい。心の太身、拔きはなし、惡く腕だてひろぐが最期、だんびら新身の刃の嵐に、小柄みぢんと吹き飛ばすが、陣刀にそこ通すま

いか。

小藤　イヽヤ、すがれの細身にも、蠟色と苦勞を鮫鞘に、緣頭の動くうちは、滅多に刃ばきは飛ばされぬ。イザ鍔際の柄糸が、二言と云はずに、早う渡して。

傳藏　そこ退け。

兩人　どつこい。

ト立廻つて見得。これより誂らへの鳴り物。小藤、三味線袋の脇差を拔き、切りつけ、花やかなるタテ一腰を奪ひ合ふはずみに、刀は舟の中へなげこむ。内より與次兵衛、右の短刀を取つて手早く竿を取り、舟を押して下座へ入る。兩人、見得。時の鐘、浪の音。

小藤　ヤヽ、日本丸は、あの舟へ。

傳藏　殊に添へたる手紙まで

トこの時傳藏、小藤に切りかける。小藤、傳藏に切りつけしが、自分で深手にがつくりとなる。この見得にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、うしろ淺黄幕、眞中に誂らへの傘の亭、軒に蓬、菖蒲を葺き、五月の亭といふ

額をかけ、下に藪疊。よき所に風呂鑵子を懸け、茶の湯の飾りつけ、茶道の金才、頓才、茶器を直して居る。ノット、國固めの神樂にて道具納まる。

金才　なんと頓才、あの神の諫めは、今日の鷹狩に、上下和合の叡山の祈念。さて〳〵近く聞えるではないか。

頓才　それ〳〵、この頃噂を聞けば、義照公と我が君春永公と、仲惡しく、都の内にエイヤツトウでもあらうかと

金才　大きに案じられる事でござる。

ト三味線入りの合ひ方になり、向うより十次郎、若衆、振り袖、長上下、大小、白木の臺に粽を戴せ持つて出る。

頓才　イヤモウ、さうなる時には、外の合戰と違ひ、大方君の御出陣。もしさうなれば、是非我れ〳〵どもも御供。誠に氣を痛めてゐたが

金才　思ひの外、光秀さまの執成しで、御仲直りの爲、この志賀郡の鷹野。さうして見れば、新將軍でも、おいらが旦那には敵はぬか。

頓才　イヤ、さうは云はれぬ。義照公はお主筋、いろ〳〵饗應する所を見ては

兩人　どつちが强からうなう。

トこの以前、十次郎、花道よき所にて、この樣子を聞いて居て

十次　コリヤノ\、茶道方、何事を申さるゝ。下として、お上の噂。嗜なみ召され。

金才　ヤア、武智十次郎光義さま、いつの間に

十次　先づ以て今日は、我が君春永公、新將軍義照公、安土へ招請の上、この地の鷹狩り、父光秀が居城、東坂木城續きなれば、饗應使を仰せ付られ、家の面目、有り難く、當所のお小休みより、膳所の御假家へ入らせらるゝ。萬端路次も非常の見廻り、手人を退け、其方達を用ゆるは、重んずる大切な御客ゆゑ。念を入れて隨分越度なきやう、賴み存ずる。

兩人　畏まつてござりまする。

十次　して、お茶の御用意は。

頓才　萬事よろしうござります。檢分を下さりませう。

トこれにて十次郎、舞臺へ來て茶飾りつけを檢分する。

十次　天晴れの手際。猶また念を入れ召されい。

兩人　ハツ。

トこの時揚げ幕の内にて、「エイ〳〵」の聲、勢子の音する。

十次　最早この所へお入りの樣子。

兩人　十次郎さま、お出迎ひ。

ト十次郎、思ひ入れ。右の臺を後へ置き、出迎ひの見得、茶道二人、後へ下がり、つくばひ居る。此うち時の太鼓、大小、三味線入りの合ひ方、向うより義照、狩衣、刺貫、附け太刀、金の風折にて、中啓を持ち、蘭丸、かちんの素袍、高股立ち、大小にて、日傘をさしかけ出る。春永、狩の形、附け太刀、騎者笠、鐵扇を持ち出る。後より左京之進、玄蕃、俊國、股引、絆纒。次に景近、軍六、兵内鄉助、彌源次、運八、いづれも股立ち、絆纒、大小にて、後より、軍兵四人、青竹へ鴫鷺を數多附け、かつぎ出て、皆々花道にとまり

義照　春永が招きによつて、今日鷹狩の催ふしに、興を覺えしこの義照。

春永　四海一順に民を撫で、武威を示すその間に、鬱氣を拂ふ春永が誠心の饗應。

蘭丸　殊に端午は武を飾り、勇を惠むの式にして、威風を示すの御催ふし。

左京　强將の下に弱卒なき、お家に臣の働らきは、士卒の掛引、かゝる猛將補佐あらば、義照公の御代萬萬歲。

俊國　當時天下に鬼神と呼ばれし、四方の諸侯も怖ぢ恐るゝ、當家の威勢、生溫い青侍ひとは違ひ申す。
玄蕃　武長者文に隱る。往古の京家は格別、今日の世は武威一遍。
景近　それとても武骨の我れ〳〵。
軍六　追ひ鳥掛け鷹は手の内のもの。
兵内　山々峰々狩り立つて、八足の猪、七股の鹿。
鄕助　手柄次第に突きとめ射とめ
彌源　武勇を磨く君の催ふし。
十次　ハツ、只今打ちしは正午の滿刻。膳所の御假屋へは二丁餘り、森のこなた。先づ〳〵これへ入らせられ、御休息、然るべう存じ奉ります。
春永　ナニサマ、愚臣光秀へ申しつけし、設けの亭にて、麁茶一服。
義照　然らば貴慮に任せん。イザ、方々。
皆々　ハア。

ト辭儀する。下がり葉の鳴り物にて、この人數、本舞臺へ來て、敷皮の上に、義照、次に春永、蘭丸俊國、玄蕃、左京之進、景近、十次郎、あとは後へ並ぶ。

十次　先づ以て今日の御催ふし。天氣快晴。逸物の鷹に獲物も多く、御機嫌の程、愚臣も大慶。
義照　出家佛事に引替へて、興を盡せし鷹狩のもてなし。義照、殆んど滿足いたす。
春永　こは忝なき御挨拶。何は差措き、ソレ、光義。
十次　ハッ。

ト此うち茶道二人、茶を立て、十次郎受取り、紫の袱紗に載せ、謹しんで義照へ差出す。又同じく春永へ差出す。又その跡へ十次郎、蒔繪の三方へ菓子を載せ、義照の前へ置き、あと一同銘々へ茶を出す。

義照　これは服加減でござる。
春永　如何ござるやら。
皆々　御相伴、有り難う存じまする。

ト此うち義照、茶を呑みしまひ

義照　某、茶道を好むにより、心を籠めし今日の饗應。とてもの事に今一つ。
春永　御意に叶ひ、春永が大慶。ソレ、用意の茶器にて。
十次　ハッ。

ト此うち茶道兩人、誂らへの茶碗にて立て、十次郎受取り、以前の如く義照へ差出す。

義照　服加減と申し、殊に茶器まで念の入つたる。

ト義照、茶碗をよく〳〵見て、見惚れる事。

春永　それこそ元、郡家の重寶、細石と名付けし茶碗。仔細あつて、我が手に入る。流石好ませらるゝ道とて、御目にとまりて、亭主が滿悅。

義照　その名は聞けど未だ見ざる珍器。何よりの馳走ぢや。

ト十次郎、以前の粽の臺を持ち出て

十次　何は差措き、珍らしからねど、二把の粽を獻上。

春永　流石は光秀、愛い奴〳〵。

義照　内府の下知の嚴かなる、軒の菖蒲にちなめる粽、諸士へ與へて興を盡さん。

春永　君臣和順の今日なれば、好む輩は遠慮に及ばぬ。

左京　實に有り難き春永公の仁慮。この程より新將軍と小田家、何か確執にてもあるやうに、世上の取沙汰。斯く睦まじく御參會の上は、萬民の安堵、我が君にもさぞお喜び。

十次　左京之進どのゝ仰せの通り、父光秀にも、風說の程歎かはしく、君へ再三申し上げしところ、御

遊の饗應に父が本懷。

春永　して、今日は武を興すの吉日なれば、山陰道出陣の手配り、軍慮の工風、怠りなきや。

十次　折惡しく病ひに付き、恐れながら

春永　名代か。

十次　ハツ。

玄蕃　成る程、治にゐて亂を忘るゝ金言、斯くも的中なすものか。さしもに威を振ひし松永が逆亂も、蟲の子一疋殺しもせず、我が君春永公の武威を以て、何の苦もなく平定なせば、相應に口のきゝ手も出るものか、病氣の披露、片腹痛い。

蘭丸　武に勇み、義にはやる小田の家風。荒れたる室町の御所に新殿を築き、御連枝たる義照公を、新將軍と仰がん我が君の結構。

景近　猶も足利の御代靜謐ならしめんと、日本丸を禁廷へ差上げぬ、郡音成、眞柴久吉と合戰最中。

俊國　山陰道へは武智光秀に御下知あつて、近々出陣。

運八　眞柴の勝利大軍にて、九州二島も討ち平らげ

彌源　北國には、お家の強將柴田どの。

郷助　その外瀧川佐々なんど、近國を切り從へ
兵内　關東筋は皆幕下、奥羽の果てまで手を延ばす勢ひ
軍六　一統なすは瞬くうち。
玄蕃　ナニサマ、各々方の申さるゝ通り、小田家の軍配によつて、亡び失せたる賊軍に、四海も平定。
左京　松永と同じ系圖の流れを汲むとも、數馬は忠臣無二の家筋、如何ぞ疋夫賊敵に組せんや。君に仕へて二心なき某。今日の御會は國家の大事、何事もお心置なう。
義照　大國は中庸によると、不肖なる義照を、代にあらせん内府の心遣ひ、某忘れはおかじ。さりながら、柔弱にして技倆もなき某、四海の政事は思ひもよらず。先達て千種の道方公、勅使の砌り、再應の辭退もお許しなく、下し給はる將軍の官符、連環の印、これへ持參なしたるも、春永この品を預かり、我れに代りて天下を治め給はれかし。この儀ひたすら頼み存ずる。
春永　こは思ひもよらざる御諚。仰せの如き心底ござらば、斯くまで肺肝の碎くべきや。御遠慮も時による。當時春永、二位内大臣に登り、槍先の領國十五ヶ國、皆疑ひより事起る。君の御心決しなば、我れは元の上總之助、一國を拜受なし、御供先を仕る。この儀に相違はござりませぬ。
十次　お聞きの如き、春永公の誠心、それに引かへ、腑甲斐なき君の御所存。宣下御承引なき時は、禁廷

へ不忠、御先祖へ不孝、連綿たる足利將軍の血脈は、此まゝ絶え果つると御心付かざるや。

義照　いやとよ、盛者必らず衰ふるの理り。義照、慶覺の發心より、慈悲忍辱に心を向くれば、所詮宣下は思ひもよらず。應仁以來の塗炭を救ふは、武德の小田家に比すべきなし。我れは一寺に血脈弔はん。これ私しの事ならず。幾重にも頼み存ずる。

ト十次郎、少し下がりて

十次　こは口惜しき御仰せ、恐れながら父光秀儀、今日のお成り願はしく、流石に東山殿の御末とて、茶道を好ませらるゝにつき、諸所の假家、風雅ある中に、當所は別して心を用ひ、盛事をうつす傘の亭。

春永　骨にたとへし六十六國、掌に握るといふ、光秀が計らひか。

十次　御諚の通り。この下舍の天が下に、しろしめす新將軍、皐月の銘によせ、萬民武威を稱せし誠心。

玄蕃　扣へ召され十次郎、身命を顧みず、戰ひなすも、子孫の榮えを思ふゆゑ。將軍たつて辭退あらば、君御賢慮もあるべき事。

蘭丸　一ヶ城より一國を計るは、誰れ〳〵も望むところなれど、義に果つるも勇者の習ひ。

俊國　强きを拉ぎ、弱きを助ける御氣質、我れ〳〵如きが批判は恐れ。

景近　イヤ、天の與ふるを取らざれば

軍六　反つてその禍ひを受くる。

兵内　湯のしきは水になると

郷助　金のしきは砂になると

彌源　將軍のしきは家來となる。

運八　馬のしきは鹿となる。

春永　ヤア、かしましき、何を奴輩。帝都に旗を揚げ、天下を掌握なすは、武門の望むところといへど春永さる心を起さんや。御疑ひを解き、誠を現はす折に臨み、口出しひろぐ尾籠な奴。さりながら、愚昧の某、幾千枚の起證を以て、申し開くといふとも、威勢によつて御疑念解けまじ。所詮は暴將と云ひ觸らさせ、無益の寺院を燒き拂ひ、兎角に怨敵の色を現はさば、自然と三衣を甲冑に替へ、當家を亡ぼす御氣量出でんと、心を碎く今日只今。斯く對面の上は、御疑ひを晴らさせ、足利十四代の武將と勅答あらば、春永が大慶。この上にも御疑念あらば、室町の御所へ推參なし、腹かッさばいて義心を盡さん。偏へに御賢察の上、仰ぎ願ひ奉る。

トいろ〳〵こなしあつて云ふ。

義照　ホウ、その一言こそ正に金鐵。かゝる名君の內府、世の雜說に惑はされ、疑ひ過せしは義照が誤まり。何事も宥免あつて、異心なく補佐助力の儀を。

春永　すりや、御疑ひを晴らさせ、春永が誠心を御賢察とな。エヽ、忝なし、有り難し、これ偏へに武將の正流、小田家の幸ひ。日頃の本懷達するも、弓矢神の應護、仰いでも猶あまりあり。天の冥利に叶ひしや、喜こばしや。

左京　ハア、恐れ入つたる忠烈。まつた春永公粗忽の段、幾重にも御赦免の上、我が君にも

義照　この上辭退は忠節を越えしむるに似たり。さりながら、我が誤まりも正し、內府の義心も立つべき、委細は後刻。

十次　兩君、御和順の上からは、幾千代かけし御治世、臣等が恐悅、賀し奉るのあまり、この傘の下舍りに、君を祝せし父が一句、御心に叶ひなば光秀が大悅。

ト白木の臺へ載せし短冊を謹しんで出す。春永、取つて

春永　心ありげな光秀が短冊。

ト春永讀んで

時は今天が下知る皐月かな。

ト讀み終りて思ひ入れ。

十次　時候に寄せ、趣きを盡すこの賀頌。すりや、予が胸中を推察して

天が下しろしめす、義照公を祝せし腰折れ。

春永　すりや、この一句も

ト腹立つこなし。

左京　新將軍を祝して稱美の光秀。

義照　予も滿足。

ト これにて春永、氣を變へ

春永　思はず御物語りに時刻移れば、義照公には、イザ、膳所の假屋へ。

義照　兎も角も、貴命に從ひ申さん。

春永　某は暫時御後より。

十次　恐れながら、イザ、御案内。

ト立ちかゝるを。

春永　イヤ、光義扣へい。思ふ仔細あれば、玄蕃代つて御饗應仕れ。

玄蕃　ナニ、饗應使を拙者めに。
春永　大切な客人、念入れて
玄蕃　ハツ、畏まり奉ります。
十次　玄蕃どの、暫らく。主君の御意ではござれども、折角用意仕るを
玄蕃　俄の御下知は時の面目。蟄しておゐやれ。
十次　でも、此まゝにては家の瑕瑾。何卒我が君
春永　予が詞を用ひぬか。
　　ト　きつと云ふ。十次郎、思ひ入れ。
玄蕃　イザ、恐れながらお先へ立たん。
義照　然らば內府。
玄蕃　お先へ警衛。
春永　只今拜謁。
皆々　先づ、入らせれませう。
　ト　下がり葉の合ひ方。玄蕃先へ立ち、義照に皆々付添ひ、下座へ入る。春永、急いたるこなしにて

春永　十次郎、それへ出い。

十次　ハツ。

ト　にじり出て平伏する。

春永　おのれ、憎くい奴の。

十次　恐れながら我が君様、御意は無くとも、越度なきやうに念を入れ、相勤めまする役儀、俄に御氣色變り、玄番へ仰せつけられしは、父が誤り、私しめが不調法にや。

蘭丸　ヤア、臣として君の御氣色を蒙むり、その趣意を糺さんとは無禮の段。

俊國　我れ善しと思ふは人情の常。後日にお詫びを願ふが第一。

六人　抑へさつしやい。

十次　父います時は格別、名代の儀でござれば。

春永　ヤア、まだ申すか。越度は光秀、覺えあらん。

十次　子として父の心、計り難うはござれども

春永　ヤア、奇怪なる子悴め。さほど潔白なる光秀、なぜ予に恥辱を與へた。

十次　ナニ、君の御恥辱とは。

春永　臣たる道の覺悟ないか。おのれも饗應使でありながら、傘の亭より皐月の一句、我れを差措き、義照どのを祝せしは、予をば蔑になせし光秀が胸中、主を恥しむる曲者め。
十次　アイヤ、御意を返すは恐れながら、君臣和順の對顔に、招待の御方、祝し奉るは、恐悦極まりなき父が存心。
春永　云ひ譯聞かぬ。光秀は予が臣下にてはもどかしく、將軍家へ取入り、立身なさん下心よな。
十次　エヽ、口惜しき御諚。二心を致す光秀ならず。君深き御心ましまさば
　ト云ふを
春永　默れ童め、小兒が何を存じて。察するところ、斯くあらば答へを仕れと、父光秀が敎へよな。
十次　イヤ、全く以て。
春永　若年に免ずれば、詞を返す慮外、綏怠。光秀に異ならず。蘭丸、彼奴が面を打て。
蘭丸　ナニ、拙者めに光義を
春永　見るも中々いまはしい。彼奴が生面、遠慮いたすな。
蘭丸　ハツ。
　ト立ちかれて思ひ入れ。俊國、引取つて

俊國　恐れながら暫らく。御氣色に逆らふ父子、重々の不調法、御免を願ふそれまでも、寛仁の御沙汰の儀を

春永　ヤア、いらざる執成し。容赦いたさば同罪ぢやぞ。

俊國　ハツ。

春永　蘭丸、予が鐵扇にて、打て。打つて〳〵打ち据ゑい。

ト持つたる鐵扇を投げやる。

蘭丸　ハツ〳〵。

春永　エヽ、早く打て〳〵〳〵。

ト右の鐵扇を蘭丸持ち、十次郎の側へ行き

蘭丸　いかに十次郎、お怒りの命により、罪を數へて今打つも、蘭丸ならぬ、主君の打擲。

トよろしく十次郎を引付け

御意ぢや〳〵〳〵。

ト鐵扇にて十次郎を叩く。春永、煙草のみながら見て居る。

春永　もつと打て〳〵。

蘭丸　御意ぢや〳〵。

ト　さん〴〵に打つ。十次郎の額より血出る。

春永　なんと骨身にこたへたか。

ト十次郎、額の痛む思ひ入れ、探り見て、ヂツとこなし、春永、この體を見て

ハヽヽ。その身の罪、その身を責むる。不忠の臣へ以後の見せしめ。ハテ、よい態なア。

ト思ひ入れ。揚げ幕の内より

呼び　院使の御入り。

皆々　ナニ、院使の御入りとや。

春永　蘭丸、扣へい。

蘭丸　ハツ。

春永　鷹野先といひ、心得ぬ院使の入來。何は兎もあれ、見苦しい。十次郎を引立てい。

皆々　ハツ。十次郎、立ちませい。

ト十次郎、扣へて居る。

春永　目障りぢや。キリ〳〵立たぬかえ。

ト十次郎、思ひ入れあつて、頭を少しあげる。

十次　此まゝ命を召さるゝとも、何卒御氣色直されて。

春永　中尾彌太郎、彼奴めを引立て、この旨きつと申し渡せ。

俊國　ハツ。……卽座のお詫びは君臣の禮にあらず。長居は恐れ、立ち召されい。

十次　ハツ。

ト立ちかねるこなし。

春永　キリ〳〵引立てぬか。

俊國　ハツ。立ちませい。

トきつと云ふ。十次郎、しを〳〵と立ち、俊國附いて東の花道へ入る。皆々見送ると、又、院使の御入りと呼ぶ。直ぐに三味線入り好みの鳴り物になり。向うより侍ひ二人、麻上下にて先へ立ち、後より結構なる女乘り物。陸尺、對の看板、四人にて擔ぎ、友市、女童の形、定家文庫を持ち、眼八、麻上下の侍ひにて付添ひ出る。後より仕丁四人、袋入りの傘、白木の箱を持ち出る。春永はじめ皆々、出迎ひ、眼八、この體を見て、指圖して、舞臺へ來て

眼八　御乘り物、立てませい。

皆々　ハア。

ト乘り物立てる。眼八、乘り物の側へ來て、腰を屈めて

眼八　內府春永公、これに、御出迎ひの樣子、急ぎ御下乘あつて然るべう存じ奉ります。

ト駕籠の內にて

鬬の　春永公のおいでとな。それへ參つて對顏いたさん。

ト合ひ方。眼八、駕籠の戶を明ける。內より鬬の戶、女官の捺らへにて、檜扇を持ち出る。春永、思ひ入れあつて

春永　思ひがけなき院使とござつて、鷹野先まで女官の御出で、御苦勞千萬。

皆々　家臣の面々、御迎ひに參上のところ。

景近　義照公招請によつて

兵內　田獵の今日

鄕助　遠卷きの勢子ども

彌源　見過しの誤まり。

運八　寬宥の御沙汰を以て

軍六　無禮の段、御免下さりませう。

眼八　これは御挨拶。拙者は即ち北面の武士、鳴瀧但馬と申す者。過急の院使、安土へ發向のところ、鷹狩につき、當所にと承り、春永公御座とも存せず、乘打ちの失禮。この儀よろしく御執成しを。

春永　何はしかれ、野遊の今日、設けの席とてもなきは宥免あつて、先づ〱これへ。

闌の　役目の上座、お許しあれ。

ト上の方へ通り、よき所に住ふ。

春永　先づ以て過急の院使、心許なし。仰せの趣き一通り、仰せ聞けられ下さりませう。

闌の　さのみ恐怖なし給ひそ。院使の趣き、餘の儀にあらず。さいつ頃、院中にも茶道を好ませらるゝにつき、近々晴れの御催ふしあらんとて、あらゆる名器を選み給ふ。然るに春永、この程名に高き、重器を得られし由、上聞に達し、頻りに御心惱まし給ふ。何卒所望なし、受取り歸れと、その使ひを承まはりし自らは、阿波の局と申すもの。尤もその品、差上ぐるに於ては、過分なりとの御沙汰。速かに御請け致されよ。

春永　こは勿體なき院使の趣き。委細畏まり奉る。某とても軍事の間には、風流の道に執心深く、遍く

天下を探し、計らず手に入りし、細石と名付けし茶碗。誠に幸ひなるは、義照公を饗應の爲、これへ持參仕る。蘭丸、これへ。

蘭丸　ハッ。

ト誂らへの箱入りの茶碗を持ち出る。春永、受取り

春永　御懇命は家の規模、何しに惜み參らせん。イザ、

ト差出す。關の戸、受取り、開き見て

關の　すりや、この茶碗が、聞き及ぶ細石よな。

春永　よろしう奏聞。願ひ奉る。

ト關の戸、につこりと思ひ入れ。

關の　仰せに應ずる忠節、御心もさぞと、局が喜び。

ト元のやうに箱へ入れる。此うち下座より玄蕃、出かけ、この時、よき所へ出て

玄蕃　ハッ、申し上げまする。先刻より義照公、御假家にて殊なうお待ちかね。迎ひ奉れとの儀でござります。

春永　予もさこそと存ずれども、冥加なき細石の茶碗、御懇望の院使、御入りによつて。

玄蕃　ナニ、院使とや。ハヽハッ。

　　ト思ひ入れ。

關の事なうその品受取る上は、長居いたさば鷹野の妨げ。最早此まゝ。

春永　アイヤ、何は兎もあれ御苦勞休め、せめて假屋で麁酒一獻。

友市　ヤレ、お局樣、御用も濟めば、早うお戻りなされませ。

眼八　いかにも左樣。御請け上首尾の上は、我れ／＼までも安堵いたした。少しも早う、お戻りなされませい。

春永　ナニサマ、女官は格別、少女の慰め、菓子を取らせい。

玄蕃　ハッ、幸ひなる粽のお殘り。

　　ト以前の臺を友市が前へ持ちゆき

君の賜物、頂戴召されい。

　　ト友市、見馴れざる品ゆゑ、モヂ／＼して居る。眼八、見て

眼八　折角の御懇の賜物。拜味召され。

　　ト友市これにて粽を取り、葉ごと食ふを、皆々見て

皆々　ヤ、少女が粽を包みごと。

友市　ほんに、こりや皮ぢや。

　ト臺に置くを、眼八、手早く取つて

眼八　ハテ、家土産に頂戴がよからう。

　ト玄蕃、友市に目を付け

玄蕃　仰ひで上なき宮仕へに引かへて、田舍に劣る少女が振舞ひ。

　ト關の戸、思ひ入れあつて

關の　イヤ、粽は元やごとなき君、五月五日に軍勢を從へ、異國を討ちし兵粮の餘風、勝ち軍のめでたきためし、武家にあつて禁中に用ひぬ一首、家領の歌書に見えたれば、さのみ咎めそ。イザ、お別れ申さん。

春永　流石はお局、萬事よろしう。

關の　奏聞いたさん。

　ト下手へ來る。春永こなし。

春永　これにて御免。

關の　又の拜謁。

ト乘り物へ乘る。眼八、戸をしめる。

眼八　院使のお立ち。

皆々　ハア。

ト辭儀する。太鼓入りの鳴り物にて、向うへ入る。

春永　計らざる院使の入來に、君の御氣欝。

蘭丸　右につき伺ひまするは、御懇命なればとて、名器をお渡し遊ばすは、如何と存じ奉ります。

春永　その尋ね、尤も〳〵。予にも祕藏の名器、何條人手へ渡さんや。かゝる事もあらんと、かねて形代を拵らへ置く。今渡したるは細石の似せ物。誠の茶碗はコレ爰に。

ト懐中より出す。

蘭丸　天晴れ御賢慮。

玄蕃　また會得仕らぬは今の院使。もしや似せ者。

春永　なんと。

玄蕃　見どころは少女が振舞ひ。慥かに男の子。

蘭丸　さうお云やれば供廻り、官人に似ぬ卑賤の人柄。
皆々　我れ〳〵も合點が參らぬ。
春永　渡しやつたは似せ物なれど、計られては弓矢の瑕瑾。者ども、追ひかけ、引き來れ。
皆々　ハッ。
玄蕃　眞僞を糺すは御前に於て。
皆々　手柄はし勝ち。
春永　早行け、
ト皆々、向うへ入る。跡に下座より義照先に、軍兵付添ひ出て來る。
義照　內府は未だこれに。終日のもてなし、興を盡せば、最早歸館いたさん。
春永　こは恐れ入つたる御諚。先刻よりお供の上、餘興を添へんと存ぜしところ
玄蕃　院使の御入りお聞きに達し、主君にも別してのお心遣ひ。
義照　それにつき、先刻申し出せし將軍の官符、義照、思ふ所存あれば。
ト懷中より袋入りの官符を出す。
春永　その儀は幾度仰せあつても

義照　いやとよ、内府、近々吉日を選み、義照參內なすそれまでは、春永の守護あらば、この旨直さま關白まで屆け

玄蕃　御同道にて參內あり、その時內府の意にお任せあらば、君の誠心、春永公の忠義も立つ。

義照　また連環の印も、預けたくは思へども、禁中の御沙汰あるまで。

蘭丸　御心解けたる、義照公の御計らひ。

春永　すりや、某が忠節を憐れみ、實心お認めあらんとな。

義照　水魚の交はり。これぞ證跡。

ト官府を差出す。春永、塵手水にて頂戴し

春永　慥かに預かり奉る。この上は參內の式、勝政に談じ、直さま出仕つかまつらん。イヤナニ蘭丸、遠卷きの勢子ども、先驅けになし、室町の新殿まで御見送り奉れ。

蘭丸　畏まつてござりまする。

玄蕃　拙者めはお後より。

春永　某も休息の上、勝政と申し合せ

義照　然らば內府。

春永　義照公

義照　終日、大儀。

春永　委細後刻。

玄蕃　君の御立ち。

皆々　ハア、。

玄蕃　主君の御立ち。

春永　玄蕃、計らへ。

ト唄になり、下がり葉の鳴り物。義照、蘭丸、軍兵付添ひ向うへ入る。春永、こなしあつて下手へ入る。左京之進、玄蕃殘りて

左京　エヽ、有り難や、忝なや。神佛の感應あつて、兩君の和順とゝのひしも、各々方のお計らひ。玄蕃どのには、分けて今日は御心配。

玄蕃　イヤモウ、斯く御和順の調ふ上は、足利の天下に、お氣遣ひはござらぬ。右につき、愚案を申すが、貴殿守護の連環の印、殘されては、まだ物のあるやうで……こりや、なんと我が君へ、預けられてはどうでござらう。

左京　その僕は君さへ仰せあらば、春永公へお預け申せど、兎にも角にも、義照公の思し召しもござれば、某キッと守護仕る。

玄蕃　そこを貴殿のお取計らひを以て、お預けあるが、義照公のお爲でござれば、

左京　イヤモウ、禁中後日の批判もござれば。

玄蕃　アヽ成る程。然らば玄蕃め、折入つての所望でござる。その連環の印、ちよつと拜見いたしたい。

左京　珍重の品。尤もの望みなれど、私しならぬ上なき御寶。

玄蕃　成りませぬか。

左京　何か隙どり、内府のお待ちかね。某は御假屋へ。

ト行く跡より、玄蕃「ムウ」と抜き、切りかける。左京之進、とめて

左京　こりや何と召さる。

玄蕃　勇士たる者、望み叶はぬ時は、討ち果すが小田の家風。

左京　こりや、主從喋し合せて何もかも。

玄蕃　默つてくたばれ。

ト切りかける、これより兩人立廻りよろしく、鳴り物入り。よき止りへ煙硝火、パッと立ち、左京之

進を撃ちぬく。これにて、連環の印を取り、玄蕃、思ひ入れ。時の鐘、三味線入り、びんざゝらのような鳴り物。後の藪疊より春永、以前の形に、鐵砲を持ち出る。

玄蕃　我が君様、まんまと首尾よく。

春永　似非道心に膝を屈するも、彼れは數代殿上の交はり篤く、押倒しては春永が、將軍宣下叶はずと將軍辭退を義照公に屆けさせん爲、今日の出會に心許させしも、我が計略に落入つて、官符と金印手に入れば、最早用なき青坊主。

玄蕃　すりや、近々に押寄せて、義照めを只一戰に。

春永　コリヤ。

ト押へる思ひ入れ。

玄蕃　ハヽヽヽ。

トこなしにて、チョン〳〵のキツカケ、大小入り、烈しき合ひ方。この道具廻る。

本舞臺、三間の間、松並木、上下稻叢、後は山幕。眼八、以前の形にて、葛籠を引抱へ居る。山颪しにて道具納まる。

眼八　爰は叡山日吉の谷間。廿八町も先へ駈けぬけ、着替への葛籠を持つて來たが、もう來さうなものだが。

ト揚げ幕の方を伸びあがり見て

よしよし。來るく……オヽイく。

ト皆々、向うより乘り物を舁き、以前の人々、友市を脊負ひ、眼八を見て、思ひ入れあり、皆々舞臺へ來て、友市を下ろし

關の　鷹野の陣所を離れるが最後、一散に走つて來たが、さて埒の明かない。

眼八　イヽヤ、早かつたく。サア、姐え、ちつとも早く。

關の　眼八さん、有り難うござんす。併し、あたりに氣遣ひは。

眼八　ようごんす。

ト關の戸、以前の形にて出て、窺ひ、思ひ入れ。

關の　さて、今日の仕事は、向うが向うだから、大きに氣を揉んだが、何もかもうまく出來た。

皆々　それく、仕負ふせました。

關の　案じるより首尾よう仕負ふせ、皆の衆も骨折り。オヽ、友市、さぞ窮屈であつたらうの。

友市　母様、わしや草臥れた。
關の　オヽ、さうであらう。人の目にかゝらぬうち
眼八　脱ぎかへなさるがいゝ。
皆々　合點でごんす。
ト眼八、葛籠より、いろ〳〵の包みを出し、皆々着替へる。
眼八　さて、何もかも上首尾だが、粽ぢやァ天井を見たなア。
皆々　側で汗になりました。
眼八　なんの、柏餅でも出せばいゝに、食ひつけないから粽を皮ごと。前代未聞の粽の種だ……オヽ、
それにしても、この息子は
關の　たとへ衣裳は着せ替へても、玄蕃めから見咎められた友市は、オヽ、幸ひ、あの葛籠へ。
眼八　成る程、爰を離れるうち、ちつとの間の辛抱だ。
ト友市を葛籠の内へ入れる。此うち關の戸、定家文庫より小判を出し
關の　今日の骨折り。
眼八　して、この葛籠は。

關の　わしがどうなと、彼所まで。

眼八　そんならわしはこの乘り物と、狼谷を拔けるから、わいらはその道から東山へ。

皆々　呑みこみました。

眼八　サヽ、早う〳〵。

　　　トこれにて仕丁の手下は下手へ入る。

關の　さはいへ世にも恐ろしい。一度は報いの

　　　ト思ひ入れあつて氣を變へ

　　今さら云つても返らぬ事。人目にかゝらぬうち。

　　ト手早く葛籠を脊負ひ身繕ひする。時の鐘。向うより、バタ〳〵にて、七人の勢子、手に十手を持ち

　　走り出て、關の戸眼八を取卷き

七人　騙りの女、動くな。

　　　ト十手を振り上げる。關の戸、悄りし

關の　エヽ、何と仰しやります。

景近　姿はやつせど、見覺えのある女。

兵內　先刻春永公のお鷹野先へ
鄕助　院使と僞はり、細石の茶碗。
彌源　騙り取つたる不敵の曲者。
運八　我れ〳〵討手に向うたれば、天命遁がれぬ同類が
軍六　注進あつて事明白。
關の　エヽ、そりや大それた科人。この身に取つては夢聊か、覺えない。どうぞモシ、私しは、御免なされて下さりませ。
眼八　モシ、お關さん、爭つてもモウ叶はぬ。今日の仕事は大それた、當時勢ひ盛んなる、春永公を騙る一件。首尾よくやつたその跡から、付け廻される恐ろしさ。何もかも注進した。四の五となしに
皆々　繩にかゝれ。
關の　すりや、何もかも眼八が
景近　捕つた。
ト關の戸にかゝる。これより好みの鳴り物。立廻りあつて、關の戸、危ふくなると小判を景近にやる。

不思議さうにやり過し、兵内「捕つた」とかゝると、小判をやる。關の戸、葛籠を脊負ひ、花道へ行く。

皆々　曲者。

ト云ふと又小判を投げる。皆々拾うてゐる。關の戸、構はず、悠々と向うへ入る。皆々、小判を見て悄りし、あわてゝ拾ふ。この模様、よろしく、拍子　幕

第一番目大詰

本能寺の場

役名――織田上總之助春永。森蘭丸。長尾彌太郎俊國。武智十次郎光義。春永妾、几帳の前。山口玄番後ニ安田宅兵衞。犬山軍六。萩原兵内。横曾根郷助。稲葉彌源次。洲の股運八。武智十兵衞光秀。

本舞臺、三間の間、正面、九尺の銀襖。左右折廻し、文字障子。舞臺先、上下は芥子畑の花壇、紅白見事に見せ、本能寺客殿の體。爰に十次郎　上下大小にて上の方に。玄番、麻上下の形。蘭丸、上下大小にて、玄番を支へゐる。羽衣の切れにて幕明く。

蘭丸　待つた、山口どの、無性無體に立ちかゝり、こりや十次郎を、なんとおしやる。
玄蕃　知れた事、我が君數年軍功により、上洛あつて、官位昇進、即ちこの本能寺にて、御祝儀の御能。羽衣が濟むと、次は御主人御自身に遊ばす、花子の狂言。お目にかゝらば御不興。それゆゑにこの玄蕃が
蘭丸　それゆゑ退ぞけ召さるゝか。
玄蕃　光義、早く退散おしやれ。
十次　成る程、お詞至極でござりますれど、御不興受けし我れ〳〵親子、今日や御赦免、明日やお免しと、待つに心の解けしなく、それゆゑ密かに几帳さまへ、執成しお願ひ申さんと、推參いたせし
蘭丸　イカサマ、尤もなる事ながら、御愛妾几帳さまには、折惡しく君の花子の御相手。十次郎、何卒朋友の義を思し召し、この段御推擧下さらば、忝なう存じまする。
玄蕃　とても今日のお目見えは相叶はぬ。
十次　すりや、几帳さまには、お相手お勤めなさるゝゆゑ。
ト この時調べの音。
蘭丸　アレ、あの調べは即ち花子。今にも我が君御出であれば、又もや扇で笞の役。主命とはいへど蘭

丸、迷惑いたせば、一先づこの場は
十次　でも、此まゝにて、すご〳〵と。
玄蕃　ヤア、すご〳〵この場が立たれずば、ドレ、某が門前まで
　　　ト蘭丸を引退け、立ちかゝるを、また蘭丸、立廻つて、鐺を捕へ
蘭丸　ハテ、それには及ばぬ山口どの。サヽ、光義にも御不興の、猶この上にもお詫びの妨げ。サヽ、お立ちやれ。
十次　左様ござらば、御兩所樣、よろしくお賴み申しまする。
　　　ト一セイになり、十次郎、刀を下げ、しな〳〵と花道へかゝる。向うより几帳、振り袖、着流しの形、被衣を被て出て、十次郎を見て、思ひ入れ。十次郎、几帳と摺れちがひ、行かうとするを
几帳　十次郎、待ちや。
十次　ハッ。
　　　ト平伏する。
几帳　この程聞けば殿樣に、御不興を受けしとやら、その御勘氣の身の上で、爰へ來たは、定めてアノ
十次　恐れ入つたる事ながら、お執成しお願ひ申さんばつかりに、身の程を顧みず、推しての推參。ど

うぞこの儀を。

几帳　それには幸ひ、思案もあれば、先づ〳〵あれへ。

十次　有り難うござります。

ト此うち始終鳴り物。几帳に從ひ、十次郎、中腰になり、舞臺へ來る。

蘭丸　こりや几帳さまには、最早花子の脇師の姿で

玄蕃　あの光義をば御同道は、エヽ、こりやアあなたが

蘭丸　春永公へ。

几帳　サア、執成すまでもなう、花子のお相手、わしが役目を十次郎へ。

ト十次郎思ひ入れ。

十次　それでは君の猶もつて、お怒りはいかばかり。

几帳　そこが何よりお好きの道。お能のお相手、もし首尾よく仕負ふすれば、お心も和らぎ、遂に御勘氣のお赦しもと。

玄蕃　でも、さもござらぬその時は。

几帳　ハテ、お怒り募らば共お詫び。

十次　兎角あなたのお執成し。
几帳　サヽ、そんならこの狂言の、座禪衾を打かついで。
十次　エヽ、アノ不束の私しが、あなたのお役に成り代つて。
几帳　我が君お出で遊ばして、なんとお詞があらうとも、かぶりでばかり、必らず詞を出しやんな。合點か。
十次　もしも顯はれ、この上に、よし御不興を重ねなば、命を捨てゝ御訴訟を
玄蕃　ヤア。
几帳　サア、十次郎、ちやつとその衣。
十次　御意に任せ、及ばずながら。
ト被衣を被る。
蘭丸　して、几帳さまには。
几帳　暫らく奥にて
兩人　我れ〳〵ともに。
几帳　コレ、必らず物ばし云やんな。

ト太鼓鳴る。几帳先に蘭丸、玄蕃、下座へ入る。十次郎、殘りて、被衣を被て、上の方へ座すと、向うより春永、誂らへ形、庭下駄を履き、絹張りの傘をさして來る。よき所にて謠にて

春永 更けゆく鐘、別れの鳥も、獨り寢る夜は、さはらぬものを

〽柳の糸の亂れ心、いつ知らぬ俤を

ト誂らへ唄になり、

〽緣が因果か、因果が緣か、通ひ馴れにし道の邊の、空にも月の笠めせば、我れも情の雨宿り、姿優しき花衣、綾の錦の下紐は、解けてなか〳〵よしなや。

ト舞ひながら舞臺へ來る。

〽君が手枕かはしまの、水も漏らさぬ契りさへ、鴛鴦の衾の睦言に、伽羅のかをりと彼の君樣は、幾夜とめてもとめあかぬ、誓文眞實しつぽりと、逢うて別れが猶つらや、又の御見を松の葉の、よむとも盡ぬいとしさよ。

トよろしく振りあつて

春永 これはいかな。花子が詞を胸に抱いて、館へは歸つたが、さぞ太郎冠者めが待ちかねやう。ヤレヤレ、人の主にはなりたいもので、おりやる。身共が頼むと云うたれば、つくろふまゝにしてゐ

る程にの。イヤ。何かは差置き、女どもは參らずや。

ト十次郎、頭を振る。

フム。それは嬉しい。先づ昨夜の樣子が話したいが、相手なうては。オヽ、おぬしを花子に擬らへて、相語らうか。ヤイ、何とて物を云はぬぞ。マア、窮屈にあらう。この座禪衾を取つておまさう。

ト十次郎の着たる被衣を取る。十次郎「ハツ」ト思ひ入れありて、ツカ〳〵と下へ下がり、ヂツと、平伏する。春永、見て

ヤア、そちや勘氣を申しつけたる、光秀が悴の小童。誰が許して目通りへ。緩怠至極、下がり居らう。

十次　恐れ入つてござります。

春永　全く几帳と思ひの外、興を醒ませし不屆き奴め。そこ下がらずば、眞二つに

ト立ちかゝる。奥より几帳、ツカ〳〵と出て、春永を留めて

几帳　オヽ、そのお怒りをさせしも、自らが計らひゆゑ。偏へに御免を

ト春永、思ひ入れあつて

春永　すりや、其方が計らひとな。

几帳　サア、御勘氣の身は花曇り、その浮雲をさつぱりと、どうぞ晴らして春の日の

〽花の宴や〳〵、只管に、

春永　寺々の鐘、突くやつめは憎やな。

ト十次郎、思ひ入れ。

几帳　サア、其お憎しみを只管に。

春永　イヤ、兗さぬ。子倅。まだそれに居るか。扇の笞に懲りもせず、予が詞を用ひぬは、春永を蔑に致すか。

十次　イヤ、何しに、勿體ない我が君樣の、御意を背くにはござりませねど、几帳さまのお情にて、思ひがけなう此お目見得いたし、御不興請けし身なりとも、どうマア其まゝ下がりませう。一旦の過ちは、これまで盡せし親どもが忠勤に、御免じあつて。

春永　ヤア、これまで盡せし親どもが忠勤とは何事ぞ。光秀おのれが武に慢じ、或ひは夜討、又は先駈け、聊か勝利は得たれども、軍令に背きし事は幾度。その上この頃義照どの、饗應の役申しつけしに、その身は病氣と面出しもせず、剰へ興を添へんと、傘の亭に寄せ、我れを差置き義照

を祝せし一句一句、出過ぎたる武智が仕業。それゆゑ勘氣せしを、故もなく赦免を願ふか。

十次　ハツ、御意、さる事にはござりますれど、賞は重く、罪は輕くの御仁政を

几帳　それ〳〵、世の諺にも申す通り、慈悲は上より。どうぞお怒りを宥め、親子の衆の御勘氣を、お赦しあらば、御恩の程

春永　ヤア、其方が存じた事でない。執成し無用。

几帳　でも、この儀ばかりは。

春永　まだ申すか。そちや太郎冠者でないか。

几帳　ほんに左樣でござります。

春永　童め、立たぬか。おのれ、立たずば。

ト立ちかゝるを、几帳、驚ろき、十次郎を閨ひ

几帳　モシ、殿樣、して、お話しかけの、その後は。

ト十次郎へ心遣ひながら云ふ。

春永　オヽ、太郎冠者、さて、昨夜の雨におひながら、軒に彳みてゐたれば、優しや花子さまが、小唄での。

ト下座にて唄。

〽燈火暗うして、君が來るにや。

身共を君と謠うたが嬉しさに、扉をほと〳〵、叩いたれば

几帳　いとゞ名の立つ折節に。

〽誰ぞや妻戸を叩くは水鷄か。

春永　身共もそこで、むつとして

〽雨の降る夜に誰そ濡れて、心に誰そと咎むる心には、待つ身のたゞ雨にうたせて。

トこの時向うより俊國、上下大小。掴み股立ちにて走り出て、花道に扣へる。

春永　中尾彌太郎、何事ぢや。

俊國　ハッ、御不興を蒙りし武智十兵衛光秀どの、十次郎が几帳さまへお執成しのお願ひ、若輩者の御訴訟、如何と案じ、後よりこれへ推しての推參。何卒御高免なし遣され、お目見得仰せつけられませうならば、我れ〳〵までも

春永　默れ彌太郎。予が許すと沙汰もなきに、悴といひ、その身まで、旅館へムザと足踏み致す慮外者。取次いたす事やある。直さまぼッ歸せ。

俊國　左樣ではござりますれど。
春永　武智が怖いか、臆病至極。玄蕃參れ。
玄蕃　ハツ。

ト下座より玄蕃、ツカ〳〵と出て

春永　又もや光秀來りしとの事。其方參つて、ぼツ歸せ。
玄蕃　畏まつてござります。
春永　コリヤ、待て。違背に及ばゞ討つて捨てい。

ト花道へ駈け出すを

几帳　エヽ。

ト皆々、思ひ入れある。

玄蕃　承知いたしてござります。無禮な光秀。

ト股立ち取りながら勢ひ込んで向うへ入る。春永、十次郎を見て

春永　ヤイ、子悴、おのれ、キリ〳〵立て〳〵。立たずば一刀に命を斷つぞよ。

十郎　とても御赦免なき身なら、お佩刀を穢すが本望。
春永　ヤア、小癪な丁稚め。
几帳　エヽ、それ程までに御勘氣を。
　　ト春永、思ひ入れ。
春永　又よしない執成しか。彼れめが事は捨て置いて、サヽ、流石に花子も、待ちかねて
　　〽やがて路次の飛石づたひ、切り戸の掛金をりんと外された。
春永　身共が妻戸を、きりゝと開く。
　　トこの時、揚げ幕の內にて
玄蕃　とく〳〵門外へ。光秀、お立ちやれ。
光秀　斯く推參の上からは、いつかな退出仕らぬ。
　　ト管絃になり、バタ〳〵にて、揚げ幕より光秀、鉢かつら、玄蕃が手を捻上げ、ツカ〳〵と出て來る。春永、思ひ入れ。玄蕃、振りほどいて立ちかゝる。光秀、扇にてこれを留めながら舞臺へ來る。玄蕃下の方へ投げのける。春永、これを見て、光秀へ其まゝ駈け寄つて「ムウ」ト思ひ入れ。これにて「ハツ」ト下座へ平伏する。

春永　やをれ光秀、勘當の身を以て、悴といひ汝まで、予が目通り推して出るか。主を主と思はぬ不敵の曲者。罷り立たずば、手は見せぬぞ。

光秀　ハツ。其お怒り、恐れ入つては候へども、某がこの度の越度こそ、過ちにして過ちならず、君招待の御方は、足利十四代の武將義照公にてましまし、東山どのゝ御末とて、茶道を好ませ給ふより、傘の亭を作り、皐月の雨、民草の惠み、萬民を憐れみ給ふの皐月亭、又その傘の下舍りは取りも直さず天ヶ下、しろしめす新將軍を、賀し奉りし、時は今天が下知る皐月かな、時候に寄せし某が一句。却つて御耳に逆らひ、名代の悴もろとも、某までの御勘氣。申さば君にも御主君たる義照公、祝せし某。出かしたり、との御賞美は候はずや。御賢慮を思し召しめさば御勘氣何卒御赦免下さるやう、偏へに願ひ奉る。

春永　ヤア、云ふな光秀。應仁の亂れより、四海悉く起つて、干戈隙なかりしを、我れ鋭き武勇によつて、過半は討ち靡け。爰や彼所に彷徨ひ歩く、漂泊の義照どの、今室町に安座さするは、春永が莫大の情ならずや。すりや、さしてもなき義照を、我れに越えたる尊敬。それゆゑ不興を受けたる、おのれが罪は悔まずして、却つて予を恨むの奇怪。

光秀　サヽヽ、その如く、君生得強きを憎み、弱きを侮どり給ふゆゑ、ナニ義照と輕んぜらるれど、

春永　室町殿は代々の武將。拒み給ふは憚りながら過言の奴な。おのれを是として詞を返すか。

光秀　イヤ、申し上ぐる御訴訟。

玄蕃　コレサ。云ふ程君の御怒り、この上兎や角申されたればとて、御赦免どころか、この世のお暇。お手討などにならないうち、子息を連れ、キリ〳〵と丹波の居城へ引籠つて、連歌でもしてござるがよい。

俊國　其うちには御免の御沙汰もござらう。先づ〳〵、この場を、光秀どの。

几帳　ほんに、御機嫌を見合せて、又お赦しのあるやうに、お執成して、よい吉左右を

ト此うち光秀、思案の體。

光秀　こは有り難きあなたの御意。各々方のお詞も、會得いたしてござれども、中國へは眞柴久吉、北國は柴田どの。瀧川どのは攝州門徒寺誅罰。何れも討手を蒙るに、手をこまねきて居られうや。御赦免なくば、潔う、この場に於て。

春永　なんと。

十次　長らへ居て後指さゝれう事も武門の恥。せめては父と諸ともに、御前を去らず、この場にて。

春永　すりや、親子とも命に替へて、予が不興を赦されたいとな。

光秀　摩利支天尊かけまして。

春永　ムウ。

ト思ひ入れ。

彌太郎、祕藏の手槍を持て。

俊國　ハツ。

ト立ちかかる。

春永　エヽ、早く持て。

トきつと云ふ。俊國これにて下座へ入る。此うち几帳、玄蕃、思ひ入れ。

玄蕃　アノ、御祕藏の手槍もて

春永　無益な問答。サヽ、几帳は今様の

トこの時俊國、下座より槍を持ち出て來る。春永、手早く取つてしごく。

几帳　モシ。

ト寄るを突きのけ、十次郎が脇腹をグツと突き立つる。「アヽ」ト十次郎、苦しむ。光秀、これを見て

思ひ入れ。皆々驚ろき

皆々　こりや光義を

春永　なに立騒いで見苦しい。構はずと今様を

几帳　でも、可哀げに

春永　ハテ、疾く仕れ。

几帳　ハイ。

ト振りになり

〽御簾の追ひ風匂ひ來る、その情こそ都なれ、花の春、紅葉の秋、誰が思ひ寢となりぬらん

春永　十次郎、望みを叶へて喜ばしいか。

ト十次郎、苦しみ

十次　君が御手にかゝる事、若輩者のいか程か、有り難う存じまする。

俊國　年に似合はぬ健氣な覺悟。

几帳　側で見て居る親の氣は、嘸かしあるにあられうかと、心の中が思はれて

ト思ひ入れ。光秀此うち涙を隱し、グッと思ひ入れ。春永、見て

春永　アヽ、啼く。啼く。夜明け烏が啼く程に、最早お暇。

ト狂言の詞にて十次郎へ立ちかゝる。几帳「モシ」とこれを支へる。

〽爰は山影森の下、月夜烏はいつも啼く、しよんがえ、しめておよれの夜は夜中と、摺り寄れば人目いかゞなり、お暇申すと東の方を見上ぐれば、曉の明星が、西へちろり東へちろり、ちろり〳〵とする時は、扇おつとり、去なうよ、戻らうよと、云うては袂にとり付いて。

ト此うち振りにて春永、扇をさして、ツカ〳〵と光秀が側へ來り、顔を見合せ思ひ入れ。春永、持つたる扇にて光秀の額を打つ。血流るゝ。十次郎、苦しみ、これを見て

十次　ヤヽヽ、まだお怒りが

ト思ひ入れ。春永、拔打ちに十次郎が首打つ。皆々「アツ」ト思ひ入れ。光秀これにて見返す所を、春永、直ぐ白刃を振りあぐる。光秀シヤンと首さし伸べる。兩人思ひ入れ。管絃になる。春永、白刃をシヤンと納める。

春永　光秀。

光秀　ハツ。

ト平伏する。

春永　肉身の悴を害し、額を割つたる春永なれど、恨みとは思はぬか。

光秀　事改たまりし君のお詞、御家臣の始めより、今日に至る親子郎等は申すに及ばず、光秀が痩せ馬犬猫まで、皆御祿に身命を繋げば、殘らず主君の物ならずや。すりや、悴はおろか、某を御打擲はまだな事、たとへ頭を召され候ふとも、お恨みなぞは勿論なし。たゞ幾重にもお怒りを宥めさせられ、御勘氣を御赦免の程、只管願ひ奉る。

春永　日向守が誠心、とくと見屆け疑ひ晴れた。

光秀　ナニ、御疑念が晴れしとな。

几帳　これといふも光義が……さはいへ愛しい子に別れ

ト光秀思ひ入れ。

光秀　アイヤ、彼れめが事は差置き、先づ身にとつて大慶は、君の御不興、御勘氣を

春永　イヽヤ、今は赦さぬ。

光秀　エヽ。

春永　改めて一つの功を立てよ。

光秀　すりや、まだ一つの功立てねば。君は本城にて田熊をば、攝州石山門徒へ向けられしかど、今以

て落城せねば、馳せ向ひ誅戮遂げよとの

春永　イヤ、門徒寺の加勢は山口玄蕃。

玄蕃　ハッ。

春永　其方、手勢を引具して、田熊に力を合せ、石山城を短兵急に攻め落せ。軍勢足らずば、これにて諸國の

ト懐より前幕の印を出し、玄蕃へ渡し

これぞ軍勢催促の連環の印、急いで打立て。

玄蕃　心得ました。

ト鐘鳴る。玄蕃下座へ入る。

光秀　御大将には、未だ御心解け給はず、石山城は餘人を後詰め。して某が功になるべき

春永　勘氣の詫びの一品くれう。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、花壇の紅白の芥子の花を二本取つて

春永が所存の程、これを以て判斷せよ。

光秀　ムウ。紅白に分けし芥子の二本。これにて判斷いたせとな。

春永　サア、この二本の芥子の花、この如く切つたるは

光秀　二本をお手に。ヤヽ、そんなら君の御賢慮に

春永　赤きは平家、小田の旗色。

光秀　白きは源氏の足利に。

　　ト春永、白き芥子を扇にて投げ出し

春永　武王を討つたる例しもあれば

光秀　さては、いよ／＼

　　ト春永、思ひ入れ。

春永　諫言聞かぬぞ。疾く／＼この場を立退きて、思案極めて速かに

光秀　功を立てなば

春永　勘氣は赦す。

光秀　功立てざれば

春永　いつかな赦免は。

光秀　いづれ二つの芥子の花房。

春永　先づそれまでは

光秀　春永公。

春永　門出の餞別。

光秀　ハッ。

　　ト十次郎の首を投げる。光秀思ひ入れ。ト愁ひ三重になり、光秀、しづ〳〵と花道よき所まで行き、この首を見て落涙し、キッと思ひ入れ。早舞になり、向うへ走り入る。

春永　武智が心底。

俊國　功を立てゝ立歸るか。

几帳　よそ目に知れぬ花の謎。

俊國　解いて立つたる

几帳　光秀の

春永　但し丹波へ退くか、去なうとも戻らうとも、何とも其方の御計らひと、云うては小腰に取りついて

〽去なうやれ戻らうやれ、夕の雲とかへりみれば、月細々と殘りたる、名殘惜しの面影。

トこの時、遠寄せを打つ。春永思ひ入れ。

春永 ムウ。

トにつこと笑ふ。几帳後國聞耳立て

兩人 あの物音は。

ト思ひ入れ。下座より蘭丸、高股立ちで走り出て

蘭丸 我が君これに。合點參らぬ寄せ太鼓。

春永 必定光秀我が意に從ひ、武將義照を討取らんと、早くも出陣、軍馬を發せしよな。

几帳 エヽ。

蘭丸 ナニ、すりや我が君には、義照公を

春永 ハテ、心地よやなア。

〽心浮き立つ花の春、鶯や囀るかな。

トこれにて管絃に遠寄せ。

几帳 扣へい。囃子物待て。合點のゆかぬ貝鐘太鼓。義照を討たんと室町へ押し行く武智が軍勢なれば、微かになるべきに

几帳　ほんに、次第に、アレ〳〵〳〵

蘭丸　近付き聞ゆる

三人　寄せ太鼓。

春永　胸に響き、應へるは訝かしゝ。

蘭丸　遠見いたせ。

蘭丸　ハッ。

ト蘭丸、一散に向うへ走り入る。

几帳　心ならざるこの場の樣子。我が君樣には片時も早く、安土へ御歸城ましますか。

俊國　但し、これにて籠城の

春永　ハヽヽ、春永といふ鬼の再來、鉦太鼓に聞怖ぢして、籠城せんは武門の恥辱。たとへ寄せ來る敵にもあれ、今川齋藤淺倉の、たかの知れたる殘黨ばら。何程の事仕出ださん。

俊國　御諚にはござれども、小敵と見て侮らずと、此まゝあらんは、憚りながら。

春永　過言なり、彌太郎。よし數萬騎の敵たりとも、防ぎかねる春永と思ふや。

俊國　イヤ、全く以て。

春永　いらざる諫言。左様の事は捨て置いて、敵は何者の旗印なるか、見屆け參れ。

俊國　ハツ。畏まつてござります。

トばた〳〵にて一散に向うへ入る。

春永　几帳は敵の寄せぬ間に、疾く〳〵この場を

几帳　イエ〳〵、これまでお側に附添うて、かゝる危ふき折にふれ、なに身を厭うて立退きませう。日頃のお情、今この時、云ふまでもなう、御先途を

春永　ハテ、女に稀れな愛い奴ぢや。

トこの時、ドンチヤン烈しく、向うより蘭丸引返してくる。

蘭丸、敵は何奴、樣子はなんと。

蘭丸　ハア、敵は誰れとも白浪の、寄するが如き數多の軍勢、この本能寺を取圍み、喚き叫んで寄せ來るは、殘黨野武士の類にあらず。五重の塔を物見の櫓、きつと敵勢見渡せば、不思議や寄せし敵の旗、白地に目立つ桔梗の紋。

春永　ムウ、白地に桔梗は土岐の旗。

蘭丸　今これを用ゆるは、

几帳　何者でござりまする。

ト此うち春永思ひ入れゐつて

春永　さては我が存念を背くのみか、却つて逆心企てし、武智光秀めが軍勢よなア。

蘭丸　すりや、押寄せしは光秀とな。主君へ弓引く叛逆人、引返してとくと物見せん。春永公にも、疾く疾く御用意。

春永　早う蘭丸。

蘭丸　只一摑みにソレ。

ト又ドンチヤン烈しく、向うへ走り入る。

几帳　何より君の御着長、これへ持参を云ひ傳へん。さうぢや。

ト几帳、下座へ入る。矢張りドンチヤン。

春永　我が手並の程。誰れかある、槍を持て。

ト下座より玄蕃、甲冑の形にて、ツカ〳〵出て、其まゝ槍を突ッかける、春永グツと、この槍を摑んで

春永　コリヤ、山口玄蕃、何とする。

玄蕃　ヤア、こなたの無道を見限つて、今日よりしては安田宅兵衛・武智どのへの手柄始めに。

ト立廻り、春永、二重舞臺へ上がり、玄蕃、槍をつけて行かんとする。春永その槍を引き、兩人、キツと見得。アリヤ〳〵の聲にて、ドンチヤン烈しく道具廻る。

本舞臺、三間の間、正面瓦燈口、白壁、爰に蘭丸、矢張り素肌に拔身を持ち、兵内、鄕助、彌源次、運八、胴丸の形。蘭丸に槍を突きつけゐる見得にて道具納まる。

蘭丸 ヤア、二股武士のその槍尖、忠義に鍛へし蘭丸が、五體にや立つべきか。

兵内 ヤア義を見て變に應ずる我れ〳〵。

鄕助 二股武士とは舌長な。

彌源 幸ひ爰は本能寺。

運八 題目稱へて

四人 往生なせ。

蘭丸 小癪な事を。汝等こそ死人の山だぞ。

四人 何を丁稚め。

ト又突きかける。蘭丸、切り拂ひ、いろ〳〵タテあつて、四人、下座へ逃げて入る。蘭丸、追つて入

ろ。向うより俊國、手負ひ、拔身を持ち、軍六、胴丸形にてこれを追ひかけ來り、立廻りあつて

軍六　死損なひの中尾彌太郎、觀念おしやれ。

俊國　深手は負ふとも御主君の、御先途いつかな見ぬ内は、此まゝ討死なすべきや。逆心の奴ばら、一一に。

ト切つてかゝる。立廻りあつて、この見得にて道具廻る。

本舞臺、向う一面の幔幕。鐘樓堂、左右、草土手。うしろ松並木。爰に几帳、長刀を打ち振り、所化二人と、渡り合ひの見得にて道具納まる。

所一　出家の身にて女を相手に、致すは不遠慮千萬だが

所二　かゝる亂軍、御免を受けて、宗旨違ひの念佛講。

所一　有り難い目にあはせてくれん。

几帳　ヤア、佛の眞似をする身の上で、逆將武智に與みする惡僧。地獄の寄せ手の先駈けしや。

二人　イデ、我れ〳〵が

ト兩方より切つてかゝる。几帳、立廻り、いろ〳〵あつて、所化二人、敵はず逃げる。几帳、追ひ行

く所へ、以前の四人、出て來り、入れ替つて立廻り。四人を追ひ向うへ入る。下座より蘭丸、數ヶ所に手を負ひ、玄蕃、槍を突きつけ出て來り

玄蕃　引くな蘭丸。

蘭丸　しや、小ざかしい。

トこれより兩人タテあつて、玄蕃、蘭丸の股を突く。どつさり下に居りながら槍を切り折る。玄蕃、直ぐに刀を拔いて切つてかゝる。蘭丸、受け留め、この見得にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、正面高足の二重、高欄つき、御簾かゝり、正面金襖。爰に春永、大廣袖、童にて、弓に矢をつがひ、高欄に踏みかけ、矢を射る。この見得にて道具納まる。

春永、射る。軍兵皆々逃げて下座へ入る。春永、猶も射ると、この時、弓の弦切れる。春永、これにて弓杖を突き、思ひ入れあり、弓を投げ捨て、其まゝ花道へツカ〳〵と行く。向うより軍六、兵内、鄕助、彌源次、運八、槍を持ち出て、一度に「ヤア」と春永へ突きつける。これにて春永、しづ〳〵舞臺へ戻り來る。皆々、跡より付いて來る。又「ヤア」ト思ひ入れ。この時、下座より几帳、長刀をかひ込み、走り出て、この體を見て其まゝ長刀を差出す。春永取つて、水をくれと頤にて思ひ入れ。

几帳心得有りあふ手水鉢の水を柄杓に汲みて春永へ渡す。春永、一口飲むと、軍六「ヤア」と突きかける。春永、柄杓を投げつける。軍六の咽喉へ柄杓立つて見事に中返りする。これにて一度に突いてかかる。春永、長刀で切り拂ふ。几帳、落ちてある弓にて立廻り。春永、皆々を下座へ追ひ込む。此うち所化二人窺ひ居て、左右より組みつく。春永、振り切つて二重舞臺へ上がり、几帳は所化一と立廻り、弓の筈にて所化一の首を打ち落す。所化二は有あふ槍を取つて春永へ突きかける。春永この槍を取るはずみ、所化二、高欄を越えて、中返りする。春永、直ぐに上より拜み突きに所化二を突く。この立廻り、高欄にてホツと思ひ入れ。始終ドンチヤン。此うち几帳、心遣ひの思ひ入れ。

几帳　最早御身も網代の魚。

春永　春永が冥土の土産に、今一度働らき花々しく。

ト懐より前幕の袋の官符を差出し

これこそ時の帝より、義照へ賜はる官符。我が屍と諸共に、火をかけて、敵へ渡すな。

几帳　心得ました。

春永　エヽ、思へば憎くき國賊め。

ト無念の思ひ入れ。この時向うにて

光秀　心無き人は何とも云はゞ云へ、身をも惜しまじ、名をも惜しまじ。

春永　なんと。

光秀　謀叛の張本武智光秀、御大將へ見參々々。

ト つゝかけになり、光秀、甲冑、陣羽織、鉢卷、金の采を持つて出て、直ぐに舞臺へ來る。この時下座より、軍六、鄕助、兵內、彌源次、運八、跡より玄蕃、蘭丸の首を持ち出て、下の方へ扣へる。

春永　ヤレ光秀、主に刃向ふ人畜め、汝を討つて春永が

ト 飛びかゝらうとするを、玄蕃始め皆々

皆々　やらぬワ。

ト 槍にて取圍む。春永、これにて無念の思ひ入れ。

光秀　お騷ぎあるな、春永公、光秀が只一言。

几帳　イヤ、この期に及んで我が君へ何をか云はん。武智光秀、女でこそあれ、不忠の其方を

ト 立ちかゝる。玄蕃、ちよつと立廻つて

玄蕃　及ばぬ事だ几帳の前、先ツこの如くさしもの蘭丸、その外殘らず討取れば、叶はぬ所と諦めて、春永公にも

皆々　御腹々々。

春永　しや過言なり、蛆蟲めら、武智光秀、よつく聞け。犬すら三日扶持すれば、その主の恩を忘れず。汝、江州にあつて日々を償なふに物なく、娘皐月が黒髪を切つて代となす折から、春永が仁惠を垂れ、臣下となし、これまで與へし祿の恩を忘れ、我れに迫つて爰に到る。今腹切つて報いの程、日ならずおのれに見すべきぞ。イデ

ト小さ刀、逆手に持つ。

光秀　ヤレ御生害、暫らく〳〵。いかにも某、北陸道に潜み、時の到るを待つ折柄、君の見出しに與かり、三千石の知行を賜はり、一國の主となりし事、須彌蒼海にまさる大恩。さるによつて、その高恩、只今報い奉る。

春永　ヤア、あくまで我れをさみするや。その高恩を報いんとて

几帳　逆心起し、攻め寄せて

春永　主を害する法やあるか。天命知らずの人非人めが。

光秀　主を殺すは人非人、天命知らずと申す事、春永公にも御存じか。

春永　ヤ。

光秀　エヽ、こなた樣はなア。

ト春永へ詰め寄り

君尾州に旗を上げられ、今川義元討つてより、駈けるに勝ち、向ふに敗らずといふ敵なく、遂に大功立て給ひ、官位昇進まします事、君の武勇といひながら、室町殿を後立てに、武將の命に叛くを名として、軍を發し給ふに非ずや。敵はこれに兜をぬぎ、降參の者少なからず。すりや云はいでも尊むべき大將、源の義照公、勿體なくも弑逆なし、武將の職を奪はんとは、不忠とやいはん、不道とやいはん、エヽ、淺ましい御心よな。諫言なども中々に、用ひ給はぬ御氣性ゆゑ、主殺しの惡名を、御身に付くるが悲しさに、御身を討つて武智光秀、後々末代まで主殺しの汚名を受くるが、せめて主君へ恩報じ。武智が心の苦しさを、御推量あれ春永公。

ト愁ひのこなしある。

春永　云ふな光秀。詞は飾れど心中には、主を害し、虛に乘つて、おのれ四海を掌握せん、豫ねての企みであらうがな。

光秀　こは情なき御一言。天下を望むは何ゆゑぞ、子孫の榮華を思ふにあらずや。光秀二人の女子はあれど、勘當なして行くへ知れず。殘る男子の十次郎、最前君の御手にかゝり、最早この世に亡き

悴、一本立ちの某、何樂しみに謀叛せん、人は何とも云はゞ云へ、身をも惜しまじ、忠義の爲、主を殺せし罪科は、やがてこの身に竹鋸。悴の最期が羨やましい。

ト大泣きに泣き落す。此うち几帳、思ひ入れ。

几帳　さういふ忠義と露知らず、暫しも怨みし光秀どの、今ぞ君より御勘氣を、赦免の御狀、受取られよ。

ト春永より受取りし官符の印を光秀へ渡す。

春永　ヤヽ、その官符を

ト皆々も思ひ入れ。几帳、苦しきこなし。

几帳　敵へ渡せし申し譯。

ト有りあふ白刃を取つて咽喉へ突き立てる。

光秀　ヤア、早まつて

ト苦しきこなし。

几帳　我が君樣のお心に、思ひもよらぬ思し立ち、知つたは先刻が始めて。御意見を申さうにも、女子の甲斐なさ其うちに、かゝる仕儀になつたるは、皆道ならぬ事ゆゑと、光秀どのへ、大切なるそ

の官符、渡せし替りに我が君の、惡事は深くおし包み

光秀　ホヽウ、その儀に於ては某親子、額の疵に饗應の、役目の恥辱、忰が敵、遺恨重なるそれゆゑに、主君ながらも討つたりと、元より沙汰せん我が心。又この官符と、最前安田が手より受取りし、連環の印諸ともに、室町殿へ差上ぐるが、春永公へこの身の面晴れ。

几帳　モシ、あれお聞きなされしか。お情うけし心には、今際の嬉しさ、いかばかり。この上は我が君樣、冥土へ參つてお宮仕へ。お先へ參つて待ちますぞえ。

トよろしくあつて、バツタリと落入る。春永、思ひ入れあつて

春永　ハテ、女子に惜しき心根ぢやなア。アヽ迷うたり。我れ次第に榮立なすにつれ、自然と驕奢の心おこり、足利は清和後胤なり。小田も桓武の後裔たり。殊に春永武に長じ、何の德無き義照に、膝を屈するいはれやあらん。何卒源家を討ち亡ぼし、平氏の天下となすべきと、それより表に仁義を見せ、內裡より賜はりし、武將の官符を義照が、預けしこそは折よしと、時節を窺ふ今日の今、思ひ立つたる我が大望。臣下武智が忠心の爲、却つて我れを亡ぼすは、これ皆天のなす所と思へば悔なし恨みなし。イデ、上總之助春永が生害、見物して、手本にせよ。

ト小さ刀を拔いて突き立てる。

光秀　お心がらとはいひながら

玄番　イサ、御首を

ト立ち寄らとする。春永、ムックと起きあがり

春永　慮外者めが。

トこれにて玄番、タヂ／＼となる。

光秀　御いたはしき有樣。斯る仔細はいざ知らず、この事聞けば眞柴久吉、中國より走せ歸り、弔ひ軍なさんは必定。その時光秀討死なし、君へ追ひつき奉り、泉下で奉公仕らん。

玄番　いづれも凱陣。

春永　光秀、さらば。

ト引き廻す。光秀、愁ひのこなし。よろしくあつて春永落入る。

光秀　勝鬨々々。

ト思ひ入れあつて采を振るを木の頭。大勢「エイ／＼オウ」と鬨をあげる。この模樣よろしく

幕

第二番目序幕

乳守假宅の場

役名――伏見問屋場の書役、長五郎實ハ勝鹿與五郎。渡し守、山崎與次兵衞。藤屋の吾妻。同、初舟。同、外山。同、染の井。同、綾衣。同、足鹿野。遣り手、お爪。茶見世、勘六。若い者、庄八。金貸し、勘兵衞。平岡鄕左衞門實ハ岡島丹平。醫者、山崎淨閑。橋本の下女、お虎。米屋悴與五郎。いさみ、下駄の市。角兵衞獅子、卯太吉。同、駒太郎。岡島若黨、傳藏。仲居、濡れ髮のお關實ハ皐月。

本舞臺、三間の間、上の方、小西といふ茶見世。長床几を直し、「揚屋町小西權兵衞此所に罷在」と書きし板札。下の方、入り口。格子の內に青簾。それより下、〻、藤屋と染書きの長暖簾、同じ掛け行燈。瓦葺きの屋根を見せ、二階、上の方までぶッ通しに格子、青簾。眞中に「大阪新町藤屋次右衞門假宅」と書きし板を打ちつけ、下座の口、青柳、鮨の幟。手打蕎麥。幕の內に掛け行燈。すべて乳守假宅の體。爰に駒太郎、卯太吉、唐草の股引、半天の形、角兵衞獅子にて、傳藏、笠をかぶり、太鼓を打つて居る。二階の簾を上げ、鄕左衞門、侍ひの形、丸腰。吾妻、扱帶、女郎の形。外山、染の井、

初舟、綾衣、足鹿野、何れも新造の形。お爪、遣り手にて、郷左衞門を團扇にてあふひで居る。下の口に庄八、若い者にて立ちかゝり、茶見世に地廻りの男、五人、立ちかゝり、角兵衞獅子の鳴り物に流行り唄にて幕明く。

傳藏　向ひ小山のしつちく竹は、緣が切れゝばうかりほと、けた〳〵ひッくり返つて突ッ立ち、そこらで手ばいて、寄せ波〳〵。

ト太鼓を打ちながら此やうに唄ふ。兩人、これに從ひ、いろ〳〵身振りあつて、傳藏、太鼓を打ち、兩人立廻り。

若一　カウ、茶でも飮んで行かつしやい。御苦勞でござい。

傳藏　ハイ〳〵。お火を一つお借り申しませう。

庄八　この角兵衞獅子は面白いね。

皆々　さうよな。

ト此うち傳藏、太鼓を下に、しやがんで居る。若い者一、茶を汲んでやる。二人の子供、茶を飮み、皆々捨ぜりふよろしくある。

郷左　成る程、川柳點にある通り、角兵衛獅子壹分廻つて立ちくらみと、十二文でさへあれなれば、イカサマ、壹分が廻つては、立ちくらみであらう。

吾妻　ほんに、主の形で、あんな事を舞はしやんしたら、どんなでござんせう。

足鹿　そりやモウ、豚の輕業でござんせうわいなア。

郷左　何ぢやと。

トむつとする。

つめ　足鹿野さん、又お客にそんな事を。どうしたものだえ。

皆々　それ見なさんせ。

外山　あんまり口をきかしやんすな。

染の　吾妻さん、お前、詫びて

三人　あげなさんせいなア。

吾妻　なんのモウ、腹立つて歸らしやんすなら、いゝわな。

郷左　コレ〳〵、吾妻、身共、野暮ではあるまいし、なに腹を立つものか。

皆々　ホヽヽヽ。

初舟　そして、あの角兵衛獅子を、越後といふは。
若一　あの越後から、毎朝出て來るから。
傳藏　とんだ事を仰しやります。近所に旅宿して居ります。
若二　さうだらう。越後から爰へ、毎日は來られない。
鄕左　子供がさぞ草臥れるだらうな。
傳藏　イエモウ、夜になりますと、他愛はござりませぬ。サア、サア、卯太吉も駒太郎も、茶を飮んだら立つまいか。

ト此うち鄕左衞門、傳藏が聲を聞きつけて

鄕左　あの聲は、慥かに傳藏め。

ト立ち上がる。

つめ　サア〳〵、どなたもお支度にお出でなさんせ。
若三　これから小塚をひやかすべい。
傳藏　ハイ、有り難うござります。

ト傳藏、太鼓を打ちながら、子供を連れて下座へ入る。此うち始終、角兵衛の鳴り物、流行り唄。直

ぐに暖簾の内にて人音して、郷左衞門、押取り刀にて走り出る。お爪これを留め、庄八、これにて思ひ入れ。

つめ　モシ〱、郷さま、物も云はずに

庄八　こりや、どうなされました。

郷左　イヤ、どうといつたら、あの角兵衞獅子を。

つめ　角兵衞獅子が、どう致しました。

郷左　サア、そりやア、角兵衞獅子が角兵衞獅子ぢやによつて、獅子身中の蟲めが。ヤイ〱、放せ放せ。

ト留めるを突きのけ、行かうとするを、向うより勘兵衞、羽織着流しにて出で

勘兵　あの侍ひめが短かい首を長くして、待ちかねてござらう。

ト捨ぜりふ云ひながら足早に出て、直ぐに舞臺へ來り、郷左衞門を見て

郷左　オヽ、勘兵衞、待つてゐた〱。首尾はよいか〱。平岡さまぢやござりませぬか。何を其やうに。

勘兵　よい所か、直ぐに持つて參りました。

郷左　それは重畳。コリヤ、おぬし達、ちよつと爰を。

三人　そんなら角兵衛獅子は。

郷左　そこ所か、早く〳〵。

　　　トこれにて流行り唄。お爪庄八は暖簾の内へ入る。

勘兵　イヤモウ、折角のお頼みゆゑ、相談話しが極まり、金子百両其うちで、霜月までのお約束ゆゑ、五両に壹分の割合で、七八九十霜と五ヶ月の五々廿五両、おどりの分が十二両貳分。私しの口錢が十両、そこで金子をお取引の節、御馳走が出ます所を、料理代五両申し受け、都合金子五十二両貳分引落し、金子四十七両貳分のお手でござります。

　　　サア〳〵、勘兵衛、爰へかけろ〳〵。

郷左　エ。借りる金は百両で、取る所がたつた四十七両二分か。

勘兵　イエ、御不承知なら、お貸し申すにも

郷左　ア丶、コレ〳〵、勘兵衛、承知だ〳〵。併し、吾妻が身請けの手附は百両。身共が爰に所持の金と、一つにしても少々不足だが、そこの所は手段があらうか。

勘兵　そんなら金子は

ト財布より金を出し

お改めなされ〳〵。

ト鄕左衞門へ渡す。

さうして、お返しなさる時の、金の當は。

鄕左　そりや、日本丸といふ一刀を、長尾家へ遣はせば、今にも立身出世して、金子はいくらも自由になる事。

勘兵　モシ〳〵その日本丸とやらは、郡さまから嚴しい詮議。それを所持する者が、卽ちその盜賊との事。そんならお前が日本丸を。

鄕左　コレサ、それを大きな聲で。善は急げとやら、先達ても都にて、馴染の太夫を請け出さうと思ふうち、朋輩の勝鹿與五郎めに先を越され、また吾妻を外へやつては、一分が立たぬゆゑ、先づこの金を身請けの手附けに。

勘兵　イカサマ、都でもばらされ、いま吾妻をも請け出すは。併し、吾妻には、與五郎といふ深間が

鄕左　サヽ、その色客の與五郎めが、心がゝりの無いやうに、勘といふ惡者に、今朝朝歸りの跡をつけさせ、喧嘩をしかけ、殺せと云ひつけてやつたれば、あの與五郎めは、大方どこかの草の中に、

くたばつてゐるであらう。

勘兵　道理でわしが廓から歸る道で、藪際で人が殺されたと。

鄕左　そりやァてつきり與五郎め。祝ひと金の禮ながら

勘兵　お供して證文を

鄕左　そりや合點ぢや。先づ手附けに。勘兵衞、來やれ。

ト流行り唄になり、鄕左衞門、イソ〱として、勘兵衞一緒に下座へ入る。向うよりバタ〱にて、米屋與五郎、若衆方、着流し、一腰差し、頰かむりして、後先見ながら走り出て、花道にてホッと思ひ入れあり、舞臺へ來ると、奧より外山「馬鹿らしいよ」と出て來る。與五郎、思ひ入れ、格子へ立つ。

米與　外山さん〱。

ト呼ぶ。外山、見て格子の內より

外山　オヤ、與五郎さん、お出でなさんしたかえ。

米與　吾妻は客かえ。

外山　アイ、矢ツ張り平岡サ。

米與　それでは、ちつとも。

ト思ひ入れ。

外山　イエ〳〵、吾妻さんも、今朝お前さんがお歸りの跡で、いつそ胸騷ぎがすると云うて、今の今まで案じてばつかり。

米與　そんならアノ、胸騷ぎがすると云うてか。

外山　アイナア。ちよつと知らせて寄越す程に、待つてお出でなさんせ。

ト外山、奥へ入る。始終流行り唄。

米與　思ひがけない今朝の仕儀。吾妻に話さば、さぞ悑り。と云うてわしが心一にも。アヽ、どうしたらよからう。

ト思案のこなし。流行り唄になり、奥より吾妻、後へ心を付けながら、そつと出て來て、與五郎を見て、其まゝ暖簾より走り出て

吾妻　與五郎さん、よう來て下さんしたなア。

ト縋り付く。

米與　サア、揚げ代のかゝり合ひ、何やかで茶屋からは送つてくれず、昨夜まで遣り手のお爪に呑み込

ませ、今日は來にくい所を來たのは、ちつと其方に話しが

吾妻　サア、わたしもお前に話さにやならぬ事があつて。

米與　今朝別れて間も無いに、また話しがあるとは。

吾妻　聞いて下さんせ。あの平岡づらが、今日は身請けすると云うて、いま內證で親方さんと相談。慥かに手付けを渡した樣子。

米與　ヤヽ、アノ身請けの手付けを。

ト思ひ入れ。

吾妻　それでわたしや、氣が氣ではござんせぬ。さうして、お前の話しと云はしやんすは。

米與　悔りしやんな。これぢやわいの。

ト左の小指を出して見せる。卷いてある紙を見て、吾妻、驚ろき

吾妻　こりや、どこの女中に。

ト思ひ入れ。

米與　なんの、これは。

吾妻　エヽ、そんならお前は。

米與　これはしたり。

ト引寄せる、思ひ入れ。この時、暖簾の內より、鄉左衞門、勘兵衞出て、兩人を見て、ムッとして

鄉左　ヤア、わりやア與五郎め。

トこれにて兩人思ひ入れ。

吾妻　オヽ、平岡さん。

ト與五郎、ソッと逃げのくを、鄉左衞門捕へて

鄉左　動きやアがるな。泥坊めが。

勘兵　こりやア矢ッ張り話しの與五郎。

鄉左　うぬ、濟まぬぞ〳〵。

トくらはせる。吾妻、さゝへる。此うちお爪、庄八、跡より外山、初舟、染の井、綾衣、足鹿野、暖簾の內より出て

皆々　ヤア、平岡さん。

皆々　與五郎さんを。

鄉左　オヽ、この若衆めは鄉左衞門が揚けておく、女郞と樂しみかけるイケ盜人。

勘兵　大方女郎にや限るまい。人の紙入れや胴亂を目がけるのであらう。
吾妻　いとしほなげに與五郎さんが
外山　どうしてそんな事を。
皆々　それいなァ
つめ　イエ〳〵、わたしも口鉾で、勤めの金が十兩ほど
庄八　この庄八が呑込みの、金も濟まぬのにあんまりな。
鄕左　コレ〳〵、こんな太い奴は會所へ屆けて、以後見せしめに。
勘兵　それがようございませう。
吾妻　そりや又あんまり。
鄕左　退いて居やれ。丁稚め、うしやァがれ。
外山　無禮な事を。
鄕勘　やかましいわえ。
ト流行り唄になり、鄕左衞門、與五郎を引立て、花道へ。勘兵衞、付いて、よき所へ行かうとする。吾妻、外山、お爪、庄八、引留める。向うより淨閑、醫者の拵らへ、扇パチ〳〵にて出る。後より濡

れ髪のお關、赤前垂れ、仲居の形にて、團扇を持つて出て、花道にてこれを見て、淨閑、思ひ入れ。お關、入れ替つて先へ立ち、勘兵衞と行き合ひこなし。舞臺へ押し戻し、淨閑、後より來る。お關、郷左衞門を突きのけ、勘兵衞を突飛ばし、與五郎を圍うて、しやんと見得。

吾妻　オヽ、濡れ髮のお關さん。

女皆　ほんにマア、よい所へ

郷左　ヤイ〳〵、仲居のお關、なんでこの與五郎めを、引ツ張つて行く向うから

勘兵　出かけておいらを

兩人　留めるのだ。

せき　エヽ、仰山な、何ぢやいなア。無理な口舌や癇癪で、歸る〳〵のお客なら、マアお一ツと杯の合ひの押への數々に、面白をかしう引留めて、機嫌直すが仲居の役。何の事やら譯さへも、知らであなたのお出で先、道のお邪魔も辨まへず、お客送つて廓の假宅、地廻りさんと思ひの外、平岡さま、この晝中に、モシ、どうしたものでござります。

ト團扇で脊中を叩く。

郷左　おきやァがれ。待つたと云はずに留めかけて、身を嗜なませるそれなりに、この場を治めかゝつ

ても、罷り成らぬ。ソレ、その與五郎めを此方へ。

トまた立ちかゝるを、お關、支へ

せき　其やうに仰しやらずと、さうして一體、マアなんで。

米與　サア、それはなア。

鄕左　どうして彼奴が云はれるもので。茶屋は塞がり、その上に、遣り手や若い者までも、揚げ代金を呑み込ませ、仕樣がなさに身が揚げて置いた、女郎を盜む橫道者。總別、客の巾着も、切りかねまじき奴ゆゑに

勘兵　會所へそびいて行つてこの土地へ、再び足を踏みもさせまい爲。

せき　それでアノ、今のやうに

鄕左　そびいて行くのだ。そこ退きやアがれ。

トお關を引退けんとする。お關、思ひ入れあつて

せき　イエ、そんなら妾を退くまいわいな。

鄕左　ヤア。

せき　仰しやる所は、尤ものやうなれども、そりや橫道、云はゞお世話なお前方。皆お構ひならぬ事。

郷左　なぜ〳〵。

せき　サア、いとしさうに與五郎さん、定めし巾着切りであるとか、それで會所へと云はんす、これがお世話のマア第一。よしそんな事する人ぢやとて、茶屋廻り衆が詮議の役、なんの外からマア。また揚代の滯り、そりやモウ、廓にはまゝある習ひ。殊さら部屋住みの與五郎さん、これとても、とんと脇からいらぬ佐平次。尤も揚げ詰めの吾妻さん、あなたのお目を拔いたのは、惡いながらも女郎に間夫、樂しみ無うては勤まらぬ。少しの事は内證でも、大目に見てなら、お客の身でも、さのみ穿鑿なさるにも、とサア、斯う一々に云うたなら、それなりにこの場の事、なんと濟まうぢやござんせぬか。

郷左　イヽヤ濟まぬ。外は兎もあれ、吾妻が事、身請けの手付けを相渡せば。

トこれにて吾妻、與五郎思ひ入れ。

吾妻　エヽ、そんならいよ〳〵、アノ身請けの

せき　アヽコレ、たとへ手付けは濟まうとも、後金の濟むまでは。

郷左　でも、身が爲には、今日からは女房同然。

せき　イエ、勤めぢや。この内にお出でのうちは、矢張り藤屋の吾妻さん、あなたのまゝにはならぬわ

いなア。

勘兵　成る程、さう聞けば平岡さま、こりや仕様もございますまい。

ト郷左衛門、思ひ入れあつて

郷左　エヽ、いま〳〵しい。

米與　すりや、モウ、これでわしが身も

つめ　平岡さまはお構ひなくとも、わつちが呑み込みの

庄八　受合つた揚げ代金。

せき　そりや、どれ程の事ぢやえ。

つめ　アイ、やがて廿兩ほど。

トお關、楊枝入れより金を出して

せき　これでよいかえ。

トお爪、受取つて

つめ　オヤ〳〵、こりやマア

米與　その金、立替へてもらうては

せき　ハテ、それで濟んだら相變らず、與五郞さんはお客ぢやぞえ。
つめ　ハテ、これさへ濟めば
吾妻　晴れて逢うても大事ないかえ。
つめ　なんの大事が。
外山　吾妻さん、さぞ嬉しうござんせう。
　　ト最前より淨閑、下の方にマヂ〳〵してゐて、この時ちよつと出て、鄕左衞門の側へ來て
淨閑　御免下されい。愚老は山崎淨閑と申して、橋本邊の醫者でござるが、當地に餘儀ない病家ござつて、この程より參り居る。ついては先達て春永公、大阪石山の門徒寺の取合ひにて、新町の廓をこの堺の乳守に假宅いたすを、一見いたさぬも殘念と、卽ち井筒屋と申す揚屋へ手紙を付けられ今日これへ參り居つたが、ひよんな所へ參り合せ、臺詞も廻らず、最前よりあれにて見聞き致してござるが、さて〳〵、折角貴公樣の思し召しが、存念の通り參らで、さぞかし御殘念。御心中推察いたして、甚だお氣の毒に存じ申す。
鄕左　これは〳〵、未だ知る人でもござらぬに、御懇志のお詞に與かり、千萬忝く、面目もなき仕合せ。心中お察し下されい。

淨閑　さこそ〳〵。
ト兩人、肱張つて四角に挨拶する。
綾衣　アレ、見やしやんせ、白髭大明神お渡し申すといふやうぢやわいな。
皆々　ほんになア。
勘兵　時に、きついはお關ぼう。器量といひ、達引といひ、あの八幡の御亭主が、どうぞあのお關が仲居を止めて、此方の内へ勤めしてくれるなら、五年で百兩出すと云つたも尤もサ。
つめ　そりや知れた事。此方の内で濡れ髮と、評判のお關さん、それが出來れば八幡より、内の旦那が相談する氣。ほんにお關さん、お前さうぢやないか。
せき　ア丶コレ、お爪どのまで同じやうに、氣恥かしいそんな事、云うて下さんすな。顏が見らる丶わいなア。
つめ　イエ、ほんまの事でござります。
せき　アレ、又かいなア。
鄕左　コレ〳〵、勘兵衛、役にも立たぬ事を云つて
勘兵　爰に斯うして居やうより、座敷でわつさりと酒にせう。

郷左 サア、そんなら吾妻。

ト手を取る

吾妻 イヽエ、わたしは

ト振り切り、郷左衞門、又かゝるを、お關隔てゝ

せき お客がござんす。

郷左 客といふのは、與五郎か。

せき アイ、今日から此方の内のお客、あなたの揚げでも、御盛んの女郎さん方には、折惡ういつでもお客が落合ひ勝ち。御不請ながら吾妻さんは、ちよつとの間、此お關が、お借り申しましたぞえ。

郷左 イヤ、そりや成らぬ事だ。と云つた事なら又なんのかのと吐かすであらう。せう事がない、ちつとのうち。

せき 此方へ假宅、平岡さん。

浄門 愚老は如何いたすのぢや。

せき ほんに、御免なされませ。大事のお客を庄八どん、あなたにどなたぞお氣に入るやう。

庄八 承知でござります。左樣ならあなた

淨閑　これはお世話。
勘兵　サア〳〵、此方の座敷へ洒々。
つめ　それがようござります。
　　ト郷左衞門、お關を見て
郷左　エヽ、思へば腹の立つ。
つめ　サア、お出でなされませ。
せき　あなた、只今。
　　ト淨閑、思ひ入れ。流行り唄になり、郷左衞門勘兵衞、暖簾の内へ、後よりお爪、庄八、付いて入る。
吾妻　モシ、お關さん、嬉しうござんす。お前のお庇で、これいナ、與五郎さん、たんとお禮を云はしやんせんかえ。
米與　たんとどころか、これがマア、どう禮が云ひ盡されう。
外山　サ、それはナ、わたし等も先刻の時は、いとしいやら、口惜しいやら、勘兵衞づらまで一つになつて
染の　平岡さんの憎てらしい。どうぞ仕樣は無い事かと

初舟　そりや、モウ〳〵、側でさへハラ〳〵思うて居たわいなア。
綾衣　わたしは癪が差込んで、いつそモウ胴慾な。
せき　お前方さへそれぢやもの、吾妻さんの氣は、どのやうにあつたでござんせう。
皆々　しみ〴〵嬉しうござんす。
せき　なんのマア、其やうに。
米與　イヤモウ、緣もゆかりも無い者を、日頃からのお世話といひ、身に引受けて今の難儀、救うて下さるのみならず、金まで立替へての御深切。
吾妻　それもわたしを思うてのお關さん。
吾與　一生、お前の

ト思ひ入れ。

せき　これはしたり、何をそんなに。モウ、どういふ事にや同胞のやうに思ふ吾妻さん、それにつながる與五郎さん、他人のやうには思はれぬゆゑ、ツイ不躾に、氣の付かぬは、わたしが持ち前、必らずモウ皆さん、出過ぎ者ぢやと思うて下さんすなえ。
皆々　アレマア、どうして。

外山　ほんに吾妻さんはあやかり者。

綾衣　併し、あの侍ひ面が

初舟　身請けの相談。

染の　お前、マア、どうぞ止めになるやうに、よい思案して

皆々　見やしやんせぬかえ。

吾妻　サア、わたしもそれをな。

ト與五郎へ思ひ入れ。

せき　モシ、なんの今からそれを苦勞に。もし請け出されたら似せ狂人。側にも寄せず、狂ひ廻れば、持て餘して向うから、戻すのは、知れた事。さうした上で好いた同士、女夫になるはどうでござんす。

吾妻　サア、さうゆけばよいけれど。

せき　ゆかいでかいなア。そんな事より少つとも早う、與五郎さんと。

吾妻　サア、そんなら一緒に。

ト與五郎が手を取る。

米與　アイタヽヽヽ。

　　　トお關皆々、思ひ入れ。

吾妻　ほんにその指……。

米與　アヽコレ。

　　　ト皆々へ心遣ひ。

吾妻　お關さん、お禮はゆるりと。

せき　與五郎さんとしつぽりと、おしげりなさんせ。

皆々　サア、わたしらも。

せき　吾妻さん

吾妻　必らず、後にえ。

　　　ト流行り唄になり、吾妻、與五郎を連れ、皆々一緒に暖簾の內へ入る。お關殘つて跡見送つて

せき　エヽマア、嬉しさうな事わいな。マア、蕾の花の好いた同士、任せぬ戀を兎やかうと、及ばずながらお世話するも、此方にゆかりの與五郎さんといふ名、愚痴な女の心の操。さうとは知らず與五郎どの、一腰詮議と別れたまゝ、どこにどうして居さんすやら。サア〳〵、ひよんな事思ひ

出し、こりや氣が揉めて來たわいな。

トいろ／＼思ひ入れ。唄になり、向うより勝鹿與五郎、旅の形、一本差し、菅笠を持ち、出て來り

與五 ハア、これがいつぞや春永公、大坂石山との取合ひによつて、この堺の乳守へ移した、新町の假宅ぢやな。廓は諸人の入込む所、暫しの間足をとゞめ、尋ね求むる一腰を。ムウ。

ト思案しながら舞臺へ來て、直ぐに行かうとして、お關を見て

モシ、女中さん、卒爾ながら、ちつと物が尋ねたいが。

せき アイ、何でござんす。

ト顔を見て

ヤヽ、お前は與五郎さん。

ト思ひ入れ。

與五 ムウ、お關か。

ト思ひ入れ。

せき ほんにマアよう。

與五 思ひがけない

せき　不思議な所で
與五　變つた姿で
せき　逢ふも盡きせぬ
與五　縁ぢやなア。
せき　モシ、よう來て下さんした。今も今とて、お前の事を。マア〱、お變りなうて。そしてアノ、尋ねなさんす、その一品わえ。
與五　サア、岡嶋丹平が仕業と思ひ、諸所方々、尋ね探せど、手懸りさへ。それゆゑ其方にも思はぬ無沙汰。合點行かぬは其方の形。どういふ事で、この所に
せき　さいなア。お前に別れて、跡に殘つて居るも心ならず。共に一腰詮議をと、尋ねて出たるその道で、ちつと譯あつて、この新町へ、今では仲居奉公も、人足繁き廓ゆゑ、一つは尋ぬる一腰の、よい手懸りもあらうかと。
與五　ハテ、貞心屆いて斯くばかり、心を合し、其方の奉公。我れも詮議の爲と思ひ、この地へ來りしより、この假宅の繁華の地、暫し身を寄せ詮議をと、思ひ付いたもたつた今。其方がこれに居る上は、當所の事は打任せ、身共はこれより京都へ上り、手蔓となるべき商家へ便り、姿を替へて

詮議せん。日本丸の拵らへ、其方はとつくりと。
せき　そりや、よう心にとめて。確かに小柄は桒種に小蝶。
與五　いかにも。それを手懸りに。
せき　ちつとも油斷はせぬわいなア。
與五　そんならお關、よい便りを
　　ト立ち上がるを、お關とめて
せき　アヽモシ。もう直ぐに行かしやんすのかえ。
與五　知れた事。其方が居やれば、用なき當地。
せき　サア、そりやさうでもあらうけれど、久し振りで逢うたから。其まゝ行くといふやうな。せめて一夜さ泊らしやんしても。
與五　イヤ〳〵、それでは却つて互ひの心に。
せき　でも、いろ〳〵話しもあれば。オヽ、ちやつとあそこへ來て下さんせ。
　　ト隣りへ連れ行かうとする。與五郎、行燈を見て
與五　小西……小西と名乘るあの茶見世。待ちやれ。小西彌太郎行長は、元町家出なれば、それに緣あ

る者かもしれぬ。我れも以前は勝鹿與五郎。今の姿を、もしや見られては。

せき　エヽ、なんの。ありや揚屋町に居た、小西權兵衞といふ、芝居の太鼓打ちの見世ぢやわいな。

與五　ヘエ、さうであつたか。

せき　勘六どん、内かえ。

勘六　アイ〳〵。

ト亭主勘六、出る。

せき　ちつと奥を借りるぞえ。

勘六　お易い御用で。あなた、お上がりなされませ。

與五　アイ〳〵。お關、大事は。

せき　遠慮はない内ぢやによつて

ト流行り唄になり、與五郎、無理に連れ立ち、お關、奥へ入る。勘六、見世を直して居る。向うよりお虎、下女の形。丸絎けの青傘を持ち、風呂敷包みに南瓜を包み、玉蜀黍四五本提げ出る。後より與次兵衞、親仁の形、脚絆草鞋、三尺手拭、曼陀羅の箱を風呂敷にて脊負ひ、菅笠を持つて出て

與次　ヤレ〳〵、女中さん、達者な事でごんす。そして、その藤屋の假宅は、どこでごんすぞ。

とら　その藤屋は、モウ向うでござんすわいなア。

ト指さして教へる。

與次　へエ、向うの家がさうでごんすか。成る程、屋根にも行燈にも、何やら書いてあるさうな。無筆の悲しさに一言も

とら　そんならお前は、聾の上に無筆かえ。

ト大きく云ふ。

與次　何ぢや、蟲唾が走る。それならわしが解毒を進ぜう。マア、あそこの茶見世へ行かつしやれ。

とら　こりやをかしい。ホヽヽヽ。

與次　ホウ、笑ひの出るは血の道であらう。マヽ、行かつしやれ／＼。

ト流行り唄にて舞臺へ來る。

男衆、白湯を壹つ飲ませて下され。

勘六　ハイ／＼、お掛けなされませ。

ト湯を汲んで出す。與次兵衛、懐より藥の袋を出す。お虎、迷惑のこなし。腰を掛けると、市、勇み、一重羽織を手にさげ、跡より地廻りの若者四人、出て

四人　コレサ、兄イ、待ちやなく〳〵。

ト市、振りかへり

市　なんだ、見た事も近付でもない手合ひ、何もおいらは主たちに。

ト云ひながら構はず舞臺へ來る。

若一　カウ〳〵、たとへ近付でなからうが、

若二　用があるから呼んだのだ。

若三　但しおいらが怖くつて

若四　尻尾を巻いて逃げるのか。

四人　用があるから、マア、待ちやれな。

ト市を中に挾む。

市　なんだ、此おぢい達は、大分おつな事を云ふが、まだ額も前髪の、痕のある二才だと思つて、こりやマア、なぶりかけるのか。

若一　イヤ、なぶるのぢやないが、この頃から折々見かける勇みの兄イ。

若二　おいらが方へ渡りもなく

若三　改めて勇みの仲間へ、酒肴でも

四人　振舞やな。

市　ハヽア、そんなら用とはその事か。意地の穢ない勇み達、貳朱や三朱の達引も、しかねもしまいが、その酒は、どうしておれに買はせるのだ。

四人　そりやア、斯うして買はせるのだ。

ト打つてかゝる。立廻り。與次兵衞お虎、これを見て驚ろき、片寄る。勘六、「喧嘩だ〱」と立ち騒ぐ。これにて庄八、走り出る。この時、内より外山、初舟、染の井、綾衣、足鹿野、走り出て、「市さん〱」と氣遣ふ。此うち二丁鼓の鳴り物にて、床几のタテよろしくあり、四人は下座へ逃げて入る。市、行かうとするを、庄八、勘六、留める。

皆々　市さん、もうよいわいな。

市　苛めて遊ぶに手頃だと、あんまり太い耄碌めら。下駄の市さんを〆めて見ないか。

庄八　モシ〱、もう料簡なさいまし。

皆々　もう、堪忍してやらしやんせいな。

與次　形に似合はぬ小達者なお若いの。併し、逃げたら捨てゝ置かんぜ。

とら　口程にもない衆達であつたわいなァ。

染の　さう云はんすは、吾妻さんの所へ、使ひにござんす橋本の

とら　アイ、左樣でござります。

輿次　今の喧嘩は、惜しい事でござりました。

市　なにサ、尻腰のある奴等ぢやァないのサ。

初舟　ほんに市さん、折角お出でござんすが

綾衣　花里さんが今のを見たなら、直に癪でござんせう。

足鹿　あの花魁は昨日から

市　また病氣か、久しいものだ。でも、歸られもしまい。足鹿野さんの所へ上がらう。

足鹿　アノわつちを名代かえ。オヤ、嬉しいね。

ト鼠啼きをする。

庄八　鼠啼きも凄まじい。遠吠えでもしなさい。

足鹿　庄八どん、打ッちやつて置かつしやいよ。

初舟　構ひなんすな。

とら　モシ、どなたぞ憚りながら、吾妻さんへ。
足鹿　こりや、妾がさう云はうわいなア。
市　そんなら、庄八どん。
庄八　サア、お出でなさりませ。

ト唄になり、市に庄八足鹿野附いて、暖簾の内へ入る。此うち與次兵衞、皆々を見廻して

與次　モシ、この内に、吾妻どのといふ女郎衆が居りますか。
とら　アイ、吾妻さんは奥にぢやわいな。

ト大きな聲で云ふ。

與次　ヘエ、奥にか。どうぞ内々にて逢ひたいものぢやが。
とら　ムウ、お前もあの吾妻さんに。山崎あたりに、あなたは知るべは無い筈ぢやが。
勘六　ハア、お前のお連れではないかえ。
とら　イヽエ、乳守の假宅へ行くというて、道から一緒に。
外山　でも、お客といふ風ではなし、お前は吾妻さんに。

ト與次兵衞、知らぬ顔してゐる。

とら　エヽ、ナニ、その位な聲で聞える事ぢやござりませぬ。
初舟　アノ、耳が遠いのかえ。
とら　アイナア、聾の上に、無筆ぢやというて、話しするに、大抵困つた事ぢやござりませぬ。そして
お前は吾妻さんへ、何の用ぢやえ。
ト云ひながら仕方して見せる。
與次　アイ、わしやアノ吾妻について、話したい事がある。お前方、お世話ながら逢はしては下さるま
いか。
外山　あれ聞かしやんせ、吾妻さんについて、話しのしたい事がある、とは、こりやてつきり、與五郎
さんの親類衆で、大方縁を切らうと
染の　成る程、さうでござんせう。そりやマア
兩人　與五郎さんの
ト大きく云ふ。
與次　それ〳〵、吾妻どのと專らの噂ある、與五郎さんの身にとつて、よい事が出來ますのサ。
綾衣　與五郎さんの身にとつて、よい事とは、もしや身請けの

とら　そんな事なりや、吾妻さまの幸ひ。どうぞお前方、逢はせてあげて下さんせ。

ト懐中より袱紗包みを出して渡す。

外山　そんなら、よい間を見合せて

とら　わたしも、母御様からのお使ひ。をかしい物ながら、所に出來たこの二品、お客様の隙を見合せお目にかけて。

初舟　そんなら一緒に、おとらどん、

染の　サア、モシ、お前も。

與次　ムウ、すりや、逢はして下さるか。

外山　此方へござんせ。

ト合點の行かぬこなしゆゑ、袖を捕へて

とら　ござんせいな。

與次　女郎屋の敷居を跨ぐは、丁度二十年振りぢや。ハヽヽヽヽ。

ト唄になり、角兵衛獅子の鳴り物。お虎、與次兵衛に女形四人附いて下座へ入る。卯多吉、駒太郎、傳藏出る。

勘六　また先刻の角兵衞獅子が來た。

　ト下座へ入る。

傳藏　ほんに、廻り廻つて、また爰へ出てくるやつサ。

　トこの時、暖簾の内より鄕左衞門出て、傳藏を見付け

鄕左　さてこそ、若黨の傳藏めぢやな。

傳藏　ヤヽ、あなたは旦那。こいつは堪らぬ。

　ト逃げ出すを取つて押へ

鄕左　慥かにおのれと思つたゆゑ、最前から氣を付けて居つた。うぬ、よくも大事の一腰を、横取り致す横道者め。眞二つに

傳藏　アヽ、眞平御免なされて下さりませ。それには譯が。

鄕左　なんの云ひ譯。憎くい奴めが。

　ト切らうとする。傳藏、逃げ廻る。角兵衞二人、驚ろいて下座へ逃げ込む。この時暖簾の内より淨閑勘兵衞出て

淨閑　これは〳〵、如何な事。

勘兵　平岡さま、何でござりますぞ。

ト兩人押とめる。

郷左　イヤ、彼奴は使ひ先より取逃げ致した、家來の傳藏と申す奴。只今これにて見當りしゆゑ

淨閑　そんならあの御家來が、取逃げ致しましたか。

勘兵　イカサマ、見ました所が、太々しい奴と見えまする。

郷左　サヽ、あの品は如何いたした。うぬ、眞直ぐに白狀しおらう。

傳藏　ハイ〳〵、申します〳〵。お聞きなされて下さりませ。あの日本丸の一腰を、持參いたし、長尾家へと急ぐ道筋、山崎で、浪人された勝鹿の妹御に出ツくわし、日本丸を見付け、寄越せ、やらぬと奪ひ合ふはずみ、その一腰を苫船へ打込んで、取らうとするうち、舟はどこへか。一腰無くしたのみならず、小藤にしたゝか切り倒され、既に命もないところ、やう〳〵取とめましたが、また旦那にどんな目にと、それから驅落ちいたし、仕樣がなさに角兵衛獅子、太鼓叩いて、どんつくどんな申し譯。マア、この疵痕を、御覽なされて下さりませ。

郷左　イヤ〳〵、僞はり申すな。一腰を賣り代なし、今となつて拵らへ事。よし又それが誠なら、主人の使ひを粗略になし、失なつた科、赦し置かれぬ。うぬ、盜賊め。ぶち放す。

淨閑　先づ〳〵そこを。

ト留める。傳藏、思ひ入れ。

傳藏　そんならどうでも赦されぬか。ようごんす。とても切られて死ぬなら、こなたの惡事を大聲に、爰で怒鳴つて、

鄕左　なんと申す。

傳藏　オヽ、この平岡鄕左衞門どのは、郡の重寶日本丸をひん盜んで、朋輩の勝鹿與五郎どのをくじらせた大盜人、岡島丹平といふ侍ひだと、こなたの事を

ト此うち鄕左衞門、思ひ入れ。

鄕左　コリヤ、ヤイ〳〵、それを云はれて

傳藏　イヤ、云ふ〳〵。この平岡鄕左衞門どのは、岡島丹平といふ侍ひだと、こなたの事を

鄕左　コレサ〳〵傳藏、料簡するよ〳〵。

勘兵　靜かにしやれ〳〵。

傳藏　そんなら許して下さるか。

鄕左　料簡ならぬ奴なれど、身の大事には替へられぬ。許して元の若黨傳藏。

傳藏　そんなら此方も料簡しませう。
鄕左　エヽ、忝ない。
勘兵　なんの事だ。
ト此うち淨閑、思ひ入れ。
淨閑　ムウ、今の樣子を承はれば、すりや、貴公がその岡島丹平どのでござるか。
鄕左　いかにも左樣でござる。
淨閑　これは〳〵、愚老今日參つたは、外の儀でもない。內々貴殿をお尋ね申して。
鄕左　そりや何で。
淨閑　外の事でもござらぬ。手前緣者、北國長尾家の藩中、辻浦一角方より、當地に隱れ住まるゝ、岡島丹平どのと申す仁へ、密かに屆けてくれよとござつて、書狀を差越しましたゆゑ。
ト懷より旅狀箱を出して鄕左衞門へ渡す。
鄕左　エヽ、すりや、先達て申し越されし、日本丸の儀。これは憚り、後方密かに披見いたすでござらう。
ト懷中して

これにつけても、おのれはマア、大切なる日本丸、玉無しにして、身が出世の妨げ致す不忠者めが。

傳藏　イエモウ、とんだ事を致しました。

ト氣の毒のこなし。

淨閑　イヤ、平岡どの、日本丸所持いたすが、即ち盜人ぢやと申して、郡家より詮議嚴しうござる程に

勘兵　それ〳〵、そんな手紙を取落さぬやうになされませ。

鄕左　承知いたした。それゆゑ浪人の與五郎めを尋ねれば、

勘兵　オヽ、與五郎といへば、矢ツ張り達者で與五郎が

鄕左　サア、如何いたして存命なるか。彼奴が居つては、兎角に吾妻が。

傳藏　ヘエアノ、與五郎がこの所へ。道理で吾妻與五郎と、世間一ぱい浮氣の取沙汰。

鄕左　それゆゑ是非とも與五郎めを。

傳藏　せめて旦那へ奉公に、この傳藏がぶち殺して

鄕左　地廻り手合ひを語らつて

淨閑　錢よく人を使ふでござれば。

ト郷左衛門、紙入れより金を出して

郷左　これにて彼れらを手なづけて

ト傳藏へ渡す。

傳藏　あの與左郎と見るならば

勘兵　ぬかるまいぞよ。

傳藏　呑み込みました。慥かそこらに地廻りどもが。

ト下座へ走り入る。

郷左　イザ、淨閑老、先づお先へ。

ト辭儀合ひして暖簾の内へかゝると、内より與次兵衞、着流し、三尺手拭を帶にして、手拭を持ち、出合ひ頭に鉢合せして

アイタヽヽヽ。

ト郷左衛門、頭を抱へる。

與次　なんぢや、其方から頭こつきりして置いて、何を小言を

ト呟やきながら出る。

勘兵　イヤ、この親仁は、誰れも小言を云ひもしないに。

ト淨閑、横手を打つて

淨閑　これは珍らしい所で、山崎與次兵衞。

與次　ホウ、こなたは藪醫者の淨閑どのぢやの。

鄕左　何知らぬ身共が頭を、割れる程に打つて

淨閑　アヽイヤ、左樣な事仰せられても、彼奴は聾でござるワ。

兩人　ハアヽ。

淨閑　こいつは六十の莚破りと見える。コリヤ、女郎買ふ金があらば、去年の藥禮を寄越せやい。

ト大きな聲で云ふ。

與次　ナニ、藥禮を寄越せ。蟲のよい。藥違ひして人をば聾にして置いて、其方から證文に、詫び金を添へて寄越す筈ぢやが。

淨閑　イヤ、とつけもない。ついぞこれまで、ころりと殺してさへ、詫び金添へて返した例しがない。聾位にしたというて、藥禮を取らいで濟むものか。

與次　サア、詫び金出しやれサ。

淨閑　イヤ、藥禮取らう。
　　ト兩人、詰めかける。
鄕左　これはしたり、役にも立たぬ。そんな事爭はずと
勘兵　あんな親仁に構はずと、酒に致しませう。
淨閑　イカサマ、君子は爭ふ事勿れと申せば、いづれともお詞に。
鄕左　然らば、サア、お出でなされませい。
　　ト鄕左衞門先へ、淨閑に勘兵衞附いて暖簾の内へ入る。
與次　コレ、詫び金はどうして寄越さぬか。時に、遠道してか、草臥れがとんと退かぬ。洗湯は慥かこの横町と云うたが。
　　トそこら見廻して居る。隣の内より
せき　勘六どん、おかたじけよ。
　　ト始終唄にて、與五郎先にお關、出て
　　そんなら、もう行かしやんすかえ。
與五　必らず共に一腰の

せき　そりや合點で居るわいなア。

ト兩方行合ふはずみに與次兵衞を見て

オヽ、父さん、お前

與次　オヽ、お關か。おれもちつと此方の方へ用があつて

與五　コレ〳〵、お關、そんならこの仁が、今話しの親、山崎與次兵衞どのか。

せき　アイ、今のこれが父さんでござんす。よい折からぢや。ちよつと近付きになつて下さんせ。

與五　そりや近付きにならいでヮ。云はばおれが爲にも舅。これは〳〵、私しは長五郎と申しまして

ト挨拶する。與次兵衞、不思議の思ひ入れ。

せき　アヽモシ、主は聾でござんすわいな。

與五　ホウ、それは。

せき　さうして我が手に與五郎といふ名を、取違へて長五郎と。

與五　イヤ〳〵、一腰詮議仕出さぬうちは、侍ひの名を名乘るも如何と、それゆゑ長五郎と、

せき　オヽ、さうでござんしたか。

ト與次兵衞に向ひ

モシ、主がな。

ト大きな聲して、わたしが約束の男と、與五郎へ指さして、また指を三本並べて

長五郎ぢやわいな。

ト大きな聲して云ふ。與次兵衞合點して

與次　何か、そんならアノ、わが身の約束してある、長五郎どのとか。

せき　アイ、さうでござんす。

ト頷づく。

與次　これは〱。

ト思ひ入れ。與五郎こなしあつて

與五　イヤモウ、思ひがけない所で、お目にかゝりました。私しが即ち關が夫。不思議な事ながら、お關がお世話にあづかりまして

せき　モシ〱、何云うても父さんは圓通寺。

與五　ほんにさうであつたか、さうなら、ちよつと書き付けて

與次　アヽコレ、聟どの、わしは聾ゆゑ、云ふ事を書いて見せる氣であらうが、それも無筆で讀む事な

らず、その代り、首の動く様子で、大概の事は承知してゐます。イヤモウ、どこにどんな縁があらうやら、商賣の渡し守、旅人を乘せ、向うの岸へ皆上がつた舟の內、足の痛みに一足も、引くに引かれぬ女中、氣の毒なと、わしが內へ泊め置いて、いろ〳〵養生加へ、樣子を聞けば、男の行くへを尋ねるとあるに、壹人旅よりは京大坂、二道かけたこの山崎、爰にゐたなら、兎もあれと、足の痛みに一日々々と、いつとなく、ツイ父さん、娘よと暮らすうち、一年餘り。去年わしが大病の後、斯う〳〵せうと仲居の相談。イヤ〳〵、そんな奉公さしては、約束の男へ聞えなば、おれが立たぬと留めても諾かず、この假宅へ貰ぎの爲め、今では濡髮のお關。こなたの前も何とやら、長五郞どの、腹立てゝやつて下さるな。

與五　イヤ、その話しはお關より

ト大きな聲して

なに云ひ譯に及びませう。先づは段々

ト云ひながら辭儀する。

せき　そして、何の用でござんしたえ。

與次　おれか。おりや吾妻どのといふ女郞と、深いとやら淺いとやら、噂のある與五郞さまに、ちつと

内内で話しがあつてな。

せき　ムウ、與五郎さんにお話しとは、親御の親類衆に頼まれ、廓通ひの意見に父さんを、

與五　大方そんな事であらう。意見は兎角年寄りの役。併し、色に凝つては、人の意見も聞かぬものぢや。

せき　お前も色にかゝつて、ひよんな氣になつて下さんすなえ。

與五　馬鹿な事を。色どころか。そんならおれは、爰からもう

せき　ござんすかえ、

ト與五郎、與次兵衞に向つて

與五　私しは直ぐに參ります。これが事、お頼み申します。

與次　ハヽヽ。何か、又どこへぞござるのか。

與五　左樣でござります。

與次　なぜ。もう行かいで、一緒に居たら。

せき　それもちつと。

與次　オヽ、さういふ事なら、早う其うち。コレ、熱からうが三里の灸を。イヤ、熱いと云や、お關、

草臥れの退くやうに、洗湯へ行つたら。

せき　モシ、そんならわたしが

ト内へ指差して見せる。

與次　ムウ、据ゑ風呂へ入れてくれるか。

與五　ほんに、思ひがけない與次兵衞どの、隨分お達者で……其方も無事で、彼の一品を

せき　それに油斷はせぬわいな。

ト與次兵衞。與五郎に向つて

與次　そんなら長五郎どの。サア、お關。

せき　與五郎さん。便り聞かせて下さんせ。

ト唄になり、お關、與五郎へ心を殘し、與次兵衞を連れて、暖簾の内へ入る。與五郎殘つて思ひ入れ。

かすめて時の鐘。

與五　計らず緣は結べども、尋ねる品のその爲に、直ぐに別るゝ夫婦仲。誠を盡してあの如く、あられぬ姿も與五郎ゆゑ。これにつけてもいま一人。……イカサマ、世の中かえ。

ト思ひ入れ。この時、下座より、傳藏に以前の地廻りの若い者四人附き出て、與五郎を見付け、四人

は有りあふ縫ひぐるみを持つて、傳藏は頬かむりをして

傳藏　うぬ、與五郎め。

ト打つてかゝる。與五郎、立廻つて

與五　こりや理不盡な。何とする。

若一　オヽ、吾妻が深間の與五郎ゆゑ、そこでおいらが

與五　待て。ナニ、吾妻の深間とは。

傳藏　やかましいわえ。ぶち殺せ。

トまた打つてかゝる。これに構はず双盤の鳴り物になり、與五郎、いろ／＼タテあつて、よき程に暖簾口よりお虎、青傘を提げ、捨ぜりふにて出て來る。間違ひにてお虎へかゝる。お虎、驚ろきながら立廻り。與五郎は四人を追ひ廻し、四人は逃げて入る。兩人、思ひ入れ。

とら　モシ、どこもお怪我は。

與五　イヤモウ、女中には

トこの時傳藏、後より打つてかゝる。與五郎、身をかはし、お虎取つて投げ、傘で押へる。

無法者には。

とら　爰構はずと

ト傳藏刎れ起き、お虎を引退け、與五郎に又かゝる。與五郎、ポンと投げる。傳藏、倒れる。

兩人　サア、御一緒に參りませう。

ト清搔になり、兩人よろしく向うへ入る。道具廻る。

本舞臺、三間の間、正面、見通し、團子提灯を下げ、上下障子にて、上の方へ寄せ。蚊帳を釣り、屏風を立て廻し、下の方に、八間を下げ、花道へ梯子の欄干を出す。すべて假宅の二階、この道具、誂らへ。爰に、吾妻、お虎が持つて來た文を持つて立ち身。米屋與五郎、吾妻が裾を踏まへ、この文の端を讀んで居る見得。清搔にて道具納まる。

米與「くれ〴〵も息災に、一日も早う年の明くるを指折り暮らし參らせ候ふ、めでたくかしこ。吾妻とのへ、まゐる、橋本母より。」

吾妻　それが外の可愛い人から、來た文でござんすかえ。

米與　サア。

ト氣の毒なるこなし。吾妻、胸づくしを取つて

吾妻　あんまりぢやわいなア、與五郎さん。わたしが氣を知らぬかなんぞのやうに、外に可愛い人があらうと、マア、憎らしい、どの口で云はしやんした。先刻お虎が持つて來た、母さんのこの文でも、お前は腹立たしやんすかえ。

米與　コレ〳〵、あやまつた〳〵。あの鄉左衛門が身請けするの、イヤ手附けを渡したのと、腹の立つ事ばつかり。そこへチラリと見附けた文、それゆゑ思はぬ廻り氣も、みんな其方が可愛いゆゑ。コレ、堪忍ぢや〳〵。

吾妻　そんなら、わたしが事を思うて。

米與　知れた事いの。

吾妻　そんならわたしや、嬉しいわいな。

ト抱き付く。この時奥より

市　なにサ、どこへも行きはしないよ。

米與　ありや、慥か下駄の市。

ト吾妻、文を懐へ隠し、與五郎を屏風の蔭へ忍ばせ置く。市、出て來る。此うち清掻。

市　吾妻さん、爰にかえ。いつも御盛んだね。

吾妻　オヽ、市さん。ようマアお前。併し、花里さんが病氣でさやうサ。

市　さやうサ。又、唐茄か薩摩芋を、食傷でござりやせう。

吾妻　アレ、可哀さうに。

市　時に、花魁、與五郎さんは見えずかえ。

吾妻　アイ。イヽエ。

市　ハテナア。昨日出たまゝゆゑ、内ぢや大抵。モシ、聞きなさい。あの親御は、丸山仁右衛門どのといつて、元は柴田の家中で歴々、今度歸參の願ひが叶つて、明日はお國へめでたうお立ち。

吾妻　エ。

市　そこへいつて與五郎さんが、お立ちの間に合はないと忽ち勘當。わつちやア今朝からと云つたところが、ござらにや始まらない。今にも爰へ

ト屏風へ立ちかゝる。

吾妻　ア、モシ

ト入れ替つて隔てる。

市　サア、ござつたなら、どうぞお前、早く歸してくんなさい。二才野郎の分際でと、定めし思ひな

さらうが、わつちも元は與五郎さまに。

足鹿　市さん〳〵、どこにゐなんす。

市　エヽ、いま〳〵しい。モシ、花魁、必らず惡く思ひなんすな。

足鹿　市さん〳〵

市　エヽ、やかましい。モシ、お賴み申しましたぞえ。

ト唄になり、市、屛風へ、思ひ入れあつて奧へ入る。ト直ぐに與五郎、屛風より駈け出して來る。

吾妻　與五郎さん。

米與　そんなら、いよ〳〵明日は越路へ。

吾妻　わたしは任せぬ身請けの沙汰。

米與　その上、人を殺めしこの身。

吾妻　とてもこの世で添はれぬなら

米與　いつそ未來で、ちつとも早う。

吾妻　お前も

米與　其方も

吾妻　二人もろとも。

ト兩人思ひ入れ。

二人　ちつとも早う、この間に

ト鏡臺の抽出しより剃刀を取出して

南無阿彌陀佛。

ト吾妻を引寄せ、咽喉を突かうとする時、奥よりお關、駈け出て

せき　ヤレ、待たしやんせ。

兩人　いや／＼、放して

ト三人にて剃刀を取合ひ、お關、挽取つて

せき　コレ、死んで花實が咲くかいなア。

吾妻　ぢやというて、鄕左衛門が

せき　サア、その身請けぢやとて、今が今請け出すといふでもなし、やう／＼手附けの渡つたばかり。まだいつぢややら、後金の片付かぬ先に、早まつて死んで、添へるやら添へぬやら、知れぬ未來へ急ぐとは、どうしたものでござんす。

吾妻　サア。
せき　一寸延れば時とやら、思案あるまいものでもないわいなア。早まらずと、待たしやんせ。
　　ト剃刀を鏡臺の上へ置く。
米員　イヤ、そればかりでなく與五郎は、人を殺めた科あれば。
せき　エヽ。そりや又どうして。いつの間に。
米員　サア、今朝歸りも、東雲の、まだ仄暗き別れ道、跡より仕掛ける惡者づくり、無理な喧嘩の手の廻り、時のはずみに脾腹の深手。南無三寶と思へども、詮方なさに一抉り、聲立てさじと誤まつて、左の小指を此やうに。
　　ト指を出して見せる。
せき　エヽ。
吾妻　それぢやによつて、與五郎さんは人殺し、どうで命のない事なら、二人一緒に死ぬ覺悟。
　　トまた自害せうとするを、お關、留める。この時、吾妻の懐より以前の文、落ちる。
せき　待たしやんせ。そりや尤もぢやが、與五郎さんの人を殺めたその事は、まだ沙汰ないのみか、誰れも知らねば、これとても、我が手に命棄てうより、きつと小指の詮議から、パッと噂のあるま

でも、知らぬ顏して、マア〳〵、長らへるのがよいぢやないかいな。

米與　すりや、二人とも此まゝに。

ト お關、此うち落ちた以前の文へ目付けて、ざつと讀んで

せき　ヤ、この手はどうやら。

吾妻　オヽ、そりやわたしが

せき　吾妻どのへ參る、橋本母。そんならもしや

吾妻　エ。

せき　吾妻さん、こりやお前の母さんのお手かえ。

吾妻　アイナア。

ト お關、氣を替へ

せき　でも見事に書かしやんすなア。モシ、吾妻さん、アノ、お前は橋本かえ。

吾妻　アイ、これまでお前に話しもせねど、マア、わたしが因果な事。アノ父さんは、橋本次部右衛門さまといふ鄕士。七ツの時、慥か今月、八幡祭の見物に、乳母と行く道で勾引され、それより、この藤屋へ賣られての後、行くへは知れても、勾引かした惡者は駈落ちゆゑ、取戻すには大金を立

てねばならず。仕方なう、それなり爰に勤めるうち、父さんはお果てなされて、一人残つた母さんから、コレ、此やうにくれ〴〵も、年の明くるを指折つて、待つてゐるとの先刻のお文。

せき　オヽ、すりや、いよ〳〵橋本次部右衛門さまの、アノお前が

米與　しかも小さい時の名は、お照というたぢやないか。

吾妻　アイ。

せき　そんなら違はぬ。イエサ、違はぬ辛さは何物より、浮き川竹の勤めの身。

吾妻　早う年季の明くるのを、待つてござんす母さんへ、不孝と知りつゝ死ぬる氣も、好かぬお人の身請けが嫌さ。

トお關、キツとなつて

せき　イエ、そりやわたしが受合うた。

米與　なんとえ。

せき　サア、平岡さんの方へは遣らぬ、よい思案がある程に、マア、お二人とも、そんなに苦勞にせず

とその床で

兩人　どうしてこれが

せき　ハテ、わたしに任せてしつぽりと、よい夢なと見やしやんせいなア。

ト二人を無理に屏風の中へ入れ、思ひ入れあつて文を出し

見覺えのある伯母さんの、手跡に知れし吾妻さん、繫かる緣も迂濶には、云はれぬ誠の父さんは、サア、それと明かさず身請けの事、受合うたのも伯母さんに、どうぞ歎きをかけまいと、手付けといふも百兩の、金は先刻の話しが手がゝり。肌は觸れずと、男のある身で。アヽ、まゝよ。これも浮世の

トこの時奧にてバタ〳〵。お關、文を懷中して

ドレ、相談して見ようか。

ト唄になり、ツイと下座へ入る、ト引違へて淨閑、逃げて出る。足鹿野、追駈け出る。後より外山、綾衣、染の井、初舟、出て

女皆　捕まへなんし。

足鹿　逃げずと、此方へござんせ。

ト皆々、追ひ廻し、淨閑を捕まへる。

淨閑　夢になれ〳〵。

ト下座より勘兵衞お爪出て來て

つめ　大分二階が騷がしいが、何事でござんす。
勘兵　どうしたのだ〳〵。
足庇　お聞きなさんせ。先刻からわつちやア、癪が痛いと云つたら、おれが針を打つてやらうと
勘兵　それからどうした。
外山　マア、聞かしやんせいな。
足庇　アイ、わつちを捕へて下ッ腹へ
勘爪　ヤア。
足庇　素敵に太い大針を、この醫者づらが打ちやした。
勘兵　そりやマア、とんだ事を。
足庇　わつちやア痛くつて〳〵

ト泣く。

勘兵　さうだらう、この醫者どのゝ針では。
つめ　その癖、この子の客人でもなし、どなたのお客ぢやえ。

初舟　アイ、わつちの客人ぢやが、ほんにマア外聞の悪い。そしてマア、まじ〳〵した顔、見やしやんせ。

外山　見れば見る程、馬鹿らしい顔つき。こんないたづらをする客は、見せしめに縛つて、晒して置くがようござんす。

綾衣　桐島といふ役者に、よう似てゐるぞえ。

つめ　マア、早く茶屋を呼びにやつて掛合はにやなりやせん。

染の　茶屋は井筒屋、慥かお關さんが、下に旦那と。

勘兵　ア丶、コレ〳〵、何もこれが足鹿野さんが、針を打たれて死んだといふ事でもなし、茶屋を呼ぶの晒すのと云はずと、どうぞ此まゝ穩便に。

淨閑　それ〳〵、愚老がフトした出來心で、相方でもない女郎衆に、針を打つたは言語道斷、不埒の至り。どうぞ婦人方、料簡のほど頼み存ずる。

つめ　イエ〳〵、さうはなりやせぬ。茶屋へ屆けて晒し物か。

勘兵　サア〳〵、そこに一つのおれが料簡。女郎衆の掟も立て、醫者どのも無事で濟むやう、あの撫附けを剃り落し、元服させて眞ツ裸、その衣類を足鹿野の、養生代にしてこの場を

つめ　成る程、そりやよいわいな。皆さん、どうでござんす。

女皆　それなら堪忍しやせうわいな。

ト浄閑、此うち膽を潰し

浄閑　ア丶、コレ〳〵、勘兵衛どの、いかにそれが料簡とて、この撫附けを、どうしてマア。

勘兵　ムウ、そんなら晒されて恥かく氣か。

浄閑　全くさうでなけれど。

つめ　撫附け剃つて裸になるか。

浄閑　サア、それは。

三人　サア〳〵〳〵。

つめ　どうぢやぞいな。

浄閑　あやまりました。

勘兵　そんなら撫附けを剃つてくれろとか。

ト浄閑、思ひ入れ。

浄閑　アイ。

ト泣く。

皆々　あの顔わいな。

つめ　ドレ、水持つて來て進ぜうか。

ト勘兵衛、剃刀を合せて、いろ〳〵あつて、お爪、半挿へ水を持つて來て、サア揉めといふ思ひ入れ。淨閑、不精々々に頭を揉む。勘兵衛、無暗に剃り、淨閑、痛むこなし。女形、煙草のみながら囁く。勘兵衛、淨閑の頭を奴にし、剃り落すはずみに、鼻柱を切ると、淨閑、「アツ」と鼻を抑へる。

勘兵　ホイ、ツイ手が辷つて鼻柱を

つめ　幸ひ血止めの硯の墨。

ト鏡臺の抽出しより硯を出し、淨閑が鼻へ付けてやる。

勘兵　サアよし。

つめ　女郎さん方、どんなものでござんすえ。

皆々　こりやよいわいな。

淨閑　一口ものに法螺ではない、鼻先まで此やうに、イヤ、むごい目にあふ事ぢや。

ト頭を撫でて思ひ入れ。

つめ　むごい次手に、サア、脱がんせ。
淨閑　でも、着物は御用ぢやに。
勘兵　約束なればせう事なし。
皆々　サア、脱がんせ／＼。
ト皆々、淨閑の着物を脱がせる。勘兵衞、櫺子の花活けにある萩をとつて
勘兵　これを擔いでござるがよい。
淨閑　オヽ、擔がう／＼。
トこれを擔いで
其方は藤屋の遣り手ぢやの。此方は勘兵衞、此方は勘辨、二つ合せて、カン／＼三つ口、後のがんが先へ行つたら笄とらしよ。
勘兵　エヽ、よい形ぢや。併し、そんな形ぢや犬が吠えると惡い。わしが道まで送つて進ぜう。
淨閑　そりや忝ない。サア／＼、行かう／＼。
トかけりになり、淨閑、狂人の思ひ入れにて、萩の枝にて勘兵衞を打つ。勘兵衞、驚ろき、淨閑、笑ひながら

淨閑　淨閑太郎勘兵衞や。オヽ、勘兵衞や淨閑どのは

ト兩人、よろしくあつて向うへ入る。

皆々　ほんに、をかしかつたわいな。

トバタ〳〵にて傳藏、走り出る。上よりは鄕左衞門出る。

傳藏　お旦那これにか。モシ、仰せの通り計らつて

鄕左　アヽ、コリヤ〳〵。……傳藏、それは宿より

かの用事か。サア、さうで。ト云うては早いと、いろ〳〵こなし。傳藏「ヘイ〳〵」と合點のこなし

鄕左　お爪、宿より密かの用事あれば。

つめ　ハイ〳〵、皆さん、なんと奥で、むべ山でも取らうぢやないかえ。

初舟　奥の見通しがようござんせう。

外山　わたしらも、新さんのござんすまで付合はう。

綾衣　丁度今宵は待ち人が、來るか來ぬかを辻占に

足鹿　待つとしきかば、今歸つた醫者づらめ。

つめ　サア〳〵、そんな事は、あちらへ行つて

皆々　サア、行かうわいな。

ト清搔になり、皆々下座へ入る。

鄕左　して〳〵、傳藏、どう致した。

傳藏　サア、地廻りめらにも呑み込ませ、尋ぬるところに與五郎め、爰でこそと存じて有無を云はせず一度にドッサリ後から

鄕左　騙すに手なし、出かした〳〵。

傳藏　併し流石は勝鹿與五郎。

鄕左　ヤ。

傳藏　拔けつ、潜りつ手練の達者。

鄕左　待て〳〵〳〵。すりや、其方は郡の家中、勝鹿與五郎を

傳藏　左やう〳〵、五人びつしより、汗みづく。

鄕左　して、ぶッ〆めたか。

傳藏　イエ〳〵、たうとう彼奴に、ぶッ〆められ、拙者當身に度を失ひ、やう〳〵只今氣が付いて、この事お知らせ申さうと、わざ〳〵二階まで。

郷左　たわけ面め。
ト傳藏、悄りする。
傳藏　ヘイ、さうして外にも與五郎が。
身共が申し付けたは、勝鹿與五郎でないわえ。
郷左　ある段ではない、若衆の與五郎。
傳藏　私しは又、勝鹿與五郎とばかり思うて。
ト呆氣に取られし思ひ入れ、
郷左　エヽ、埒もない事。それにつけても彼の吾妻、最前から、影も見せぬが、ムウ、物臭いこの屛風の内。もしや吾妻が
トつか〳〵と行き、屛風を明けようとする時、吾妻出て
吾妻　エヽ、何ぢやいな、平岡さん。お前ばつかり面白さうに酒飮んで、人にはねつから構ひもせいで、爰にわたしや先刻にから、淋しく寢てゐたわいな。
ト下に居る。
郷左　コレ〳〵、大分いつもより調子が違つた、うまい挨拶。おぬしもこりや、どうぞしたのか。

吾妻　どうするもので。女郎といふものは、嫌な客でも、向うに實さへござんすりや、ついした事から

いとしうなつて。

郷左　ヤア、そりや吾妻、ほんの事か。

吾妻　なんの嘘に、いとしうなられやうかいなア。

傳藏　旦那、ちつとの間に、剛勢な色事師にならしつた。

郷左　サア、身共も何だか氣味が惡い。サア、それがほんなら、あの床で

ト手を取る。

吾妻　アヽ、滅相な。どうしてあそこへ。

郷左　なぜ〳〵。

吾妻　サア、ありや本床でもないもせぬものを。

郷左　イヤ、斷うなつては、床の差別があるものか。

傳藏　髮結ひ床でも、こりや大事ござりますまい。

吾妻　それでもあそこは、

郷左　ハテ、ちよつと來やれな。

ト無理に手を取つて引立てる。吾妻思ひ入れ。

せき　吾妻さん、必らず油斷なされますなえ。

ト唄になり、下座よりお關出る。

鄕左　ヤイ〳〵、お關、なんで必らず油斷するなと

せき　吾妻さん、鄕左衞門さんがいとしうならしやんしたら、これで深い與五郞さんと、定めて切れおばなるまいぞえ。サア、その時この平岡さんが、今まで云はしやんした事がみんな嘘なら、お前マア、新町で行き立つまいぞえ。

ト吾妻、思ひ入れ。

鄕左　コレ〳〵、嘘に身請けがなるものか。よく〳〵吾妻を思へばこそ、百兩渡した手付けの證文。

ト懷より出して見せる。

傳藏　これでも旦那を疑ふか。

せき　なんの、いくらも持つておいでの金、たとへ百兩出したとて、心の誠が知れやうかいな。ナア、吾妻さん。

鄕左　そんなら吾妻、どうしたら誠が知れて、寢てくれるか。

吾妻　エヽモウ、わたしやそんな事

せき　アヽ、これはしたり、其やうにひぞらずと、斯う〳〵して下さんしたらと、お前の心にある事を。ナア、平岡さん。

郷左　それ〳〵、云うてくれねば氣が濟まぬ。

傳藏　何なりと、望みなさい〳〵。

吾妻　なんのそれをば

せき　サヽ、云はしやんせぬは、心が解けぬかえ。そんなら起請や彫り物より、いつそ心中に指切らしやんしたらなら

郷左　ヤ。

トぎよつとする。

吾妻　モシ、滅相な、そんな事して

ト思ひ入れ。

せき　エヽ、さりとは合點の悪い。ソレ、ひよつと可愛い人の、サア、可愛い人が指切つて下さんしたら、お前、マア、嬉しうござんせぬかえ。

トいろ〳〵思ひ入れ。吾妻、呑み込んで

吾妻 ほんに、さうぢやわいな。平岡さん、わたしの可愛いが定ならば、指切つて下さんせ。

せき こりやさうでござんす。

鄕左 コレ〳〵、側からとんだ事を。吾妻、指は免してくりや。指の代りに心中に、此奴が首を切つてやらう。

ト傳藏、悔りして

傳藏 アヽ、モシ〳〵、滅相な。なんぼ家來の首だといつて

せき 吾妻さん、こりやモウ、心中に指切らしやんせぬ位の、誠が無い、平岡さん、寢る事はマア、止めになさんせいなア。

鄕左 これサ〳〵、ナニ切るまいと云ふものか。可愛い吾妻がお望みなら、サヽ、一本なりと二本なりと。

吾妻 アノ、切つて下さんすかえ。

鄕左 やらないでどうするものだ。

傳藏 やれ〳〵、首は助かつた。

せき　そんなら御意の變らぬうち、わたしが切つて上げませうわいな。

ト鏡臺の剃刀を取出す。

郷左　これは又忙しない。

吾妻　それでも早う心中が

ト郷左衛門が手を取る。

傳藏　あなたも武士ぢやござりませぬか。

郷左　エヽ、是非がない。

トもぢ〳〵する。

せき　ほんに卑怯な。

ト吾妻、郷左衛門の手を押へ、枕の上に載せる。傳藏も共々押へる。お關、剃刀をあてて、思ひ入れあつてポンと切る。アツと倒れる。

傳藏　オヽ、指がどこへか飛んでしまつた。

ト方々探す。

せき　ソレ、血が其やうに

ト郷左衞門が出したる手附けの證文を引裂き、血を拭いてやる。郷左衞門、フツとこれを見付け

郷左　ヤヽヽ、こりやアノ手附けの證文を

せき　ほんに粗相な。

吾妻　これでわたしも嬉しいわいな。

　ト思ひ入れ。

郷左　サア、嬉しくば身共にも、床で存分嬉しがらせて

　ト手を取る。

吾妻　サア、そりやナア

郷左　サア、とはどうだ。

傳藏　望みの事をさせて置いて、今となつて

郷左　何をウヂ〳〵

せき　イエ、さうぢやなけれど、まだちつとな

郷左　何をお身まで。アヽ、聞えた。こりや二人して身共を嘲弄いたすのか。但しは床に與五郎が

吾妻　イエ〳〵、どうして

ト この間お關、構はずに煙草のんで居る、

傳藏　こりやアお旦那、てつきりさうかも知れませぬ。

鄕左　とくと詮議を致さにやならぬ。

ト 行かうとするを吾妻留めて

吾妻　ア丶モシ、アレ、お關さん

ト 留めるを突きのけ、傳藏抑へ、鄕左衞門、屛風を明けて

鄕左　さてこそ與左郞、うしやアがれ。

ト 寢てゐるのを引摺り起し連れて出る。吾妻、思ひ入れ。寢て居たるは與次兵衞。

せき　モシ、それがアノ與左郞さんかえ。

ト 鄕左衞門、傳藏、見て悔りし

鄕左　ヤ丶丶、ほんにこりや、とんだ茶釜が

傳藏　藥罐親仁となつた。

ト 吾妻、思ひ入れ。與次兵衞、キヨロ〳〵と見廻し

與次　こりや何だやナ。三里餘の道歩いて、草臥れて寢てゐるどうぶくら、無性に引摺り起し、爰まで引

出して、この親仁に、何の用ぢや。サヽ、何でごんす。

ト郷左衛門傳藏、顔見合せて思ひ入れ。

郷左　コレ〳〵、老人、全くこれは人違ひ。熟睡の最中、引起したは我れらが粗忽、料簡にあづかりたい。

傳藏　それ〳〵、貴樣と知つたら何のつき。こりやァほんの間違ひだ。不肖さつしやい〳〵。

與次　この衆達は、何か云はつしやるが、わしが耳へは一言も。サア、用があるなら、キリ〳〵と解るやうに云はつしやれ。イケ馬鹿々々しい。

郷左　イヤサ、用とては何もない。與五郎めがと思うたゆゑの事ぢや程に、この體裁。

せき　親仁どの、料簡さつしやい。

兩人　賴む〳〵。

せき　お前方が其やうに、なんぼ詫びなされても、こりや聞くことぢやござんすまい。

兩人　なぜ〳〵。

せき　ハテ、ぬしは聾ぢやわいな。

郷左　イヤ、それでは聞分けぬ筈ぢや。

傳藏　石佛に耳擦りも同然でござります。
吾妻　ほんに思ひがけない……間違ひで困らしやんすが、氣の毒ぢやわいな。
鄕左　これも皆おのれゆゑ。思へば〳〵。
與次　サア、どうぢや。何にも用もないのに引起し、こりや、人を弄るのか。年は寄つても、馬鹿にされる親仁ぢやない。この通り、所の地頭へ屆けて、譯付けてもらはにや蟲が濟まぬ。さう思うて居れ。ドレ
ト立つて行かうとするを
兩人　アヽ、これサ〳〵
ト押留める。
與次　エヽ、おきやアがれ。
ト莨盆にて鄕左衞門が頭をくらはす。「コレ」と寄る傳藏をもくらはして立ち上がる。お關　吾妻、兩人の足を取つて後へ引き倒す。皆々立廻り。この時、庄八、先へ、官藏、代官の形にて、黑羽織の捕り手二人附添ひ出て
庄八　モシ〳〵、お鎭まりなされませ。お役人樣だ〳〵。

捕手　ヤイ〳〵、下に居らぬか〳〵。
郷左　庄八、こりや何事だ。
庄八　ハイ、人殺しの御詮議でござりまする。
官藏　若イ者、これに居るは皆客どもか。
庄八　左樣でござります。
官藏　今朝明け方、當所乳守の出外れ、藪際の別れ道に於て、人を殺め、立退きし曲者。いろ〳〵吟味いたすところ、全くこの所へ入込む客どもの仕業。客の買ひ論の意趣切りならんと、それゆゑ遊女屋に罷りある客どもを、一々に詮議。尤も死骸の口の内、指を食ひ切り、含み居れば、指の無い者こそ卽ち相手。サア、それへ出て改めさせい。
　ト此うちお關、吾妻、思ひ入れ。
郷左　ムウ、道理で彼奴が今以つて、……今以つてそんな事が
　ト思ひ入れ。與次兵衞、一向合點の行かぬこなし。
與次　モシ、お役人樣、よい折にお出でなされました。この衆達は
せき　アヽモシ

ト お關、袖を取る。これにて扣へる。

庄八　サア、上にお立ちなさる平岡さまから、順にお手を出して、申し開きなされませ。

鄕左　ヤ、ヽヽ。

傳藏　モシ、旦那、こりやどうやら

官藏　愚圖々々いたすは、どうやら怪しいわえ。ソレ、家來ども、引ッ捕へて改めい。

庄八　サア、早くお見せなされませ。

捕手　ハツ。キリ〳〵と改めさせい。

ト 云ひながら、兩人立つて、鄕左衞門を捕へ、兩手を引出して

捕手　さてこそ左の小指が切れたるは、人殺しに違ひない。

鄕左　ア、コレ〳〵、これにはちつと

ト 兩人を見るはずみに、袂より血を拭きし證文出る。官藏、取つて見て

官藏　血汐の附きしこの反古は、刃物の血を拭ひし物。ソレ、繩かけい。

捕手　ハツ。捕つた。

ト かゝるを鄕左衞門、とめて

郷左　イヤ、待つた、お侍ひ。身共、決して覺えはない。この指はたつた今、これなる吾妻へ心中に。面目次第もござらぬ。

官藏　然らば心中に切つたるその指、それにあらばこれへ出せ。

傳藏　イエ、その指は切つたはずみに、どこへか飛んで搔暮れに

官藏　ヤア、脇から差出て。扣へて居らう。

庄八　默つてゐなさい。

郷左　コレ〳〵、吾妻もお關も、默つてゐずと、爰へ出て、云ひ譯をしてくれないか〳〵。

吾妻　サア、云ひ譯をしてあげたうて〳〵ならぬけれど。

せき　それ〳〵、お役人樣の前では、怖うて〳〵

兩人　一向、物が云はれぬわいな。

郷左　エヽ、うぬらは、こりや一ぱい

官藏　イヤ、相方の女郎は女房同然、緣者の證據は役に立たぬ。申し開きの筋あらば、屋敷へ參つて云ひ譯おしやれ。

郷左　それは、どこまでも參つて云ひ譯するが、併し、身共は武士でござる。繩の儀は

捕手　イカサマ、その儀は宥免いたして遣はす。

郷左　エヽ、よくも二人して郷左衛門を。傳藏、われは後に殘つて、あの吾妻を。合點か。

ト顎で呑み込ませる。

傳藏　承知いたした。そんなら旦那は

郷左　これがほんの、珍事ちうやう。

庄八　テンツヽトンノ〵。

ト手拍子にて踊る。

傳藏　おきやァがれ。

捕手　イザ、立ちめされ。

郷左　二人とも、覺えてうせろ。

ト唄になり、郷左衛門を中に挾み、跡より官藏、庄八、梯子へ下りる。傳藏は下座へ入る。此うち與次兵衞、膽を潰してゐる。お關吾妻、ホッと思ひ入れ。

與次　娘、ありや、どうしたのだ。

せき　これでマァ、與五郎さんのお身に恙も

吾妻　嬉しうごさんす。そしてアノ、屛風の內、思ひがけない此お方、誰れがどうして與五郎さんと
與次　コレ、娘、われが折角あの床へ、寢かしてくれたら今の奴めが、とんだ目に合はせ居つた。
吾妻　そんなら矢ッ張り、お前の業か。
せき　平岡さんがもしやと思うて、こつそりと屛風の跡へ、父さんと與五郎さんを入れ替へて。
吾妻　すりや、此お方は、お前の父さん
せき　耳の遠いが睦まじい、話しの邪魔にならぬが一得。

ト云ひながら、下の障子の內より與五郎を連れ來る。

吾妻　オヽ、與五郎さん

ト駈けよる。

米與　もう出てもよいかいの。

ト與次兵衞、與五郎の顏をしげ〴〵と見る。

せき　小指の身替り、平岡さんを。これで身請けも人殺しも。
かん　モシ〴〵、お關さん、旦那がちよつと話し事で。
せき　アイ〴〵。モシ、父さん、ツイ來る程に。

ト大きな聲で云ひ

ト兩人へ思ひ入れ。

屛風の内で

兩人　エヽ。

せき　話しなさんせ。

ト　お關、こちら向き、につこり笑ふ。唄になり、奥へ入る。

與次　エヘン〱。時に、斯う見たところが、吾妻どのとやら、脇のお若衆樣、もしやお前が與五郎さまといふ、お方ではござりませぬか。

米與　ツイにこれまで逢つた事もないお人ぢやが、成る程、わしは與五郎と。

吾妻　それ〱、耳が遠いとお關さんが云はしやんしたぞえ。そんな事では聞えまい。

米與　ほんに、さういふ事であつたか。

與次　ヤレ〱、嬉しや、お前に逢はうばつかりに、わざ〱と年寄りの、こんな所まで尋ねて來ました。わしはアノお關が親の、與次兵衛といふ山崎の渡し守。マア〱、逢うて喜びます。

米與　どうも合點がゆかぬ。お關どのゝ親御には、いつぞ近付きでもないに。

吾妻　それにわざ／＼尋ねて來たとは、どんな事であつたぞいな。

ト此うち與次兵衞、屛風の內より風呂敷包みの箱を持つて來て

與次　イヤモウ、商賣の片手間で、お前を探す

ト風呂敷包みの箱を取出し

吾妻どの、與五郎さまと、繫がるこなさん、大事はなけれど、お關に隱してこなさんには、聞いては娘が前もある程に、ちつとの間、この座敷を

吾妻　與五郎さん、あのやうに云うてぢやが、何の事であらうか。

米與　ハテ、稀代な事。マア、行つた振りして、屛風の影へ。

吾妻　ほんに辛氣らしい。

ト合ひ方になり、吾妻、屛風の影へ入る。與次兵衞、與五郎の側へ來り

與次　お前は小さうて、何も聞かつしやるまいが、わしも元はお前のお國、備中、郡の御城下、相應に道具商賣して居たものを、ツイ惡い筋の道具を買うて、すんでの事に同類に落ちるところを、お前の親御、勝尾與六さまのお情にて

米與　アヽ、コレ／＼

ト手を振つて

わしは、そんな者では

與次　ハテ、云うても大事ござりませぬ。誰れも居らねば何の遠慮も。そこで命助かり、お國を追放。この山崎へ來ても、御恩は忘れず暮らすうち、聞けば郡の重寳、日本丸といふ一腰、紛失につきあなたには御浪人と、風の便り

トこれを聞くうち與五郎、思ひ入れ。

米與　これはしたり、そりや人違ひ。

ト舞臺へ指で書いて見せる。

與次　書かしつても、わしは一字もよう讀めぬ。それゆゑ筋なき道具を買ひ、難儀を助けられた親御の御恩返しに、浪々のお手助けと思へど、あなたのある所は知れず。ところにいつぞや渡し場で、旅人の來る間に轉寢の耳元へ、ぐわつたり物音、恟り飛び起き、あたりを見れば

ト箱より一腰を出すうち、與五郎、小聲になつて

米與　何かさつぱり、此方に覺えない事ばかりを。

與次　お國に居た時聞き及んだ、ソレ、日本丸はこの一腰。直ぐに舟を漕ぎ戻し、見れば違はぬ銘は國

行、目貫は金の龍の象眼。小柄は茶棒に小蝶の彫り。サア、これこそ御恩の送り所。早うお渡し申さうと、思うたばかり、お顔を知らねば、浪人の與五郎さまといふ名を便り、聾の耳にやうやうと聞き出した、あなたのお噂、新町の藤屋の吾妻と與五耶は、何とか聞いて參つた與次兵衞。

ト與五郎の前へ刀を置く。與五郎、いろ〳〵思ひ入れ。屏風の影より吾妻、立聞く。

米與 大方、こんな間違ひであらうと思へば。モシ、其方はさうであらうけれど、わしは丸山與五郎といふ者で。こんな事云うたところが、聾では云ひ譯の仕やうがない。マア、この日本丸とやら

ト與次兵衞の手へ戻す。

與次 ムウ、そんならわしが志しを無にして、アノ吾妻どのに現を拔かして、歸參さつしやる心は無いのか。

米與 これは又、困つたものだ。

ト顏を外ける。

與次 そりやこなさん、親御へ不孝だ。是非ともこれを差上げて、元の勝鹿與五郎さま。

トまた日本丸を與五郎へ突きやる。

米與 さりとは無理な事ばつかり。お關どのに解るやうに。

ト詮方なく立ち上がるを、與次兵衞、留めて

與次　待つた。さうはならぬ。否ともこの日本丸を

米與　ハテ、さうではござらぬ。

ト振り切る。この中へ吾妻、見かねて、ツカ〳〵出て

吾妻　モシ、お前の仰しやる、與五郎さまとは

與次　エヽ、こなたがなんの

ト引退けて、與五郎を捕へる。この時、下の障子内より市、出て

市　オヽ、與五郎さん、お前を大抵

ト與次兵衞を引退ける。

吾妻　イヤモウ、爰で

市　爰でおやない。アノ明日は親御の仁右衞門さまと共々、歸國といふ場になつて、ござらぬゆゑ、內は大亂。サア〳〵、早くお出でなされませ。

ト引ツ張る。此うち與次兵衞、一腰を箱へ入れ抱へる。吾妻、市を留める。

吾妻　そんならどうでも、與五郎さんは

與次　コレ、どこへ連れてござるのだ。

ト市を捕へる。

市　イヤ、こなたの云ふ事は

ト引退けて

サア、來なさい。

吾妻　マア、待つて

與次　イヽヤ、滅多に

ト留める。吾妻、市を突きのける。與次兵衞、ヨロ〳〵とする。吾妻、心遣ひ。これに構はず、與五郎を引立て、騷ぎ唄になり、梯子の下へ下りる。吾妻、癪の起りし思ひ入れ。與次兵衞、起きあがり

與次　なんでもあの與五郎どのに

ト一腰の箱を抱へ、同じく梯子を下りる。吾妻、苦しみながら跡を追はうとする。この時、下の障子を明けてお關、證文を持つて出る。

吾妻　オヽ、お關さん、アノ、與五郎さんをな。

せき　どうしたのぢやえ〳〵。

ト吾妻を介抱する。

吾妻 サア、お前の父さんが、日本丸とやらいふ脇差を持つてござんして

せき エヽ。

ト思ひ入れ。

吾妻 與五郎さんに何ぢややら云うて、お出での所へ、アノ下駄の市さんが見えて、與五郎さんを連れて行てぢやわいなア。

せき オヽ、そんなら日本丸な父さんが

吾妻 サア、それ持つて、與五郎さんの跡追うて

せき 譯は兎もあれ、父さんの跡慕うて、日本丸の

ト裾をからげる。

吾妻 モシ、お關さん

トお關、心附き

せき ソレ、お前の身請け證文。

ト投げてやる。チヨンと木の頭。吾妻、取上げる。

話しは後で。

ト云ひながら急いで梯子を下りる。吾妻、證文を開き見る。この模様、騷ぎ唄にて、ひやうし

幕

本舞臺、三間の間、正面、玉椿の垣根。うしろ黒幕、よき所に古井戸。下の方、床几二脚組み合せ、葭簀、莚など巻いて積み重ねし出茶屋。夜の景色。すべて堺、蛭子島の體。爰に與次兵衛、以前の箱を抱へ、こなたにお關、與次兵衛を引留むる見得。禪のツトメ、時の鐘にて幕明く。

せき　モシ、父さん、お前アノ日本丸を

與次　どうしたと。

せき　大きな聲して、誰れぞ聞いたら、父さんを盗賊の

ト思ひ入れあつて、脇差を差すこなしして

持つてござんすかえ。

ト與次兵衛、思ひ入れあつて

與次　イヤ〳〵、船頭のおれが、なんの脇差を

せき　それでもアノ、與五郎さんに
　　ト大きく云ふ。
與次　ヤア。
せき　ありや何でござんす。
與次　イヽヤ、おりや知らぬ。そりや聞き損なひであらう。お關、おりや氣の急く事があれば、其うち逢はう。
　　ト振り切り行かうとする。この時お關、箱を見付けて
せき　モシ、父さん、こりや何でござんすえ。
　　ト與次兵衞、愕りし
與次　こりやアノ、ソレ、内にあつた眞筆の曼陀羅、大阪の經師屋へ修覆を頼んで置いたゆゑ、今日幸ひと取つて來たのぢや。
せき　そんなら、ちよつと拜ませて
與次　ハテ、なんの珍らしさうに
　　ト見ようする。見せまいとする。はずみに箱を取落し、中より一腰落ちる。お關、取上げると與次兵

衞、留めて

娘、こりや何とする。

トお關、構はず、拵らへを、よく〳〵見て

せき　オヽ、聞きしに違はぬこの拵らへ。菜種に蝶の小柄まで

ト嬉しきこなし

父さん、こりや、どうぞわたしに

トくれいといふこなし。

與次　何ぢや、くれいとか。女のいらぬこの品を、追うて來てくれいと云ふには、何ぞ金でもいる事があつてであらうが、聞いてくれ。こりや只の脇差ではない。日本丸というて、大事の一腰。あの與五郎さまの親御には、助けられたこの與次兵衞。それで日本丸を與五郎さまへあげて、お國へ歸參させますが、ちつとは命の恩おくり。それゆゑ今日持つて來たけれど、郡さまよりこの一腰詮議嚴しいとやらいふ事ゆゑ、隱し〳〵て其方までに、隱したは惡かつた。譯のある事ぢやによつて、どうもこれは遣られぬ程に、こりや料簡してくれい。

せき　サア、そりやさうでもござんせうが、夫が詮議のその一腰、それゆゑ、いろ〳〵身を盡して、此や

うに。とこんな事云うても耳は聞えず、書いても無筆の事なれば。モシ、どうぞこれを下さんせ。

ト大きな聲にて云ふ。

與次　ハテ、聞分けの悪い。遣られる物なら遣らいでか。今云ふ通り、大恩ある勝鹿與六さまの若旦那、あの與五郎さまへ上げまして、御歸參させにやならぬゆゑ。

せき　アヽモシ、その勝鹿與五郎とは、わたしが夫、あの與五郎さまでござんす。

ト耳の側で大きな聲で云ふ。

與次　ナニ、勝鹿與五郎とは、其方が夫とは、あの先刻の男の事か。

せき　アイナア。

與次　ムウ、先刻逢つた時は長五郎と云うて、今また勝鹿與五郎とは。そちや親を騙して、この一腰をしてやらうでな。

せき　イヽエ、與五郎といふが誠の名。さう云ふが嘘なら、お前の手から

與次　イヽヤならぬ。あれ程知れてある與五郎さまのある上に、長五郎を與五郎と、間に合せの其方が詞。イヽヤ、その手は食ふまい。それより與五郎さまへ

ト行かうとする。お關、留めて

せき　イエ、そりやお前の料簡違ひ。
與次　エヽ、われがやうな情の強い者には構はぬ。そこ放さぬか。
せき　イエ、それでも大事の
與次　小癪な事を。そこ放し居れ。
せき　拜みます。

ト　お關、拜みながら片手に柄の方を持つて思ひ入れ。與次兵衞、鞘の方を持ち、「放せ〳〵」と引合ふはずみ、一腰すらりと拔き、與次兵衞、タヂ〳〵と倒れる。お關、引起さんとするはずみに、與次兵衞の脇腹を突く。與次兵衞、苦しむ。お關、愕りして

せき　ヤヽヽ、こりや父さんを

ト　引起す。與次兵衞、お關を引寄せ

與次　エヽ、うぬ。こりや親を殺すのぢやな。
せき　イエ〳〵、どうして。こりや怪我で

ト　思ひ入れ。與次兵衞、また引廻し

與次　うぬ、玆な罰當りめが。こんな心の奴とも知らず、どこの何とも知れもせぬ、風來女の一人旅、

足を損ねて難儀の上、路銀に盡きて飢死も、すべきおのれをいろ〳〵と、この與次兵衛が慈悲心で、藥よ水よと介抱の、うまい詞につけ入つて、いつとなく馴染んだ娘のお關。うぬが勝手でこの親を、だしに使つて仲居奉公。恩を忘れて大切な、與五郎さまへ上ぐる一腰、金にする氣か、長五郎を、出世させんと慾心からか。うぬはなア〳〵。よくもこんな目に會はせたな。

トさん〴〵に打擲する。

せき　なんの〳〵、さういふ心ぢやござんせぬ。お前の耳が遠いゆゑ、誠も嘘と心得て、爭ふはおみにこりや怪我で。と云うても矢ッ張り。エヽ、せう事がないわいなア。

與次　まだ〳〵淚を溢して騙さうでな。イケ太い女めだ。切られうが殺されうが、日本丸は與五郎さまへ。

トお關を突き放し、白刃を持つて行かうとする。

せき　コレモシ

ト留むるはずみに振り切る拍子に又、一太刀手を負はせる。この時、お關、懐より以前の文を落す。

與次　どうでもおのれは。

せき　勿體ない、假にも親を

ト思ひ入れ。

與次　うぬ、親殺しめ。アレ、親殺しだ〳〵、
　　ト聲を立てる。お關、驚ろき、與次兵衛の側へ行き、袖をあてゝあたりを見ながら、與次兵衛の體を
　見て
せき　所詮叶はぬこの深手。父さん、堪忍して下さんせ。
　　ト白刃を挘ぎ取り、どつと一かせ切り下げ、拜む。與次兵衛、倒れる。これより双盤の鳴り物。兩人、
　立廻り。與次兵衛、武者ぶりつくを切つて離す。「アツ」と與次兵衛、倒れる。
せき　どうした因果の事ぢやわいなア。
　　ト死骸に縋つて、泣き落す。この時、下座よりバタ〳〵。お關、ちやつと心付き、死骸へ莚を掛け、刀
　を納める。下座より吾妻、逃げて出て、お關に突き當る。お關、驚ろく。
吾妻　お關さんぢやござんせぬか。
せき　オヽ、吾妻さん、お前は爰へ
吾妻　サア、あの平岡の家來が、無理にわたしを盗み出し、連れて行くその道で、やう〳〵振り切り、
　爰まで遁がれて
せき　そりやよう遁がれて

傳藏　トこの時傳藏、窺ひながら出て來り
吾妻、うぬ、よく
ト捕へにかゝる。お關、隔てる。吾妻、逃げるを追ひ廻す。お關、いろ／＼に支へる。傳藏、吾妻を捕へかゝるを、お關、傳藏の足を掬うてポンと井戸へはめる。水音する。チョンと木の頭。吾妻、悧りして下にゐる。お關、一腰を抱へる。この途端に、拍子

幕

第二番目　二幕目

橋本の場
淀堤の場

役名――濡れ髮のお關實ハ光秀娘皐月。橋本後家、幻。橋本下女、お虎。醫者、山崎淨閑。供男芝助。惡者、佐渡七。若い者、次郎。同、九十。駕籠屋、唐人甚兵衞。同、太助。藤屋の吾妻。南方屋與兵衞。

本舞臺、三間の間、正面、緣側付き障子屋體、柴垣、萩紫苑藁鷄頭の盛り。引戸。門口の下の方、竹藪。二重舞臺にお虎、下女の形、前垂れがけ、大縞の浴衣を縫つて居る。佐渡七・やつし浴衣の形に

て行司をしてゐる。次郎、九十、裸にて角力を取り居る。すべて、橋本宿、次部右衛門宅。獅子の囃子、角力太鼓、在郷唄にて幕明く。

次郎　どつこい〳〵、さうは取らぬ〳〵

九十　ナニ、騙しは食はぬぞ。

佐渡　御所柿、油斷するな〳〵。どつこい〳〵。

ト澁團扇を持つて付けて廻る。此うち捨ぜりふにて揉んでゐる。

九十　ヨイヤサ。

ト次郎を投げる。

佐渡　イヨ〳〵、勝角力御所柿々々々。油斷する所を、エヽ、平蜘蛛めが、誠の平蜘蛛といふ態だ。

次郎　エヽ、いま〳〵しい。勝角力を、どうやらかうやら砂を摑むやつサ。

九十　どうで何番取つても、この位のものサ。

佐渡　イヤモウ、その巧者ぢやア、この八幡祭には、御所柿が大關だわえ。ハヽヽ。イヤ、大關といへば、爰の内に庭子同然なあのお虎は、竹右衛門というた、小角力も取つた者の娘。親の氣性を受け繼いでか、あゝ見えても力持ちだぞ。てまへ達は、油斷するな〳〵。

とら　コレ〳〵佐渡七さん、又そんな事を云つて、わたしを煽てるのかえ。成る程、わたしが親仁、竹右衛門といふたは、爰の旦那の御家來筋、それぢやによつて、後家御のあなた樣のお手助けと、居候ぶやら奉公やら、下女同然な此お虎、力のあるは親譲り、ぴたくさした事は、わつちやア、マア、さつぱり嫌ひサ。

九十　成る程、氣前といひちやア、男でも敵はぬよ。

次郎　コレ、お虎ぼう、そりやアてまへの浴衣か。

とら　アイ、今度の八幡祭に、若い衆の揃ひと同じやうと、夜なべに織つたこの大嶋。わつちやアこれを着て、神輿を擔ぐつもりサ。

佐渡　あれ聞いたか。なんと剛氣な氣前ぢやアないか。神輿を擔ぐよりか。若衆と角力を取りやア差詰めおれが取組む。コレ、どうだ、一番取組む氣はないか。畜生め、かう差組んで四つにわたつて

ト お虎が脇の下へ手を差込む。お虎、その手を締めあげる。

カウ、痛い〳〵。コレ、どうする。

とら　エヽ、よしねえな。女だと思つて、あんまり馬鹿にしなさるな。お前方の慰みにやア、ちつと強い女だよ。併し、お前も小角力も取る佐渡七さん、引ツ挟まれても、手が抜けるならば抜いて見

なさい。雷の鳴るまで、わつちやァ應へて辛抱するよ。

佐渡　アヽ、コレ〳〵、そいつは情ない。シタガ、女に腕を挾まれて、夕立のあるまで斯うしても居られまい。コレ、若い者ども、おれが帯に取りついて、引ツ張つてくれ〳〵。

兩人　オヽ、合點だ〳〵。

ト佐渡七が帯へ取りつき引ツ張る。

佐渡　ソレ、いゝか。一番木遣りで引ツ張るぞ。エヽヤリヨウ。

兩人　ヤレヤアイ。

ト屋體囃子になる。佐渡七の腰へ二人取りつき、腕を拔かうとするを、お虎、その手を挾んだまゝ、針仕事して居る見得。矢張り鳴り物。向うより淨閑、以前の醫者にて、日傘をさし、供男、薬箱擔ぎ來る、門口にて

供男　頼みませう〳〵。山崎淨閑お見舞ひ。

次郎　アレ〳〵、お醫者樣が來た〳〵。

淨閑　お許しなされ、さて嚴しい殘暑での。

とら　これは淨閑さま。サア〳〵、あれへお通りなされませ。

ト佐渡七が手を挾みしまゝにて、茛盆を持ち來て直す。佐渡七、同じやうに引ッ張られて歩く。

佐渡　アヽ、コレ、今度から惡さはしない。御免だ〳〵。

淨閑　コレ〳〵、お虎どの、今朝はお手紙でござつたゆゑ、早速參つたが、幻どのには、何とぞ致されたか。

とら　ハイ、お風氣でござりますゆゑ、お前樣へお文を遣はされましたのでござります。

淨閑　然らば、ちよつと見舞ひませう。

ト立たうとするを、

佐渡　アヽモシ、淨閑さま、わしが脉を見て下さりませ〳〵。

淨閑　こりやア佐渡七どのではござらぬか。なんだ、こなたは此お虎ぼうに、彼方へ引付き、此方へ引付き、それはマア、どういふ病氣ぢや。

佐渡　モシ〳〵、見さつしやる通り、ちよつとした惡戯から、此お虎ぼうが脇の下へ挾まれ、誠に手が捥げさうで、この女の手の切れまするやうに、モシ、療治はあるまいか、お頼み申します。

兩人　お醫者樣、お願ひ申します。

淨閑　これはしたり、この人とした事が、この力の強いお虎ぼうに、無駄を云つたは惡い。コレ、この

姐えが先祖は、誰れと思ふらん、四天王隨一の渡邊の綱。

兩人　エヽ、此お虎が。

淨閑　ハテ、綱なればこそ、鬼治の腕が捥げさうだと云ふワ。

兩人　何を云はつしやる。

淨閑　時に、お虎ぼう、委細は何か存ぜぬが、この男が、おぬしへ對し、悪てんがうしたと見ゆる。愚老もあの男に頼まれては捨ても置かれず、人を助くるは醫者でござる。出家なれば衣をといふ所なれど、鬼治に衣をかければ、鬼の天麩羅、日本橋へ愚老、屋體見世を出さねばならぬ。そこを勘辨して、何卒この淨閑に預けて下され。誠にこれが間違ひと申すもの。聞分けてもらはうく

とら　其やうにお醫者樣の仰しやるのを、聞分けぬわたしでもござんせぬ。左樣ならお前さんのお詞に免じまして、コレ、佐渡七さん、重ねてから在所中の女子衆に、てんがうをしなさんすな。向後きつと嗜みなさんせ。

ト思ひ入れあつて、佐渡七を突き放す。

佐渡　ヤレく、これで人心になつた。併し、江戸ッ子だけに、江戸紫の痣が出來た。

淨閑　エヽ、埒もない。

ト唄になり、奥より幻、出て

幻　淨閑さま、ようお出でなされました。

淨閑　オヽ、幻どの、何やら御風邪と申すお手紙ゆゑ、早速に參つた。御當分の事と見えます。

幻　イヽエモウ、昨夜から風邪の樣子。どうぞ御覽じて下さりませ。

淨閑　心得ました。ドリヤ、伺ひませう。

ト合ひ方にて淨閑、幻の脉を取つて見る思ひ入れ。

佐渡　モシ、幻さん、この間からも云ふ事で、小うるさく思はつしやらうが、お前の連合ひ、次郎右衛門が存生のうち、娘のお照どのを、わしが女房にやらうと約束あれど、憚か愚老は十二三、お照どのは六ツ七ツ、いはゞ、云ひ號けも同然。あのマア話しは、どう解りますな。

幻　成る程、こなさんの幼少な時分、次郎右衛門どのが、その契約をなされたなれど、何をいうてもこちの人は亡くなられ、娘のお照は六ツの年、八幡祭の宵宮の晩、迷ひ子となつて今日が日まで便りのないは、息災でゐやるやら、生死の程も心にかゝつて、

佐渡　アヽ、コレ〳〵、あんまり其やうに案じさしやるな。お照どのは隨分息災。今ぢやア大阪の藤屋の内で、吾妻といふ全盛の花魁。併しこの節は、堺の乳守へ假宅。コレ、幻さん、お前あのお照

どの〳〵息災なを、知らつしやらぬか。

幻　イエ〳〵、便りも訪づれもせぬ娘。母は死んだと思うてゐますわいな。

ト此うち淨閑思ひ入れ。

淨閑　ハテ、割符の合うた話しを聞きますわいなう。當時御盛んの藤屋の吾妻は、愚老よく存じて居るが。エヽ、そんならあの子が、其許の娘御か。エヽ、道理でこそ、コレ〳〵、この拾うた文の譯は知れたわえ。

ト紙入れより前幕の吾妻がやつた文を出す。幻、ハツと思ひ入れ。お虎、思ひ入れあつて

とら　アヽモシ、淨閑さま、滅多な事を仰しやりますな。此方の娘御が、新町の藤屋の吾妻といふ女郎さんでよいものかえ。おどけにもそんな事、仰しやつて下さりますな。モシ、旦那樣、左樣ぢやござりませぬか。

幻　さうとも〳〵。虎が云やる通り、便りの無い娘が、勤め奉公して居ては、わしは格別、死に行かれた次部右衞門どのは、この橋本での代官、どうマア世間へ濟みませう。モウ〳〵、左樣な事、仰しやつて下さりますな。そりや大方、間違ひでござりませう。

佐渡　イヤ〳〵。これは怪しからぬ事を申す。イカサマ、迷ひ子になつたお照どの、勤め奉公して居て

は先祖へ立つまい。その上、云ひ號けのわしにも立つまい。當時、吾妻といふ女郎は、そんなら
そりやァ間違ひサ。間違ひなれば義理もなし、乳守の藤屋の假宅で、見受けた吾妻を相談して、
始終はわしがおかみ樣。次郎も九十も、その相談を極めようかえ。

次郎　成る程、それがようごんせう。

九十　身親類のない女、そいつは話しが

兩人　出來ますぞえ。

佐渡　さうだ〳〵。あの女を女房にして、後より親が出やうが、まゝよ。その時には他人も同然、相談

・相手は二人の者。草角力の稽古ながら、裏の庭で話さうかえ。

兩人　片蔭が出來たらさうしませう。

ト聖天囃子になり、佐渡七。次郎と九十を連れ、門口より下の方へ入る。

淨閑　イヤモ、幻どの、御病體は、當分の儀でござる。藥を進ぜうかな。

幻　ハイ、何分よろしうお賴み申します。

淨閑　左樣なら、コレ、お虎、愚老が藥箱、これへ賴みます。

とら　アイ〳〵。モシ、お供さん、お藥箱を

供男　ハイ〳〵。

ト薬箱を出す。お虎、取つて浄閑の前へ置く。浄閑、匙を持つて思ひ入れ。

浄閑　アイヤ、調合の間、幻どのへ、ちつと、お話し申たしい事がござれば、コリヤ芝助、われはお勝手へ参つて扣へ居れ。コレ〳〵お虎、てまへもちつとのうち、奥へ行つて下され。

とら　そんならアノわたしも、御遠慮するのかえ。

幻　お虎までも

浄閑　アイヤ、お案じなさるゝ事ではござらぬ。

とら　左様なら少しの間

ト思ひ入れ。

お供さん、来なさんせ。

ト唄になり、お虎、心残して供男を連れ、奥へ入る。浄閑、箱を開き、調合にかゝる。幻、こなしあつて

幻　モシ、浄閑さま、して、お前さまのお話しなされたいと仰しやるは。

浄閑　アイヤ、別してお案じなさるゝ儀でもござらぬが、コレ、愚老、變つた物を拾ひました、と申す

は矢張り只今、これへ出しかけました、コレ、この文でござる。

ト以前の文を出して

幻　この間、彼の乳守の邊にて、山崎の渡し守、與次兵衛と申す者が、切られて相果てました。

淨閑　エヽ。それはマア、怖いお話しでござります。

サヽ、その怖い所に、この文でござる。卽ち宛名は吾妻どのへ、橋本母と。コレ〳〵、斯樣に書いてござる文が捨てゝござつた。殊に、血が付いて居りますゆゑ、氣色惡く、早く捨てようと存じたが、コレ〳〵、御覽なされ、今朝其許樣より遣はされたお文と、この通り同筆でござる。斯樣なれば其許が、あの吾妻へ遣はされたお文。それに致しても、捨てゝある所が惡い。殊によりますと、その人殺しの證據とやらになりまするやら。アノ芝居で致す、誠に狂言のやうでござるが、それに致しても其許樣が、吾妻といふ娘御も持たつしやらず、こりや大方橋本は橋本でも、外の者の文であらうと存ずるが、餘り手跡が同筆でござるゆゑ、持參いたした。幻どの、もし覺えがござらぬかな。

ト二通の文を出して見せる。幻、思ひ入れ。

幻　淨閑さま、何と仰しやりまする。私しが手跡に、よう似た文で、しかも名宛は吾妻どのへ橋本母、

と記した文が、只今仰しやつた與次兵衛とやらいふ人の、切られ場所に落ちて居りましたか。

淨閑　左やう〳〵。最早其許のお文ではあるまいが、コレ〳〵、今朝のお文とよう似た同筆ゆゑ、どうやらと存じて持つて參つた。

ト　これにて幻、こなし。この時、お虎、鏡臺を持ち出かゝり、窺ひゐる。

幻　この程、虎に申しつけ、娘が所へ屆けた文、それがどうして其やうな、怖い所に捨ててあるとは、合點が行かぬ。

とら　その使ひは卽ちわたし。よもやあなたが、人を殺めて

幻　ヤ。

ト　鏡臺をバツタリと置いて

とら　ハイ、お髮を解かして上げませう。

幻　イヽヤイノ、心惡いのに、髮解かすにも及ぶまい。どうやら心にかゝつて

とら　サア、わたしも左樣存ずれど、よもや其やうな大それた

淨閑　アヽ、いよ〳〵お前のお文かな。

幻　エ……。イエ〳〵、ようマア似ては居りますが、此方一向、覺えがござりませぬ。ハイ、こりや

わたしが書いた文ではござりませぬ。間違ひでござりますわいなア。

ト文を戻す。淨閑、取つて

淨閑　成る程、似た手跡もまゝある事でござる。大方間違ひでござらうが、併し、余りよく似た手でござるゆゑ、お届け申さうと持參いたしたが、橋本とござれば、いづれこの近所の衆の、落したのでござらう。ドリヤ、斯様いたして置きませう。

ト門口へ出て、杉垣の間へ文を挾み

これでよし〳〵。斯うして置いたら、覺えある人が見付けたら、直に參るであらう。ナウ、幻どの、これでようござるな。

幻　ハイ、成る程、落した人が見ますれば、持つて行かしやんすでござんせう。

淨閑　左様でござらう。

ト藥箱を片付け、藥包みを出して

オヽ、三服置いて參らう。立つけてあがりませ。

幻　これは有り難うござりまする。モシ、淨閑さま、御時分でござりまする。お茶漬なりと、御遠慮なう。

浄閑　イヤ〳〵、支度はようござりますが、遠慮するなと仰しやるが、甘へた事ながら、御酒をおねだり申さうか。

幻　それは何よりお易い事。手作りがござんすが、地酒でよくば

浄閑　アヽ、もう新酒の走りか。

幻　イエモウ、いつもお月様へ供へますわいな。

浄閑　お早い事。御馳走になりませう。

幻　サア、奥へお出でなされませ。

ト唄になり、浄閑、こなしあつて奥へ入る。お虎、見送つて、幻の側へ寄り

とら　この間私しが、お使ひに参つた乳守の廓で、あのお子へしつかりと、お渡し申したあのお文、どうしてマア、浄閑さまの手へ渡つたか、合點が行かぬ。殊に悪い場所に

幻　落ちてあつたと云はしやんすゆゑ、似寄りの文とは云うたれど、疑ひもない、わしが手で書いたあの文。

ト思ひ入れ。

とら　後であなたの御難儀に、もしなる時は、お使ひのわたしは、どうマア

幻　取つておぢや。
　　ト門口の文を取つて幻へ渡す。
とら　ハイ。
幻　どうでもこれには、譯がなうては。
　　トこの時、奥にて淨閑
淨閑　コレ、幻どの、お出でなされぬか〳〵。
　　ト幻、愕りして文を隱し
幻　ハイ〳〵、只今參りますわいなア。
　　ト在郷唄になり、ツカ〳〵と奥へ入る。お虎、殘つて思案のこなし。向うより太助、老けたる拵らへ駕籠を擔ぎ、後は甚兵衞、駕籠舁きの拵らへ、合ひ肩の四つ手駕籠舁き出て、花道にとまつて
甚兵　オツト杖ぢや。
太助　合點だ〳〵。
甚兵　コレ、太助、どうでも二十六七貫目あらうかい。
太助　オヽ、あるとも〳〵。その二十六七貫目の合ひ肩に、牧方橋本まで拳固ぢや。安かつたよの。ナ

ウ、甚兵衛。

太助　合點だ〳〵。

甚兵　ハテ、打ッちやつてやつて置けサ。駕籠の安賣りも當がなうては乘せては來ぬワ。併し、次部右衛門さんの所は、慥かに向うだぞよ。一息にやッつけろ。

ト唄になり、門口へ駕籠を下ろして

ヤレ〳〵、大汗になつた。

太助　ドレ〳〵、聞いて見ませう。モシ、ちつとお賴み申しませう。次部右衛門さまは、これでございますか。

とら　アイ、此方でござんすが、どれからござんしたえ。

太助　ハイ〳〵、私しどもは駕籠の者でござりますが、お駕籠でござつた女中樣が

とら　エ、女中のお客が

ト門口へ出る。駕籠の内にて吾妻

吾妻　コレ、お虎どん、お内は爰かえ。わしぢや。アノ

とら　ヤヽ、吾妻さんぢやござりませぬか。サヽ、此方へお入りなされませ。今も今とて、アノこの間

の

ト急いたるこなし。

吾妻　アヽコレ、まだお連れがあるわいなア。

とら　エヽ、そんなら合ひ輿でござんすかえ。モシ、吾妻さん、そんならてつきり、お前のアノ噂なさんした、與五郎さんと申すのかえ。

吾妻　イエ／＼、主ぢやござんせぬ。わたしがお世話になるお方。アノ主は

せき　アヽモシ、わたしやそこへ參りますわいなア。

ト合ひ方になり、駕籠の内よりお關、以前の一腰を風呂敷に包み、これを抱へ出る。

御免なされませ。これはお初にお目にかゝります。モシ、吾妻さん、お前マア、お入りなされませ。コレ、駕籠の衆、御大儀でござんした。

太助　ハイ／＼、大きに骨を折りました。

甚兵　コレ／＼、太助、骨を折つた代りにやア、主がたへ、酒手をしつかり、貰へ／＼。

太助　ハテ、口入れのわしが、呑みこんでゐるわえ。へヽヽ。これはハヤ、思ひがけなく、お早う參りました。一體この丁場は、拳固はお廉うござります。モシ、その替りに、どうぞ一杯づゝ、お

ねだり申したうござります。

ト追従云ふ。お關、こなし。

せき　大儀でござんした。極めはお錢五筋……。モシ、これ取つて置かしやんせ。

ト南鐐一片出してやる。

太助　ハイ〳〵、これは有り難うござります。拳固の所へ南鐐一片。コレ、甚兵衞どの、お禮を申さつしやい〳〵。ハイ〳〵、お戴き申します。

ト獨り喜ぶ。甚兵衞、不承の顏。

甚兵　コレ〳〵、太助、拳固の極めで南鐐一つ取つて、禮を云へとは、そりや何の禮だ。コレ、二百三百の酒手を貰つて、何が有り難さうに禮を云ふものか。云つてよくばおぬし云へ。この唐人甚兵衞はナ、否だよ。禮を云ふ術がない。

太助　これはしたり、三百といふ酒手を貰つて、禮を云はいでかいの。

甚兵　エヽ、否だよ。駕籠に乘つた人は二人だワ。その位の安駄賃で、無難に通すものか。否だよ。コレ、伏見から守口の間で、辻駕籠こそすれ、唐人甚兵衞は小口もきくのだ。否だ〳〵。

トねだりかける。太助、困つて

太助　コレサ、甚公、また醉つたな。アヽ、モウ、こなたの惡酒には棒組みも手こずる。

せき　そんなら駄賃が不足なといふ事でござんすかえ。モシ、お女中さん、當所の勝手を存ぜぬわたし。お前、よいやうに計らうて下さんせ。

とら　アイ〳〵、わたしがよいやうに致しませう。コレ、甚兵衛どのとやら、こなさん、マア、なんぼ程取ればよいのぢやえ。

甚兵　コレ〳〵、お虎ぼう、てまへ達の知つた事ぢやアねえ。あの手合ひは、あの大阪の新町から、堺の乳守へ假宅の大見世で、藤屋の吾妻といふ。一人は仲居の評判、濡れ髮のお關といふ事、よく知つてる駕籠の甚兵衛。殊にてつきり二人とも、駈落ち者に極まつた。何でも儲け物だ〳〵。

とら　エ、そんならアノ主さん方のお出先も

甚兵　よく御存じの唐人甚兵衛、その上昨夜から噂を聞いてきた、山崎の與次兵衛が、養子娘に切り殺され、古今稀れなる親殺しと、海道筋で大評判。それだによつて、女の同者は、安錢では通されないよ。

トこれにてお關、思ひ入れ。お虎、こなし。

とら　主さん方は、此方の内へござんした緣あるお方、大旦那が存生でござんしたら、鄕士のお家、世間

で知つた橋本次部右衛門さまのお内方、幻さまに使はるゝ、乳母ながら此お虎、そんな強請りを食ふやうな、小女でもござんせぬ。詞の甘いうちに駄賃を取つたら、早う歸つて下さんせ。

甚兵　イヽヤ、駄賃が少ないから歸らねえ。

とら　エヽ、聞分けのない。歸るが否なら、わしが歸して

ト立ちかゝる。

太助　アヽ、コレ〳〵、お虎ぼう、この駕籠甚は醉つて居ますよ。マア〳〵、わしに預けさつしやい。

甚兵　コレサ〳〵、醉ひはしない〳〵。

太助　ハテ、醉つてゐやうが。コレ、あのお虎に捕まつちやァ堪るものか。それだによつて、醉つてゐるよ〳〵。

甚兵　イヽヤ、醉ひはしねえ〳〵。

ト捨ぜりふにて兩人、爭ひ、駕籠を置いて門口の脇へ引ッ張つて入る。

とら　エヽ、ひどい目に會はさうと思うたに。

せき　これはマア、女中さん、何ともお世話樣でござりました。わたしは此お子を連れ申し　參つた者どうぞ幻さまにお逢はせなされて下さりませ。

とら　アイ〳〵。マア〳〵、此方へお通りなされませ。
せき　イエモウ、お構ひなされますな。
とら　モシ、旦那様、お客がござります。ちよつとお出でなされませ。
幻　オイ〳〵。どなたぢやいの。
ト合ひ方になり、奥より出て來て、吾妻を見て
ヤア、わが身は、娘のお照ぢやないか。
吾妻　母さんかえ。お久しうござりますわいな。
ト駈寄り、思ひ入れ。
幻　どうしてマア、廓を抜けて。ひよつと跡から
せき　ア丶モシ、必らず御苦勞に遊ばすな。送り申して參つたわたしが、委細はよう存じて居ります。お案じなされぬ方がようござります。
幻　それはマア、何か樣子は存じませぬが、この子が廓に居る事も、世間へ憚り居りますれば、便り致すも心に任せず、定めし何かとお世話になつてござりませう。コレ〳〵、あなたにお茶上げやいの。お煙盆でも持つて來やらぬか。ほんに、氣の付かぬ事ではあるぞ。

とら　ハイ〳〵、お茶も折惡うぬるうなりました。只今ちよつと焚きつけまして。ほんに、焚きつけますと申せば、私しは、風呂の下を焚きつけて置きませう。

幻　オヽ、それ〳〵、よう氣が付いた。早う風呂も焚きつけて置きや。

とら　アイ〳〵。

ト行かうとするを

せき　アヽ、申し〳〵、必らずお構ひなされますな。

とら　ちよつと焚きつけて參りませう。あなた方、ゆるりとお話しなされませ。

ト唄になり、お虎、暖簾の內へ入る。

幻　モシ〳〵、あなた、定めし娘の照に、委細はお聞きでござりませう。この子が以前六ツの年、八幡祭の宵宮の晩、迷ひ子となりまして、それから搔暮れ行くへも知れゝばこそ。

吾妻　年端もゆかぬ悲しさは、勾引されたとばかり。それとも知らず連れ行かれたは、大坂新町藤屋といふ、女郎衆の多いその內へ、賣られた事は露知らず、成人するに隨つて、父さん母さん戀しくなり、あなたの方からお便りの、お文屆いたその日まで、わたしや朝夕泣き暮らして居ましたわいなう。

ト縋つて泣く。幻、こなし。

幻　オヽ、尤もぢや〳〵。父親次部右衛門どのは病死なされ、その跡は女子のわし一人、持ち傳へたる田畑作らせ、暮らすうち、わが身が大阪の新町に居やるといふ事聞き出しても、身請けしてやる貯へなく、文でばかりの訪ひ音づれ。この程やつた、あの文が、どうして先刻の

吾妻　エ。

ト思ひ入れ、幻、こなし。お關も幻へ目を附ける。

幻　マア〳〵、無事で戻つて、めでたうござんす。

せき　さぞマア、お喜びでござりませう。わたしもあの子と御一緒に、藤屋の内に仲居奉公、異名に取つた濡れ髪の、お關と申すは私しが事。吾妻さんの身の素性、氏系圖ある郷士の娘御、あなたも外に姉御樣、故ある方へ縁に付き、娘二人あり、御總領のお娘御を連れてお別れなされた樣子。して、その方は、今に便りも。

幻　ハテ、ようマアお前は。わたしが爲には實の姉、武家へ縁付き、離縁して、子供三人儲けたとの事。その子供等が爲には現在の、伯母の幻。其あらましまで、詳しく御存じのお前といひ、よもや吾妻がその譯を、知つてゐやらう筈も無し

吾妻　アイ、わたしや何にも存じませぬが、この程廓でわたしが素性、お文のあらまし話してより、一倍深切に、親身の同胞同然。

幻　アノ、この方が

吾妻　アイ、よう深切になされて下さんしたわいな。

幻　そりや今聞くが初めて。忝なうござります。が、併し、合點の參らぬは、わたしらまでも素性をどうして

せき　サア、その御樣子はアノ慥か

トもぢ〳〵して

ほんに、それ〳〵、丁度わたしがやうな仲居さんが、あなた方のお身の素性を、詳しう話しなさんした、其あらましを聞いた通りを

吾妻　覺えておいでなさんしたかえ。

せき　ハイ、左樣でござります。

幻　して、その仲居さんとやら、今ではマアどこに。

せき　ハイ、それも疾に下がられましたわいな。

幻　ハテ、それはマア、誰れさんであつたなう。

トお關へ目を附け

ほんに、久し振りでお照に馳走には、川魚なりと見せにやりませう。

吾妻　イエ〳〵、わたしやまだ欲しうはござりませぬぞえ。

お幻　ハテ、わが身は格別、送つてお出でなさんした、あなたへわざと御膳なりとも。

せき　ハイ、わたしも欲しうはござりませぬ。お構ひなされますなえ。

幻　それぢやというて、時分であらう。お茶漬なりと。

せき　ハテ、其やうに仰しやるなら、何はなくともお茶漬に、缺け椀の一膳飯、香の物なら三切れでも

兩人　エ。

せき　出來合ひでよろしうござりますぞえ。

トこの時、奥にて淨閑

淨閑　イヤ〳〵、もうお暇申す。これは御馳走に罷りなつた。

トこの聲にお關、吾妻、恟りして

吾妻　ありや慥かに淨閑さん

せき　爰の内へ、どうしてマア。

　　ト兩人、思ひ入れ。幻、見て

幻　あの醫者どのは、知る人かえ。

せき　アイ、逢うてはちつと。

幻　ようござんす。御遠慮ならば、幸ひ此方の小座敷。お照も一緒に。

吾妻　アイ〳〵、斯う參りますかえ。

せき　左樣なら私しも

　　ト一腰を持ち行かうとする。幻、見付けて

幻　包みの中は、慥かに刀。

　　ト目をつける。お關、ちやつと思ひ入れ。

せき　ハイ、御免遊ばされませ。

　　ト唄になり、吾妻先にお關、包みを抱へ、上の障子明けて入る。幻、跡を見送つて思ひ入れ。暖簾の内より淨閑、醉つたる體にて、お虎、丸行燈を下げて出る。後より供男、續いて出る。

とら　淨閑さま、お危なうござりますぞえ。

淨閑　氣遣はしやるな、酔ひは致さぬ。

供男　それでも、お旦那、お足許がよろ〳〵となされます。

淨閑　ナニ足許ぢや。足許はよろ〳〵と、弱り伏したる枕の夢の。ハヽヽヽ。

幻　淨閑さま、もうお歸りでござりますか。

淨閑　イヤ、これは御主人、今日は種々御馳走に罷りなりました。忝なうござります。イヤモウ、奥二階で淀川を見渡しまして、牛蒡の太煮に蛸の料理を仰せつけられ、大きに酩酊仕る。ハヽハヽ。

幻　なんのお構ひ申しも致しませぬ。モシ、淨閑さま、暮れ方でござりますれば、お危なうござります。何ならお駕籠を申しつけませうか。

淨閑　イヤ〳〵、お構ひなさるな〳〵。

とら　モシ、幸ひ先刻の駕籠が、まだ爰に。裏の木部屋に。よう寝て居りました。あの衆を起して參りませうわいな。

幻　さうしてあげやいなう。

ト　お虎、門口の下手へ入る。

供男　モシ、旦那、戻り駕籠なら、召してお歸りなされませ。暮れると物騷でござります。

淨閑　さう致さう。成る程、物騷でな。イヤナニ、お聞きなされ。先程も申したが、この間は物騷でござる。あの山崎の渡しに、與次兵衛と申す者がござつて、愚老などは至つて近所で、懇ろでござつたが、人はいつ何時。あの堺の乳守で、切られて相果てた。與次兵衛と申すは、今でこそ渡し守を致して居るが、以前は郡音成どのゝ、城下に罷り居つた道具屋でござつたが、筋の惡い道具を求めまして、既に盜賊の同類にもなるべき所を、家中勝䖝與六どのゝ情を以て、命に別條なくお國を拂はれ、それより致して山崎に住ひ致しましたが、その後與六どのゝ御子息與五郎どのと申すが、日本丸といふ一腰を失はれまして、主人へ申し譯なく、浪人いたされたを聞き、與次兵衛は至つて氣の毒に存じ居つたところ、どういふ廻りか、日本丸が、その與次兵衛の手へフト入りましたが、そこが悲しい事には、與五郎どのゝ顔を存ぜず、與五郎といふ人さへあると、もしその人ではないかと、尋ねまする樣子なれど、何を申すも、元が商人にして、無筆でござる上、年寄りまして耳が遠くなりました所爲か、不自由に見えましたが、人に切られて死にますとは、アヽ、不便な事を致してござる。

ト此うちお關、始終を立聞きしてゐる。

幻　それはマア、不慮な目に會はれましたな。して、そのマア殺した相手は、知れぬ事でござりますかな。

浄閑　サヽ、そこでござる。一說に申すは、その與次兵衞は夫婦養子の筈でござつたが、その養子娘が舅を手にかけ、その劍を盜んだとの噂もござる。それが定なら、誠に世には、怖い女もあるものでござる。

トこの話し聞いて、お關、よく〳〵思ひ入れ。

せき　ヤヽ、そんなら舅というたは、與五郎さんの親御樣。命の恩にあづかりし、城下の町人與次兵衞どのも、共々劍を尋ぬる心であつたか。さうとは知らず一筋に、殺してなりと與五郎さんを、世に出したく思ふから、女の身ながら大それた……アヽ、切られた人も思ひ廻せば、與五郎さんを思ふゆゑの非業の最期。これが誠に敵同士。

幻　ヤ。

ト振り返り、お關とちよつと顏見合せ、兩方、思ひ入れ。お關、バッタリと障子を閉す。

ハテ、怖い女もあるものでござんすなア。

ト門口より、お虎、太助を引ッ張つて出る。太助、疝氣の起りし體にて出て

太助　コレ〳〵、お虎どの、よい仕事がござるかな。

とら　アイ〳〵、お醫者さんを送つて、山崎まで行つて下さんせ。

太助　アイ〳〵、少し疝氣で腰がつるが、どうか片道位は舁けませう。

幻　左様なら淨閑さま、又この間に、お見舞ひなされて下さりませ。

淨閑　一兩日中にお見舞ひ申す。冷えぬやうになされや。

とら　駕籠屋さん、お頼み申すぞえ。

ト合ひ方になり、幻、お虎、思ひ入れあつて、暖簾の內へ入る。淨閑、門口へ出て

供男　旦那、お藥箱も乘せませう。

淨閑　オヽ、さう致せ〳〵。コレ、駕籠の者、頼むぞや〳〵。

太助　モシ、旦那、隨分急いで參りますが、棒組みの甚兵衞が、駕籠疲れで他愛ござりませぬ。起したところが、急の間には合ひませぬ。棒組みをちよつと雇つて參りませう。お待ちなされませ。

淨閑　ナニ棒組みを雇ひに行く。それでは遲い。早くやれ〳〵。

太助　早く參りたうても、一人では駕籠は舁けませぬ。

淨閑　成る程、これは尤もぢや。そんなら斯う致さう。コリヤ、芝助、われ、後棒へ廻れ〳〵。

供男　これは迷惑でござりますが、主命ならせう事がない。サア〳〵、やりませう。
太助　合點ぢや。よいヤサ。

ト駕籠を舁き上げると、太助、よろ〳〵して

太助　アイタヽヽヽ。惡い時に起つた疝氣。
淨閑　コレ〳〵、駕籠の者、どうしたのぢや〳〵。
太助　ハイ、私しは持病の疝氣が兆しました。アイタヽヽヽ。ナニこれしきに。
淨閑　これサ〳〵、待ちやれ〳〵。駕籠の者、其やうに惱むを、乘つて居る醫者が、まんざら見捨てにはなるまい。ドレ〳〵、脉を見てやらう。
太助　ハイ〳〵、左様なら御覽じて下さりませ。

ト駕籠より出て、太助の脉を見て

淨閑　成る程、これは疝氣ぢや。アヽ、冷えては惡い。隨分冷さぬやうに
太助　ハイ〳〵。イエモウ、駕籠の者は、冷え通しでござりまする。
淨閑　アヽ、コレ〳〵、冷えては惡いと云ふに。その上、駕籠なぞ舁いては堪るものか。コレ〳〵、マア、駕籠へ乘つて休まるがよい。

太助　ハイ〳〵、それは有り難うござります。お詞に甘へて、駕籠へ乘ります。
淨閑　さうするがよい。醫者の云ふ事、隨分用ひるがよい。サア〳〵、替りませう。
太助　モシ、旦那、隨分急いでやつてもらひませう。
淨閑　承知いたした。コレ、芝助、駕籠賃は濟んだか。
供男　イエ〳〵、まだ濟みませぬ。駄賃はいくらだ。
太助　ハイ、四百下りでござります。サア〳〵、お醫者樣、早く賴みます。
淨閑　承知いたす。家來、足許がぬかるぞ。提灯はあつたか。
供男　アイ。つけて置きました。
淨閑　よし〳〵。これで足許が見えて、よいぞ〳〵。時に駕籠の駄賃も酒手もやつた程に、先へ行つて何も云ふまいぞ。
太助　畏まりました。その代り、早く賴みます。
淨閑　心得ました。ア、コレ、これで物事解つたワ。これまで愚老が匙先で、盛り殺した病人の、その葬禮の野邊送り、それが今更報ひ來て、現在醫者に駕籠舁かせ
太助　乘つたわたしは駕籠の者、これも何ゆゑ、疝氣ゆゑ。

淨閑　旦那、假宅かえ。

ト唄になり、駕籠の内にて太助、掛け聲して、淨閑、片手に提灯を持ち、供男、後棒にて、向うへ入る。時の鐘、日暮し鳴く。下座より甚兵衛、佐渡七出て

佐渡　駕籠の甚兵衛、おぬしが爰へ乘せて來た、合ひ輿の二人といふは、慥かに吾妻と濡れ髪の

甚兵　お關といふは親殺し、この橋本へ便り來たこそよき幸ひ。

佐渡　訴人した上、あの吾妻を引ッ浚つて、跡の工面は。

甚兵　そりやアわしが吞み込んだ。ちつとも早く、お關が訴人を。併し、この家の裏道は、茂つた大藪逃がさぬやうに。

佐渡　合點だ。ドリヤ、一走り。

ト時の鐘、合ひ方になり、尻からげして向うへ走り入る。甚兵衛、内を窺つて

甚兵　さて、これから奥に居る吾妻を、此方へ引揚げて

ト行かうとする。後へお虎出て

とら　こりや、こなさんは最前の、

甚兵　アイ、駕籠の甚兵衛だ。音に聞えた力強、おぬしが名代のお虎ぼう、吾妻に荷擔する氣だな。そ

の上此方の目算を

とら 聞き挾んだが地獄耳、ちつと色氣のないお轉婆。奥のお客にこれ程でも、指でも付けて見なさんせ。後の始末はむづかしいよ。

甚兵 ナニ女ツ子の人そばえ。吾妻といふは爰の娘の、迷ひ子になつたお照であらう。佐渡七へ駕籠の甚兵衞が、擔いで行つて

ト奥へ行かうとするを、お虎、立廻りあつて

とら 駕籠甚でも唐人でも、お虎が聞いちやアやるこつちやない。たつて行くならこなさんの、その聞込んだ兩方の、耳をすつぱり削いでしまふよ。

ト鏡臺より剃刀を取出す。

甚兵 オヤ〳〵、なんぼ唐人甚兵衞でも、お虎に耳を削がれぬうち、蛇の目を灰汁で洗つて見せう。

ト立廻りよろしく、誂らへの祭の鳴り物にて、タテあつて、甚兵衞、お虎を突きのけ、一散に向うへ入る。お虎、キツとなつて

とら エヽ、よしてもおくれ。先刻の文の様子といひ、吾妻さんの身の上に、もしや仔細のある時は、こりや斯うしては置かれ

ぬわえ。

ト立ち上がり、帶引上げ、一散に向うへ走り入る。あと合ひ方にて障子を明けて、幻、吾妻出て

吾妻　申し、母さん、わたしやあなたに、ちつとお話しがあつて

幻　さいなう、わしも其方に訊かねばならぬ、と云ふ譯は、まだ年のある其うちに、廓を拔けて喜撰の、女中と連れ立ち、マア、どうして故郷を慕うて來やつたぞ。

吾妻　アイ、わたしや勤めの苦を遁がれ、身儘になつて親里へ、訪ねてわざ〳〵參りしも、云ひ交した與五郎さんといふお方に、どうぞ添ひたいばつかりに、主を力に參りました。母さん、どうぞ其お方に私しを、添はせて下さんせいなア。

幻　して、わが身が廓を身儘になりやつたは、その與五郎どのといふお方に、身請けされてか。

吾妻　サア、それもいろ〳〵込入つて

トこの時、お關障子より出て

せき　その樣子は私しが、お話し申しませう。

幻　ヤヽ、お前はお關さん、この子の身の上、お前サア、早う聞かせて下さんせえ。

せき　廓の樣子、殊にマア、年のある身を爰へ來た譯、御存じないうちは、お案じなさるも御尤も。モ

シ、此お子の證文、お渡し申しませう。今から身儘の吾妻さん、好いた殿御に添はせたく、わざわざ送つて、參じたわたし、この一札はお前のお手許へ。

ト身請け證文を幻へ渡す。幻見て

幻　この一札を親方より渡すには、大枚なコレ、二百兩といふ金が

吾妻　それも何かとお關さんの、身に引受けて金の事も

幻　そんなら主が

吾妻　アイ、よう禮云うて下さんせいなア。

幻　これがマア、詞の禮で濟まうぞいの。コレ、お關さん、深い樣子は存ぜねど、大枚の金までも、お前が引受け、あの子の身請け。これは、何ぞ。

せき　あなたへ一つのお願ひがござんすゆゑ。吾妻さんを、わたしがこの身に引替へて、お世話申すも不思議の縁。お前に此お子お渡し申し、又その外に一つのお願ひ。女子に似合はぬ大膽な、この一腰を所持せしは、仲居のお關と申す者より、受取りましたと仰せられ、郡の家中、當時は浪人、家名も勝鹿與五郎といふお人へ、憚りながら、お屆けなされて下さりませ。

ト風呂敷を解き、一腰を出し、思ひ入れ、合ひ方。幻取つて、よく〳〵見て

幻　刃金の鍛へとこの拵らへ、世の常ならぬ一腰を、所持せし仲居のお關さん、廓の女中に似合はぬこの品。ハテ、奥床しい。こりや、お前にも

ト思ひ入れ。合ひ方になり

せき　アヽ、流石は鄕士の橋本氏、武士に連れ添ふ幻さま、この身の素性申さんも、今のこの身に面伏せ。どうでわたしは、明日をも知らぬ。

ト思ひ入れあつて

お頼み申す。わたしに緣ある與五郞どのに、首尾よう一腰お渡しあらば、添へて送るはこの守。これをも共にその方へ、お渡しなされて下さりませ。

ト以前の守を出す。幻、取つて

幻　や、こりやコレわしが覺えのある、桔梗繋ぎの古金襴。さてこそわしが推量に違はぬ、武智の身寄り、姉者人の胎内に、出生しやつた二人の娘、その一人にて、慥か妹の。

せき　モシ、おさらばでござります。

ト つか〳〵と向うへ走り行く。吾妻、縋るを振り切り、一散に向うへ行かうとする。

幻　親殺し、待て。

せき　エヽ。

幻　親は天下の主を殺し、實の娘は大膽な、養父の親を殺した科人。この幻が實の姪、伯母を知らぬ皐月であらうか。コレ、濡髪のお關さん、急かずとせめてこの伯母に、ようマァ顔を、見せてたもいなう。

トこれにてお關、ツカ〳〵と戻つて

せき　下素女ゆゑ憚つて、血筋のお方と申さねど、さう仰しやる上からは、お初に逢ふ伯母様。

幻　其方は姪の皐月とやらか。

せき　アイ、左様でござります。

幻　ようマァ尋ねて、來てたもつたなう。

ト差寄つて思ひ入れ。

せき　お噂のみ聞きながら、お顔は存ぜぬ伯母御様、姪の女は恥かしい、見る影もない下素女。父は名におふ國主大名の、その娘にてありながら、今は廓の火車仲居、文字も同じ火の車、呵責の増る心の苦しみ、それも夫の失なひし、その一腰を取り得ん爲。首尾よく劍が手に入る上は、與五郎さんの身の出世、大願叶うた私しを、親殺しとは伯母御様、何を證據にその一言。サヽ、承は

りたうござります。

幻　證據といふは卽ちこの文。

ト懷中より出す。

吾妻　ヤ、そりや母さんより、わたしが方へ、下さんしたあなたの手跡。其お文を

せき　吾妻さんよりこの關が、預かりました其お文が、そんならもしや

幻　其方の假の親といふ、與次兵衞横死のその場所に、落ちてあつたと、最前の、淨閑どのが、もしやわたしが手跡ぞと、云うたらお照が難儀にも、ならうかと思ふゆゑ、慳もほろゝに挨拶して、その場はそれでくるめても、科は遁がれぬ人殺し。覺悟極めしわが身の様子、吾妻も劍もその上に、素性を人に知らせじと、守の書き物まで渡したは、其方は直ぐにその身の訴人、死ぬる覺悟であらうがの。

せき　サア、さうお察しの上からは、それに相違はなけれども、最前醫者の淨閑どのが、與次兵衞どのの素性の話し、聞けば夫の親御様に、大恩受けし者ゆゑに、主へ渡す劍ゆゑ、命に替へて渡さんせぬ、老の我武者に是非もなう、養父の親を手にかけし、不敵のわたしは、夫の爲。命を捨てし與次兵衞どのも、無筆の上に頓の悲しさ、情なくも横死を遂げ、親殺しの悪名を取るも、みな現

幻　世の約束事と、伯母御樣、推量なされて下さりませ。サヽ、間違ひも因果同士。一旦の親と頼みしその人を、手にかけたればお上の科人。さはさりながら情ないは、氏も系圖も只ならぬ、國主城主の娘の其方、町人一人手にかけし、その科人で死罪にあふが、無念、さぞ口惜しからうと察して居る。コレ、それも時世と諦めて、一日片時も命を延し、逃げらるゝだけは逃げて、この一腰をわしへ渡し、受取るものならば、直ぐに其方は死ぬる覺悟と察したゆゑ、もう〳〵伯母は預かりませぬ。わが身の手から與五郎どのへ渡してたも。わしはどのやうに云やつても、この一腰は、預かりませぬ〳〵。

ト守を添へ、劍を差戻す。お關思ひ入れ。

せき　すりや、どうあつても伯母樣、あなたの手から與五郎どのへは

幻　わたしや受取りはせぬ〳〵。

せき　アヽ、左やう仰せの上からは、逃げられるだけは命を延し、夫の在所を尋ねた上、一腰を渡して願ひを叶へ、その後にては潔よう死ぬる覺悟。仲居の闕で召捕られ、死罪にあはゞ、天下の掟、三尺高く木の空へ、親も娘も淺ましい、死をとぐるかと思ふゆゑ、お願ひ申せし一通り。成る程あなたのお詞に從ひまして、夫の行くへ尋ねて、わたしが手から、與五郎どのに渡しまするでご

ざります。

幻　サ、聞入れたれば夜に紛れ、爰を早う逃げてたも。男の爲ぢや、大事ない。サヽ、ちつとも早う

　　ト目なつける。お關、キッとなつて

せき　その時こそは武智が娘。

　　ト合ひ方變る。

天王山に屯なす、父の陣所へ走せ參じ、士卒に紛れし女武者、鎧にあらぬ簑笠にて、打物なくとも大藪の、竹も即ち大身槍、女子の姿押隱し、土民に出でたち眞柴勢に、忍び向うて、父に先立ち命を捨て、養父の親を殺せし皐月、父は天下の武將たる、春永公を討ち奉る、日本無双の主殺し、それも矢ツ張り四海の爲、世々に稀れなる大膽女。未前を察せし父さんの、子捨てる藪は小栗栖の、竹鋸の身の罪科、跡の回向を伯母御樣、おとひなされて下さりませ。

幻　オヽ、その覺悟ではこの伯母が、與五郎どのへ渡したとても、矢ツ張りわが身は死ぬる心。さはさりながら手にかけし、養父の親の與次兵衛といふは、恩を受けし町人なれば、この旨お上へ訴へなば、よもや惡名つきもしまい。少しも早う、夫の行くへを。サヽ、一腰持つて。

吾妻　お尋ねなされて、行く末長う、女夫になつて下さりませ。わたしが年を身に替へて、我が身を沈

め百兩の、後金拵らへて下さんした、その大恩のお關さん。

幻　そんなら其方の身の代、後金まで、その身を賣つて

吾妻　アイナア。

幻　エヽマア、それを先刻にから早う云つて、コレ〳〵、それ聞いては猶更に、命延はり、思ふ男と睦まじう、せめて三日も女夫ぢやと。

ト これにてお關、思ひ入れ。

せき　せめて三日も添へとある、伯母御樣のお詞に、思ひ廻せば父上の、三日天下と世の嘲り。わたしも三日添臥しが、叶はぬとても、せめて一夜の

ト 幻と顏見合せ

伯母御樣。

幻　皐月どの

せき　吾妻さん

吾妻　お前も無事で

ト 三人顏見合せ、思ひ入れ。

幻　かゝる例しもあらうかいなう。

ト三人、泣き落す。捨て鐘、向う、バタ〳〵にて、お虎、走り出る。後より佐渡七、頬かむりにて付いて來る。門口には次郎、九十、出かけて窺ふ。

とら　モシ〳〵、後家御樣、大事が出來ましたわいなア。

幻　これはしたり、お虎、何事ぢやぞいなう。

とら　サヽ、別の事でもござりませぬ。あの橋本の幻の内へ來た二人づれ、娘は堺の乳守を駈落ち、一人のお關は養父の親、與次兵衛を殺して逃げた女の科人、縛りあげろとあたりの噂。近所の里々へ、捕り手の衆が廻つたの事。早うあなたを落し申すが、ようござりますわいなア。

幻　サヽ、さう聞いては猶豫はならぬ。ちつとも早う、京都をさして。

せき　夫の行くへを、爰から直ぐに。

ト一腰抱へ、行かうとするを

とら　アヽモシ、着てゐなさんす召し物までも、知つた樣子の上からは、わたしが縫つたこの浴衣、河内木綿の手織り縞、これなと召して

ト縞の浴衣を差出す。お關、取つて

せき　何から何まで志し、嬉しうござんす。

吾妻　そんなら必らず

幻　怪我せぬやうに

せき　伯母御樣。

とら　この上、めでたう

九次　見つけた。

ト　お關へかゝる。立廻り。見事に投げる。次郎、九十、障子を打拔き投げ込まれる。お關、その體を見て、障子屋體へ走り行く。

せき　必らず無事で。……おさらばでござります。

ト　屋體の内へ走り入る。佐渡七、窺つて

佐渡　吾妻を貰ふ手蔓には、今のお關を追ひ駈けて

ト　行かうとする。お虎、引留め、立廻り。幻と吾妻は行燈を吹き消す。佐渡七、立ちかゝる。お虎、キツと引留める。幻、こなし。

幻　今の女は何として、河内の國に長居は出來まい。今宵のうちに大和路へ。

佐渡　しめた。

ト立ちかゝる。お虎、立廻りあつて

幻　落ち行く先は、ナ、ソレ

ト お虎へ思ひ入れあつて

この裏道の畦づたひ、八幡を拔けて狐川。右へ渡つて山越しに

吾妻　すりや、その道を

佐渡　跡追ひ駈けて

ト行かうとするな、お虎、キツと引留める。

幻　アヽコレ、道を、迷ふまいぞよ。

ト皆々よろしく立廻り。時の鐘、送り三重にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、正面、高足、棕櫚ぶせの土堤。うしろ黒幕。所々に稻叢。花道舞臺前　波板に、茂りし葭を引出す。此うち時の鐘、雨の音にて道具納まる。ト知らせにつき掠めたる禪のツトメ。揚げ幕より簑笠の船頭四人、曳船の綱を引いて出て來る。すべて淀川堤の景色。この人數は花道の脇の

歩みを通り、舞臺へ來る。また揚げ幕より、苫を置いたる渡し船、花道を出て來る。これにて簑笠の船頭、竿をさして、この人數舞臺へ來り、綱を曳き、舟は花道の方より下座の方へ引きつけると、パッタリ音して、雀の聲夥しく、指し金の雀、大分左右へパッと立つ。これをキッカケに、藪の內より白刃出る。これを見て六人の船頭、ワッと云うて、よき所へ平伏す。これより鳴り物、凄き合ひ方日暮しの聲、時の鐘。正面竹藪を切り倒す。本雨降る。お關、縞の浴衣、白刃を持つて窺ひ出る。此うち捨て鐘。思ひ入れあつて行かうとする。左右より六人の船頭、手頃の竿を持ち、簑笠のまゝ起き上がり、そのうち三人、黑具の捕り手の形の上へ、簑笠、小栗栖の百姓、勸心寺村の捕り手と一つにしたる仕組みにて、水竿にてかゝるを、お關、水竿の先を殘らず切つて落す。竹槍になる。六人一度に取卷き

捕手　動くな。

せき　こりや曳舟の船頭と、見えたも、さては

ト思ひ入れ。

捕一　人を殺めし不敵の女、召捕る爲の簑笠に、姿を變へし我れ〳〵は、仰せを受けし組み子の六人、船頭となつて淀川を

捕二　船漕ぐ綱は身の科の、その縛めの捕り縄手。

捕三　堤づたひに竿さした、この大雨に濡髪の

捕四　お關と呼ばれしお轉婆者。

捕五　上意に依つて、この如く、取巻いたればもう敵はぬ。

捕六　尋常に縄にかゝれ。

せき　女子一人を仰山な。この身に覺えござんせぬ。必らずともに

三人　召捕れ。

三人　捕つた。

ト十手にて立廻り、よろしく、お關、六人を相手に大タテあつて、皆々を切り散らす。六人、下座に逃げて入る。この立廻りのうち、小柄を落したる思ひ入れ。一腰を納め、あたりの簑笠を着て姿を隱す。忍び三重、時の鐘、日暮しの笛。東の花道より與兵衛、三度笠、半合羽、壹本差し、伏見南方屋といふ小提灯をさげ、出て來る。お關、下の方に窺ひ、與兵衛、舞臺へ來て、小柄を拾ひ、提灯にて透かし見る。お關、窺ふ。

與兵　菜種に狂ふ二羽の蝶。

せき　エ。そんなら小柄は

與兵　ヤ。

　　トお關、笠にて顔を隱す。木の頭。

女の聲だな。

　　トこれをキザミにて、時の鐘、よろしく、ひやうし

幕

第二番目　大詰　伏見南方屋の場

役名――南方屋與兵衛實ハ若黨十次兵衛。伏見問屋場の書役、長五郎實ハ勝鹿與五郎。與兵衛母、お早。下女、おかよ。同、おいね。宿引き、野手の三。小揚げ、薬屋村の彦助。宿役人、用助。平岡鄉左衛門。一子、友市。濡れ髪のお關實ハ武智娘皐月。放れ駒のお關實ハ與五郎女房關の戸。

本舞臺、三間の間、通したる二階造り。兩方より箱梯子かけ、上の方に湯殿、この所風呂場と書いた行燈を掛け、よき所に引窓。二階は葭簀の卷おとし、下の軒に金毘羅月參り、伊勢參り、その外國々の掛け札。赤壁に丸の內に、南方屋と書いた門口。平舞臺に戸棚。圍爐裏に鑵子掛けあり、すべて伏見の舟場。馬士唄にて、かすめたる藤の森稲荷の大拍子聞える。よき所にお早、やつし婆の拵らへ、前垂

れがけ、竹花活けに薄の花を生けて居る。與五郎、やつし形、三方の團子を積み、芋、枝豆など盛つて居る。三、宿引にて、草鞋を穿いて居る。おかよ、おいね、前垂れにて、留め女の形にて、旅人、立ちかゝつてゐる體にて幕明く。

かよ　お泊りかえ〳〵。

いね　今晩の出船はござんせぬぞえ。

旅人　ハテ、まだ日は高いに、もちつと行きませう。

同　さうしませう。

三　モシ〳〵、まだ高いやうだが、秋になつちやァ名代の釣瓶落し、半道とは行かれぬよ。

旅人　三條までは行けまいかの。

與五　どう致して。もう七ツ過でござります。矢張りお泊りなされませ、その上この間は、山崎天王山に軍がござつて、夜道は一向になりませぬ。

はや　イエモウ、この人の申す通り、この間は餘ッほど日が短かくなりました。秋も半でござります。

旅人　そんなら、もう爰へ泊りませう。

いね　左樣なされませ。お御足のお湯を持つて參りますぞえ。

かよ　サア〳〵、お茶上がりませ。

ト丸盆へ茶碗を載せ、持つて出る。お稲、盥に湯を持つて出る。

四人　サア〳〵、荷を頼みますぞえ。

かよ　ハイ〳〵、これへ遣はされませ。

與五　コレ〳〵、女中。お腰の物をお預かり申しなさいな。

四人　オイ〳〵。大事に頼みます。

與五　ハイ〳〵、きつとお預かり申してござります。

ト腰の物を取つて思ひ入れ。

かよ　モシ、あなた方、奧へお出でなされませ。

四人　アイ〳〵、よいやうに頼みます。

三　おいらがそこらまで行つて、泊りのお客を四五百人引いて來やう。コレ、長五郎どの、そこにおれが合羽がある、取つて下さい。

與五　オイ、この合羽であらうが、雨も降らぬに、合羽着てござるか。

三　イヤモウ、わしは天氣がよくても合羽を着ます。殊にこの合羽は、わしが親仁の築地彦左衛門が、

末期の時まで着て居た合羽。そこでわしが爲には親仁の形見でござるから、大切な合羽でござる。

與五　ムウ、そんならお前の親仁どのは、死なれましたか。

三　サア、聞いて下さい。親仁は後の月十日に往生しました。こなさんも馴染だけに、囘向して下さいまし。

與五　それは、いかいお力落しでござるの。

三　イヤモウ、親仁に別れて、木から落ちた猿の子同然、一圓と悲しうござります。誠に親仁がこの形見、かつぱと伏して泣きました。親仁はかつぱ六十四でござつた。

はや　ハテ、久しい馴染でござつた。お寺はどこであつたかいの。

三　アイ、深川の淨心寺。どなたもこれを善好が追善と思し召し、お志しのお方は、一遍の御囘向、お願ひ申します。

はや　ハテ、貴樣は顏に似合はぬ孝行な人ぢやわいの。

旅人　コレ〳〵女中衆、按摩を一人呼んで下さい。

はや　ハい〳〵。ソレ、誰れぞ行て按摩を

三　イエ〳〵、呼びに行くには及びませぬ。わしが行きがけに寄つて、化され坊主を寄越しませう。

かよ　どなたも、斯うお出でなされませ。

ト馬士唄になり、おかれ、荷物提げて、旅人達附いて暖簾口へ入る。三は南の口へ入る。おいれ、門口に呼びかける。與五郎、内に殘つて

與五　モシ、阿母樣、今日もいかう泊りがござりますぞえ。コレ、この腰の物は、戸棚へしまうて置かつしやりませ。イヤモウ、どれも〳〵値打のない。コレ、みんな柳原か愛宕下といふ代物ぢやわえ。

ト向うより用助、問屋の男にて、祭の槍を持つて出て來り

用助　モシ〳〵、與兵衞どの〳〵、サア、問屋の寄合ひだ。ちよつとござりませ。物書きの長五郎どの、爰にござつたか。大きに忙がしくなつた。親方が呼んでゐたよ。ちよいと來さつしやい〳〵。

與五　オイ〳〵、そんならちよつと行きませうか。コレ、用助どの、與兵衞さまはお留守ぢやわいの。

用助　近所へござりましたかえ。

はや　さいなう、大阪へ行きやつたが、今日は是非歸るであらうが、與兵衞がゐねば、叶はぬ用事かいなう。

用助　イエ、誰れでも一人、ござればようござる。外でもないが、あの山崎へ軍場へ、人足を取られてその上に、道中は荷物が多くて迷惑。問屋でその寄合ひでござります。

與五　それならようございます。私しが參るでございます。此方への用はあらまし承はつて參りませう。

はや　ほんに、さうして下さんせ。

用助　イヤ、ほんにわたしとした事が、モシ、阿母樣え、お前がお頼みなされた、伏見の稻荷樣のお味方祭の、お槍を戴いて來ました。サア、神棚へ上げてお置きなされ。

ト誂らへの槍を出す。お早取つて

はや　これは忝なうございます。コレ、稻や。其方、お槍を神棚へ上げてたも。

いね　アイ〳〵、畏まりました。

はや　コレ、長五郎どの、問屋の用事が解つたら、知らせて下さんせ。

與五　合點でござります。何用か、お知らせ申しませう。用助どの、サア、行かうぞや。

ト馬士唄になり、與五郎、用助、向うへ、おいれ、奥へ入る。この鳴り物にて、郷左衛門、網代笠、黒の衣、大小を隱し、出家の體にて出て、與五郎と摺れちがふ思ひ入れあり、門口へ來て、跡振返つてこなし。

郷左　今あそこへうせたは、ありや劍を尋ぬる勝鹿與五郎。油斷はならぬ。それにつけても、吾妻を連

れしお關めは、慥かこの道と思ひの外、今に逢はぬは、どうも合點がゆかぬわえ。
はや　モシ〳〵、御出家様、お泊りでござりますか。
鄕左　オイ〳〵、身共は。……愚僧は旅僧ぢやが、泊めて下さるか。
はや　ハイ、お泊め申しませうが、お一人でござりますか。
鄕左　いかにも一人旅ぢやが、泊めてもらはずばなるまい。
はや　お氣の毒な事。どうも一人旅のお方はお泊め申されませぬ。
ト此うち鄕左衛門、よく〳〵お早を見て
鄕左　アイヤ、心遣ひは無用、一人旅でも大事ない、コレ、乳母、身共ぢやわい。
ト顏見合せて
はや　ヤ、あなたはわたしが乳をあげた、岡島丹平さま。
鄕左　オヽ、その丹平も、今では平岡鄕左衛門といふ浪人、心細う思うたに、爰でおぬしに逢ふといふは、この身の幸ひ。コレ、一人旅ぢやが、昔のよしみに、今宵は泊めてもらはにやならぬ。
はや　イヤモウ、お一人の若旦那様、お泊め申さいでなんと致しませう。して、あなたは御浪人とは仰しやつたが、見れば姿は御出家様、それには何ぞ

郷左　イヤモウ、これには段々様子ある事。手前もこの姿で道中するも、尋ねる者があるゆゑに、姿を變へてこの道筋。併し、話せば長い事。何分今宵一夜のところを

ト衣を脱ぎ、大小の侍ひ姿になる。

はや　お氣遣ひなされますな。併し、私はお前様の乳母なれど、忰與兵衛と申すは近頃まで、勝鹿與五郎さまといふ方に若黨奉公いたす者、隨分と男氣な生れつきでござりまする。

郷左　その者も存じ居る。勝鹿の若黨とあれば、慥かに十次兵衛と申したであらうがな。

はや　成る程、左様でござります。ようマアあなたは、御存じでござりますな。

郷左　其方が忰の十次兵衛、勝鹿が下部に致せ、その母親の其方は身共に乳母奉公、さすれば忰ぐるみ身が家來同然、殊に世にいふ乳兄弟、これ以て郷左衛門が、この身にとつては、この上もなき隱れ家。只今逢うたる與五郎、この邊に居るからは、彼奴を何卒人知れず、折を窺ひ

ト思ひ入れ。

久し振りぢや、逗留せざなるまいわえ。

はや　イヤモウ、仰しやる通り、わたしが忰でござりますれば、お前様にも卽ち御家來同然、お心強う思し召しませ。

トよき時、おいれ、おかよ、出て

いね　阿母樣、お侍ひ樣ではござりますが、見ますればお一人旅の樣子といひ

かよ　お泊め申してもようござりますかえ。

はや　アイヤ、そりや氣遣ひしやんな。この母がお世話申さにやならぬお方。合ひ宿があらうとまゝ、お心置きなう御逗留。

郷左　その詞にて身も安堵。然らば世話になり申さう。

はや　サア、若旦那樣。

郷左　乳母、案內しやれ。

ト合ひ方になり、お早、郷左衞門、奥へ入る。あと順禮唄。おいれ、おかよ、門口へ出る。向うより關の戸、順禮形。彥助、小揚げの形にて、大風呂敷を脊負ひ、その上へ友市を載せて出て

關の　コレ、小揚げのお人え、わたしらが泊る宿屋は、もそつとかいなア。

彥助　アイ／＼、向うの南方屋といふ宿屋でござります。よい內でござります。

友市　モシ、母さん、もう泊るのかえ。

關の　泊らうわいなう。わしやモウ足に肉刺がいかう出來た所爲か、痛うて／＼、先刻から泊りたうて、

やうやう爰まで辿り着いたわいなう。

彦助　さうでござりますかえ。併し、お前さんの肉刺なら、私しがお貰ひ申して、座禪豆にして、お茶漬が食べたい。ハヽヽ。

關の　ほんに、氣輕な小揚げどのぢやわいの。

彦助　氣は輕いが、この坊さんは重たくつて、大汗になりました。

關の　イヤモウ、わしも足の肉刺が、アイタヽヽ。

ト矢張り順禮唄にて、舞臺へ來る。

いね　お泊りかえかえ。

彦助　コレ、女中衆、お泊りだよよ。

いね　アイアイ、これはあなた方は、お二人様かえ。お草臥れでござりませう。

かよ　サアサア、お御足をお濯ぎなされませ。

ト盥を持つて來て關の戸の足を洗ふ。

關の　イヤモウ、今日のやうな草臥れた事はなかつたわいの。

彦助　ほんに、お草臥れでなくば、この伏見の稻荷様に、お味方祭というて、槍を戴いて戻りの祭、大

閾の　抵面白い事ではござりませぬ。

友市　どうして。早う湯に入りたうござんす。

閾の　モシ、母さん、わしや其お味方祭を見たいわいの。

彥助　これはしたり、この子とした事が、其方、矢ツ張り內に居た時と同じやうに。コレ、それで長の旅がなるものかいな。

かよ　モシ〳〵、さう仰しやるな。子供といふものは、何でも見たがるものサ。ようござります。わたしが歸りがけに、お負ひ申して、お見せ申しませう。

閾の　左樣なされませ。わたしらが附いてゐて、お目にかけませうわいな。

かよ　なんのマア、忙がしい時分に、そんな事が、どうしてマア。

閾の　ハテ、大事ござりませぬ。お連れ申しませうわいな。

友市　そんならお前、お賴み申しましたぞえ。コレ、友市、おとなしうして、主方に世話燒かすまいぞや。

彥助　アイ、合點ぢやわいなア。

　サア〳〵、荷物はお渡し申しませう。サア、坊さん、また負ぶさりな。

いね　お荷物は直ぐに二階へ持つて參りませう。あなたも直ぐに二階へお出でなされませ。

關の　アイ、二階へこの足で上がられゝばよいが。そんならお前方、お賴み申します。

ト馬士唄になり、おいね、風呂敷包みを持ち、先へ、關の戸付いて上の梯子より二階へ上がる。彦助は友市を負ぶひ、おかよ付いて向うへ入る。

いね　サア、この座敷でござります。ゆるりとお出でなされませ。お風呂を見て參りませう。

トおいね、以前の梯子を下りて奥へ入る。關の戸、二階に殘つて思ひ入れ。つゝ包みを出して

關の　ほんにマア、子供といふものは、よい氣なもの。母は此やうに苦勞して、やう〳〵手に入れた細石の茶碗。夫與五郎どのゝ手へ渡し、歸參と思へど在所が知れねば、親子して西國參りと樣を變へ、夫の行くへを此やうに、尋ね巡つて、ちつとも早う、手に入れた茶碗を

ト包みの内より箱に入れし以前の茶碗を出す。この時向うにて

三　アレ〳〵、あの二階の見える内でござります。

トこの聲にて茶碗をちやつと隱す。思ひ入れあつて、寢轉ぶ。馬士唄になり、三、先に、お關、望みの形にて一腰を風呂敷に包み、三味線に見せ、出て來て

せき　まだ餘ツほどあるかえ。

三　イエ〳〵、あの向うの內でござります。サア〳〵、阿母さん、お泊りがあるよ〳〵。

トこの聲にて、お早、お稻、出て

はや　ハイ〳〵、お泊りでござりますか。サア〳〵、お上がりなされませ〳〵。オヽ、三どの、大儀であつたの。

いね　して、あなたばかりで、お連れはないかえ。

三　イエ〳〵、お供さんがあると仰しやりました。

せき　さうでござんす。供が一人付いてゐやんす。いかう草臥れたかして、大きに後へ下がつたわいなア。必らずわたしや、一人旅ぢやないぞえ。

はや　ハイ〳〵、左樣なら、よろしうござりまする。

いね　左樣ならあなた、お御足をお濯ぎなされませ。

ト盥を持ち來る。

せき　イエ、わたしやそこまで駕籠で來たから、ちつとも足は汚れぬ。洗ふには及ばぬわいな。

いね　ハイ〳〵、あなた樣、お荷物はござりませぬかえ。

せき　アイ、何も荷物は。オヽ、荷物はたんとあれど、供の者が後から持つて來るわいなア。

三　もう見えられさうなものでござります。その、お持ちなされた三味線のやうな物は、何なら女子どもにお預けなされませ。
せき　イエノ〳〵、こりやわたしが大事の物ぢやによつて、矢ッ張りわたしが側に置かにやならぬわいな。して、わたしが落ちつく座敷は、どこでござんすえ。
はや　アイ、どちらでもようござりますが、お供さんの參るまで、爰に落ちついてお出でなされませ。
せき　エヽ、この見世端に居るのかえ。
はや　ハイ、お供さんの目にかゝるやうに。
せき　イヤモウ、此方は隨分、目にかゝらぬ所がようござんすぞえ。
はや　これはしたり、わたしや又、供の衆の目にかゝる所がよいと存じまして。そんなら、どこがようござりませう。
トせき闇、方々を見渡して
せき　モシ、婆さんえ。どうぞ二階へやつて下さんせ。
はや　アイノ〳〵、畏まりました。二階にはお客さんがござんしたが、幸ひ女中さんでござります。コレ、いねや、あなたを二階へお連れ申しや。

いね　ハイ、畏まりました。サア、お客樣、お出でなされませ。
せき　こりやお世話でござんす。シタガ、女中客とあれば、此方は氣遣ひはないが、もし彼方が相客はお嫌ひやら知れぬゆゑ、そこへ此方から押しかけて
いね　左樣な事もござりますか、ちよつと聞いて參りませう。
三　さうして進ぜ申さつし。おいねぼう、聞いて來さつし。
いね　アイ〳〵。

ト二階へ上がり、關の戸が側へ來て

いね　モシ、お客樣え。ちつと御無心がござります。只今定宿のお客樣がお出でなされましたが、お一人は女中樣でござります。お供が一人、後からお出でなさるさうでござりますが、其お女中樣が、二階がよいと仰しやるゆゑ、どうぞ此お座敷へ、隔てを入れます程に、どうぞ半分お貸しなされて下さりませ。
關の　そりやマア、念の入つたお屆け。座敷を仕切るには及びませぬ。お連れ申したがよいわいな。
いね　それは有り難うござります。

ト梯子を下りて

ハイ、あなた様、よろしうございます。サア、お荷物はわたしが

ト包みへ手をかけるを、お關、思ひ入れ。

せき　アイヤ、こりやわたしが持つて行きやんせう。大きに世話になりますわいの。

はや　なんのマア、商賣づくぢやもの、お世話いたしませいで。

三　阿母様、旅籠はいくらでもよいと仰しやるから、御膳を氣を付けてあげて下さりませ。

はや　アイ／＼、心得ました。殊に今宵は名月でもあり、二階はお月見には、きつとよい見晴らしでござります。

せき　エヽ、そんなら今宵は月見でござんすかえ。

三　左やうサ。モシ、阿母さん、團子汁が出來たら、あげなされませ。

はや　ほんに、お慰みにはよからうかいなア。

せき　イエモウ、お世話なされて下さんすな。年に一度のお月見さへ、今日は幾月、幾日やら、心も心ならぬゆゑ、月は冴えても冴えやらぬ、胸の曇りは

ト お早と顏を見合せ、思ひ入れ。

曇りはせんかえ。

はや　イヽエ、よう晴れで居ります。
三　お連れ申さつし。
いね　サ、斯うお出でなされませ。
　　ト合ひ方になり、お早、三、暖簾の内へ入る。おいれ先へ、お關、付いて二階へ上がる。
いね　ハイ、お連れ申しました。サア、これへお出でなされませ。お枕をあげませう。
せき　これはお世話でござんした。
いね　アイ〳〵。ドリヤ、お風呂を見て參りませう。
　　ト梯子を下りて奥へ入る。關の戸、起きあがり
關の　これはしたり、御免なされませ。あなた様、お草臥れでござりませう。
せき　アヽモシ、矢張り左様なされませ。其やうにお心遣ひなされましては、却つて迷惑に存じます。
　サヽ、横になりなされませ。
關の　イエモウ、只今まで臥つて居りました。
せき　イエモウ、暑さの時分の御道中は、お互ひに一倍草臥れが強うござります。して、お連れ様わえ。
關の　アイ、連れと申すも、わたしが忰でござります。幼少な者ゆゑ、一倍と道中に骨が折れますわい

な。

せき　それはマア、大抵ではございますまい。御子息様とお前様とお二人でございますかえ。して、お供はございんせぬかえ。

關の　アイ、成る程、供もございましたが、心惡いと申しますゆゑ、道から歸しまして、誠に親子二人でございます。只今宿へ着くと早々、お味方祭とやらが見たいと申しまして、宿の女中さんが連れて、伏見の稲荷様へ參りました。して、お前さんは、お供さんがあるぢやございんせぬかえ。

せき　ハイ、供もございましたが、いかう草臥れましたゆゑ、今晩爰へ尋ねて參りますやら、後の宿へ泊りますやら、ほんに益體がございませぬ。ホヽヽヽ。

關の　イヤモウ、道中と申しますものは、心遣ひなものでございます。して、お前さんは、供をお連れなさんして、どれからどれへお通りなされますえ。

せき　アイ、私しは大阪の新町の者で。

ト思ひ入れ。

イエ〳〵、大阪の者ではございませぬ。アイ、わたしが國は遠い。アノ、なんでございます。オオ、それ〳〵、慥か長崎でございます。

闘の　エヽ、アノ、長崎のお方でござりますかえ。してマア、長崎から女子のお前さんが、どれへお出でなされまするのでござります。

せき　ハイ、わたしや長崎から、アノ、参りまする先は、アノ、なんでござります。オヽ、それ〳〵、伊勢参りを致しますわいな。

闘の　エヽ、長崎から伊勢参りなさるのかえ。それはマア、はる〴〵の所を、ようマア参宮なされますな。

せき　いかう遠いけにござります。して、お前さんは、どれへお通りなされます。

闘の　アイ、わたしや悴を連れて、西國札所順禮いたして廻りますが、これから又段々と江戸へ下りまして、秩父坂東も打ちませうと存じまして、わざ〳〵札を納めに参りますわいな。

せき　それはマア、お奇特な事でござります。して、今までどこを打つてお出でなされました。

闘の　アイ、今まで、何を打ちましたわいなア。何とやら申しました。オヽ、それ〳〵、今まで親と頼みし笈摺を脱いで納め、ほんに美濃の谷汲とやらを、打つて参りましたわいな。

せき　ハテ、よい所を廻つてお出でなさんした。どうか今仰しやつた谷汲とやらは、わたしや御詠歌といふ本で見ましたが、あの一番は、岸打つ浪は三熊野の、わしのお山に響く瀧津瀬、とやらいふ

所へも、お出でなさんしたかえ。

關の　アイ、それは那智のお山といふのでござんすわいな。

せき　その熊野とやらは、きつい難所ぢやげにござんすな。

關の　アイ、モウ、難所どころか、いかう怖い山ぢやによつて、足の痛むといふものは、モウ／＼、劍の山へ登るやうでござんすわいな。

せき　その熊野の山に、大きな瀧があるぢやござんせんかえ。

關の　ある段かいな。大きな瀧が、どう／＼と落ちてナ、その瀧の水の中に、大きな鯨が登つたり下つたり、なんぼも居りますわいな。

せき　モシ、鯨は海に棲む物ぢやござんせぬかえ。

關の　イエナア、海ぢやござんせぬ、川鯨、瀧鯨というてナ、アノ鯨が夥しう、瀧登りして居ましたわいな。

せき　道理で江戸では、冬になりますと、山鯨といふ見世が出ますわいな。ホヽヽ、ハテマア、珍らしい事を見てお出でなさんしたなア。シタガ、お前は順禮、わたしは拔け參り。これがほんの神道佛道の乘合船、面々に行く先は同じ極樂、一蓮託生、南無妙法蓮華經。

關の　ハテ、お前は氣の輕いお方さんぢや。お前のやうなお方を道連れにして道中したら、さぞよい慰みでござんせうに、モシ、お前さんも、お連れはあると仰しやつたが、そりや大方、愛しい殿御とたつた二人、差合ひ食はぬ拔け參りでござんせうなァ。

せき　イヽエイナア、わたしやその愛しいと思ふ男を尋ねて歩く、拔け參りでござんすわいなァ。

關の　サヽ、さう見えるわいな。有やうはわたしも、夫の一人の悴を連れて、順禮するも、その殿御の行くへを尋ねて歩く者でござんすが、して、お前の尋ねなさんす殿御といふは、お武家さんか、町人衆かいな。

せき　アイ、わたしの尋ねる男といふは、侍ひでござんすわいなァ。

關の　エヽ。ハテ、似た事もござんす。わたしが尋ぬる男といふも、矢ッ張り武家ぢやわいな。

せき　ハテ、そりや身につまされておいとしうござんす。此やうにマァ、一つ宿で話し會ふも、これも他生の緣とやら、誠に旅は道連れ、世は情とやらぢやわいな。

關の　サァ、さうお前が賴もしう云ひなさんすりや、どうやらわたしも、お前と御一緒に、互ひに男を尋ねて歩きたうござんすわいなァ。

せき　して、お前さんは、これから、どこを尋ねて見さんすお心ぢやえ。

關の　アイ、これからわたしや、高野の方を尋ねて見ようと存じまする。

せき　エヽ、まだ高野へはお參りなさんせぬかえ。

關の　アイ、まだ參りませぬが、結構なお山ぢやさうにござんすなア。

せき　アイ、また結構といへば、アノ山崎に陣取りして、主殺しの惡名を取りなさんしたも、世上の爲

といひながら、結構過ぎたお心から

ト思ひ入れ。關の戸もこなしあつて

關の　サア、その結構な心を知らぬ世の人口、武士も土民に劣つた愚蒙。アヽ、思ひ廻せば

ト思ひ入れ。

せき　心ならぬ人は何とも云はゞ云へ、身をも惜しまじ、名をも惜しまじ。

トお關、こなし。

關の　高野山、峰の嵐は烈しくとも、この場を後の世までも。

ト兩人顏見合せ、互ひに枕を取つて

兩人　ドレ、寢てお話し申しませうか。

ト唄になり、兩人こなしあつて、横になる。これをキッカケに、欄間の簾下りる。二人を隱す。矢張

り時の鐘、合ひ方。奥より郷左衞門、窺ひ出る。跡よりお早、出て來り

はや　モシ〱、こりやマアあなたは、何れへお出でなされます。

郷左　最早この家に一宿は罷りならぬ。これより直ぐに外の宿屋を頼み、今宵の宿り。乳母、何かと其方が心遣ひ、過分なぞよ。

ト行かうとする郷左衞門へ縋つて

はや　アヽモシ、折角お宿いたしたに、何がお氣に入りませぬぞ。

郷左　心に叶はぬ事もなく、幸ひなるかな、身共の尋ぬるその女め、折よく、今宵泊り合せしは、神佛の導きなれど、茲に一つの難儀といふは、今一人の泊り客、彼奴に逢うては、この身の大事と存ずるゆゑ、雲助宿に一夜を明かし、命知らずのあぶれ者を手なづけ、人知れずバッサリといはする工面。それゆゑこの家を立退くのぢや。

はや　それ程までに、逢うては惡いと仰しやる、相客の女中とあれば、もしや二階の

郷左　二人が二人、迂濶に逢うては、この身の上に。

はや　そんなら、あなたは世間を憚かる今の御身、邪ま非道な事ゆゑに、木にも茅にもお心を

郷左　サア、頼みし仕官の願ひ、首尾よう整ふ手がゝりは、身が手にありし日本丸の一腰も、又ぞろ物

した物を物され、一腰が出さへすれば、その時仕官にありつくと、記せし文言、これ見て様子を

ト手紙を出す。この時二階にて手を叩く。

ヤ、逢うてはこの身の

トつかつかと門口へ出かゝる。

はや　アヽモシ、その手紙を

郷左　殘らず様子が

はや　密かに讀んで

ト郷左衞門、立ち身に内へ投げ込む。取り誤まつて引窓の間へ投げ込む。

南無三、狀は引窓の間へ。

郷左　あの大切な狀をどうして

ト門口へ出ようとする。向うを見て

ヤ、向うへ來るは慥かに與五郎。向うへはとても

トつかつか又内へ入る。お早、見廻して、上の方の戸棚を明け

はや　モシ、暫らくこれへ。

郷左　合點ぢや。

トつか〳〵と戸棚へ入る。お早、戸を立てる。この時、また二階で手を叩く。お早、こなしあつて

はや　アイ〳〵、只今參りまする。コリヤ、女子どもは居やらぬか。アノお二階で。これはしたり、また年寄りに世話燒かすぢやわいな。

トてんつゝになり、お早、二階へ上がる。この鳴り物にて、與兵衛、出て來る。後より、與五郎、聲かけながら出て

與五　モシ〳〵、お泊りでござりますか。もう黄昏でござります。お泊りなされませ。私しが御案内いたしませう。

トこれにて與兵衛、嘲笑つて

與兵　コレ〳〵、この人は何を云はつしやるのだ。あの南方屋はわしが内だわな。この頃爰へ來た宿引さうな。

與五　ハイ〳〵、左樣でござります。有やうは一兩日此かた、問屋場の物書に入りましたゆゑ、南方屋の旦那とも存ぜず、不調法を申しました。イヤモウ、お留守の間、どういふ事か、あなたのお宅へ參じまして、阿母樣の大きにお世話になりまして

與兵　そりやようごんした。定めし留守のうち、女どもや阿母が、何かと世話でござつたらう。

與五　イエ〳〵、やう〳〵一昨日から、お宅へ雇はれまして、まだろく〳〵な

　　ト兩人、顏な見合せて

ヤ、與兵衛といふは以前の若黨、そちや十次兵衛ではないか。

與兵　左様仰しやるあなたは、若旦那、勝鹿與五郎さま。

與五　コレ。

　　ト合ひ方。與兵衛こなしあつて

與兵　すりや、今以つてお尋ねなさるゝ品は。

與五　サア、手がゝりなきゆゑ、詮議の爲、この宿屋を窺ふところ、其方が家とも存ぜずして、老母が世話に、この程は、名前も卽ち長五郎。

與兵　それと申すも主從の、御緣盡きざる若旦那、私し方に暫らくのうち逗留。實の母ぢやござれども、お願ひある身なれば、矢張りあなたを知らぬ振り。家内の者にも、あなたの事を

與五　必らずともに他言は無用。初めて逢うた與兵衛さま。

與兵　お許し請けて、長五郎どの、サア、ござりませ。

ト唄になり、門口へ來り

モシ、阿母、いま歸りましたぞえ。

トこの聲に、おいれ、行燈を持つて出て

いね　旦那樣、お歸りでござりますかえ。阿母樣は只今、お二階でござりました。マア〳〵、行燈をこれへ置きませう。

トよき所へ行燈を置き、丸行燈を二階へ提げて上がる。

與兵　サア、長五郎どの、入らつしやりませ。

與五　ハイ〳〵、御免なされませ。阿母樣は。

與兵　これは如何な事。オヽ、誰れも居らないか。

ト思ひ入れ。

はや　オヽ、與兵衛、戻りやつたかいなう。

トお早、おいれ、二階より下り來て、おいれは暖簾口へ入る。

與兵　ハイ〳〵、直ぐに戻らうと思ひましたが、ちつと別に用事が出來て、大きに手間どりました。

與五　モシ、阿母樣、與兵衛さまがお歸りで、さぞ御安心でござりませう。

はや　オヽ、こりや長五郎どの、戻らしやんしたか。して、問屋の用向きは何でござります。

與五　イエモウ、別の事でもござりませぬ。助郷の相談、外様の並に決して洩れは致しませぬと申して戻りました。

はや　オヽ、そりや世話でござんした。イヤ、コレ、與兵衛や、此お方は、長五郎どのというて、この間からこの宿へござんした、問屋場の帳付けやら何やら、それは〳〵心安う、其方の留守中、此方の內へも

與兵　ハイ、左樣さうにござります。いま道で逢うて、委細を聞きましたが、一體、此お人は、先度から懇ろなお人でござります。

はや　オヽ、それは幸ひ、知る人で、この末ともに懇ろにして下さんせ。ほんに、まだ足も洗ふまい。

與兵　イヤ〳〵、いま道で足も洗うて來ました。

ト此うち與五郎、盥へ水を入れて持つて來る。

與五　サア、與兵衛さま、お洗ひなされませ。

與兵　これはしたり、足の湯までは勿體ない。戴きます〳〵。

與五　これはどうでござります。何を其やうに。モシ、この上ともに、お心安うお頼み申しませう。

與兵　イヤモウ、お互ひの事でござります。ほんに阿母え、この腰の物、奥の戸棚へしまうて下さりませ。

はや　オイ〳〵、心得ました。

ト一腰を受取り、小柄を見て

コレ、與兵衛や、こりや見馴れぬ小柄ぢやが、ハテ、結構な。オヽ、模様は何ぢや。

與兵　ハイ、模様は菜種に二羽の蝶、後藤祐乗が、高彫りの、結構な小柄でござります。

ト合ひ方になり、二階の簾上がる。お關、高欄にもたれ、引窓より下の内を窺ふ思ひ入れ。この體を關の戸、目を付けて思ひ入れ。戸棚そつと明く。小柄と聞いて郷左衛門窺ふ。與五郎、こなしあつて

與五　すりや、その小柄は、後藤の彫の菜種に蝶とな。

與兵　御覧じませ。

ト差出す。與五郎取つて

與五　ドレ。こりやコレ尋ぬるお家の重寶、日本丸に添へてあつたこの小柄。與兵衛どの、アイヤ、與兵衛さま、どうしてこれを

與兵　拾ひました。

與兵　サア、拾つた所は淀川の、堤づたひの雨あがり、足元暗き橋本の里、裏手の藪際。捕つた〳〵と大勢の、人聲を聞いたゆゑ、何事やらと窺へば、堺の乳守で山崎の、渡し船漕ぐ與次兵衛が、一腰を所持したばかりに、切られたともいひ、様々な、しかと様子は知らねども、その殺し手は養子娘の業と、嚴しい詮議。

與五　ヤヽ、その與次兵衛なら養父の親、どうして輕い船頭が、その一腰を持つたる不思議。されども首尾よう一腰が、手に入つたるか、どうぞ様子が。それにしても女房が、その與次兵衛を手にかけては。

與兵　すりや、與次兵衛と申すのは、あなたの爲には養父にて、女房と只今仰しやつたのは、さては連れ添ふお方の、女の手業に人殺し、それを思はず私しが、拾ひ參つたこの小柄。

與五　さては一腰手に入れんと、可哀や女房が人殺し、いよ〳〵それに極まれば、科は重なる親殺し、天下の罪にかゝつた科人。

はやして又、その一腰を奪ひし者は。

與五　我れを覗ひし岡島丹平。

はや　エ。

ト悧りする。郷左衛門、思ひ入れあつて立つ。二階の二人、引窓より窺ふ。影、盥の水へ三人の顔映る。きつと見て

與五　いづくよりか窺ふ男子。

與兵　あの引窓より覗くは女中。

與五　慥かに戸棚に。

トかゝるを、お早、支へる。與兵衛、盥を打かへし、直ぐに引窓の綱を引く。この時お早が隠したる手紙、バラ／＼と落ちる。與五郎取つて、狀の名宛を見て

與五　平岡氏へ、大友家中辻浦一角。さては

ト驚ろきのあまり落す、與兵衛、ちやつと取つて懐中する。郷左衛門、戸棚へ隠るゝ。二階も思ひ入れ。簾下りて兩人の姿を隠す。唄になり、與五郎、小柄を持ち、與兵衛が懐中、また戸棚、二階へ、三方へ目をつけ思ひ入れ、

與五　與兵衛さま。

與兵　長五郎どの。

與五 小柄は、あなたへ。

ト思ひ入れあつて差出す。與兵衛取つて

與兵 しかと私し……アイヤ、わしが慥かに預りました。

ト唄になり、與五郎、思ひ入れあつて奥へ入る。與兵衛、思ひ入れ。お早窺ひ、側へ差寄つて

はや コレ、與兵衛、今思はず、引窓の、間より落ちたその狀は、何と書いてある事やら、樣子は知らぬ老の老眼、わしが勤めた岡島丹平さま、其お方が、先刻爰へ

ト思ひ入れ。

與兵 わしが勤めた勝鹿さまと同家中、その岡島の何某こそ、コレ、この小柄の日本丸、外にお家の重寶の品々、盜み取つて、一腰はコレこの如く、それを手蔓に仕官の願ひ、今のその名は鄉左衛門、以前は岡島丹平とて、勝鹿とは仇ある仲。

トこの時、戸棚の戸を明け、鄉左衛門窺ふ。

はや サヽ、その仇人とも露知らず、以前のよしみに是非なくも、隱まひ申した、戸棚の内。其方の留守に問屋から、使つて來りし長五郎、正しくあなたは。

與兵 わしが以前の若旦那、與五郎さまとはあなたの事。いま來る道でお目にかゝり、委細を聞きしに

尋ぬる品々。それを差上げその身の有つき。わしは飽まで與五郎さまに。

郷左　遺恨の元は皆色ゆゑ。心をかけし藤屋の都。子仲まである腹立ちに、浪人させたは身が仕業。人を呪はゞ穴二つ、手に入る劍も、やみ／＼人手へ。

與五　さういふ聲は平岡どの。寶の行くへは慥かにこなたが、

ト立ちかゝるを、お早、支へる。郷左衞門、嘲笑つて

郷左　われが爲には實の母でも、身共が乳母なりや、其方も矢ッ張り家來同然。殊には身共と乳兄弟。それでも我れに刃向ふか。

與兵　サア、それは。

郷左　どうして。指でもさして見ろ。

與兵　サヽ、その惡人と知りながら、母の爲には主といふ、一字あれば、どうも手出しが

ト無念のこなし。

はや　サア、邪しまのお人でも、わしが爲にはお主樣、その方へ參りし手紙、どうぞ母が貰ひたい。コレ、悴、わしが願ひぢや。どうぞ密書を

ト思ひ入れ。

與兵　エヽ、思へば御主人與五郎さまの、手がゝりになるこの狀を、主人へ渡せば母者人の、主と頼みし平岡どのゝ、その身の訴人を乳母の身で

鄕左　よもやなるまい。それともわれはその狀を、與五郎へ渡す心か。

與兵　サア、渡せばこの身の忠義となり、母が却つて不忠者。さすれば出すにも出されぬ密書。

はや　サア、それぢやによつて、どうぞわしに。

與兵　さほどに母の氣苦勞を、見て見ぬ振りもなりますまい。以前は若黨十次兵衞、今は町人のこの與兵衞。武士の心をさつぱりと、離れてしまへば母への寸志、お前の見る前

ト圍爐裏へ打込む。パツと燃える。

はや　それでわしも。

鄕左　第一、身共が。

與兵　ヤ。

鄕左　安堵したわえ。

ト時の鐘。戸をばつたと閉てる。二階にて

關の　モシ、お宿のお方え。風呂をお頼み申します。

與兵　ハイ〱。もうよろしうござりませう。コレ、阿母

はや　ドリヤ、風呂を見て來ませうか。

ト唄になり、お早、與兵衞、暖簾口へ入る。この時、二階の簾上がる。お關、轉寢してゐる。奥より

おいね出て、直ぐに二階へ上がり

いね　ハイ、お湯がようござります。お召しなされませ。

關の　アイ〱。沸きましたかえ。

ト思ひ入れ。

モシ〱、お前さん、風呂へお入りなされますかえ。

ト搖り起す。お關、空寢入してゐたりしが

せき　アイ。イエ〱、マア、お前さん、お先へお入りなされませ。

關の　モシ、遠慮なされますな。

せき　道中で、なんの遠慮いたしませう。サ、お前さん、お入りなされませ。

關の　左樣なら、湯の辭儀は水になるとか申します。お先へ。

せき　左樣なされませ。

關の　アイ〳〵、友市はもう歸りさうな。何をマア見てゐる事やら。早う戻つて風呂へでも入ればよいに。

いね　ハイ、もうお歸りでござりませう。

ト此うち關の戸、上着脫ぎ、持參の包みをよき所へ纏めて

關の　モシ、あなた、荷がござります。お賴み申しますぞえ。

せき　ハイ〳〵、わたしが見て居ります。ゆるりとお召しなされませ。

いね　サア、斯うお出でなされませ。

ト合ひ方になり、關の戸浴衣になり、下紐を締め、手拭を持ち、おいれ先に、梯子を下り、風呂の方へ入る。お關、思ひ入れ。

せき　養父の親といふものゝ、以前夫の親御の情にて、矢ッ張りわしと同じ心でありながら、耳の遠いに無筆の悲しさ、渡してもよいわしに、隱す心で思はぬ死を、遂げたも現世のアヽ約束事で。

ト思ひ入れ。

命惜しくはなけれども、あの伯母さんへの氣休めと、詞についてこの一腰を、わしが手から與五郎どのに渡す、それまでは大事のこの身。殊に落せし小柄の噂、菜種に狂ふ二羽の蝶、後藤祐乘

の細工あれば、いよ〳〵違はぬ、この一腰の

ト包みを持ち下家を窺ふ。ト風呂の方に

三　モシ、熱くばうめてあげませうか。

トこの聲にお關、思ひ入れあつて、持つたる包みをよき所へちよつと隱し、ホツと思ひ入れ。この時、てんつゝになり、向うより用助、觸れ書を持ち出て、門口へ來て

用助　モシ、お頼み申しませう。モシ、お觸れでござります。阿母さん〳〵。

三　オイ〳〵、誰れだ〳〵。

ト出て來て、

ア、、用助か。阿母さんは、今お看經だ。用は何だ。

用助　アイ、お觸れがあつて、人相書を持つて來ました。

トこの時、お關、二階にて窺ふ。鄕左衞門、戸棚をソツと明けて窺ふ。

三　ナニ、人相書だ。そりやア誰れが人相書だ。

用助　誰れだか、そりや知らないが、女の人相書だよ。

トこれにて鄕左衞門、戸棚の戸を締める。お關、聞き耳する。

三　その女は、何の科で尋ねられるのだ。

用助　コレ、聞かしやれ。その女は、盗人だとよ。

三　ナニ、女の盗人。ハテ、とんだ太い女だ。名は何といふ……アヽ、お關といふのか。

ト これにて、お關、キツとなる。

用助　コレ〳〵、この人相書にある女、ひよつと泊るまいものでもない。泊つたら早速、問屋へ知らせさつしやれ。そりやそこらへ貼つて置くがよい。

三　オツト合點ぢや。置いて行かつし。

用助　必らずそんな旅人を泊めまいよ。ドリヤ、中宿へも觸れて

ト 人相書を三へ渡して向うへ走り入る。

三　てもマア、女の盗人とは、どんな奴か、見てやりたいものだ。

ト 奥よりおいれ、出て來り

いね　コレ、三どの、阿母さんが、何の觸れぢやと聞いてゐなさんすわいな。

三　此お觸れは、女の盗人サ。何だが書いてあるが、おいらにやア讀めない。おいねぼう、讀んで聞かせろ。

いね　これはしたり、わたしぢやというて、其やうな四角な文字は讀めぬわいなア。

三　エヽ、埒の明かねえ。いゝワ、どうで二階のお客へも觸れねばならぬ。おれが持つて行つて讀んでもらふから、てまへも一緒に來て、よく覺えて、阿母樣に話すがよい。サア、來や〳〵。

ト二階へ上がる。お關、この聲にて横になり、聞かぬ振りしてゐる。

いね　ハイ、御免なされませ。御寐なりましたかえ〳〵。

三　モシ、只今お風呂が明きますぞえ。

せき　アイ〳〵、さて夥しう蚊の居る内ぢやなう。

三　イエモウ、この宿は蚊が素敵に居ります。モシ、今お一人のお客樣は。

せき　ハイ、まだお風呂ぢやわいな。さうして、お前方は、何ぞ用でもあつてかえ。

三　イエ〳〵、別の事でもござりませぬが、お代官樣から、お關といふ女の盜人の御詮議で、お觸れが廻りましたが、しかも人相書でござります。モシ、御無心ながら、ちよつとお讀みなされて、お聞かせ下されませ。

ト差出す。お關、取つて

せき　なんと云ひなさんす。これがアノ、お關とやらいふ女の盜人の、御詮議でござりますかえ。

三　左樣でござります。ハテサテ、世間には、太い女があるものでござりますてな。

せき　アノ、女子の身で、人の物を盜むといふは。

いね　大それた女中もあるものでござります。得て左樣な女中は、器量がよいものでござります。

せき　アヽ、わたしが見ても讀めればよいが。

ト披き見て

一つ、年の頃廿三四の女、中肉にして中脊、色白く、顔面長く、目元淸やかなる方、鼻筋通りて口元常體、生國は丹州龜山に住ひ致し、浪人の妻にて、着類等には目をかけず、金銀又は茶器の道具は取分け盜み取り候ふ由、殊更志賀郡鷹野先に於て、細石の茶碗を騙り取り候ふ不敵の女、見當り候はば、早速訴へ出づべく候ふ。もし隱し置き候はば、曲事たるべき事。卽ち放れ駒のお關と綽名いたし候ふ。月日、伏見町役人へ、代官所。

ト段々と讀み、我が事でなきゆゑ、ホツと安堵の思ひ入れ。

嬉しや、これではわしが事では

兩人　エ。

ト お關、思ひ入れ。

せき　サア、わたしに讀めればよいと思うたに、どうやらかうやら讀みあげたまゝ、マア嬉しやと、落ちついたわいなア。

三　イヤモウ、長い事を、よく文字が走りまして。ほんに走るといへば、その女盗人は、どこへ走りましたやら。コレ、おいねどの、此やうな女の旅人を泊めまいぞ。ドレ〳〵、爰へ貼つて置きませう。

ト捨ぜりふにて三、人相書を壁のよき所へ貼つて

いね　サア〳〵、これでよし〳〵。ハイ、これはお世話樣でござりました。只今、御膳をあげますぞえ。

ト合ひ方、右兩人、二階を下り、奥へ入る。

せき　人相書とあるゆゑ、この身の科と思ひの外、同じお關といふ女。ハテ、似た事もあればあるものぢやわいの。

トこの時關の戸、内よりあがりて來り

關の　さて〳〵久しうかゝりました。その替りに道中の垢を、よう流しました。サ、好い加減でござります。お前、お召しなされませ。

せき　ゆるりとお入りなさんすりやよいに。
關の　イエモウ、長う入りました。
　　ト包みを取る。
せき　左様なら、わたしもちよつと、入つて參りませう。
關の　隨分ゆるりと、お召しなさんせいな。
せき　ハイ〳〵。
　　ト細帶になり、手拭を持ち
モシ、あなた、御面倒ながら、この包みを
關の　わたしが、キツと番を致して居ります。ゆるりとお入りなさんせ。
せき　アイ〳〵。お賴み申しをす。ハテサテ、きつい蚊ではあるわいな。
　　ト時の鐘、唄になり、梯子を下り、お關、風呂場へ入る。この唄をかり、向うよりおかよ、友市を負
　　ひ、友市、祭の竹槍を持つて出て
かよ　なんと、面白い事でござりませうがな。
友市　アイ、舞を舞うた人は何ぢやえ。

かよ　ありや皆、坊さんでござります。法師武者の鎧着た形、きつう暑さうでござんした。

ト捨ぜりふにて舞臺へ來り、二階へ上がり

ハイ〳〵、只今戻りました。

關の　これは女中さん、お世話でござんした。藤の森のお祭かえ。

かよ　左様でござります。

友市　モシ、母さん、わしや此やうな竹槍を貰うて來ました。

關の　オヽ、こりや竹槍ぢやないかえ。

かよ　アイ、それが卽ち、今日のお祭で、參詣の衆が皆受けて歸ります。また來年、二本にして納めます。それゆゑお槍祭とも、お味方祭とも申しますわいな。

關の　オヽ、其やうなお祭も、慥かお江戸の王子にもござんしたわいなア。

かよ　左様ぢやさうにござります。

關の　お前、こりやお世話でござんしたな。

かよ　アイ〳〵。

ト二階より下りる。向うより彥助、觸れ書を持つて出て來る。

彥助　モシ〳〵、お觸れが來たよ〳〵。
かよ　オヤ、彥助どん、何のお觸れぢやえ。
彥助　コレ〳〵、聞かつしやいな。お祭を見てから、山崎の軍を見物に行かうと思うたら、問屋場の親仁が、駈落ちの觸れがあるから、宿中へ觸れて來いと云ひ附けゆゐ。さて〳〵、小意地の惡い爺イめだ。
かよ　して、その駈落ち者が、此方の內にでも來て居るのかえ。
彥助　サア、その段は知れないが、なんでも駈落ち者のお尋ね者だ。モシ、爰の內に置いては、惡いよ惡いよ。

ト此うち戸棚の內より、鄉左衞門窺ふ。三、出て來て

三　コレ〳〵、彥助どん。お觸れ〳〵と、此方の內へは、もうお觸れは來てしまつたよ。
彥助　外のお觸れだ。
三　何のお觸れだ。
彥助　こりや女の盜人サ。

ト關の戸、聞き耳する。

三　それ見たか。女の盗人の走りは、もう此方は濟んだ。てまへは遅蒔きだ。外の内へ持つて行くがよい。

彦助　イエ〳〵、こりや外のに違ひない。ハテ、名はお關といふワ。

ト關の戸、これにて、友市、居眠るゆゑ、片脇へ寢させて、これはト思ひ入れ。

三　べら坊め、先刻來たもお關といつたワ。情の剛い。持つて行きやれといふに。

彦助　イエ〳〵、何でもこりや、別のお觸れに違ひないよ。

三　そんならてまへ、讀んで聞かせろ〳〵。

彦助　エヽ、間拔けめ、讀んで聞かせたいが、おいらア今から、天王山の軍を見に行くわえ。

三　エヽ、うつかり軍を見に行つて、鐵砲でもくらふな。

彦助　おきやアがれ。鐵砲は食はねえが、おいらは此ぢう假宅へ、鐵砲を放しに行つた。

三　成る程、こいつは鐵砲客といふ代物だ。

彦助　おかたじけ。これから山崎の軍を見て來て、話さうか。

三　そいつは面白からう。早く見て來さつし。

彦助　合點だ〳〵。ドリヤ、これから軍見物。

ト一散に向うへ入る。

かよ　コレ〳〵、三どの、そのマァお觸れ書は、何でござんす。

三　聞かつしやれ。先刻もこんな女のお觸れが來たが、あの二階のお客様に讀んでもらはう。矢ッ張り大方、其お關であらうよ。

かよ　それでも違うてあると云うたぞえ。

三　マア、何にしろ、もう一遍二階のお客に讀んでもらはう。

ト二階へ上がる。關の戸け荷物を片付け、身支度してゐる。

ハイ、御免なされませ。

ト關の戸、悄りして

關の　エヽ、誰れぢやぞいな。

三　先程はむづかしい事お頼み申して、ハイ〳〵、又參りました。

關の　先程むづかしい事をとは、そりや、何の事ぢやえ。

三　ソレ、お前さんに、人相書のお觸れを、あなた

ト思ひ入れあつて

これはしたり、先刻のお客様ではなかつたに、不調法千萬な。私しとした事わえ。ハヽヽ。モシ、お客様え、先程女盜人のお觸れが廻りましたから、相宿の女中様に讀んでもらひ申しました。また只今、女盜人のお觸れと申して參りましたから、先程のお客様に讀んでおもらひ申しませうと存じまして。して、あのお女中様は。

關の　アイ、いま風呂へ行てでござんす。

三　左様なら、どうぞおむづかしながら、お前様、これをお讀み下さりませ。

關の　そんなら、なんと云はしやんす。これがアノ、女盜人のお觸れかえ。

三　左様でござります。世間には怖い女もあるものでござります。

關の　女子の盜人とは、餘り承りませぬ。成る程、恐ろしい女子のお尋ね者。此やうなお觸れ書を讀むも、マア〳〵、怖うて、この身がゾク〳〵して、ほんに齒の根も合はぬ程、怖うて〳〵

ト關の戸、書き物を擴げ

一つ、年の頃廿歳餘りと見え候ふ女、中肉にして中脊、色白く、鼻筋通り、口元尋常。耳常程、左の高頰に一つの黒子これあり、生國は知れ申さず候ふ、これまで大阪新町にて仲居奉公いたし候ふ由、この者養父親、山崎の船頭與次兵衛と申す者、殺害なし、女に似合はぬ一腰を所持いた

し候ふ、堺の乳守の廓を立退くものなり。即ち濡れ髪のお關と申す女に御座候ふ。月日、伏見町役人へ、代官所。

ト讀みしまひ、思ひ入れあつて

同じその名の關とやら、異名は替れど、濡れ髪の、女子の身にて親殺し。ア丶、これも拔差しのならぬ譯から出來た事。女だてらに一腰を

ト お關が賴みし包みに目をつけ

人相書の樣子では、どうやら似寄りの

ト風呂の方に思ひ入れ。

怖い女中でござんすなう。

三　左樣でございます。そんなら彼奴が云ふ通り、先刻のと思つたが、また外だわえ。何にしろ、爰らへ貼つて置かう。

關の　さうさんせいな。

ト三、右の觸れ書を、よき所へ又貼つて

三　これは、お世話樣でございます。

ト下りて奥へ入る。

關の　我が事と思ひしに、わしに上越す大膽な
ト思ひ入れ。風呂の方にて

せき　イエ〳〵、ぬるうはござんせぬわいな。
トこの聲に關の戸、横になつて思ひ入れ。お關、浴衣を抱へて出て來り、あたりを窺ひ、桔梗つなぎの關の戸の守り袋を出して、よく〳〵見て
桔梗つなぎの古金襴。心覺えのこの裂れは
ト襟に掛けし守り袋と、ちよつと見比べて
ヤ、わしが守りのこの裂れと、寸分違はぬ上からは、もしや二階のアノお方は
ト思はず云ふ。この聲に關の戸

關の　お前さん、もうおあがりかえ。
トお關、ちやつと守を懷中する。

せき　アイ〳〵、大きに長湯を致しました。
ト二階へ上がり、知らぬ顔にて

マア、お前さん、熱い湯がお好きでござんすなア。いつそ私しは、熱うて〳〵、身内がピリ〳〵と、わたしや水をたんとうめてもちひました。

關の　エ丶、お前はぬるい湯がお好きかえ。わたしや又、暑い時分は、ちつとサツパリしたがようござんすわいなア。

せき　ほんに、お前さんに、さう申さうと思うてﾞ、モシ、あなた、今わたしが風呂に居りましたら、向うの掛け竿に、コレ、この守が掛けてござりましたが、あなたのぢやござりませぬか。

ト右の守を隱し、一ツの裂れゆゑ我が守を出す。

關の　ほんに、わたしのでござります。不調法なﾞ竿へ掛けたまゝ、ツイ忘れました。これは有り難うござります。

せき　イエモウ、守を失なふと、大抵氣にかゝるものぢやござんせぬ。

ト關の戸、その守を知らずに掛ける。

イヤ、アノ、今わたしが風呂に居りますうち、この二階での高話し、なんでござんしたえ。

關の　エ丶、今の話しは、ありや、宿の男が、女子の盜人あるによつて、お觸れが廻つてと云うてナ、その人相書を持つてござんして、それを讀んであげたのでござんすﾞ

トこれにてお關、思ひ入れ。

せき　ハテナア。その女子の盜人は、先刻に觸れ書が廻つて、わたしが讀んでやりましたが、どうして又お前へ。

關の　エヽ、そんなら、お前も、先刻讀んでやりなさんしたか。そんなら女の盜人が、二人あると見えたわえ。モシ、アノ、お前が讀みなさんしたは。

せき　アイ、あそこに貼つてあるわいな。

關の　わたしが今讀んだのも、あそこに貼つて行かれましたわいなア。

せき　ドレ、其お觸れ書を

關の　わたしもお前の讀みなされたを

トト兩人立つて、壁に貼つた、お關の方の人相書を關の戸讀み、關の戸の方の觸れ書をお關見て

兩人　ドレ。

ト丸行燈を眞中に置き、誂らへの合ひ方、左右に別れて讀んで思ひ入れ。この時、奧より與五郎出て

與五　正しくこの家に忍び居る、あの曲者は慥かに平岡、引ッ捕へんと思へども、老母が義理の主と聞き、無下にもならず其まゝに、致し置いたるその上に、與兵衛が手に入つたる小柄、殊に人を殺

めし女とあるからは、疑ひもなき濡れ髪の

ト思案の思ひ入れ。

せき　一つ、年頃廿三四の女、中肉にして中脊、色白く顏面長く、目元清やか、鼻筋通り、口元常體。

ト關の戸へ目を付ける。關の戸、行燈を前へ突き出し、顏を隱す。思ひ入れ。お關、後は口の内にて讀む、思ひ入れ。

關の　一つ、年頃廿歳餘り相見え候ふ女、中肉にして中脊、色白く丸顏なる方、目元清しく、鼻筋通り口元尋常、耳常體、左の高頰に黑子。

ト讀む。お關、行燈を廻して、顏を見せぬ思ひ入れ。關の戸、後は口の内にて讀む。

せき　殊更、志賀郡鷹野の先に於て、細石の茶碗を騙り取り候ふ不敵の女、その名は卽ち放れ駒のお關。

關の　大阪新町にて仲居奉公いたし候ふ由、この者養父山崎の船頭與次兵衛と申す者を殺害なし、女に似合はぬ一腰を所持仕り、綽名に呼びし濡れ髪のお關。

せき　二人とも遁がれ難なき天の網」

關の　空は晴れゆく名月の

せき　月は一つでありながら

關の　影は二ツの
せき　關と
關の　關。
兩人　明かし合うたら。
與五　ヤ、慥かにお關。
ト二階へ思ひ入れ。
ほんに粗相な。
兩人　エ。
ト悧りして、眞中の行燈を吹き消す拍子に思はず、繪姿を放すと、風吹き散り、下へ落ちて、關の戶の繪姿は圍爐裏の鑵子の中へ入る。お關の繪姿を與五郎取つて、鑵子へ目を附け、これを引上げ見て
與五　ヤ、二枚落ちくる繪姿は、慥かに鑵子の內へ放れ駒。未然を現はす釜入りの
兩人　あの聲は慥かに
與五　コレ。
ト思ひ入れ。

雲めが月を

闇の　隠すがその身の

せき　アヽモシ、灯が消えましたぞえ。

ト思ひ入れ。時の鐘、立ち身にて、軒へ手をかける。簾、バラ／＼と下りる。與五郎、思ひ入れあつて、二枚の觸れ書を取り

與五　すりやアノ聲は、慥かに女の

トこの時、奥にて

三　アイ／＼、わしが頼みませう。

ト三、いゝゝ、伏見船場といふ弓張りを持ち出て

オヽ、長五郎どの、貴様を尋ねてゐた。おいらアちよつと船場まで行つて來るから、あの二階の客の所付けを取つてもらへと、阿母が頼み。奥の客は濟んだから、二階ばかりだ頼みますぞえ。ドリヤ、一走り行つて來ようか。

ト合ひ方、時の鐘、弓張りと、矢立の付きし帳を渡し、三、向うへ行きかゝる。揚げ幕より用助、出て來て、三に囁き、下座へ窺ひ、入る。三、向うへ行く。與五郎、思ひ入れ。

與五　エヽ、搗てゝ加へて、樣々な事を云ひつけて行き居つた。併し、二階で聞き馴れた、女の聲は、どうも合點の行かぬ。

ト思ひ入れ。弓張りと帳面を持つて、そろ〳〵二階へ上がる。この途端に簾上がる、關の戸、お關、蒲團を着て寢轉びゐる。

これはしたり、行燈が消えましたが、女子どもをお呼びなさればよいに。蚊が居りませうに。ハイ、御免なされませ。さぞお草臥れでござりませう。私しは問屋帳を付けに參じました。あなた方は、お上りでござりますか。

關の　アイ、わたしや下りでござんす。

與五　ハイ〳〵。して、あなた樣はな。

せき　アイ、わたしや大阪からちやによつて、どちらでござんす。

與五　ハイ、それはお上りでござります。して、御生國、お名前はな。

兩人　エ、アノ、わしらはナ

與五　御在所は、いづれでござります。

ト弓張りを持つて眞中へ坐る。兩人、思ひ入れ。

兩人　ヤヽ、こなさんは。
與五　お關ぢやないか。
せき　さう云はしやんすは與五郎さん。
友市　父さんかいなう。
ト走り寄り、與五郎へ取りつく。
與五　そちや友市か。よう息災で
關の　お前も御無事で。モシ、逢ひたかつたわいな。
せき　さてはわたしが推量に違はぬ、お前の先妻の、女中さんは、わしが姉さん。
關の　エ、わたしを姉ぢやと合ひ宿の、お女中さんの今の詞。そんならお前も、連れそふ夫。
與五　寶の詮議を賴まんと、二人へ隱した二人の女房、思ひがけなく今宵の對面、面目なきはこの與五郎、女房のある身を隱したは、男の畜生、人でなし。これといふも廓にありし、都の母が末期の賴み。まつた江州坂本にて、皐月が親は武智光秀と、詞番うて貰つた其方。二人の女房、恩と義理。互ひに心の關の戶を、さし固めたる關と關。堪へてくれい、二人の女房。
關の　すりや、この女中さんが光秀さまの、あの娘の皐月どのとや。コレ、わしは不緣なされた母に付

いての憂き艱難。して又、わしを姉なりと、何を證據に。

せき　サア、證據は即ちお前の守。その臍の緒の書き物を、改めて御覽じませ。

關の　ドレ。

ト披き見て、

ヤヽヽ。この書き物は。ナニ〳〵、永祿六年癸亥年誕生の女子、武智十兵衞光秀娘皐月。ヤヤ。こりや父さんの御手跡。そんならお前は

せき　わたしやお前の妹皐月。風呂場に殘しあつた守の、裂れは一對、友裂れの、心覺えの古金襴。さてはと引比べ見れば、同じく父さんのお書きなされたこの臍の緒。永祿三年庚申誕生の女子、武智光秀が娘關の戸。この書き物も同筆にて

關の　幼なき時に別れたる、そんならわが身は妹であつたか。

せき　お前は姉上、關の戸さん。

關の　其方は妹の皐月どの

せき　同胞ありとは聞きながら

關の　別れ年經て姉妹。

せき　近江と丹波と分れども
關の　念が届いて思はずも
せき　泊り合はせし合ひ宿の
關の　浮世話しが緣となり
せき　皐月も關の
關の　妹。
せき　姉さん。
關の　思ひがけない
せき　變つた所で
關の　互ひに巡り
兩人　逢ふわいなア。
與九　不思議な緣と同胞を、妻に持つたる與五郎は、あるに甲斐なき浪人の
せき　その甲斐性なき與五郎さん、わたしが緣をさつぱりと、今日から切つて下さんせ。アイ、わたし
や切られる。切られますわいなア。

與五　すりや、其方は切れる心か。

關の　思ひ合うたる戀仲も、切れとあるのは、わしといふ、女房があつての事であらう。その心なら、いつそわしが

せき　イヤ、お前は、ソレ其やうな、子まである仲ゆゑに、めでたう添うて下さんせ。わたしや此まゝ切らるゝ願ひ。夫に緣切るしるしの一腰。

ト以前の一腰を差出す。

與五　ヤヽヽ、こりやコレ正しく日本丸。すりや、一腰を取らん爲

せき　父は天下の御爲と、類ゐ稀れなる主殺し。娘の皐月はこの一腰、手に入れたさの親殺し。サ、わたしが緣がある時は、お前の武道が立つまいと、切らるゝわたしが心根を、推量して下さりませ。

與五　サヽ、その親殺しも誰れゆゑぞ。劍を我れに渡さんと、心盡せしその身の罪科。知らぬ事とて夫婦とも、養父と賴みし與次兵衞は、この與五郎が家來筋。彼れも不便や某に、渡さん爲に命を捨てて、取落したる小柄の行くへ。

せき　さうとは知らず一筋に、お前に手渡しせんものと、親を手にかけ立退く道、アノ橋本のあたりに

與五　それもこの家の與兵衞が手に、入りあれば氣遣ひない。

せき　イヽヤ、この身は繪姿にて、詮議嚴しきお尋ね者、見苦しき死を遂げんより、今日祭禮のこの竹槍。この身を貫ぬき潔く。さうぢや。

ト二階の梯子へ行かうとするを

關の　コレ、待たしやんせ。わたしも一緒に

ト行かうとするを

友市　母樣、去なう。

ト縋る。與五郎、引ッ抱へ、皆々思ひ入れ。

せき　南無阿彌陀佛。

ト竹槍にて自害せんとするを、關の戸とめて

關の　死ぬる覺悟は道理ながら、この姉とても同じ事、女盜人騙りとて、配符の廻りし上からは、この身も夫に切らるゝ願ひ。

與五　さりながら、その人相書、數も二枚の其うちに、一枚は姉が繪姿、風につれて鑵子の中へ、落ちたも氣がゝり。

關の　身は焦熱の肉油、その苦しみもいとはじと、春永どのゝ鷹野先、騙り取つたる細石。尋ぬる茶碗

は、やう／＼と、わたしが手に入り

ト袱紗に包みし茶碗を取出す。與五郎、取つて思ひ入れ。奥より與兵衞、出かゝる。

與五　すりや、この茶碗を、心を盡して
關の手に入れたれど騙りの惡名。
與兵　姉も妹も遁がれぬ科人。
せき　さう云はしやんすは。
與五　主の與兵衞。
與兵　町人ながらも捕り手役、取分け妹は目印の、左高頰に一つの黑子。
せきヱ。

ト思ひ入れ。與兵衞、以前の小柄をお關へ打ちかける。折よく當つて黑子消える。お關、小柄を取つて

こりや失なひし
與兵　小柄の模樣は二羽の蝶、黑子の消えたる上から、今から直ぐに、この場を高飛び。
せき　爰を落ちよと打つたる小柄。面の黑子諸ともに。モシ、禮は詞に。

ト此うち與五郎、茶碗を、よく〳〵見て

與五　ヤヽヽ、こりや折角手に入れしが、正銘ならぬ、眞赤な似せ物。

關の　エヽ。ナニ、命にかけて取り得し茶碗は、ずりや、似せ物でござんしたか。さうとは知らず今日までも、逢うて手渡しした上は、お前も元の侍ひと、思ふも鶍の嘴となり、妹が取り得し日本丸、あの子の手前も。こりやマア、どうせう、何とせうぞいの。

與五　六品は揃へど肝心の、細石のあの茶碗。さては小田家が聰くも察し、似せ物を拵らへ置き、飽までも郡の家に、恥辱を與へん企みよな。

友市　もうこれから友市は、盜人騙りとなるまでも、母樣に引添うて、又もや尋ねに行かう。コレ、母樣、どうぞわしも、連れて行て下さりませ。

關の　オヽ、よう云うた、コレ、友市。また其方を伴なうて

ト思ひ入れ。

さはさりながら、生ひ先を、祝ふこの子に盜みする、業を今から見習はす、こんな親が二人とあらうかいな。

ト愁ひの思ひ入れ。

與兵 オヽ、それにて思ひ當りしは、敵の家にて祕藏せし茶碗、柴田勝家申し受け、茶器は殘らず高野の御寺へ、奉納ありしと聞いたに違はず、すりや

關の その尋ぬる細石、高野の寺へ奉納とや。所詮惡名受けたる上は、佛の罰もなにいとはん。この子を連れて登山なし、峰の嵐は烈しくとも

與兵 木の葉を殘せ、後の世までも。

與五 惡の報いは後の世も、めぐり〳〵て

ト思ひ入れ。鄉左衞門、窺ひ出て

鄉左 さては劍は與五郎が、手に渡りしか。その一腰を

ト取りにかゝるを、與五郎、立廻りあつて

與五 ヤ、さ云ふは丹平。今は平岡鄉左衞門。さては汝の仕業よな。

鄉左 騙りの女は以前の都、今一人は仲居のお關。吾妻が行くへを

ト寄るを與五郎、立廻つてキツとなる。

與兵 アヽコレ、わしが爲にも主人の御子息。

ト隔てろ。お關、思ひ入れ。

せき　姉さん、お前がお心盡しなされしこの茶碗。似せとあるのは同胞の、わたしら二人が身の上。姉の男を寢取つた妹。

與五　妹の戀人と、知らで姉には子まである仲、見ては怨めし

關の　イヽエ、怨みはお前こそ、姉も妹も、同じ血筋の同胞二人。碎けて後は土塊と

せき　思ひ〳〵に

ト似せ茶碗を取上げ、キツとなる。この途端に向うにてドンチヤン、遠寄せを打込み、貝鉦聞ゆる。お關、關の戶、キツとなる。また氣を替へて、ツカ〳〵と立つて、兩方より二階へ上がり、柱に取付き、向うを見る。この時、向うより棧敷幕の山の間に淺黃に桔梗の旗、白地に五三の桐の旗、提灯夥しく、山崎天王山、軍の體。皆々思ひ入れ。奧より、お早出て

はや　コレ、與兵衛、あの法螺貝は

與兵　イヽヤ、ありや山崎表の

關の　父光秀と眞柴の大軍、穗先爭ふ天王山。

せき　篝にあり〳〵見え渡る、あの水色の桔梗の旗、風に靡いて、あれ〳〵。

與五　挑み爭ふ惟任勢。今ぞ天下の分け目の軍。

郷左　その一腰を

ト與五郎へかゝる。三、用助、窺ひ出て

三用　お尋ね者の

ト三はお關へかゝる。用助は關の戸へかゝる。

與兵　罪なきその身も義によつて。

關の　なんと。

三用　イデ、繩かけて

トかゝる。立廻り。郷左衛門、與五郎へかゝる。

與兵　サア〳〵、早く爰を、落ちた〳〵。

トどんちやん早め、彦助、麥笠をかむり、出て來り

彦助　與兵衛さん〳〵、軍のあらまし、話しに來ました。

與兵　小揚げの彦助、勝負を見たか。

彦助　見やした〳〵。さて〳〵今宵の鬨の聲。こいつ見ものと山崎へ、走り行つた所が、お氣の毒なは武智どの、久吉どのは九州の、音成どのと和睦となり、屯ろなしたる光秀の、一の手二の陣、何

の苦もなく切り取られ、武智方は無慘やな、あの淀川へおツぱまり、瓜や茄子の流るゝやうに、ざんぶりこ、ざんぶりこと流れ行く。それから後は白川の、夜舟に見て話しに來ませう。

ト向うへ走り行く。

せき　すりや、父の勝利のやうも

關の　それを見捨てゝ、高野の奥へ

與五　足手纏ひの友市も

關の　首尾よう茶碗手に入れて

せき　親の生死も

關の　悴が事も

與兵　子を捨てる藪は。アノ小栗栖の

はや　やがてめでたう

鄕左　ところを、おれが

與兵　なにを。

ト立廻つて見得よく居並び

先づ今日はこれぎり。

めでたく打出し

伊勢平氏梅英鑑

いせへいしうめのみてくら

伊勢平氏梅英幣

第一番目　三建目

熊野權現社内の場
小松谷清水坂の場

役名――上總七郞景淸。鹿島の事觸れ、もう作實ハ別府太郞國連。勘解由次官助則。瀧口次郞光康。平賀四郞義信。中宮三郞時貞。沼の三郞平太長良。丸野太郞助次。仙波七郞景澄。小綱次郞重吉。難波六郞經遠。左衞門尉兼經娘、小忌衣。中宮三郞妹、宿木。白拍子、胡蝶實ハ新侍從信親權の太夫藤原信賴。進の藏人實兼。盛久女房、阿古屋。主馬判官盛久。

本舞臺三間の間、正面に、岩組みの祠、これに熊野社と書きし白布を掛け、下の方、低き石垣の上に朱の玉垣、これより上へかけて緋の段幕を張り、杉の幹、一面の吊り枝、よき所に注連を張りたる大釜飾りあり、すべて熊野權現奥殿の模樣よろしく、篝を焚く。爰に國連、晒し木綿、やつしの形、白張の上を引ッかけ、粕烏帽子をかむり、手甲、股引、草鞋がけ、鹿島の事觸れの拵らへにて、

烏萬度を引ツかたげ、これに長良、景澄、着流し、大小の形の上へ、裝束の上を引ツかけ、烏兜をかぶりたる形にて、左右より立ちかゝり居る。後に仕丁五人、白張、粕烏帽子にて立ちかゝり、この見得、アリヤ〳〵の掛け聲、渡り拍子にて幕明く。

トちよつと立廻り。

皆々　ドツコイ。

トとまる。

國連　こりやア、お侍ひ樣方、わしをなんとなされまする。

長良　なんとするとは、横道者。今日これなる熊野にて、朝敵謀叛追伐の奉幣使として、權の太夫信賴どのゝ御社參といひ

重吉　身元も知れない、鹿島の事觸れ、奥殿間近く遠慮であらう。キリ〳〵そこを

皆々　下がれエヽ。

國連　イヤ、滅多には下がるまい。わしも今年は稻荷の顔見世、滅多さう〳〵下がれとは、縁起も悪し殊に又、信賴公の社參につき、難波どのにもござると聞いて、わしもゆかりの

ト云はうとする。

兩人　何がどうした。

國連　イヤ、下がれと云つても滅多には、ゆるがぬ鹿島の要石、御代も豐かの當り年、めでたい稲荷の顔見世に、おしやれや申すが振り出しても、その信賴卿の社參につき、平家方の侍ひと、牒し合せたかゝり合ひ。

兩人　何がどうした。

國連　イヤ、ゆかりかゝりも何もない。ドリヤ、神前へ拜をして行かうか。

ト行きかゝるを支へて

景澄　ヤイ〳〵、非常を糺す神事の庭先、何やら怪しい紛れ者。

長良　平家にゆかりのありと云ひ、姿を替へてうせたは曲事、包まず仔細を

兩人　吐かせ、エヽ。

國連　ハヽア、仔細とはひねつたな。イカサマ、四三四六は云はずとも、胴の目付きで半排ひ、しつかり締めた覺えもあるが、それを云はゞ昔の事。今は眞面目な鹿島の事觸れ、片言もう作と云ふ禰宜の端くれ。紛れ者でも迷ひの者でもごんしねえ。疑ひ晴らして下さりませ。

長良　ヤア、得體も知れない詞の端々、どうでも怪しい。

ト かゝる。三人ちよつと立廻り。

兩人　ヤイ〳〵、者ども、神職方へ引いて行け。

仕丁　ハア。

ト 立廻る。

國連　なにサ、必らずそれには及ばない。お辭儀なしに、此方から參りますのサ。

長良　こま言云はさず、引立てろ。

仕丁　キリ〳〵歩め。

國連　ドリヤ、御馳走にでもあづからうか。

ト 大拍子の神樂になり、國連を仕丁、取卷き、下座へ入る。

長良　合點のゆかねえ事觸れめ、一癖あるべき面魂しひ。

景澄　それ〳〵、油斷ならざるこの時節、滅多に肌はゆるされねえ。

ト この時、後に扣へ居たる一人の仕丁、義信にて出て來り

義信　沼間の平太、仙波七郎。

景澄　貴殿は平賀の四郎義信どの。

長良　思ひも依らぬこの姿して、貴殿の身の上は。

義信　この義信は知られし通り、先年遠流の崇徳新院、自筆寫しの大乘經、都へ送り越されしを、取次したる曲事とて、信頼公の不興を受けしが、今日の社參を幸ひに、折を見合せお詫びの願ひ。

景澄　イカサマ。して、新院にはお憤り、この程魔界に入り給ふとやら。

義信　如何にも。それも佞人ばらの取計らひ。イヤ、それは格別、信頼公の御前、御兩所、よしなに。

長良　氣遣ひ召さるな。我れ〳〵が好きに推擧

兩人　致すでござらう。

ト奥にて「今樣始まり」と呼ぶ。

義信　最早、今樣の始まりとあれば、信頼卿のお入りに間もあるまい。

兩人　萬事は後刻。

義信　然らば御兩所。

兩人　ござりませ。

ト管絃になり、義信、長良、景澄、奥へ入る。また奥にて

よび　今樣の始まり。

ト呼ぶ。直ぐに所作のかゝりの鳴り物になり、正面の段幕を切つて落す。爰に信親、振り袖衣裳の上へ狩衣を引ッかけ、天冠を冠り、錦摺込みの袋入りの守り刀、左の手に辨財天の面を持つて立ち身。こなたに光康、白絹の股引、やつし形の上へ、伶人の裝束、鳥兜を引ッかけ、鉾を突き、戸隱の面を持つた見得、鳴り物打上げる。

信親　千早振る、天の岩戸の古事に、思ひもよらぬ不束な、この身に禪衣をかけおひも、今日お目見得の巫女の役。

光康　十二神樂や廿五座、天の鈿女の流れをくみ、代々に傳ふる一指しに、神代の昔物語り、相手になつて鳥居先。

信親　神かけ願ふお取立て、いづれも樣へねぎ事を

光康　變らぬ繰り言、長口上、申すに及ばぬ不調法。

信親　お許し受けて今樣の、神事の壽、神いさめ。

ト本管絃、大太鼓入り、誂らへの雲上なる唄のかゝり、ちよつとあつて、これより兩人、所作花やかにあつて、納まる。よき時分、後へ長良、景澄、仕丁、皆々出て來り

景澄　平太長良、なんと見たか。物ごし恰好、心を附けて見るところ、落人くさい二人の奴等。

長良　察するところ、爲義が討手に向ひ、不覺を取りし侍從信親、その同類であらうも知れない。
光康　待たつしやりませ。その信親どのといふは、御幼少の砌り、清盛公へ御緣を組まれし、信賴公の弟君。たとへ一旦爲義を討ち洩らしたる、誤まりのあるにもせよ、あまりといへば御雜言。

トきつとなる。

景澄　さてこそ、うぬが、その云ひやう。いよ〳〵怪しい奴等だわえ。
長良　但しは、朝敵謀叛の討ち洩らされ、左衞門賴方が餘類の者か。サ、有やうに
兩人　吐かしやァがれ。
信親　アヽモシ、滅多な事を仰しやりまするな。私しどもは何ゆゑに、左樣なお方にゆかりある、怪しい者でござりませう。お放しなされて下さりませ。
景澄　イヤ、神事の役人でも、怪しい奴等を見遁がしては、今日の警護の役目が濟まない。
長良　白い黑いは、繩打つて、信賴公の御前へ引き、白狀させる。仕丁ども、二人の奴等に繩を打て。
皆々　心得ました。女め、うせう。

ト仕丁、かゝるを兩人立廻り。光康、仕丁を見事に投げる。

長良　手向ひひろぐ小癪な奴。

景澄　イヤ、面倒な。

皆々　うしやアがれ、エヽ。

ト長良は信親、景澄は光康を引立てにかゝる。ちよつと立廻り、双方見得よく留まる。この時、向う兩花道より、「エイ」と矢文來つて、長良、景澄が裾に搦む。これにて兩人、タヂ〳〵となる。

皆々　これは。

ト思ひ入れ。信親、光康、手早く矢文を拔き取り、これを見る。

信親　思ひ兼ね

光康　知らせて後はなか〳〵に。

ト向う揚げ幕にて

小忌　よそながらだに

兩人　見えずなりぬる。

ト三味線入り亂れになり、南の花道より宿木、振り袖衣裳の上へ素袍の上を引ツかけ、小結ひ烏帽子にて、白の鷄を抱き出て來る。後より時貞、上下衣裳、大小にて、弓矢を携へ出て來る。本花道より小忌衣、同じく振り袖衣裳の上へ素袍の上を引ツかけ、結ひ烏帽子にて、赤鷄を抱き出て來る。後よ

り助則、上下衣裳、大小にて、弓矢を携へ、出て來り、双方よき程に花道にとまる。

長良　今二人を引立てようとする折から、思ひもよらぬ向う脛、矢文の主は中宮三郎。

景澄　勘解由の次官助則どの、何ゆゑあつて兩人を

信親　思はぬ難儀の折も折、お心深きお情の

光康　矢文の主のお二人さま。

長良　イヤサ、何ゆゑ我れ〳〵を遠矢にかけた。

皆々　その仔細は。

小忌　イヤ、我れ〳〵は大君の、勅命受けし神いさめ、勇む顔見世お目見得に、思ふお方の御難儀を、あれから見る目のいぶせきに、啼く音を立てる籠の鳥。

時貞　まだ鬪鷄の時刻にも、先だつ軍鷄の暴れ鳥、哀れ小鳥と侮どつて、勝どき謳ふとふまるの、人も賴まぬ羽づくろひ。

宿木　八聲をあげてとり〴〵に、無理なくだかけ夕告げ鳥、都鳥とは餘所目にも、三十一文字の歌詞。

助則　よそ道だに見えずとは、人目を忍ぶ優人の、隱し詞に詠ぜし歌。勘解由の次官助則が、附添ひ來りし小忌衣どの、戀のおとりを抱入れて、今日の神事にたつか弓。

小忌　矢文のお返事、お二人さん。

助則　それへ參上仕り

時助　承るでござりませう。

　ト矢張り鳴り物になり、四人、本舞臺へ來る。

小忌　思ひもよらぬ信親さま。

　ト寄らうとする。

信親　アヽ、モシ、必らず……サア、信親さまとやら申すお方が、よもや爰らへお出でなされますまい程に、滅多な事を仰しやりますな。

宿木　イヤ、苦しうござりませぬ。御兄君の勘氣ゆゑ、信親さまの此お姿、おいたはしう存じまする。

　ト信親が手を取つて上へ直す。時貞、これを突きのけ

時貞　アイヤ、そりやア、粗忽めさるな。見れば神事のこの舞ひ子が、新侍從の面ざしに似たを幸ひ、アヽ聞えた。こりや、小忌衣どのゝ心を引き見るたわれ事よな。

助則　イヤ、爲義が討手に向ひ、不覺を取つた腰拔けゆゑ、信頼卿の御前に於て首にするワ。

小忌　すりや、あのお方が、侍從どのといふ事を。

助則　某よりは小忌衣どの、おてまへの戀人、そこへ出て、目利をさつしやい。

時貞　アイヤ、今様神事のその舞ひ子、小忌衣どのが何ゆゑに。

小忌　サア、侍從さまに似た人と、思ひの外に卑しい舞ひ子。もしやと思うて、餘所外の、侍從さまでもない人に、……サ、逢うて恨みる面伏せ、思うた程には云はれぬかいな。

ト思ひ入れ。

助則　隱し詞の合ひ紋で、大方化けも現はれたが、名乘らぬうちは、手籠めにもなるまい。それなる下郎、侍從でない、その女、その持ち參りで、打擲なし、わいら二人が誓ひを立てろ。

光康　すりや、身共に。

助則　ハヽア、聞えた。さては新侍從が付き人たる、顏は知らねど、瀧口とやらだな。

光康　イヤ、左樣な覺えは。

助則　無いか。

ト信親を打擲する。

光康　サ、それは。

助則　サア。

光康　サア。

兩人　サア〳〵。

助則　どうだ。

ト光康、當惑の思ひ入れ。この時、下座より國連出て來り、光康を引退け、信親を萬度にて打ち据ゑる。皆々思ひ入れ。

小忌　ア、コレ。

ト寄らうとするを時貞、隔てゝ立廻り。

景長　こりや、最前の鹿島の事觸れ。

時貞　その事觸れが何ゆゑに、二人の者を打擲した。

國連　ハイ、この者は私しが、口入れの禰宜でござりまする。私しは御覽の通り鹿島の事觸れ、出張りは即ち深川仲町、禰宜巫子の受合ひ頭、今日今樣の御神事に、差上げましたこの二人が、何を慮外を致したやら、お侍ひ樣方の御立腹、お憤りを、宥めよう爲、折檻いたすのでござります。

景澄　すりや、其の方が口入れの巫子、慥かに相違ないか。

國連　疑はしくば、この上に、お詞の通り、繩打つて差上げませうか。

時貞　イヤ、聊示いたすな。それなる女、たとへ其方が口入れの巫子にも致せ、未だ神事も終らざるうち、粗忽の手籠めはなるまいが。

助則　イヤ、神事の庭にもせよ、疑ひかゝつた女が災難。

長良　兩人ともに繩かゝれ。

ト立ちかゝる。

小忌　いよ〳〵命重き神事の庭先、今日一日は內裡も同然、滅多な事は。

時貞　それとも次官助則には、繩打ち召さるか。

助則　いゝワ、それ程までに助けたがるなら、見遁がしてもくれやうが、不覺を取つた信親主從、いはば神事に不吉な兩人。もう作とやら、われにしつかり預けたぞ。

國連　畏まつてござります。思へば危ふい二人の難儀。又もや御意の變らぬうち、心きかして、ナ、合點か。

光康　心得ました。身に覺えなき災難も、事觸れどのゝお庇にて、助かる二人も神の庭。

信親　神慮すゞしくましまさば、思ふ願ひも身の上に。

小忌　明けて云はれぬこの胸を

國連　この事觸れが預かる二人。

長景　わいらをやつちやア。

　　ト立ちかゝるを時貞、隔て

時貞　ハテ、今様の役人に、越度があれば後日のお咎め。

宿木　この場を早う、お二人さま。

信親　何かは重ねて、お目もじ致しませう。

　　ト大拍子になり、信親、跡より國連付いて下座へ入る。光康、思ひ入れあつて行かうとする。

助則　アイヤ、其方には用がある。

光康　アノ、拙者めに。

助則　いかにも。頼みたい仔細もあれば、マアく待て。

光康　ヘイ。

　　ト立ちどまり。

　見る影もなき私しに、お頼みなさるゝ御用とは。

助則　いかにも、外でもない。今日の神事の鶏合せ、行司の役が頼みたい。

光康　エ。
助則　凡そ勝負を分つには、贔屓偏頗の心なき、女童をよしとする。幸ひ禰宜とあるからは、參り合せた神事の庭。
時貞　其方が心に、甲乙の、勝負を任する神いさめ。
小忌　神の心に任せたる、善悪邪正の團扇の懸引き。
宿木　お請け申して行司の役。
光康　すりや、私しに大切な行司の役目。
助則　闘鷄神事の時刻が移る。
時貞　方々、急いで用意おしやれ。

ト三味線入りの白囃子になり、いづれも入れ替り、宿木、時貞、景澄は南の方、小忌衣、助則、長良は北の方に別れ、仕丁、左右に立ちかゝり、小忌衣、宿木、鷄を抱へて立向ふ。光康眞中に、持つたる團扇を取つて見得よく居並ぶ。

助則　朝敵爲頼追討の、東の方や關東勢。
宿木　伊達の國府に押寄せて、心臆して討手の白鷄。

時貞　西の方やは左衛門頼賢、保元の亂に敗北なし、行くへ知れざる謀叛の同類。
小忌　捜し求めて、蹴爪にかけ、勝鬨あげる無双の赤鷄。
光康　双方劣らぬ大敵を、降伏呪咀の鷄合せ。
景澄　勝負を計る神事の壽き。
光康　心靜かに、イザ、立合うて。
小忌　イザ
宿木　イザ
兩人　イザ〳〵。
ト詰め寄る。この時、奥にて。
信頼　闘鷄待つた。
皆々　ヤヽ、なんと。
信頼　權中納言信頼が、勅命承る社參の庭、皆警蹕を唱へろやい。
ト下がり葉になり、切つて取る。爰に信頼、王子鬘、白の着付け、緋の袴の形にて、大杯を引ッ抱へ、眞中に立ち身。上の方に、助次、着流し、大小、白張の上を引ッかけたる形にて、長柄の銚子を携へ、

下に重吉、同じく着流し、大小、白張の上を着たる形。三方に一軸を入れたる箱を載せ、これを持ち
三人、これなりに舞臺よき所まで押出す。

助則　神事の間は關白の、御名代たる信頼卿。
時貞　思ひ設けぬ未明の御社參。
小忌　變らせ給まぬ尊顔を、拜しまして如何ばかり
皆々　恐悦至極に存じ奉りまする。
信頼　いま信頼つたなくも、朝廷のお覺えめでたく、新たに賜はる兼中宮、權の太夫と昇進せし、その有り難き勅を今、承りし上からは、例へ女の童たりとも、我が意を背けば、違勅も同然、武官の面々、よもや違背はあるまいが。
助次　仰せにや及ぶべき。君に從ふ源平兩家、丸野太郎助次始め、四性御手に屬すといひ
重吉　小綱次郎重吉も、今日供奉なす路次の警護、當社熊野へ奉幣の、設けの席を用意おしやれ。
信頼　なにサ〳〵、例へ時刻が遲れたとて、十善の君の代りに立つ、この信頼が威勢を見せん。それなる鷄。これへ持て。
助則　ハア。

ト兩人、二羽の鷄を信頼が前へ置く。信頼、直ぐにこれを左右にグツと引ツ掴む。

皆々　これは。

信頼　なんと見たか。爲頼頼賢に准らへたる不吉の鷄、先ツこの如く、今手の下に一ひしぎ。さりながら、身が手を下ろすはこの身の穢れ。景澄、長良、この鷄を刺し殺せ。

景長　畏まつてござりまする。

小忌　アイヤ、憚りながら、朝敵退治祈りのため、携へ來りしその鷄、殊更神事のこの庭先。

宿木　物の命を取るといひ、血汐をあやすは何とやら。

皆々　この儀ばかりは、只管に。

助則　ヤア、いらざる諫言、支へこさへをおしやれば、今云ふ通り違勅の罪だぞ。

皆々　ハア。

ト思ひ入れ。

信頼　ハヽヽヽ。朝敵退治の祈りなぞと、物云はぬ神を頼まうより、この信頼が追討なすに、何ゆゑ神の祟りがあらう。兩人、キリ／＼命を絶て。

長良　ハア。朝敵謀叛の爲頼に、准へし鳥は平太長良。

景澄　まつた、左衛門頼賢に、象る鳥は七郎景澄。
長良　たゞ一刀に。
景長　まツこの通り。
ト兩人、刀を拔いて、赤白の鷄を刺し殺す。皆々思ひ入れ。
信頼　アラ、心地よやなア。
ト大ドロ〳〵になり、紫雲現はれる。皆々、これを見て思ひ入れ。この時、向う揚げ幕にて、
呼び　藏人參詣。
ト東の揚げ幕にて、
呼び　經遠參詣。
ト呼び、直ぐに經遠、素袍、龍神卷の形、太緒草履にて、中啓を持ち出て來る。本花道より實兼、上下、衣裳大小にて出て來り、双方花道にとまる。雲氣に目をつけ、キッとなる。小太鼓の樂、矢張りドロ〳〵。
實兼　ハテ、心得ぬ俄の動搖。當社熊野御神へ、又ぞろ今年改めて、社參の折から紫雲の有樣。
經遠　難波の六郎經遠めも、いづれも樣のお取立て、惠みに依つて改名の、實に有り難きみことのり、

信頼　お召しに應じて取敢へず、社參に臨んで、この場の天變。
信頼　傳へ唐く唐の康主、未だ幼兒のその砌り、一度び繼母の憎みを受け、河東の魚鱗に交はりし時。
實兼　その行く所、常に紫雲棚引く。
光康　遂に儀王の讓りを受け、直ぐに帝位に付き給ふ。
經遠　まつた、我が朝にては文屋の宮田丸、淡路島みなせの山にて、雲中の櫻の返り花を怪しみ
助則　その所を掘り穿ち、袞龍の御衣を得る。
時貞　それゆゑにこそ、廢帝の舊地と悟り知つたるためし。
經遠　さては、神寶のその一つ、御鏡の德なるか。
實兼　察するところ、これ正しく、御位を侵す輩なるか。
信頼　何にもせよ。
實兼　怪しき天變。
經遠　稀代な雲の
皆々　有樣ぢやナア。

トドロ〳〵打ち切る。皆々思ひ入れ。實兼、經遠、舞臺を見て、ツカ〳〵と來る。皆々、入れ替つて

扣へろ。

助兼　難波の六郎經遠。

時貞　進の藏人實兼どの。

皆々　只今出仕召されたか。

實兼　先づもちまして、今日は、朝敵追伐の神いさめ。

經遠　御代萬歳の慶賀の勝鬨、只々おめでたう存じまする。

信頼　すりや、大貳清盛、左馬頭義朝が名代たる、經遠藏人、大義にこそあれ。

經遠　その名代に來かゝる路次、合點のゆかぬ今の動搖。

實兼　それに付ても、心得難き信頼卿の

　ト目を付ける。

信頼　ヤ、なんと。

　ト實兼、思ひ入れあつて、前なる一軸を見て

實兼　イヤサ、心得難きは、今日神事のこの所へ、御持參ありしこの品は。

信頼　この一軸こそ信頼が、兼ねて望みし、漢の武帝の畫かれたる、泰山老師のこの一軸、桃園の宮へ

奉納あるを、内見の爲取寄せたワ。それは格別、今日の神事は外ならぬ、……イヤ、朝敵を追伐の、軍議終れば喜び酒、神職方にて酒宴の催ふし。小忌衣、宿木、設けの用意いたしてよからう。

小忌　畏まりましてござります。

信頼　ナニ、次官助則、其方は、これなる一軸、神職方へ持参なし、あの小忌衣にナ……イヤ、後方ゆるゝ内見いたさう。

助則　委細承知仕つてござります。

ト三方のまゝ、掛け物の箱を取上げる。

すりや、御兩所とも奥殿へ。

小忌　左樣ならば小忌衣も、返り詣での神事のお禮。

時貞　鬪鷄の行司の役、勤められし其許にも。

光康　イカサマ、御褒美のお神酒なりと、頂戴いたすでござりませう。

宿木　何かはあれにて。サ、小忌衣どのも御一緒に。

小忌　いづれも樣、後程お目にかゝりませう。

ト管絃になり、小忌衣先に宿木、助則、右の掛け物を持ち、時貞、光康付いて下座へ入る。

信賴　何は格別、この程より、源平兩家の武威を以て、本意を遂げんと思ふに依り、見參なして心を一致し、既に旗上げと事極まり、互ひに時日を延ばす條、何とも以て心得難し。先づ差當つて左馬頭の心底、信賴しかと、承らう。

實兼　こは御仰せ至極せり。かゝる上は包むに是非なし、遲滯の譯は餘の儀にあらず、六孫王以來連綿たる家の白旗、この程の紛失、草を分つて寄り〳〵に詮議いたせど、今以てその在所定かならず、そのゆゑに軍勢催促の延引、甚だ恐れ入り奉つてござります。

信賴　ヤア、云ふな藏人、義朝は源家の正統、系圖に等しき旗の紛失、家の瑕瑾と思はずや。馬鹿な事を。

長良　イカサマ、旗が無いゆゑ、旗上げ延引したは至極尤も。

景澄　さりながら、餘りと云へば、大だわけ。

重吉　ハヽア、聞えた、酢の蒟蒻のと期を延し

助次　こりやア、てつきり義朝には

四人　二心と見えまする。

實兼　アイヤ、方々、扣へ召され。義朝に於て何ゆゑに、二心ござらうや。必らず共に、粗忽ばしお云

やるな。

信頼　すりや、誠紛失なしたといふ、證據があるか。

實兼　それこそは、良等たる陸奥の六郎が、預かりなれば、既に一命にも及ぶべかりしを、さある時には、手がゝりだに失ふ道理と、義朝の不興によつて、勘氣の身の上。これが何より慥かな證據。

信頼　それとても、證據ならねど何かせん。よし、二心に極まらば、平家の一門、武道を以て、打ち滅す分の事。して又、難波の六郎、大貳清盛遲滯の譯は。

經遠　ハテ、恐れながら、家の重寶紛失ゆゑ。

信頼　ヤヽ、なんと。

ト管絃になり、經遠、思ひ入れ。

經遠　先達て、判官爲義討伐の後、源氏の重寶、雷丸の劍、莫大の軍功とあつて、その砌り、主人清盛へ下し賜はりしは、拔群平家の規模として、即ち軍神と崇め、筑後の判官貞俊へ預け置きしに、過ぎつる五月の半頃、晴天俄にかき曇り、雷鳴烈しく、暗夜の如く、その砌りよりかいくれに、行くへ知れざる劍の紛失。貞俊ことは云ひ譯なく、切腹なして相果てしが、彼れが娘に楓と云ふもの、これも在所を求むる爲、姿を變へて所々方々、遍歴なすと承る。それは格別、一門郎黨

草を分けて詮議最中。それゆゑ主人清盛にも、軍の幸先、心よからず、この儀に當惑仕つてござりまする。

信頼　すりや、雷丸の劍も紛失とや。ハテ、心得ざるその珍事。まつた雷丸の不思議といふは、酉の年月揃ひし者、その劍を手に觸るれば、忽ち雷鳴發すると聞く稀代の名劍。

實兼　如何にも。酉の年月揃うたる、生れの者は云ふに及ばず、たとへ空飛ぶ鳥なりとも、血汐の穢れに雷鳴おこる。

經遠　それにしても、酉の年度揃ひし者を、この程より密かに詮議なす折柄、尤も諸國に強盗はびこり、中にも美濃路に聞えたる、熊坂の長範といふ曲者あれば、討手を以て、詮議なせども、なか〳〵盗賊の所爲とは思はれず。元は源氏の重器なれば、この盗賊こそは外でもなく、矢ツ張り源氏の

ト實兼へ思ひ入れあつて

イヤ、正しくゆかりの奴ばらが、仕業によもや違ひはあるまい。

實兼　經遠には、何とやら心憎きその一言。併し、思ふより顯るゝと、これにて思ひ合すれば、去ぬる保元の亂、源家の門葉朝敵となり、親族一黨散らせられ、相殘つたる義朝なれば、內々野心も差挾み、源家を滅亡なさんずと計る輩も、大方そこらあたりにあらうも知れぬ。

經遠　そりや、ハヤ、討ち討たるゝは武門の習ひ、事によつたら討ちもする。それは格別、信頼卿へ大貳清盛が一つのお願ひ。軍勢催促思はず延引なすは、君への恐れ。これに依つて、何卒村雲の御鏡守護、仰せつけ下されなば、早速軍勢相催ふさんは、家の面目、身の冥加、この儀偏へに願ひ上げ奉ります。

實兼　イヤ、その儀は古例に任せ、村雲の鏡は源家にて申し預かり、義朝守護なし奉らん、兼ねての願ひ。

經遠　ヤア、古例があらうがあるまいが、一旦主君清盛の、望みかゝつた上からは、源家の願ひ、叶はぬことだワ。

實兼　さうお云やれば、どうしても

經遠　村雲の御鏡を

實兼　この藏人が申し願ひ

經遠　見事御身が。

實兼　おんでもない事。

兩人　なにを。

ト双方キツとなる。

信頼　ヤア、兩人とも無益の爭ひ。如何にも村雲の名鏡は故あつて、この信頼が、まツこの如く、兼ねて祕め置くこれなる御鏡。

ト懐中より袋入りの丸鏡を取出し

然るに源平兩家とも、二品の紛失の事。信頼一圓その意を得ず、しかとその儀に相違なくば、神に誓つて誓詞を致せ。

實兼　ハア、仰せまでも候はず、僞はりを構へぬ條、天の照覽明かなり。僞はれば神の御罰を被むる。身に曇りなき、この場の潔白。

經遠　經遠とても、その通り、如何なる誓紙血判なりとも

兩人　仕るでござりませう。

信頼　潔よき兩人が詞。さりながら、双方望む寶は一つ。その誓ひには、何をがな。

トこれより三保神樂になり、信頼、あたりを見廻し、湯立ての釜へ目を付け、思ひ入れあつて

信頼　幸ひなるかな、神事に用ひし湯立ての熱湯。まツこの通り。

ト持ちたる鏡を前なる釜の中へ打込む。薄どろ〳〵。

皆々　これは。

ト思ひ入れ。矢張り此うち三保神樂。

長良　片時も早く、この場の誓ひ。

助次　あの、熱湯の中なる御鏡。

重清　手も濡らさずに御兩所とも

景澄　双方一時に

四人　取上げられよ。

實兼
經遠　ハツ。

ト思ひ入れ。

信頼　抑も湯立ての起證の始めといつぱ、往年應神天皇の頃、武内の宿禰、弟たる者の讒言に依り、
湯を探らしめて、實否を決す。

實兼　それより、今に、物の誓ひを立てる源が、清き流れを汲み取つて

經遠　イヤ、心も清き清盛が、熊野の神威を増鏡、頭に請けて。

ト釜へ立ちかゝるを實兼、支へる立廻り。經遠、刀を抜きかける。實兼、これを突き廻して、有り合

三



ぬ 五



ふ以前の烏萬度にて立廻り。經遠、誤まつて鼎の足を刀の背にて打つ。これにて鐵足折れたる體にて、鼎より鏡出るを、實兼、萬度にて、これを見得よくシヤンと受けとめる。

皆々　これは。

ト思ひ入れ。實兼、手早く鏡を取つて押戴き

實兼　難なく手に入る村雲の名鏡。エヽ、忝ない。

ト有り合ふ三方へ載せて扣へる。

信頼　進の藏人、名鏡を取上げし上からは、この度の討手は、左馬頭義朝が惣大將。その旨しかと申し聞け、時日を移さず、源氏一統、軍勢催促してよからう。

實兼　ハツ、委細承知仕つてござりまする。

信頼　猶もこの上、申し談ずる旨あれば、兩人とも設けの席へ。

實經　仰せに從ひ、兎も角も。

長助　然らば御兩所にも。

景重　何はともあれ別當方へ。

信頼　經遠、藏人。

實經　信賴卿。
信賴　案內いたせ。
皆々　先づ、入らせられませう。
ト管絃になり、信賴先に經遠、長良、助次、景澄、重吉、後より、實兼、三方の鏡を持ち、この人數奧へ入る。矢張り管絃にて、下座より小忌衣先に光康、助則、以前の掛け物の箱を持ち出て來り
助則　小忌衣どの、信賴卿より某へ、兼ねて仰せ聞けられしは、其許にこれなる一品、內見の上、返事せよとの事。サ、心を籠めて、お受けさつしやい。
ト三方のまゝ兩人が前へ置く。
光康　こりや、最前承りし、武帝の畫かれたる、泰山の老師の一軸とやら。
小忌　帝さまよりお願ひに依つて、奉納なさるゝこの一軸、何ゆゑあつて、小忌衣に、內見せよとは心得ぬ。
光康　サ、明けて口惜しき浦島が、箱にも致せ信賴卿の
助則　仰せ越されし上からは、なんであらうと內見さつしやい。
小忌　ぢやというて。

光康　アイヤ、内見の上にて、兎も角も。然らば拙者がお取次ぎ。

ト三方を引寄せ、箱の蓋を取つて、一軸を取出し、開き見て

ハテ、心得ぬ。泰山の老師と申すは、俗に云ふ福祿壽。これはそれには引替へて、嫐の文字を只一字。

小忌　この小忌衣に返事せよと、謎にかけたるお心は。

助則　書きならべし男の文字、右は正しく信頼卿、左は弟信親どの。

光康　中の女は小忌衣どの、信親どのとの仲を裂き、返事せよとは、信頼卿の、さてこそ御戀慕。

小忌　エヽ、お情ない、その御無體。信親どのを捨て參らせ、貞女の道を破れとは、たとへ父上のお諫めでも、こればつかりは。

助則　そもじの返事の善悪で、父兼經も身の破滅。

小忌　すりや、父上までの御身の上。

助則　オヽ、信親どのも見付け次第、首討ち放せと、手荒いお心。宥めるやうな思案はないか。

小忌　サア、それはナ。

助則　但しはならぬか。

小忌　サア。
助則　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
助則　返事は、どうだ。
　　ト小忌衣、思ひ入れあつて
小忌　たとへ憂き目にあへばとて、操を守るが誠の道。その御返事は信賴卿にたとへたる、右の男を、
　まツこの通り。
　　ト掛け物を取上げ、挿したる笄にて文字を貫く。
光康　出かし召された女の操、信賴卿へは光康が、申し開くでござりませう。
助則　さてこそ、光康と吐かすからは、臆病未練の役に立たず、新侍從が付き人たる瀧口次郎だな。
光康　如何にも。某こそ幼少より、新侍從に付添ひし、瀧口次郎光康。本名明かす上からは、横戀慕の
　腰押しする、人畜生に用はない。小忌衣どのには、この場を早う。
小忌　心得ました。光康どの。
光康　何かは後刻。

助則　さうはならねえ。

ト小忌衣へ立ちかゝる。光康、立廻つて

光康　笈構はず、ござりませ。

小忌　さうぢや。

ト大拍子になり、小忌衣、ツカ〳〵と下座へ入る。助則、追ひかけようとするを、光康、立廻つて、ちよつと當て、續いて下座へ入る。助則、キツとなつて、行きかける。矢張り大拍子、バタ〳〵にて、宿木、駈けて出る。義信、これを追つて出て來て、三人ちよつと立廻り。義信、宿木を早繩にて縛しめる。この時、後へ菖蒲革股立ちの侍ひ二人出る。助則、思ひ入れあつて

助則　平賀の四郎、兼ねての手番ひ、首尾よく行つたか。

義信　仰せに依つて、時貞が妹の宿木を引出して、お渡し申す、その代り、御企ての彼の一卷、お渡しなされ下さりまするか。

助則　その心底を見る上は、一味徒黨の廻文狀、必らず人目に覺られぬやう。

ト一卷を出して義信へ渡す。

宿木　すりや、謀叛一味の廻文とや。

義信　やかましい。

ト手拭を以て宿木に猿轡をかける。

助則　さりながら、これなる女は幼少の折、白峰の内侍が女の童とはいへど、仔細あつて先年御所を下がりし様子。云はゞ手がかり。新院没落の折柄より、行くへ知れざる白峰の内侍、平家方にて詮議なすも、新院の胤を懐胎との事。それを源氏の奴ばらが、埋めて置くと思ふゆゑ、此奴を玉に詮議の手がかり。

義信　然らば此のまゝ。

助則　者ども。女めを引立てろ。

ト立ちかゝり縄を取る。

義信　先づ、ござりませう。

義信、重ねて。

侍ひ　立たう。

ト三重、時の太鼓になり、侍ひ二人、宿木を引立て、花道へ入る。助則、下座へ入る。義信残つて、懐より一巻を出し

義信　エヽ、忝ない。この廻文狀の手に入るからは、さうだ。

　　ト行きかゝる。後へ長良、景澄、出て來る。兩人、支へて

長良　勘解由の次官へ一味と見せ、信賴卿の廻文狀。

景澄　二股表裏の平賀の四郞、その一卷をキリ〳〵渡せ。

義信　それ知られたら百年目、忠義の爲に身退き、勘氣を請けた平賀の四郞、科なき女に繩打つたも、この一卷を取らうばつかり。サア、そこ退いて通すまいか。

景澄　小癪な義信。

長良　一卷渡せ。

　　ト大拍子になり、兩人かゝるを義信、突き廻す。長良、景澄、刀を拔いて切つてかゝる。義信も刀を拔き合せ、ちよつと立廻り、見得よくとまる。後へ信賴出て來り、この時拔打ちに義信を一刀に切り下げる。義信、バツタリ倒れる。

景澄　信賴卿。

長良

信賴　コリヤ。

　　ト思ひ入れ。時の鐘。兩人、白刃を納め、長良、義信が懷中の一卷を取出し、信賴へ渡す。信賴懷中

する。この時、奥より信親出かゝり、兩人、顏見合せて思ひ入れ。

信賴　刀を清める水を持て。

信親　畏まりました。

ト上の手水鉢の水を汲みて來り、白刃に水をかける。信賴、白刃を突きつける。信親、振り袖にてちよつと押へ、兩人キツと思ひ入れ。この時、管絃になり、信賴、白刃を納めて

信賴　弟信親、命を捨てに參りしか。

信親　兄上信賴卿へお願ひあつて、面目ない女姿の御對面。お恥かしう存じます。

信賴　爲義が討手として、東坂本へ向ひし折柄、大衆等が爲め不覺を取り、爲義を取逃がしたる大だわけ、何を手柄に兄上などと、恥を知らざる大腰拔け、なぜ都へ立歸つた。

信親　その御不審さる事ながら、非運の某、いひ甲斐なく、不覺を取りし越度ゆゑ、暫らく都を開くと雖も、官軍勝利の神事と聞き、せめて慶賀を奏さんため、姿を替へて參籠なせしも、行くへ知れざる白峰の内侍が懷胎、察するところ朝敵謀叛の討ち洩らされ、事を計ると思ふがゆゑ、内侍を始め殘黨ばらが、首引ッ提げて立歸らば、御勘氣御赦免下さるやう、お願ひ申さんその爲に、面目なきこのお目見得。信親が身の口惜しさ、御推量下さりませ。

信頼　ヤア、小癪なるその一言。生害にも及ばずして、なに面目に連枝の對面。思へば不覺の大腰拔け、この信頼が手を下ろして。

ト一腰を拔きかける。この時、時貞出て來り、ツカ〳〵と寄つてこれを支へろ立廻り。信頼、右の一卷を落す。信親、取上げ見て

信親　この一卷は。

信頼　それこそ正に、一味を集める廻文狀。

時貞　拙者がちよつと。

ト手をかける。長良、景澄、支へる。信頼入れ替つて、信親の持つたる一卷を取り懐中する。

長良　中宮太郎。

長景　慮外であらう。

信親　すりや、兄上には、叛逆謀叛の御企てよな。

信頼　默れ、兩人。故なくも我れに向ひ、叛逆謀叛の企てとは。

時貞　お隱しあるな信頼卿。御謀叛の思し立ちなきに、村雲の名鏡は、何ゆゑ今日まで、秘め置かれしや。

信頼　なんと。

ト思ひ入れ。

信親　一味徒黨の廻文といひ、兄上ならずば繩打つて、この身の汚名は晴れずとも、宸襟やすめ申さんもの。何不足なき御身にて、空恐ろしき謀叛の企て。エヽ、淺ましい御心ぢやなァ。

信頼　さ云ふ汝の身の恥辱、雪がん爲に覺えなき、我れに向つて謀叛呼ばはり。助け置かれぬ奴等なれども、今日の神事の賀にめでゝ、二人が命は助けくれる。我れはこれより法會へ赴き、直さま内裏へ奏聞とげん。

信親　エヽ、あまりといへば。

トきつとなる。

信頼　丸野太郎、小網次郎、非常を訊して警護なせ。

助重　畏まつてござります。

ト下座より助次、重吉、後より仕丁四人付いて扣へる。

助次　ハッ、今日の神事、故なく相濟む上は

重吉　信頼卿には先づこの場を

信賴　用意がよくば身は歸館。
時貞　思へば不敵の
信賴　弟　信親。
信親　兄上さま。
信賴　重ねて見參。
長良　信賴卿の
四人　御歸館。

ト下がり葉になり、信親、時貞は南の花道、信賴先に長良、重吉、景澄、助次、仕丁殘らずこれに付いて向うへ入る。管絃になり、下座より經遠先に、後より國連付いて出て來り

國連　經遠どの。
經遠　別府の太郎、賴み置いたる一品は。
國連　氣遣ひあるな、それこそは、この國連が兼ねてより、腕に覺えの忍びの術を以て、疾より奪ひし源家の旗。

ト懷中より袱紗包みの白旗を出し

イザ、お渡し申す。受取りめされ。

ト經遠、旗を受取り、思ひ入れあつて

經遠　出かし召された。經遠、慥かに受取る上は、褒美は望みの通り。これにつけても不便なは源家の奴等、一門大半誅伐せられ、可哀やみじめな爲義が、死恥晒らす小松谷、獄門臺に今以て、屍はあり／＼憐れなざま、その親族たる義朝にも、家の旗を失へば、この上もない武門の恥辱。

國連　イカサマ、源平兩家に別れども、お覺えめでたき平家の一門、何がなけちをくッつけようと、雷丸の紛失も、正しく源氏の奴等が所爲。

經遠　さるに依つて清盛公、それを一つの囮になし、村雲の名鏡を望まるゝも、信頼始め義朝を討ち亡ぼし、平家一統の世となさん兼ねての存意。さるに依つて盛久、景清兩人、諸國巡檢に事よせ、關東の平氏を語らふ手だて。

國連　たとへ、源氏の手に入るとも、奪ひ返すは瞬くうち。いくらヂタバタひろいでも、この白旗が紛失しては、軍勢催促、思ひも依らぬ。

ト此うち後へ實兼、窺ひ出て

實兼　さてこそ紛ふ方なき、その白旗、身共に渡せ。

經遠　なにを。

ト三人立廻り。此うち實兼、懷中より件の鏡を取り落す。この時、助則出て來り、鏡を取上げ

助則　こりやコレ、御鏡。

實兼　南無三、それを。

トしやんと鏡を引ツたくる立廻り。此うち經遠、旗を持つて、ツカ〳〵と花道へかゝり

經遠　次官ぬかるな。

助則　爰構はずと、早くお行きやれ。

經遠　それ。

ト行きかゝる。この時、光康、出て來り

光康　その白旗を。

ト經遠へかゝるを振り切り、時の鐘になり、經遠、旗を持つて向うへ走り入る。

實兼　跡追ツかけて。

光康　さうだ。

ト早神樂になり、光康、跡を慕うて一散に花道へ入る。舞臺は三人、旗を枷に立廻りよろしく、矢張

り神樂にて　幕

大拍子の神樂にてツナギ。直ぐにこの幕を引返す。

本舞臺、後ろ黒幕。一面藪疊、下の方に榎の立ち樹、正面に獄門臺、これに白骨晒しあり、上の方に菰垂れ。これより榎へ懸けて紙帳を釣り、能き所に小松谷清水坂と記したる傍示杭。爰に修行者壹人、鼠木綿の着付け、黑衣、網代笠をかむりたる道心、花手桶に樒を備へ、後向きにて獄門臺に向ひ回向して居る。時の鐘、風の音、一つ鉦をあしらひ、この鳴り物にて幕明く。

ト直ぐバタ〳〵にて、向うより、經遠、以前の形にて、右の旗を持ち、走り出て來る。後より光康、同じく以前の形にて、これを追ひ出て來り、花道にて經遠を引ッ捕へ

光康　ヤア、難波經遠、いづくまでもと跡追ふうち、はや暮れかゝる眞の暗、たとへ黑白は分らずとも、やはかおのれを見遁がさうや。サア、この上はその白旗、瀧口次郎が受取らうワ。

經遠　小癪な瀧口。折角手に入るこの白旗、おのれ等如きに渡さうか。邪魔だてせずと、そこ退いて通せ。

光康　イヤ、さうは罷り成らぬ。この白旗に心をかける上からは、問はずと知れた謀叛の企て。瀧口次

郎光康が、目にかゝつたる上からは、とても及ばぬ。叛逆謀叛の顯はれ時、キリ〳〵白旗渡すまいか。

經遠　ハヽア、吐かしたり靑二才め。譫言も事に依る。取分け大事を知つたる上は、とても生けては置かれぬ瀧口。如何にも信賴と心を合せ、事を計るもあはよくば、義朝始め源家の一門、亡ぼさん兼ねての計略。その幸先にうぬが首、幸ひ所も小松谷、不便ながらも經遠が、爰で介錯してくれう。叶はぬ事と諦めて、鷲や鷹の餌食になれ。

光康　こま言吐かさず、白旗渡せ。

經遠　何を小癪な。

ト振り切る立廻り。經遠、手早く旗を懷へ入れる。光康「それ」とかゝる。兩人、立廻りながら舞臺へ來る。修行者は物音に驚ろき、うろたへ、思ひ入れあつて立ちあがり、獄門臺の白骨を取らんとして、手の屆かざる思ひ入れ。此うち光康、經遠が懷の旗を引出すと、經遠、これを突き廻して旗を引取るはずみに、修行者の腹へドンと當る。これにて道心はウンと悶絶する。光康、直ぐに拔討ちに切りかゝる。この刀、獄門臺へ切り付け、臺はガックリと成る拍子に、白骨は道心の伏したる方へ落ちる。經遠、刀を拔き、探り寄つて立廻り。これより三味線入りの禪のツトメになる。兩人、旗を枷にタ

チよろしくあつて、經遠、光康を切り下げる。光康、撻となり、苦痛の思ひ入れあつて、經遠を引ッ捕へ

光康 エヽ、殘念や口惜しや。たとへ深手は負ふとても、やわかこの場で、その白旗、やみ／＼と渡さうか。おのれ。

ト切つてかゝるを經遠、立廻り。光康をしとめ、直ぐに乘りかゝつて止めを刺す。光康、苦しみながら、經遠が懷より出しかゝりし旗へ手をかける。薄ドロ／＼になり、經遠、タヂ／＼とする。これにて旗は前へ落ちる。經遠はこれを知らず菰垂れの方へよろめき、ホッと思ひ入れ。この時小屋の内より白刃出て、經遠が胴腹を貫く。經遠、苦しみ、よき所へ撻と倒れる。これをキッカケに時の鐘の頭、三味線入りの大小、羯鼓の鳴り物になり、小屋の菰垂れを引ッ切り、中より景清、蟬丸頭巾、着込みの形、上へ鼠木綿の布子、手甲、平括けの形、前へ鏡を付けたる千日參りの拵らへ、垂れ草鞋にて、卒塔婆の仕込みを持つて出て來る。この途端、下の紙帳を破り、盛久、同じ着込み、陣羽織の形の上へ上帶を締め、笈のやうに見せたる拵らへ。襟に順禮の胸札をかけ、太刀を藁苞に仕込み、これを背負ひ、武者草鞋にて、馬柄杓と、日の丸の陣笠へ同行と記したるを持ち出て來る。景清、白刃を拭ひ、仕込みの鞘へ納め、双方窺ひ寄つて、兩人とも落ちたる白旗へ手をかけ、一時に取上げ、こ

れを引合ひ、思ひ入れあつて、この品を枷に立廻り。景清、旗を奪ひ取り、此うち以前の修行者、心付き、あたりへ思ひ入れあて、白骨を拾ひ取り、立上がらうとする時、景清、盛久、これに探り當り、心得ぬ思ひ入れにて、左右より引立てる。これにて修行者、冠りし笠落ちる。この立廻り、衣上着とも脱げると阿古屋にて、洗ひ髪、着流し、扱帯を締めたる、花やかなる傾城の形にて、右の白骨を持つて立廻り、三人、キツト見得。これより誂らへの鳴り物に變り、立廻りあつて、盛久、阿古屋、景清が懐にかゝるを引退けて、仕込みを拔きかける。阿古屋、この鞘に手をかける。景清、切つて行くを盛久、馬柄杓にて請けとめる立廻り。景清、盛久が襟にかける胸札へ手をかけ、これを引ツ切る。盛久、景清が懐より又ぞろ旗を引出す。この時、經遠、心付き、よろぼひ寄つて、それトかゝるを、景清一刀に經遠を切る。又ドロ／＼になり、景清片手にて旗を引取り、經遠、見事にかへる。これにて胸札と旗は景清が手に入る。盛久は白骨、阿古屋は卒塔婆を探り見て思ひ入れ。この仕組み各々入れ替つて見得よろしく

幕

あとシヤギリ。

第一番目　四建目　淨瑠璃の場

上の巻　**操常磐島臺**　常磐津小文字太夫連中

下の巻　**詠梅松清元**　清元延壽太夫連中

役名——小松内府重盛。茶筌賣り、禪了實ハ崇徳院愛樹松の精。關原藤太家次。重盛の侍女、芳野。同、初瀨。同、七野。同、小倉。新院の女官、白峰の内侍。郎黨、五郎助。同、九郎藏。郎黨、源内。小野の賤の女、小雪實ハ惡源太義平妻雲井の前。北野の賤の男、千本の枝六。小原女、手綱のお糸實ハ崇徳院の愛樹梅の精。

本舞臺、殘らず平舞臺、若松を描いたる襖。眞中、二人乘りの常足の淨瑠璃臺。爰に小文字太夫三味線連中。よき所に若松の島臺。麻上下の頭取居並び、祝儀の小唄にて幕明く。ト頭取、小文字太夫名跡の披露目、淨瑠璃の役振れあつて、直ぐに前彈きになり、「老松」の淨瑠璃、めでたく納まる。ト件の島臺を打返し、紫にふせん蝶の幕を引出し、右連中を返す。片シヤギリにな

り、雨落ちより大松の雨を染めたる幕を段々に引上げる。留めの柝に付いて、片シャギリ打上げる。風の音、トヒョになり、日覆より鷹一羽、雁金を追つて舞ひ下がる。いづくともなく矢一筋飛び來て件の雁金に立つ。鳥は幕の内へ落ちる。これをキツカケに雷の音、早舞ひにてツナギ。右の幕を切つて落す。

本舞臺、三間の間、紫にふぜん蝶の幕張り。爰に出入りあり、よき所に梅松の大樹、同じく吊り枝この下に歌を彫り付けたる右の碑銘。上の方、常磐津連中。爰に重盛、長の下を穿き、唐裝束、同じく冠を着て、軍配を持ち、秦の始皇の拵らへ。小倉、芳野、初瀬、七野、赤き衣裳の上へ白張の上を引ッかけ、粕烏帽子にて半弓、鷹を据ゑ、よき所に銚子杯を入れたる野風呂を置き、皆々並びよく居並ぶ。鳴り物打ちあげる。直ぐに淨瑠璃。

〽仇なりと、名にこそいへり櫻木も、いつより今はうら枯れて、松にはつゞく花もなき、雨に色増す振り袖の、男出立ちも恥かしく、顔に照り葉の女子同士、供奉の人にはあま口と、見えぬ山路の一時雨、御大將もこの程は、濡れても見たき風情にて、袂の露もいとひなく、猶踏み分けし道もせに、晴れ行く雲を松ケ枝の、下に暫しやイみぬ。

ト振りよろしく、皆々空を見て、雨の晴れたるこなし。

重盛　かん庭の松は、千尺の雨に動き、庭前の竹は、一そうの秋にゆるゝと、唐歌の秀逸。宜なるかな。今日某、當社北野の御神へ、心願あつて歸るさに、長閑けき空を幸ひ、女子ばかりを召し具し、遊獵と號し、逆徒の輩詮議の爲、廣野に出て、狩倉の催ふし。思はぬ時雨に松の宿り、人は情の下に住むと申せば、久し振りでの歸り新參、不調法なる秦の始皇、其方達も、いづれも樣へお願ひ申せ。

初瀨　有り難いその御諚。私しも共々に

七野　我が君さまへ申し上げます。今日のお狩倉も、申さば軍慮の駈引きにて

小倉　合ひ圖を定め、狩り出す諸鳥。

芳野　空行く翼は落矢に射落し、弓馬に賢き御勳し。

初瀨　さほど貴き我が君さま。

七野　見馴れぬ冠、御裝束。

小倉　どうも合點が

四人　參りませぬ。

重盛　さほどに思ふは尤も。父清盛公には、日夜にいや増す惡逆不道、天の憎み空恐ろしく、我れらが諫言用ひ給はず、子として父に背くには似たれども、同じ日の本にて、共に天を拜す時は、君への不忠、それゆゑに、秦の始皇が學び、仁を以て天下を治む我が好意。これ見よ、草木心無しといへど、不時の時雨に暫しの宿り。人ならば賞を施し、禮を謝すべきに、その代り、今よりこの松を、我が愛樹と定め、一枝の粗忽あらば、曲事たるべき事。

ト狂言詞にて

あたりに住む民家の者を呼び出し、きつと申し付け候へ。

四人　畏まつて候ふ。

初瀬　なう〱、里人。頼うだる人の申しつけある程に

芳野　急ぎ歩みを運び候へ。

四人　運び候へ。

ト出端のあしらひ。

〽高砂の松の春風吹きくれて、尾上の鐘の響くなり〽誰れをかも知る人にせん高砂の、松も昔の友ならで、霜の一夜の起居にも、心を友と菅蓆、思ひをのぶる二人連れ。

ト誂らへの鳴り物になり、向うより小雪、振り袖衣裳、上へ千早と見える袖無し羽織を着、綿の様なる頭巾、高砂の姥の見得。落葉の入つたる籠を背負ひ、竹箒を持ち出て來り、花道にて

〽云ひつれば、松に事問ふそよ風の、山路も今は錦して、中に一際色添へて、うつり心の四つ紅葉。

ト よき時分向うより枝六、やつし衣裳の上へ、水衣と見える袖無し、柿の頭巾、熊手を持ち、高砂の尉の拵らへにて出て來り

〽これも吾妻へ歸り花、森にはあらぬ一際の、御贔屓かざす霜除けに、まだ咲き殘る菊あれば、こりや有り難いぢやないかいな〽二人連れ立ちや餘所目ながら、どうした事と指さされ〽惚れて惚れられて、相惚れとやら、とゞの仕舞ひは、どうなさるなぞと云ふのは、それそれ岡燒もちではないかいな〽人の噂も數へて見れば、七十五六、八十が、その年知れぬ尉と姥、似たる姿の落葉搔き、打ちつれ立ちてぞ來りける。

ト 舞臺へ來る。皆々見て

四人　最前より、我が君樣のお待ち兼ね。よう來て下さんした。

初瀬　お前方は、女夫連れと見えるが、この近邊の

七野　お方でござんせうな。

枝六　成る程、私しは此あたりに住む、百姓でござりまする。耕作の間には、落葉を掻きに出ます、千本の枝六と申す者でござります。又この女中は、私しが女房と申したいが、矢張り何でもござりませぬ。

小雪　只今、このお方の申されまする通り、私しは同じ村に居りまする、賤の小雪と申します。お見上げますれば、いとしい高位のお方。して、あなた様は。

芳野　恐れ多くも、小松の三位重盛公。

小雪　その重盛さまが、卑しい私しどもを

枝六　これへお呼び出しなされましたは

兩人　何の御用でござりまする。

重盛　其方達を、召し出したは、餘の儀でない。今日、某がこの所に於て、狩倉の折柄、一矢を以て翼を射落す、その血汐、これなる松の木にかゝると等しく、雷鳴發して、俄の動搖。

枝六　ハテ、それは不思議な事。鳥の血汐が松へかゝると

小雪　俄の雷、篠突く雨。そんなら劍の

重盛　ヤ。

ト思ひ入れ。

小雪　イヤ、連れのお方も、さぞお困りでござりませう。

重盛　それゆゑにこそ、暫しの雨宿り。今よりこの松に粗忽なき様に、きつと守りを致してよからう。

小雪　ほんに優しい、いとしい殿様。

枝六　イヤア、そんなら小雪はお殿様。

小雪　一目見るより戀風の

枝六　むすぼれかゝる出來心か。

小雪　アイ、恥かしながら。

枝六　イヤア、こいつはおつりきになつたわえ。

芳野　女子は誰れしも同じ事。

初瀬　我が君さまにも、御狩の獲物。

重盛　コリヤ〳〵、其方達、何を申す。どう致して、猥らがましい、左様な事が。

四人　さつても堅い、あなたの御氣性。

枝六　オツト、待つたり。何も云ふまい。その堅い所の節くれも、萬事は此方が呑み込み山。
〽杵柄取つた昔より、變らぬものは、世の中の、戀と情の二柱　〽天の鈿女の神達も、ツイ見ぬ振りの常闇と、四人は目引き袖引いて、木の間も遠き谷の戸の、流れよるべも粹なれや。
ト枝六、女形とよろしくあつて、女形、下座へ入る。枝六、こなしあつて
サア、これからが大事の一段、遠慮なしにズツと側へ。
ト小雪を突きやる。
重盛　コレ、滅多な事を。男女七歳にして、同席を許さずとあれば。
枝六　ハテ、それは昔のちんぷんかん、堅氣を云はずと、ズツとお側へ。
小雪　それぢやというて今更に、打つけがましう、どうしてこれが。
枝六　ハテ、困つたものだ。そんならおれを殿樣に准らへ、心の丈を存分に。
小雪　でも、わたしは。
枝六　恥かしいと云ふのか。
小雪　サア、それはな。
〽押し付けられて、それぞとも、云はれぬ事の面羞げ、わたしやあたりの賤の女なれど、惚

れたに嘘はないものを、痴話も悋氣も獨り寢の、心に殘る思ひ草、思ひ返して見し夢も、覺めて枕に一つ夜着、いつかは君をまつの緣、又逢ふまでは待ちかへし、せめて一度のお情と、袂に縋る枯れ尾花、恨みかこつぞ道理なり。

枝六　なんとお殿樣、斯ういふ心意氣では、捨て置かれますまいがな。

重盛　小雪とやらんが、切なる心は滿足なれど、未だ天下穩かならず、軍慮に暇あらざるうち、女子に溺れ政ごと、正しからずと世の人口。

〽去れば往古も例しあり、齊の君ある時帝を諫めて曰く、數多の美女を撰まれて、日夜飮酒に耽るといへど、あれ見よ四方に國の亂れ、西にゑひしん八萬餘騎、東に匈奴十萬餘騎、三手に分れて智仁勇、備へを堅く守るといへど、齊王義女が諫めに依り、遂に國家を保つとかや。

枝六　どうあつても、お殿樣は、堅氣だわえ。その何とやらいふ女も、互ひに心打解けて、それから毎晩夜這星。

小雪　忍ぶおばしま、長廊下、几帳一重の御寢所に

枝六　帝も戀に身を窶す。

重盛　それは唐土。

枝六　これは又
小雪　我が日の本といふうちにも
重盛　また下々は格別な
枝六　その實相は、オヽそれよ。
〽いつの夜に來たいとて、契る約束も、心を咎めて、素面ではどうか知らばくれ、ちよつと横丁の湯豆腐で、晩二合半が四ツあげの、兼ねてぞ通ふしん猫が、闇には白き頬冠り、行きつ戻りつ軒下の、露にぞ濡れる日和下駄〽炭俵とて見捨てはされぬ、昔や野山の花すゝき、〽なぞと合ひ圖を吹き込めば〽彼奴もましくら床の上、直す二ツの枕紙、見られて辛き文よりも、嬉しき戀の雀形、行燈へ被せてほの暗く、忍ぶ廊下や遣り手が目顔、寢卷の儘の肌寒も、ハツクサメ、風の浮名や散らすらん。
ト客と女郎の振り納まる。
重盛　鄙に珍らしき戀話し。予も殆んど感心いたした。
枝六　サア、それぢやに依つてお殿樣。
小雪　どうぞ、わたしがこの戀を

枝六　叶へてやつて下さりませ。

重盛　サ、それは。

枝六　ハテ、あなたはお武家氣質、後を見せては御卑怯。幕の内にて二人の組打ち。

重盛　どうして其やうな事が。

枝六　ハテ、斯樣な事も貴人の御座興。幸ひ爰に銚子杯、時に取つての三々九度。

ト野風呂の内より、銚子杯を出す。

重盛　ヤ。

小雪　そんなら、お前は。

枝六　仲人は宵の程。我れはお次でお肴の

〽用意いたすも、とつかはと、踏み出す足も枝六が、麓を指して急ぎ行く。

ト枝六、この文句にて向うへ入る。兩人、跡見送り

重盛　ハテ、氣散じな賤の男、我れは當所へ神拜なさん。

ト行きにかゝるを引留める。

小雪　流石は高位のつれないお言葉、お否であらうが、お情に、可愛い女子と只一言。

重盛　云はぬは云ふにいや增すと

小雪　譬へにあれど女氣は

重盛　疑ふ胸も我が胸も

小雪　明けて云はれぬ

重盛　その身の俗姓。

小雪　エ。

重盛　サア、その身の願ひ、叶へてくれう。

小雪　そんなら、あなたは。

重盛　僞はりならぬ武士の一言。

小雪　堅き固めの重盛公。

重盛　賤の女。

小雪　ヤ。

ト思ひ入れ。

重盛　床あたゝめて、待つて居るぞよ。

ト唄になり、重盛、こなしあつて、奥へ入る。合ひ方彈き流し、小雪、嬉しき思ひ入れにて

小雪 嬉しいあなたのお詞、お情厚きお心は、女子のわたしが身の果報。これと云ふも、この社のお引合せ。ちつとも早うお寢間の內へ……。イヤ〳〵、馴れ〳〵しい女子と、お下げすみも恥かしい。此やうな時には、酒なと一献。

ト件の銚子杯にて一つ飲み、思ひ入れあつて、また飲まうとする。ドロ〳〵になり、左右の梅松の元より雲氣立ち昇る。小雪これを見て、キツと思ひ入れ。誂らへの鳴り物。

小雪 ハテ、心得ぬこの場の有樣。左右に生いし二木が元に、崇德院御在世の砌り、この御社へ遊覽の折柄、枝葉茂りし芳しさを、御賞美あつて、梅は諸木の兄と呼び、松には太夫の號を賜はり、詠歌を殘し置き給ふ、その地中より、怪しき雲氣立ち昇るは、榮ふる平家を討ち亡ぼし、源氏は雲井に名を上げよと、知らせ給ふか、アラ〳〵、有り難やな。

ト、ドロ〳〵にて雲氣は上へ引いて取る。小雪、思ひ入れあつて

それにつけても我が夫、平家調伏のため、この松ヶ根に埋め置かれし一腰にて、雨を乞ひ、雷鳴發すも、雷丸の威德、元より敏き重盛公、この場にあるを察し、平家方の手に入る時は、夫の恥辱、片時も早う、この所を。さうぢや

ト熊手の柄にて松の下を掘り、袋入りの短刀を出し

この短刀のあることそ幸ひ、色に事寄せ、側へ近寄り。ソレ。

ト行かうとする。この前より四人の女形、出かゝりゐて

四人　女中さん、待たしやんせ。

小雪　ヤ、お前方は、いつの間に。

初瀬　爰へ來たのはお前の身元。

七野　怪しい女と我が君さまの

小倉　疑ひかゝりし上からは

芳野　サア、尋常に

四人　その俗姓を、名乘るまいか。

小雪　これは又、譯もない。私しは小雪と申す賤しき女、お疑ひ遊ばすやうな者ではござりませぬ。

芳野　その又怪しくない者が

初瀬　隱し持つたる

四人　短刀は。

小雪　サ、それは。

初瀬　そんならお前の

四人　身元を云うて。

小雪　サ、それは。

皆々　サア／＼。

七野　怪しい女中。

ト小雪にかゝり、ちよつと立廻り、五人、しやんと思ひ入れ。

〽戀と情は義理ある者よ、引くに引かれぬこの三味線の、色に添ふとは二世までかけて、逢へば嬉しき顏見るなれど、別れ思へば逢はぬが増しよ〽戀の慾。

ト太鼓の入つたる所作。この文句二度返す。よき時分より遠寄せ頭の打込み。小雪、心得ぬ思ひ入れにて、向うへ行かうとする。四人、これを支へる思ひ入れ。尤も皆振りの内にあるべし。淨瑠璃切れると、ドンチヤン烈しく打つ。皆々思ひ入れ。

小雪　ヤヽ、不時に聞ゆるあの貝鉦。

ト行かうとするを、四人、小雪を支へてゐる。ドンチヤン烈しく。向うより源内、雜兵の拵らへにて



清元延寿太夫
清元政太夫

陣笠を持ち、走り出て來り

源內 御主人これに在するや。火急の早打ち、言上仕らん。

小雪 我が夫始め、一門の安否心元なし。軍の勝負、なんと〳〵。

源內 さん候ふ。待賢門、不時の軍と申せども、用心堅固の、この有樣。〽內より門をさし固め、ひそめく所へ淸盛公、三千餘騎にて押寄すれば、その手の大將信賴どの、うろたへ廻り、悔り仰天、脛當て片足、小手片手、長刀取つて腰に差し、はだせの馬には乘りたれども、攻めつる太鼓はどん〳〵からり、馬はひん〳〵嘶く聲、信賴どのはころりと落馬、鼻血は三石三斗三升三合、升目にあらぬ計り事、義朝公は大敗軍、御用意召され御主人さま、我れらはこれより拾ひ首、高名するはこの時と、戰場さして急ぎ行く。

ト源內、振りあつて向うへ入る。小雪、これを聞いて無念の思ひ入れにて

小雪 云ひ甲斐なき源家の敗軍。都の內に立つ足も、なき運命の夫舅、落ちさせ給ふか、ホヽホイ。

ト向うを見て思ひ入れ。

四人 さてこそ怪しき女中の身元。

トかゝる。

小雪　何を小癪な。

ト件の懷劍を拔く。大雷になり、皆々立ちかゝる時、ドンと雷落ちる音。煙硝火パッと立つ。四人「ハア」とひれ伏す。小雪、心付く。

劍の威德に又もや動搖、この擧にのつて重盛どの、討ち亡ぼさんと思へども、夫の安否心元ない、片時も早う、待賢門へ。

トこの文句にて花道よき所までゆく。幕の內にて

〽女の操、夫思ふ、わしの羽衣、甲斐々々しく、裾はせおつて行く所へ。

重盛　女待て。

トこれにて小雪、ヂツと思ひ入れ。また行かうとする。

イヤサ、惡源太義平が妻、雲井の前、マア〳〵待て。

小雪　なんと

トつゝかけになり、幕を絞らせ、重盛、以前の裝束脫ぎかけ、大臣烏帽子、付け太刀、金の采を持ち、出て來る、此うち小雪、ツカ〳〵と舞臺へ戾る。四人の女形、皆々心付き、こなしある。

合點の參らぬ重盛公のお詞。自ら事は賤の小雪、雲井の前とは何ゆゑあつて。

重盛　その證據は、それなる雷丸。土中に埋め、平家調伏なすといへど、最前鳥の血汐、この松ケ枝にかゝると其まゝ俄の動搖、義平が妻は酉の年度揃ひしゆゑ、その一腰を手に觸るれば、又もや雷、この有樣、なんと相違はあるまいが。

小雪　サ、それは。

重盛　女の身として、姿を窶し、夫の恥辱を雪がんと、我れに刃向ふ天晴れ操。その功に免じ、この場は此まゝ見遁がし遣はす。夫や舅に廻り逢ひ、貞女を守り、期しての再會。

小雪　その仁心はさる事ながら、情は情、仇は仇、源家の敵、重盛公。

ト詰め寄せる。

重盛　何を小癪な。

四人　どつこい。

ト思ひ入れ。

〽刃するどき電光石火、吹雪にあらぬ太刀風に、散るや木の葉のさら〳〵、孝と操は末の世に、鏡とこそは　三重　〽なりにけり。

トこの文句にて、散らしの模樣。直中に小雪、上手に重盛、四人の女形、梅の枝を持ち、前へ取卷き、

この見得にて淨瑠璃納まる。太夫連中は打返しにて隱し、道具廻る

本舞臺、三間の間、向う張り物、柵矢來の書割り。上の方、紅葉の立ち木、同じく照り葉の吊り枝、下座の口、柵矢來、新關の冠木門、出入りあり、爰に五郎助、九郎藏、雜兵の形にて、牢輿を舁き据ゑ、藤太、凜々しき拵らへにて、立ちかゝり居る。すべて逢坂山新關の體。時の太鼓にて道具とまる。

五郎　淸盛公の仰せに依つて、新院の胤を懷姙せし

九郎　白峰の内侍、諸所方々詮議いたし、牢輿へ打込み、これまで引据ゑてござりまする。

藤太　卽ち内侍が首討つ役は、この藤太。御兩所には大切な囚人、急ぎ關所の内へ。

兩人　心得ました。

ト件の牢輿を舁き上げ、關の内へ入る。藤太殘り、こなしあつて

藤太　この程、源家新院の殘黨、詮議いたさんその爲に、この逢坂山に新關を構へ、事嚴密に訊す折柄、首尾よく手に入る白峰の内侍。女ながらも新院の胤を懷姙いたせば、敵の末は根を絕てよと、この所に於て首討つ役はこの關原。最早刻限。イデ、内侍が首を。

ト關の内へ入る。大ドロ〱になり、最前の雲氣、日覆より出て、せり出しの穴へ引いて取る。正面の張り物を打返す。爰に淸元連中居並び、直ぐに前彈きにかゝる。

在郷めいたる歌〽ひとり思ひを枕に語り、せめて賴みの夢さへも、麻の衣に置く霜の〽彼の唐土の劉君が愛せし名をも黑牡丹、黑木下ろして返り道、報謝に乘せて茶筌賣り、その引く綱も糸による、佛の御手も他生にて、緣は田舍の畦づたひ。

ト誂らへの鳴り物になり、爰においと、小原女に拵らへ、頭へ柴を載せ、禪了、鉢叩きの形にて、茶筌をかたげ、野牛に横乘り、おいと、綱を取つてゐる見得。右の鳴り物にて、見事にせり上げる。

〽釋迦の涅槃も日を醒ます、水の出花の茶の香り、はたちの人の喜撰まで、しやが父に似た時鳥、待つ身になれば曉までも、めぐり〱て長嘯が、墓もいにしへその古き、瓢箪見せよ鉢叩き〽エヽなんぢやいな置かしやんせ、今はその身でありながら、嗜ましやんせ坊さんと、戀にひぞらぬ二ツ文字、重ね扇に三つ重ね、衣紋にそよと凩や、關のこなたに訪づれて。

いと　爰は名におふ逢坂山、新たに立てしこのお關所、女子のわたしは行く事ならぬ。これからお前は步行道拾うて下さんせ。

禪了　これは尤もな事。愚僧は諸國雲水の身の上。これから吾妻へ赴き、また歸つて逢ひませう。

いと　不思議な縁のこの道連れ。
禪了　美しい姐えと別れるか。
いと　辛い旅路も
禪了　一夜の情も
いと　別れは同じ
禪了　戀の道。
いと　そんなら、お前は。
禪了　佛も元は凡夫なり。

ト腰の瓢簞を出す。

〽そも我れは、色にすねたる世捨て人、月のみ獨り昔顔、これも泪の種ふくべ、なまうだなまうだ南無阿彌陀〽酒はなけれども瓢簞を、見るにつけても、凡夫心、思ふ絆に結んでは、御師の涅槃の長枕、なまうだ〳〵南無阿彌陀、これが別れの辻占と〽行かんとするを押し隔て、これ別るゝとは氣にかゝる、七夕さんの雨の夜は、身につまされて、おいとしうござる、戀と云ふ字に移り香のせて、牛の背にまで憂きやつれ、逢ふ夜短かし逢はぬ夜長し、

來ぬ夜高じて小田卷を、手ぐりくる〳〵車の輪、仲好い同志と謳はるゝ、それがわたしが願ひぞや。

禪了　こりやア、難波下りの小原女どの、藝子女形に仕込まれたか。飛んだ手練の手管が上手だの。そりやア、此方から願ふ事だ。シタガ、上方土産に、なんぞ面白い話しがありさうなもの。

いと　なんの、わたしがやうな不器用者が。

禪了　これは御挨拶。アノ大阪で梅幸が拵らへて、今專ら藝子が彈いて流行る唄があると聞いたが、その唄を知つてなら、どうぞ聞かしてくれぬか。

いと　その唄の事なら、慥か斯うであつたわいなア。

〽そなた思へば照る日も曇る、茶筌茶柄杓茶碗まで、そなたの顏に見ゆるとは、どうした因果な事ぢやいなア〽それさにうツ惚れ申して、夜も晝も物が手にや附かぬ、野良で見初めて瀨戸口で、口說くにそれ程憎いのか、さりとはつれない男つら、エヽ面憎や。

いと　こんな事であつたわいなア。

禪了　こいつは面白いわえ。

トこの時、五郎助、九郎藏、四天の形にて出て來り

兩人　怪しい兩人、動きやァがるな。
糸禪　こりやァ、わし等を、なんとさつしやる。
五郎　なんとするとは、白化けな。いま關所の彼方で內侍の首、關原が立寄つて
九郎　ぶち落さんとさつしやれば、五體竦んで討ち兼ねる。仔細ぞあらんとためらふところ
五郎　さてこそ怪しい二人の者。
九郎　わいらは爰へ何しに來た。
禪了　私しは空也寺より、鉢とりに步く、茶筌賣りでござります。
いと　わたしは、このあたりに居ります小原女、この御出家に賴まれて、牛を引いて參つた者。
兩人　どうぞ、この關を通して下さりませ。
五郎　ウム、茶筌賣りの坊主とあれば、それに相違もあるまいが
九郎　諸國遍歷する出家、國々の名所古跡は知つて居やうな。
禪了　そりやハヤ、雲水の身の一德、日本中はわしが寢所。
兩人　それを話して聞かせたら、この關所は通してやるべい。
禪了　そりや、關さへ通して下さらば、何より易い事。ちよつと爰で關東の話し。

いと　わたしは又、越後瞽女になつて相方に。

五郎　こりやアよからう、やらかせ〳〵。

ト兩人よろしくあつて、禪了、扇を杖にして

〽自體我れらは關東べいの座頭、瞽女は越後で新潟あたり。

禪了　ドレ、辨天樣へと參らうか。

ト行かうとするを、お糸、探り寄つて袖を留める。

〽一人行くとは胴慾な、見られぬものを辨天へ、籠る地びたのつちのとの、巳待ちの晩の嬉しさを、忘れてかいなと胸倉を、見えねば脊筋と取り違へ、云ひたい事も痰の灸、七九の竹の心から、割つて見せても見えぬゆゑ、戀でなうてもいつも闇、ツイ抱きつくも脊中同志、灸を擦りむくばかりなり。

五郎　こりやア、面白い。とてもの事にもう一ツ

九郎　聞きたいな。

禪了　遣り次手だ。もう一つ話すべい。

〽隣りの藪から、によき〳〵出たは去年の竹の子、のこ〳〵眞竹、こちのひたけに見て置い

た、しよんがいな、ヤレ見て置いた、こちのひたけに見て置いた、しよんがいな、おどろとま〻よ、きつとま〻よ、愛しい殿ごと、こちや寢たがよいわいなァ　〽おなべ女中がへちのせなあとな、ちよらくりそめて、いつかでつかく、ずんすはらんで、うちの畑で菜を摘むふり、おばさま見なさろ、あんたるざまだ、しつかい蛙の立泳ぎ、おや〳〵をかしうおんおぢやる、よこ〳〵おんじやるよう。

兩人　ヤンヤ〳〵

ト兩人、よろしく振りあつて

禪了　これから又、高島踊りを見せますべい。

五郎　ナニ、高島踊りだ。こいつは珍らしい。

兩人　とても事に、やつて見せろ〳〵。

トこれより兩人、よろしく支度して、太鼓を持ち、振りにか〻る。

〽高島のおじやらく娘が、じよなめくえ〳〵、また〳〵〳〵またかいなァ　〽高島の道樂息子があじよやァる、來た〳〵〳〵來たわいな　〽鄙の世界は別なれや。

トよろしく納まる。

五郎　ヤア、最前からのしなし振り。
九郎　どうでも怪しい二人の者。
兩人　イデ、我れ〳〵が引立てゝ。
〽ト兩人、双方へかゝり立廻りのうち
かゝる所へ關原が、內侍を捕へて走り出で。
ト藤太、凛々しき好みの形にて、內侍を引立て出て來り
藤太　ヤア、手緩い〳〵。二人の奴等は二人して、搦め捕つて差出せ。この關原は新院の、胤を宿せし
この內侍を。
內侍　どうあつても。
藤太　今さら未練な。觀念なせ。
兩人　二人の奴等は。
〽刀振り上げ立向ひ、既にかうよと見る所に、五體すくんでタヂ〳〵〳〵。
ト五郎助はお糸、九郎藏は禪了、藤太は內侍が首刎ねようとする。ドロ〳〵になり、三人、立ち竦み
になる。

三人　こりや、どうだ。

〽ためらふ暇にいづくかは、怪しの忍び現はれ出で、支ゆる關原跳ね退け、突き退け、何か様子は白峰の、内侍を小脇にひんだかへ、いち足出して駈けて行く。

トこの文句の内、下の方より盛久、どてら布子、山賤の形、苧くそ頭巾にて顔を隠し出て來り、物云はずに内侍を引ツ抱へ、支へる藤太を蹴倒し、向うへ走り入る。三人見て

三人　あれをやつては。

ト五郎助、九郎藏。お糸、禪了をふり捨て、行かうとするを、ドロ〳〵にて、タヂ〳〵と跡戻りして、キツとなる。

藤太　ヤア、妨げなすこの二人。何れもぬかるな。

兩人　合點だ。

ト兩人左右へかゝる。大ドロ〳〵になり、兩人、左右へ別れ、見事に中返りする。このキッカケにお糸、禪了、梅松の精靈の拵らへになる。三人、この體を見て

藤太　さてこそ二人がこの有樣。そも先づうぬは

兩人　何奴だエヽ。

〽なう我れ〳〵が身の上こそ、そも〳〵人間の業受けて、見えし姿の二人の者、崇徳院の御愛樹にて、舊梅古松の精魂なり。

三人　さてこそなア。

禪了　驕る平家のその爲に、新院は讃岐へ遠流。

いと　今は世捨ての二木ながら、御懷胎の內侍さまが、蔭身に付いて守るなり。

藤太　何を小癪な。

〽邪見の相國淸盛が、新院のお胤を失はんとする、報いの程を思ひ知れと、有り合ふ枝を呵責の笞、打つてかゝりし變通自在、凡人ならぬ精靈の、ひらり〳〵飛びかふ姿、北山颪しの吹き迸る、八百八町御贔屓町、木每に花の顏見世と、深き惠みぞ有り難き〳〵。

トちらしの仕組みよろしく、禪了は上手松の木、お糸は下手梅の木へ立ち寄ると、よろしき所まで引上げる。藤太、眞中にてよろしく見得。大ドロ〳〵にカケリにて

幕

第一番目五建目

矢脊の里蒸風呂の場

役名――女盜賊、麻生のお松實ハ越中前司盛俊娘松ヶ枝。長田庄司次郎忠宗。萬金丹賣り、吉六

實ハ太夫之進朝長。風呂屋の三助實ハ小猿の三平。庄屋、わからず無理右衛門。盗賊、壬生の九助。米屋、次郎八實ハ野上の夜叉熊。郎黨、軍助。赤坂宿の醫師、藪井養仙。風呂の火焚き、鐵八實ハ三國の九郎藏。關原藤太家次。鎌田次郎政清妹、若柴。蒸風呂屋、摺針太郎作實ハ長田三郎景宗。左馬頭源の義朝。

本舞臺三間の間、藁葺きの世話屋體。上の方、障子閉て切り、正面、戸棚、暖簾に赤壁、蒸風呂の定め書。欄間へ貼り、下の方に繩すだれ掛けし風呂の入り口。行燈に、、、、、、やせ相傳蒸風呂と書き、外は藪垣紅梅の立ち木、花咲く仕掛け。すべて美濃の國赤坂の驛、雪降りの體。冬至の通り神樂、てんつゝにて、幕明く。

ト爰に養仙、坊主醫者にて、藥箱より藥を調合して居る。三助、湯汲みの男、袢纏股引、赤松葉をこなして居る。鐵八、同じく火焚きの男にて、立ちかゝり居るを、九助、米屋の形にて留めて居る。無理右衛門、庄屋の拵らへにて、鐵八へ立ちかゝつて居るを、田舍女の若柴、古着屋の次郎八、留めて居る見得。

無理　コレ〳〵、三助の癖に、庄屋樣に向つて、太い奴ではないか。

次郎　ハテ、庄屋さん、靜かにしなさい。外聞が惡いわな。

若柴　さうでござんす。わたしもこの間から、宿取つて居る旅商人。兄さんは商ひに行きなさんす。お內の主人はお留守といひ、マア、靜かにしなさんせいなア。

九郎　コレサ、てまへも、爰の內の湯汲みではないか。掛取りのおいらまでが、此やうに留めるなら、好い加減に不請するがよいではないか。

鐵八　それだといつて、庄屋の癖に、大風を吐かす間拔けめ。さい薪で腦天を叩き割つてやるべい。

九助　コレ〳〵、三公、朋輩の事だ。挨拶をしてやらつしやいな。

三助　サ、わしも先刻から、さう思つて居やすが、なんぼ庄屋さんだとて、あんまり大風を極めるから、打ッちやつて置き申したが、病人の太郎作どのは留守の事だ。爰に居るわし等が、あんまり間拔けばかり云つて居るやうだ。モシ、わしが挨拶だ。スッパリわしに、預けなさい〳〵。

無理　店賃の催促に來たおれを、斷りは聞えたが、あんまり庄屋を安く吐かす、あの在郷野郎めが。

鐵八　ナニ、在郷とはおれが事か。この庄屋の鼻たらしめ。

次郎　ハテ、靜かにさつしやいな〳〵。

若柴　お前さん方が、其やうに深切に世話なさんすから、コレ、もう好い加減に、料簡しやんせいな。

鐵八　イヤモウ、どなたが御挨拶しなさらうが、なか〳〵得心しない鐵八も、萬金丹どの 妹御、お前の挨拶なら、どうともなりやす。その代りには、モシ、姐さん、お禮があらうね。

ト若柴へしなだれる。三助、鐵八を引退けて

三助　なんだ、この男は。朋輩の三助が見る前で、旅商人の吉六さまの 妹御に、びらしやら〳〵、見つともない、なんの事だ。

九助　それ〳〵、萬金丹のかみさまに、無駄をしたなら、コレ、七兩貳分の工面が有るか〳〵。

若柴　アヽ、モシ、わたしや女夫ぢやござんせぬ。同胞でござんすわいなア。

九助　ハテ、よく噓をつく女中ぢや。女房でなくば、色か〳〵。

養仙　アヽ、コレ〳〵、米屋どの、その女中は、あの萬金丹賣りの吉六どのゝ 妹に違ひはござらぬ。その證人は愚老でござる。僞はりならぬ誓言は、坊主頭に

九助　松三本……イヤ、松といへば、太郎作どのゝ、お內儀お松どのは、まだ戾らしやらぬかな。

鐵八　左やうサ。太郎作どのゝ病の癒る大願に、淸水へ參りたい、留守を賴むと、あの健忘病みの亭主を預けて

三助　女順禮同然に、葛籠を脊負つて旅歩き。

次郎　留守の間に仕送つた、古着の代が八兩何がし。
九助　安い米でも、二兩と上端。
無理　店賃〆めて七貫八百。
養仙　愚老も、餘程高金の、藥種を求めて參つたが、內儀は旅行、御亭主は相對出來ぬ健忘病み。
三助　おまけに吃りで、言舌分らず、誠に留守店の厄介者。
若柴　それにつけても、旅行のお內儀さんが戻らぬうちは、預かつたせうがには、外へといつては、商ひにも行かれぬゆゑ、兄さんも迷惑して居さんすわいな。
次郎　時に今夜は、冬至の事なり、庄屋どのと湯汲み手合ひも、なんと、今のごたつきは、わし等に免じて、濟まして下さい。
九助　兄イとおいらが仲人だ。濟まして下さい〳〵。
三助　そりやアお世話でござります、……鐵八、どうする、濟ましてくれるか。
鐵八　折角のお世話だ。好いやうに賴みます。
次郎　時に庄屋さま、どうだ。
無理　向うがおとなしく出れば、わしもその通りサ。

三助　それで極まつた。一ツ〆めなさい。

皆々　アヽ、ヨイ〳〵〳〵。

ト手を打つ。

無鐵　アヽ、お世話でござりやす。

若柴　それでわたしも、落ちついたわいな。モシ、太郎作さんの、歸りなさんす程も知れぬが、寒いに風呂へ入つて、溫まつてお出でなさんせいな。

無理　さうしませう。亭主の歸るまで、溫まつて行きませう。

養仙　愚老は、近所の病家へ參り、歸りに寄ります。藥箱を賴みます。

若柴　お前樣、脊戶口からお出でなされませ。

養仙　それは近道、左樣いたさう……これは不躾、御免なされ。

ト下駄傘を持ち、暖簾口へ入る。

九助　コレ〳〵、あの醫者は、下駄を持つて奧へ入るとは、イヤ、怪しからぬ内だ。おいらも風呂へ、でんぼうで入らう。

三鐵　そいつは御免だ。

皆々　ドレ、溫まつて待たうか。

ト通り神樂になり、てんつゝにて、皆々帯を解きながら、下の方、風呂場へ入る。三助、鐵八、薪を取出して割りにかゝる。雪頻りに降る。トヒヨになり、日覆より前幕の鷹、書き物を包みしまゝ舞うて來り、向うへ行く。舞臺の三人、見付けて

三人　アレ〳〵、何か鷹が、書いた物を摑んで居るワ。

三助　鳶なら、油揚げだが、鷹の攫ふは、なんであらうなア。

鐵八　何しろ、叩き落して、煮て喰はうか。

ト長棹を取つて追ひにかゝる。

若柴　ハテ、殺生な。よしなさんせ。

三助　日暮れに舞ふのは、夜鷹だ。ぶち落せ〳〵。

鐵八　鷹ヤアイ〳〵、エヽ、雪空で見えないわえ。

ト長棹で拂ふ。若柴留める。この間に鷹は向うへ引いて取る。兩人は空を見て、鷹を尋ねる思ひ入れ。通り神樂、てんつゝになり、向うより太郎作、ぼつとせかつら、空色木綿、石持ちの布子、淺黄の股引にて、安下駄を履き、菅笠を横にかぶり、焚木を脊負ひ、鷹の攫ひし神文を、『道にて拾ひし體にて、

讀みながら空を眺め、神文を讀みては驚ろき、また空を見て鷹の行く先を尋ねる思ひ入れ。神文を讀みながら、門口へ來り、思ひ入れあつて

太郎　今の鷹めが、落し居つた、こりやコレ兄の

ト吃りの思ひ入れにて、神文に驚ろく樣子。鐵八、棹を振り廻して

鐵八　鷹よく。

ト思はず太郎作を棹にてくらはす。太郎作、驚ろき、神文を懷へ入れ、飛び退いて逃げるを、若柴見て

若柴　アヽコレ、太郎作さんが、戾つてぢやわいな。

ト兩人、見て

鐵三　ヤア、そんなら棹でくらはしたは。

太郎　惡い事があるなら、堪忍して下さいく。

ト二人へ手を合せて、慄へながら吃りく詫びる。

若柴　これはしたり、お前の内ぢやわいなア。サ、入りなさんせく。

ト手を引いて内へ入る。太郎作、荷を下ろす。

鐵八　空飛ぶ鷹に氣を取られ、太郎作さんの歸りも知らず。併し、何やら書いた物、モシ、お前は拾はしつたか。

太郎　ヤ、……イ丶ヤ〳〵。

ト吃りにて頭振る。

若柴　こりや、お前、焚木を取つて歸りなさんしたか。さぞマア、冷たうござんせう。

太郎　冷たうて〳〵、身内が凍えたわいの。

若柴　さうでござんせう、……サ、お茶を飮みなさんせ。

ト茶碗を出す。太郎作、取つて頂き〳〵、口の內にて何やら拜む思ひ入れにて上の方へ行き、茶を飮み居る。三助、鐵八、捨ぜりふにて、薪を割り、靑松葉をこなす。通り神樂、てんつゝになり、向うより朝長、淺黃頭巾、やつし股引、三尺帶、草鞋、白手甲にて、菅笠をかむり、黑塗りの箱に勢州淺間萬金丹と金粉にて書いたる兩掛けの荷を擔ぎ、糸立てを着て出て來る。跡より藤太、白襦袢一枚にて出て來り、花道にて

藤太　コリヤ〳〵、町人、爰らに宿はないか。あらば敎へい。どうぢや〳〵。

朝長　なんぢや、この人は。このマア雪に、其やうな樣をして、乞食か雲助か、大風な物云ひやうぢや

なア。

藤太　イヤノ〳〵、雲助乞食でないぞ。身共は立派な侍ひぢや。

朝長　其やうな、寒い形でも侍か。アヽ、こいつは、どうでも狂人か、狐付きかも知れぬ。

藤太　イヤノ〳〵、狐付きはこの間化かされて、しかもその節、坊主にまでなつたぢや。併し、大願あつて金毘羅へ、侍ひの裸參りぢや。裸參り〳〵。

ト俄に裸參りの思ひ入れ。

朝長　アヽ、お侍ひの裸參りか。ハテ、信心な事ぢやなう。有やうはわしらも、旅稼ぎの萬金丹、アノ向うの蒸風呂屋に宿取つて居ますが、お前も宿が借りたいのか。

藤太　左樣ぢや〳〵。この大雪で、先も跡へも參り難し。どうぞ宿屋の世話を頼みたいわえ。

朝長　そんなら、わしが宿を頼んで見ませう。サ、斯うござりませ。

藤太　そりや忝ないわえ。

ト兩人、門口へ來り

朝長　妹、今戻つたわいの。

若紫　さぞマア、寒うござんせうな。

朝長　イヤモウ、惣身がワナ〳〵するわいの。このマア雪に、お侍ひの裸參り、宿が欲しいと云はる〻ゆゑ、連れて戻つた、……モシ、入らつしやりませ。

藤太　然らば許しやれ。

ト内へ入る。兩人見て

三助　コレ〳〵、この男はなんだ。合羽屋の手間取りか。

鐵八　但し、仁王の叩き放しか。とんだ者を連れて來たの。

藤太　イヤ〳〵、身は生れつきの赤子ぢやによつて、赤侍ひの內でも、赤いもの頭ぢや。見れば蒸風呂とあるが、幸ひ入つて、溫まりたいわえ〳〵。

若柴　イエ〳〵、お前の赤いのは、のぼせたも知れぬ。蒸風呂へ入つたら、湯氣に上がらうぞえ。

藤太　イヤ〳〵、氣遣ひ致すな。其方、身が宿を致しくるれば、大願叶うたその上では、褒美に知行をくれるぞ。

鐵三　エヽ、有り難うございます。

藤太　亭主はどれぢや。亭主に逢はう〳〵。

三助　ハイ〳〵、亭主は卽ちこれに居りまする、……コレ、太郎作さん、お侍ひの裸參りさまが、亭主

に逢はうと仰しやる。御挨拶をしなさい〳〵。
太郎　ハイ〳〵、私しが主人の太郎作でござります。ようお出でなされました。
ト吃り〳〵云ふ。藤太、見て
藤太　ア丶、この男は葛の葉が忰ぢやな。其方が母は狐か。左様か〳〵。
ト太郎作、これにて驚ろく。
朝長　モシ〳〵、なんで爰の主人は、狐の子と見えまする。
藤太　ハテ、彼の者の語音の調子は、吃りぢや。狐の子であらう。
皆々　何を仰しやります。
藤太　時に、一風呂温まりませうか。
ト通り神樂になり、風呂場の口へ入る。
鐵三　コレ、お前も、とんだ客を引いて來たの。
若紫　兄さん、お前、今日はマア、この雪に、どの邊を廻りなさんしたえ。
朝長　今日は、聞いてくれ、大阪の城下から、在方を残らずせつて、廻り廻つて本海道、野上の宿まで行つたと思やれ。

若柴　その野士は、平家の陣屋、そこへウロ〳〵、大事のお身にて。

ト思はず云ふを

朝長　ア、コレ。

トこなしあつて

盛俊さまとやらが、嚴しい固め。此方は幸ひ好い得意と、御陣屋へ願うて入り、ハイ〳〵、萬金丹に御用はござりませぬか、私しは藥賣りの吉六と申しまする者、お求めなされて下されと、頼んだりや、軍場でも病といふと恐るゝやら、仕込んで行つた萬金丹、賣り切つて戻つたぢや。

鐵三　そりや、お前仕合せだの。

朝長　なんでも御當所は、御贔屓強う見えまする。藥でさへ、賣れ口が多うござります。どうぞ私しも、長う御當所に足を止め、御厄介にならざアなりますまい。

鐵三　そりやアお前は、いゝ心がけだ。

朝長　ほんに、藥の賣れたで思ひ出した。モシ、太郎作どの、心持ちに變る事もござりませぬか。

太郎　アイ、忝なうござります。どうぞ早う嗅が戻ればよいに、お前方のお世話になるが、氣の毒でござります。

ト廻らぬ口にて氣の毒なる思ひ入れ。

朝長　ハテ、氣遣ひさんすな。今にお内儀が戻らるゝであらうわいの。

トこの時、風呂より無理右衞門、九助、次郎八、帶を締めながら、ワヤ〳〵云うて出て來り

四人　太郎作どの、戻つてか〳〵。

ト太郎作氣の毒なるこなし。

太郎　ハイ〳〵、ようお出でなされました。

無理　コレ〳〵、わが身は〳〵、この庄屋を騙しやつたの〳〵。

九助　この九助が、商賣の米屋は、當つて碎けても、貴樣は一向圓通寺、何を云つても、マヂ〳〵と、眩暈病の役立たず。

次郎　おまけに、言舌分らぬ吃り。内儀がいろ〳〵賴むゆゑ、寒い目させぬ古着屋次郎八。その勘定はどうするのぢや。その請合ひのかみさんも、正しくこなたを置き去りか。

九助　今日の寒さで、雪ざりか。もう〳〵、待てぬ〳〵。

皆々　拂つた〳〵。

トせがむ。太郎作、氣の毒なる思ひ入れにて

太郎　嗅が戻りますまで、もう少しの所を。

ト つかへて云ふ。

三助　コレ〳〵、お前方も情の強い。その催促の間違ひで、今もごたつきが出來たではないか。

鐵八　また横を云ひ出すと、此方からも横を云つて、拂はずば、どうする氣だ。

無理　どうするものだ。代官所へ連れて行くワ。

朝長　モシ〳〵、さう仰しやらずに、內儀の歸りますまで。

無理　イヤ〳〵〳〵、待てぬ〳〵。貴樣達も待つまいな。

皆々　待たれぬ〳〵。太郎作も、連れてござれ〳〵。

無理　合點ぢや〳〵。

ト 急き込んで、裸のまゝ、太郎作を捕へ、外へ引出す。よき時分より藤太、出かゝり居て、無理右衞門の布子を取つて、頭より冠り、表の方へ這つて逃げる。

朝長　モシ〳〵、庄屋樣、其やうに急かずとも、マア、相談づくになされませ。殊にお前は、代官所代官所と云はつしやるが、裸で代官所へござりますか。

無理　ヤ、……成る程、さうだつたな。風呂で逆上せたと見える。おらが布子を爰へ置いたが。

皆々　早く布子を、着さつしやい〳〵。

ト捜す。鐵八、見附け

鐵八　ほんに、布子が逃げるワ〳〵。

ト駈けて行く藤太を捕へて來り

三助　待たつしやい〳〵。この布子を冠つて行くのは、此奴は板の間稼ぎだな。

皆々　イヤア。

無理　待たつしやれ〳〵。この間はこの國で、熊坂とやらいふ盜人が流行るげな。もし熊坂が身寄りぢやないか。

鐵八　なんにしろ、面を見さつしやりませ〳〵

皆々　面を見ろ〳〵。

ト布子をめくる。藤太、恥かしさうに

藤太　コリヤ〳〵皆の者、さて、長閑な春ぢやな。

三助　イヤア、この人は今泊めた、侍ひの裸參りぢや。

鐵八　この湯屋泥坊め、横ツ面へ極印打て。

ト鉈を取つて打つてかゝる。朝長留めて

朝長　これはしたり、亭主は病人。

若柴　お内儀さんは留守といひ、跡でわたし等が難儀しやんすわいな。

朝長　さうぢや〳〵。湯屋泥坊なら、風呂屋の法に行ふがよい。

鐵八　棒縛りにして吊すがよい。

皆々　それがよい〳〵。

ト捨ぜりふにて立ちかゝり、藤太が額へ墨を塗り、棒縛りに括し上げ、上の方へ連れて行き、柱へ括し上げる。太郎作、氣の毒なる思ひ入れ。

太郎　コレ〳〵、どうぞ堪忍してやらつしやりませ。

朝長　モシ〳〵、お侍ひの裸参りさま、其やうな目にあはつしやるのも誠に心柄ぢや。手の長いのは悪い病ぢや。

皆々　手の長いのは猿猴ざる。

藤太　ゑんこう御苦勞ぢや、お茶あがりませ。

皆々　また無駄を云ふか。

ト通り神樂になり、向うよりおまつ、世話女房、旅形、脚絆手甲、高からげ、草鞋、跳らへの雪の帽子、その上へ女菅笠、一番の藤行李を連尺にて脊負ひ、敷茣蓙を着て、在所女の拵らへ。跡より軍助世話六部にて、桐油を掛けたる笈を脊負ひ、その身も袖のある白の桐油を着て、錫杖、六部笠にて出て來り、花道にて

軍助　アヽ、お前の内は、向うの内でござるか。

まつ　左樣でござります。今夜は泊つて行きなさんせいな。

軍助　イエ〳〵、もう一宿も行つて泊りませう。

まつ　これはマア、何かとお世話樣でござんした。

軍助　ハイ〳〵、廻つて歸りに寄りませう。

まつ　急いで行きなさんせ。

ト軍助行く。振り返り、兩人、顏見合す。

軍助　モシ、この大雪でも。

まつ　コレ。

ト押へる。軍助、吞み込む思ひ入れにて、兩人相摺りのこなし。鳴り物の切れにて、引返して入る。

おまつ、門口へ來て、思ひ入れ。

まつ　嬉しや〳〵、やう〳〵と內へ戾つた、……モシ、太郞作さま、今歸りましたぞえ。

ト內へ入る。太郞作、見て喜ぶ思ひ入れ。

朝長　アヽ、內儀さん、この雪に歸らしやつたか。

太郞　嚊、戾つてか〳〵。

若柴　さぞ寒うござんせうに、足の湯を取つて上げませう。

鐵八　よく雪道を歸らしやつた。サア〳〵、洗はつしやりませ〳〵。

ト皆々、盥に足の湯、その外手傳つて荷物を取り、茶を汲んで來り、いろ〳〵世話する。四人、見て

無理　コレ〳〵內儀、こなたの歸りの遲いので、大きに案じたわいの。

九助　亭主の借りを、女房の請合ひ。間違ひもあるまいが、何を云うてもあの難病。ひよつと亭主を置き去りにしはしまいかと

次郞　今の今まで、案じましたが、ようマアまめで

四人　歸らしやつたの。

朝長　モシ〳〵、お内儀、お前の留守にあの衆が、毎日々々、病人の太郎作どのを捕へての催促。歸らしやつたら何かの勘定。
三助　拂つてしまはつしやれ。
まつ　そりやモウ、わたしもその心がけで戻つたわいな。
太郎　コレ〳〵、嚊よ。どうぞ、あの衆に借りた勘定。
　　ト吃り〳〵氣の毒さうに云ふ。
まつ　ようござんす。氣遣ひしなさんすな。わたしが故鄕越前麻生、知るべを尋ねて金の無心。嬉しや借りて戻つた程に、マア〳〵、落ちついて居なさんせ〳〵。
　　ト太郎作、これにて喜ぶ思ひ入れ。
モシ、庄屋さま、お前樣のお請合ひの〆高は、慥か一つに致して二拾兩、上端が少々ござりました筈。工面いたしたこの金は
　　ト藤行李の内より、財布を出し、小判にて金を出し
ハイ、二十一兩ござります。よいやうになされて下さりませ。
　　ト差出す。無理右衞門取つて

無理　これは有り難い。これで庄屋が云ひ條も立つと云ふもの。コレ、九助どの、見さつしやる通り、受取りました。わたし等が內で勘定しませう。二人の衆も、その積りで一緒に來て下され。

九助　それはめでたい。成る程、お內儀は働らき者でござるわいの。

次郞　そんなら庄屋樣、お前の內でわし等が拂ひも、勘定して下さるか。

無理　ハテ、間違ひはござらぬて。

九助　これはおまつどの、さて〳〵御苦勞でござつた。風呂へでも入つて、ゆるりと休息さつしやるがよい。

まつ　アイ〳〵、お前方も、よう待つて下さりました。この上とも、お願ひ申しまするぞえ。

三人　何がさて、手支へはさせませぬ。……サ、歸りませうか。

鐵八　これは、お前方、御苦勞でござりました。

三人　アイ〳〵……イヤ、藥屋どの、緩りと逗留。

朝長　ハイ、靜かにござりませ。

ト通り神樂になり、四人はワヤ〳〵云つて下駄傘にて向うへ入る。

まつ　わたしが留守の間、只ならぬ病人を預け、何かとマア お前方、大きに御苦勞かけましたわいな。

若柴　折角のお頼みゆゑ、旅稼ぎの同胞二人、宿を借りたるお返しに、心を盡して看病しても、しるしの見えぬは、太郎作どのゝ眩暈病。
朝長　はかゆきせぬのが、如何にも氣の毒。
三助　わし等は、風呂場を働らくばかり、二人の衆に
鐵八　ろく〳〵お構ひ申さぬが、よくマア、早く歸らつしやりました。
まつ　イエ〳〵、早うもござんせぬ。何をいうても女子の足、心は急けど道はかも、行かぬばかりか、わたしが本國、音にも聞えし越後の國の雪、馬でも駕籠でも及ばゞこそ、やう〳〵越前麻生に着き、親どもより緣切つてあるわたしゆゑ、便りは出來ても構ふなと、嚴しい云ひ付け。それをあちらこちら口先で云ひほごして、知るべの方より、合力受けた僅かの金子を。
朝長　して、お内儀の親御とは。
まつ　サア、わたしが親は。
　　ト つかへる。この時藤太、おまつを、よく〳〵見て
藤太　あなたは違はぬ御主人の娘御、松ヶ枝さまにてましますな。
　　ト おまつ、悧りして

まつ　エヽありや何でござります。

三助　お前の留守に捕まへた、板の間稼ぎの

鐵八　湯屋泥坊サ。

まつ　エ。アノ人が。

藤太　面は塗られてお見違へ、御尤もにはござれども、斯樣申す五音の調子、お聞き覺えござりませう。御家來の關原藤太家次。主人の娘御松ヶ枝さま、かゝる對面、お恥かしう存じまする。

まつ　ほんに、さう云やるは、父御の御家來關原藤太か。

藤太　關原藤太も、關の縛り地藏に等しき此ざま。何卒お詞添へられて、繩目をお解き下さらば、主從三世の御緣の程、偏へに願ひ奉る。

まつ　可哀や、あれ程願ふもの。助けてやつて下さんせ。

三助　お內儀さんの御挨拶だ。もう少つと縛る奴だが

鐵八　解いてやるとは、仕合せな板の間稼ぎ。來やァがれ。

ト藤太を連れて下の方へ來り、繩を解く。

朝長　このお內儀の、家來ぢやと云はんすこの方。そんならいよ〳〵侍ひか。

藤太 ナニ僞はりを云ふべきぞ。しかも平家の御大將、清盛公のお氣に入り、越後の城主、越中の前司盛俊とは身が御主人。その陪臣の一人にて、さる者ありと知られたる、關原藤太家次といふ、天晴れの勇士だワ。

朝長 すりや、お内儀は、盛俊ゆかりの

ト若柴と顏見合せ

兩人 ハテナア。

ト思ひ入れある。

三鐵 して、その平家の侍ひが、裸で爰へ何しにござつた。

藏人 盛俊より、上使に來た。

まつ ナニ、上使とは。

藤太 上使でござれば、上座は御免下さりませ。

ト口にて

どゝん。

ト思ひ入れにて云ひ、これを直ぐに下座へ取つて神樂に成り、藤太、上座へ直り、踏つぎを手づから

取つて腰を掛ける。

まつ　何の用ぢやえ。

藤太　餘の儀でござらぬ。御身は兼ねて源氏の武士、うつけ者にうツ惚れて、館を駈落ち、かゝる民家にさまよふ事、御父君のことない立腹、藤太參つて引立て來れ、若し承引なきその時は、首討ち來れと、仰せを受けた關原藤太。姬君樣、性根を据ゑて返答さつしやれ。ドヾどうだ。

鐵八　ナニ、かみさんの首を切る。イヤ、とつけもない赤蛙だ。

三助　無駄を吐かすと、うぬが首から叩き落すぞ。

ト立ちかゝる。藤太うろたへ、朝長若柴が後へ駈けて行き、隱れる。

まつ　すりや、父上のお指圖にて、わしが首を討ち來れと。それ聞いて來やつたのか。

藤太　如何にも左樣。亭主のうつけと緣が切れねば、否ともお首は申し請け、罷り歸る。

トこれを聞いて太郎作、思ひ入れ。

まつ　ホヽヽヽ。餘り云はれぬ高言、肉身分けし親人さまの仰せでも、夫に付くは女子の習ひ。親を捨てゝも男に附く。今では親子の緣は切れ、他人向きのわしなれど、主從の緣は切れぬが、合點か。

藤太 仰しやらいでも、その通り。お諫め申してお供いたすワ。
まつ すりや、どうあつても。
藤太 お歸りなくば、お首を拙者が。
朝長 いよ／＼お前が、お内儀のお首を討つと仰しやるが、お前は何で討たつしやる。
藤太 ヤ。

ト腰の廻りを探して思ひ入れ。

朝長 上使と云はんすお侍ひは、刃物も持たぬ金毘羅同者。何でお前は首を討つのぢや。
藤太 サア、身共も左樣存じて居るて。
まつ わしを迎ひに來やつた藤太。連れても歸らず、首も討たずにや行かれもしまい。こりや、わが身云ひ譯に腹切つて、旦那さんへ申し譯するがよからうぞや。
藤太 ヤ。

ト悔りする。

まつ 主從のよしみに、わたしが介錯してやらうが、不便でもある。コレ、三助どの、こなさん代つてあの者の首、切つて下さんせ。

三助　呑み込みやした。三助が手練の程は多年。餓鬼に等しきこなたの首を。

ト出刃を取つて振りあげる。藤太、頭を押へて

藤太　アヽ、コレ〳〵、この首はまだ入用。滅多にお前へ上げられませぬ。

まつ　そんなら、わたしも思案して、父さんや其方へ、返事の仕やうも

藤太　ござらうならば、それまで身共は相待ちませう。

まつ　それまで、わたしも其方の首、預けてやらう、其うちは、其方を向いて、必らず萬事口出ししやんな。

藤太　すりや、この首を私しに、お預けなさるゝ御心底。拙者も我が首、きつと預かり奉る。斯様に後へ向けまする。

ト上の方にてあちらを向き、振り返つて、せりふの納まりに、我が手に首を捕へ、あちら向かせる。

まつ　それでは安堵。

朝長　御上使どのが、あちら向いて居るうちに

若柴　お久し振りの女夫事、幸ひ爰に蒲團もあり。

ト五布蒲團を取出す。

朝長　病氣でござる御亭主に、餘り強ひてはいらぬもの。併し、ちよつと藥喰ひ。蒲團一つで看病しやんせ。

ト捨ぜりふにて、若柴も手傳うて、おまつ、太郎作をよき所へ連れ行き、蒲團を着せる。太郎作、氣の毒なるこなし、

まつ　これはしたり、雇ひの二人の若い衆、あの衆が見る前で。

三助　ハテ、そこに遠慮はござりませぬ。わしだといつて築地には、思つてくれる奴もあるのサ。

鐵八　同胞二人の藥屋どの、腹變りかは知らねえが、慥かに二人は腹合せ、女夫と見たは、僻目か〳〵。

朝若　アヽモシ、わし等二人は。

鐵八　そんなら色か。只ではあるまい。僞はり云ふときかねえぞ。

三助　嘘を築地が取持つて、二人も爰でお弔ひ。お寺は卽ち天德寺。

ト天德寺を取出し、下の方へ二人を連れ來り、取持つ思ひ入れ。

朝長　これはしたり、お目立ちまする上からは

まつ　二人とも女夫と、藥屋さん、もう白狀しなさんせ。

太郎　わし等は蒲團、肝心の、お客は食紙蒲團。

ト吃りにて云ふ。

朝長　こちは格別、お内儀は、久し振りでの一つ寢に

鐵三　夜着ない事の床入りに

若柴　フツと參つた、わたし等も

朝長　とんとお世話に

まつ　太郎作どの。

太郎　嚊よ。

若柴　兄さん。

朝長　妹。

四人　オヽ、寒。

ト四人めい〳〵、ひつたり寄り添ふ。

鐵八　エヽ、くされはねえわえ。

ト思ひ入れ。藤太、こちら向いて居たりしが、堪え兼れて

藤太　こりや、モウ堪らぬ。

ト側に居る後見か蓙の者にかぢりつく。皆々悧りする。三助、鐵八、駈けて行き、藤太を捕へて

鐵三　この黒ツ面め。なぜ此方を向いたのだ。

藤太　コレ〳〵、どうするのだ〳〵。

朝長　イヤモウ、油斷のならぬお侍ひ。逃がさぬやうにさつしやりませ。

まつ　この家に泊め置き、まだ外に、聞きたい事もあるからは

若柴　逃がさぬやうに、其お方。

鐵八　幸ひ、奥の蒸風呂へ

朝長　風引いたやら寒氣だち。

若柴　風藥など、ちよつと煎じて。

大郎　コレ、冷えぬが第一。

ト立ち上がる。其はずみに神文を取落す。

藤太　この間に爰を

ト逃げんとして、萬金丹の荷に行き當り、片荷倒るゝ。藤太、藥荷に目を付け

この荷の内に金具の音は、慥かに具足の

ト手早く片荷を抱へる。三助鐵八、藤太を捕へ

三鐵　逃がしはせぬぞ。

藤太　逃げても裸、滅多に爰を。

朝長　追ひ出して、物見ませうか。

ト通り神樂になり、皆々思ひ入れあつて、鐵八三助、藤太を捕へ、朝長、藥荷を片々抱へ、若柴付いて暖簾口へ入る。あと合ひ方。兩人殘つて

まつ　思ひがけない關原藤太。入込み來るも、もしやこの身の

ト太郎作と顏を見合せ

ドリヤ、葛籠も片付けて置きませうか。

ト藤行李の蓋を明け、中を見ようとする時、奧にて

養仙　これは眞ッ平、許さつしやれ〳〵。

トこの聲に手早く蓋をして片付ける。暖簾口より養仙、傘下駄を持ち、捨ぜりふにて出て來り

養仙　これはお內儀、戻らしやつたか。

ト傘と履物を門口の方へ置く。

まつ　養仙さま、留守の內は、何かとお世話樣でござりまする。只今に於まして快氣の程が。

養仙　誠に長病でござるて。隨分氣長に看病して進ぜさつしやい……イヤ、おまつどの、先達て話し置きました、御亭主に用ゆる、ふいいいいいいいさらばさらは、高金でござれども、たつて其許がお賴みゆゑ、手蔓を求めて、コレ〳〵

ト內懷より袱紗包みを出し

この通り。愚老が手には入りましたが、買ひ受けまする代金の一段でござるて。

ト藥包みを見せる。おまつ、取つて

まつ　それは有り難うござります。すりや、これが、主へ用ゆる

ト思ひ入れ。

養仙　イヤ、お內儀、その一藥は手に入りましたが、爰に至つてむつかしい儀がござる。外でもござらぬが、この一藥に調合いたすは、男女相性の生血を取り得、それを混じて服ませまするが、なんと申しても、得心いたして命を差出し、取り得ましたる血汐でなうては。

まつ　すりや、男女揃うて相性の、得心いたした血汐でなうては。

養仙　左やう〳〵……コレ、お內儀、一體、御亭主の病は、正しく毒氣に中つたと見えまする。その毒

が腹内に殘りあるゆゑ、舌も縮みて吃りとなり、物事恐るゝ眩暈も、その毒氣の殘り。その藥の
祕法は、その昔、俵藤太、龍宮城より持ち返り、矢の根に塗り、百足を射る。彼の三國誌の關羽
の毒矢も卽ち同じ。その處方書が、どういふ事やら、尾張の領主、長田の家に傳はつてござると、
愚老が師匠の噂でござつた。長田の家に限る毒藥。よもや御亭主の腹内に、殘らう筈もござらぬ
が、大方は、その毒の殘つたと見えまする。

ト何心なく話す。太郎作、聞いて驚ろく思ひ入れ。おまつも、さてはとこなしあつて

まつ　昔よりして長田の家に、毒の療治が傳はりあると聞いたが、正しくその毒を主に用ひて、難病に
拵らへたるも、兄の業か。

太郎　祝言の夜のあの酒が、泡立ちしたるが、不審の一つ。

まつ　割符を合す、あなたのお話し。

ト太郎作、無念の思ひ入れ。

アモシ、急いたといつて、今更どうして。

太郎　エヽ。

ト身を慄はし、無念の思ひ入れにて泣き伏す。養仙、氣の毒なる體にて

養仙　アヽ、その毒を飲ましつた、心當りでもござるか。然し、今更悔んでも、どうも致し方がない儀でござる。氣の毒千萬な……イヤ、お內儀、只今のその一藥は、申すも殊の外大金。價は即ち金子八十兩ならでは、藥種屋でも離しませぬて。

まつ　よろしうござりまする。身貧な中でも命づくの金。それを工面に、はる〲旅行。

ト あたり見廻し、葛籠の內より金を取出し

サ、藥の價、お受取りなされて下さりませ。

ト渡す。養仙、恟りして

養仙　ヤ、これは八十兩。アノ藥の代金。

ト思ひ入れ。

ヤレ〱、誠にお內儀は、御亭主思ひなお方でござるが、それに致せ、只今申した、男女相性の生血を。

まつ　それもどうやら、心當りがござります。併し、この事必らず世間へ、御沙汰なされて下さりまするな。

養仙　承知々々。尤もな儀でござる。不躾ながら、人出入りは多し、殊に小家の用心とても心遣ひ。イ

ヤ、愚老はお暇いたさう。

まつ　お歸りなされますか。雪道で、お危なうござります。

養仙　左やう〳〵、足駄の齒も立ちますまい。

　　ト門口へ出る。

イヤ、お內儀、殊にこの間は物騷、金子を持つては心遣ひでござる。この美濃路には熊坂とやらんいふ、盜人が徘徊して、人の寶を目がける話し。人の寶のこの金子、渡さぬうちは心遣ひ。暮れぬ其うち

まつ　お行きなされませ。

　　ト唄、暮れ六ツの鐘、通り神樂。養仙、思ひ入れあつて、向うへ入る。おまつ、盜人沙汰の度に、よろしく思ひ入れ。太郎作、居眠る事。おまつ、あたり見廻し

まつ　ありや、暮れ六ツの鐘。燈をつけて。

　　ト行燈を取出し、火をともす事。太郎作、おまつが膝にもたれる。

女子のわたしや此やうに、雪霜分けて外を家。如何に難病なればとて、現在女房に苦勞かけ、男の身にて何一つ、小兒に劣つた太郎作どの。こなさんゆゑに父さんの、お氣に違うて勘當受け、

それと云ふのも世の亂れ。源平兩家と立分れ、鎬を削る今この時。系圖正しき長田の頭目、お前が納めるその筈を、その病人ゆゑ兒御の我まゝ。口惜しう思ふお心もあつてか、今の腹立ち。そんなら正氣になつてかと、思ふ其うち、暮れ六ツの、鐘と其まゝ、もう寢入り。思へばいとしいその難病。七ツか八ツの子供の行跡。それが一倍いとしうて。

ト云はうとする。床下、バツタリ物音して、時の鐘烈しく、おまつが坐りしあたりの緣の下より、ずつと上げ、鐵八、苧くそ頭巾、山賊の形に着替へ、ヌツと出る。

鐵八　お頭。

まつ　コレ。

ト仕方で押へる。

鐵八　今宵の雪を幸ひに、忍ぶ仕事は平家の陣中、慥かに軍勢熟睡の、油斷を見濟まし、大方物の具。

まつ　目指すところは靑墓の、長者屋敷が平家の旅館。そこへ仕掛けて。

鐵八　追ツつけ吉左右。

まつ　アヽコレ。

ト顏にて太郎作が寢て居る事を知らせる。鐵八、呑み込み、ズツと入る。おまつ、こなしあつて

これはしたり、やむかと思へば、よう降る雪……コレ、太郎作どの〳〵、轉寢して、風引かんすな。エヽ。

ト思ひ入れあつて

金拵らへて調へし、この藥は手に入つたれど、取り得る血汐の

ト思ひ入れ。また床の下より物音して、件の疊をズツと上げ、九助、同じく盗賊の拵らへ、褞袍、裁附け、丸括けにて、苧くそ頭巾にて半身出かゝり

九助　お頭。

まつ　コレ。

ト奥の方、あたりへ心遣ひあつて

知らせは。

九助　隨分上首尾、

ト大きな聲にて云ふ。

まつ　アヽ、モシ。

トこなし、太郎作、目を明け、悑りする。おまつ、氣を替へ

コレ、米屋さん、あの飯米は、美濃か尾張か。

九助　サア、美濃には名におふ野上へ陣取り、尾張へ下向の義朝どの。

ト小聲にて云ふ。

まつ　シイ。

九助　相場狂ふと關東へ、積み出す舟落ち、源氏の武士、俵持つ小楯に、須の股川、早瀬を幸ひ、落ち行く先は、慥かに内海へ。

ト太郎作へ思ひ入れ。九助、思ひ入れあつて

まつ　コレ。

ト制して

搗きをようして、平家の飯米、ナ、米屋さん。

九助　明日あげませう。

ト捨て鐘になり、床の下へ入る。この時、太郎作、目を明き、こなしある。

太郎　アヽ、轉寢したか。コレ、おりや眠い。今來た人は。

ト思ひ入れにて云ふ。

まつ　アイ、ありや、いつもの米屋さんが、勘定が違うたと云つて、明日來さんしてもよい事を、夜道を、わざ〳〵。

太郎　アヽ米屋さんか……アヽ、おりや寢よう。嬶、こなたも奥へ。

まつ　アイ。わたしや後から行く程に、お前は先へ。

太郎　オヽ、そんならおれは、夢なと見ようか。

ト合ひ方、通り神樂になり、思ひ入れあつて、上の方障子の內へ入る。この鳴り物にて、向うより軍兵二人、四天の上へ赤合羽、中間笠にて、忠宗が紋付きの箱提灯を合羽の下に隱し、出て來り、門口に來り、囁き合ひ、內を窺ふ。

まつ　さては源家に勝利なく、敗軍あつて。

トこの聲を聞き、兩人、門口の藪の內へ忍ぶ。時の鐘、小鳥の聲夥しく、雀數多飛び出る。雪頻りに降る。鼓入り、誂らへの合ひ方。向うより義朝、剃立て棒茶筌、高括り、附け太刀、竹笠をかざし、肩簑、草鞋にて出て來り、花道にて小鳥に目をつけ

義朝　雪中といひ、殊に夜陰に群がり立つ小鳥、もしや、我れを

ト　あたりへ思ひ入れあつて

枯れし尾花に、そよ吹く風。今のこの身は落人の
　ト思ひ入れあつて
あたりの民家へ、便りて一夜を
　ト心に頷づき、門口へ來る。小鳥飛び去る。内を窺ひ
誰ぞ、頼みたい〳〵。
　　トおまつ、聞いて
まつ　ハイ、どれからお出でなされました。
　　ト姿を見て、思ひ入れ。
義朝　某は雪を幸ひに、小鳥狩と志し、思はずも山中にて日を暮らし、住家へ歸るもこの大雪、難儀の道筋、この庵。幸ひ一夜の宿りを、御婦人、御報謝にあづかりたい。
まつ　ハイ、それは御難儀でござりませうが、御覽の通り、住み荒れましたるこの小家。殊にこの邊は平家方より、關東筋へ手分けの軍勢、そのお通りで人夫の割りつけ。お氣の毒にござりまするが、お宿の事は、どうもお斷わり申さずばなりますまい。
義朝　すりや、一宿は相成らぬとな。

まつ　外をお頼みなされて御覧じませ。

義朝　ハテ、是非に及ばぬ。

ト向うの方へ行かうとする。この時、薄ドロ／＼にて、門口の雪を被ひたる梅の枝、一度に紅梅開く。兩人、キツと目を付け

まつ　今のお方の話しのうちも、佇ずみ給ふ門口の、雪を被うたる紅梅の

義朝　一度に花の開きしは、この程とても、かゝる珍事の……すりや、懷中に守護する威德か。ハテ、爭はれぬ。

ト懷中へ思ひ入れ。おまつ、氣を替へ、こなしあつて

まつ　お泊め申しませう。

義朝　ヤ。

ト振り返る。

まつ　お斷わりは申しましたなれど、次第にまさるこの大雪、心なしと申しませうか。モシ、お宿いたして上げませう。

義朝　それは過分。然らば一夜を。

ト内へ入る。おまつ、足の湯を持ち行き、いろ〱あつて義朝、上へ通る。

まつ 折角お泊め申しは申したなれど、御覽の通りのこの合宿、本宿ならねば、何かに不自由。

ト義朝、内を見廻し

義朝 この家の内を見るところ、蒸風呂と記しあるが、即ちこれが、渡世でござるか。

まつ 左樣でござります。都近き矢脊の里、旅人を集むる釜風呂、松葉焚いて病を治する、申さば入湯。

義朝 それは古しへ、淸見ばらの君、大友の王子に侵され給ひ、一戰おこつて、山城の大原のあたりにて、流れ矢受けて、矢疵に惱み給ひしところ、王子の軍勢寄せ來る樣子。

まつ 里人痛はり奉り、かの釜風呂へ忍ばせ申し、敵を欺むく其うちに、思はざる矢疵の平癒、その後、八瀨の文字を改め、矢脊と名地を呼び給ふ。

義朝 我れも、この程粟田口にて、僅かなれども、かすり手の、正しく矢の根に毒藥用ひ、射かけし曲者。

まつ 粟田口と仰しやるは、もしやその夜の

義朝 ヤ。

ト思ひ入れ。おまつもこなしあつて

まつ　すりや、あなたには矢疵の悩み。

義朝　小鳥に射かけし、外れ矢の怪我。矢脊の竈にあらねども、幸ひ疵を癒やすの便り。

まつ　殊に梅花の開きしは、湯氣は正しく。

ト義朝の懷中へ手を差込む。この手を取つて

義朝　こりや、婦人、何を致す。

まつ　サ、それは。

義朝　初めて逢ふ旅人の某、懷中へ手を差込んで、馴れ〲しく、なんとおしやる。

まつ　サ、わたしが、思はぬ馴れ〲しく近寄つたは。

義朝　予に近寄りし、この手の起りは。

ト手元を捕へて詰まる思ひ入れ。

まつ　わたしが、この手の納まりは。

ト義朝が手を振り切り、有合ふ鉈を取つて、手早く左の小指を切る。バツタリ音する。この音を合ひ圖に、よき時分より、門口に軍兵、向うへ見せて箱提灯を上げる。これをキツカケに誂らへの合ひ

方、時の鐘。向うより忠宗、燕手、上下衣裳、蛇の目の傘、高足駄にて出て來る。此うち、おまつはこなしあつて、切つたる小指を鼻紙に包んでこなし。忠宗、舞臺へ來て、二人を近付け、仕方する。兩人心得、灯を一度に吹き消し、向うへ走り入る。

さしつけがましき事ながら、かゝる埴生へ思はずも、お宿申すも他生の緣、その御緣ある事ならば、雪の今宵に入來ある、高位のあなたに、恐れ多くも。

ト思ひ入れ。

義朝　予が見る前で、揃ひし小指を

まつ　切り放せしも女の迷ひ、卑しき賤が、上々樣へお伽いたさん、これぞ心中。

義朝　只今逢うてろく／＼に、胸中知れぬ某に、今宵宿りの女が心中。

まつ　お受けなされて。

ト持つたる小指を義朝が懷中へ差込む。この時、ドロ／＼。義朝おまつとも、タヂ／＼となつて左右へ別れ、キツとなつて

義朝　血汐の穢れに、俄の動搖。

まつ　どうぞ願ひを。

ト懐中へ目を付ける。

義朝　して、婦人には、やもめ女が。

まつ　イヽエ、慥かな夫のある身。

義朝　夫ある身でありながら、伽を願ふとは、不義とやいはん。

まつ　サ、不義も不忠も、我が君の、御前に叶はぬ夫が願ひを。

義朝　家名實名知らねども、雪の宿りの志し、それに免じて。

まつ　然らば夫を。

ト奥へ呼びに立つを、門口より

忠宗　イヽヤ、主に面談御無用。その女こそ紛れ者。御油斷あるな、我が君さま。

義朝　ヤ、なんと。

ト合ひ方替つて、忠宗、内へ入る。義朝、見て

さ云ふ汝は。

忠宗　ハツ、長田庄司忠宗、君の安泰見奉つて、先づは大慶。

まつ　さう仰しやるは夫の兄上、忠宗どの。

義朝　すりや、某が勘當せし、不覺者の景宗に、連れ添ふ女か。
忠宗　仰せの通り。役に立たずの拙者が弟、それに連れ添ふ女こそ、平家の忠臣、盛俊が娘。兼ねて某、義朝公と合體なし、未だ手筈も滿たざるうち、不覺の人の信賴どの、都を開き東へ下向、君にも思はぬこの程の敗軍。さぞかし御無念、察し入る。
義朝　予も思はざる不覺の軍、一先づ都を開きしも、其方が本國へと志し、內海へ忍びのこの雪道、迷ひ來つて旅館の賴み。
忠宗　その宿りこそ、危ふし〳〵。弟は眩暈、吃りの難病、行つて益なきうつけ者。それゆゑにこそ、君へその由申し上げ、主從の御緣も切れ、この兄とても勘當の、その起りは、これなる女。
まつ　その起りが、わしゆゑとは、なんでわたしが、夫の越度を。
忠宗　イヽヤ、云はずとも知れた事。平家にゆかりの女ゆゑ、去つてしまへと勸めても、女に迷ふたわけ者。それゆゑ父の遺言ながら、勘當なして、長田の家は身が治める。弟は女房諸ともに、當所にかゝる民家の住ひ。もしや我が君御存じなく、お忍びあらんも計られずと、さてこそ忠宗、この道筋、お迎ひに發向なせしに、案に違はぬこの家の宿り、危ふし〳〵。片時も早く拙者が領地へ、義朝公、イザ〳〵御供。

ト兩人、出かゝる。おまつ、隔てゝ

まつ イヽエ、一旦夫の隱れ家へ、御入來ありし義朝公。願ひの叶ふそれまでは

ト留めるを引退け

忠宗 邪魔立て致すな。

ト おまつを引退け、行かうとする。太郎作、奧より走り出て、義朝の裾に縋つて留める。

そちや弟、三郎景宗。

まつ コレ、こちの人、我が君さまへ、その身の云ひ譯。

太郎 どうぞ御勘氣お詫びの願ひ。これと云ふのも、この病。

ト云はれぬ舌先かきむしつて思ひ入れ。

忠宗 うろたへ者の身を以て、勘氣の詫びとは、何のたわ言。兄が領地の野間内海へ、我が君さまのお供する。

太郎 イヤ〳〵、それが危ふい第一。

忠宗 そりや、又、なんで。

太郎 こなたの心が知れぬゆゑ。

ト思ひ切つて云ふ。

忠宗　身共の心が知れぬとは、その譯は。

太郎　サ、それは。

忠宗　よし、病でも、うつけでも、手がゝり無い事吐かしはしまい。サ、樣子を申せ。

太郎　サ、それは。

忠宗　サア。

兩人　サア〳〵。

忠宗　どうだ。

トきつと云ふ。太郎作、懷の神文を出さうとして

太郎　兄の訴人は、親の訴人をすると同然。エヽ。

ト泣き伏す。忠宗、太郎作を引付け、思ひ入れあつて

忠宗　エヽ、玆な不忠者めが。コリヤヤイ、云はずとおのれが胸中は、女房の緣に引かされて、盛俊へ內通して、我が君樣を爰に留め置き、平家の侍ひ盛俊に、手柄をさせんと企んだな。それに違ひはあるまいがな。

太郎　イヤ〳〵、そりやこなたこそ、かゝる神文。

　　ト差出す。

忠宗　ヤ。

　　ト思ひ入れ。義朝、目を付ける。

太郎　これがござらう。

　　ト思ひ切つて開くを忠宗、手早く取つて、あたりの火鉢へ打込む。へら〳〵と燃えあがる。太郎作、
　　悔りして

ヤ……。證據の神文、火鉢の内へ。

まつ　すりや、それが證據の。

忠宗　何が證據だ。

太郎　エヽ、こなたは。

忠宗　動きやアがるな。

　　ト太郎作を引付け

證據があると僞はり吐かし、譯なき書き物取出し、君のお前で事ありげに、兄に疑ひかけるとは、

うつけ相應な拵らへ事。よし誠なら斯う〳〵と、サ、君のお前で、それ叶かせ。

太郎　サ、それは。

ト云はうとして急き上げて、五音分らぬ思ひ入れにて、我が手に掻きむしつて口惜しがる。

忠宗　よし某に越度があれば、直さま爰で切腹する。

ト刀を抜きかける。太郎作、恟りして慄ふ。おまつ、思ひ入れ。

それ〳〵、僞はりの證據には、自然と慄ふは、弟ながらも世上で云ひなす、長田慄ひか。役に立たずのたはけ者。先祖へ對して、エヽ、不孝者めが。

トこの時、おまつ、忠宗に向ひ

まつ　そりや、忠宗どの、卑怯でござんす。

忠宗　どうしたと。

まつ　やゝともすれば、わたしが父さん、平家の武士と云ひならべ、それを夫の越度とは、側で聞き居るわたしが術なさ。コレ、長田の家は、景宗どので繼がする遺言。それを拒みて人知れず、家に傳はる秘法の毒藥、それが廻つて主の難病、お前の業でござんせう……この病ではなか〳〵に、家の跡目は思ひもよらずと、わたしが連れて微かな世渡り。されども此まゝ、朽ち果てさするが

義朝　殘念ゆゑ、女の身にて軍用金、せめて拵らへ我が君の、御用に立てんと千辛萬苦。親と一つでない證據は、最前切つたる小指。ナニ勿體ない不義いたづら。平家の緣を斷ち切る潔白。お察しあつて夫の御勘氣、御免なされて下さりませ。

忠宗　いしくも申せし女が願ひ。さては最前、指切つて差付けたは、平家の緣を切つて、夫の勘當、詫びの願ひを叶へん心よな。

義朝　すりや、其方は、平家に緣ある親と、一つでないといふ、性根を見せて願ふといひ、只今申した軍用金、迂濶に御用に立てゝは惡い。

まつ　そりや、又なんで、わたしが願ひを。

忠宗　叶はぬ筋は、卽ちこれで。

ト熊坂の繪姿を開き、差付ける。おまつ、思ひ入れ。義朝、よく〳〵見て

義朝　その姿繪は、美濃の國青墓に徘徊なす、當代に於て强盜の張本人と聞き及ぶ、熊坂太郎長範と、世上に沙汰する盜賊に。

忠宗　これなる女が。

まつ　エ。

ト兩人、恟りして、太郎作はおまつが顏と繪姿と比べ、ギョッとする。

忠宗　男女と替れども、あまり似寄りのこの面。

まつ　盜賊夜盜に、わたしが似たと云はんすその姿、お前の手へは、どうしてそれが。

忠宗　粟田口にて、手に入る繪姿、

ト思ひ入れ。

義朝　黑白も定かに、外れ矢來たつて、弓手の腕に無名の矢の根、附け置く毒藥。憎さも憎しと、留め置く矢の根は。

ト懷中より矢の根を出し見せる。忠宗、矢の根を見て

忠宗　すりや、その時の外れたる毒矢を。

義朝　覺えがあるか。

忠宗　イヽヤ、全く覺えぬこの矢の根。

義朝　腕の惱みも、矢の根の毒氣に。

太郎　心覺えの流儀の矢の根、

ト思ひ入れにて云ふ。





まつ　毒矢とあれば、割り符を合はす
義朝　繪姿似寄りの女が軍用。
まつ　モシ、道ならぬ金子とあらば
忠宗　源氏の名折れ、いつかな〳〵。
まつ　疑ひ受けし、わたしが隱れ家、是非に今宵はお宿の願ひ。お泊め申さにや、夫の存意。
義朝　この雪道に憂ひも如何。然らば女が申すに任せて。
まつ　見苦しくとも
義朝　今宵はこれに。同じ長田が、家への宿り。
太郎　エヽ、忝ない。
忠宗　左樣あつては、もしや不意に。
義朝　その時こそは、この身に附添ひ。
忠宗　すりや、某の
　　　　ト思ひ入れあり
畏まり奉つてござりまする。

義朝　一夜を頼む、即ち價。

　　　トおまつへ繪姿を渡す。

まつ　すりや、姿繪を

義朝　渡す心も

忠宗　何か一物。

太郎　我が君さまには。

　　　ト喜ぶ思ひ入れ。

義朝　暫らく奥にて。

　　　ト太郎作、忠宗が裾を扣へて火鉢へ指さし

太郎　灰となつたる神文の、心を止めて。

　　　ト手を合す。

忠宗　いらざるうつけめ。

　　　ト持つたる刀の柄にて、眉間を打つ。これにて太郎作、額へ疵つき、血の流れるを見て

まつ　ヤ、お前の面に。

太郎　コレ、あまり邪慳な。

ト立ちかゝるを蹴飛ばし

忠宗　たはけた奴の……我が君さま。

義朝　案内いたせ。

ト唄になり、義朝、忠宗、奥へ入る。兩人殘る。合ひ方。太郎作、件の繪姿と、おまつが顏を見て、そつと差寄る。

太郎　アノ、惡人の忠宗さまが、コレ、此やうな繪姿を拵らへて、わが身やわしを罪に落すか……何よりは我が君さまが、野間の内海へ、お出であらぬが安堵。エヽ、有り難い〳〵。

ト吃り〳〵喜ぶ。おまつ、こなしあつて

まつ　そのマア、お前の喜ばしやんす、その顏見るも

ト思ひ入れあつて、件の行李を出し、内より袱紗に包みし短刀を出し

コレ、太郎作どの、こりや、お前がわたしへ下さんした、夫婦の固めの印ぞと、取交したる銘は即ち薄緣。思うて見れば、薄い夫婦の

ト太郎作へ渡し

わたしが方から預けたる、藤巻と云ふあの長刀、女子の魂ひ、あの品返して下さんせ。

トこの詞に太郎作、愕りして

太郎 ヤヽ、俄にあれを、何にせうとて。

まつ 兄御の心に叶はぬわたし。

太郎 ヤヽ。

まつ 今も今とて、忠宗どのゝ、詞は殘らずわたしを疑ぐり。もしや平家へ内通も、盛俊が娘とあるゆゑに、心解けざる上からは、お前も御難儀。それでわたしや思ひ切り、お前と縁が切れたなら、兄御の疑ひさらりと晴れ、兄弟仲も睦ましう、長田の家も、矢張りお前が。

太郎 イヤ〳〵、どうして〳〵、この難病で、なんで家が繼がれうぞ。

まつ サ、そりや、先刻わたしが手に入りし、藥の法で再び快氣。

太郎 イヤ〳〵〳〵、あの藥よりコレ、どうぞわが身、わしが側を、コレ、離れてたもんな〳〵。

ト涙を流し、吃り〳〵詫びる。

まつ サ、尤もなお前の詞、無理とはさら〳〵思はねど

ト思ひ入れ。

兄御の詞に愛想が盡きた。太郎作どの、もう〱、病人の看病に、飽き果てたと思はんせ。サ、今云うたわたしが長刀、ありや父さんの家の品。平家の武士の切れ物を、持つて居さんしては、矢ツ張りお前の御勘氣の妨げ。サ、戻して下さんせ。

トきつと云ふ。太郎作、ムツとしたる思ひ入れにて、ずんと立つて戸棚の内より、風呂敷に包みし長刀を持ち來り、おまつが前に置き、急いたる體にて

太郎　サ、これ取つて、ド、ド、ド、どうするのぢや。

トおまつ、件の長刀を葛籠の内へ入れ、脊負うて、あたり見廻し、下駄傘を取つて、門口へ行きかける。太郎作、うろたへ、引留めて

どうでも出て行くのか。

まつ　この上、どのやうな艱難したとて、兄御に合はねば、この身の疑ひ。そこを思うて、わたしが方から。

太郎　どうでも緣を

まつ　切るはお前の

太郎　爲にはならぬ。

まつ　でも、便々と、わたしも爰には。
太郎　否になつたか。
まつ　女子の方から、お前を去つた。
太郎　ヤ。
まつ　その去り状は……ソレ。
　　ト件の繪姿を投げる。太郎作、取つて
太郎　お尋ね者の熊坂の
まつ　それが去り状。
太郎　でもマア爰を
　　ト縋るを、振り切り、ツカ／＼と門口へ出る。この時、外の井戸より、盗人形の三助、ヅツと出かゝり
三助　お頭、用意の。
まつ　コレ。
　　ト押へる。三助、ズツと入る。おまつ、門口をシヤンと閉す。駈け出る太郎作、戸の音にタヂ／＼と

して、撻となる。三方一度の仕組み。唄、時の鐘にて、雪頻りに降る。おまつ、行李を脊負ひ、下駄にて、悠々と向うへ入る。太郎作、其まゝにうつかりとして居たりしが、心付いて立ち上がり、戸を明け、向うを本意なげに見送る。

太郎　女房の癖に男を去つて、ようおのれは出て行き居つたな。モウ〳〵、内に居らいでも大事ない。困りはせぬ。

ト腹立ち紛れに、吃り〳〵云つて、また氣を替へ

併し、嚊が居ぬと、おりや不自由な。……どうぞ、ならう事なら。

トまた未練な心になつて思ひ入れ。

イヤ〳〵、女に去られたこの太郎作。いつそ女房へ面當てに、おのれ、死んで見せうぞ。

ト件の短刀を取つて、わな〳〵して

眩暈病の太郎作が、女房に去られて死んだりと、世間の人に笑はれう。それが口惜しい、口惜しい。どうで死ぬなら、侍ひらしう書置殘して、見事に死んで

ト思ひ入れあつて、あたりより掛け硯を提げて來り、行燈を引提げ、よき所まで行く。此うち時の鐘、合ひ方。太郎作、筆を取つて行燈へ向ひ

ヤイ、女房、おりや死ぬぞ。跡で悔むなよ。よ。邪慳なわれに。

ト捨てある件の綺姿を見付け、これを取つて

熊坂太郎人相書。

ト讀み

これは男、女房は女。成る程、よう似た

ト思ひ入れあつて

エヽ、儘よ。

ト綺姿を捨て、行燈へ書置を一筆あてゝると、知らせにつき時の鐘、合ひ方へ、かすめたる通り神樂をかぶせ、鷹揚に、道具廻る。

本舞臺、左右板羽目、正面、塗りだれの釜風呂。人出入りあり。爰に朝長、掻卷を着て、火鉢を抱へ居る。若柴、後へ廻り、肩を揉んで居る見得。通り神樂にて道具とまる。

若柴　こりや、お前、いかう肩がつかへて居やんすえ。

朝長　どうでも、この雪風を強う引込んだと思ふ。こりや風藥を、たてつけて服まざァなるまい。

若柴　さうしなさんせ。風呂で温まりなさんして、その温もりの覺めぬうち、一汗かゝしやんしたならば、この位な引風は、直に發散しやうが、必らず冷えぬやうにしなさんせ。

朝長　わしもその心得で居る。コレ、其方、風藥など買うて來てたも。

若柴　心得ました。ツイ一走り。

ト身拵らへする。

朝長　アヽ、この雪に、さぞマア寒うて。

若柴　なんの、それを厭ひませう。わたしは御家來、鎌田が妹、御身は御主人朝長公。

朝長　コリヤ。

ト兩人、思ひ入れあつて

父義朝の仰せを受け、頼朝始め常磐御前の御在所、尋ねん爲にこの姿。然るに思はず義朝公。

若柴　お宿ありしが、何事も、油斷のならぬ、長田の忠宗附添ひあれば、迂濶に大事が。

朝長　我れは窃かに義朝公の居間へ伺ひ、關東へ下向の道筋、密かに申し上げん。心得難きは、この家の女房。

若柴　女子同志の、役目は、わたしが。

朝長　必らずともに。

　　　ト思ひ入れ、合ひ方になり、こなしあつて、朝長、窺ひ〳〵搔卷のまゝ奥へ入る。若柴殘つて

若柴　いかに時世と云ひながら、源家の公達朝長さま、かゝる埴生へ旅人のお姿。ア、弓矢取る身の、これ程までに。

　　　トほろりとなる。この時、風呂の内、バッタリ音して、本神樂、捨て鐘。風呂の穴の戸板を蹴飛ばし、黒き面にて、藤太、焚火搔きの刺股を持ち、窺ひ〳〵出る。若柴、驚ろき、逃げ行くを藤太、立廻つてキッと留めて

藤太　女、待て。

若柴　ヤ、お前は先刻の

藤太　板の間稼ぎの金毘羅同者。あの釜風呂へ打込まれ、逆上せあがつて居ながらも、詳しく聞いた地獄耳。藥賣りめが慥かに朝長、われは鎌田が妹。釜の内にて正しく聞いたが、イヤ〳〵、構ふまい、委細構はず見遁がさう……とは思つたが遁がさぬ。釜から出たる灰毛猫、關原藤太黑つらが、あまと云つたら釜と云へ、あまよ釜よの合ひ詞。そもじが軍にお出でも同然。あの朝長が行くへを云へ。身が名は藤太、濁りを打つて、どうだ、エヽ。

若柴　さてはあなたの實名まで、知つたる上は、こりやモウ其方も。

ト用意の懷劍にて突いてかゝる。藤太、飛びのき、刺股にてしやんと受け、これより通り神樂の鳴り物をかり、兩人、をかしみの立廻り、小短かくあつてキッととまる。時の鐘、送りにて道具廻る。

本舞臺、元の飾り付け、世話屋體へ戻る。爰に太郎作、件の行燈へ書置を書きしまひし體にてとまる。

ト合ひ方、時の鐘、太郎作、思ひ入れあつて

太郎　嚊に捨てられ、潔よう、腹切つて死ぬ樣子の書置。爰へ殘して、見ん事腹を

ト思ひ入れ。これより獨吟になり、件の行燈をよき所へ置き、門口の戸へ栓を差し、短刀を取つて、あたりより塗り八寸を取り出し、短刀をスラリと拔き、我が身ながら悔りして、ワナ／＼慄へ出し、やう／＼と八寸の上へ置き、手前の前へ直し思ひ入れ。此うち獨吟。向うより軍兵二人、件の赤合羽、中間笠にて、窺ひ／＼出て來り、花道にて囁やき、門口へ合羽を脱ぎ捨てる。下は四天の形にて、内を窺ひ藪の内へ入る。此あたりに唄納まる。捨て鐘。太郎作、腹切りのやうに居直り、思ひ入れあつて

お主様にも兄弟にも、女房にまでも捨てられ、役に立たずが、立派に腹を。

ト短刀を持ち、腹へ押し當てる。また懐へ出し、目をつむり、腹へ押し當て見て、冷つくゆゑ、また飛び退き、いろ／＼と臆病なる仕組みにて、未練に腹の切れぬ模様よろしくあつて

此やうにして見ても、臆病未練に、我が手が我が身へ刃はたゝぬか。

ト後に倒れ、身を跪いて思ひ入れ。この時、捨て鐘の頭を打込み、雪颪し、凄き合ひ方。雪頻りに降る。向うより鐵八、次郎八、軍助、無理右衛門、九助、三助、いづれも苧くそ頭巾、縕袍、裁付け一本差し、草鞋にて、腰には鋸、金挺、もぢりの類を、思ひ／＼に差し、龕燈照らし出て來り、皆々あたりへ思ひ入れあつて、鐵八、雪を握みて揚げ幕へ礫を打つ。出端やうの鳴り物になり、向うよりちよつぺい頭巾に目ばかり出し、面を隱せし、曲者、衣を着込み、大口付き、太刀、毛沓、白柄の長刀を掻いこみし熊坂の形の者、悠々と出る。三助、用意の忍び床几を持ち、此うち熊坂、花道よき所へ腰掛ける。皆々、龕燈を照らし、思ひ入れあつて

鐵八　頭の指圖に今宵の仕事、勝手覺えし小家の内。併し、油斷大敵と、先へ進みし三國の九郎。

夜叉　下働らきの小盜人、見習ふ稽古も野上の夜叉熊。

無理　庄屋と見せたる青野の丹八。

軍助　三條鄕太を始めとして
九助　三婦の九郎助、家內の案內。
三助　よつく知つたる我れこそは、美濃路に名を得し小猿の三平。
鐵八　時分なよきぞ。
皆々　込み入つて。

トこの時、熊坂「コレ」ト制す思ひ入れ。皆々頷づき、門口へかゝり、鐵八、用意の道具にて門の戸をこぢる。この音を太郎作聞き付け、もしや女房が歸りしかといふ心にて、そろ／＼行つて、戸の間より外を覗き、恟りして慄へ出す。この時、奥より朝長、頭へ手拭を卷き、搔卷着たるまゝ窺ひ出る。太郎作が様子を見て、ツカ／＼と行く。太郎作、朝長に囁き、門口の方へ指さし、思ひ入れ。朝長、恟りして表の方をためらふ事あつて、太郎作に門口の戸を明けろと云ふ仕方。太郎作、怖々密つと戸を明ける。鐵八、九助、ツカ／＼と入る。太郎作、逃げて上の方に窺ふ。朝長、鐵八、九助、立廻りに搔卷と手拭を脫ぎ捨てる。若衆かつら、茶筌、着込み鎧の形、大口、鎧の上は萌黄地錦の直垂やうのもの、露を取りたる形。

鐵八　さてこそ曲者。

皆々　油斷すな。

朝長　寄せ手にあらぬ盜賊ども。かゝる小家へ、何をか目當に。

三助　斯く込み入りしは源氏の落人

九助　義朝どのを

六人　盜みに來た。

朝長　すりや、大將を。

鐵八　込み入れ、方々。

皆々　合點だ。

朝長　身の程存ぜぬ盜人めら。イデ、太刀風に。

ト立廻りよろしく、舞ひ地になり、烈しく立廻りあつて、鐵八、三助、夜叉熊、見事に切らるゝ。此うち熊坂、門口へ來り、籔を小楯に窺ふ。矢張り烈しく切り立てられ、無理右衞門、九助、軍助、向うへ逃げる。朝長、この跡を追うて向うへ走り入る。熊坂、この體を見て、長刀を構へ、ツカ〳〵と花道の中程まで行き、向うへ追はんとして立ちどまる。

熊坂　思ふやう、物々しその冠者が、切るといふとも、さぞあるらん。

ト引返し内へ入る。

〽熊坂、祕術を振ふならば。

ト長刀を抱へ、奥へ返ると太郎作、悑りして熊坂に付いて廻る。熊坂、思ひ入れあつて

〽如何なる天魔鬼神なりとも、中に摑んで微塵になし、討たれたる者どもの、いで供養に報ぜんとて。

ト長刀を太郎作へ渡さんと、捕へて戻す。太郎作、何分怖がり、手に取らぬ思ひ入れ。熊坂あぐみ、長刀をあたりへ捨て

〽手取りにせんとて、長刀投げ捨て、大手を廣げ、爰のめんろう、かしこのつまりに追つかけ追つ詰め、取らんとすれども陽炎稲妻、水の月かや姿は見れども、手に取られず。

ト此うち長刀を捨て、奥へ入るを見て、刃物持たぬゆゑ、太郎作、怖がり〳〵、後よりむんづと組み、振り放さんとする立廻り。この文句の内の仕組みにて、よき時分、熊坂、踏み出す足に、捨てたる短刀觸れる。立廻りにて、この白刃を熊坂取つて、太郎作が右の手に持たせる事よろしく

〽次第々々に重手は負ひぬ〳〵、猛き心も弱り行きて。

ト謠の立廻りの納まりに、白刃の手を持ち添へ、我が腹へ、ガバと突き立てさする。太郎作、悑りし

て

太郎　ヤア。

　　　ト驚ろくその手を取つて

まつ　驚ろき無用、こちの人。

太郎　ヤ、

まつ　盗人ならぬ、女房のわたし。

　　　ト頭巾を取る、太郎作、見て

太郎　ヤヽヽヽ。其方はなんで。

まつ　お前に手柄させたさに。

太郎　ヤ。

まつ　平家にゆかりの盛俊が娘、手にかけたれば、一つの功は。

義朝　義朝、しかと見屆けた。

　　　ト小鼓の合ひ方。障子の内より聲かけ、左右へ引拔く。

平家のゆかりと縁組む景宗、それゆゑ勘當いたせしに、いま眼前に、現在女房を主に替へ、突き

貫きし忠義の景宗。勘當は赦せしぞ。

太郎　すりや、私しが

ト喜ぶ思ひ入れにて

これといふのも

トおまつに手を合せ、拜む事あつて

エヽ、有り難い。

まつ　御勘氣ゆりし上からは、今ぞ用ゆる最前の、眩暈吃りの難病を、治するは卽ちこの良藥。

ト懷より藥包みを出す。

義朝　その良藥も、混ずる血汐。

まつ　卽ち男女相性の、二人の血汐、わたしが手疵。まつた夫の額の血汐を混じて

ト草笛やうの合ひ方。鉢を引寄せ、我が疵口より流るゝ血汐を請け、藥の包みを同じく鉢へ浸し、太

郎作に持たせ

この上お前の面の生血、交へて服すものならば。

義朝　病氣平癒、急いで景宗。

まつ　サア。
太郎　サア。
兩人　サア／＼／＼。

トおまつ、さし付ける。太郎作、鉢を持ちたる儘、わな／＼慄ひ、思はず鉢の中へ、眉間の血迸しり落ちるを見て

まつ　臆病未練に五體の慄へ。それ／＼／＼、程よく血汐の滴り落ちるは、それにて揃ふ良藥。少しも早う。
太郎　エヽ、どうもこれが。

ト未練の體。義朝、立寄り、太郎作を捕へ

義朝　返す／＼も未練な有様。女房に犬死さする景宗。イデ、義朝が。

ト器を取つて太郎作が襟髮捕らへ、無體に飲ませる。これにて太郎作「ウン」と云つて倒れる。この時忠宗、出かゝり窺ふ。

まつ　ヤヽヽヽ。血汐を飲むと忽ちに、正氣を失ふ景宗どの。

トよろぼひ寄つて介抱する。

忠宗　さては女が命を捨て、その生血を弟景宗。
義朝　其方も様子を見聞なしたか。
忠宗　御油斷あるな義朝公、女が命を捨てたりとも、親と馴れ合ひ、娘を捨て、君を討ち取る盛俊が企て。その計略の裏を掻き、夜明けぬうちに、拙者が館へ。
義朝　さは云へ氣絶の景宗を、見捨て歸るも本意ならねば。
忠宗　すりや、どうあつても、お立ちはあらぬか。
義朝　見屆けた上。
　　　ト忠宗、思ひ入れあり
忠宗　時刻延びては
軍兵　手筈の相違
　　　ト兩方より出る。義朝見て、
義朝　さてこそ窺ふ
忠宗　猶豫は却つて
軍兵　義朝どのは

ト義朝にかゝる。突き廻して立廻り。忠宗、義朝に切りつける。

義朝　すりや、忠宗には。

忠宗　お覺悟あれや。

ト義朝へ切りつける立廻り。軍兵續いてかゝるを、おまつ、二人を引きつけ、手負ひの立廻りよろしく、この時、臥したる太郎作心付き、起きあがつて忠宗を突き廻し、白刃をもぎ取り、それをトかゝるを、忠宗が肋を貫ぬく。

コレ、弟め、現在兄を

太郎　手にかけねども忠宗どの、企て露顯の、こりや切腹。

忠宗　ヤ。

太郎　左樣なうては叶ふまい。

義朝　景宗、心が付いたか。

太郎　ハアヽ。

まつ　念願屆いて

忠宗　快氣なしたる、おのれ景宗。

トかゝるを太郎作、立廻つて

太郎 松ケ枝喜こべ。其方の念願屆きしにや、いま良薬を加へし生血、咽喉を通ると忽ちに、眩暈病も立去つて、縮みし舌も爽やかに、五音の調子も、この如く、以前に變らぬ三郎景宗。これと申すも其方が、一命捨てたる貞女の操、我が妻ながらも佛神感應あつて、難病平癒なしたるか。アヽ、アラ〳〵、有り難やなア。

ト思ひ入れ。

軍兵 景宗、捕つた。

トかゝるを立廻りよろしくあつて、衣裳變る。忠宗、立ちかゝるをよろしく留める。

太郎 よつく聞かれよ。

トきつとなる。これより肥前節やうの合ひ方に變る。思ひ入れあつて

某、父の遺言にて、長田の家を繼ぐべきところ、兄にて候ふ忠宗どの、これを拒みて仕込みしにや、祝言の夜に進むる酒、咽喉を通せば忽ちに、舌強ばつて、言舌吃り、刃物を怖るゝ、眩暈は、卽ち家に傳はる祕法、毒藥の業と知つたるゆゑ、女房諸とも館を出で、武士を捨てゝの民家の住ひ。然るに兄が企てにて、義朝公に謀叛の勸め。信頼どのへ一味させしも、みな忠宗がなす

ところ。世にも愚蒙の信頼どのへ、思ひも依らぬ企てと、思ふに違はぬ敗軍にて、旗色危ふき主を見限り。

忠宗　それ知られたら

ト太郎作へ立ちかゝるを立廻り。

景宗とても。

ト又かゝるを太郎作よろしく立廻り

太郎　平家へ内通、神文まで、書いて送りし道知らず。

ト三人立廻りてキッと引付け

かゝる不道の兄忠宗、弟が刃に落命は、まだしも天の助けるところ、逆磔にもあふべきこなた、天罰思ひ知られしか。

忠宗　如何にも主人を討たんとせし、報い来つて、おのれが刃に、落命なすが、口惜しい。

太郎　かゝる愚蒙の忠宗が、詞を用ひ、その上に、信頼如きに組みなし給ふ、御所存如何に、義朝公。

義朝　今まで包みし、我が存念。申し聞かさん、兄弟ども。

ト立ちあがる。軍兵かゝるを立廻りにて、抜討ちに見事に切り捨てる。

承れ。

　　トきつとなる。合ひ方變る。

太郎　ヤヽ、なんと。

義朝　某、元は清和の後胤、經基どのより我が家に、下りて青公卿ばらに、膝を屈する無念、日に〳〵いや增し止むことなく、謀叛の兆し、あはよくば、天下を奪はん胸中ゆゑ、御國の神寶を人知れず、奪ひ取らんと思ひ立ち、預かりある右衛門の頭信賴に近付き、さてこそ彼れが企てに、合體の體に見せ、もし神寶手に入らば、信賴如きは討つて捨て、四海を握る我が存念。然るにその節失ひし、白旗の行くへ知れず、それゆゑ軍隙どろうち、不意を打たれしこの敗軍。これにて疑念を、晴らせ景宗。

太郎　承つてさこそと推察。難病平癒の上からは、君を守護して諸國の源氏、集むるとても證據なければ、味方に加はる者もあるまじ。

義朝　それこそ肌身離さゞる、村雲のこの神鏡。

　　ト懷中より鏡を差出す。

太郎　すりや、その品が村雲の

まつ　さてこそ最前、紅梅の、花開きしも鏡の奇特。

太郎　して又、射かけし矢疵の悩みは。

義朝　それも最前、この矢の根、見ると其まゝ、兄弟とも、正しく流儀と驚ろく様子。長田二人の其うちに、我れに射かけし者あらん。

忠宗　外れ矢といへど某が、粟田口にて落武者の、主人と知らぬ天罰が、今こそ報ふか、淺ましい。

太郎　さてこそ、お主に手疵の御罰。さはさりながらこの神鏡、御手に渡りし上からは、口あらず大義の企てあつて、彼の承平の昔に習ひ

義朝　我れは都に上なき位。

太郎　某しは卽ち武將の司。

義朝　アラ、心地よや。

太郎　喜ばしや。

　　　トきつとなる。忠宗、齒嚙みをなし

忠宗　さまで根強き義朝どの、悪にも強き弟と、知らで過せし我が誤まり、この上ともに長田の家國、悪に凝つてこそ、立ていよ弟。

太郎　云ふにや及ぶ。

まつ　道に背きし企ても、夫が難病平癒の上は、盗み置きたる軍用金、その上從ふ手下の奴等、君へお
　味方いたさす割符、これを證據に。

ト書き物を太郎作に渡す。

太郎　然らば盛俊、出張りの陣中。

義朝　様子見屆け、來れよ景宗。

まつ　亡ぶる平家に

義朝　榮ふる源氏。

忠宗　我れもあの世へ。

ト刀を引廻す。

軍兵　義朝、おのれ。

トかゝるを忠宗、よろぼひ引留め、立廻りて、上へ突きやる。義朝、引付ける。

忠宗　憚りながら。

ト首さしのべる。

義朝　時の血祭り。

ト忠宗が首を打ち落す。この太刀音に、おまつ、ガツクリ落入る。太郎作、駈け寄らうとする。

景宗、急げ。

軍兵　おのれをやつては、

ト跳れ返すを引敷く。

義朝　行け。

太郎　ハア、。

トかけりになり、太郎作、向うへ一散に入る。義朝、思ひ入れあつて

義朝　今宵に限り、降る雪の、みな白妙も源氏の旗色、榮ゆる印か、アラ心地よや。

ト思ひ入れ。よき時分より藤太、四天に着替へ、大小にて表の方より窺ひ出て

藤太　死損なひの義朝どの、こなたを討取るその爲に、疾より窺ふ關原藤太。

義朝　おのれ、平家の間者よな。

藤太　この小家へ逆寄せに、込み入る軍勢、合圖の烽火。

ト腰に用意の鍵繩を取つて上の方、軒口へ打ち付ける。雪散亂として煙硝火上がる。義朝、キツと目

を付け

義朝　怪しの烽火。

軍兵　覺悟。

ト切りつけるを突き廻し、白刃をもぎ取り、軍兵が首を打ち落す。これをキッカケに向うにて、どん

ト遠寄せの頭を打ち込む。

義朝　さては尾張の野上の陣中、夜討ちをかけん結構なるか。

藤太　その前方に、こなたの首、藤太が手柄。

トかゝるを立廻りあつて、義朝、矢疵に惱む思ひ入れよろしく、キッとなる。ドンチャン、向うより

手を負ひし朝長、拔刀にて走り來り

朝長　御注進々々々。

ト苦痛の思ひ入れ。

義朝　其方は朝長。

藤太　丁稚め、うぬを。

ト義朝を振り切り、朝長にかゝる。兩人よろしく立廻りあつて

義朝　手負ひし樣子。はや敵は近附きしか。

朝長　ハツ。

ト思ひ入れ。これより鳴り物變つて

さん候ふ某こと、この家に疾より窺ふところ、思ひがけなく今宵の盜賊、切り立て〳〵追ひ散らし、逃ぐるを追ひかけ參りしところ

藤太　その首渡せ。

トかゝる。立廻りよろしくあつて

朝長　思ひがけなき烽火と共に、寄せ來る軍勢は、平家の盛俊ならぬ源氏の武士、病氣快癒の長田の景宗、難病平癒の上からは

藤太　義朝どのを討ち奉り、首を平家へ送らんと、その間に見込んで藤太が手柄に。

ト立ちかゝるを朝長、立廻つて

朝長　主に刃向ふ人非人、平家荷擔の手土產と、村雲の鏡を盛俊へ。その身は源氏を見限つて、先陣願うて寄せ來る結構。

義朝　すりや、景宗が逆心とな。兄忠宗は兼ねてより

朝長　悪に凝つたる無道人、よもやと思ふ弟景宗。

藤太　病みほうけても流石は長田、手盛りをくらうた義朝どの。

　　トかゝるを朝長、立廻つてキツと留める。

朝長　まだその上に、弟君頼朝公、擒となりし沙汰ござれば、斯くまで衰ふ源氏の成行き。

義朝　その上扶持せし長田めに、騙かられしは、義朝が一生の身の誤まり。よもやと思ふ景宗、おのれ摑みひしいで無念の程を。

　　トきつとなる。

朝長　とく／＼御用意。

義朝　朝長、防げ。

朝長　ハアヽ。

　　ト思ひ入れ。義朝、向うを見詰め、キツとなる。知らせにつき、軒面へ伊豫簾下りて姿を隠す。藤太朝長へ切り付ける。此うち始終ドンチヤン。兩人、立廻つてキツとなる。これより鳴り物をかりて、小短かき立廻りあつて、兩人深手の體。若柴、奥より走り出て、この體を見て

若柴　ヤ、朝長公。

朝長　其方は若柴。

藤太　觀念ひろげ。

ト切りつける。三人よろしく立廻り。キッと見得。ドンチヤン烈しく、道具ぶん廻す。

本舞臺、元の風呂場の道具へ戻る。

ト爰に義朝、脫ぎかけにて、大童の體。七郎、彌源太、六郎、三郎、四天の形にて、槍を持ち取卷き居る見得よろしくあつてとまる。

七郎　主人長田の下知を受け、御首賜はる某は、橘の七郎。

彌源　彌源太兵衛。

六郎　鎌田の六郎。

三郎　有利三郎、お覺悟あれや

皆々　義朝公。

義朝　緩怠至極。

ト切り立て〳〵、立廻りあつて、四人を殘らず切り捨て、タヂ〳〵として思ひ入れ。

毒矢のかすり手、ナニこれしきに。

トきつとなる。この時、弦音して、短冊結びし、矢文一筋來つて義朝にあたる。手早く拔き取り見て

義朝　心得難き、へろ〳〵矢、殊に短冊添へたるは。

ト見て、

「昔より主を內海の報いには、

ト讀む。向うにて。

太郎　美濃尾張こそ如何なるらん。」

義朝　ヤ、なんと。

太郎　左馬頭義朝公へ、長田の景宗、見參々々。

トつゝかけ、ドン〳〵になり、軍兵大勢、下座より出て義朝へかゝるを、切り立て〳〵、左右へ追ひ込み、キツと見得。向うより太郎作、黑皮の鎧着込み、半大口、望みの形、鉢卷、弓矢を搔い込み、走り出て來り、義朝を支へてキツと見得。奧にてアリヤ〳〵の懸け聲。

義朝　ヤア、主を僞はり忠義と見せ、敵たふ長田の人面獸心。日本一の逆賊めが。

太郎　あなたの目からも、この景宗、逆賊なりと見えまするか。

義朝　主を討つのが逆賊ならずや。

太郎　君こそ無双の逆賊ゆゑ。

義朝　ヤ、なんと。

太郎　エヽ、あなたはなう。

ト思ひ入れ。これより篠入りの合ひ方、遠寄せ。

現在父君爲義公、新院に味方ありしを、御武運拙なく捕はれの、如何に君の爲なりとて、誠の父君、子として父の頭を刎ね、いぶせき喬木にかけ給ふは、親殺し、その上、天下を握る望みあつて、信頼に同心なす。神の御末の大君に向ひ、眼前親を打ち給ふ、これぞ末代武門の名折れ。源家の棟梁義朝こそ、主殺し親殺しと、汚名を残すが残念無念。さるに依つてこの景宗、悪人ながらも兄を殺し、その上御身に敵たふも、主兄殺しと末代まで、人でなしの汚名を受くるも、保元の御代になしたき願ひ。斯程に盡す景宗を、逆賊なりとは義朝公、思へば〳〵エヽ、お情ない。

ト きつと詰め寄る、義朝、思ひ入れあつて

義朝　心付かざる不覺の義朝。我が亡き跡は源家の成行き。





ト白刃を持つて

頼むは其方、今こそ迷ひの雲晴れて、子孫の榮えを、頼むぞ景宗。介錯頼む。

ト がばと白刃を腹へ突き立てる。太郎作、思ひ入れあつて

太郎 お頼みなくとも、今の御無念。

義朝 晴らさせくれよ。

ト思ひ入れ。太郎作、後へ廻り

太郎 道に違ひし事ながら、主人の首を。

義朝 これぞ誠に、父上を討ちし報いか。

太郎 めぐり〱て

義朝 我れまた家來に

太郎 討たるゝ御身も娑婆の成行き。

義朝 天道我れを亡ぼせり。

太郎 君また人を亡ぼせし

義朝 その天罰の報い來て

兩人　斯く淺ましき
ト顏見合せ、キッと氣を替へ。
太郎　道ならねども……勝鬨、勝鬨。
皆々　エイ〳〵オウ。
ト奧にて鬨の聲を上げる。ドンチヤン打上げる。
太郎　ゆるさせ給へ。
ト太刀振り上げる。これを木の頭。義朝、白刃を引廻す。この手に習つて、キザミよろしく
ト太郎作「エイ」と懸け聲。首打つ太刀音。ドンチヤン、早め打上げる。知らせに付きシヤギリ。
幕

第一番目大詰

主馬盛久館の場

役名――主馬判官盛久。妾、笹尾實ハ白峰の內侍。忠盛後室、池の禪尼。內田の丁稚、與吉實ハ澁谷金王丸正俊。岩清女房、小よし。築島入道海月。腰元、藻汐。同、初霜。同、岩瀨。兵衞佐源

の頼朝。盛久一子、小三郎。同二男、小四郎、茶道、珍齋。奴、久賀内。下部、鳥平實ハ安達藤九郎盛長。盛久女房、阿古屋。上總七郎景清。

本舞臺、三間の間、中足、結構なる御殿。正面、瓦燈口。緞帳、左右張り物よろしく、枝折り門、萩垣、すべて主馬の判官盛久館のかゝり。二重舞臺の眞中に、頼朝、壺折衣裳、刺貫にて、三方の上へ、小さき卒塔婆大分載せ、これへ文字を書いて居る見得。左右に、兄の小三郎、弟小四郎、振り袖、袴の形にて附き添ひ、舞臺には、海月、着流し、大小へ衣を着、鯰坊主にて、百萬遍の音頭を取り、藻汐、初霜、岩瀬の腰元、珍齋の茶道、皆珠數を繰つて居る。百萬遍をかぶせ、賑やかに幕明く。

海月　南無阿彌陀佛。

皆々　南無阿彌陀佛。

トよき程に早め、海月、手を打ちながら

海月　願意宿得、平等一切發菩提心。南無阿彌陀佛々々々〳〵々々々。

ト百萬遍納まる。管絃殘る。

岩瀬　これは〳〵、入道、お疲れでござりませう。私しも念佛で、大きに聲を涸らしました。

ト咳をせく。

海月　さうでござります。この入道も久し振りで、盛久どのゝ屋敷へ來たところ、志しの佛があるから、講坊主を頼みたいと云ふから、築地まで探して來たが、きついもので、講坊主が不漁だと云つて、この鯰坊主で間を合はすが、コレ、女中衆、今日の佛は盛久どのゝ、親類内とでも云ふ事か。

藻汐　イエ〳〵、左樣ではござりませぬ。この程捕はれとなりたまひ、あれにお出で遊ばす賴朝どのゝ父君、お討たれなされた、義朝どのゝ、初七日の逮夜とあつて、そのお念佛。それゆゑ賴朝どのも一心不亂に、アレ、卒塔婆を遊ばされまする。ほんにマア、お年も行かいで、御殊勝な、お痛はしい事ではござりませぬかいな。

海月　アヽ、さうか。それでは、先づこの鯰も、茶飯と牡丹餅には、有り付くといふものだ。

藻汐　ホヽ、入道どのも餘ッほどな、下卑僧でござりますな。私しどもは牡丹餅などは、きつい嫌ひでござります。

珍齋　牡丹餅は、嫌ひだか知らないが、昨日燒き芋と大福餅で、食傷をしたと、お屋敷中評判であつた。

岩瀨　エヽ、モウ、誰れが其やうな事云うてぢややら。オヽ、恥かし。

海月　ハヽヽ。それはさうと、盛久どのは、お氣に入る程あつて、慈悲深き人だ。現在敵の大將の法事

までを營むとは、餘ッほど物好きな人だて。

初霜　其やうに、お慈悲深いによつて、御奉公いたす私しどもまで、大抵仕合せな事ぢやござりませぬ。

藻汐　それに奥樣は、御存じもござりませうが、悋氣嫉妬のお心は、微塵もなう、アノ、お妾の笹尾どのと、仲のよさ。

海月　ありやア、どうしても、それしやの上がりだから、野暮嫉妬の手はあるまいて。して、今日は阿古屋どのは、どこへ行かしやつた。

藻汐　賴朝どのゝ名代に、あたりの御寺へ、笹尾どのをお連れなされて、御佛參にお出でなされました。

賴朝　コリヤ〳〵、方々、父義朝の菩提の爲、予が認めしこの卒塔婆、よしなに賴むと、盛久に傳へても。

もう追ッ付けお歸りでござりませう。

女皆　畏まりました。

トこの時、向うにて

久賀　エヽ、見苦しい、二人の奴等。下がれ〳〵。

阿古　願ひとあらば大事ない。叱らずと、歸しやいなう。

トこれにて、ぬめりの樣なる誂らへ鳴り物になり、腰元皆々出迎ふ。向うより阿古屋、襠衣裳、奥方の拵らへにて出る。後より篠尾、腰元の形。久賀内、捻切り奴にて、竹の花活けへ、紅白の梅の枝を挿し、これを持ち、供連れにて出る。後より與吉、柿の前垂れ、御用の形り、五合德利と通ひ帳を持ち、後より小よし、留め袖、やつし在所女の拵らへ、菅笠を持ち、出て來り、花道にて

よし　ハイ／＼、お情深いお屋敷と、承り及びまして、お願ひ申したい事がござりまして、はる／＼と參りました。在所の女子、どうぞお取次ぎなされて下さんせいな。

與吉　なんぼ、こなたが叱つても、おらァ、賴朝どのとは友達だから、このお屋敷に居るならば、いつもの通り、一緒になつて遊ぶ氣だ。コレ、奴どん、あんまり下がれ／＼と、云はつしやるな。こなたにも二合半下がりがあるわな。

久賀　エヽ、承知だよ。お供先だ。小僧、氣を利かせろ。下がれ／＼、下がり居らう。

阿古　ハテ、叱りやんな、久賀内、いま其方が手に持ちし、梅が枝の花を、香をもしるべと慕ふとも、しをらしい、捕はれとなりたまひし、賴朝どのゝお伽が致したいとは、さても、マア、優しい在所女。願ひがあつて、はる／＼と來りし者を歸すとは、どうやら、むごたらしいぢやないかいなア。

笹尾　左樣でござりまする。女子は相身互ひ、館へお連れなされた上、如何なる願ひの筋か、お聞きなされて遣はされませいなア。

阿古　サヽ、氣遣ひせずと、二人の者、自らに付いて、來やいなう。

ト鳴り物の切れにて、この人數皆々、本舞臺へ來り、よろしく住ふ。思ひ入れあつて

藻汐　奥方阿古屋さま。

皆々　只今お歸りなされましたか。

ト阿古屋こなしあつて、梅の花を賴朝が前へ直し

阿古　モシ、若君さま、あなたのお氣欝晴らさんと、花香えならぬ梅の一枝、手折りて差上げまする程に、御覽なされませ。なんと好い花ぢやござりませぬか。コレ、兄弟ともに、おとなしう、君をお慰め申しやいなう。

賴朝　其方達夫婦が心遣ひ、忘れは置かぬ、嬉しいぞよ。

阿古　ハアヽ〳〵。

ト思ひ入れあつて、小よしに向ひ

これいなう、途中にて寄りつき參りし、在所の女子、折惡しく夫、盛久どのは、六波羅へ出仕の

留守。御歸宅なされた上、自らもとも〴〵に、願ひの筋は聞かう程に、暫しの間、扣へてゐや。

よし　エヽ、有り難うござります。

海月　ハヽア、そんなら、この女は盛久どのに、願ひあつて來たと云ふのか。して又、内田の小僧は、何しに來た。

與吉　おれか。おらア、今までお出入り屋敷の賴朝どのが、此お屋敷に居さつしやると云ふ事だから、友達になつて、めんとうでも打つて遊ばうと思つて來たが、コレ、和尚さん、いゝ所で逢つた。先頃のごんつくの代も、今日拂つてくんなよ。

海月　エヽ、この丁稚め、とんだ所で、天井を見せやアがる。

久賀　コレ、小僧、御門を入れてやつた規模に、その德利は、くれまいか。

與吉　エヽ、この奴どのも、面の惡い。いつぞやの二合半も、當て身か。

海月　オヽサ、當て身次手に、其ごんつくも。

與吉　まゝにもしませう。べゝゝ。

トこなし。

海月　コレ、阿古屋どの、聞けばその女は、盛久どのゝ妾だと云ふが、さうかな。

阿古　これは改まつた、入道どのゝお尋ね。如何にもこれなる笹尾は、夫盛久の妾でござりますわいな。

海月　いよ〳〵、盛久どのゝ妾かな。

阿古　ハテ、御念の入つたお詞。何しに左様に、お尋ねなされます。

ト思ひ入れ。

海月　サア、何だか美しい生れ付きの女。盛久どのゝ妾なら是非もないが、さうでなくば、この入道が宿の妻に、申し請けうと存じてサ。

輿吉　ナニその面で、厚かましい。おへねえ、腥坊主だ。

トこの時、向うにて

よび　殿の、御歸館。

ト呼ぶ。これにて、思ひ入れあつて

阿古　頼朝公を、近く置きましては、夫の思惑も如何。奥の別間で、いつもの通り、お好みの能囃子にて、兄弟ともおとなしう、腰元どもゝ共々に、君をお慰め申しやいなう。

女皆　畏まりました。

輿吉　こいつは面白からう。囃子があるなら、行つて見よう。

久賀　コレ、見せる代りに、其ごんつく
與吉　取つた者にやらうな。
ト見せびらかす。
海月　ドレ、入道も、席に付かうか。
阿古　サヽ、君には、奥へ
皆々　お入りあられませう。
ト管絃になり、賴朝先に、兄弟の子役、腰元皆々付き、後より海月、この人數、瓦燈口より、與吉は久賀内に德利を見せびらかしながら、兩人は下座へ入る。阿古屋、小よし、笹尾殘る、また向うにてよび　お歸り。
ト呼ぶ。これにて、中の舞になり、主馬の判官盛久、衣裳社杯にて出る。後より鳥平、奴にて、中拔き草履を持ち、供をして來て來り、花道にて、思ひ入れあつて
阿古　我が夫盛久どの、只今御歸館
笹尾　遊ばされましたか。
盛久　某、六波羅へ出仕の留守も別條なく、捕はれの賴朝どのゝお身に、恙これ無きや。

阿古　左樣でござりまする。取分け今日は御機嫌よく、アレ、あの如く。
鳥平　まだ幼少の頼朝どの、親を討たれし歎きのうち、殊にその身も捕はれと、なり果て給ふ御身にて
盛久　優にゆかしき遊藝亂舞。
笹尾　蛇は寸にして、その氣を吐くとやら世の諺。
鳥平　思へば思ひ廻す程、油斷ならざる
盛久　ヤ。
鳥平　若君ぢやなア。
ト鳴り物切れにて盛久、鳥平、本舞臺へ來る。
阿古　日毎の御出仕、御苦勞に存じまする。
盛久　コリヤ、阿古屋、見馴れぬ女子が居るが、ありや、何用にて、何れより參つた。
阿古　サア、在所の女子が、あなたにお願ひがあると申しまして、最前より參つて居りまする。サ、女中、幸ひ殿のお歸りなれば。
よし　左樣なら、あなたが、お慈悲深いと承りました、此お屋敷の殿樣でござりまするか。
阿古　さいなう。サヽ、何なりと、願ひの筋を申しやいなう。

よし　ハイ〳〵、私しは、只今にては、尾張の國熱田に住ひ致し、名は小よしと申す在所女子。以前は六條の判官爲義どのに、腰元奉公いたして居つた者。ちと殿樣に、お願ひがござりまして、はるばると、此お屋敷へ上がりました。

ト鳥平、思ひ入れあつて

鳥平　コリヤ〳〵、女中、此お屋敷の殿樣は、平家方のお侍ひ。どういふ願ひか知らないが、源氏方に奉公いたして居つた者が、うか〳〵と、滅多な事を云ふまいぞ。

ト思ひ入れ。

盛久　ハテ、いらざる事の支へ立て。コリヤ、女子、願ひとあれば、マヽ、何なりと申して見やれ。

よし　サ、恥かしながら、奉公いたすその砌り、平家方の侍ひ衆と、フト馴れ染めて懷胎いたし、男子を一人儲けしところ、隱すとすれど隱されず、不義は武家の御法度と、既に二人とも死罪にもなるべきところ、爲義どのゝお情にて、お屋敷を追放され、二人と申せど三人の

盛久　危ふい命を、助かつたぢやな。

阿古　して、その産み落した男子は、どうしやつたぞいなう。

よし　サ、その男の子は男に付き、別れ〳〵になりました。もう十ヶ年音信不通、この頃噂に聞きま

すれば、その男は、平家方へ歸參いたし、今は立派な侍ひになられましたとやら。それに付いては、なか〳〵に、不束な在所女子の私し風情、以前のよしみぢやと申して、はした女にもしは致しますまいが、明け暮れに懷かしいは、私しが產み落しました男子、如何に成人いたしましたやら、その子の事が聞きたさに、お情深い殿樣のお指圖を受けまして、どうぞ、その男めに逢ひたうござります。お願ひと申しまするは、ハイ〳〵、何卒その男に、お逢はせなされて下されませ。

ト思ひ入れ。

盛久 そりや、誰れかは存ぜぬが、平家方の侍ひとあれば、逢はしても取らさうが

阿古 して、その男の名は。

よし サ、それを、どうもあらはには。

ト阿古屋心得、硯箱を持ち來る。

阿古 そんなら、料紙硯箱、それへその名を認めて

よし 左樣ならば、その男の名を

盛久 サヽ、認めて見せやれ〳〵。

ト小よし、筆を取り、ちよつと書いて

よし　その男の名は、これでござりまする。

ト見せる。盛久、阿古屋、悧くりして

盛久　ヤヽ、すりや、其方が云ひ交し

阿古　子まである男といふは。

盛久　ハテナア。

ト思ひ入れ。鳥平、こなしあつて

鳥平　ハテ、いづくも戀の世の中だわえ。おらが旦那も、あの美しい奥樣のある上、笹尾どのといふお妾に、お腹もほてれんの樣子。斯ういふ中は下々だと、えて嫉妬喧嘩のわつぱさつぱ、そんな事は鵜の毛で突いた程もなく、御夫婦して、あゝ笹尾どのを大事にさつしやるのは、どうも、この奴めには。

盛久　ヤ。

鳥平　結構な事でごわります。

ト思ひ入れ。

よし　ハイ／＼、どうぞ、相成ります事ならば、その男めに。

盛久　サヽ、逢はしても遣はさうが、いよ〳〵其方が云ひ交したる男の名といふは、これなる料紙に認めし

阿古　平家の侍ひ。

ト此うち、向うにて

よび　景清どのゝお入り。

ト呼ぶ。これにて皆々思ひ入れ。

盛久　ヤヽヽ、ナニ景清の入來とや。以前は親しき朋友も、今は不和なる身が屋敷へ

阿古　もしや、源氏の公達の

よし　但し、この身の素性が洩れて

烏平　ヤ。

よし　嬉しや、つれない男めに。

ト立ち上がり、向うへ思ひ入れ。

盛久　コレ。

ト制す。

盛久　何は兎もあれ、景清入來とあるからは、いづれも奥へ。

阿古　小よしとやらも、暫しのうち。

鳥平　ドリヤ、奴も部屋へ參るべいか。

ト唄になり、向うへ思ひ入れする。笹尾、阿古屋制す。これにて、小よし、心を殘し、上の方へ。鳥平、笹尾に目を付け、下座へ。笹尾は瓦燈口へ、三人入る。盛久、阿古屋殘る。また向うにて

よび　お入り。

ト呼ぶ。これにて誂らへの賑やかなる鳴り物になり、向うより景清、剃立て鬘、羽織衣裳、大小、庭下駄をはき、番傘に、五條坂花菱屋と書いたる傘の先へ、内田の柄樽を結び付け、これを擔ぎ、出て來る。

盛久　ヤレ、珍らしや、七郎どの。なんと思うて、盛久が屋敷へ、入來なされたぞ。

景清　これは、御亭主主馬どの。先づは健固で、重寶々々。以前に變らぬ朋友の、懇ろ仲になりたさに、久々で、參つてござる。

盛久　それは、ようこそわせられた。サヽ、見苦しくとも、先づ〳〵これへ。

景清　然らば、罷り通るでござらう。

ト鳴り物の切れにて、景清、舞臺へ來り、よき所に住ふ。

阿古　お珍らしい、景清さま。打ち絶えまして、今日のお目もじ。お變りもなう、お嬉しう存じまする。

景清　誰れかと思へば、そもじは阿古屋か。アイヤ、以前は以前、只今は盛久どのゝ世話になり居らる樣子、承り、それにて段々妾宅は、根岸に今戸向島、そこ爰と尋ねたに、知れぬも道理、都なる淸水坂に、ホウ、いつに變はらずあでやかな。ハテ、御盛んでめでたう存ずる。

盛久　さうお云やつては、盛久め、誠に痛み入りまする。ナウ、女房。

阿古　ア、モシ。

ト景清へ思ひ入れ。

盛久　ほんに、これは不調法。景清どのゝ聞かるゝ手前、ツイ、ウカ〳〵と、誠に粗忽申したわえ。

景清　イヤ〳〵、遠慮に及ばぬ事。云はゞ貴殿と某と、買ひ論したるこの阿古屋。イヤ、只今は奥方、斯う申さずとても御存じの、花に凝つたる景清が、淸水詣でをかこつけに、通ふ遊里は都なる、五條當りの軒端の妻、彼の花菱屋のこの君に、くらひこんだる武士の、雪の夜雨の降る夜半も、腕づく勝負に通ひ詰め、女房約束しかけても、年が明けたら兎も角も、さうしてからと和らかな、手段相談眞に受けて、話しのうちに明け烏、木の下雨の朝歸り、南無三時雨か用心に、お安い御

刀と、コレ

　　ト傘を開き、キッと見て

覺えがあらう、この番傘、借りて歸つた砌より、身は浪人の寄る邊なく、兎やせん角やと存ずるうち、盛久どのが根曳きして、殊に阿古屋は貴公の胤、しかも男子を産み落し、屋敷へ引取り育てる事、聞いて鬼門の門構へ、思つて見ても素浪人、其まゝ過ぎ行き年月も、思うて見れば一昔、當時は景清、身の有りつき、致したゆゑに御祝儀に、一升提げた惡樽に、借り申した番傘は返濟、荒立て云はゞこの女、足を付けたる某に、渡つて來ねばならぬ筈。なぜ踏み付けにおしやつた。如何に景清生國が、上總木綿の情なしに、生れ付いたる小野郎でも、小鬢ながら膽がある。錣頭巾ほど腕切つても、巣のない瘦せ腕は、小さい大根に巣のない例し。盛久どの、返事が聞きたい。返事をさつしやい。ド、ど、どうでござるな。

　　ト傘柄樽を突きつけて、キッとなる。阿古屋、盛久、思ひ入れあつて

盛久　成る程、その節此方から、渡りとやらに人をかけ、申し入れぬが不覺の第一、なれども仲も共許とは、常より懇意の身共ゆゑ、下世話に申す心安いまゝとやら。ナウ、阿古屋。

阿古　さうでござんす。云はゞ流れの一夜妻、盛久どのに馴れなじみ、嬰兒まで儲けし事なれば、切つ

ても切れぬ縁と思ひ、產み落したる子に引かされ、此お屋敷へ引取られ、お前の事を心には、思うて居れど景清さん、これぱつかりは、堪忍して下さんせえ。

景淸　さう、其方から云はれては、誠に賣り物買ひ物に、岡燒き餅も氣が引ける。然らば今より此方の、恨みはさつと西の海、流してしまうて、以前に變らず、心安う附き合ひ申す。

盛久　それは近頃忝ない。然らば別懇に。コリヤ、お茶を持たぬか。お莨盆も。腰元ども〳〵。

ト呼び立てる。合ひ方になり、笹尾、茶を汲み、小三郎、莨盆と菓子を持ち出て來り、景清が前へ置く。

笹尾　ハイ、お茶召上がりませ。

ト差出す。景清、これを取る時、思ひ入れあつて

景淸　盛久どの、この者は、其許の手廻りの女子でござるか。

盛久　左樣でござる。笹尾と申す腰元でござるて。

景淸　あの女子が、貴殿の、手廻りの。ハテ、氣高い。

ト思ひ入れあつて

見ますれば、年恰好も同じ小兒。アヽ、これが貴殿のお世嗣か。

阿古　アイ、今こそ申す、恥かしながら、わたしが腹に宿りたる、主の胤なる弟の小四郎、わたしが
　産み落しましたわいなア。
景清　阿古屋どのゝ産み落したるは弟にて、して、總領は、何者が産みました。
盛久　アイヤ、その總領の小三郎、そりや拾ひ子でござる。
景清　ヤア、この御子息が
盛久　兼ねて信心し奉る、清水寺觀世音へ參詣の砌り、清水坂にて拾ひましたる、それなる男子。殊
　に守りに厨子入りの觀世音。それを添へ置き捨てたるは、故ある者が悴と存じ、これは觀世音の
　授け給ふと存ずるゆゑ、兄と致して育てまするて。
景清　すりや、この御男子は清水坂に、尊像添へ置き、捨て子とな。
盛久　いかにも。
　ト景清、キッと子役の顏を見て
景清　いづれの誰れが捨てましたか、いはゞ不便な、殊に、よい生立ちでござる。笑顏優しき好い子で
　ござるな。
　ト小三郎が手を取り、愛す思ひ入れにて、手の甲にある悲を見附け、思ひ入れあつて

景清　手の甲に痣が見えまするが、こりや、怪我で出來ましたか。
盛久　アイヤ、その痣は、生れ落ちより
景清　アノ、この痣が。
盛久　左やう。
景清　ハテ、惜しいかな。
　　　トよく見て
　　併し、目立たぬところで、仕合せでござる。
　　トさてはト思ひ入れ。最前より小よし、後に立ち居り、景清を見て、恟りしたる思ひ入れにて、この
　　時、ツカ〳〵と寄つて
よしヤ、お前は爰に、よう息災で。
　　ト近寄るを景清、思ひ入れあつて
景清　何ぢや、この女は。馴れ〳〵しう盛久どの、これも其許の手廻りでござるか。
盛久　イヤ、その者は、只今身共へ願ひに參つた女。
よし　モシ、景清どの。よもやお見忘れなされますまい。私しが親は浪々の、お前も仕官のお望みに。

景淸　これはしたり、何を申す。身は其方のやうな女に、近付きは持たぬワ。
よし　すりや、今更にわたしが、斯ういふ姿ぢやゆゑに、存ぜぬ知らぬとは、そりやわたしはいとはねど、十年後に産み落したる、男子はいづれに。
　　　ト云はうとする。景淸、こなしあつて
景淸　コリヤ〳〵〳〵。男子とは何事。そりや景淸ではあるまい、人違ひか。何をたはけた。盛久どの、この女を遠ざけて下さい。
盛久　コリヤ、女。お客人へ馴れ〳〵しう。サ、次へ立て〳〵。立てと申すに。
　　　トこれにて、小よし、モジ〳〵して
よし　ハイ、お宥されて下されませ。あなたが仰せなれば、お次へ立つてござりませうが、あまりと申せば胴慾な。
　　　ト景淸を怨みの思ひ入れ。
阿古　アヽコレ、其方の願うた事、爰ではどうも折が悪い。マア、何事もわし次第に、次へ立つて、コレ、指圖を待ちや。
よし　奥様の、お詞に、從ひまして、私しは

阿古　サア〳〵、爰を立ちや〳〵。
よし　畏まりました。
盛久　笹尾は奥にて、お客人をもてなす用意を。
笹尾　畏まりました。サ、お二人さま、お前も一緒に。
よし　ハイ。思へばつれない、逢ひたい親子の
　　ト景清へ思ひ入れ。
阿古　ハテ、行きやいなう。
　　ト唄になる。兄弟の子役、笹尾、小よしは心を残して奥へ入る。
盛久　サア〳〵、これからは久し振りの貴公、打ちくつろいで
景清　イヤ〳〵、お心遣ひは御無用になされい。
盛久　これはしたり、久し振りのお出合ひ、御馳走申さにやならぬ尊公。アヽ、以前が思ひ出されます
る。
　　ト合ひ方。
景清　成る程、貴殿がさうお云やれば、堅氣をやめて

盛久　かいしよめかさず、打ちくつろいで

阿古　昔語りの、わたしもお相手。

トその中へ入る。

景淸　面白

盛久　をかしう

三人　話さうか。

ト誂らへの合ひ方。

景淸　其許がさうお云やれば、身共も忘れはしませぬ。まだ前ぶりの部屋住みにて、一僕連れて、お弓の稽古、その歸りがけに思はずも

盛久　觀音參りと云ひ立てゝ、立寄る場所も五條坂、素見ばかりで歸らうか。これまで一度も傾城を、求めた事のない二人、それをおだてゝ草履取り、あの八內めが勸め込み、無理に爰へと花菱屋、上がる梯子も胸ワク〳〵、あの見通しに屯ろして

阿古　居やんすのを、障子の間、めくれた紙の間から、覗けば對の若衆振り、どれがどうとも岩橋の、夜の契りの客人は、あちらのお方か、此方なる、お若衆さんかと、目移りの、座敷へ出れば、お

二人も

景清　その相方の杯も、上の空なる初心客、しよにんな仲居の機轉利き、お客は二人、花魁はお一人、戀の取込み、お馴染みならば貰ひ引き、それも初會の事なれば、御不承ながら鬮取りと、聞いて大悲の觀音に

盛久　祈誓をかけて一心に、願うた甲斐も有り難たや、その鬮開けば、阿古屋とある。さてこそ身共に大悲の御利益。

阿古　わたしも、嬉しさ、飛び立つ思ひ。

景清　浮かぬ景清、佛頂面、床は極まれど相方の、面さへ憎し阿古屋めと、腹立ちまぎれ更けぬうち、ドリヤ歸りませうと廊下まで

ト立つて行きかゝる。阿古屋、留める。清搔。

阿古　こりや馬鹿らしい今時に、歸し申しはしやんせぬ。

景清　それでも歸るワ。

阿古　ハテ、野暮らしい、よしなんし。これはしたり、子供、來やいの。

ト頻りに呼ぶ。盛久、聞きつけ、思ひ入れあつて、禿の眞似して

盛久　アイ丶丶丶。

ト阿古屋が側へ來る。

景清　コレ、阿古屋。おれを留めるは、おぬしはちよつぴり達引く心か。但しは眞面目に長棹か。

阿古　ハテ、どうともしいす。わたしが心は

トそこにある硯箱、卷紙を取つて

コレ、見なんし。斯うでありんすよ。

ト何やら書き、景清これを覗いて

景清　ムウ、よし／＼

トまた阿古屋、さら／＼と書く。

阿古　そして、寐ましてからでありいすよ。

景清　そんならお主は、アノ本氣にさういふ

トこなし。

ア、流石は身共が

トほろりとする。

阿古　色でざんすよ。

ト文をクル〳〵と巻き、景清に渡す。

アモシ、大きな聲すと、主が目が覺め

ト心遣ひ。これ等を聞き、盛久、寢た眞似して、鼾をかく。

景清　あの鼾では、狸ぢやない。寢た間に爰で

阿古　必らず主へは

ト兩人、思ひ入れして、抱きつく。盛久、ズンと起きて、この中へ入る。

盛久　見付けた〳〵。横盤切つた、間男見付けた。

ト立ちかゝる。

景清　アヽコレ、連れの身共が、どうして〳〵。

阿古　イエ、卑怯な。有やうに云うてしまふが、眞實心中。わたしやお前の目を掠め、主と色事いたしやんした。

盛久　それ〳〵、あれ程、女の口からしつかりと

景清　さう云はれて、隱して益なし。いよ〳〵、間男。

盛久　二人並べて女敵は、二つの首を
景清　受取り參れと、君の嚴命。
　トきつと云ふ。
盛久　ヤ、座興にあらぬ景清どの。
阿古　詞するどに、眞顔になつて
景清　二つのその首。
盛久　二つの首とは。
景清　捕はれ人の右兵衛佐、外に隱まふ白峰の內侍、二人の首級受取り參れと、君の命受け
阿古　そんなら、お前は
景清　六波羅よりの
盛久　エ。
景清　上使の景清。上座は御免。
盛久　なんと。
景清　許し召されい。

ト管絃になり、三人、思ひ入れあつて、景清、上座へ通り、床几にかゝる。

盛久　して、御上使の趣きは。

景清　この程、生捕り預け置かるゝ兵衛佐、まつた新院の胤を宿せし白峰の内侍、この家に隱まひ置かるゝ樣子、清盛公のお聞きに達し、兩人の首討ち參れと、嚴命受けたる七郎景清、右二ケ條を御受けあつて、盛久どの、疾く〱用意いたしてよからう。

盛久　すりや、預かりの頼朝どの、首討てよとの御上使とは聞へしが、白峰の内侍の御事は、隱まひ置いたる覺えはござらぬ。

景清　その返答、暗い〱。はや先達て清盛公より、この家へ目をつけ置く樣子。あらがひ召さるゝと、爲になるまい。

盛久　でも、覺えなき内侍の御事。毛頭盛久存ぜぬ。この由、申し上げられてよからう。

トきつと云ふ。奥より海月、笹尾を引立て、ツカ〱と出る。

海月　氣遣ひあるな、景清どの、主の妾と側も離さぬ、腰元笹尾、これぞ違はぬ白峰の内侍。

笹尾　身に覺えなきわたしを捕へ、無體の狼藉なされまするな。

海月　覺えがなくば入道が、用意なしたる月よどみ、おろし藥を飲んで見ろ。

ト薬の包みを差つける。

笹尾　サ、その儀ばかりは。

ト思ひ入れ。盛久、笹尾を圍うて

盛久　すりや、この笹尾を入道どの。

阿古　白峰の内侍と仰しやるか。

海月　なんと違ひはあるまいがな。

景清　笹尾とやらば、たつた今、茶の給仕せし、あの腰元。景清しかと面體まで、合點ゆかずと見覺え置いた。

笹尾　すりや、自らが面體まで。

景清　正しく彼奴と目をつけ置いた。盛久どの、役目の景清、首を討つて渡し召されい。

盛久　サ、それは。

景清　但し、引立て連れ歸らうか。

盛久　サ、それは。

景清　サア。

盛久　サア。
兩人　サア〳〵。
景淸　身共に討たすか。盛久どの。
ト盛久、思ひ入れ。
盛久　包むに詮なき內侍の御事。なにさま拙者、隱まひました。
景淸　さてこそな。
阿古　アヽコレ、今更この儀を
盛久　ハテ、露顯の上は、是非に及ばぬ。
阿古　エヽ、すりやお前は
盛久　討つては不忠。景淸どのへ、白峰の內侍を
景淸　こりや、さうなけりや叶ふまい。其許が、いよ〳〵內侍を
盛久　御首賜はる平家武士。助け申せば不忠となる。
景淸　尤も至極。その忠臣の其許が、黑白は定かならざるが、場所も繁華の五條坂、掛け置く髑髏は爲
義の、獄門かゝりし大門口、憂き恥助け伽羅木か

阿古　無常かあらぬ客人を、送る廓の出口なる、見返り柳、さらば垣、その歸るさにお忘れの、卒塔婆の文字も

ト三建目の仕込みの卒塔婆を出す。

盛久　その暗まぎれ、星あかり、窺ひ寄つて手に入る髑髏。囘向いたさん心底あつて、近寄り見れば、醉ひどれの、客が喧嘩のすつぱ拔き。

景清　その時拾うた白絹は、佛の前でみての糸、それかあらぬか、厨子入りの、閻浮陀金の觀世音。

ト件の二品を見せる。

盛久　すりや、その品がその時の、大小立派の

景清　身共も、それと、心覺えの厨子入りの

阿古　その御佛は

盛久　枯れたる木にも花の咲く、あやめも分かぬ、闇の夜に

景清　菰垂れちぎつて、窺ふ非人。

阿古　廓にありしその折に

盛久　逢ふは別れのはし女郎。



景清　今では武士の奥方と
阿古　乘つて嬉しき玉の輿。
盛久　水の流れと人の身の
景清　昔語りで
三人　あつたなア。
阿古　エ。
景清　サ、昔語りで
　　　　　ト本釣り。
　　あつたなう。
　　　　　トよろしくこなし、時計の七ツを打つ。景清、思ひ入れ。
阿古　ありやもう七ツの
景清　もう、七ツか。
盛久　時計と共に貴公の眼中、何か仔細の
　　　　　ト目を付ける。

景清　鳥眼でござる。

盛久　ヤ。

景清　七ツを打てば忽ちに、兩眼見えぬ拙者は鳥眼。

阿古　その兩眼にて、首討つお役を

盛久　勤め召さるか。

景清　おんでもない事。目ざすは局の

ト白刃を拔いて、笹尾へ切つて行く。盛久、圍ふ。目の見えぬこなしにて、ちよつと立廻つて、白刃をわざと取落し

南無三、白刃を

ト尋ねるこなし。

盛久　卽ち爰に。

ト取上げて、景清の目先へ突き出す。景清、探り寄つて取上げ、鞘も落ちたる體ゆゑ、思ひ入れあつて

景清　思はぬ粗忽。あたりに鞘は。

阿古　その鞘、これに。

ト件の卒塔婆を差出す。景清、見えぬ振りにて、探り寄つて、件の白刃をしやんと納める。盛久、駈け寄つて、卒塔婆をしやんと持ち直させる。兩人、この戒名を見て

盛久　無量院殿希方大德。

笹尾　爲義どのゝ戒名。

阿古　白刃の納まり。

景清　劍は卽ち爲義より、身が拜領の刀ゆゑ、回向の爲に持參の一腰、今となつては忌はしき、この法名も、源氏の枝葉を

ト すらりと拔いて、見事に仕込みの卒塔婆を二つに切り

枯らすは目前

盛久　然らば替鞘。

ト落ちたる鞘を差出す。景清、探り取つて

景清　これにて安堵。

盛久　して、刻限は

景清　夜中の鐘を
盛久　首討つ時刻。
阿古　それまで、あなたは
海月　愚僧がきつと、内侍の張り番。
笹尾　捨つる命は惜しまねど、勿體ないは胎内の
景清　その根を斷つて、葉を枯らす。
盛久　然らば別間へ
景清　盛久どの
盛久　景清どの
阿古　刻限までは
景清　切り柄嵌めて
盛久　ヤ。
景清　用意いたさう。

ト唄になり、景清、鳥眼の振りにて奥へ入る。海月、笹尾を引立て、續いて入る。兩人殘つて、合ひ

方。

阿古　心解けざる景清どの、白峰内侍の御事、源氏ながらも頼朝どの、池殿御前の御内意にて、助けよとの仰せはあれど、あの如く清盛公より、討てよと、使者を。

盛久　役目は景清、鳥眼と申すは、何とも以て。

ト心得ぬ思ひ入れ。管絃になり、小三郎、小四郎、廣蓋へ盛久の羽織を載せ、持ち來り、よき所へ置く。

小三　父上様。

兩人　イザ、お召替へ遊ばされませう。

ト盛久、屈託の思ひ入れ。

阿古　オヽ、よう心が附きやつた。サ、お召替へなされませ。

盛久　アヽ、此まゝでも大事ないが、上下は取つて、羽織を持て〳〵。

ト阿古屋、立ちかゝり、上下を取り、羽織を着せる。

阿古　モシ、盛久どの、御覽の通りの二人の子供、池殿御前の御内意あつては、頼朝どのゝ御首、いかに源家の公達なりとて、御討ちあつては、御内意ありし

盛久　池殿御前のお志し、盛久無下に致すの道理。もしその時は武士の習ひ、品によつては、身替り沙汰も

ト兄弟の子役へ目を付ける。あたりに石竹を描しき衝立、立てゝある。

阿古　其お身替りには、何卒弟を、お役に立てゝ下さりませ。

盛久　イヽヤ、身替りには、我が胤ならねど、もし切る時は兄をお役に、弟は討つまい。

小三　左様でござりまする。私しは、父上の拾ひ子なりと、兼ねてのお話し。さすればわたしを、お切りなされて、母様の産ましやつた、あの小四郎を、どうぞ助けて下さりませ。

小四　イエ〳〵、お役には、わたしを立てゝ下さりませ。

ト阿古屋、これを聞き、思ひ入れあつて

阿古　オヽ、よう云やつた。二人ともに出かしやつた。さりながら、身替りはわたしが産んだ、この弟を切つて下さんせ。いかに拾ひ子ぢやというて、親がどこにどうマア居さんして、もし身替りになりしと云はゞ、蔭ながら、わたしを怨み、なさぬ仲ゆゑ胴慾な、情を知らぬ女ぢやと、いづれでわたしを怨むやら、サ、その程も知れませぬ。こりや、矢ツ張りお前の胤の弟を、お立てなさるるがモシ、それが忠義ぢやござりませぬか。

盛久　すりや、其方は何者とも知れぬ、あの子の親に義理を立て、身が産ませたる弟を、切れと申すか。産み落しより拾ひ取り、この年月育てたこの子、殊に添へある觀世音の尊像、只者の悴でもあるまい。助けたいものなれど、家の世嗣と極めたる上からは、兄を切るのはこれ順道。いづれを切つても、身が武士は立つの道理

阿古　お前の武士は立ちましても、斯様に申す女子のわたしが、どうもあの子の實の親御へ。

盛久　立たぬと申すか。ハテマア、其方は一途に物を

ト思ひ入れ。あたりの衝立の模様を見て

コレ、阿古屋、搗てゝ加へた事ながら、あの石竹と云ふ草、種を伏せるを、そちや存じて居るか。

阿古　ハイ。イエ、存じませぬわいな。

盛久　あの石竹の種は、卽ち金の扇に受け、冴えゆく月に映して播けば、その花至つて見事になる。さすれば扇に受けたばかりで、花が見事になると思ふが、そりや月の光にあふがゆゑに、その花至つて見事なり。サ、爰の道理を考へ見れば

ト思ひ入れ。

阿古　清浄潔白なる月影は上より映る、下に受けたる金の扇は、金は即ち七寶の頭、その結構な内から、その種を下ろすに從ひ、花も見事に咲くと仰しやる、お前の教へ。その詞を聞く上は、猶弟の小四郎を、お役に立てねばなりませぬ。兄の系圖は知れねども、觀音の尊像を、添へてありたるあの子ゆゑ、素性正しき者の子と、お前の推量。わたしは知れた傾城の、賤しい者の播いた種、それぢやに依つて、お役に立てぬと云はしやんすか、こちの人。

　ト キつと云ふ。盛久、思ひ入れあつて

盛久　もうこの上は身が胸中。その心なら云ひ聞かす。誠は其方を疑うて、それゆゑ云つた今の詞。然らば兩人いづれなりと、お役に立てるは神慮に任せ、扇の占かた。

　ト 差して居る扇を取つて、差出し

コリヤ、兄弟の者、身が握つたる扇面の、内の模樣は即ち草花。この繪を兩人判斷せよ。それと極めて指したる悴を、一人お役に立てるであらう。

阿古　すりや、扇面の草花を、それと見極めし子を、お役に立てゝ。

盛久　いかにも。サ、兄弟、この繪は

　ト 小三郎、見て思ひ入れ。

小三　父の所持の草花は、慥かに

阿古　なんと思やる。

小三　水仙でがな、ござりませう。

阿古　して又、弟は、なんと思やる。

小四　あの繪は慥かに、野に咲く薊。

盛久　兄は水仙、弟は薊、いづれ

阿古　それぞと指した扇を

盛久　早う、開いて。

ト盛久、扇を開く。寒菊の模樣。皆々、思ひ入れ。

阿古　ヤ、兄弟ともに相違して、そりや、ソレ、菊の繪模樣が、違へば二人とも、お役に立たぬか、こちの人。

盛久　して、兄弟の二人を除けて

阿古　イヽエ、書面は指さずとも、模樣は卽ち菊なれば、よし違うても弟草、菊一枝の、この子の火急を

盛久　コリヤ。

　　ト思ひ入れ、この時、鳥平、出かゝり窺ふ。

　必らずともに、その時、未練な

阿古　未練があらば、願うてこの子を討たせませうか。

盛久　心底見えた。さりながら、鳥眼と申すもこれ曲事。

阿古　さはさりながら情なき、白峰の内侍の御身替り。

盛久　それぞ、高位の御胤を懐胎。

阿古　お助け申すは

盛久　窃かにこの家を

鳥平　さては、いよ〳〵。

　　ト思はず口走る。

盛久　ヤ。

　　ト振り返る。鳥平、蹲まる。盛久、思ひ入れあつて

阿古　必らずともに。

ト泣く。盛久、思ひ入れあつて

盛久 誰が爲の身なれば、身より惜しむらん。

阿古 果敢なきものは、武士の

盛久 忠と、義理とに

阿古 惜しや莟の

盛久 コレ。

ト制す。

阿古 浮世ぢやなア。

ト唄になり、阿古屋、二人の子供を連れ、奥へ入る。

盛久 新參の下郎。そちや最前より、これに居つたか。

鳥平 イエ／＼、下郎めは大部屋に、朋輩どもと碁の勝負、もし御用もござらうと、それゆゑ只今、へ
イヘイ、罷り出でましたのでごわります。

ト思ひ入れ。盛久、目を付けろ。

盛久 左様か。コリヤ、聞いたであらう。上使の入來、心を付けい。

鳥平　ネイ。

ト思ひ入れ。奥より久賀内、目紙の張りたる碁盤を持ち出て來り

久賀　アノマア、鳥平め、おれ一人部屋に殘して、どこへマア

ト見付けて

イヤア、爰に居たか。コレ、今の勝負を、付けてしまへ〳〵。

鳥平　これはしたり、お旦那のお目通りで、さう云ふな〳〵。

久賀　これはしたり、ネイ〳〵、誤まり奉つてごわります。

ト扣へる。盛久、目を付け

盛久　コリヤ〳〵、今の勝負と申すが、角力の腕押しか、何の勝負ぢや。

久賀　ネイ〳〵、勝負と申しましたは、この者と私しは、碁を打つて居りましたが、私しには及ばぬゆゑ、負け腹を立てゝ、これへ參りましたゆゑ

鳥平　ヤイ〳〵、又しても負け腹〳〵と吐かすが、どうしておのれが、身共に叶ふものか〳〵。

久賀　イヤ〳〵、おれが勝つて見せう。サ、もう一番、勝負だ〳〵。

鳥平　これはしたり、お旦那のお前で聲高に。靜かに致せ〳〵。

盛久　イヤ〳〵、苦しうない〳〵。見受けたところ、どうやら其方は、碁にかけては餘ほど上達と見えるわえ。

鳥平　イエ〳〵〳〵、どう仕りまして〳〵。

盛久　身も、試みの爲に其方と、一度打つて見ようか。相手になれ。

鳥平　それは、有り難い仕合せでござりまするが、恐れ多い旦那のお相手。その儀ばかりは、御容赦下されまして。

盛久　イヤ〳〵、見所ある下郎め。碁の勝負は戰場の駈引き。心見る爲、相手に致してくれう。コリヤ近習の者、碁盤を持て〳〵。

久賀　イエ〳〵、私しどもの打ちまする、碁盤は卽ちこれでござりまする。

ト件の碁盤を差出す。

鳥平　これはしたり、あなた方へ左樣な碁盤が

ト思ひ入れ。

盛久　イヤ、その碁も一入一興。併しながら、碁石がこれには

鳥平　イエ〳〵、よい碁石がござります。旦那樣、この梅花の紅白を幸ひ、碁石とはどうでござりませ

うな。

ト有り合ふ紅白の梅の枝を差出す。盛久、見て

盛久　誠に風流な碁石、花を見立ての紅白は、こりや面白い。

鳥平　旦那様、とてもの事に、何なりと、お賭けなされて下さりませ。

盛久　いかにも賭け碁と致さう。差詰め身共は紅梅を、黒石と准らへて、赤きが勝ちたい。そちや何をかける。

鳥平　へイ、下郎は首かけに仕りませう。

盛久　ム、見事。そちや首を賭けるぢやまで。白梅が勝つ時は

鳥平　頼朝どのを、申し受けたう存じまする。

盛久　ムウ。すりや、其方、勝負に勝たば、我が預かりし公達頼朝の

鳥平　下郎が首に代へまして、あなたのお命、お助け申すが拙者の願ひ。

盛久　承知いたした。下郎が首か、頼朝の命全う。

鳥平　お助け申すは紅白二つの

盛久　碁石は即ち源平両家。

鳥平　この盤面で
盛久　勝負の駈引き。
久賀　助言は奴が
ト鳥平へかゝるを、よろしく立廻り。盛久、紅梅にて受ける。この時、兩人の持ちし紅白の花散る。
手早き立廻りに、二重舞臺へ上がり、碁盤の上へ花落ちかゝる。
鳥平　こりや、旦那樣、碁打ちの前に
盛久　其方が手練の試み致す、碁盤の面。
鳥平　そのお相手に
久賀　この久賀内も
ト鳥平へかゝり、よろしくあつて、盛久、火箸を取つて、瓦燈口の上へ掛けたる額へ打ち付ける。この時、額は落ちて、中より關切手落ちる。鳥平、手早く取つて
鳥平　こりやコレ、諸國の關をたやすく
盛久　通行の切手。
鳥平　公達を誘ひ奉り

久賀　落ち行く道の
盛久　身共が餞別。
鳥平　エヽ、忝ない。
久賀　それを

ト寄るを鳥平、立廻りにて、引き据ゑる。盛久、紅梅の枝を、盤面に打ち付ける。花散る仕掛け。盛久、しやんと座して

盛久　ドリヤ、紅梅で參らうか。

ト思ひ入れ。管絃になり、この見得にて道具廻る。

本舞臺、眞中に九尺の高足、揚げ障子、左右、網代の塀。紅葉の吊り枝、同じく立ち樹、よき所に誂ちへの雲龍を畫いたる衝立、燭臺を照らし、爰に海月、以前の形にて、鉦、撞木を持ち、立ちかゝつて居るを、藻汐、初霜、百萬遍の珠數にて支へゐる。時の鐘、合ひ方にて道具とまる。

ト三人、立廻つて

海月　コリヤ、辨女子ども、なんとするのだ。

藻汐　今日の法事に雇はれし、三衣を着せし御出家どの。

初霜　その身に似合はぬ、血相かへ、奥を目掛けて、何ゆゑお前は

海月　知れた事だワ。元は源氏の法師武者、築島入道海月も、今は平家へ降參して、一つの手柄と思ふうち、今日の上使は七郎景清、慥かに鳥眼と聞いたゆゑ、そこを付け込み、先駈けして、この家に隱まふ白峰の內侍、引摺り出しておれが手柄。邪魔せずと、そこを退きやァがれ。

藻汐　イヽヤ、さう聞いては猶の事、新院樣のお胤を宿せし內侍樣。

初霜　この家の殿樣、隱まひ給ふ上からは、御身に凶事あつてはならぬゆゑ

藻汐　其方を奥へやる事は

海月　ならうがなるまいが、是非ともおれが、ふん縛つて

ト懷中より捕り繩を出す。

兩人　イヽヤ、ならぬぞ。

海月　面倒な、退きやァがれ。

ト兩人を突きのけ奧へ行かうとする立廻りのうち、下座より與吉、以前の形にて出て來り、兩人を圍ひ、海月を見事に投げのけ、キツと思ひ入れ。海月、起き上がつて

アヽ、痛い〳〵。女に似合はぬ、おれをひどい目にあはせたな。イヤア、わりや酒屋の御用。なんでおれを、此やうに。

與吉 投げるめんちや、元市は、これ丁稚が當り前、その坊主に若衆は差合ひだ。色氣を捨てゝ和尚どの、これから仲よく遊びなせえな。

海月 おきやアがれ。丁稚め。邪魔立てすれば、うぬから先へ。

ト捕り繩を出し、與吉にかゝる。立廻りのうち、海月の手を前に縛る、女形見て

兩人 アレ、見やしやんせ、よい氣味ぢやわいな。

海月 思ひがけない、手強い丁稚め。うぬ、喰ひ殺してくれべい。

ト大口を明き、與吉に喰ひ付かうとする。立廻りのうち、與吉の腰に付いたる通ひ帳を、くはえる立廻りに、海月、誤まつて、雲龍の衝立の中へ、首を突込む。與吉、見て

與吉 アレ〳〵、坊主が態を見ろ。猪の熊爪を見るやうだ。

女二 ほんに、こりやをかしいわいな。

與吉 サア〳〵、糸目はおれが持つてやる。お前方はその繩を、手繰つたり〳〵。

女二 合點でござんす。

ト繩を凧の糸の様にして、花道へかゝる。

與吉　ソリヤ、いゝ凧だ。しやくれ〳〵。

ト曲撥に成り、海月、ぐん〳〵唸り、猪の熊凧の思ひ入れ。藻汐、初霜、凧のやうにして、向うへ入る。與吉、こなしあつて、下の方へ入る。揚げ障子の内にて、九ツの時計鳴る。

景清　最早、約束の刻限、上使の身共へ、二人の者を

盛久　判官盛久、疾に用意いたしてござる。

ト管絃になり、障子、あがる。内に景清、上下衣裳、大小にて、肩衣を刎ね、股立ちを取り、上手に盛久、これも上下、衣裳にて股立ちを取り、凜々しく兩人こなしあつて

景清　兼ねて某、演舌の如く、崇徳院の寵愛ありし、白峰の内侍、まつた兵衞佐頼朝は、幼なけれども源家の胤、助け置かれぬ今この時。

盛久　御尤もなる平家の掟。退引きならぬ命の瀬戸と、申し含めし二人の囚人、只今これへ

阿古　畏まりました。

ト管絃生け殺しにて、奥より阿古屋。頼朝筵尾を連れ出て來り、皆々よろしく住ひ

世の盛衰とは申しながら、君は正しく義朝公の御公達、痛はしくは候へども、流離ありし新院の

お胤を宿せし內侍樣、これまでは供なし奉りましてござりまする。とても遁がれ給はぬ御身の成行き。人手にかけんより、私しが御生害お勸め申して

盛久　ヤ。

景清　身替り立てるも得てあるやつ、殊に夜隱に某も、黑白は分らぬ、病の鳥眼。

阿古　そりや、何ゆゑに。

景清　イヤ、その儀は罷り成らぬ。

　　ト思ひ入れ、景清、鳥眼を隱すこなしにて

景清　イヤサ、取り所もない身替りで、この場を濟ますと思ふか。餘人は格別、この景清は、その手は喰はぬ上使の役。それゆゑ身共が手を下ろして

盛久　すりや、貴殿には、身替りにてもあらんかと、思し召しての其お詞。

阿古　疑ひ多きは偏執の元とやら、申すではござりませぬか。

景清　それも承知だ。上使に立つた上からは、古風な似せ物喰はぬやう、底の底まで掘りあばく。左樣の役目承はる某、人に非難を受けやうか。馬鹿な事を。

阿古　さても我強きお上使樣。

ト立ちかゝらうとするを

盛久　コリヤ、御上使へ對し失禮千萬。常は格別、今日一日は景淸どの、淸盛公の御名代、麁忽あつては御兩君の、お爲にならぬ。扣へて居らう。

阿古　して、賴朝公の御身の上は

盛久　是非に及ばぬ、この場の手詰め。

景淸　盛久、打つか。

盛久　おんでもない事。

景淸　すりや、いよ〳〵。

盛久　某が。

ト立ちかゝらうとする。阿古屋、マアと思ひ入れ。

景淸　盛久、お待ちやれ、賴朝どのゝ御首、滅多に討たせる事、罷りならぬ。

盛久　そりや、何ゆゑに、

景淸　サ、その儀は。オヽ、それ〳〵、賴朝公の顔、見知り申さぬ。この公達には遊藝を好み、曲舞の上手と聞き及ぶが、慥かな證據ゆゑ、一指し舞はせ、實否を訊すが、何より近道。

笹尾　佞辯の元には讒ありと、心なきその一言。最後に近き身を以て、何とて舞の一指しが

頼朝　その心配はさる事ながら、頼朝はさもあらず、日頃好める道なれば、いでや最後に名殘りの一曲。

阿古　ハヽア、流石は源家の御公達、悪びれ給はぬ御裝ひ。せめてこの君、御武運ましまさば、斯程源家は衰ふまじに、御父君には別れ給ひ、孤兒となり平家へ捕はれ、かゝる邪慳の憂き思ひ。年頃同じ子を持ちし、その親々の心のうち、身につまされて、お痛はしう存じまするわいなア。

盛久　御上使の手前、取亂してなに吠え面、未練な奴めが。御公達には、名殘りの一曲。

景清　もしや、身替りあらうかと、拔き差しならぬ手詰めの切端。御子息の兩人を、これへ呼び出し召されい。

阿古　何から何まで、拔け目なき、賢こい御上使樣。

ト思ひ入れ。

盛久　ヤア／＼、兄弟の者、鼓をこれへ持參いたせ。

兄弟　畏まつてござります。

ト管絃になる。兄弟の子役、以前の形にて、大小の鼓を持ち出て來り

小三　ハッ、仰せに從ひ兩人の者

小四　鼓を持參いたしましてござります。

阿古　日頃手馴れし其方達二人、賴朝どのゝ舞のお相手。

盛久　景淸どのには舞のうち、いよ〳〵賴朝と見極めなば

景淸　首討つ役はこの景淸、聞き及びたる遊藝の

盛久　舞の一手に實否を試すも

賴朝　これがこの世の舞ひ納め。

盛久　あの世へ急ぐ菩提心、幸ひこれなる百萬遍の珠數にて

賴朝　とく〳〵、討てや、七郎景淸。

ト よき所へ座して思ひ入れ。

景淸　流石はよい覺悟。その一言が未來へ旅立ち。

ト 鳥眼を隱す思ひ入れにて、二重より下りて來る。

皆々　弘誓の船に乘り合ふも

阿古　歸らぬ旅路へ

笹尾　二人一緒に
頼朝　おのれ、清盛。
ト思ひ入れ。
阿古　モシ、必らず麁忽なきやうに
ト兩人を制す。
盛久　兄弟の者、鼓を早く
阿古　上使のお望み。
ト鼓を構へる。
盛久　一指し舞うて、頼朝公
景清　それがこの夜の暇乞ひ。
頼朝　死ぬる命は惜しまねど、跡に殘せし母上樣、別れ果てなん悲しさよ。
ト涙ぐみしが又思ひ入れ、思ひ切つて手を合はす。鳴り物になり、舞にかゝる。
〽南無や志渡寺の、觀音薩埵の力を合せてたびたまへとて、大悲の利劍を額に當て、龍宮の内に、飛び入れば、左右へぱつとぞ、のいたりけり。

ト此うち盛久、額にて敎へる。阿古屋心得、小四郞を連れて、賴朝の扇を取つて渡す。弟の子役、入れ代つて舞ふ。景淸は矢張り賴朝の舞と思うて居る思ひ入れ。盛久、小三郞へ額にて指圖する。小三郞心得て、刀を取つて立ちあがる。此うち舞の鳴り物打ちあげる。景淸こなしあつて

景淸　聞きしにまさる賴朝どのゝ遊藝、慥かに某、見屆け申した。舞が終らば、最早寂滅。

ト小四郞、これを聞いて、よき所へ住ひ、手を合せて思ひ入れ。阿古屋、この體を見て、「コレ」と云はうとするを、盛久、ザツと支へる。小三郞、後へ廻り

小三　南無阿彌陀佛。

ト刀を振りあげる。景淸、ツカ〳〵と寄つて、件の刀を引ツたくり、小三郞が首を、ポンと切り落す、阿古屋この體を見て、ツカ〳〵と走り寄り

阿古　コレ、暫しの猶豫は

ト立ち寄る。笹尾、突き退ける。この立廻りのうち、景淸、阿古屋が首を打ち落す。盛久、ツカ〳〵と寄つて、景淸の手を捕へ、兩人、キツと思ひ入れ、管絃になり、兩人、こなしあつて

盛久　思ひがけない、この有樣。手が廻りしか、御麁相か。御返答が承はりたい。

景淸　今日の上使を承はる某、麁相があつてつまるものか。

盛久　なんと。
景清　新院の胤を宿せし白峰の內侍、源家の公達賴朝どのゝ御首級。
盛久　事をかしきその一言。上使は慥か鳥眼の病。
景清　イヽヤ、身共は鳥眼でござらぬ。目はずんとよつく見えます。なんと、空に數多の星の數、千里一目は明か、鳥眼と云つたは僞りだワ。
盛久　その明かな眼を以て、何ゆゑ二人を
景清　討つたる仔細口外せば、平家へ對し不忠の景清、云はねば阿古屋が操が立たず、がんじがらみのこの一通。
久賀　不忠の景清、うぬを。
　ト久賀內出てかゝるを、景清、ちよつと立廻つて
景清　盛久どの、披見あれとは申さぬが、勝手次第に開封おしやれ。
　ト一封を打ちつける。
盛久　そんなら、これを
　ト取りにかゝる。久賀內、景清を押しのけ、一通へ手をかけ、立廻りのはずみ、件の書面、バラ〳〵

と開く。三人、入れ代つて、景清は久賀内を引敷く。盛久は一通を見て思ひ入れ。竹笛入りたる合ひ方になる。

盛久「殘し置く、死後開封の事。某、十ケ年以前、清盛公の御勘氣を蒙むり、諸々方々、流浪の折柄源平未だ確執とならざる前、或る女との不義、主人に達し、不義法度を破りしゆゑ、兩人ともに覺悟極めしところ、爲義どのゝ情にて、互ひに命助かり、その後女安産なす、取上げ見れば男子にて、男へ付くが順道とて、我れへ付き、暫し流浪の上、水子を養育なし難く、清水坂へ捨て子となす。されども、匹夫下郎の胤と思はれんも殘念に存じ、證據に添へし、閻浮陀金の觀世音。この程不思議にも我が手に入り、よく／＼見候へば、厨子の扉に、盛久敬白と記しあり。さすれば、忰は盛久どの、拾ひあげての御養育と、一つの安堵致し候ふうち、日毎に衰ふ源家の成行き。」

久賀　所を、うぬ。

ト三人ちよつと立廻る。

盛久　頼朝どのゝ首討ち來れと、清盛公の御諚。某わざと上使を乞ひ受け、鳥眼と僞はり來り候ふは、命の恩、爲義公の御孫君を助けん爲、御身代りに立て候ふは、痣丸と申す某が忰に御座候ふ。」

ト此うち景清、ホロリと思ひ入れ。久賀内、起きあがつてかゝるを、ちよつと當てる。

景清　初めて聞きし御身の心底。して、女房阿古屋をば、何ゆゑあつて手にかけられしぞ。

景清　成る程、御不審は御尤も。それなる阿古屋は、身共が妹でござる。

盛久　なんと。

景清　御公達の御身替り、それにて濟めど、白峰の內侍、如何して助け奉らんと、千々に心を碎く折柄、幼なき時熱田の大宮司へ、養女に遣はしたる我が妹、程なく養父の家零落、親を貢ぎの勤め奉公、我れも知らぬは、佛の誓ひ、危ない事で一夜の枕、交さぬうちに、來し方を、明かして見れば兄妹ゆゑ、賤しき流れは身の恥と、包み隱して暮らすうち、貴殿の妻となり、折しも、新院の胤を宿せし內侍の首、討つて來れと主人の上意。雲井に近き御胤を、刃にかけなば、日の御神の御罰を蒙り、平家の滅亡近きにあり。如何はせんと思ひしところ、最前、座興に事寄せて、妹が自筆のこの書面。

ト最前の阿古屋が書いたる文を出し

內侍の御身替りに立てくれよと、我れへ送りし文體は、同じ血筋の心も一致。それゆゑ討ちし二つの首級。如何なればこそ景清は、現在我が子、妹を、手にかけたりし非義非道。鬼よ惡魔と、

悪名を取り、悪七兵衛景清と、やがて謳はれん情なや。義理と忠義は武士の、辨まへあるべき筈ながら、思へば思ひ廻す程、せまじきものは、宮仕へでござる。

ト思ひ入れ。

盛久　天晴れ義心の御計らひ。さりながら、義理ある親子の小三郎、操正しき阿古屋が身の上、まだうら若き蕾の花、思へば不便な。イヤサ、不便ながらも、二つの首にて事落着。然らば貴殿は源家へ心を

景清　穢らはしきその一言。恩は恩、仇は仇。平家の恩顧の侍ひ、この譯云はゞ平家へ不忠。なれども源家へ命の恩、三方四方はこれにて相濟む。

盛久　その貞節はさる事ながら

景清　果てしなき世の

盛久　恩と義理。

景清　これより直ぐに

盛久　御身と

景清　貴殿と

盛久　景清どの。
景清　盛久どの。
盛久　もし似せ首とお咎めあらば
景清　鳥眼の麁相と、切腹いたす。
盛久　案じ極めし
兩人　二つの首級を
ト思ひ入れ。この時、障子の内にて
禪尼　持參に及ばぬ、池の前、それへ行て實檢いたすであらう。
ト誂らへの鳴り物になる。池の御前、尼の姿にて出る。上下より與吉、鳥平、小よしも出て
禪尼　源家の公達頼朝どの、まつた白峰の内侍の御首、池の禪尼、しかと見届けましたぞや。
小與　有り難きその御諚。必らずともに御兩所樣。
笹尾　仁德厚きその詞。
禪尼　頼朝どのにも、今の情を忘却せずば、重盛、永らへあるうちは、必らず共に旗揚げを。
頼朝　仰せにや及ぶべき、恩を知らねば、人面獸心。

禪尼　然らば盛久、景清、二つの首級を、あたりの御寺へ。
景盛　心得ました。
鳥平　始終の様子、あれにて聞く、重々厚き御計らひ、青雲めでたき頼朝公、一先づ、東へ御下向。お供は即ち藤九郎盛長。
與吉　酒屋の御用も居催促、四國へ一先づ内侍様、道の知るべは、澁谷金王丸正俊。
景清　東へ下向の若君へ、この景清が寸志の餞別。
盛久　拙者も君へ、あの一品。
ト景清は、だんまりの白旗、盛久は髑髏を差出すを、頼朝、鳥平取つて
禪尼　首級に一目。
景盛　ハツ。
ト首を舞臺へ向ける。この時、久賀内心付き、窺ひ寄つて
久賀　さてこそ首は。
トかゝらうとするを、與吉、拔討ちに久賀内を、ポンと切る。
皆々　これは。

禪尼　急ふれ、兩人。
景盛　ハツ。

ト思ひ入れ。木の頭。景清、首を見て、ザツと思ひ入れ。鳥平は賴朝、小よしは笹尾へ立ちよる。與吉、刀を拭ふ。禪尼、立ちあがり、兩人を見送る。皆々こなしよろしく、拍子　幕

幕の外、出端の鳴り物になる。兩人、首を引ッ提げ、見事に向うへ振つて入る。知らせの木に付き、シヤギリ。後の方より直ぐにこの幕を引返す。

第二番目序幕　高島屋の場

役名――今市善右衛門。藝者、小勝。八島屋女房、おなみ。築地の善好。高島屋吾助。船橋下部、市助。三勝兄、宵寢の仁介。樂屋番、源兵衛。下女、おひで。道具屋長九郎。藝者、杵屋三勝。鳴尾屋の中働らき、半七。

本舞臺、三間の間、高島屋の見世の體。顏見世の飾り物、軒に吊り提灯、揃ひの暖簾、正面の見つき誂らへの通り。幕の内より、吾助、高島屋の亭主、善右衛門、世話侍ひにて、立ちかゝり居るを、長九

郎、小道具屋の拵らへ。おひで、下女にて挨拶して居る。右のシヤギリにて幕明く。

ひで　マア〳〵、お待ちなされませ〳〵。

善右　イヤ〳〵、是非とも今、呼んでくれ〳〵。

吾助　お客樣の仰しやる事ではござりますが、それは御無理でござります。

善右　イヤ〳〵、是非とも今でなければならぬぞ〳〵。

長九　モシ〳〵、高島屋の親方。一體これは、どう云ふ譯でござります。

吾助　マア、聞いて下さい。このお客さんが、音羽屋の親方に、近附きになりたい、どうぞ呼んでくれと、仰しやりますが

ひで　お前も御存じの通り、まだ梅幸さんは、役がござります。どうぞ打出しまで、お待ちなされませと申したら、是非とも今呼びにやれと、仰しやるゆゑの事でござりますわいなア。

善右　イヤ〳〵、それはおてまへ勝手と申すもの。餘り夜深に相成ると、御門切れになり、身共が役儀にも障る事。是非とも今のうち、會はねばならぬ〳〵。

長九　それは、お前が御無理でござります。

善右　何ゆゑ無理だ。

長九　ハテ、音羽屋は、まだ役がござります。

善右　勤役中、御尤もなれど、幕の間は非番であらう。勤仕いたす身は、誰れしもある事。町人の其方達が存じた事ではない。すッ込んで居らう。

長九　この唐變木め。先刻から挨拶すれば、聞分けのない、二本棒め。

善右　うぬ、二本棒とは身共の事か。もう料簡が

長九　何を此奴が。

吾助　ハテ、お互ひに、御料簡なされませ〱。

ト皆々立ちかゝる。流行り唄になり、向うより善好、いつもの合羽にて、頬冠り、花を持ち、出て來り、この中へ入る。

善好　マア、待ちなさい〱。時に、高島屋の吾助さん、道具屋の長九郎さん、これはどういふ間違ひでござります。

三人　ヤア、お前は善好さん。相變らず合羽だね。

善右　ナニ、善光寺が合羽で來た。怪しからぬ事を申す。其方は何者だ。

善好　ヤア、あなたはお侍ひ樣、御免なされませ。

ト頰冠りを取る。矢張り善好、鯰坊主の顏にて居る。善右衛門、見て

善右　イヤア、坂東善次は、色の出來る役者と聞いたに、達磨に等しきその樣子。ハテ、怪しからぬ面だなア。

善好　私しは、まだ役がござりますが、急に花を一杯、生けてくれろと賴まれたゆゑ、顏も落さず參りました。お侍ひ樣、何かあなたは、御立腹の樣子。マア〳〵、料簡なされませ。

善右　何も立腹いたす事もないが、聞いておくりやれ。この度、某、主人入間家の屋敷にて、歌舞伎を召さるゝ、その奉行役は身共ゆゑ、菊五郎丈に逢うて、一掛合ひ致さねばならぬを、この者どもが、いま菊五郎を呼ぶ事は、ならぬと申すゆゑの事サ。

善好　成る程、音羽屋の親方は、まだ役がござりますが、其やうな御用なら、私しがどうぞして、お引合せ申しませう。

善右　それは忝ない。偏へに貴殿を賴み申す。

吾助　モシ、善好さん。お前、其やうに、呑み込みなんしてもひで まだ役がござりますよ。

善好　ハテ、萬事は私しが、承知でござります。

善助　ときに、旦那、今の事は間違ひに致して、一つ〆めようではござりませぬか。
善右　〆めようとは、何の事だ。
長九　仲直りをする事サ。
善右　ハテ、戰場にも間々ある、敵味方和談を調へる事か。
皆々　左樣でござります。
善右　然らば、この所において
善好　一つ〆めてくれ。
皆々　ヨイ〳〵〳〵。
ト手を打つ。善右衞門も、間抜けに手を打つ。
善右　時に御亭主。この樂達と、一つ飲み交しては、どうだ〳〵。
ひで　よろしうござります。
善右　長九郎とやら、善好も身と一緒に。
善好　有り難うござりますが、私しは一向下戸でござります。
長九　肴でも、荒らしなせえ。

善右 然らば皆の者。

皆々 サア、お出でなされませ。

ト流行り唄になり、奥へ入る。向うよりおなみ、船宿の女房。小勝、藝者。芝居見物の形にて出て來る。跡より半七、鳴尾屋中働らきの拵らへにて、矢車の付いたる衣裳葛籠を肩に引ッかけ、ぶら提灯を提げ、出て來り、

なみ モシ、小勝さん、お前、二番目を見て、歸りなさんしても、大事ないかえ。

小勝 ハイ、三勝さんも、わたしも、どうで歸りは一緒なら、隨分ようございます。高島屋へ行て、帶を締め直して、參らうかいな。

なみ それがようござんせう。

半七 モシ〳〵、お前は八島屋のおなみさんではございませぬか。

なみ お前は、鳴尾屋の若い衆、半七さん。

小勝 モシ、顔見世の評判は、大分ようござんすなア。

半七 左やう、お前方は、見物でございますか。

小勝 モシ〳〵、おなみさん、此お方が噂に聞いた、梅幸半七さんとやらかえ。

なみ　左やうサ、見なさんせ、菊五郎によう似て居やうがな。

半七　なんだえ。わたしが梅幸に似て居るえ。忌々しい役者に似て居るわえ。

ト皆々、舞臺へ來る。下座より小市、肴屋にて、盤臺へ肴を大分入れて來り、半七を見て

小市　オヤ〳〵、鳴尾屋の半七、もう二番目が明くか。

半七　肴屋の市さん、大分お忙がしいね。

小市　お忙がしいぢやァねえ。昨日貴様、どこへか遣ひ物にした鮟鱇の金、三分と四百、今朝程と云つたが、どうしてくれる。

半七　コレサ、市さん、どうしたものだ。人さんも聞いてござる。靜かに云ひなせえ、外聞の悪い。

小市　ナニ、外聞の悪い。畜生め、たほが居ると思つて、めかすな〳〵。そんなら必らず晩に

半七　承知だよ。

小市　オイ、番公さん、追ツかけの肴を爰へ持つて來たよ。又あの畜生め、肴を覗やァがる。畜生め畜生め。

ト云ひながら下座へ入る。奥より與七、高島屋の若い者にて出て來り

與七　これはお二人樣。マアお二階へ。

なみ　今日はお世話でござんすな。半七さん、打出したら一つ飲まうかいな。
半七　そいつは、奇妙だね。
與七　お肴には、贔屓の音羽屋を遣ひませう。

ト何か聲色を使ふ。

半七　イヨ、音羽屋ア。
與七　お履物は私しが

トおなみ、小勝、奥へ入る。與七、履物を上げておく。

半七　半い衆、こりやァ太夫さんの一番目の衣裳、いつもの通り、預けて置くよ。これから二番目の衣裳を持つて行く次手に、音羽屋の親方の平常着が、爰に預かつてあるさうだ。ちよつと出して下つし。
與七　オット合點。呑み込み山猫、寒鳶。

ト奥へ入る。引違へて奥より、長九郎出て來り

長九　そこに居るのは半七どの。好い所で逢ひました。いつぞや見せた、臺頭の香箱、貴様がどこへか賣り口がある。是非外へやつてくれるなと云ふゆゑ、留めては置いたが、その賣り口は、どつち

の方だ。

半七　その賣り口は、私しを御贔屓下されまするお客様。あの香箱をお目にかけたら、どうぞ求めたいとの事。慥か値段は、七十兩でござりました。

長九　さうサ。あの代物は、七十兩では廉いゆゑ、外にも望み手がある。早くしないと、脇へ賣つてしまふぞ。

半七　どうして〳〵、脇へやつてはなりませぬ。今一兩日のところ、どうぞお待ちなされて下さりませ。

トこの時、幕明きの拍子木鳴る。

長九　もう、二番目が明くさうだ。そんなら必らず、間違はぬやうに。ドリヤ、一幕見て來ようか。

ト下座へ入る。半七、思ひ入れあつて

半七　モシ、必らず外へ買はれてはなりませぬ。どうぞ一兩日待つて下さりませ。頼みましたよ〳〵。

ト捨ぜりふ云つて居る。此うち奥より善好、吾助、出て來て

吾助　善好さん。お前も見る通りのお侍ひ衆、わたしも困ります。

善好　おれも今、是非引合せ申しますと、請合つたが、こいつは困るわい。

ト半七を見て、兩人、囁き、思ひ入れあつて

吾助　オイ／＼、半七どの、貴様にちよつと頼みがある。聞いてくれまいか。

半七　わしにお頼みとはえ。

善好　外でもない。貴様、音羽屋になつてくれまいか。

半七　藪から棒に、とんだ事を云つたものだ。どうして其やうな事が

吾助　成る程、尤もだが、一體斯ういふ譯だ。おらが内のお客が、梅幸さんに近付きになりたいと云ふから、まだ役が濟まぬから、參られませぬと云つたら、その客人が大腹立ちよ。

善好　請合つた手前が濟まない。人を助けると思つて、貴様、似て居るこそ幸ひ、音羽屋の親方になり、先で何を云はうが、畏まりました／＼と、云つてさへ居れば事が濟む。コレ、頼むワ／＼。

半七　怪しからぬ事を頼まれるものだ。こればかりは、御免だ／＼。

吾助　向うが國侍ひだから、恰好を見てやらかして下さい。

半七　その侍ひと聞いては、猶の事、御免々々。

兩人　そりや、又なぜ。

半七　何を隱しませう。私しは元武士の果。どのやうな朋輩に、逢はうかも知れませぬ。殊に此やうな形では猶の事。

吾助　オット、身の廻りは、幸ひ梅幸さんの平常着が、内に預かつてある。あれを着て、頼むワ〳〵。

半七　どうあつても、御免々々。

ト三人、せり合つて居る。向うより、源兵衞、樂屋の形にて、提灯を提げ、早足にて出て來り

源兵　このマア、鳴尾屋の若い衆は、二番目が明くと云ふのに、衣裳をどうする。善好さんも久しいものぢや。どこをぶら付いて居るか知らぬ。

ト舞臺へ來て

コレ〳〵、半七どの、衣裳を早く。

半七　オイ〳〵、合點だ〳〵。

ト行きにかゝろを、吾助、善好。半七を留めて

善好　イヤ〳〵、貴樣はやられぬ〳〵。

源兵　善次さん、幕が明きます〳〵。

善好　オイ〳〵、合點ぢや〳〵。

源兵　これサ、半七どの。衣裳を早く〳〵。

半七　合點だ〳〵。

善好　イヤ、貴樣はやられぬ〳〵。

ト吾助、半七を内へ引摺り上げる。

源兵　幕が明く。衣裳を早く、善次さん、早くござれ〳〵。

トてんつゝ、雪おろし、皆々、捨ぜりふにて、源兵衞、善好を引ッ張つて、下座へ入る。吾助、半七を引ッ張つて、奥へ入る。向うより中間一人、箱提灯を持ち、跡より市助、紺の看板、中間の拵らへにて、風呂敷包みを持つて出て來り

市助　コレ〳〵、高島屋とやらいふ茶屋は、どれだ。

ト兩人、舞臺へ來て

中間　慥か、向うに見えるは、高島屋だ。

市助　お歸り時分と思ひ、お迎ひに來たが、まだ打出す景色は見えぬわえ。

中間　其うち、おらア飾り物でも見て來べい。

ト中間、下座へ入る

市助　流石は芝居町、ハテ、賑やかな事だな。

トあたりを見廻し居る。この時下座より仁介、絆纒一枚、頰冠りして、うそ〳〵しながら出て來り、

市助の持つて居る、風呂敷包みを引ッたくり、一散に向うへ入る。市助、愕りして

市助　泥坊々々。

ト曲撥になり、跡追ひ駈け、向うへ入る。右の鳴り物にて、この道具ぶん廻はす。

本舞臺、三間の間、平舞臺。向う腰障子、上の方、一間の床の間。下手、折り廻し、障子の明立て。この前、よき所に梯子の上り口を見せ、菊燈の燭臺、屏風を立て、この脇に三勝、癪の差込みし思ひ入れ。おなみ、小勝、おひで、與七、善右衛門も立ちかゝり、介抱して居る。高島屋、二階の體、合ひ方にて道具とまる。

與七　コレ〳〵、癪ならわたしが、押してあげませう。

なみ　あまり其やうにすると、却つて悪い。靜かにしなさんせ〳〵。

小勝　三勝さんの癪なら、わたしがよう存じて居りまする。

ひで　お前、よいやうに介抱して下さんせ。わたし等は勝手が知れぬわいな。

善右　委細構はず、押してやれ〳〵。

ト立ち上がらうとする。

三勝　イエ、構うて下さんすな。どうやら落ちつきさうぢやわいな。

善右　其やうに、輕はづみは致さぬもの。爰に好い藥がある。一口服みや〳〵。

ト藥を出してやる。

皆々　サア〳〵、お藥を服みなさんせ〳〵。

三勝　わたしや、お前の藥は否ぢやわいな。

善右　藥が否なら、鍼でもするがよい。醫者どのを呼びに遣はしてくれ〳〵。

與七　畏まりました。

善右　コレ、差込む所は、爰か〳〵。

ト三勝を抱きしめる。

三勝　エヽ、アタしつこい。構うて下さんすな。

善右　アレ、あのやうな事を申す。これも矢ツ張り、癪が云はする事。冷えては惡い、身共がよう押してくれう。

三勝　アレ、まだかいな。わたしが癪は、お前のやうな人は、きつい嫌ひ。わたしや下へ行くわいな。

ト善右衛門を突き飛ばし、ツイと梯子の下へ下りる。皆々見て

皆々 それでは惡い。マア、待ちなさんせ。
　　ト この人數も下りて行く。善右衞門殘り
善右 コレ、三勝、待つてくれ〳〵。ハテ、癪といふものは、氣の强いもの。
　　ト 下を見て居る。梯子より吾助、上がつて來て
吾助 モシ〳〵、旦那、尾上菊五郎、やう〳〵の事で、連れて參じました。
善右 菊五郎先生、御入來あらば、早くこれへ、伴うてくりやれ。
吾助 おひでや〳〵。親方を早くお連れ申しな。
ひで サア〳〵、親方、斯うお出でなされませい。
　　ト 合ひ方になり、下よりおひで、先に、半七、黑羽二重、定紋付きの羽織衣裳にて出て來り
善右 尾上先生、御遠慮なく、ズツとこれへ〳〵。
半七 ハイ〳〵、御免なされませ。この半七に御用とは。
吾助 ア丶、それではない〳〵。
　　ト 思ひ入れ。半七、呑み込み、側へ行き、手を突き
半七 成る程〳〵、私しは尾上菊五郎と申す不調法者、あなた樣、初めてお目にかゝります。この上な

がら、御贔屓の程、お願ひ申し上げます。
善右 成る程、聞き及び申した、菊五郎先生、お役柄は色事師と承る。ア丶、御健かな。サ丶、お手上げられい〳〵。其許には初めて對面仕る。拙者事は、入間家の家中において、八百石を頂戴いたす、軍學兵法の師範、今市善右衛門と申す者。以後は御別懇に賴み存ずる。
半七 ナニ、鼈甲を賴む。そりや小間物屋がようござります。
吾助 ア丶コレ、そこをうまく、賴む〳〵。
半七 して、私しへのお賴みとは。
善右 折入つてお賴み申したい事がござる。御亭主、內々申し談ずる儀もござれば、暫らくこの座を
吾助 畏まりました。おひでも下へ。
ひで サア、お出でなされませ。
ト吾助おひで下へ下りる。あと合ひ方になる。
善右 邪魔は拂うた。サ丶、近う〳〵。
半七 左樣なら、御免下さりませ。して、私しにお話しとは。
善右 外の儀ではござらぬ。御傳授が受けたい。

半七　傳授とは、何を傳授でござります。

ト半七、恟りして

善右　成る程、一通りお聞きなされては、驚ろきも御尤も。何を隠しませう。拙者めは、未だ女の肌を存じませぬ。それゆゑ、色の道修行の爲、女郎を求めに參れば、振られてばかり居ります。承れば、おてまへ樣の御業體は、色事師と聞き及ぶ。それゆゑ色事の傳授を、受けたいと申す儀でござります。

半七　なんのお話しかと存じましたら、怪しからぬお侍ひ樣、どう致して私しが左樣な事を

善右　イヤ〳〵、おてまへ樣を、見かけてお頼み申す。是非とも御傳授を

半七　これは又迷惑な。色事や、女郎買ひの勝負は、外にむづかしい事はござりませぬ。あなたのやうなお侍ひがござつても、第一、女郎の前で、氣障と癪は云はぬがよしサ。面白くおかしく、座敷の組みやう。あちらへとなつた時は　先づ羽織上着を斯う脱いで

ト側にある屏風へ掛ける。下着になり、帶をちよつと締め

さて、此やうな形で、床の上へと云ふ所なれども、爰は物堅い芝居茶屋、女郎屋ではなし、二階に夜具もなし、なんぞ床に准らへる物が。

ト毛氈と花莫蓙を見て、床のやうに敷きながら

女郎屋ならば、斯様に致し、床の上へ上がつて居る。小ぢよくが、茶と莨盆を持つて參ります。一服のんで居りまするを、廊下で上草履の音が、障子を探り明けて、女郎が來る。爰らで、えて修行の足りぬ者は、狸を致しますてな。

善右　イヤア、其やうな所へも、狸めが出るかな。

半七　イエサ、狸と申すは、空寢入りの事でござります。その狸寢入りは、せぬがようござります。矢張り野暮に起きて居て、いつ女郎が來やうとも、眞面目で起きて居る時は、否でも實にほだされれば、おつりきな話し合ひになるものサ。

トこの時、三勝、以前の形にて出て來り

三勝　お前さん方は、何をなされます。みだらな事な、法度嚴しい芝居の茶屋。其やうな事をなされましたら、アノ吾助さんが

半七　ハテ、それは承知ぢやが、旦那のお賴みゆゑ、女郎買ひの仕方話しサ。

三勝　左樣かえ。そんならわたしも、話しの相槌。マア、わたしを、女郎衆にして見やうなら、初會や裏までは、一通りで居ても、實と實とが行き合うた時は、莨の火をしをにして、眞の話しがした

いゆゑ、行燈を屏風で隠し、オヤ、まだ起きてお出でか。嬉しいなう。

ト茣蓙の上へ上がる。善右衛門、見て

善右　ハヽア、成る程、實と情で、敵に降參させるとは、軍術に餘り違ひない。して〳〵、その後は。

三勝　座敷の内は、人目があらば、顔もろく〳〵に見られず、床へ上がれば行燈は暗し。モシエ、一服おあがり。

ト吸ひ付けて出す。半七、取つて

半七　すぱり〳〵と、莨のあかりで、見合す顔と顔。

善右　ハヽア、闇を照らすは、忍びの松明、これも軍術に用ゆる品だ。

三勝　今夜は大分寒い。もつと此方へお寄り。

ト兩人、毛氈を引ッかける。善右衛門見て

善右　ハア、鎧を取つて、肩に引ッかけるとは、爰だな。

半七　これ見や、おれが手は、金ッ氷のやうだ。ちつと暖めて下つし。

三勝　アレ、惡い事を。

半七　と云ふより早く、片足を向うへ、斯う。

ト兩人、引寄せ、思ひ入れ。善右衛門、恟りして

善右　これはどうだ〳〵。もうよい、傳授は慥かに承知いたした。

三勝　イエ〳〵、これから後が肝心ぢやわいなア。

善右　それから先を見物いたすと、下拙、逆上せて、目を廻す。もうよい〳〵。

半七　ハテ、色事の傳授は、爰らが丁度中許し、これから極意奥儀の段。

善右　ヤア〳〵、それでは、どうやら芝居の狂言は、矢張りおれは友藏の役廻り。こりやモウ、堪へられぬ。

ト毛氈の中へ入らうとする。下より、吾助出て

吾助　モシ〳〵、急用でござります〳〵。

善右　アレ〳〵、毛氈が、

吾助　急な御用でござります〳〵。

ト善右衛門を無理に連れて下へ下りる。兩人、思ひ入れ。

三勝　思ひがけない、半七さん。

半七　待てば甘露の日和とやら。

三勝　願うてもない、今日の上首尾。
半七　併し、芝居は打出しか。
三勝　まだ、よいわいな。
半七　まゝよ、ぶん流せ。
　ト兩人、屛風を引廻す。この時、下にて
市助　泥坊々々。
　トばた〳〵になり、下より仁介、以前の形にて、最前の包みを持つて出る。跡より市助、追ひ駈け來
　るゆゑ、仁介、是非なく屛風の内へ入る。これにて半七、三勝、愕りして起きあがる。市助、屛風へ
　かゝる。此どさくさに仁介、頰冠りを取る。三勝、顏見合す。
仁介　ヤ、わりやア
三勝　ア、モシ。
　ト顏を外ける。市助も半七を見て
市助　ヤ、其方は。
　ト思ひ入れ。仁介、ギヨツとして、包みを落す。半七、屛風を向うへ突き倒す。

半七　とんだ交ぜッけえしだ。

ト灯を吹き消す。三勝、半七に抱き付く。仁介、絆纏をすつぽり冠ろ。市助、今の包みを尋れる。四人、この仕組みよろしく、ひやうし

幕

第二番目大切

八島屋の場
鳴尾屋の場

役名――船橋の下部、市助。鳴尾屋巴丈。三勝兄、宵寝の仁介。お針、おとみ。八島屋船頭、金八。高島屋吾助。美濃屋仁右衛門。大丸若い者、勇助。樂屋番、源兵衛。かけ屋手代、友助。肴屋、小市。作者、龜屋馬朝。道具屋、長九郎。松本染五郎。岩井喜代太郎。八島屋女房、おなみ。高島屋下女、おひで。藝者、小勝。今市善右衛門。船橋平左衛門。藝者、杵屋三勝。鳴尾屋中働らき、半七。

本舞臺、三間の間、二階造りの船宿。見世のかゝり。門口に八島屋といふ掛け行燈、屋根船、猪牙、荷足と記したる油障子。外は板塀、忍び返し。殘らず雪つもりし體。雪ころがし、門口にある。爰に

善右衞門、件の侍ひ客。小勝、江戸藝者。長九郎、道具屋。おなみ、船宿女房の拵らへ。おひで下女、杯、三つ物、吸ひ物など取散らし、佃騒ぎにて、皆々、拳を打ち、洒落の模様よろしく、この見得にて幕明く。

ト向うより吾助、半合羽、下駄、高島屋の傘さし、跡より小市、肴屋の形にて、傘、下駄にて、提げ籠に大きなる鮟鱇を入れ、下げて出て來り、直ぐに門口へ來り

吾助　旦那は此方にお出でかな。

ト入る。皆々見て

ひで　モシ、わたしの内の旦那が、見えましたわいなア。

小勝　これは高島屋の吾助さん。

なみ　このマア雪に、ようお出でなさんしたな。

吾助　雪が降らうが、槍が降らうが、金儲けの筋なれば、天竺までも行くわな。

長九　お前は、さういふ氣輕サ。雪には雪柱が立つものだが、高島屋さんには、慾柱が素敵に立つた。

吾助　アヽ、道具屋の長九さん、また妬みを云ふの。さう惡く云ふと、この中の青磁の火鉢、ありやア斷わつて當てるよ。

長九　アヽ、そいつは御免だ。
善右　アヽ、五スが見えた。五スかく。
長九　イヽエ、青磁の火鉢でござります。
善右　これはしたり、吾助かといふ事ぢや。
長九　エヽ、左樣サ。青磁と五スの間違ひ。
吾助　青磁に吾助、お茶でもあがれ。
なみ　モシ、高島屋さん。昔流行つた洒落だねえ。
小勝　モシ、お前、あの笠森のおせんといつた女と、昔ほんに色事かえ。
吾助　よしねえな。年が知れるわな。併し、昔の色男は、何年經つても流行るねえ。どうだ、雪見にでも行きやせうか。
ト小勝へじやれかゝる。
小勝　嬉しいね。
ひで　旦那さん、お前、お內は取込んでございませうに、よくお出でなされた。
吾助　內は大客サ。なんぼ取込んでも、お屋敷の御用ゆゑ、おれが來ねばならぬ。

小市　コレ、おひでどん。鮟鱇は軒へでも吊るさうか。
ひで　さうして置きなさんせ。
小市　先づ爰らへ掛けませう。
　ト軒下よき所へ、鮟鱇を掛ける。
長九　イヤア、素敵な鮟鱇だの。
吾助　今日は河岸にも、この位な鮟鱇は切れ物サ。
善右　時に、高島、身共に用で參つたか。
吾助　ハイ〳〵、お屋敷行きのお番付が出來ましたから、持參いたしました。殊に今日は、大雪の事なり、旦那へ何がなと、鮟鱇を獻じまする。
善右　それは一段、忝ないく〳〵。身共も今朝これへ參り、藝者どもを召し具して、雪見と存じたが、貴公の仕出しを食べて、いかう酩酊いたしたれば、もうこの内に、討死ぢや〳〵。
吾助　ハヽヽヽ、時にお番付は、この通りでござります。
　ト奉書へ横綴じに書きし、役者の顏付けを、善右衛門に渡す。開き見て
善右　何ぢや、役者連中の番付か。ドレ〳〵。アヽ、尾上菊五郎、關三十郎、嵐冠十郎、中村大吉、市

吾助　川門之助、尾上民藏、これは聞かぬ名ぢやな。
善右　ハイ、これは今度下りでござります。
吾助　左樣か。コレ、アノ、淺尾友藏な。あの和郞も參るか。
善右　ハイ、一座殘らず上がりまする。
吾助　左樣か〳〵。イヤモウ、身共はアノ淺友めが至つて贔屓ぢやて。あの者がこの間、惡右衞門になつて、狐どもに誑らかされて、頭を剃りこぼされ居つたが、イヤ、阿房な奴めぢや。コリヤコリヤ、五ス〳〵、狂言は古手屋八郞兵衞がお好みぢや。よいか、仕つるか。
善右　ヘイ、その儀は承知でござりまする。
吾助　身共は存ぜぬが、奥向きでは、至つて古手屋が好きぢやて。
善右　隨分申し付けまする。左樣なら、私しは、もうお暇申しませう。
吾助　もう、歸りやるか。番付は身共、慥かに預かり置きませう。
善右　へイ〳〵、よろしうお願ひ申しまする。
吾助　ひで旦那さん、わたしも一緒に參りませう。おかみさん、おやかましうござりました。小勝さん、おゆるりと。

なみ　アイ〳〵、お歸りかえ。

小市　モシ、わたしは殘つて、料つて參りませうか。

吾助　さうして下さい〳〵。私しはお暇申さう。

小勝　ようお出でなされました。モシ〳〵、お杖はいりませぬかえ。

吾助　杖どころか、毎晩、コレ。

ト指を二本出して見せる。皆々笑ひ、流行り唄になる。吾助、おひで、下駄傘にて、向うへ入る。

長九　旦那、ちとお話しがござりまする。二階へ參りませうか。

善右　アヽ、左樣か。然らば二階を借り受けて

ト立たうとする。

なみ　アヽモシ、御用があらば、私しどもが參りまする。サ、小勝さん、二階へお出で。

小勝　さうしやんせう。ハイ、旦那、長九郎さん、これに。

善右　これサ、直ぐに濟む用ぢや。直ぐに參りませうぞ。

なみ　アイ〳〵。

小市　ドリヤ、私しも參りませう。

ト流行り唄になり、皆々奥へ入る。兩人殘り、長九郎、箱入りの香箱を出し

長九　モシ、旦那。この間からお賴みの、臺頭の香箱、賣れ口が出來ました。

善右　それは耳寄り。して、値段は如何程、買はうと申すは、武家か町人か。

長九　その好み手は、お屋敷でござります。里見の御家中、船橋平左衞門さまと申すお方が、求めようと仰しやつて、値段も七十兩ならばとの事、その位でよろしくば、只今賣れまするて。

善右　ナニ、七十兩に買はうと申すか。アノ里見の家中か。

長九　左樣でござります。卽ち今日私しが、爰の内へ參つた事をお聞きなされて、七十兩御持參なされて、御相談にお出でなされまする筈でござりまする。

善右　それは幸ひぢや。てまへも知る通り、美濃屋の三勝が親方、何分今日身請けなされて、早速その金子を、お願ひ申しまするると、身共に付いて參つて、爰の勝手に、返事を待つて居る。身代は六十兩、香箱は七十兩、十兩の殘りがあらば、そりや面白い相談ぢや。

長九　御承知なれば、直ぐに金は受取りまするが、モシ、旦那、出所は慥かでござりまするか。

善右　隨分慥かぢや。併し、少しの疵は、盜み物ぢやて。

長九　エ、ナニ盜み物。イヤ、ハヽヽヽ。ナニそれが慥かな物で。イヤ、とんだ事を仰しやる。

善右　イヤ〳〵〳〵、驚ろく事はない。身が存じた者に、仁介と申す奴があるぢや。彼奴少々手が長いゆゑ、其奴が持つて參つて、どうぞお買ひ下されと、賴むに依つて、僅かな金子で、求めて置いたぢや。然るに、彼の三勝が身請けぢや。どうも香箱は出し憎い品ぢやが、そこは寶は身の幸ひとやら、貴公を賴み、拂うてもらふが、それにしても、彼奴が親方にも、一應申し聞かさうて。

長九　左樣なされませ。モシ、旦那、慥かでござりますかえ。

善右　ハテ、慥か〳〵。コリヤ、美濃屋の亭主、ちよつと逢ひたい〳〵。

仁右　ハイ〳〵。お呼びなされまするか。

ト合ひ方になり、奧より出て來り

旦那樣、私しがお願ひが、叶ひさうでござりまするかな。

善右　オヽ、叶ふ〳〵。隨分金も遣はす、晩方までには。

仁右　エ、晩方までには、出來まするか。

善右　コリヤ、長九郎、てまへも話して落ちつかせてくれい。

長九　畏まりました。コレ、美濃屋の親方、マア、斯ういふ話しだ。旦那の方に、七十兩になる香箱を御所持なされて、どうぞ外へ賣り口を聞いてくれとのお賴み。そこは又商賣柄ゆゑ、この長九郎

が、さるお屋敷へ賣る筈に相談を極め、今日中には金を持つて、先のお屋敷から、爰まで來る筈

サ。お前もそれまで、待つて上げさつしやい。

仁右　ハイ〳〵、さう物が解りますれば、隨分お待ち申しまする。必らず今日中に。

長九　そりやア、この長九郎が、間違はせはしませぬよ。

仁右　ハイ、それで落ちつきました。

ト流行り唄になり、捨ぜりふにて、善右衞門、仁右衞門へ酒を飲ませる事。長九郎、取持つ思ひ入れ。この唄にて、向うより平左衞門、袴羽織、大小にて、長合羽を着たる形にて、爪掛けの下駄、蛇の目の傘にて出る。跡より市助、中間笠、赤合羽にて、供をして出て來り、見世の行燈を見て

平左　コリヤ、市助、八島屋と申すは、これであらうな。

市助　左樣でござりませう。私しが承つて見ませう。

ト門口へ差寄り

頼まう。八島屋と申す船宿はこれかな。

長九　ハイ、これでござりまするが

ト市助を見て

モシ〱、お前は船橋さまの御家來衆ではござらぬか。
市助　左やう。さう仰しやるは、道具屋の長九郎どのか。
長九　モシ〱、旦那はお出でなされたか。
市助　お供いたして。モシ、旦那様、卽ち長九郎どのが居られますると。
平左　左樣か、それは幸ひ、許さつしやりませ。
ト入る。
長九　これは〱、平左衞門さま、お寒いに、よう入らせられました。御家來衆、入らつしやりませ。
市助　ハイ〱。
善右　イヤ、長九郎、お前が申した船橋氏とは、あなたの事か。
長九　ハイ〱、卽ちお買ひなされたいと仰しやるは、この方でござります。
善右　これは〱、ようこそ御入來。下拙は今市善右衞門と申す者。初めまして御意得ましてござる。
平左　これは御挨拶。拙者事は船橋平左衞門めでござる。これなる長九郎方より、委細具さに承り、承知仕つてござります。それゆゑ今日貴公樣とも、お知る人にも罷り成り、件の品、お拂ひ下さらば、御相談も仕らうと、わざ〱、參上仕つてござる。

善右　ようこそ〳〵。して、件の品は、御覧なされましたか。
平左　左様でござります。この間、とくと拝見仕つてござる。
長九　即ち香箱は私しが、お預かり申して居りまするて。
ト蓋を明けて見せる。これにて市助、ちよつと思ひ入れ。
平左　その金子の儀は、七十兩と承つたが、いよ〳〵左様かな。
善右　成る程、その通りでござるて。
平左　然らば今日、早速取極め致しませうが、コレ、長九郎どの、この内へ其許を尋ね、かけ屋の手代は參りは致さぬか。
長九　イエ〳〵。まだ見えられませぬ。
ト思ひ入れ。
平左　ハテサテ、それは何を致して居るやら。
善右　これはしたり、長九郎、あなたを二階へお連れ申して、御酒一献お進め申して。
ト思ひ入れ。長九郎、呑み込み、こなしある。
平左　イヤ〳〵、お構ひ下さるな。それに致しても、かけ屋の手代が見えさうなものぢやが

ト思ひ入れ。流行り唄になり、友助、半合羽、ぱつち、町人の形にて、南鐐七十兩を木綿の財布へ入れ、肩にかけて、下駄傘にて出て來り、市助を見て

友助　オヽ、市助どの、爰に旦那はお出でなされたか。

市助　イヤモウ、疾にお出でなされてぢや。

友助　これはしたり。

ト内へ入る。平左衞門を見て

船橋さま、お早う入らつしやりました。大きに遲なはりました。御免なされませ〳〵。

平左　イヤモウ、先程より、其方の參るを、待ち兼ねて居つた。何を致して居つたぞ。

友助　ハイ〳〵、折惡しく今日有り合せましたるは、皆封金でござります〻。端になりましたる小判が揃ひませぬゆゑ、歸りまする金子を待ちましたが、餘り遲なはりませうと存じ、早速南鐐で、持參いたしました。取替へて差上げませうが、只今の所は、どうぞお間に合せなされまして。

ト南鐐を七十兩分、よき所へ出す。平左衞門、見て

平左　それは、七十兩を南鐐では、懷中も出來ず、難儀なものぢや。ハテ、それは持ち憎うて

ト迷惑の思ひ入れ。

善右　イヤ〳〵、その儀は、いづれにてもようござる。拂ひまする道具の儀につき、追ッ付け御挨拶仕る。その上取引いたすでござらう。暫らくの間は酒なりと參つて、お待ち下されいサ。

平左　苦しうござらぬ。お待ち申しませうて。

善右　左樣ござらば。コレ〳〵、小勝々々。

小勝　アイ〳〵。

ト奥より出て來る。

善右　コレ〳〵、あなたを二階へ御案内申して、御酒一獻お進め申してくりやれ。

小勝　アイ〳〵。サ、あなた、お出でなされませ。

平左　イヤ〳〵、お構ひ下されな〳〵。コリヤ〳〵、市助。

市助　ヘイ〳〵。

ト内へ入る。

平左　コリヤ、其方はこの金子、南鐐にて七十兩、風呂敷になりと、コレ、しつかりと懷中いたして居れ。

市助　ヘイ〳〵、七十兩ござりますか。

平左　左やう〳〵。

市助　これは、しつかりでござります。

ト風呂敷を出し、件の銀を包み、懐へ入れて、キツと腹へ巻く。

友助　左様なら、お渡し申しました。

平左　大儀々々。コレ、明日にも取替へてもらはずばなるまい。

友助　随分、承知いたして居ります。

善右　然らば、此方よりお知らせ申さう。

平左　コリヤ〳〵、市助、其方は御勝手を借り受け、相待ち居れ。

市助　へイ〳〵、畏まりました。

平左　左様なら、御挨拶を相待ちませう。

善右　承知仕つた。

長九　平左衛門さま。

小勝　あなた、斯うお出でなされませ。

ト唄になり、友助、向うへ入る。小勝、案内して奥へ、市助重たげに、同じく入る。善右衛門、仁右

衞門、長九郎殘る。

長九　モシ、旦那、先づ金は出來ました。これにつけてもこの品を、彼の奴が可愛がる半七めが、欲しがつて、賣るなら買はうと、度々頼んだが、なんだか彼奴も、合點のゆかぬ奴でござります。

善右　あのマア態で、金が出來るか。

長九　どうして、云はゞ彼奴も彌次馬サ。

善右　時に仁右衞門。今聞く通り、金子の手に入る手蔓が出來たが、あの三勝の身代は。

仁右　六十兩で、隨分お渡し申しませうが、兄の判が据つてあれば、その兄も呼びに遣はしませう。それに致しても、三勝にもこの事を

長九　船頭の金八より、こなたの許へ、疾に迎ひに。

仁右　そんなら、道が違ひましたか。それでは幸ひ、此方の内をお借り申して、何かの譯を

善右　して、長九郎、おぬしの作の

長九　その目論見は、船頭の金八にとつくり

善右　呑み込ませたか。

長九　大方首尾よく

善右 三勝を

ト思ひ入れ。善右衛門心付き、脇へ散らして

仁右 ヱ。

善右 彼奴が來るまで

長九 あの、鮟鱇で

善右 ほんに、こりや一段ぢや。

ト流行り唄になり、善右衛門、香箱を持ち、長九郎、仁右衛門付いて奥へ入る。この唄を借り、向うより、四つ手駕籠を擔つぎ、駕籠舁き、急ぎ出て來る。跡より金八、船頭の拵らへにて、下駄の鼻緒の切れたるを持ち、尾花屋の番傘にて、息せきと出て來て、門口へ駕籠を下ろし、駕籠舁き、汗を拭いて

駕舁 棒組や、この雪に大汗になつたぞ。

同 淺草の仲町から、誠に駈けつめた。

金八 イヤ、又お前方が汗になる筈だ。べら坊に急いだの。こんな時には船頭は、河童が山へ上がつたやうだ。

駕舁　エヽ、合羽も山へ上がりますかえ。

金八　また人ぢらしな。ハヽヽ。コレ、お前方は、裏口から行つて、一杯やりねえ。

駕舁　そりやア有り難うござりやす。サ、來さつし。

ト門口の脇より、二人は入る。金八、駕籠へ寄つて

金八　モシ、三勝さん。寒かつたらうね。

ト垂れを上げる。合ひ方になり、三勝、町藝者にて出て、内へ入る。

三勝　あの駕籠の衆は、早う來たぢやござんせぬか。金八どん、駈けたらうね。

金八　見なさい。下駄の鼻緒を踏み切りやした。裸足で駈けたが、足の裏が厚くなつた。

三勝　また善右衛門さんの、例の性急と、わたしや急いで來る氣でも、お前が頼んだ長い文を、心急くのを、長い〳〵と、あれだけ遲れたわいな。

金八　そりやァわたしも金八だ。一生恩に着やすわな。お前を爰の内へ連れて來て、書いてもらふもいいが、ひよつと内の小指が見ては、大變だと思ふから、幸ひお前の内で、書いてもらつた、あの文は、三勝さん、必らず沙汰なしよ。

三勝　して、お前の色は、藝者衆のかみさんか。

金八　聞いてくれなさい。この裏の鍼醫の下馬よ。おつりきな年増だから、ちよつと當つたら、今ぢや逃げてくれろと云つて、この頃は剛氣に逆上せたね。そこで、今夜、其奴と話す積りサ。知りなさる通り、わたしは無筆だから、そこでお前に頼み申した。

三勝　折角頼んだが、男の文の文言は、どうも書けぬから、女の文のやうであらうが、これでもいゝかえ。

ト懐より文を出す。

金八　ハテ、どうでもいゝわな。有やうはね、あの善右衛門さんが來ては、今夜は夜も更けやうし、また芝居が打出すと、押しかけがありやす。そこで内はごたつき勝ちサ。そこへ付け込んで、その嚊アを、今夜二階から引摺り込むのよ。

三勝　かみさんが、屋根傳ひに來なさんすかえ。

金八　エヽ、來る段か、お前、瓦師の娘だから、屋根へ上がると、誠に鳶のやうサ。モシ、お前、ちよつと讀んで聞かせなさい。

三勝　これでよいか、聞きなさんせ。

金八　有り難いね。

ト三勝、文を開く。金八、嬉しさうに、奥へ思ひ入れ。

三勝 「文して申し上げりやう、この程は、ようぞや／＼度々お尋ね下され、山々御嬉しく存じりやうところ、折悪しくお目もじも致し申さず、只々本意なう存じ居りりやう」

金八 いゝね／＼。その通りサ。モシ、本意なうとは、何の事だえ。

三勝 本意なうとは 逢はないから、残り多いといふ事サ。

金八 さうかえ。すつぱりその通り、素敵に本意なうサ。後わえ。

三勝 「左様に候へば、夕もじは客人も多く、取込みの事御座候うて、幸ひと存じ候ふまゝ、何卒二階より忍び、どうぞ來ておくれ、內は混雜ゆゑ、氣の付く事もあるまじくと存じりやう。お目もじの節、申し上げたき事、やま／＼御座候へども、何卒々々、人知れずお出で願ひ上げりやう。めでたくかしく。」コレ、聞きなさんせ、どうしても、これでは女の文言だわな。

金八 ハテ、そりやお前、わしが無筆の事は、向うも知つて居るわな。

三勝 そりやアよいがお前、宛名は何と書くえ。

金八 宛名かえ、そりやア何とも。女はお七と云ひやす。ちよつと書いてくんなさいな。

ト掛け硯を持つて來る。

三勝　お七さんとかえ。とんだ本郷だの。

ト上書きを書いて

お前の名を金八と書くのかえ。色氣がねえの。

金八　わしも、さう思ふ。そこはお前、いゝやうに書いてくんなさい。

三勝　承知しやした。

ト名を書き入れる。

宛名は七さま參る、きんより、これでよからうわな。

金八　いゝ段か。これで極まりやした。併し、沙汰なしよ。

三勝　禮があらうの。

金八　ある段か、お禮には、京橋の顏の藥を上げやす。

三勝　あの善好の見世かえ。

金八　さうサ、あの藥は素敵に利きやす。わしは毎日顏へ塗るが、見なさい、白くなつたらう。顏のきめは誠によくなるの。白くなる代りには、少し顏が長くなる。どうでもこいつは、夕顏の粉にしたのだらう。

ト　この時、奥よりおなみ、出て

なみ　オヤ〳〵、三勝さん。お早かつたの。善右衛門さんは、先刻にからお出でなされて

三勝　また例の悪酒かえ。

金八　おかみさん。あの酒には弱るね。

なみ　金八どん、御苦勞よ。

三勝　おかみさん、お頼み申しますぞえ。

なみ　サア、來なさんせ。

ト流行り唄になり、おなみ、三勝、奥へ入る。金八殘り、件の文を出し

金八　長九郎さんの云ふ通り、うまく仕掛けて、たうとう文を

ト思ひ入れ。流行り唄になり、向うより仁介、女袷の形、その上へ古き赤合羽を着て、頬冠りにて出て來り、跡よりぶち犬一疋、吠えながら付いて來り、舞臺へ來る。

仁介　シイ〳〵〳〵、この畜生め、人さへ見ると吠えやァがる。どう畜生め。

ト駕籠の脇にある息杖を取つて喰はす。犬は下座へ逃げて入る。仁介、捨ぜりふあつて内へ入る。

お頼み申しやす。わしは美濃屋の仁右衛門に用があつて、尋ねて來た者でござりやす。爰の内に

なら、ちよつと呼んでくんなさい。

ト金八、仁介が風體を、ヂロ〳〵見て

金八　大方、來てもござらうが、この人はなんだ、薄穢ない形をして、何だかおかしな風體な男だ。美濃屋の御亭主に用があらば、主の内へ行くがよい。さうさつしやい〳〵。

仁介　向うまで行く位なら、それをこんたに教はりはしねえ。爰の内にござると聞いたから來たのだ。態は惡いが、乞食ぢやアねえワ。間抜けな奴だわえ。

金八　ナニ、間抜けだ。コレ、態が惡いから、錢貰ひだと思つたから、云つたがどうした。願人め。

仁介　どうしたと。この猿松め。呼んでくれろ。

金八　先の辻番で聞きやアがれ。

仁介　どうしたと。

ト口論になり、直ぐにぶち合ひにならうとする。善右衛門、これを聞き、走り出て

善右　コレ〳〵、何を聲高に云ふのぢや。

仁介　ヤ、旦那かえ。

善右　われは、仁介か。

金八　アヽ、旦那、知つた人かえ。
善右　如何にも。あの者は……コレ、何しに参つた。
仁介　何しにとは、お前、いゝ事をしなさるの。その相談は道で聞きやした。それより先へ妹が事を、
　仁右衛門どのに逢つて、いよ〳〵身請けに極まらば、話しもあつて
善右　ヤ、妹と云ふか。そんなら三勝が事ではないか。
仁右　あの三勝は、わしが妹。モシ、旦那、お頼み申します。
善右　アヽ、兄といふは、てまへであつたか。
金八　三勝さんの兄貴にしては、イヤ、しみつたれた形だの。
仁介　しみつたれは、わしより、旦那、いゝ仕事をしなさるの。
善右　仕事とは。
仁介　ハテ、隠しなさるな。いつぞやわしが所から、値廉に賣つたあの香箱、この節お前は大金にする
　と聞いたで、御祝儀を貰ひに來やした。符牒分けを下さいませ。
善右　ハテ、そりや、値賣りをしようと存ずるから、取分け暗き盗み物、それ合點で、買うて置いたの
　ぢや。

仁介　成る程、悪い事はせぬものだ。づッと昔、赤根半兵衛といふ屋敷に、勤めたわしは中間。その時主の娘のお通と云ふ餓鬼が、年は五つ、小綺麗な生れゆゑ、誘拐かして駈落ち。年取つてから、藝者奉公に賣つた三勝。それで足りいで古主へ、夜盗に入つて盗んだ香箱、値廉にお前に賣り拂ひ、却つてお前に儲けられるとは、イヤ、とんだ話しだ。

善右　して、香箱を盗んだ先は。

仁介　里見の家中。寶は殿から預かつた、それ失つたは三勝が、實の親にて、赤根半兵衛。

善右　イヤア、里見の家から出た品か。それは大變、ちと心がかりだ。

金八　モシ〳〵、旦那、何があなた心がかりに

善右　サア、いま奥に來て居る、買はうと云ふ侍ひは、里見の家中船橋平左衛門。殿の寶の香箱を買ふと云つて引出して、跡で出所詮議と云はゞ

仁介　ハテ、打ッちやつて置きなさい。知れて來たなら、それからそれまで。賣れたら御祝儀。妹が祝儀も、しつかり貰はう。先づ前祝ひ、御酒がござらば、手酌で一杯。

ト有り合ふ銚子杯を引寄せ、茶碗に引受け、引ッかける。この時奥より、長九郎、仁右衛門、出て來る。暮れ六ツの鐘。

長九　船頭金八、頼んだ話しは。

金八　うまく書かせて、コリヤ。

ト長九郎へ渡す。

善右　エヽ、おぬしが話しの

仁右　あの錢無しの半七め。

長九　切らせる算段。

ト文の宛名を見せる。

善右　七さま參る、きんより。それが仕事の

長九　モシ、ちよつと仕事は

ト宛名のきんの字の所を、少しむしつて

筆を加へて三五大切。こいつは手輕く、きの字の點を、むしつたばかりで、さんよりと。

善右　七さま參る、さんよりとは

長九　七は卽ち半七の七と云ふ字に、三勝の頭字を、さんよりと、これを仕事に。

善右　成る程、奇體。

長九　これを持たせてやる奴も、オイ、市公、ちよつと。

小市　アイ、わしかえ。

ト奥より行燈を提げ、出て來る。

長九　コレ、いま話した、ナ。

ト囁く。

小市　承知しやした。これから樂屋へ一走り、あの野郎めに

ト文を受取る。

仁右　身請けの話しは兄貴、こんたも惡いやうには

仁介　四でよし、五でよし、頼んだよ。

ト倒れて寢る。

皆々　そんなら、旦那

善右　肴屋、早く。

小市　畏まりました。

ト流行り唄になり、小市、文を持つて入る。善右衞門、金八、仁右衞門、奥へ入る。仁介、管をまきな

がら、酔うて寝る。合ひ方、奥より、三勝、出て來て

三勝　親方さんが、今奥で、わたしが身請けの相談を、あの善右衛門さんと

ト思ひ入れあつて、倒れ居る仁介を見付け

ヤ、お前は、兄さんぢやござんせぬか。

仁介　なんだ、兄とは誰れが事だ。なぜおれが兄さんだ。コレサ、その兄とは誰れが兄だえ。

ト酔うたる體にて、管をまき、三勝を見て

イヤア、妹だな。兄さんか、モシ、恥かしうござんすと、お輕でやつてくれろ。おらア、平右衛門氣取りだ。有り難いよ〳〵。こいつは面白い〳〵。

ト他愛なき事を云ふ。三勝、差寄つて

三勝　又お前、こりや酔ひなさつたの。お前、マア、何が其やうに面白うて

仁介　面白い〳〵。こんな面白い事はねえ。コレ、妹、てめえ、マア、仕合せな者だ。あの金持ちの善右衛門さまの奥様になれば、この兄も浮み上がるワ。そこでおらア面白い。こいつはめでたいめでたい。

三勝　コレイナア、その善右衛門さまの身請けの噂が、わたしや病の種でござんすわいなア。

仁介　コレ、妹、病の種とは、そりや身請けの事が、わりやァ不承知か〳〵。

三勝　アイ、女郎奉公はせぬけれど、あすこや爰の雇ひ先・殿達ばかり引受けて、酒の相手に呼ぶ藝者。ひよつと馴染の客先に、どういふ義理のお方があつて

仁介　義理があらうが、あるまいが、そんな事に涙脆くて、今時分世渡りがなるものか。金さへある奴なら、そりやモウ、酒呑童子でも大事ねえ。おらア遣るの。兄の仁介さまは、御承知でお遣りなされるの。

三勝　そりやお前、胴慾ぢやわいな。兄妹と云つてもお前とわたし、たつた二人、妹が可愛うはござんせぬかいなア。

仁介　可愛くはねえ。

三勝　アノ、實の妹が

仁介　馬鹿を云へ、實の妹ぢやアねえ。われとおれとは、赤の他人だワ。てめえは里見の家中で、赤根半兵衛と云つた侍ひの娘だが、おれが方へ貰ひ受け、育てゝやつたワ。それだに依つて、恩があるぞ。金にしても大事ないワ。

トこれにて、三勝、惘りして

三勝　ヤ、そんなら、わたしや、そのお屋敷の娘でござんすか。さう云はんすりや、兼ね〴〵あの半七さんが、お國屋敷にお出での時、顔は知らねど幼少にて、云ひ號けの娘があつた、親御は大和里見の家中と云はしやんしたが、もしや、そんなら半七さんと。知らぬ事とて

仁介　半七とは、誰れが事だ。おらア、われが實の兄だが、そんな奴は、知らねえワ〳〵。

三勝　モシイナア、たつた今、お前の方から、赤の他人ぢやと云はしやんしたぞえ。

仁介　ナニさう云つた。コレ、そりやア一杯も喰つたから、云つたかは知らねえが、イヽヤ〳〵、他人ぢやアねえぞ。

ト他愛なき事を云ふ。三勝、心得ぬ思ひ入れあつて

三勝　何やらお前の詞の轉倒。どうやら譯の

仁介　譯も何もあるものか。おらアわれに、出世させたい兄の願ひだ。

三勝　その出世する、身請けはどうも

仁介　否だと云つても、兄の威光で、是非ともわれは

三勝　今市さんの

仁介　女房にやるワ。

三勝　氏はあつても
仁介　兄貴は宿無し。
三勝　お前の儘には
仁介　親亡き兄だ。
三勝　エ。
仁介　自由にするのよ。

ト唄になり、酔うたる思ひ入れにて、仁介、奥へ入る。この唄を借り、向うより、半七、前幕の形にて、鳴尾屋の番傘をさして出て來り、花道にて

半七　あの肴屋の小市が、三勝が方から寄越した文を渡したから、見れば何やら急な用。殊に三勝が手に違ひもないが、文をわざ〳〵寄越さずとも。……イヤ〳〵、この文言では、今夜は何やら取込みとの事、そのドサクサに忍べとあるこの文言。二階から忍んで來いとは、こりやアてつきり、三勝が否がる善右衛門が、下座敷へ來て居るのであらう。どこから二階へ忍んだら

ト方々見廻し

まだ宵ながら、この大雪に、往來の途絶え。そんなら見世の格子から、二階へ忍んで、逢うて話

しを

ト頰冠りをして、下駄、傘を用水の蔭へ隠し、格子より小屋根へ上がり、そろ〳〵と下を窺ふ。此うち三勝、これを知らず

三勝 常から心よからぬ兄さん、今うつかりと云はしやんしたは、わたしが素性。里見の家中と知れたる上は、もしや常に半七さんが、わしには國に云ひ號け、まだ幼年の娘があつたが、親御もお果てなされたで、家内も散り〳〵、どこにどうして居やるやらと、云はしやんしたが、思へばもしや兩親を、知らぬわたしが、ひよつとあなたと云ひ號けせし

トこの時、半七、下を窺ひ

半七 三勝さんか。

三勝 ヤ、半七さん。どうしてそこへ。

ト見上げる。この時、二階の窓より、金八、顏を出し

金八 盗人め。

ト半七を突き落す。これにて半七、廂より下へ撻と突き落される。三勝、あわてゝ駈け寄り、金八は窓を閉す。

三勝　ヤ、半七さん、氣を付けて下さんせ。半七さん〳〵。

　ト呼ぶ。半七、心付きたるこなしにて

半七　思はず上から、突き落されて

三勝　アイ、氣が付いてかいな。今も今とて、お前に逢うて聞かねばならぬ

　ト云はうとする。この時奥より、善右衞門、長九郎、小勝、おなみ、仁右衞門、仁介、物音に驚ろき、

　捨ぜりふにて出て來り

善右　なんぢや、盜人ぢや〳〵。

長九　しかも、屋根泥坊でござります。

仁介　慥か爰にうせる。此奴だ〳〵。

　ト半七へ立ちかゝる。

三勝　エヽ、どうして主が

　ト半七を隱す。

仁介　ハテ、妹、退いてゐろ〳〵。

仁右　三勝、われが知つた事ぢやァない。

小勝　危ないわいな、三勝さん。
なみ　此方へ退いて、居なさんせ〳〵。
三勝　イエ〳〵。其やうなお方ぢやござんせぬわいな。
トいろ〳〵と庇ふ。
仁介　コレ、われが知つた事ぢやアない。その野郎は、屋根泥坊だワ。
善右　マア〳〵、面を見てやれ〳〵。
仁介　心得ました。盗人め、面を見せろ。
ト手拭を取る。半七、顔を外ける。
モシ〳〵、何だか好い男だね。
長九　ドレ〳〵、見てやらう。ヤ、此奴は仲働らきの、半七だ〳〵。
なみ　エヽ、ナニ半七さんが
小勝　どうして、あそこへ。
善右　屋根泥坊にうたせのは、梅幸ぢやと身共を騙した、半七と云ふ野郎め
長九　左やうサ。

三勝　アヽコレ、どうして、半七さんが、屋根から。主ぢやござんせぬ〳〵。

長九　イヽエ〳〵、さうは云はせない。わしが二階から見て置いたが、轉げ落ちたは、なんでもこの男だ。氣を失つたが、こなさんが、半七さん〳〵と、落ちねえものなら、なぜ呼ばつた。

三勝　サ、それぢやというて、主ぢやござんせぬ〳〵。

善右　イヤ〳〵〳〵、その野郎であらう。論より證據は、何ぞ盗んでうせるであらう。懐を探せ〳〵。

仁介　さうしませう。鼻紙袋か、櫛笄の、盗んだならば、懐に

ト半七を引付け、懐を探し、件の文を取り出し

待ちなさい〳〵。何も怪しい物もないが、コレ〳〵、書いた物がある。

善右　讀んで見ろ〳〵。

半七　アヽコレ、それは

ト縋るを突き飛ばし

仁介　これを讀んで、惡いか〳〵。

半七　サ、それを讀んでは

トつかへる。

三勝　ハテ、何も書いたものぢやというて、お前の身分にかゝらぬ事なら、讀ませなさんせ。何も疑ひ晴らしでござんす。いらぬ左平次、兄さん、讀みなさんせ〳〵。

ト文を心得ず、讀めと云ふ。半七は、三勝が文と思ふゆゑ、讀ませぬ心にて

半七　アヽコレ、それを爰で讀まれては、却つてお前の

仁介　ナニ〳〵〳〵。この文を讀んでは、惡いか〳〵。

善右　コレサ〳〵。早く讀め〳〵。

仁介　心得ました。なんだ。「文して申し上げまゐらせ、この程は、ようぞや度々お尋ね下され、山々御嬉しく存じまゐらせ、折惡しくお目もじも致し申さず、只々本意なう存じ居りまゐらせ、左樣に候へば、夕もじは客人多く、取込みの事御座候ふまゝ、幸ひと存じ候ふ間、何卒二階より忍び來ておくれ。内は混雜ゆゑ、氣の付く事もあるまじくと存じまゐらせ。御目もじの節、申し上げたき事山々御座候へども、何卒々々人知れず、お出で願ひ上げまゐらせ、めでたくかしこ。七さま參る、さんより。」

皆々　イヤア。

ト思ひ入れ。三勝、さては金八が頼みし文と思ふ心のこなし。半七は三勝が手跡ゆゑ、誠と思ふ思ひ入れ。

善右　それ〳〵、その手は三勝が手に、違ひない〳〵。コレ、三勝、われはマア、大それた。身共と云ふ雇ひのお客のあるのを幸ひ、あの二階から、半七めにようマア、忍べと書いてやつたな〳〵。

小勝　ア丶モシ、お腹立ちもござんせうが、半七さんとも三勝さんとも、その文に書いてはござんせぬぞえ。

長九　これサ、無駄を云ひなさんな。そりやア野暮だワ。屋根から出合ひのあの半七、後で人に見られてはと、七さま参るさんと刎ねたは、三勝のかつを書かねども、怪しい文、これが證據になるまいか。

三勝　さう云はしやんすりや、皆尤も。成る程、その文、わたしが書いたに違ひない。アノ、わたしが書いたが、半七さんを呼びに上げた文ぢやござんせぬ。

仁介　コレ〳〵、妹、われが書いたと云ひながら、半七が文でなく、誰れが文だ。

三勝　そりやア先刻に、わたしを迎ひの船頭衆、金八どのと云ふ人が、餘所のかみさんへ遣はす文ぢやと、わたしを頼み、先の宛名はお七さん、金八どのゝ金の字を、假名で書いたを種にして、こりやお前方の、拵らへ事でござんせう。半七さん、あの文お前へ届けた者は、誰れでござんす。

半七　文の來たのは、たつた今、肴屋の小市が使ひに。

三勝　それ見なさんせ。わたしや頼んだ覺えはない。船頭どのと肴屋さんに、聞きなさんすりや分る事。必らず主ぢやござんせぬ〱。

半七　ヤ、そりや。

仁右　殊に美濃屋の抱への三勝、悪足付けた半七、イヤサ半七、一年の給金も一兩二分か二兩が高。

長九　三兩足らずの身を以て、藝者に色とは氣が強い。その上われはこの間、おれが手にある香箱を、賣つてくれろと恐ろしい。大方買つたら三勝に、遣る氣であらうが、大金になるお道具が、二朱や三朱で買はるゝものか。

半七　エヽ、無駄を云ふなえ。

仁介　よし親方が得心で、お客が承知なされやうが、この兄様が不承知だワ。妹の身代六十兩、今取引の段になり、うぬ等がやうな値廉野郎があつちやア、第一妹が出世の邪魔。今日から切れてしまへ。

半七　何がどうした。

仁介　どうするものだ、當り前だワ。うぬ等がやうなケチな野郎の、慰み物にやア、おれがさせねえ。誰れに斷わつて、この妹を慰み物、程を知らねえ罰當りめ。

ト蹴倒す。
半七　コレ、兄貴とやら、貴樣は脛で
仁介　蹴たがどうした。踏んでもいゝワ。コレ、文で釣られた屋根泥坊、妹が文のもくが割れ、文が訴人の半七を、踏みのめしても大事ないワ。
ト又た踏みにじる。
仁右　さうだく。おれが抱への三勝へ、足を付けた半七め。なぜマア、身請けの邪魔をする。イケ業人め。エヽ二才の癖に。
ト横面を喰はす。半七、思ひ入れ。三勝あせるを、仁右衞門引付けてまへはおれが金箱だ。側へもやられぬ。
善右　おのれがやうな二才めが、惡智慧からゆゑ、身共が心に靡かぬ三勝。よくマア屋根から盜みにうせたな。
長九　重ねて藝者子供に足を付けねえやう、折檻に、旦那、其奴を
善右　斯うしてやらうか。
長九　わしも手傳ひ。

ト皆々寄つて、半七を喰はす。女形あせる。三勝、中へ入り、半七を圍うて

三勝　手出しもさんせぬ。半七さんを、大勢寄つて、いとしほげに

皆々　それでも、其奴は盗人だワ。

仁介　妹、わりやァ盗人と色がしたいか。

三勝　アイ、わたしや、さういふお方が好きでござんす。

仁介　エヽ、因果な奴サ。

三勝　たとへ盗みをしなさんすお方であらうが、惚れたが因果、さういふお方は猶更に、いとしう思ふが女子の情。否と思へば、どのやうな、有徳なお方も、しみ〴〵否に。モシ、殊にどうやら、お前とわたしや、話し合うたら云ひ號け。

半七　ヤ、そりや誰れが。

ト聞かうとする。三勝、思ひ入れあつて

三勝　それも爰では他聞の手前。ナ、それぢやに依つて、今市さん、あなたはどうも否でござんす。マア、さう思うて下さんせ。

善右　われが方から其やうな、愛想づかしを云ひ立てれば、身共も侍ひ、只今直ぐに身請けして、ふん

縛つても抱いて寢る。親方仁右衞門、身代渡さう。
仁右　ヘイ〳〵、ちつとも早く、身請けをなされて
仁介　お前の自由になされませ。
半七　身請けでこの子が自由にならば、わしも腹から仲働らき、衣裳葛籠を引擔ぎ、生れもしませぬ、
その以前、帶刀したと今更に、筋目を云ふがものもない。美濃屋の旦那、金づくならば、わしも
この子の身請けをしませう。どうぞわしに
仁右　ナニ、三勝が身請けをする。コレ、氣が違つたか。大枚六十兩。それともてまへ、その金を拵ら
へて出したなら、ハテ、どこへなりとも金次第。元方始め抱への女も、承知の上なら物は相談、
隨分金と轉ばうが、工面が出來るか。
半七　そこが金は湧き物だ。出來たら、その時否應は、親方さん、云はせませんよ。
仁右　隨分やらう。金さへ渡せば、おぬしにやるわえ。
半七　キツと詞を番へましたぞ。
長九　コレ〳〵、親方、いゝ加減にするがよい。なんで大枚六十兩、ナニ出來るものか。どうして〳〵。
仁介　コレ、旦那、こんな野郎をいつまでも、爰へ置くのが大きな氣障もの。叩き出してしまひなさい

な。

善右　そんなら寄つて、半七野郎を、表の雪で涼ませろ。

長九　心得ました。野郎め、うせろ。

ト引立てる。半七、二人を締め上げる。

長九　うぬ、手向ひか。

善右　ぶちのめせ。

皆々　合點だ。

ト寄つて、半七を喰はす。三勝、駈け寄るを、善右衞門、引付ける。その間に皆々打擲する。布子も破られるを、引ッ擔いで外へ投げ出さんとする。この時奥より、市助、走り出て、皆々を突きのけ、半七を圍つて、立ちかゝる仁介を締めあげる。

仁介　アイタヽヽ。これエヽ、盗人をぶちのめすを、なんでわれは留めるのだ。イヤサ、なぜ肩を持つのだよ。

市助　アイ、盗人と云はるゝゆゑ、不便と思うて肩を持ちます。

トこの聲を聞き、半七、こなし

半七　ヤ、お前はどうして

市助　ハテ、こなたは盗人。ナ、あなた方が盗人ぢやと仰しやるゆゑ、若い人ぢやが不便な事と、貰ひに出ました。マア、何事もわしが願うて、ナ

ト思ひ入れあつて

さう思つてござりませ。

仁介　コレ〳〵、見ればお前は折助だが、盗人を貰ひたいとは、ハテ、酔狂な。

ト市助を見て

ヤ、慥かにてまへは

ト市助も、よく〳〵見て

市助　さう云ふわれはこの間、芝居の前の行き違ひ、おれが包みを浚つた泥坊。此奴だ〳〵。うぬ、よくもあの時

ト立ちかゝる。仁介、苦しきこなしあつて

仁介　アヽ、コレ〳〵、折助々々。アイヤ、折助先生、滅多な事を。ナ、コレ、爰で云つては物がない。誠にあれは間違ひといふもの。ナ、ソレ、間違ひだに依つて、間違ひにして、マア、何事も間違

ひ〳〵。

ト苦しき思ひ入れ。市助、こなしあつて

市助　あの包みを浚つた盗人が、間違ひにしてくれろなら、此方もそこは、魚心あれば水心。今、盗人と貴様まで、ぶち打擲の若い人、それも大方間違ひと、わしに預けて下さるか。

善右　イヤ〳〵、ならぬ。その野郎めは、藝者を盗みにうせた盗人。泥坊ゆゑにその詮議

市助　あなたがなされば私しも、あの時取られた代物の、詮議を致して盗人を

仁介　アヽ、コレ〳〵、悪い呑み込み。誠にこりやア間違ひだ。この半七は間違ひだ。今更わしが口を出しては、ちつと此方に、ナ、モシ、それだに依つて、間違ひ〳〵。

ト善右衛門をなだめる。

善右　それで、てまへが承知なら、身共もそれなら、間違ひ〳〵。

長九　コレサ、それでは

仁介　ハテ、マア、何事もわし次第、間違ひ〳〵。

仁右　そんなら、おいらも、間違ひ〳〵。

市助　お前方まで間違ひと、半七どのとやらいふ人を、わしに預けて下さるお心なら、ハテ、わしも主

人持ち、お供先で醉狂な、武士の家來が町人の、殊に派手な藝者の色事、それをいらざる走り中間、わしら風情が預かるとは、出過ぎた奴とも思はうが、若いお人の御難儀を、見るに忍びず旦那さま、口出し致す私しに、お任せなされて下さりませ。

善右　さう云ふわれは、慥か今日參られた、船橋どのゝ小者だな。よいワ、それ程其方が願ふといひ、仁介が俄に間違ひぢや、イヤ、間違ひと、風の變つた間違ひに、譯もあらうが後の事。マア、あの者は、其方に預けう。

市助　有り難うござります。きつとお預かり申しました。

仁右　モシ〳〵旦那、して、三勝が身請けは、いよ〳〵

三勝　アヽ、コレ、親方さん。お客を捕へてわたしが惡口、さう云ふお方が、なんでわたしを。あのお話しは、今ので破談に。

善右　イヤ〳〵、なんとそもじがのたまふとも、身共に於て腹は立たぬ。それぢやに依つて身請けは止めぬ。

長九　旦那があれ程仰しやるなら、親方、その氣で必らず共に

仁右　手離す事ぢやござりませぬ。

仁介　そんなら妹を、いよ〳〵、あなたが

善右　氣遣ひ致すな。身請けする。

三勝　なんぼう身請けと云はんしても、外へというては。モシ

ト思ひ入れ。半七へあつて

殊にはお前にとつくりと、話さにやならぬ、委細はこれに

ト今書きかけの文を出さうとして、ちやつとこなし。半七、ちやつと見かぢる。市助、思ひ入れあつ

て

市助　ハテ、何か委細は存ぜぬが、まだ、モヤ〳〵のぬくもりも、冷めぬ其うち、滅多な事は、ナ、マ

ア、この男さへ垢が抜けたら、ナ、よいではないか。

ト目顔で知らせる。

仁介　此方にかぶれの來ぬ内に、モシ旦那、泥坊沙汰は一旦預けて、一杯やりたい、立ち切れやせぬ。

善右　承知だ〳〵。兄が居る前、三ッ鼎。

仁介　妹へは、とつくりと、わしが

善右　勸めてくりやれ。

仁介　呑み込みやした。

ト三勝が手を取つて、引立てにかゝる。

三勝　ア、モシ、見捨てゝどうも

ト半七へ思ひ入れ。

小勝　離れ憎いは女子の情愛。さりながら、半七さんも
なみ　惡い惡名受けたが災難。
小勝　なんであらうと、受けるお方に。
三勝　それぢやというて
仁介　エヽ、うせろと云ふに。

ト引立てる。唄になり、仁介、三勝が手を取り、善右衞門、仁右衞門、長九郎、おなみ、小勝、めい〳〵思ひ入れあつて、奥へ入る。市助、半七、殘つて合ひ方。兩人、思ひ入れあつて

半七　思ひもよらぬ兄者人、お恥かしうござります。
市助　コレ、半七、其方が恥かしいより、身共が今では、この態で、弟に逢ふのも面目ない。身共が主人は大和の小泉、その家中にて馬市彌太夫、その悴の同苗數馬、槍一筋も突かせたる、その侍ひ

も世に落ちて、渡り奉公二合半、これと申すも非運な身共。

半七　私しとてもその通り、養子に參つた後の親、赤根の家に預かりの、臺頭のあの香箱、盗み取られし越度にて、養父半兵衛さまは御切腹、赤根の家はお取上げ。寶詮議と知る邊を求め、人立ち多き芝居町。今この形になりましたも

市助　あの三勝に逢ひたう思ふ町奉公か。

半七　エ。

市助　存じて居るわい。コリヤ、ヤイ、赤根の家にまだ幼少な、お通といふ娘一人、其方ことは、半兵衛どのと某が内談の上、表向きの契約せしに、未だ五才のそのお通、かいくれに行くへ知れず、誘拐かされしか迷ひ子か、子を失ひし半兵衛どの、家を立てんと其方を、早速引取り養育の、程なく身共が親ども病死。僅かな越度も朋輩の、讒に依つてこの身は浪人。半兵衛どのは、寶を失ひ御切腹。その品尋ね、殿へ差上げ、家を立てねばならぬ其方。コレ、實の親より養父の大恩。わりや忘れたか。エヽ、見下げ果てた。

半七　そのお詞、存ぜぬにてもござりませぬ。何を申すも今この態、殊に只今仰せある、養子合せのお通とやら、今に行くへが

ト思ひ入れ。

いま三勝が詞の端。もしや、あれが、行くへの知れぬ。

市助　その三勝とは、そりや何者。

半七　アイヤ、それは

市助　存じて居るわえ。三勝とやらに心を奪はれ、寶詮議も等閑に、エヽ、おのれ、見下げ果てた

半七　アヽ、モシ、たとへ女に狂ひまするも、云はゞ寶の行くへが知りたさ。念願屆いて寶の香箱、その在所が知れました。

市助　ヤヽヽ、ナニ、その品の在所が知れたか。

半七　知れました。その出所は存ぜねど、道具屋に右の香箱、値段は即ち七十兩と、金さへござれば、只今にも、手に入りましたが、何を申すも今の身は、七十兩に

ト屈託の思ひ入れ。市助、こなしあつて

市助　ヤ、七十兩にその香箱が。そんなら今日御主人が、かけ屋方より取寄せし、身が預かりし金の、その數七十兩、求める品は聞かねども、割符を合はす、慥かに香箱、外手へ渡らば、弟が手柄も

半七　エ、お覺えがござりまするか。

市助　コレ、半七、いよ〳〵その金で香箱が、其方の手に入ると申すか。

ト思ひ入れ。市助、思案あつて

半七　金さへござれば、只今にても私し方へ。

市助　承知した。相違なき事ならば、その金、身が貸して遣はす。

半七　エ。アノ大枚の七十兩。

市助　氣遣ひ致すな。様子あつて、身共が卽ち持參致して。

ト内懷より、風呂敷包みに卷きし、件の南鐐七十兩を出し、思ひ入れあつて

サヽ、この金持つて、早う、寶を、求めて參れ〳〵。

ト差出す。半七、悄りして

半七　思ひもよらぬ、大枚のこの金、只今のお身分では、貯へあらう筈もなし。どうも合點が參りませぬ。

市助　尤もぢや〳〵。その疑ひも尤もぢやが、案じる事はない。この年月、少々のお給金、又は非番のその節は、小細工などでやう〳〵と、拵らへ貯めたこの金子、品さへ手に入る事ならば、サヽ、使うてくれ〳〵。

ト奥の方へ心遣ひの思ひ入れ。

ちつとも早う、サ、用に立てやれ〳〵。

ト急いて、持つて行けといふ思ひ入れ。

半七　左樣でもござりませうが、只今のお身分と申し、どうでもこの金お借り申し、跡であなたへ御難儀が。

市助　ハテ、氣遣ひは無用、少しも早う〳〵。

ト急き立てる。

半七　左樣ならばお心ゆかしに、お借り申すでござりませう。

ト件の金を引取る。この時奥にて

平左　市助々々。家來市助。居らぬか〳〵。

ト聲する。市助、思ひ入れあつて

市助　コリヤ〳〵、半七、まだ云ひ殘せし事あれば、暫らくこれに。

半七　でも、奥には先刻の

トあたりを見て

幸ひ門の駕籠の内。

市助　暫らくそれに。

ト思ひ入れ。半七、金を持ち、四つ手駕籠へ入り、窺ふ。合ひ方になり、奥より平左衞門、善右衞門、長九郎、付いて出て來り

平左　コリヤ〳〵、市助、これに居つたか。最前、其方に預けた七十兩の金子、只今それへ。

市助　ヘイ、すりや、先程お預けなされた、アノ七十兩を

ト當惑の體。

善右　身共も早く、あの金子、參らぬうちは三勝が、身請けの埒も

ト平左衞門、思ひ入れあつて

長九郎、早く金子を

長九　ハイ〳〵、サ、御家來衆。先程御主人が、お預けなされた七十兩を、早く旦那へ。

市助　ハイ〳〵、畏まりましたが、只今と申しましては

ト思ひ入れ。

平左　コリヤ〳〵、家來、主の身共が預けた金子、只今と申してはと、そちや殊の外當惑の面體。して

金子は、如何いたしたく。

ト市助、思ひ入れあつて

市助　申し上げるも、餘りたわけた申し譯、御主人樣、この市助めに、サ、繩をおかけなされませ。

ト手を廻す。皆々思ひ入れ。平左衞門、こなしあつて

平左　委細も申さず、繩かけいと、こりや、其方に、預け置いたる、大枚の七十兩。失うたと申すのか。

善右　ヤヽ、すりや、七十兩を

長九　失つたとか。イヤ、こいつ、よもや、誠とは思はれぬわえ。

ト平左衞門、思ひ入れあつて

平左　イカサマ、身が役目にて、內々詮議のあの香箱、承れば、當時は家も絕えたりし、赤根半兵衞、その養子たる半七が、香箱尋ねて歸參の願ひと、今は町家に住居の樣子。身共が手よりその品を差上げるものならば、赤根の家は一生埋れ木。殊には金子七十兩、その金取つて藝者の身代。兩方ともに半七が、身の爲よからぬ、その金は、こりや其方が、失ひさうなものぢやぞよ。

ト思ひ入れ。此うち駕籠の垂れを上げ、半七、窺ふ。

市助　失ひましたは、下郎が誤まり。それゆゑあなたの御難儀に、かゝりや繋がる弟が、サ、横道者の私しに、繩をおかけなさらずば、あなたの越度に相成りませう。

平左　かけ屋方より身共が借用。お上の御判の据らぬ金子、殊には僅か、百兩に足りぬあの金子、平左衞門が自身の借用。

市助　すりや、殿樣の用金ならぬ

平左　身が借用の七十兩サ。

トきつと思ひ入れ。この時、向うより、赤合羽の中間二人、箱提灯を持ち、走り出て來り

中間　お旦那、お迎ひ。

ト扣へる。

善右　その下郎めが、金をちよろまかしたるばつかりに、折角出來た身請けもそれきり。

長九　わしも、歩一の取れぬのも、この中間から起つた事。よい賣れ口を尋ねて來ませう。

善右　よもや、此まゝ船橋氏、それなり小者は

平左　金の行くへの知るゝまで、拙者が方にて放し囚人。

市助　すりや、私しを

平左　獄屋の住居させいでも、身を隠さゞる人相骨柄、さのみ苦労に存ぜぬ科人。

半七　然らば、あなたのお志し、兄が苦労も察しやり、片時も早く、その品求めて

平左　帰参いたさば後々の、昔語りにその節は、お出合ひ申さう。今は小者の中間市助。金子の済むまで、暫らく奴に

半七　重々厚き

ト駕籠より窺ふ。

善右　ヤ、門に誰れやら

ト立ちかゝるを

市助　アイヤ、厚き主人のお情を、サ、仇疎かにならぬやう、彼の一品を、必らず首尾よう手に入れて、養父の家名。イヤサ、この身にかゝる今の汚名も

ト平左衛門、振り返る。

四人、お供仕りませう。

ト唄になり、中間二人提灯を照らし、先にたち、平左衛門へ市助、引添ひ、駕籠の内へ心遣ひあつて、長九郎、駕籠に目を付け、皆々向うへ入る。善右衛門残る。半七、駕籠の内より窺ひ出て、花道中程

へ行き、跡を見返り

半七　兄者人の志し・武士の情にこの金の・行くへをそれと推量ありし、船橋どのゝ志し。エヽ、有り難うございまする。

トこなしあつて

ちつとも早う・長九郎に追ツ付いて、香箱を首尾よう買ひ取り。オヽ、それよ。

ト合ひ方、時の鐘にて、件の金を抱へ、一散に向うへ入る。善右衛門、うつかりと呆れし體にて思ひ入れ。奥より仁右衛門、仁介、出て

仁右　モシ／＼、旦那。身請けのお金は、

仁介　めでたう賣れたら、早く御祝儀。

善右　こりや、三勝が兄に親方。コレ、聞いてくれ。七十兩のあの金を、中間の市助が、失うたと云ひ出して、ざつと相談、おぢやんとなられた。

仁右　ヤヽヽヽ、そんなら、極まつた身請けの相談

仁介　イヽヤ、身請けが出來まする。金の工面のそれまでに、仁介が顔で身請けの證文。モシ、御所持の品は。

善右　この香箱か。

仁介　お出しなされませ。

　　ト件の香箱を取つて

　コレ、親方、あちこちするから面倒だ。この香箱は聞く通り、七十兩に賣れる代物、これ預かつて三勝を、旦那の方へお渡し申し、後でゆるりと金にする。手短か細工に、さうして下さい。

善右　成る程、それで物事わかるワ。

　　ト仁介、件の箱を仁右衞門に無理に渡す。迷惑さうに

仁右　金がいるゆゑ承知の身請け、代物ぢやア、ちつと此方に

　　トこなし、三勝、よき時分、出かゝり居て、ズツと寄つて香箱を取り

三勝　すりや、これがアノ話しに聞いた、臺頭とやらいふ、香箱でござんすかえ。

善右　なんと、結構な道具であらう。てまへ欲しいか。

三勝　アイ、藝者に過ぎた品ながら、この香箱を

善右　そもじにやらうか。

三勝　アイ、よい糸入れぢや。買うて下さんせ。

善右　イヤモウ、わが身の願ひ、遣らいでどうせう。

三勝　エヽ、嬉しうござんす。

ト思ひ入れ。仁介、手早く取つて

仁介　イヽエ、旦那、そりやお前、勘定が違ひませう。此まゝ妹に遣るが最後、よし糸入れにする事やら、どこのどいつに遣る事やら、それでも身請けはせずばなるまい。それぢやア當分の引當て、六十兩が、ナ、モシ、出來ますかえ。

善右　イカサマ、そこもあるわえ。

仁介　ハテ、さう思ふから、この品は、この兄さんが預かつたワ。

三勝　さういふお前が心立て、折角貰うたその品を、いらぬ口出しなさんして、取返すとはあんまりな。コレ、兄さん、それ程わたしが憎いかいな。

ト仁介、香箱を見る振りにて、ツッと袂へ入れ、側にある枕箱を取つて、上覆の箱へ入れ、持つて居る。

仁介　憎くはないが、此方の勘定、身請けがあればおれも仕合せ、モシ、旦那、こいつは斷うなさい。妹があなたへ轉んだ上、その心中を見たならば、また相談もござりやせう。サア、妹、これが欲

しくば、旦那に轉ぶか。

善右　成る程、欲しくば遣りもせう。その代りには、極まつてくれるか。

仁右　モシ、私しの御返事は。

仁介　ハテ、身請けも妹が、旦那へ心中見せたその上は、おれが勸めて、是非とも金に。コレ、三勝、兄が頼みだ。あなたの方へ行つてくりやれよ。

ト三勝、いろ〱こなしあつて

三勝　兄さんが共やうに頼みなさんす事ならば、どうなりとしやんせう。その代りには、今の香箱、いよいよわたしに

仁介　ハテ、おれが貰つて、てまへに遣るワ。

三勝　さういふ慥かな事ならば、此方にちつと義理のある、お方もあれど、そりやどうなりと。

善右　極まつてくれるか。エヽ、有り難い。併し、今まで嫌はれた、身共を俄に色にする、なんぞ證據が

ト思ひ入れ。三勝、こなしあつて、善右衞門が側へ寄り

三勝　これまでお前を袖にした、わたしを今から、モシ、必らず見捨てゝ下さんすなえ。

トぴつたり寄り添ふ。善右衞門、夢中になつて

善右　それは誠か、眞實か。

仁介　モシ、旦那、風が變つて、おめでたうござります。

善右　これと云ふのも貴公のお庇、仇に思はゞ佛罰受けん。今もお云やつたせりふの内に、見捨てゝくれるなと云やつたが、おれは見捨てぬ、必らず其方が

三勝　なんの見捨てゝよいものかいなァ。

善右　エヽ、解けるワ〳〵。

仁介　イヨ〳〵、旦那の色男さま〳〵。

善右　エヽ、コレ、煽てゝくれるな〳〵。

ト思ひ入れ。唄になり、向うより半七、件の金を持ち、歸り來り、花道にて

半七　追ツ駈けた道具屋の長九郎、かいくれに見失なつたが、それにしても三勝に逢うて、實の兄貴の志し、金の出來たと、ちよつと知らせて

ト門口へ來て窺ふ。合ひ方。

仁右　モシ〳〵、旦那。三勝が身請けの極まり。お屋敷へ參つたら、直ぐにあなたの奧樣でござりませ

うな。

善右　イヤモ、奥様とも〳〵。引取らぬ前方、只今からも、奥様ぢや〳〵。ナウ、仁介、さうではないか。

仁介　モシ〳〵、お前は惚れた三勝ゆゑ、そのお心でもござりませうが、何を云つても妹に、半七といふ虫があつては

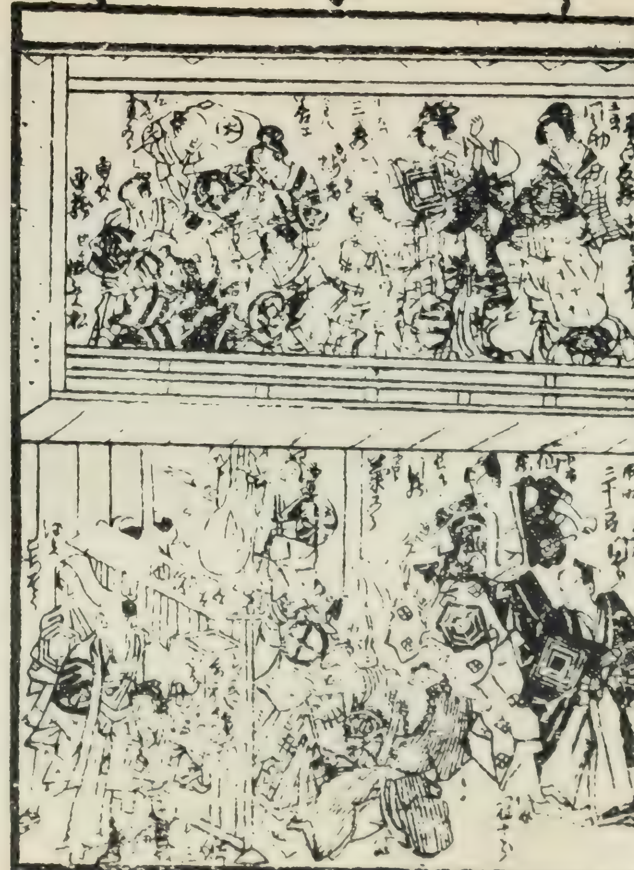
三勝　アヽ、コレ、兄さん、あなたのお心に從つて、お内へ參るこの三勝。よし前方に云ひ交し、懇ろしたお方があつても、今となつてはさつぱりと、わたしが方から長棹に、突き出したとて、なんの大事がござんせうぞいな。

ト此うち門口の半七、これを聞いて思ひ入れ。

善右　コレ、聞いたか。三勝はあの通り、たとへどのやうな色があらうとも。今日向身共が色になり、アノ長棹でグツと向うへ、突き出す心ぢや。これでは身共は、今から誠の色男ぢや。

仁右　その色男は今からあなた。併し、先程半七が、身請けの金を拵らへる、その時わしが三勝は、金と引替へその節に、否應は云はさぬ鎹ぜりふ、詞を番ふと云ひ居つたが、よもや工面も出來まいが。

中まく



大切



仁介　これサ、それを苦勞にせぬがよい。年季野郎に毛の生えた、あの半七めが大風に、からを云うても、どうして〳〵。二朱や四百の話しでなく、云はゞ大枚六十兩。夜鷹が身請けも、あいつが身分で出來るものかな。屋根泥坊の枕探しが、これを聞いたら、熱くならうに、知らぬが佛め、大笑ひだ。

善右　成る程、佛つくつた

皆々　ハヽヽヽ。

ト笑ふ。三勝、涙を紛らし、口惜しき思ひ入れ。最前より半七、門口にて一々聞き、件の金に手をかけ、また氣をかへて懷へ納め、いろ〳〵とあり、堪らへ兼ねて、この時ズッと入り、件の金を仁右衞門に打ち付け、きつと坐つて

半七　美濃屋の親方、仁右衞門さん。先刻の約束、身請けの金、サ、受取つて、三勝さんを、わしに下さい。

仁右　イヤア、そんなら半七、アノわれが。

善右　コレ〳〵、親方、三勝が身請けは身共が致す。滅多に外へは、ならぬぞ〳〵。

仁右　ハイ〳〵、身元も知れぬこの半七、どうしてうつかり、ナウ、兄貴。

卜仁介へ思ひ入れ。仁介もよせと云ふ仕方。この時木戸より、金八、小市、何心なく出て來り、内へ入らうとして、半七が居るを見付け、囁き合ひ、外より覗く。半七、思案のこなしありしが、ずんと立つて舞臺の内の出刃を取つて、キッと居直る。皆々思ひ入れ。表の二人も囁き合ひ、割り木など持つて、身構へして居る。半七、思ひ入れあつて

半七　コレ、仁右衛門どの、先刻こなたは、何と云つた。金さへ出すなら抱へた三勝、どなたへなりとあげますと、その時詞を番へて置き、貴樣もよもや忘れもしまい。約束通りの六十兩、耳を揃へて渡すから、三勝さんをわしに下さい。それとも否か、なりませぬか。ならぬと貴樣が云ひ出せば、主持ちながらわしも男、こなたにどんな腰押しが、千人あつても怖かァねえ。身狀が惡さに時ならぬ、上方三界まごついて、揉まれた上に揉まれたで、うんぜうしたを御贔屓の、何れも樣のお世話にて、氣立てが直らば使つてやらうと、有り難いそのお詞もお馴染みだけ、且はお江戸に生れた私し、どこのいづくへ參つたとて、お見捨てあつては、この上とも、身分に係りまするゆゑ、お詫び申うして、やう／＼と、奉公に住んだこの半七。生涯腹は立てまいと、願掛けしたが、もう／＼／＼、今の惡口聞いたので、今度が腹の立て納め、是非ともあの子を立て金して、貰はにやならぬ親方さん、一番わしを立てゝ下さい。

ト出刃を前へ置いて、キッと云ふ。これを見て、皆々、ワナ〱して

仁右　サア、さうは云つたが、よもや大枚

ト善右衞門、仁介へ目くばせして

モシ〱、旦那。コレ、貴様、どうせう〱。

ト思ひ入れ。

仁介　どうするものか、お前が抱へた奉公人、早く相談出來る所へ。

善右　アヽ、コレ〱、それでは身共が

仁介　ハテ、今更爰で爭つては、向うは逆上せて、どんな無暗な。ナア、それだに依つて、今の身請けは、マア、半七へさせるが、わしはよからうと思ふが。

善右　おぬしがさういふ心なら、身請けは、マア〱半七へか。

仁介　あの權幕では、ナ、ソレ。マア〱、身請けを半七へ

善右　不承知ながら、マア〱、それに

仁介　細工は流々、兄の仕上げがありませうよ。

半七　そんなら、親方仁右衞門さん。金受取つて、あの子の年季證文を下さい。

仁右　オイ、これ即ち三勝を抱へた證文。

ト紙入れより證文を出す。皆々見て

仁介　ア、コレ、その證文は

半七　渡されないのか。

仁介　アイヤ、マア〳〵、渡して

ト思ひ入れ。仁右衛門、證文を半七に渡し、金を改める。半七も證文を改め、懐中する。三勝こなしあつて

三勝　思ひがけない大枚の、六十兩が、どうしてお前に

半七　金の出所情ある、兄貴の手より受取つて、この身にかゝる寶の香箱、買ひ受けんとて預かつた、その金出してお前の身請け。

三勝　それではお前折角に、實の兄さん、渡した金を

半七　ハテ、それも大概香箱の、在所もそれと知れてある。荒立て探せば盗み物。

トこれを仁介、間違ひにて我が事と心得、懐中をあちこちして

仁介　雪はやんだか。

ト門口を開ける。覗いたる金八、小市、うろたへて木戸へ駈け込む。仁介、外へいろ／＼思ひ入れあつて、門に吊せし鮟鱇を見付け、眞の香箱を鮟鱇の中へ隱す。

アヽ、まだやまぬな。

ト門口を閉て、思ひ入れ。仁右衛門、金を數へて、餘計あるゆゑ

仁右 半七どの、六十兩と思ひの外、こりやこの金は七十兩、十兩餘計だ。

善右 ナニ、七十兩だ。アノ、しかと南鐐。アヽ、そんなら先刻、船橋どのゝ小者が

半七 十兩餘計は三勝さんの、外に借用貰ひがゝり、受けてこなさん、濟まして下さい。

仁右 そんなら十兩、預かりました。

仁介 この香箱も七十兩、今出た金も七十兩。どうか始終は、かぶれの來さうな、不氣味な金だ。親方さん、油斷をせぬがよい。この代物は、モシ旦那、大方今に買ひ手が出やう。お前の方へ

ト似せの香箱を渡す。善右衛門取つて

善右 買ひ手が來れば七十兩、この三勝に只遣つて、しまふ所を、危ない事の。

半七 アヽ、そんなら、それが道具屋の、長九郎が話したる

善右 臺頭と云ふこの香箱。買ひ手があらば七十兩、但し身共が云ふ事を、聞くと忽ち糸入れに、遣つ

善右　誰れにやらうな。

ト唄になり、香箱を見せびらかして奥へ入る。仁右衛門、金を肩へ掛け、向うへ入る。三人殘る。あと合ひ方。半七、思ひ入れあつて

半七　今までは三勝さん。六十兩で身請けすれば、たとへ武士でも、町人でも、親方がゝりの身分でも、女房に高下はない。サ、三勝、おれと一緒に

ト三勝が手を取る。

三勝　そんなら、今からお前の所へ

半七　サ、來さつし。

ト兩人出かゝる。

仁介　イヽヤ、ならない。この兄様に斷わりなしに、こりやアどこへ連れて行く。

半七　ハテ、わしが内へ。

仁介　ナニわしが内へ。コリヤ、てまへの内があるか。

半七　ヤ。

仁介　主人の内はあらうが、奉公人に内があるものか。宿無しに妹は遣られないぞ。

てしまふが、定めしこれが

三勝　欲しう思うて、ねだつた香箱、身請けが出來ぬばつかりに。

善右　外へ渡せば七十兩、欲しくばいとしい半七に、買うてもらやれ。

半七　その香箱も半七が、殊に依つたら、旦那、買ひませう、必らず外へ

善右　ヤ、これも買ふのか。イヤ、よい身代。イヤ、大金持ちぢや。

仁右　金受取らば、半七どの、この三勝を、貴樣に渡した。

半七　受取りました。

仁右　もう、私しは、お暇申して。

ト門口へ出る。

善右　コリヤ〳〵、親方、身請けのばれたその祝ひ、飮んで行かぬか。

仁右　ヘイ、其うちに。

善右　思へば今から半七と、あの三勝はしつぽりと、エヽ、腹が辰巳へ今夜は參つて、糸入れ欲しがる藝者を呼んで、轉ぶが最後、直ぐに香箱。

三勝　エ。

半七　ナニ宿無しだ。
仁介　よし宿小屋があらうがまゝ、六十兩が百兩でも、抱へた主人は金で取らうが、切つても切れぬ兄さんは、何をかすりに妹を遣るものだ。兄が否だ、おれがならない。指でもさすと、只は置かねえぞ。
三勝　コレイナア、兄さん。そりやお前、いとしほなげに主の身分で、大枚の金を出しての、わたしが身請けも
仁介　誰れが頼んだ。
三勝　エヽ。
仁介　この兄は頼まぬワ。其方の勝手でした身請け。元方調べず、うか〳〵と、兄も得心せぬ事に、女房呼はり措いてくれろ。
半七　そりやア、今更、こなたの横と云ふものだ。この子が嫌がる、あの身請け、どうぞ救つてやりたいと、涙のこぼるゝあの金で
仁介　コレ〳〵、それをおれが知るものか。屋敷へ遣れば妹は勿論、おれも仕合せ。てまへに遣つちやアしみつたれ。可愛い妹が爲にもならぬ。それだに依つて、遣らない、否だ。

三勝　そりやお前、主をあんまり恥かゝす。

ト寄るを引退け、上の方へ突き飛ばす。三勝、起きあがつて、思はず二階を見上げる。善右衛門、件の香箱を見せびらかす。三勝、これにて思ひ入れ。

半七　どうで、こなたの今急に、為にもならぬ、わしなれど、この身の願ひが叶うたなら

仁介　願ひと云ふは何の願ひだ。

半七　サ、そりやア。

仁介　聞けばてまへも、以前は侍ひ、鼠喰ひでも大小差した、身分だといふ　妹が噂。何か失くして大かぶり、それを尋ねて帰参とは、あんまり長い相談だ。それまでおれが生きるやら、なんでウカウカ待つものだ。三勝、われもとつくり思案をしろ」

ト三勝、こなしあり

三勝　成る程、流石はわたしが兄さん。妹と思うてその御意見。若い同士の不料簡、無理に身請けの金拵らへ、わたしが身抜きをしたとても、跡の詰まらぬお前の仕方。云はれて見ればとつくりと、こりやマア、思案せざなるまい。

トちよつと上を見る。善右衛門、件の品を見せる。

仁介　コレ、金は濟んでも、三勝はおれが妹だ。現在兄が

半七　でも、あんまりな

仁介　帶代取つても遣りはしねえよ。

ト唄になる。長九郎、向うより走り出て來り

長九　サア〳〵、買ひ手が出來たぞ〳〵。

ト内へ入り、半七を見て

ヤ、てめえは半七、何だ。おれに尋ねたけな。何ぞ用でか。

半七　その用は長九郎さん。この間話した香箱、あの品はわしが方へ、賣つて下さりまするか〳〵。

長九　コレ〳〵〳〵、てまへもいゝ事を云ふものだ。大金になる代物、どうしててめえ達に賣られるものだ。殊に今市さまへ、お渡し申して置いた香箱、俄に買ひ手を聞いて來た。見せると直ぐに、今夜のうちにも、金を受取る話しがあるから

半七　ヤ、外へ賣つては、どうもわしが

長九　おきやアがれ。どこへ賣らうと、此方の勝手だ。ドリヤ、旦那に逢うて

半七　サ、そこを、もそつと

半七　ナニ、とつくりと思案する。その思案とは、おれをどうする〳〵。

三勝　ハテ、お前は願ひが叶ふと、其まゝ本地に歸參なさるゝ御身分、以前の武士に立返り、その時こそはその以前、云ひ號けある娘御と、祝言なされてめでたう家を、ナ、モシ、その云ひ號けある娘御に、わたしがなつて見る時は、どうして色の三勝が、なんで女夫になられませう。苦勞苦患はわたしがして、御出世あれば幼少にて、養子合せの其お方、その時わたしが今市の、旦那へどうも、この顏が

ト善右衞門へ知らす心と、半七へ云ふ云ひ號けは、もしやわたしかと、知らす思ひ入れ。半七も思ひ入れあつて

半七　アヽ、そんなら三勝、いま更に、てめえは急に寢返りの、その一言が、眞實か。それぢやアてめえ、これまでに、云ひ交したる約束が

三勝　違うたとても、なんのマア、わたしが仕出した事でもなし。それ程苦にもならぬわいな。

ト半七、こなしあつて

半七　實にその氣か。エヽ、流石は藝者の

ト立ちかゝる。

長九 エヽ、知らねえワ。
ト突き倒して、二階へ行かうとする。
半七 アヽ、コレ、そこが相談。どうぞもそつと
ト長九郎を留める。振り切らうとして、爭ふ。流行り唄、向うより源兵衛、樂屋番にて、揃ひの紋付き、股引にて、大笠を冠りて、樂屋のぶらたをともし、スタ〳〵出て來り
源兵 久しいものだ。あの男は、忙がしい時分といふと、格子隱れだ。
ト門口へ來て
モシ、お前、鳴尾屋の半七どのは
ト見て
コレ〳〵、太夫さんが呼んでござるわな。サア〳〵、來さつしやい〳〵。
ト半七を無暗に引ッ張り、門口へ引出す。長九郎、同じく半七に引ッ張られて、門へ出る。
長九 コレ〳〵、どうする〳〵
源兵 サ、呼んでござるわな。
半七 今、行きますよ〳〵。コレ、三勝さん。イヤ三勝、マア、俄に今の挨拶は、これには何か譯があ

らう。聞きたいものだが、アヽコレ、樂屋が迎ひに。どういふ縁か三勝と、人も多いに鳴尾屋の、あの半七は色事と、樂屋中での評判記、それに今更玉返り。それ見ろ、高が奉公人、釣合ひ惡き提灯に、金も渡した上からは、あの一品も買ひ戻す。

三勝　それもお前の心柄、身請けさんした志し、その眞實は嬉しいけれど、肝心のお前の尋ねるその品が、手に入らぬゆゑ、お前の所へ行き憎いわいなア。

半七　ナニその品を半七が、手に入らぬゆゑ行かれぬとは、どうでもわりやア、今更おれと。

三勝　離るゝ心はござんせぬ。殊にどうやら身の上を、明かし合うたら、お前とわたし、切つても切れぬ、サ、仲なれど、こりやモウ、お前と。

ト善右衞門が方へ思ひ入れ。

半七　切れる心か。

三勝　さうせざ、お前が

半七　どうしたと。

長九　離しやアがれ。

ト無暗に長九郎を取つて投げ、内へ入らうとするを、手早く仁介、戸をしやんと閉てる。この途端に

三勝　嬉しうござんす。

ト香箱を取つて、其まゝ表へ駈け出す。この時金八、出かゝり窺ひ

金八　ドツコイ、さうは

ト三勝を内へ突き込む。善右衛門、長九郎。三勝を捕へる。金八、外にて犬を見付け

金八　アレ〳〵、犬が鮟鱇

仁介　ヤ。

ト驚ろき、駈け出す拍子に、金八を掻きのけ、有り合ふ息杖を振り上げる。犬は向うへ入るを、仁介、追ひ駈けて入る。件の香箱は雪の中に落ちてある。内には善右衛門、三勝へ抱き付かうとして、行燈を倒し、灯は消える。門口の金八、雪ころがしをころがし出す。花道際まで行く。その時、雪に付いて件の香箱、雪ころがしの雪と一つになる事。金八、これを知らず佃騒ぎになり、捨ぜりふにて、金八は件の寶のあるを知らず、雪をころがし〳〵向うへ入る。舞臺は、善右衛門、三勝を捕へ、寝かさうとして居る。長九郎、木綿蒲團、火繩箱を出して、捨ぜりふにて、二人を暗がりにて寝かさうとする思ひ入れ。奥よりおなみ、小勝

兩人　三勝さん。

軒へ吊せし鮟鱇落ちる。此はずみに件の香箱、赤地の錦に包みしまゝ、よき所へ落ちる。これを知らず

仁介　昨日うせろ。
半七　覺えて居ろよ。
源兵　サ、來さつしやい。

ト引ッ張る源兵衛を毆り倒し、下駄と傘を引提げ、裸足のまゝ、唄になり、早足に向うへ入る。源兵衛、小言云ひながら駈けて入る。長九郎、起き上がつて

長九　イヤ、怪しからぬ奴だ。

トよき時分、門口へ件のぶち犬出て、鮟鱇を咬へ、花道へブラ〳〵引き行く。善右衛門、下りて來り

善右　今の心底見るからは、願ひの通り香箱は
三勝　下さんすかえ。
善右　遣らいでどうせう。その代り、帯紐解いて
仁介　アヽ、モシ、それでは賣る口七十兩が
善右　アヽ、コレ、それも承知ぢや。

ト何心なく出るを、善右衛門、長九郎、三勝と間違へ、一人づゝ捕へて思ひ入れ。三勝は門口へ出ようとして、金八が居るゆゑ、ちやつと門の戸をさす。この模様よろしく、時の鐘にて

幕

幕の外を金八、何心なう雪ころがしを轉がして、向うへ入る。この雪に件の赤地の袱紗、しつかりと見える思ひ入れ。時のだらにてツナギ。引返し

本舞臺、三間の間、正面、床。違ひ棚、中床、綺麗に仕立て、左右、延仁寺垣、手水鉢、栗丸太の門口、庭のかゝり、すべて鳴尾屋出張りの體。爰に、巴丈、誂らへの形にて、爐に釜を掛け、茶を立てて居る見得。錢太、煙草盆の掃除して居る。馬朝、作者の拵らへ、正本を扣へ居る。勇助、大丸の手代にて、反物を取散らし、積り物の裁ち方を割つて居る。おとみ、お針の形にて、縫ひ物して居る。あたりに衣裳葛籠を取散らしある。しめやかなる唄にて幕明く。

ト五つの拍子木の音。

とみ　勇助さん。尺はたんと程いりますえ。

勇助　ハイ、カウト、三丈二尺八寸。それ程あれば、引返しともに、たつぷりと出來ます。

巴文 サヽ、爰へお出で〳〵。

勇助 ハイ、巾物は皆曲尺でござります。太夫樣、私しも一服、下さりませうか

とみ そりや曲尺でかえ。

ト勇吉、風呂の側へ寄る。巴丈、茶を立てる。流行り唄になり、向うより、喜代太郎、染五郎、下駄、傘にて、ぶらを灯し、話しながら出て來り

喜代 今夜はいゝが、お屋敷行きの晩は、雪は御免だの。

染五 さうサ。併し、降るうちはよいが、跡が難儀だ。

ト話しながら門口へ來り

兩人 太夫樣、お宅でござりますか。

ト入る。錢太見て

錢太 ハイ、太夫樣、喜代太郎さまと、染五郎さまと見えました。

巴丈 オヽ、このマア雪に、よう來なさつたの。サヽ、此方へお出で。

兩人 ハイ〳〵、お構ひなされますな。サテ、嚴しい雪でござりまする。

ト錢太、火鉢を出し、茶を出す。

喜代　これは馬朝さん。今晩は御苦勞でございます。

染五　お前もお屋敷へお出でか。モシ、わたしが一番目の役は、何でございます。

馬朝　一番の役は、なにサ、大行冠兵衛といふ、盗人の親方で、形は大褞袍、鬘は百日、素敵に大仰な役サ。

染五　そいつは、有り難いね。

喜代　ほんに太夫樣、上方からお前へ、狀が參りました。

ト渡す。

巴丈　エヽ、大和屋の太夫樣からかえ。杜若さまも續いて持病も起りませんかな。

染五　ハイ、この間は、大きに御丈夫におなりなされました。

巴丈　ほんに、お前も行きなさんしたの。

染五　左樣でございます。私しもこの間歸りました。高麗屋の親方もお前樣に、よろしうお言傳がござりました。

巴丈　アイ〱、大阪も今年は、江戸上りのお方々が評判ようて、此やうなお嬉しい事はございませぬ。

染五　左樣でございます。分けて音羽屋の親方へは、素敵に幟が立ちました。大阪始まつてぢやと、と

ひやうもない評判でござりました。

喜代　エヽ、少し上方を加へるな。

兩人　時に、今晩は、お稽古はござりますか。

巴丈　アイ、急なお屋敷行きぢやに依つて、今夜二番目の古手屋の方でも、稽古して置きたいと思ふが、このマア雪では、皆大通と見えるわいの。

兩人　左樣でござります。

巴丈　古手屋の方が行けば、尾張屋のが來なさればよいが、ちよつと呼びに遣はしませう。コレ、半公や〳〵。

ト呼ぶ。

とみ　イエ〳〵、半七どのは、まだ歸られませぬわいな。

巴丈　アヽ、まだ歸りませぬか。モウ〳〵、あの男は、間がな透きがな、ちよつとも部屋に居てくれぬには困りまする。それに、何を云つても、爰は出張りなゆゑ、物事が不自由勝ちで、いかう困つて居ります。

兩人　左樣でござりませう。どうしても、御本宅とは違ひまするて。

巴丈　ほんに、最前其方に頼んだ、檜扇のほつれも、綴ぢてはあるまいの。

半七　ハイ。

巴丈　明日は直ぐに入る物ぢや、ちよつと直して置かんせ、何ぢややら其方は、この間から何を云うても、上の空に聞いて、一向用に足りぬが、ちつと氣を付けてたもいの。どうしたものぢやぞいの。

喜代　モシ、太夫様え。その筈でござります。この間は半七は、素敵な色が出來ましたから、なんだか浮氣にばかりなつて居ります。

半七　エヽ、何を云ひなさる。無駄もいゝ加減になされませ。

ト腹立てる。

染五　モシ／＼、太夫さん、半公が色を御存じはあるまいが、誠にキツとした代物サ。淺草の仲町で杵屋三勝と云ふ素敵な藝者サ。

半七　よしなさいな。聞かうとも仰しやらぬに、いゝ加減に煽てなさい。そんな機嫌ぢやないよ。

染五　イヨ／＼、色男、憎くなる／＼。

喜代　どうして／＼、中[illegible]ちきも多いが、半公に續く色男はねえのサ。それだに依つて半公も、音羽屋[illegible]取りで[illegible]やす。ナウ、さうであらう。さうか／＼。

勇助　イヤ、私しはお邪魔であらう。中の間へ參りませうか。
巴丈　ハテ、大事ない。そこにお出でなさんせいな。
勇助　イエ、どうで店の迎ひを待ちますれば。どなたもこれにお出でなされませ。
ト流行り唄になり、勇助、反物を抱へ奥へ入る。この鳴り物にて向うより、半七、下駄、傘にて、急いたる思ひ入れにて、足早に出て來り、ズツと内へ入る。おとみ、見て
とみ　オヽ、半七どの、歸りなさんしたか。先刻にから太夫さんが、尋ねてお出でなさんしたに。
半七　それだつても、ちつと用があつたから。
とみ　ハイ、太夫樣、半七どのが歸りました。
巴丈　オヽ、戻つてか。コレ半七、わが身は、マア、どこへ何しに行きやつたぞいの。
半七　ハイ、ちつと用がござりまして
トうぢ〳〵する。
巴丈　それ、まだ衣裳も疊まずにあるぢやないか。汗ばんでも居やう程に、火を通して疊んで置かんせ。
半七　ハイ〳〵。
トあぶり火鉢を尋れ、衣裳の襦袢、下着の類を、おとみと二人して、籠へ掛け、干す事。

半七　エヽ、人ぢらしな。措きなさいな。

ト小言を云ふ。

喜代　アヽ、てまへ、氣の揉める事でも出來たか。さうか〳〵。

染五　イヽヤ、あゝ云ふ色を持つては氣も揉めよう。エヽ、畜生め。

兩人　あやかりたいな〳〵。

ト煽てる。半七、腹立て居る思ひ入れ。流行り唄になり、向うより、關松、關三のぶらを灯し、足早に出て來り、内へ入る。

關松　ハイ、御免なさいませ。モシ、太夫樣、私しどもの親方が左樣申しまするが、據ろないお客が只今見えましたゆゑ、どうぞよろしうお頼み申しまする、私しがお斷わりに參じました。

ト手を突いて云ふ。

巴丈　さうであらう。只今お噂を申して居りましたと、お前歸つたら、哥山さんに、よう云うて下さんせ。

馬助　イエモウ、この雪では、大通が多うござりませう。

喜代　大通ついでに私しどもも、大通と致しませうか。

巴丈　さうしなさんせ。シタガ、折角馬輔さんが來ておやへに依つて、わたしが拔き〳〵に、稽古しても

らつて置きませう。

兩人　左様なら太夫様、明日お目にかゝりませう。

巴丈　よう來なさんした。

兩人　色男、氣が揉めるか。ハヽヽ。

ト半七へ無駄を云ひかけ、流行り唄になり、右の兩人向うへ入る。

馬朝　左様なら今晩は、古手屋ばかりやりませうね。

巴丈　さうしておくれゝば、稽古に立つてから、早う片まります。哥山さんの場は、お前、讀んでやつておくれぬか。

馬朝　さう致しませう。どうで今晩も夜を更かしませう。

トこの時、勇助、奥より出かゝり居て

勇助　モシ〳〵、お針さん。お羽織の御誂文をお見せ。

とみ　アイ、その甲斐絹の袱紗に包んだのか。アヽ、わたしが見て上げませう。

ト合ひ方になり、錢太、付いて奥へ入る。半七、衣裳葛籠より、舞臺の檜扇を出し、糸の切れたるを結び付けるとて、表の方へ思ひ入れ。

役にて出かゝり、懐の金を大吉へ見せて、三十郎へ指さし、金が二いと八郎兵衛は腹切ると云ふ仕方して見せる。大吉、こなしあつて、……アイ、太夫様。

巴丈　コレ、八郎兵衛さん。アノ、金はわたしが方では出來ぬ程に、さう思うて下さんせ。

馬朝　三十郎、コレ、お妻、今さら約束した金が、出來ぬと云うては、コレ、濟まぬわいの。……アイ巴丈さま。

巴丈　濟まぬとは、何の事ぢやえ。お前の苦勞しなさんす五十兩を、なんでわたしが知らうぞいな。

馬朝　トきつと云ふ。三十郎、思ひ入れあつて、三十郎。なんの知らうぞいなとは、お妻、わが身、ほんまに云ふのか。

巴丈　アイ、ほんまでなうて、コレ、八郎兵衛さん。わたしやお前に、愛想が盡きたわいな。

馬朝　トずつけりと云ふこなし

トこの時、半七、これを聞き、思ひ入れ。

巴丈　アイ、今ではわたしや、急にお前が、モウ〳〵否になつて、ナ、その否になつた男、アノ、お前がわたしや、コレ、しみ〴〵否でござんす。ハテ、たかゞ愛想の盡きた男、この上わたしに構うて下さんすなえ。

巴丈　そんなら、ちよつと正本を扣へておくれ。
馬朝　アイ、關三の所は、わたしが讀みませう。
巴丈　さうしておくれ。

ト馬朝、正本を開き、思ひ入れあつて

馬朝　ハイ、太夫様、茶屋場の愛想盡かしをやりませう。

ト思ひ入れあつて

唄に成り、冠十郎入る。大吉殘る。この唄を借り向うより、三十郎、古手屋八郎兵衛にて出て來り、三十郎、ア丶、嬉しや〳〵、若旦那を、やう〳〵となだめて來たが、あの、五十兩の金が、お妻が方で出來ればよいが。トこの時大吉、こなしあつて、……ハイ、太夫様。

巴丈　直ぐに、わたしかえ。
馬朝　ハイ。

ト巴丈、書拔を見て

巴丈　八郎兵衛さん。その金の事は、どうなとせうと云うたけれど、今となつては
馬朝　三十郎。今となつてはどうぢや。ト思ひ入れ。この時、障子の内にて、冠十郎、香具屋彌兵衛の

馬朝　トこれにて三十郎、悄りして、三十郎。ヤ、わりや味な事が。コレ、氣が違ひはせぬか。

ト半七、これが聞き、思ひ入れあつて

半七　成る程、氣が違つた。コレ、わりやアあれ程云ひ交して居ながら、今更さういふ横を云ふは、こりやア、氣違ひだ〳〵。

ト思はず身につまされて、腹立てる。巴丈見て

巴丈　コレ、半七、何をマア、其やうに眞顔になつて

半七　エ。

馬朝　半公、口出しをしまいよ。稽古の邪魔になる。

トこれにて、半七、思ひ入れ。

イヤサ、氣が違ひはせぬか。……アイ、太夫さん。

巴丈　アイ、これが氣が違はいで、なんとしやんせう。

馬朝　ト大吉、泣かうとする。敵役二人、後へ出かゝり、仕方して見せる。大吉、これにて氣を替へ。

巴丈　八郎兵衛さん。今日向お前と物云ふ事も、否でござんす、否になつた程に、今からわたしが側へ必らず寄つて下さんすな。

半七　そりや、ほんの事か。このうぬ、嘘つき藝者め、よくマア今さら

ト思はず立ちかゝる。兩人、恟りして

巴丈　これはしたり、また交ぜッ返へしに出やるかいの。

馬朝　半公、彌次馬は御免だ。

ト半七思ひ入れ。

馬朝　三十郎。そりやなぜ／＼。ト急いて云ふ。

巴丈　アイ、外に大事な眞實明かす、その色客が出來たに依つて。

半七　さうであらう／＼。サ、その色客は、何と云ふ奴だ。

ト立ちかゝる。馬朝、膽を潰し

馬朝　これはしたり、恟りさせた。サ、邪魔になるわな。三十郎。すりや、眞實、外の男に

巴丈　アイ。

馬朝　三十郎。そんなら、わりや、今となつて八郎兵衞に恥かゝすのか。

巴丈　イヽエ、わたしは恥はかゝせねど、お前が好いてかゝしやんす、恥ぢやに依つて、そりやお前の心柄と云ふものぢや。

巴丈　わが身は云はゞ、此方の内へ、手形證文取り置いて、奉公人に抱へたと云ふでもなし。譯あつて此方の内にかゝり人、下男同然に使うてくれとの頼みゆゑ、今日までは置きましたが、俄に暇くれいとは、差當つてわたしも迷惑。今も今とて朋輩衆、派手な藝者に譯ある話し、それでなうては叶はぬ事。マア〳〵、外の事は退けて置いて、ならう事なら春までも

半七　私しも左様存じまするが、急にお暇を貰はねば、相成りませぬ事ござつて、斯様にお願ひ申しまする。御不自由でもございませうが、どうぞ今日、お暇をお貰ひ申したうございます。

巴丈　成る程、其やうに云やるのを、是非にとも云はれまい。そんなら今から勝手に付いて、其方に暇をやりませう。

半七　有り難うございまする。左様ならば私しは、お預け申した仁王三郎、親どもより讓り受けたるあの魂ひ、どうぞ半七に、お渡しなされて下さりませ。

巴丈　ヤ、すりや、其方がわしに預けた刀を

半七　ヘイ、受取つて参りたうございまする。

ト巴丈、思ひ入れあつて

巴丈　顔色とても常ならず、物あり氣なる半七に、いかに其方の魂ひでも、折が悪いで、どうも刃物は

ト半七、こなしあつて

半七　思つて見れば心柄、以前は武士の半七も、心柄こそ今の身は、この淺ましい

ト思はず涙をこぼす。巴丈と顔見合せ、悔りして顔を外ける。巴丈、目を付ける思ひ入れあつて

巴丈　それと云ふのも、こなさんが、きつい阿房ぢや。アイ、阿房な男はわたしや、今から否でござんす。八郎兵衛さん。アノマア、阿房な顔わいな。

馬朝　ト思ひ入れ。唄になり、大吉、ツィと奥へ入る。三十郎、殘る。合ひ方。……ドリヤ、ちよつとこの間に手水に。

ト正本を殘し、馬朝、ツカ〳〵と奥へ入る。半七、表の方を見詰め、門口へ出かゝる。

巴丈　コレ、用を仕掛けて、どこへ行くのぢや。

半七　ハイ、私しは

ト思ひ入れあつて、巴丈に向ひ

モシ、太夫樣、只今までお世話になされて、有り難うござりまするが、今晩私しに、お暇を下さりませ。

ト巴丈、思ひ入れあつて

半七　下さりませぬか。

巴丈　本地へ歸るといふではなし、矢ツ張り此方へ預けたとても

半七　イエ〳〵、左樣な心ではござりませぬ。お內に置くは慥かではござりまするが、ちとした譯で私しが、お貰ひ申して參らねばなりませぬ。爰の所を、お聞分け下さりまして

巴丈　そう云やるなら、渡しませう。

ト合ひ方になり、ずんと立つて床の下をあけ、郡內縞の袋に入りし刀を提げて來り

わが身の預けた仁王三郎、渡しましたぞ。

半七　ハイ、有り難うござりまする。この上ともにお見捨てなう。又そのうちに參じませう。隨分ともに御機嫌よう。おさらばでござります。

ト袋のまゝ、腰に差し、ツカ〳〵と出るを

巴丈　半七さま。

半七　エ。

ト振り返り、また行かうとする。

巴丈　イヤサ、召仕ひの半七、此まゝ行きやらば、わしが一言

ト立ち上がつて、半七を引留める。振り切り行くを、キッと留めて、上の方へ突きやり、門口なしやんとさして

巴丈 モシ、半七さま、あなたはわたしに、なぜお隠しなされます。

ト合ひ方。巴丈、兩手を突いて思ひ入れ。この時奥より、馬朝、出かゝつて

馬朝 モシ、太夫様、大丸が歸られまする。

巴丈 イヤ、もつと待つておくれ。

ト世話に云ふ。

馬朝 ハイ。

ト入る。巴丈、奥へ思ひ入れあつて

巴丈 あなたの魂ひ、預かりました其うちは、召仕ひも同然なお身の上。その魂ひを脇ばさみ、お出での上からは、矢張り以前の里見の家中、赤根半兵衛さまの若旦那、半七郎さま。お世話申すも私しが、上方に居るうちから、御恩になりしお客人、それを今まで家來も同然、半七どうせい、かうせいと、呼び捨てにするのみならず、樂屋の内の通ひ道、脱ぎ捨てました上草履、お前に取らせる度々、胸に咳きくる涙をも、ぢつと堪ゆる辛抱は、他人の見る前朋輩の、思ふところと存じ

ト渡す、半七。取つて

半七　忝なうござりまするが、それでは却つて

巴丈　ハテ、マア、召してお出でなされませ。

ト半七、この小袖を着替へる。巴丈、手傳うて派手なる帶を締め、よろしくあつて

半七　左様なら、私しは、ツイ一走り、行て參ります。

ト出かゝるを、巴丈、ちよつと袖を扣へ

巴丈　アヽ、モシ、お前、いよ〳〵、お屋敷の朋輩衆へ、誠に逢ひにござりまするかえ。

半七　アイ、今申した通り、その客人に逢うて直さま。

ト行きかゝるを留め、思ひ入れあつて

巴丈　そのお客でもござりませうが、どうやらこの程お前のお身に、派手な浮名の立つたといふ、人の噂も氣にかゝり、先の先まで聞きたくも、御覽の通りのわたしが業體、高位の眞似から世話事の、その狂言は覺えても、身儘に門を驅け走り、出來ぬばかりで、お前の先の

半七　なにサ、誠にそりやァ世間の惡口、お案じなされまするな。

巴丈　落ちつきました。お出でなされませ。ぢやが、モシ、其お刀は親御様からお讓り物、大事の所で

たが、云はばあなたは、御知行頂戴なされしお武家様、歌伎舞役者の私しが、草履穿き物直さす度、さぞ御無念でござりませう。お腹が立つでござりませう。半七さま、モシ、御免なされて、お赦しなされて下さりませ。

トこなし。半七も思ひ入れあつて

半七　モシ、さう云はれては、却つてわたしがお氣の毒でござりまする。有やうは先刻暮れ方、お國屋敷の古朋輩、芝居を見物にござつたやら、高島屋で逢うて、今の身分は隱せども、後に必らず來てくれい、話しもあると云はれたから、もし失ひし一品の、手がゝりかも存ぜぬゆゑ、逢うて來ようと存じても、以前の事を知つた朋輩、此まゝ參るも身の外聞。それゆゑ一腰きめ付けて、以前の侍ひ、赤根の半七。

巴丈　サ、それなれば猶の事、身の廻りが見苦しい。見ればどうやら鯱裂きか、綻びのある其お姿。何なりとわたしが着替への、と云うたところが女形の着替へ、模様もあるが紋柄も、行丈け身巾袖なりとも

ト屏風に掛けたる手前の小袖を取つて

サヽ、これなりと着て、お逢ひなされて

ござりまするぞ。お若いゆゑに後先の辨まへもなう、只今爰で稽古した、あの古手屋の事を、ひよつとお前の身の上に

ト思ひ入れあつて

其お心が出ぬやうに、此お刀を實の親御と思し召し、ならぬ辛抱なさるゝも、其お刀は親御のお形見ゝサ、これが形見とならぬやう、ひよつとわたしに回向なと

ト兩人キツと顏見合せ、思ひ入れ。この時、本釣り鐘鳴る。

半七　ありや、もう四ツの

ト思ひ入れ。

巴丈　モシ、お逢ひなされたなら、ちやつとお歸りなされませ。

半七　アイ、逢うたら直ぐに

巴丈　道寄りなされず

半七　きつと參ります。

巴丈　半七さま。

半七　太夫さま。

巴丈 ア、苦の世界とは

トほろりとする

半七 エ。

ト振り返る。木の頭。

巴丈 行てお出でなされませ。

トこれにてキザミよろしく、ひやうし引き付ける。四ツの拍子木、時の鐘にてツナギ、引返し。

幕

本舞臺、三間の間、切り戸付きの黒塀、見越しの松、二階を見せ、正面に雪の大達摩を拵らへ、金八長九郎、小市、八島屋と云ふぶら提灯を持ち、子供二三人、同じく手傳ひ、雪の佃騒ぎにて幕明く。

長九 なんと、いゝ恰好に出來たな。

子供 素敵に大きな達摩だ。

トぶらを達摩の頭へ付けて置く。

小市 もつと雪を付けろ／＼。

伊勢平氏梅英幣

『大南北全集第十六卷』

非賣品

昭和三年四月十五日印刷
昭和三年四月十八日發行

校訂編纂者　坪内逍遙
　　　　　　渥美清太郎

發行者　和田利彦
東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地

印刷者　堀江闕武
東京市小石川區諏訪町五十六番地

印刷所　常磐印刷所
東京市小石川區諏訪町五十六番地

發行所　春陽堂
東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地

ト また腹切らうとする立廻りにて、雪達摩へ轉けかゝる。此はずみに、差してあるぶら提灯へあたり、一度に提灯燃え上がる。この火氣につれて雪解けて、雪の中に思はず埋れし、赤地に包みし香箱出る。半七、見付け

ヤヽヽ、雪に何やら

ト 取上げ見て

これぞ尋ぬる一品が、雪に埋もれ提灯の、火氣に思はず

三勝 手に入りましたか。

半七 エヽ、忝ない。

小市 ソリヤ。

ト 指圖する。黑の捕り手六人、弓張り、十手を持ち、皆々取巻き

六人 動くな。

半七 先づ今日はこれぎり。

めでたく打出し。トロン〳〵〳〵トロ〳〵

半七　オヽ、半七だ。恥を掻いたる半七が、玉返りの三勝に、用があつて爰へ來た。サ、あの三勝はどこへ隱した。サ、先刻の香箱、それも出せ。

善右　どこと云つたら八島屋の、內へしつかり預けて來た。

仁介　香箱尋ねる半七も、ぶツ挫け。

三人　合點だ。うぬ。

ト雪搔き、割り木などにて、打つてかゝる。立廻りよろしくあつて

半七　尋ねる品も捲きあげられ、三勝までも玉返り。この半七が一生懸命。片ツ端からぶツた切るぞ。

仁介　ぶちのめせ。

皆々　合點だ。

トよろしく立廻りあつてキツとなり、これより流行り唄。〽待つ宵は三味線彈いてしんきぶし。と文句の入りし合ひ方。賑やかなる鳴り物にて、皆々大ダテよろしくあつて、皆々手を負ふ。その度每に正面の大達摩へ血汐かゝり、達摩、だん／＼赤くなる仕掛け。皆々切られて倒るゝ。この時、黑塀の切り戸を押しあけ、三勝、ツカ／＼と出て

三勝　半七さんか。

半七　三勝、怨みもあれど、所詮この世に……コレ、跡弔うてくれ。

ト腹切らうとする。三勝、キッと留め

三勝　コレ、お前、あのやうな道に違うた事云うたも、この香箱が欲しさの儘。殊に最前兄さんが、醉うた紛れにわたしが素性、赤根の家の娘のお通、五つの年より養育と、云はしやんしたが、もしやお前と

半七　云ひ號けせし、さすればお通。彼奴は其方を誘拐かせし、面は知らねど家來の仁介め。

三勝　そんなら、わたしや親々の

半七　許せし女夫ゝ

三勝　手に入る香箱、これが欲しさに

半七　すりや、香箱が、三勝其方の

ト蓋を開ける。中より枕箱出る。

ヤヽヽ、こりやコレ似せ物。

三勝　さうとは知らず、誠と心得

半七　人を殺めし半七は、とてもこの身は

ト また腹切らうとする立廻りにて、雪達摩へ轉けかゝる。此はずみに、差してあるぶら提灯へあたり、一度に提灯燃え上がる。この火氣につれて雪解けて、雪の中に思はず埋れし、赤地に包みし香箱出る。

半七、見付け

ヤヽヽ、雪に何やら

ト 取上げ見て

これぞ尋ぬる一品が、雪に埋もれ提灯の、火氣に思はず

三勝　手に入りましたか。

半七　エヽヽ、忝ない。

小市　ソリヤ。

ト 指圖する。黑の捕り手六人、弓張り、十手を持ち、皆々取卷き

六人　動くな。

半七　先づ今日はこれぎり。

めでたく打出し。　トロン〳〵〳〵〳〵トロ〳〵〳〵

昭和三年四月十五日印刷
昭和三年四月十八日發行

『大南北全集第十六巻』 非賣品

校訂 坪内逍遙
編纂者 渥美清太郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地
發行者 和田利彦

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷者 堀江歸武

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷所 常磐印刷所

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地
發行所 春陽堂

